
VARIANTAS

機動電介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VARIANTAS

【Nコード】

N8862N

【作者名】

機動電介

【あらすじ】

「本文より抜粋」

かつて戦争があった。

いや、争いは幾度となく繰り返されてきた。

西暦2080年、世界各地で発生した局地的戦闘は、やがて第四次世界大戦へと発展し、その戦火は地球圏全域から火星圏にまで拡大。

特に、主戦場となった地球圏では、人命と資源をすり潰す全面的な物量戦が展開され、それによって発生する大量のインフレーション

ンは国家の存続を不可能な物とし、崩壊した国家の残滓と企業が資源と利権を奪い合う経済戦争へと成り果てていった。

西暦2184年、誰が、何の為には分らない。突如、全戦線に謎の無人型機動兵器群が出現し、全戦線を瞬く間に制圧。

同年9月、約100年続いた大戦は終わりを見せ、それと共に機動兵器群も消滅。人類は、世界政府“統合体”の樹立を宣言。

西暦2186年3月25日、約100年間続いた第四次世界大戦を制圧し、世界に終戦を齎した謎の機動兵器群、通称“ヴァリアンタス”。その、姿を消した筈のヴァリアンタスが、地球・火星間に出現。地球に向け再び侵攻を開始。後に言う“セカンドムーブ”が発生する。

その事態に対し、統合体直下の特務機関サンヘドリンは、対ヴァリアンタス軍を組織し、それに対抗。最新鋭の機動兵器“デイカイオス・エイレーネ”を、戦線に投入。セカンドムーブを鎮圧する。

以来、堰を切ったように地球圏へヴァリアントが飛来。統合体政府は非常事態宣言を発令。対ヴァリアンタス戦争の開始を宣言する。

そして西暦2188年

ACT 1 初戦

制御なき混沌は無秩序であり、制御された秩序はいずれ混沌を生む。

真の秩序とは、“制御された混沌”なのである。

プロローグ

「西暦2186年3月24日0130時、火星赤道上臨時前線基地」
火星の紅い大地に、荒涼とした風が吹きすさぶ。

生命の息吹を感じない渴いた大地に赤い砂が舞い上がる中、その建造物はまるでバベルの塔の様に屹立していた。

風速100kmを超える暴風にもびくりともしない、巨大な建造物。強化コンクリート、そしてカーボンナノチューブワイヤーで補強されたセラミック装甲板で覆われた、巨大な“匣”。

その匣の最奥部、一辺50m四方の巨大な格納庫。
その格納庫の中で、彼は静かに息を吐いた。明かりは要所のみで薄暗く、空気は冷たい。

顔を上げ、“それ”を見上げる。

見上げるその先、そこに在ったのは巨大な人型兵器。黄金と純白の装甲。まるで貴婦人の肌のように滑らかな曲線と、鋭い戦闘用の剣のような鋭角さが折り重なった、人の形をした戦闘兵器。

その姿はまるで、太古の神像如くオーラを解き放っている。

男は、“神像”の足元に歩み寄り、そっと手で触れた。

これが自分の新しい力。
之をもつてして、新たな戦いに身を投ずれば、自分は生きる目的を見出だせるのだろうか。

男は胸に手を当て、自分の心臓の音を聞く。
とくり、とくりと、確実に刻む心音。それはかつて、何も持たずにあらゆる戦場を行き巡ってきた男にとって唯一の所有物。自分が生きている証明。

男もかつては、隊を引き連れ戦った兵士だった。戦争という巨大な不条理に身を任せながら、幾つもの困難を仲間と切り抜けた、屈強な戦士。

しかしそれは既に過去の事。

仲間を死なせた。自分は仲間を救えなかった。戦友は命を失い、自分は心を失った。

今自分が刻む心音は、戦友の心臓。散っていった者たちが刻むべき音に他ならない。

明日にはこれに乗って飛ばなければならない。それなのに……

「少佐」

突然、鈴の音のような透き通った声が、彼の心をノックした。

彼は振り返り、そこに立っていた少女を見つめる。

長い銀髪に、赤い瞳。白い肌。

少女は銀髪を細くて白い指でかきあげ、彼に問う。

「お休みにならないのですか？」

少女の問いに男は

「不安なんだ」

突然男の口から出た、あまりに意外な言葉。

男の名はグラム・ミラーズ。職業は軍人。階級は少佐。

大戦を生き抜いた猛者であり、彼の活躍はもはや伝説となり始めている。

単機で機甲中隊を撃破すること数知れず。彼の率いる隊に至っては、単独で敵師団を突破することさえあった。

いつしか付いた二つ名が“ヘルファイヤー・グラム”。

それ程の彼が、不安を吐露する。

「不安なんだ。私はまた仲間を死なせてしまうのではないかって」
救いたかった命。

救えなかった命。

「……ふふ」

突然、くすりと笑う彼女。予想外の反応に、思わず面食らう。

「エステル……？」

“エステル”と言う名のその少女は、グラムに言う。

「恐いのですか？」

グラムは答える。

「恐れを感じた事は無い。だがその分だけ、私は自分の存在を真に感じた事も無い。いつか私を知る者が誰ひとり居なくなったら、私は一体どうやって……」

突然、エステルはグラムの胸に手を置く。

「ならば護って下さい。貴方を知る人々を。貴方の手で。この鼓動の続く限り」

そう言って微笑むエステルを、グラムは見つめ続ける。

翌日25日1700時、コードネーム“D”と呼ばれる一機の大型兵器が火星の空に飛び立った。

その六分後の1706時、“D”が火星軌道上に到達。

1707時、第三艦隊が離脱を開始。同時、“D”が敵艦隊中央へ突入。

1715時、“D”が敵艦隊中央で重力波兵器を使用。同時刻、敵艦隊壊滅。

かつて戦争があった。

いや、争いは幾度となく繰り返されてきた。

西暦2080年、世界各地で発生した局地的戦闘は、やがて第四次世界大戦へと発展し、その戦火は地球圏全域から火星圏にまで拡大。

特に、主戦場となった地球圏では、人命と資源をすり潰す全面的な物量戦が展開され、それによって発生する大量のインフレーションは国家の存続を不可能な物とし、崩壊した国家の残滓と企業が資源と利権を奪い合う経済戦争へと成り果てていった。

西暦2184年、誰が、何の為にかは分らない。突如、全戦線に謎の無人人型機動兵器群が出現し、全戦線を瞬く間に制圧。

同年9月、約100年続いた大戦は終わりを見せ、それと共に機動兵器群も消滅。人類は、世界政府“統合体”の樹立を宣言。

西暦2186年3月25日、約100年間続いた第四次世界大戦を制圧し、世界に終戦を齎した謎の機動兵器群、通称“ヴァリアンタス”。その、姿を消した筈のヴァリアンタスが、地球・火星間に出現。地球に向け再び侵攻を開始。後に言う“セカンドムーブ”が発生する。

その事態に対し、統合体直下の特務機関サンヘドリンは、対ヴァリアンタス軍を組織し、それに対抗。最新鋭の機動兵器“デイカイオス・エイレーネ”を、戦線に投入。セカンドムーブを鎮圧する。

以来、堰を切ったように地球圏へヴァリアントが飛来。統合体政府は非常事態宣言を発令。対ヴァリアンタス戦争の開始を宣言する。

そして西暦2188年

Captur 1

「2188年10月14日、0430時、オーストラリア大陸サンヘドリン陸軍訓練基地」

身長12mの鋼鉄の巨人が、瓦礫の山に身を隠している。

周囲は絡みつくような闇。その中に輪郭だけを浮き立たせる破壊された廃墟は、まるで叢生した乱杭歯のように見える。

無線封止から5分。先行した部隊は今戻らず、こちらも孤立無援。ECM濃度が高く、レーダー・センサー類に敵を捕らえる事も出来ない。

息を吐き、物影に隠れる僚機にメインカメラを向ける。レーザー通信でコンタクト。

「こちらレイズ、どうするスタイナー？」

同じく物影に隠れている僚機のスタイナーから返信。

「どうもこうも敵位置が分からん」

機体の腕で“お手上げ”のジエスチャーを取るスタイナー。

レイズはため息をつき

「いつもの手で行くか……」

待つてました、と言わんばかりにスタイナーは、90?軽機関砲を遮蔽物の物影から覗かせる。

レイズは自機の装備するM90・90?アサルトライフルの残弾数を確認し、スタイナーに“準備完了”のサインを送信。ライフルのグリップをしっかりと保持し、カウントダウンを開始。機体の指を三本立て、フィンガーサイン。

「3カウント! 3、2、1……!」

次の瞬間、スタイナー機の90?軽機関砲が火球のようなマズルファイヤーを咲かせ、同時にレイズの乗ったHMAが遮蔽物の陰から跳躍。総重量60tの機体は、たった一回の背面スラスタ噴射で軽く数十メートルの高さまで舞い上がり、一陣の砂埃を地面に置

き去る。

“HMA”とは、重力制御機関を搭載した汎用人型機動兵器の総称だ。正式には“Humanoid Mobility Armor（人型機動装甲）”と言う名称だが、面倒だから略称の“HMA”^{ハマ}と彼らは呼ぶ。

彼等が乗るのは、ジェネシックスインダストリー社製人型機動装甲“HMA h2B・ドーフアン”。教練用の機体だが、基本性能は高い。

『撃ち返し来るぞ！』

レイズの言葉と同時に、相対する正面の小高い丘で火砲の火点が散り、曳光弾が光線を描いた。

『見えた！ 正面に火点5！』

レイズは空中で機体を翻し、丘の火点へ応射。自機を着地させスライナー機の移動を援護すべくスモーク弾を発射。発射されたスモーク弾は空中で破裂。可視光、電波、赤外線を遮断するハイブリットマテリアルの微細粒子の濃い煙幕が展開される。敵機が火砲を乱射する中、スラスターを噴射して地面スレスレをホバーリング。レイズは煙幕の闇の中スラスターの燐光を煌めかせ、丘に向かって真っ直ぐに突進してゆく。

丘まであと500m。

煙幕を抜ける。目標を光学で捕捉。ドーフアン4機。丘の稜線に身を隠している。シグネチャロック。

敵機二機が90°ライフルを発砲。サイドスラスターを噴射して射線を回避。弾丸が右肩を掠める。

まだまだ……、まだ撃たない。

『スライナー！』

レイズの声と同時に、煙幕の中からスライナー機が飛び出した。軽機関砲を発砲。二機にヒット。蛍光塗料を充填したペイント弾が敵機をピンク色に染めあげる。

『レット！』

スタイナーの軽機関砲弾が切れる。

『グリーン！』

軽機関砲からドラムマガジンを外しているスタイナー機を追い越し、レイズ機がアサルトライフルを発砲。一機にヒット。ライフル弾切れ。

素早く、残った一機に接近。ライフルの砲身で敵機の火器を弾き、ストックで腹部を打撃。脚を払って引き倒す。

その時だった。

『避ける、レイズ！』

スタイナーの声。同時に、軽い衝撃。

機体胸部に直撃判定。

撃たれた！ どこから！？

スタイナー機にもヒット。

火線から射角を推定。見つけた。丘から北へ6kmの廃墟の陰。

遠距離狙撃。丘の上に立った彼らは、スナイパーにとって格好の餌食だった。

訓練が終わり、ハンガー内に一列に並ばされたレイズ達ら第五小隊は、訓練教官にみっちり絞られていた。

第五小隊は四名。レイズ、スタイナー、お調子者のヤン、紅一点のミカ。

模擬戦で最後まで残ったのはレイズとスタイナーの二人だが、相手側の半数を倒したのはヤンとミカの二人だ。

戦力比10：4をひっくり返す大立ち回り。本来ならば二階級特進だが、教官は青筋を立てて激怒している。

教官いわく、どんなに良く戦っても、最後に死んでは何の意味もない。

そう、この訓練は、勝っても調子に乗るなと激怒され、負けてもしっかりしると激怒される訓練なのだ。

事実、最後の一機であるスナイパー役は、教官機であった。連隊責任として、第五小隊全員に腕立て400回を命じる教官。そのとき。

「あんなの無理だろ……」

思わず、スタイナーがつぶやく。

レイズがスタイナーの顔を二度見し、スタイナーもレイズと顔を見合わせて青ざめる。

スキンヘッドで筋骨隆々の教官が、声を聞きつけて、腕を後ろに組んだままゆっくりと二人に歩み寄る。

二名、腕立て300回追加。

レイズとスタイナーは、苦痛の表情を浮かべながら、「サー」と返事をし、両手を地面に突いた。

計700回の腕立てを終え、ずると脚を引きずりながらレイズとスタイナーは、談笑しながら食堂に向かっていった。

訓練の間に挟まれる、短い食事休憩は訓練兵達の少ない楽しみだ。来る日も来る日も訓練に勤しむ彼らは、その日の献立に一喜一憂。多分に洩れず、レイズとスタイナーも今日の朝食ラインナップの話題で持ち切りだったが、レイズの心は次第にスタイナーへと向かっていった。

「そういうば、式を挙げるのいつだっけ？ お前」

スタイナーに、レイズがそう問う。

「来月の半ば」

彼の薬指にはシルバーのリング。

レイズはそれを見て、羨ましそうにぼやいた。

「スタイナー、お前はいいよなあ……、婚約者がいて。羨ましいよ、まったく」

にやけた表情のスタイナー。

「あいつの料理は最高に美味いんだ。今度お前も家に招待するよ」

「はいはい、わかったわかった！ 不味かったら殴るからな」
軽いジャブでスタイナーにシャドウパンチをするレイズ。

そのとき、食堂へ向かう二人の正面から、女性の一団が歩いてきた。一団は二人と目を合わせることなくすれ違い、通り過ぎる。

だが、レイズは一人の少女と目が合い、離せなくなった。

長い黒髪に、大きな瞳。小柄だが均等の取れたプロポーションは、控え目に膨らんだ胸のラインとタイトなスーツに浮き出るくびれの絶妙さが為せる技。

彼女も、レイズのことを見つめながらゆっくりと通り過ぎていく。

「お、イクサミコ”じゃん。最近増えてるよな。やっぱり“奴ら”のせい……？」

スタイナーはそう言いながら、レイズの肩に腕を乗せる。

「僕達もそろそろ卒業だしな。訓練が終わったら機体と一緒に支給されるんだっけ？」

「ああ。でも貰っても、なんかうれしくはないな。そのときは実戦に出る時なんだから」

そう言うスタイナーは、不安そうな表情を、作った笑顔で隠していた。

「同10月14日地球時間0500時・火星方面軍第三機動艦隊・
火星暗礁宙域」

空間に浮かぶその艦体は、漆黒の背景に貼り付けたようにぽっかりと浮き出していた。

戦艦、駆逐艦、巡洋艦、空母。その全てが全長数百メートルを超える、巨大な艦群。火星方面軍第三機動艦隊は、三個空母戦闘団を保有、火星軌道に待機し、火星圏から向こうを常に監視している艦

隊だ。

その中に、一際巨大な艦が一隻。全長9.5kmの超巨大艦。第三軌道艦隊旗艦・アレキサンダー級三番艦・ストロバルトは退役寸前の老朽艦だか、数多の戦闘を闘いぬいた誇り高い艦。その艦は、艦隊の中央に位置しながら、艦隊全ての指揮を一手に請け負う司令官であり、その内部には、グレートウォール級航空母艦二隻を収容するドックを持つ、正に動く艦隊司令部だ。

その動く司令部の第一艦橋のから、男は宇宙を、どこか憂鬱な表情で見ている。

「今日は晴れているな」

ストロバルト艦長クロサキ司令長官の小さな呟きに、副長のコイズミ大佐が、キレよく応える。

「ガスとデブリが珍しく切れています。英霊達の援護に感謝……ですな」

唸るような肯定の返事と共に深く頷くクロサキ。

火星暗礁宙域 それはセカンドムーブが宇宙に残した爪痕だ。

セカンドムーブ戦に参加した地球艦隊艦船は345隻。その消耗率は40%以上。裕に130隻もの艦船が失われ、その残骸は未だに火星軌道を漂っている。

今回、その暗礁宙域内に未確認の物体が、火星オリュンポス天文台によって発見されたのだ。

「艦長」

オペレーターが二人の会話に割り込む。

「目標を光学で確認。距離10万」

軍帽を正し、コイズミがオペレーターに問う。

「敵勢力は？」

「キャリアー1、カノーネ2、アサルター2、クルーザー3。一個空母戦闘団です」

戦略3Dマップに、8つのカーソルが表示され、敵を表す赤い円で囲まれて固定される。

ウィンドウが分割し、光学映像を表示。投影スクリーンに出された高解像度映像には、幾つもの巨大な緑色の物体が映っていた。その姿はまるで海獣。かつて地球の海を支配した鯨や、太古の奇怪な生物を彷彿とさせる有機的デザイン。巨大な物体の正体はヴァリアント。悪魔の兵器。ヴァリアントは、その出自を全くの謎とする機動兵器体系であり、その形式は多岐に及ぶ。それはまるで、生物の多様性に例えられ、個々の役割を持った複数の種によって一個の兵器体系、“ヴァリアントス”を形成する。スクリーンに映っているのは、その中でも“艦体種”と呼称されている超大型種だ。

あの時はよくもやつてくれたな……。

クロサキの脳裏に蘇る、悪夢。圧倒的敗北。百数十の艦を屠り、迫るヴァリアントの艦隊を退けたのは、たった一機の機動兵器。軍人としての、敵に対する敗北。そして何より、“宇宙の男”としてのプライドを傷つけられた闘い。

だが、クロサキ艦長は冷静だ。彼の心に去来する一つの決意。一隻でも、あの時の借りは必ず返す。たとえそれが負け戦でも。

「全艦、第1級戦闘配置、長距離対艦戦闘用意。レーザー砲塔撃鉄起こせ。同時、全実体弾砲装填。弾種、3号弾。合図と共に全艦右舷水平噴射、敵射線に対し1ミル」

過去の敗北を噛み締めながら、クロサキは打って出る。敵艦がもし艦首5000m陽電子主砲を撃つとすれば いや必ず撃つだろうが 宇宙空間での有効射程は5万kmだから、その着弾まで約30秒。艦隊は敵射線に対して毎秒0.2ミルの水平回避が可能だ。だから、5秒で1ミル。敵射線より最大500km離れる事になる。

だが、この宇宙で500kmという距離は目と鼻の先に等しい。敵が第二弾と三弾を撃ってくれば、避けられる保証は無い。

しかし、クロサキには策がある。奴らは必ず……
突然、観測のオペレーターが叫んだ。

「敵船団、軌道より離脱。突貫してきます」

火星軌道を外れた敵船団が加速を開始。異常なほどの超高速移動による青方偏移で観測映像では青みを帯びた色に見えるヴァリアントを一瞥し、クロサキのは不敵な笑みを浮かべる。

やはり動いたか……！

彼はこの瞬間を待っていた。敵船団の目的は地球進攻。艦隊の撃破ではない。だから船団は艦隊を無視して、何が何でも地球に向かおうとするだろう。つまりチャンスは一瞬。船団と邂逅するその時出来る事はある。まずは線レーザーの全力射。このレーザーの出力は、たとえ艦体種でも無視出来ないダメージを与える。このままレーザーを浴びせ続ければ、敵は防御にエネルギーを取られ、主砲のチャージを少しでも遅く出来るし、敵艦体種の装甲外殻内を蒸し焼く事も出来る。それからレルカノンと偏向荷電粒子砲の直接照準射撃。その後は、お互い横つ腹を曝しながら至近距離で艦砲を撃ち合う事になるが、その時は、砲艦の極限重原子核ビーム砲と、艦隊が保有する50発の指向性熱核弾頭全てを撃ち込んでやる。たとえヴァリアントでも、9000G電子ボルトの重原子核ビーム砲と500Mt級指向性熱核弾頭50発の破壊力に耐える事は不可能だ。

観測艦のデータによれば、船団の速度は秒速20km。勝負の間まで、あと4850秒。

その瞬間、船団の中で幾つもの閃光が煌めいた。

それはまるで、天に輝く無数の星々が一齐に瞬いているような綺麗な光景。だが60秒後には、その閃光は雨のようなビームの矢……、破壊の嵐となって艦隊に降り注いだ。

艦隊全艦はグラビティシールドを展開。シールド表面で潰れたビームは、その巨大なエネルギーを解放して光の環を形作る。

刹那、艦隊艦艇から照射された数百条もの6000GWクラス逆

コンプトン 線レーザーは、真空中で殆ど減衰することなく船団に着弾。

艦体種の装甲外殻表面でプラズマの閃光が散り、赤外線と電磁波が放出された正にその時

「敵船団より高エネルギー反応！」

船団の中で、陽電子の煌めきが灯った。距離5万。ついに、その時が来た。

「全艦レーザーを全力射！ レーザー砲が蒸発しても構わん！ 全開でぶん回せ！」

砲雷管制のオペレーターが、レーザー砲塔への入力電力を最大値にきりかえると、レーザー砲は唸りを上げながら 線レーザーを搾り出した。

空気の無い宇宙では、その様子を目で見る事は出来ないが、レーザー砲身は自らが発する莫大な熱量を周囲に放っている。だが、レーザーは確実に敵船団、強いては敵各艦を捉えている。

その間に、艦隊全艦は、その巨体を横滑りさせて水平回避運動。砲艦は右へ90度転針し、艦首原子核ビーム砲を敵船団の通過コースへ向ける。

その時、規定以上の大電力を投入されたレーザー砲がついに蒸発。同時、敵船団から発せられた数本の巨大なビームが、五万kmの真空をほとばしった。

艦隊はグラビティシールドを全力展開。陽電子ビーム着弾。艦隊後方、オールド級ミサイル巡洋艦・アタエンシク被弾。ビームはシールドを破り、艦首を抉る。

だが、クロサキは動じない。

勝負は一瞬！ お互いが横っ腹を曝しあうその瞬間！

今！

擦過の瞬間、敵船団は1立方メートル当たり1発もの割合でビームが存在する程の密度で砲撃してきた。

対する艦隊も黙っていない。対空レールカノンを発砲。各艦に搭

載された127mm60口径長レールカノンから発射されるペネトレーターは200MJのエネルギーで敵に着弾。敵艦装甲外殻にめり込んだペネトレーターは、その運動エネルギーにより高温の金属粒子衝撃波となって爆散。同時に発射された偏向荷電粒子砲の重イオンビームは、敵砲艦を捉え、装甲の一部を高エネルギープラズマに変換してえぐり取る。

攻撃はまだ止まない。

荷電粒子砲の次に来たのは、9000G電子ボルトの出力を誇る極限重原子核ビームだ。ビームは動きの鈍った砲艦の装甲と内部を一瞬で原子レベルまで分解し、二隻の砲艦を貫通。

同時、艦隊の発射した大型砲弾50発が、船団内で炸裂した。

だが、その火球は意外な程小さい。その代わりに火球は、細長い光の杭となって、砲弾の進行方向に延びている。

砲弾に装填された弾頭は、中性子爆弾をイグナイターとする200Mt級熱核兵器であり、指向性熱核弾頭とはつまり、熱核兵器版成形炸薬弾なのだ。

その核の洗礼を受け、砲艦二隻はその右舷横つ腹を大きく損失。

構成質量の大半を失った敵砲艦は自身を構成するナノマシンの制御を失い死滅。黒曜石のように結晶化し、自らの運動モーメントにより粉々に砕け散った。

だが、生き残った船団は、その間に艦隊を大きく引き離していく。モニターに映る船団。それは、先程とは逆の赤方偏移によって赤みを帯びていた。

「追撃しますか？」

コイズミの問いにクロサキは溜息混じりで答える。

「いや、今の我々に追撃は不可能だ。後は地球の彼等に任せよう…」

クロサキはそう言って、艦隊の戦闘態勢を解除した。

「同日10月14日0530時、オーストラリア大陸サンヘドリン本部」

早朝の高速道路。追い越し車線に進路を変え、前の車を追い抜きながら小型の通信イヤホンを耳に付け、スイッチを叩く。通信開始
「状況を」

「コードレット、全軍に対してデフコン1」

「何があつた」

「1時間前、オリュンポス天文台のPan STARRSが艦影を捕らえました。一個空母戦闘団です。敵空母戦闘団は火星方面軍第三機動艦隊を抜け、既に火星スイングバイ軌道への進入を開始」

「情報軍団からの回答は？」

「地球到達まで約120時間。地上への予想到着軌道は南アメリカ大陸北部、南米防空司令部」

報告を聞き終え、グラムはアクセルペダルを更に踏み込んだ。

車は主幹道路を離れ、地下へのトンネルへ入ってゆく。

行き先はエアースロツク直下地下8000mジオフロント。天然の岩盤を巨大な装甲としたこの施設こそ、サンヘドリン対ヴァリアンタス軍本部だ。

「同日、本部訓練所食堂」

「しかし、食堂のカレーはまずいな」

スタイナーのぼやきに、レイズが応えた。

「なら他のにすればいいじゃないか」

「これが一番マシなの!」

二人の声に、食堂コックが咆える。

「聞こえてんぞ!」

肩をすぼめる二人。

「彼女の料理に比べたらこんなの豚の餌だぜ、全く……」

「そんなにうまいのか?」

「なんだって、シティで店出してるからな」

「あー、納得」

そのとき。

「お、やつと戻ってきたか!」

空のトレーを持ったヤンが、レイズとスタイナーを冷やかす。その傍には同じくミカ。

「やめなよ、ヤン。先に死んだのは私たちじゃない」

「うぐ、確かに」

ミカが、ヤンを制止。

「レイズとスタイナーはホントにいいバディだね。私たちも見習わなきゃ。ねえ、ヤン」

「へいへい、努力しますよ」

「じゃあ、先に行ってるからね。ちゃんと噛んで食べなよ?」

そう言って、レイズに微笑むミカ。

レイズは、照れながら、うまくもないカレーをかき込み、「わかってるよ」か「余計なお世話」とか、そんな意味の言葉を二三言いい、立ち上がるうとしたその時、食堂に一人の男があわてた様子で入ってきた。

「おいみんな! 飯食ってる場合じゃないぞ!」

男は切れた息を整えて、大声で言う。

「ヴァリアントが来る! 俺達にも出撃命令が出たんだよ!」

「サンヘドリン中央指令室、0600時」

地下8000m、厚さ6000mの天然岩盤と100層の特殊装甲板で護られた対ヴァリアンタス軍司令部が、騒然とする。

敵団は火星スイングバイ軌道を離脱。最終加速に入った。目標の移動速度は、秒速10km以上。

司令室正面には、赤い円で囲まれたカーソル8つが戦略マップにアウトプットされ、敵の動きをオペレーターが逐一報告する。

そのオペレーターの報告を聞きながら、その将官は鋭い眼光でモニターを凝視していた。

将官は、特務機関サンヘドリンの機関長ケステイウス「ガルス中將。サンヘドリン対ヴァリアンタス軍総司令官その人だ。

「目標の速力は？」

「目標は現在、N338宙域を重力波ベクトル推進で全速航行中。30時間後第一核機雷原に、60時間後には第二核機雷原に突入します」

ガルスは髭を撫でながら、オペレーターに言う。

「核機雷をNフィールドに集中。縦深配置」

「了解」

「ミラーズは？」

「ただ今本部に到着」

オペレーターの言葉を聞いたガルスは、吐き出すように大きくなめ息をついた。

Captur 2

戦場に行く。

そんな事は、軍に入った時から覚悟していた。

人類の為に戦う。

なんて名誉な事なんだろう！

でも、現実は違っていた。

一体何が起きるのか。

何をすればいいのか。

あまりにも突然で、理解する時間は与えられなくて……

つい二日前までは本部で訓練をしていた筈なのに、今は1600
0キロも離れた前線基地にいる。

「星なんて久し振りに見るな……」

二人は、派兵された北米大陸北部の陸軍基地宿舎屋上で空を見上げていた。

雲一つ無い星空。空気はガラスのように透き通り、月は真ん丸で、美女の横顔がよく見えた。

「なあ、スタイナー。この戦争が終わったら、お前何をする？」

「俺か？俺は軍を辞めて彼女と店をやる。上手い飯で、みんなを笑顔にする」

レイズが微笑んだ。

「なんかお前らしくないな」

「ちよつとクサクかったか……。お前は？」

「僕は決めてないよ……。将来の事なんて…決められない。なあ、スタイナー。お前は怖くないか？」

「怖いさ。でも、戦わずに殺される方がもっと怖い。それにこつちには、ミラーズ大佐がついてる」

「ああ。大佐みたいに戦えたら、どんなに良いものだろうな……」

レイズがそう言った瞬間、空の彼方に幾つもの閃光が煌めいた。

ヴァリアントの船団が、第二核機雷原に突入したのだ。

確実に近付いている危機。彼等も、40時間後にはここピヤビセンシオ陸軍基地から落着予測地域へ出発する。

「10月16日1800時、サンヘドリン本部中央指令室 船団到着まで60時間」

「船団、第二核機雷原に突入。起爆数70」

「第七防宙連隊より入電。敵巡洋艦三隻の撃沈を確認」

メインモニターに、防宙部隊の撮影した映像が映し出された。そこに写っていたのは、艦腹から真つ二つに折れた敵巡洋艦の姿。それを確認したガルスが、オペレーターに問う。

「敵船団は？」

「機雷原を抜け、月軌道へ侵入。48時間後、地球軌道艦隊と接触します」

ガルスは髭をさすり大きく深呼吸。

その時、デスクの上に、さつ……と、ソーサーに乗ったコーヒーカップが差し出された。

ガルスの少ない愉しみであるブラックコーヒー。それを知っているのはただ一人だけ。

「司令、コーヒーをお持ちしました」

彼の横に立つ女性、司令官補佐のレイラだ。

「有り難い……」

少し落ち着いた表情を見せるガルス。

彼はコーヒーを一口。

「久々の休暇だったのに。急に呼び出して悪いことをしたな、レイ

ラ君」

「いえ……。私は司令の秘書ですから。これも仕事です」

そう言っつて優しく微笑む彼女に、ガルスは吐き出すように呟く。

「戦略行動を見せないカミカゼ的行動。突撃と突破の繰り返し。その目的は……」

「ここ、ですか？」

「奴らもこの防空システムとデイカイオスを容易に抜けることなど出来ないとわかっているはずだ」

「防空システムに対する……強行偵察!？」

目標の着陸予測地点、南米防空司令部は、南米大陸北部の地下8000mに建設された軍用ジオフロントだ。

ジオフロントは岩盤その物を装甲としている。サンヘドリン本部と同様である。が、大質量高速移動体の衝突には、当然非力だ。もし着陸を許せば、司令部は周囲の岩盤ごと蒸発することになる。

「防空司令部への着陸は、いきかけの駄賃。防空圏を抜ければ、奴らは自爆も厭わぬだろうな」

「質量数十万トン分の金属励起爆薬……。考えたくありませんわ」
「抜けられれば……。だがな」

ガルスはそう言っつて、不敵に微笑んだ。

48時間後の10月18日2000時、地球第四軌道艦隊が船団と会敵。

同2011時、船団より砲艦が先行。戦闘母艦が単独で大気圏突入シークエンスを開始。

同2018時、砲艦二隻が艦隊へ主砲を発砲。被弾艦3、小破1、中破2。

同2019時、艦隊応射開始。効力射多数。

同2022時、砲艦二隻が軌道艦隊中央で自爆。大破4、中破多数。

同2030時、敵戦闘母艦、大気圏突入コースへ進入。阻止限界

点を突破。

予想到着時刻まで、あと16時間。

C a p t u r e 3

「10月19日0200時、ビヤビセンシオ陸軍基地」
ついにその時が来た。

機体格納庫に各自集合。各々の配属部隊に従い、点呼。

流れるような手順の中で、レイズは昨日のブリーフィングを思い出す。

自分達は防空司令部の前方100?地点に降下。任務は各防空高射大隊の援護、及び残敵の足止め。掃討は航空隊と空軍が行う。

それじゃあ、僕たちはただの壁……？

気付けば、彼は自分の機体の前に立っていた。

漆黒の重装甲に身を包んだ、陸戦の主力。対ヴァリアント用人型機動装甲、HMA h2C/M2A1・レーザーウルフ。“皮を被った狼”を意味する、陸軍の主力。

高出力・重装甲。装甲素材はメタニウムだ。

メタニウムとは、チタン、タンングステン等各種レアメタルを特殊な環境化で合金することによって生まれる、アモルファス金属だ。

この特殊合金を用いた複合装甲の開発によって、サンヘッドリン各軍全ての機体は世界最高クラスの装甲強度を持つに至り、ヴァリアントとの戦闘を可能にしている。

しかもこの機体は、HMAでは初めて“イクサミコシステム”を搭載した機種だ。

“イクサミコ”とは、バイオコンピュータを搭載した人型AIユニットの総称であり、不確定因子を用いることよっての外見的個体差は在るものの、殆ど十七〜八歳にしか見えない容姿は、可憐であり非力だ。だが、その重要性を侮ってはいけない。

ヴァリアントは、人より遙かに早く考え判断し、機動して攻撃する。だから人はヴァリアントと同等の判断と思考により、機動と攻撃を行う必要がある。

それを可能にしているのが“イクサミコ”であり、パイロットの思考を読み取り、操作を最適化。重装備により複雑化した火器管制を高速処理する、対ヴァリアント戦闘の要だ。

そのイクサミコも、機体と共に支給される。

いわば官給品なのだが、レイズはそうは思えなかった。

彼に支給されたイクサミコ。機体の横に立つその彼女は、レイズが訓練所で出会った、あの黒髪のも

「えっと……、じゃあ君が僕のイクサミコかい？」

「はい。本日から貴官の支援Aユニットとして支給された、戦闘支援Aユニットイクサミコヒューマノイドタイプバージョン1・88個体？8894 27012です。よろしくお願いたします」
綺麗な黒髪をさらさらと揺り動かしながら、ペコリとお辞儀するイクサミコ。

なかなかかわいい。いざ、自分のイクサミコを持つとなおさら。

かわいいが、あまりにも長い名前。

「君の事はなんて呼べばいいのかな？」

「ご自由にお呼びください」

「そう？ じゃあ……」

少し考えるレイズ。

「サラ……、サラがいいな」

「了解しました」

そう言って微笑むイクサミコ サラ。

レイズは彼女と共に、HMAへ乗り込んだ。

コックピットにはウインチで上がり、リアシートにパイロットが、フロントシートにイクサミコが座る。

密閉ヘルメットを被り、気密・給排気チェック。異常なし。

パイロットスーツをチェック。

スキンスーツ、コネクト異常なし。
マッスルスーツ、異常なし。

防弾・防熱気密スーツ、異常なし。

エマーゼンシーキット等、忘れ物なし。

気持ちを落ち着かせるために、大きく息をつく。

自分の身を包む大げさなほどの乗員装備は、己自身を護る物。追加に追加を重ね、まるでフル装備の歩兵並みに肥大したパイロットスーツその他装備は、戦いの危険度を表している。

決意し、セーフティバーを下ろす。そしてコントロールレバーを握る。

起動確認。アーミングチェック。

両手に火器、両腕部にも一門ずつの火器。腕部だけでも四門もの火器を装備した重火力。

だが裏を返せば、これ程でなければ生き残れないのだ。

「503レイズ機、起動完了」

「504スタイナー機、起動完了。いよいよだな、レイズ…」

「ああ、今日19日の1200時調度に、奴らは落ちてくる。必ず帰ろう」

「そつだ、生きて必ず帰ろう」

そつ言葉を交わす二人の機体は、非情なまでにスムーズに、大型輸送機のカーゴへ積み込まれていった。

「10月19日1157時、サンヘドリン本部中央指令室 作戦開始」

「目標現在高度250000m。降下率毎時80000m、ターミナルフェイズ」

「目標大気圏突入……開始しました！」

「目標現在高度2100000、1800000、1500000！
なお降下中！」

「第七、第八艦隊より入電。目標レーダーコンタクト。ネットワークアップロード」

「南部及び中部方面隊SOCより入電。目標レーダーコンタクト。ネットワークアップロード」

ついに大気圏突入を開始した敵戦闘母艦を、各航空方面隊および艦隊防空レーダーが捕らえた。

地球内のすべての空は、統合体中央空軍およびサンヘドリン空軍の管理する“統合防空ネットワーク”の監視下にある。ネットワークは、地上すべてのレーダーサイトのデータを合成、疑似的に合成開口レーダーを構築することによって、地球上すべての空を監視できるシステムだが、目標がネットワーク内に入るとはつまり、猛獣の縄張りに入る事に他ならない。

「第七、第八艦隊より入電。対空射撃開始しました。着弾まで60……」

各艦隊巡洋艦のVLSから発射された長距離防空ミサイルが、白色のカーソルとしてメインモニターのレーダー画面に合成表、それに合わせ、光学撮影の映像が分割表示される。

白煙を曳きながら空を駆け登るミサイル。

刹那、戦闘母艦の表面で閃光が散った。その瞬間、防空ミサイルは艦に命中することなく爆散。ミサイルは全て、戦闘母艦の対空砲火に撃ち落された。

それでも艦隊はミサイルを撃ち続ける。

ミサイルごとき通常兵器で、ヴァリアントの艦体種は墜ちない。

それでも、多数の飛翔体は艦体種の同時戦闘能力を大きく制限することが出来る。それこそが艦隊のミサイル攻撃の本懐だ。

その時、艦体種の周囲に、新しい反応が出現した。

「目標、艦載機を射出。数250」

レーダーが、一瞬で紅い光点に埋め尽くされた。

敵艦載機、ソルジャーの群れだ。

「1158時、到着予想地域」

高高度で編隊を組んで飛行する大型輸送機。

外ではすさまじい轟音のプラズマジェットの爆音も、コクピットの中では不気味な……まるで葬列を送り出すレクイエムのように聞こえる。

そう、これはまさしくレクイエムだ。

ヴァリアントはHMAよりも遥かに堅く、遥かに高い火力を有している。装甲は鉄壁の高分子複合材。下級兵士でもその火力は重装甲のHMAを容易に撃破し、中級ともなれば集団で掛からなければまず勝ち目は無い。

神様……

この時レイズは、初めて神に祈った。

縋れるモノには何にだって縋る。それがたとえ実体の無いものも。

刹那、コクピット内のコンソールが光り、サラが、兵器に似つかわしくない可愛らしい声で情報を伝える。

「目標地点到達」

足元のハッチが開く。

「射出用意！」

HMAの係留ロックを解除。次の瞬間、機体は輸送機のカーゴから空中に放り出された。

思わず歯を噛み締める。即座にスラスターを吹かし、滑空飛行に移る。

グラウンドスキャナー、ルックダウンレーダー作動。敵影なし。

序々に高度を下げ、地面ギリギリのところまでスラスターを一瞬だけ強く吹かす。

砂煙が上がり、足が地面に、ずしりとめり込んだ。

FCS作動。

即座に戦闘態勢をとる。

モニターに映し出される、武装の射撃視界。

レイズはカメラであたりを見回した。辺りは不気味なほど静かで、風が吹きすさみ、砂埃が舞い上がっている。

無線に通信。

「全部隊、降下完了」

即座に布陣。IFFに反応。友軍機。しかしレーダーには反応無し。

空軍のステルス空戦機、HMA-h2E/F・ディープフォレストだ。

数十機ものディープフォレストは編隊を組み、地上部隊の頭上を過ぎてゆく。

それに遅れて、巨大な何かが、轟音と共に翔けていった。

レイズは一瞬、それが何か理解出来なかったが、結論はすぐに出た。

金色と純白の装甲。全身に装備された特殊兵装。その巨体。

セカンドムーブを鎮圧したあの

「ディカイオスだ……」

雲のない空を飛ぶのは久しぶりだった。空は明るくて青く、平和に見える。

感覚を研ぎ澄まし、これから起こることに意識を集中させる。

自分を中心に、編隊を組んで飛行する空軍のディープフォレスト。本部航空戦闘軍団から第8戦術戦闘航空団第4戦闘飛行隊・クロンダイク及び第6戦闘飛行隊・ゲリック。駐屯空軍から第140戦闘航空団第13戦闘飛行隊・スレッジハンマー。計三個飛行隊、30機。

全機が、強力な長距離対空ミサイルを搭載している。

目的は制空権の確保。それが出来なければ、爆撃機が空域に侵入できない。

雲を引きながら、巡航速度で飛行するディープフォレスト。

それを見て、この中で一体何機が無事に帰還するだろうかと、彼は無意識に考えた。

でも、彼はすぐに考えることをやめた。

自分が、最大限の効力を発揮すれば。そうすれば、一機でも多くの味方を救うことが出来る。この機体を以てして。

「作戦空域到達」

声に反応し、彼は大きく息をついた。高高度へ向け上昇するディカイオスのコックピット内で。

彼の名はグラム・ミラーズ。階級は大佐。

大戦の英雄であり、兵士。ディカイオスのパイロットであり、対ヴァリアント戦闘の前線指揮官。

教本に載るほどの人物だが、その年齢は意外と若い。

声の主は、彼のイクサミコ、エステルだ。

彼は通信回線を開き、各機へ通達。

「デイカイオスよりスコードロン全機へ。各々展開後は、作戦空域の敵機を攻撃。殲滅後ポイントで合流する。行くぞ、ブレイク……
ナウー！」

各スコードロンが、編隊を維持したままデイカイオスの周囲へ散開。

戦闘機動に入る。

レーダーに敵編隊を捕捉。

母艦は未だに、地平線の向こうに位置している。直接攻撃は出来ない。

「敵機捕捉、数250。敵は広範囲に散開しています」

散開しているスコードロンが長距離空対空ミサイルを発射。ファーストストライク。弾着を確認した後、ソルジャーの群れとのドッグファイトに入る。そう、犬闘と喻えられる、死角の取り合いだ。

「エステル、母艦の撃破を最優先。先行する」

「了解」

彼は機体のブースターをさらに吹かす。高度をさらに上げ、敵戦闘母艦へと向かっていった。

レイズは、爆炎の散る空を見上げたまま、空のかなたへ消えていく。デイカイオスを目で追っていた。

対空レーダーに感。上空から敵機多数。

「来たぞ、スタイナー！」

「ああ、また後でな！」

彼は操縦桿を握りしめて即座に戦闘態勢をとる。

「敵機接近」

母艦から発進した艦載機　　ソルジャーは、編隊を組んでレイズ達に肉薄してくる。

“ソルジャー”は、ヴァリアント兵器体系の中で最も多く存在する、所謂量産下級兵士だ。

たかが量産型、と侮ってはいけない。

人の形でありながら、どこか甲虫を思わせるフォルムは、強靱な装甲の現れ。屈強な体躯は、それ自身が人工筋肉の塊であり、出鱈目な剛性とトルクを持つ。推進機関として搭載された慣性制御装置とフォントドライブは、ニュートン力学を無視した機動を可能にし、その火力は重装HMAを裕に越える。

ソルジャーは、それら“ヴァリアントとしての基本能力”を持った、ヴァリアントスの尖兵だが、最も恐るべきは

「敵艦載機出ました。レーダーコンタクト、数200。非常に多数」
サラの声と同時に、レーダーが真っ赤になった。

「これが……全て敵……？」

その物量だ。

「来るぞ、レイズ！」

スタイナーの声で我に帰り、息を整える。

火器を空に向けて構え、照準。

上空20km、敵が高射大隊の射程内に侵入。次の瞬間、レイズ達陸戦部隊の後方に待機していた高射大隊が、地对空ミサイルを一斉発射。発射されたミサイルは空を真っすぐ上って行き、敵ビームカノンの有効射程外である敵機手前5kmで六基の子弹に分解。

同時に、群れの中で無数の閃光が散った。

敵機がビームカノンを一斉に発砲。一瞬、まるで指向性地雷の散弾の如く密度で放たれたビームの雨は、多弾頭ミサイルを容易に迎

撃。金属ヘリウム製弾頭は、その小振りなサイズには見合わない巨大な火球を空に咲かせ、発生した衝撃波が大気を叩く。爆炎が晴れる。

モニターに、空間を埋め尽くす敵機の群れが映った。

撃エー！！

号令と同時に、レイズはトリガーを絞った。

瞬間、両手の火器が火を噴く。

高射大隊のミサイルをかい潜り、地上に降下した敵機は150機以上。

敵機はまるで雲のように群れ、一つの波となって押し寄せてくる。対してソルジャー達は、各々が高速で機動しつつも、全体としての指向と統率は何一つ乱れず、まるで一つの意志を持った生き物の様に行動する。

これこそが、ヴァリアントの真の恐ろしさ……独自のネットワークを用いた広域同時指揮通信システム。

攻撃・防御・移動……。それら全てを最も高い効率で行ってくるのだ。

「スタイナー！ 僕たちは高射大隊の壁だ！ 何があっても抜かれるなよ！」

レイズ機のすぐ横でスタイナー機が90°？軽機関砲を撃ちつつける。

「解ってるよ！ 来いこの野郎！」

対空砲火の嵐を抜け、多数のソルジャーが地表へ降下。ソルジャーは、地面に脚を着ける事なく直角に軌道を変え、地面を高速でホバー移動してくる。

火器を水平射。砲の散布界を敵機の群れに重ね、トリガーを引く。連射されるメタニウム弾。

ヴァリアントの装甲外殻は、高分子複合素材という超高強度複合材だ。

その強度は、通常の弾頭では貫通不能。ただ一つ、メタニウム製

徹甲弾を除いて。

その特殊弾がソルジャーの胸と腹を捉えた。バランスを崩し、レイズ機の足元に墜落するソルジャー。

レイズはそのソルジャーを踏みつけ右手のライフルを連射し止めを刺しながら、左手の火器を群に向かって連射。

突然、左手ライフルのボルトがロックする。

「左アサルトライフル、残弾ゼロです」

彼はすかさず、右手アサルトライフルと腕部にマウントされた100？単装機関砲を同時に発砲。

弾幕を張りながら、左アサルトライフルからマガジンを抜き、大腿部側面に装備されている予備マガジンを差し込んでリロード。

敵からのミサイルとビームの降り注ぐ中、両腕を構えて再びトリガーを引く。

「敵、ビームカノン、注意してください」

次の瞬間、敵からの一斉射撃が部隊に降り注いだ。無数のビームの雨。

ビームはレイズのHMAのすぐ横を掠め、立て続けに数発のビームが着弾する。

「スタイナー！」

「気をつける！ レイ……」

突然、スタイナーからの無線が切れた。

「スタイナー？」

レーダーから消える、スタイナー機の表示。

同時に、数発のミサイルがレイズ機に迫った。

巨大な推力を開放しながら、デイクイオスはさらに高度を上げて行く。

次の瞬間、コックピット内に表示される落下軌道の情報通り、敵の戦闘母艦が、全長数百mはあるつかと言つその巨体を真っ赤にさせながら降下してきた。

艦体は、迎撃仕切れなかった防空ミサイルの直撃で、であちこちが千切れているが、未だに活動を停止しない。

人類が、数年に渡る戦闘の中で知つた、ヴァリアントを破壊する方法は二つ有る。

一つは、動力である反物質反応炉と制御中枢を兼ねたコアを撃ち抜く事。再生能力を持ったヴァリアントは、多少の損傷などみえる再生してしまう。だが、コアがほんの数パーセントだけでも損傷を受けると、たちまち活動を停止してしまう。

そしてもう一つは、ヴァリアントの再生能力を超える損傷を与え、身体維持能力を奪うこと。

前者は困難だが確実であり、後者は簡単だが不確実だ。

しかも艦体種は、質量が数十万トンにも上る大型種。破壊には数発の指向性熱核弾頭が必要になる。

しかしデイクイオスは、それをやってのける。

「12時方向から高エネルギー反応」

敵の艦首が煌めき、巨大なエネルギーの奔流が機体を掠める。

敵艦の主砲、5000?陽電子砲だ。

敵は再生より、攻撃にエネルギーを注いでいる。

「エステル！」

彼の声に応え、エステルが機体腰部に装備された亜空間コンテナの中から、一つの武器を取り出して装備する。

プレッシャーカノン。極度に歪曲した重力波フィールドを射出す

る射撃兵器だ。

「敵艦、全砲門を解放」

敵艦は全身の対空砲を撃ちながら、艦首陽電子砲を再びチャージ。それに対し彼は、対空砲の弾幕を回避しながら、敵をロックオン。敵艦がミサイルを発射。数60。

「敵、ミサイル発射」

彼は冷静に武装を選択。次の瞬間、デイカイオスの両膝ブレードアーマーが展開し、無数のレーザーが照射された。

レーザーは全て自動で誘導されながら、次々に敵ミサイルを貫いてゆく。AHL アクティブホーミングレーザーだ。

ミサイルを迎撃し、プレッシャーカノンの射線を敵艦に重ね、トリガー。

射出された重力波フィールドは、敵の左舷をまるごと削り取るが、敵は構わず陽電子砲を発射。

同じ射軸上で発射された陽電子砲はデイカイオスを直撃。

デイカイオスは、左腕から展開した重力波フィールドで陽電子砲を防御するが、突撃してきた敵艦の艦首がデイカイオスの胸部に衝突。敵艦は推進機関を最大出力で噴射し、デイカイオスを押しながら前進を続ける。

その時エステルが、敵艦の異変に気づく。

「敵艦構成物質、励起。自爆するつもりです」

敵艦は最後の力を振り絞り、自分を構成する物質を次々に励起爆薬へ作り変えていた。

敵艦の質量は数十万トン。その三割が爆薬化するとしても、その破壊力は空前絶後の爆発力だ。もしこんなものがここで爆発すれば……。結果は火を見るよりも明らかだ。

やらせはしない。

グラムが、心の中でそうつぶやく。

次の瞬間、デイカイオスの右膝蹴りが敵艦艦首にヒットしブレードアーマーが深々と突き刺さる。

そして彼は、突き刺したブレードアーマーから、ホーミングレーザーを零距离で発射。

内部から貫かれ堪らず推進軸をずらすとす敵艦の艦首を蹴り飛ばし、背後へ回る。

「エステル！ プレッシャーカノン、出力最大！」

彼はそう言ってプレッシャーカノンを構え、腰部側面重力アンカーユニット“オルトロス”を射出。アンカーを空間に打ち込み、自身を空中に固着する。

遠ざかって行く敵艦。

刹那、プレッシャーカノンのトリガーが引かれた。

プレッシャーカノンの砲口から、極太の歪曲重力波フィールドが撃ち出される。

プレッシャーカノンは、極度に圧縮した重力波フィールドによって強制的に歪曲させた空間の復元力をコピーレント化し指向性を与えて打ち出す際に発生する衝撃波によって目標を破壊する超兵器だ。

この衝撃波は空間そのものの振動が伝播するものである為、物理的な距離を進行することでそのエネルギーが減衰することはない。その為空間歪曲に反発して発生する空間の自己復元力のエネルギーの實質上粗全てを目標に叩きつける事が出来るのである。

そして、目標は自身の存在する空間ごと振動し、基礎構造から破壊されることになる。

事実、敵艦はトリガーと同時に、完全に粉碎され、その存在をこの世界から消されていた。

目の前で爆炎が散り、一瞬意識が飛んだ。
目が覚める。
生きている。

ミサイルはアクティブ防御機能で撃ち落とされたりしい。
直撃を免れたとはいえ、敵の発するミサイルもその弾頭は金属
起爆薬。メタニウム装甲とh2の強固なフレーム強度がなければ、
戦闘不能になっていた所だ。

「サラ……、スタイナーはどこだ？」
サラがレイズに答える。

「504号機、反応無し」
その瞬間、レイズの瞳孔が一気に開いた。
起き上がった自機の足元には、スタイナー機を持っていた軽機関
砲が。そして周囲には、HMAの残骸が転がっていた。

辛うじて残った装甲板の切れ端。そこには504の数字。
「ああ……スタイナー……そんな……そんな……」
店をやる。

みんなを笑顔にする。

よみがえる、彼の……、スタイナーの言葉。そして……笑顔。
「うわあああああ！！」

次の瞬間彼は、スタイナー機を持っていた重機関砲を持ち、スラ
スターを思い切り噴かしていた。

「おい、待て！ やめろ！」
小隊長の制止を無視して、単機、ヴァリアントの群れに突撃して
行くレイズ。
機体を掠めるビーム。

昇華する地面。

無視。無視。無視。
今は何も感じない。
今はただ奴らを……

殺してやる！

「敵機、左40、4機。右30、3機接近」

「うおおああああ！」

右手にアサルトライフルを持ち、左手に機関砲を持つ彼は敵機をロツクし、トリガー。

彼の咆哮と共に、両手の重火器が火を噴き、メタニウム弾が連射される。

爆ぜる敵機。

彼の周囲の空気と、モニターを焦がす爆炎。

ダウンカウントしていく弾数表示。

足元に転がる、無数の空薬莖。

複数の敵機を単機で相手をしているせいだ。火器の弾薬はすぐに底をついた。

「ライフル、機関砲、残弾0」

彼は弾切れになった火器を即座に手放し、一機のソルジャーに飛び掛る。

ソルジャーはビームカノンを発砲。レイズは至近距離で放たれるビームカノンを回避するが、ビームは左肩を貫通。かまわず、ソルジャーの首を掴むと、両腕部にマウントされた100？単装機関砲を撃ちつづける。

殺してやる！

殺してやる！

呪詛のように繰り返す彼の機体の後ろには、陸軍航空騎兵隊の重武装機、HMA-h2C/B・ストライクウルフが迫っていた。

しかしレイズは、それさえも無視して撃ちつづける。

腕部機関砲残弾ゼロ。彼は撃ち抜いたソルジャーを捨て、弾切れになった機関砲をパージ。腰からソニックブレードを抜いて握り締

める。

「うおおおおお！」

彼は近くの敵へ真つ直ぐにブレードを振り下ろした。腕を交差させ、ブレードを受け止めるソルジャー。

火花を散らしながら、ソルジャーの腕に食い込んでいく超振動ブレード。

やがて刃は、ソルジャーの腕を両断し、胴を切り裂いた。

不快な金きり声を上げるブレード。

高分子複合素材を切ったせいで、ブレードが一気に刃こぼれした音だ。

それでも、ソルジャーは倒れない。

「あああああ！」

レイズは再びソルジャーに渾身の力をこめて切りかかった。

対するソルジャーは拳部分に装備された超振動ナツクルを起動させ、右拳でブレードをガードする。

「くっ！」

まばゆい火花が、レイズのブレードと、ソルジャーのナツクルの間で散る。

碎けるブレード。

ソルジャーは左手でレイズ機の腹にパンチを食らわせる。

「がっ！」

突き飛ばされる機体。

衝撃はコクピットにまで伝わった。

「腹部、第一、第二装甲板損壊！」

「軽く食らっただけでこれか…！」

再び腕を振り上げるソルジャー。

突然、ソルジャーが砲弾に貫かれ、爆ぜる。

次の瞬間、彼の機体は駆け付けた小隊長機によって引き倒された。

「馬鹿野郎！ 爆撃に巻き込まれるぞ！」

無線に響く小隊長の声。

同時に、数十機にも及ぶ騎兵隊機から数百発もの255?ロケット弾が、群の中に撃ち込まれた。

そのさまはさしずめ、ツリーラインを斉射する戦闘ヘリコプターのようにあり、事実、ストライクウルフはロケット弾攻撃のあと対装甲ミサイルを満遍なくばらまき、敵軍勢を掃射。待避がてら、敵軍勢の上を擦過しながら右腕90?ガトリング機関砲を斉射する。

ストライクウルフの後には、数十機の爆撃機が来た。

爆撃機は数発の爆弾を投下。その爆弾は上空500mで破裂。空中に散布された液体爆薬は瞬時に爆発し、巨大な火の玉と化した。対ヴァリアンタス用に改良されたFAEはその爆風と熱、電磁波により文字通り地上にある全てを焼き尽くす。

それはまるで嵐のような……爆炎の海。

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT 2 The Person (前書き)

初戦を生き残ったレイズ。しかし彼の心には大きな傷が残った。
戦う男達の、心の中とは……

ACT 2 The Person

Captur 1

朝、彼は自分の目がひらつきばなしであることに気付き、慌てて目を閉じた。

乾いた目に涙がしみる。

眠れなかった。寝付くことが出来なかった。

戦闘から帰還した後、自分がどのようにこの部屋へ帰ってきたかも分らない。

目を開ける。

ぼやける視界の中、いつも最初に見えてくるのは、数百の朝と夜を跨いで目に焼き付けた、見慣れた天井。

毎日、来る日も来る日も、薄汚れた同じ天井を目線でなぞり、壁に掛けてある時計に目を移すのが彼の日常で、その日も彼はそうした。

刻々と時間を刻む長針。午前8:30。

「やばっ！」

ベッドから飛び降り、部屋備え付けのクローゼットから服を乱暴に引っ張り出して、急いで着替え出す。

洗面所で顔を洗い、鏡で自分の姿を見たとき突然彼は、その動きを止めた。

首に掛けられた、薄べつたい、アルミ製のドッグタグ。

新品の、傷一つ無いそれには、『503』と刻印されていた。

「そつだ……。僕、もう訓練生じゃないんだつた……」

友を失った、あの戦い。

蘇る記憶。忘れる事の出来ない記憶。

彼はタグを強く握り締め、重い足取りで寝室に取って返す。

その時、部屋のチャイムが鳴った。

「ザナルティール軍曹、親展書類だ。確認しろ」

彼が扉を開けると、士官は何も言わずに封筒を手渡した。

何も書かれていない白い封筒。裏面には、サンヘドリンの紋章が印刷されているだけで、やはり何も書かれていない。

彼は封筒を開け、一枚の書類を取り出した。

それは、サンヘドリン人事部から送付された、訓練校から実戦部隊への正式な異動命令書類だった。

それを見て、溜息をつくレイズ。

訓練生だったときの……、友と一緒にだったときの思い出。

それが一瞬で砕け散った。

ヤンは、ソルジャーの拳に叩き潰されて死んだ。

ミカは、レイズ達のすぐ後方で、敵に狙撃され、誘爆して死んだ。スタイナーは、コックピットを撃ち抜かれ、蒸発して死んだ。

生きていたころの、皆の笑顔。

今の彼にとってはそのすべてが、心のヒビに打たれる特大の楔。

自らを責め、迷い、悩む。足掻く度に、足を捕られる。

彼は目を開け、ふと気づく。

封筒の中には、もう一枚の書類が同封されている。それは、宿舎の移動先を聞き記した書類。

彼は書類と同封されていた新しい部屋のカードキーを見つめ、もう一度、大きく溜息をついた。

薄暗い無機質な部屋。

その中心に設置されている、透明なシリンダー。

シリンダー上下には、何本ものコードやパイプが接続されており、

内部には透明な液体が満たされている。

その液体の中に浮かぶ、うつすらと白みを帯びた肌色の物体。身体だ。

華奢だが、ふくよかな起伏に富んだ、柔らかい女の身体だ。

彼女は液体の中に、目を閉じたまま静かに浮かんでいる。

「エステル、メインシステム。ユグドラシルとの接続完了」

室内に響く、合成音声。

彼女の身体にはセンサー針が食い込み、彼女の身体データを逐一検査している。

「スキャンング開始」

彼女の身体を走る、何本もの光のライン。

それは彼女の身体を撫でる様に、何度も、何度も、往復を繰り返した。

「スキャン完了。生体機能異常無し」

「戦闘データ、バックアップ……」

「完了」

「メモリーデータ、バックアップ……」

「完了」

「センサー、パージ」

一瞬ぴくりと痙攣する彼女の指先。

巻き取られるセンサーコードが、エステルの身体からセンサー針を抜き取っていく。

「調整槽、排水開始」

シリンダー内を満たしている“保護液”が内部から排出され、やがて彼女は、自分の脚で調整槽の中に立った。

流れていく保護液。

開放される強化ガラス製シリンダー。

彼女はゆっくり調整槽の外へ歩み出、そして静かに、美しい銀色のロングヘアを体からはがしながら、部屋の端のタオルの置かれた場所へと歩いて行った。

タオルを手を持ち、身体を拭くエステル。

微妙な粘性を含んだ保護液が、彼女の身体から離れるのを惜しむかのようにゆつくりと、タオルの繊維の中へ吸い込まれていく。すると彼女は突然、その手を止めた。

「何の御用ですか？ エビング博士」

振り向く彼女。

するとそこには、白衣を身に纏った長身の女性が立っていた。

「この部屋寒くない？」

「質問の答えになっていません。エビング博士」

「昔は“エレナ”って呼んでくれたのに……。つれないわねえ」

「それはあなたに、『そう呼べ』と言われたからです」

「でもそれに従ったのはあなた」

「イクサミコは、人間に従うように作られています、愛するようには作られていません」

何も纏わぬまま、白衣の女の顔を見据えるエステル。

「自分で言ってる悲しくない？」

「第一ここは、あなたの管轄では無い筈です」

「まったく……“飼い主に似る”って奴かしら？ あなたのその無愛想さは」

エレナは、一瞬溜息をついてから静かに微笑み、エステルのすぐ側へ近付いた。

「でも……」

エステルの腰に手を触れるエレナ。

「……それがいいのよね」

彼女はそう言うと、エステルの肌を撫でた。

「確かに“あの人”好みの身体してるわよね…あなた…」

ぴくりと動く、エステルの背中。

「でも……彼は貴女の事を本当に愛しているかしら？」

彼女はエステルの耳元でそう呟くと、その手を徐々に、腰から脇腹へ。脇腹から胸へ滑らせた。

「やめて下さい……博士……」

エステルを無視するエレナは、エステルに身体を密着させ、首筋に残された、淡く血の滲むセンサー針の痕に優しくキス。

彼女の口の中に広がる、エステルの血と肌の味。

エレナは、それを求める様に、何度もエステルの首筋に唇と舌先を這わせる。

「やめて！」

声を荒げるエステル。

彼女は、エレナの身体を手の平で突き放し、タオルで自分の身体を隠した。

「私はもう……」

困惑の表情を浮かべるエステル。

そんなエステルを見てエレナは、不敵な笑みを浮かべてから彼女に言った。

「そうね、あなたには“彼”が居るものね……」

一瞬寂しそうな表情をするエレナ。

そして彼女は、最後にこう言っただけで部屋を出て行った。

「彼に……、グラムによろしくね」

彼女を見送るエステル。

一人、部屋に残された彼女は、タオル越しに自分の肩を抱いて、呟いた。

「この部屋寒いわ……」

Captur 2

円い部屋の中で余韻を残しながら反響する声。

会議室の前方では、対ヴァリアンタス戦闘における情報参謀的部署である、情報軍団のハルト准将が、今回の戦闘に関する戦況、部隊の戦果、戦略戦術に関する情報を、各軍団や省庁士官に報告して

いるが、グラムはその声を聞き流していた。

耳で聴いてはいるが、聞こえていない。

ぼんやりと何も無い空間を眺めるグラム。

彼の目の前に置かれた分厚い資料の上に、ミネラルウォーターのペットボトルが、微かな光を分散させて投影している。

「……以上が、今回の対ヴァリアンタス戦闘に於ける諸元であります」

長い報告の終わり、突然彼の意識が引き戻される。

「ご質問は？」

周囲を見回すハルト准将。周りの士官と比べると、非常に若い。

「では次の点ですが……」

彼は上がっている手が無い事を確認すると、小さく咳払いをしてから再び報告を始めた。

さらに続けられる会議。

その会議室の外で、彼女は待っていた。静かな様子で、そして待ち焦がれる様に。

彼女は待っている。彼を待っている。

彼女と彼が初めて出会ったのは、今から約3年前。

その時も調度今日のように、彼女は待っていた。

彼女に名前は無い。

彼女は“人”ではない。

彼女の目の前に、彼は立った。

彼の知るかぎり、彼女は始めから、そこに居た。

彼女がどこから来たのかも、彼は知らない。

彼女は始めから、そこに居た。

彼女は彼に言った。

「貴方が私のユーザーですか？」

彼は答えた。

「そつだ」と。

会議室の扉が開いた。

疲れた表情の将校達に混じり、部屋から出るグラム。
彼女は彼の前に立ち、あの日の様に、彼の瞳を見つめた。

午後になり、レイズは訓練を行っていた。
狭いシミュレーター内、目の前に広がる空間の中で、彼は機体を
機動させる。

土地設定は“市街地”。敵数は“不明”
無線に通信。

「501から503は左から。505と506は、このまま正面へ。
常に、スリーマンセルで行動しろ」

各機から返ってくる、了解の返事。

レイズの乗るHMAは、他の二機と共にスラスタ―飛行へ移った。
リーダーに表示される数個の光点。敵機、数、8。

「いたいた……！ ソルジャータイプ、八機！」

先頭を機動する機体から通信。

「掃射するぞ。高度を上げてから、連射を加えて擦過する」

「502、諒解」

「……」

返事を返さないレイズ。

「おい、503。どうした？ トラブルか？」

「あ、いえ……503、諒解」

うだつの上からならない返事を返す彼を尻目に、二機はスラスタ―で、
さらに高度を上げながら加速した。

その後に従うレイズ機。

敵機ロツク、ガン・ラン。

目標の斜め上空から迫る三機のHMAは、高空を擦過しながら、アサルトライフルのフルオート斉射を加えた。

巻き上がる砂煙。数個の爆炎が散り、三機は上空を通り過ぎていく。

「斉射完了。軌道旋回による空中支援に入る」

「了解。こちらは突入して殲滅戦に移る」

突入する地上部隊。

隊長機を含めた3機のHMAが、地上戦を展開し、残存兵力を掃討していく。

地上部隊の上空を軌道旋回する三機。

突然、レーダーに反応。

「フラッシュ。敵機感知」

「ターゲットチエック」

「ナイト。数、2」

「なに!?!」

旋回を繰り返すレイズ達の更に上空から、二機のヴァリアント。

中級指揮官型ヴァリアント、コードネーム“ナイト”。

それが二機、部隊に迫っている。

ナイトは、高速機動による近接戦闘に特化した種。接近されれば厄介だ。

「迎撃するぞ! 503援護しろ!」

「り、諒解!」

先攻する二機のHMA。

レイズは空に向かってライフルを構えた。

モニターに上書きされるFCSの射撃視界。その中を踊るクロスゲージが、小刻みに揺れる。

トリガーに掛けられる彼の人差し指。

先行していった二機のHMAが、ナイトに向かってライフルを発砲。

回避するナイト。空を切り裂く弾丸。

二機のナイトは左右に別れ、その機体を大きく機動させた。

「今だ503！ 撃て！」

レイズの耳元に響く声。

突然彼の脳裏に、あの記憶がフラッシュバックする。スタイナーの乗るHMAは、レイズの目の前で崩れ落ち、そして爆ぜた。

遺体は一瞬で蒸発したのだらう。欠片も残らなかった。

目を見開いたまま、動きを止めるレイズ。

震える指先。それと連動するかの様に、ライフルの銃口が左右にぶれる。

「503！ 早くしろ！」

「レイズ軍曹！」

彼をサポートするサラが、彼に向かって声を上げた。

「503……！」

途切れる無線。

連帯のとれた動きで、二機のHMAを瞬時の内に葬る二機のナイト。

二つの火球が空に散った。

「レイズ軍曹！」

再びサラの声。さっきより強く。

我に返る。

次の瞬間、ナイトから一条のビームが放たれた。

「回避が……！」

“イクサミコ”

機体制御、手動制御から切断。

マニユーパーシシステムに一時強制介入。

機体制御、及び、マニユーパーシシステム、イクサミコ中枢システムと接続。

オートマニユーパーモード、発動。

機動開始。

光の速度で思考する“イクサミコ”は、それを瞬きより早くやっ
てのける。

迫るビーム。

瞬間、左肩のバーニアを噴射。射線から回避。

ナイトから放たれたビームが機体を擦過。ビームパルスで、左肩
装甲が焼け、熔解。それと共に、すり鉢形のバーニアノズルが熱で
歪み、爆ぜた。

歪む機体のフレーム。

機体過負荷、イクサミコヘフィードバック。支援ユニット、シス
テムダウン。

「サラ！」

体勢を崩す機体。

機体はそのまま、重力に捕われ、落下し始めた。
カウンタダウンしていく高度計。

ナイトは、落下する彼の機体の横を、高速で追い抜いて行く。
次の瞬間、地表で幾つもの閃光が散った。

迫る地面。

落下の荷重が、コクピットの中を掻き回す。

「と……まれえ……！」

凄まじいスピードで落下する、70tの鉄塊。
逆流する血液。

狭まる視界。

薄れゆく意識の中、彼は渾身の力を込めて、操縦桿を引いた。
一気に推力を開放するスラスター。

巨大な推進ベクトルが、機体を突き刺す。
更に歪むフレーム。

次の瞬間、機体は轟音を立てて、地面に激突した。

「（なんだ？ これは……）」
身体感覚が無い。

暑さ、寒さ、痛み。全ての感覚が無い。

「（そうか……。これが“死”か）」
広がる闇。

「（じゃあ、僕は死んだのか……。そんな馬鹿な……。だってこれは……）」

闇は、無限の彼方まで広がっている。

「（そうか、スタイナーはこれを見たのか……）」
彼は何故か非常に落ち着いた気分だった。

「（ああ……。ここにずっと居られれば……）」
小さな光点が、闇の中に現れた。
白くて明るい、温かい光。

「（眩しいなあ。なんだよ、もう……）」
目をつぶろうとも、身体感覚が無い。
第一、瞼が有るかどうかも解らない。
突然、彼の“身体”が取り戻される。
闇に浮かぶ身体。

彼は無意識に、掌で光を遮る。

すると、“誰か”が彼の背中を押した。

「うわっ!?!?」

声が出た。

光に吸い込まれていく彼の身体。

彼は急いで振り返った。

「スタイナー!!!」
彼は無意識にそう叫んだ。
光に包まれる彼の身体。

次の瞬間彼は、シミュレーターの中にいた。
頭を左右に振るレイズ。

思考にブランク。

「シミュレーター……?」

0.5秒で気付く。

「サラ! 大丈夫かい!? サラ! サラ!」

サラの肩を揺らす彼。

彼女はゆっくり目を開けた。

「ん……」

「よかった……」

サラの無事を確認したレイズは安堵の表情を見せた後、直ぐに肩を落とした。

そんな彼に、サラが言う。

「すみません、でした……」

彼は彼女の瞳を見つめ、聞き返す。

「何故謝るんだい?」

「私は……」

突然、シミュレーターのハッチが開く。

「軍曹、無事か?」

顔を覗かせる隊長。

彼の眉間には、シワが寄っていた。

「すみません……大丈夫です」

謝るレイズ。

そんな彼を見た隊長は、大きな溜息をついてからレイズに言った。

「お前に面会だ。女だとさ」

「面会、ですか……?」

怪訝な表情のレイズ。

隊長は、彼の胸倉を掴んでシミュレーターの中から引っ張り出した。

「とつと行け。そして休暇でも取れ」

彼はレイズにそう言うと、突き放す様にその手を離れた。

「でも……」

サラの様子を伺う彼。

彼女は一瞬、彼の顔を見てからすぐ、目を逸らす。眉を歪めるレイズ。

彼はシミュレーション室から、施設ロビーへ、脇目も振らずに向かった。

逃げる様に。

目を背ける様に。

ロビーへ着くレイズ。

すると、黒い喪服を着た女性が目に留まった。

一瞬目が合う。向こうもこちらに気が付いた。

何故かは解らない。だが彼には、彼女が、自分を待っている人だと自然と悟った。

「あの……」

「ザナルテイーさん？」

「あなたは……？」

彼女はレイズの瞳を見つめた。

悲しい目で。

この世の一切合切を憂いでいる様な目で、彼女は彼を見つめた。

Captur 3

三年前、彼女は彼にこう問い質した。

「貴方が私のユーザーですか？」と。

その問いに彼は、「そうだ」と答えた。

そしてその日から三年が経った今日、“その日”の様に彼女は、彼の瞳を見つめた。

会議室から出ていく人込みが、彼を追い越していく。

毎日の様に見ている筈の彼女の瞳が、今の彼にとっては、これほどまでに美しいと思う、不思議な感覚。

「すまない、待たせてしまったな」

「いえ……」

人込みはやがて消え、グラムとエステル二人だけが残された。

「あの大佐、そろそろお時間ですが……」

「すまん、これからの予定は全てキャンセルだ」

「……また、あそこへ行かれるんですか？」

廊下を歩き始めた彼の後から随って歩くエステルが彼に向かってそう聞くと、グラムは振り返らずに答えた。

「今日は君にも一緒に来てほしい」

「私も……？」

グラムは、部屋に戻って上着を着替え、車のキーを持った。

彼はエステルを助手席に座らせ、キーを挿した。

イグニッションをアクセサリに。

コンソールが光る。

そしてスタートの位置までキーを回す。

GM社179年製ステイニングレイスポーツタイプのボンネットの下に隠された、180年式水素パルスエンジンが、トルクフルな唸り声をあげた。

シフトを一速に。

アクセルをゆっくり踏む。

車の中で、彼女は彼に言った。

「お疲れなのでは？」

「いや、大丈夫だ」

嘘だ。

彼女は心の中で呟いた。

もう3年も一緒にいる。癖も分かっている。彼は疲れていると、右手人差し指を小刻みに揺らす。

現に、彼の指先がさつきから小刻みに上下している事に、彼女は気付いている。

ハンドルを握る彼。

やがて車は、軍施設区域を出て、シティー区画へ。大きな通りにその車体を乗せる。

「しまった」

彼が突然呟いた。

「え……？」

「渋滞だ」

車の赤いテールランプが見えた。

自然にスピードが落ちる。この街特有の、帰宅ラッシュ渋滞。建築物の間を縫うように走る高速道路を、無数の車が埋め尽くしている。

車が止まった。

溜息をつきながら、シフトレバーをニュートラルに。

この車は珍しい種類、言わば“趣味の車”だ。

22世紀にもなつて、未だにマニュアルシフト。駆動も“タイヤ”だし、第一、自分でハンドルを握る必要がある。

でもグラムは、この車が好きだ。AI任せのドライブではなく、自分で運転するこの車が。

静かな車内で、彼女が言った。

「あの……」

途切れる言葉。

「どうした？」

彼女の唇は、言いかけの言葉を閉じ込める様に曲がっていた。

「いえ……」

言葉を飲み込む。

何回か、短い言葉のやり取りが続く。どれも単語だけの、単調な会話。

解消されない渋滞。

時間だけが過ぎ、やがて都市の明かりが傾き始めた時、グラムはもう一度、溜息をついた。

「私はこの車と同じなんだ、エステル……」

ルームミラーに後続車が映る。

「進む事も出来ない。戻る事も出来ない。他の道を見れば、そっちの方が良かったと必ず後悔する。同じ所で回り続ける、出来の悪い戯曲の様に……」

エステルは彼に言った。

「貴方は後悔しているのですか？ 今の道に……」

グラムは答えた。

「ああ、後悔している。どんなに強力な力を手にしているとしても、全員を護れる訳じゃない。今も昔も、私は誰ひとり護れなかった。いつも感じる、感じるんだ、エステル……。私は誰か、とても大切な誰かを失ったと。……誰かは分からない。だが、失ったと、確かに感じるんだ」

「貴方は大勢の命を救いました。失われた命も確かに有りましたが、貴方が戦わなければ、もっと多くが死にます。それに……」

彼女は言った。

「ゆっくりでも、少しずつでも……。前に進んでさえいれば、いつかは必ず、目的地に着けますよ。解消されない渋滞は無いんです」

再び動き出す車群。

彼は一瞬短く息を吸ってから、シフトを一速に入れ、アクセルをゆっくり踏み込んだ。

走り出す車。前の車との車間距離が、徐々に開いてゆく。

解消されていく渋滞。

車は二人を乗せ、道路を駆けて行く。

通りから脇道へ。そして物静かな、小高い丘の上へ。

公共の駐車場に車を止め、降りる。

周りには木々が植えられていて、涼しい風がそよいでいた。

駐車場から、丘の上に行く小道を歩いていく。紅葉した銀杏の落ち葉の絨毯を踏み締め、小川の上に架けられた小さな橋を渡って、木立を抜ければそこには、広大な土地が広がっていた。

平坦で広い、芝生の敷き詰められた閑静な共同墓地。数千数万の

骸が眠るそこには、黒い良く研かれた、真新しい墓石が幾つも立てられていた。

墓石に刻まれている文字。

皆、違う場所、違う時間に生まれ、違う生い立ちを歩みながらも、死んだ日は皆同じ、『2188年10月19日』。

彼は、その真新しい墓石の群をゆつくりと歩いていく。

全体を視野に収められる様に、広く、空間を眺める。

エステルは、静かな様子で彼の背中を見つめた。

「お花は、奉げられないんですか？」

彼は答えた。

「両手に持ちきれないからな」

遠くを見つめたまま答えるグラム。

彼女は、彼のすぐ横に立ち、言った。

「あなたは、今まで護ろうとしてきた人々と、護ることのできなかった人たちの心をすべて、お一人で背負うおつもりなのですね……」
彼は振り返り、彼女に答えた。

「私は戦うことしかできない男だ。ただひたすらに破壊のみを求め、戦いの中でしたか自分を保てない。この戦いの中に身を投じてから私は、後悔の連続だった……。なにもかもな」

エステルの心の中に、何か冷たい物が流れ込んだ。

“彼女”の言う通りかもしれない。

彼は……彼は私を本当は……

突然、彼の足が止まった。

目線の先。

そこには、墓石の前で自分の頭に銃を突きつけている男の姿があった。

「ザナルティーさん？」

彼女はそう言うと、彼の顔を見つめた。

「あなたは……？」

彼が不思議そうに聞き返すと、彼女は、持っていた小さなポシェットの中から一枚の写真を取り出し、それを彼に差し出した。

「これを、貴方に渡したくて……」

レイズとスタイナー、そして数人の仲間が共に写る、スナップ写真。

「あなたスタイナーの……」

次の瞬間彼は、苦い表情で眉を歪め彼女から顔を背けてしまった。

「……僕は、貴女に合わせる顔がありません。僕は貴方の大切な人を……」

「ザナルティーさん。本当は私、あなたにお願いがあつて来たんです」

「お願い？」

「ええ」

彼女は、彼の瞳を見つめ、ゆっくりとした落ち着いた口調で話し始める。

「彼の遺品を整理している時、出てきたんです、その写真。……彼は貴方の話をよくしてくれました」

「スタイナーが僕の……？」

「彼は貴方の事を、最高の親友だと、いつも笑顔で言っていました。だから、その写真を見たとき、すぐに分かったんです。彼の横に立つ、笑顔の優しい人が、あなただって。それで私は思ったんです。

『この人だ、この人しかない！』って……。ザナルティーさん、私のお腹にいる彼の命の、名付け親になつてくれませんか？」

「僕が……名付け親に……？」

彼は、自分の心が熱くなるのを感じた。

最愛の人を残し、この世を去ったスタイナー。

せめてあの戦闘だけでも生きて帰っていれば、もう一度彼女の笑

顔を見られたらう。

もう一度愛し合う事が出来たらう。

それなのに……

「……僕が死ねばよかったのに」

彼はぽつりと呟いた。

「いつも、“護らなきゃいけない人がいる奴”が死んで、“どうでもいい奴”が生き残って……なんでなんだよ……。なんでいつもそうなっちゃうんだよ……。もしそれが運命なんだったら、僕が代わりに死ねばよかったのに……！」

突然彼女が、レイズの頬を平手で打った。

「ザナルティーさん……。たとえ貴方が代わりになつたとしても、今度は彼が苦しみます！ 死ねばよかったなんて、そんな事、簡単に言わないで下さい！ この世に、どうでもいい命なんて無いんです！ 死んだら駄目なんです……死んだら駄目なんですよ！ ザナルティーさん！」

死んだらだめなんですよ！

そんなことは分っている。

死んだら全てが終わる。

だからこそその救いもある。

「ムリだよ、スタイナー。こんな悲しい世界で生きていける訳がないじゃないか……」

彼女と別れた後、レイズはスタイナーの墓石の前に居た。

胸に拳銃を忍ばせて。

彼は大きく息を吸い、拳銃を抜いて自分の頭に突きつけた。

そのとき。

「それがおまえのやり方か」

突然の声にレイズは驚いて振り向く。

そこに居たのは……

「ミラーズ、大佐？」

「お前はそうやって逃げるのか」

「え……？」

「ただ悲しみに身を任せ、耐えることもせず、自分を変えようともしない。そうやってお前は逃げるのか」

「……僕は貴方みたいに強くありませんから」

「そうだな、お前は弱い。このままじゃ自殺しなくてもいずれ死ぬだろうな」

「あなたは、僕を止めたいんですか？ それとも止めたくないんですか？」

「さあな、どちらでもいい。だが一つ言っておく。死んで楽になるうだなんて甘いぞ。お前は生き残った。なぜだ？」

「なぜって……」

「その答えが分からないなら、引き金を引け。私は止めん」

彼はそう言って、レイズの下を去っていった。

レイズは、再び、自分の頭に銃口を向ける。

指が震える。

全身から汗が噴出し、心拍が上がる。

なぜ引き金を引けない……？

指が動かない。

怖い……

死が……

怖い！

死が怖い！

「死にたくない……死にたくない！」

レイズが、銃口を放して泣き崩れる。

「それが答えだ」

レイズの横にグラムは立ち、ゆっくりと語り始めた。

「誰でも死は怖い。その恐怖を胸に刻め。死を恐れる。ひたすら生きる。そして死を憎め。憎んで戦え。戦って、強くなれ」

グラムはそう言つて、レイズの肩を叩いた。

顔を起こし、レイズはまっすぐにグラムを見つめて言う。

「大佐……僕は戦いたい。戦いたいです！」

グラムが、レイズに問う。

「貴様、名前は？」

「レイズ……、レイズⅡザナルティ軍曹であります」

「そうか、ならばレイズ軍曹。私の下に來い。戦い方を教えてやる」
グラムはそう言い残し、ゆっくりと去っていった。

「どうした？」

墓地から帰る途中、突然エステルが立ち止まった。

「私は、あなたと何年間も共に過ごしたのに、あなたの想いを、共に背負うことができませんでした。私は……」

エステルの言葉を、グラムの声がかき消した。

「エステル、この三年間で唯一、君に出会えたことだけは、後悔していない。そばに居てくれるだけで、私は十分だ……」

グラムの顔を見上げるエステル。

彼女の瞳を見つめる彼。

「……本当に後悔、していませんか？」

「ああ」

風が、彼女の頬を撫でた。

大きくなびく彼女の髪。

彼はそれを手で優しく押さえた。

「帰ろう、エステル。私たちの家に……」

彼女は微笑んだ。

「ええ、帰りましょう。私たちの家へ……」

二人は風に揺られ、散つていく銀杏の葉の中を歩いた。

歩調をあわせ、ゆっくりと。

手を握り、寄り添いながら。

ゆつくりと歩いた。

それは清々しい朝だった。

気温23度前後、湿度35パーセントの適度な空気。

彼は身体を起こし、ベッドの上で深呼吸した。

部屋の中を満たす清浄な空気が、起きたばかりの彼の肺の中に吸い込まれ、血液の中に溶けていく。

部屋に差し込む光。

カーテンの切れ目から見える、朝霧に包まれた都市の姿は、まるで空の上に突き抜ける無数の塔のように見え、一瞬自分が空の上にいるように思える。

その日も彼は、そんな錯覚に酔いしれていた。

朝の6:30。

彼の隣では、エステルが静かな寝息を立てて眠っている。

「……ん」

寝返りをうつエステル。

銀色の髪が、流れるように波打ち、窓から差し込む光が彼女の髪を照らした。

彼女の髪を、優しく撫でるグラム。

彼は、エステルの寝顔が好きだ。

子供のように無垢で、女神のように美しい彼女の寝顔が。

三年間も共に暮らし、共に戦ってきた彼女が、今の彼にとっては

唯一の安らげる場所だからだ。

想いを重ね、

言葉を重ね、

身体を重ね、

お互いを感じあえるその瞬間が。

この部屋を出れば、今日もまた、あの地獄のような戦場に向かわなければならぬかも知れない。

人種、政治、軍、正義、倫理、イデオロギー。

その全て……、その全てのために、彼は戦ってきた。

だから、今日くらいは。

今日くらいは、彼女と共に、寝坊をするのも良いだろう。

今日だけでも……。

彼女には、肩の荷を降ろし、夢の中で微笑んでいてほしい。

後はすべて、自分で背負おう。

せめて今日だけでも、その無垢な寝顔を壊さぬように。

約10ヶ月後、例の彼女は元気な女の子を産み、レイズはその子を『アンジェラ』と名付けた。

アンジェラは今も、すくすくと育っている。

「ACT2」終

ACT3 再会（前書き）

グラムに、突然の出張命令が下る。それは火星での新兵器試験。しかしそこに、反政府組織の魔の手が迫っていた……

ACT3 再会

Captur 1

「明日、火星に!？」

珍しく、グラムが上ずった声をあげたのは、突然火星に行けと言われたからだ。

「ベルセポリスと言えばHMAメーカーのジエネシック インダストリーの研究所ですよ。数年間成果を挙げて無くて殆ど予算をもらえないと言う……。第一なぜ私が？ 私が居ない間はどうするのです？ もし敵襲があつたら？ 第一わざわざ私が出向く理由が分かりません」

「ミラーズ大佐不在の間は第一、第二機甲師団に非常召集。警戒に当たらせる。それにお前に直接出向いてほしいときつての願いだそうだ。なんでも直接、試作品の視察をしてほしいのだと」

背凭れに寄り掛かるガルス。

「説明はした。まだ何か？」

「……いえ。行きます」

「よし。それと、この資料に目を通しておけ」

「『火星圏重要機関施設に対してテロ活動を繰り返す武装集団アストレイについての見解』？ 何ですかこれは？」

「一応だ……一応」

「はあ……了解しました。一応」

グラムが部屋を出て行くのを見送ったガルスは、しばらくしてから受話器に手を伸ばした。

「例の資料は渡した。問題の部分は削除していたな？ ああ、問題ない……」

ガルスは受話器を置くと窓の外を眺めて呟く。

「……もっと別の容で……。いや、遅すぎたな……」

「翌日、火星オリンパス宇宙港」

翌日、グラムとエステルは二人は火星オリンパス宇宙港の特別ターミナルに到着し、ゲートからハイウェイ入り口に出た。

出るとすぐ、目の前に車が止まり、大柄な男が降りてきた。

「グラム、ミラーズ大佐ですね？ ベルセポリス兵装研究所の者です」

男は身分証を見せながら簡単な自己紹介を済ませると、二人の荷物をトラックに積み、グラム達を乗せた車を走らせた。

車の中でグラムが男に尋ねる。

「ベルセポリスは都市一つが全て研究施設と聞いたが？」

「はい。ベルセポリスは元々自治体の管理する都市でしたが、わが社が大戦で大破したドームを買い取り、研究施設として改修し、現在に至っております」

「施設まであとどれくらいで着く？」

「後、二時間ほどです」

彼は溜息をし、頬杖を突いて窓から外を眺める。

密閉型のハイウェイチューブの外に見えるのは、所々に点在する小さな都市のみで後は砂だけ。

時折見え隠れする巨大な物体 セカンドムーブ時に火星地表へ落着いた地球艦隊艦船の残骸も、手付かずのままだ。

セカンドムーブが火星に残した爪痕。敵の爪痕。

謎の無人兵器群“ヴァリアンタス”、その正体については人々の憶測が耐えない。

どこかの軍の極秘実験兵器が暴走したものだと言くものもあれば、

太陽系内にある未発見の古代文明から湧き出てきたものだという意見や、はたまた外宇宙からきた来訪者という者さえ存在する。

仮に研究室生まれだったとして、今となつてはその研究室は大戦時に出来たクレーターと瓦礫と軍の隠蔽体質の奥深くに眠り、外宇宙だとしたらなおさらその発祥の地を見つけることは困難だろう。

人類は火星圏防衛ラインと地球圏絶対防衛ラインを構築し、火星から監視の目を光らし、サンプルを採取し記録を丹念に追いヴァリアントの正体や分布について調査している。

彼らの動向や正体についていまだ探しあぐねている。

自己増殖する兵器。ヴァリアント。

太陽系をして人類の版図足らしめることを拒む存在。

彼らの2度目の出現がなければ、火星はいうに及ばず、太陽系の惑星という惑星はもはや人類の版図となつていたはずである。

しかもこの惑星のテラフォーミングは大戦で一時中止しており、いまだに環境調整中。

地球と同じ環境になるのはあと10年後である。

もう、幾つものゲートをくぐつた。

そのゲートは全て武装したMAPS（強化外骨格）を装着した警備員が警備していた。

予算が無いとは言え、警備だけはちゃんとしているらしい。

「着きました」

巨大な建築物の密集する都市に入ると、男は一際大きなタワーの足元にあるエントランスの前に車を止めた。

車を降りる二人。

すると、一人の女性が駆け寄つてきた。二十代前半位の若い女性だ。

「グラムIIミラーズ大佐ですね？ お待ちしておりました！ こちらへ」

二人を建物の中に招き入れる女性。

二人は彼女の案内で、エントランスフロア正面の一際大きなエレベーターに乗り、地下階へ。

下り続けるエレベーター。すでに何十フロアも通過し、やがて最下層。

開くエレベーターゲート。目の前に現れる大きな扉。彼女はカードキーで扉を開けた。

目の前に広がる研究室。そこには大きなスクリーンやたくさんの機器が並んでいて、大勢の研究員がコンソールのキーを叩いている。「グラム」ミラーズ大佐、ようこそ、わがベルセポリス兵装研究所へ」

女性は微笑みながらグラムと握手。

「では早速、新型特殊粒子砲の説明をさせていただきます」

説明を始めようとする女性を、グラムが止める。

「ちょっと待つてほしい。「グレン」ヴェジエ博士」は何処に？」
くすりと笑う女性。

「自己紹介が遅れて、申し訳ありません。始めまして。グレン」ヴェジエです。もしかして男性だと思っていましたか？」

「……」

図星を突かれ、彼は無言で答える。

「初対面だと、皆さん男性だと思っているみたいなんです。気にしていませんから大丈夫ですよ？」

グレンは、結った後ろ髪を左右に揺らしながら、くると向きを変え、コンピューターのキーを叩いた。

「では、説明の続きをさせていただきます。今回我々の開発した新型特殊粒子砲は機構内で生成したハドロン系重粒子をコヒーレント化し、射出する兵器です。共鳴粒子は命中した物質を粉碎し崩壊させるいわゆる徹甲炸裂弾です。名をつけるとすれば『コヒーレントカノン』ですね。これが完成すれば、ヴァリアントの高密度装甲も撃ち抜けます。現在はまだ試作段階ですので、チャージに時間がか

かり、また消費電力も膨大で外部電源を有線で接続しています。何かご質問は？」

「火器としてはどれくらいのサイズだ？」

「数値にしますと、全長25m、重量、40tです」

「これはHMAも使用できる火器として設計しているのか？」

「はい。そうですか？」

「それにしても大きすぎるな。ディカイオスなら未だしもHMAでは、構えて撃つのが精一杯だ。持って移動なんてできない」

「試作段階ではこの大きさになってしまいました。改良が進めばさらに小型化できるはず。まだ何かご質問がお有りでしたら」

「いや、以上だ」

「では、地上ドーム外の試射場へどうぞ。準備は整っております。

実験機は単座式ですので、大佐の支援ユニットにはこちらから遠隔でリンクします。名前は確か……」

「エステルだ」

「……え？ ええ、はい……」

「……？ どうした、博士」

「いえ。実験を続けましょう！」

無言のまま直通のエレベーターに乗り、試射場に向かうグラムを見送り、グレンは大きいため息をついた。

「何してんだろ……私」

「主任。実験機とのリンク、開始します」

「いいわ。エステル、お願い」

エステルはグレンの言葉に従い、イクサミコ用のコネクターストについた。

非接触コネクタ開始。研究室メインコンピュータと、エステルのバイオコンピュータを接続、リンクシーケンス。

高速リンク。

「エステルの調子は？」

「プロセス、01から38までクリアー。驚異的な処理能力です！」

「彼女ならこのシステムを2分で掌握できるわね」
グレンは、画面を見ながらそう呟いた。

C a p t u r e 2

「リンク完了しました」

グレンはエステルに座る、イクサミコ専用のシートに近づき、彼女に話しかける。

「今ならもう話せるわよね？」

「はい」

「あなた凄いわね！ 800のプロセスをたったの30秒で完了するなんて」

「わたしの頭脳を開発した技術者達の功績です」

「でもあなたは、こちらで預かっているデータ以上のスペックを發揮しているわ。ねえ、あなたの名前は彼がつけてくれたの？」

「はい。わたしの正式名は“独立型戦闘支援Aユニットヒューマンノイドタイプイクサミコバージョン000”ですが、彼が……ミラーズ大佐が“エステル”と言うわたしだけの名前をつけてくれました。本来、兵器のわたしに固有名は不要でした。それでも大佐はわたしを一人の仲間として、名前をつけてくれました。ですから、“エステル”。これがわたしの名です」

「いいなあ……」

「何がですか？」

「恋人みたいで」

エステルは、一瞬黙ってから。

「からかわないでください。……イクサミコは人間に従うようには作られています。愛するようには作られていません」

そう言う彼女。

突然、グラムからのコールがかかった。

「こちら実験機、ミラーズだ。スタンバイ完了。砲へのエネルギーをくれ」

「了解。主任、開始許可を」
「姿勢を正すグレン。」

「いいわ。実験開始」

技術者達が、一斉に作業を始める。

「コヒーレントカノンへの送電開始。一号ライン通電、二号ライン通電、三号ライン通電開始」

「全冷却システム正常稼動中」

「共鳴フィールド展開開始」

「チャンバー内真空化」

「共鳴開始」

「臨界まで後20カウント……、臨界点突破。いつでも撃てます。主任、発射許可を」

「分っているわ。ミラーズ大佐。砲のシステムをエステルに預けま
す。いつでも発射できます」

「こちらミラーズ、了解。エステル、弾道計算は済んでいるな？」

「はい。全て完了しています。目標は1000m先のメタニウム単
一装甲板です。厚さ100?、RHA換算700?。射撃官制は手
動です」

「了解。3カウントで発射する。3、2、1、発射」

巨大な砲身から共鳴粒子弾が発射された。

粒子弾は真っ直ぐ目標に向かい、粉碎、貫通。様々な波長の電磁
波と光を放射し、目標を完全に破壊した。

「着弾確認。砲は目標を破壊。繰り返し。目標を破壊」

「どうです?ミラーズ大佐」

「誇らしげな表情のグレン。」

「良い威力だ。後は小型化とチャージのスピードだな」

「改良が進めば、問題ないでしょう。実験は終了です。帰還してく
ださい」

「わかった」

移動用のプラットフォームに乗ろうとしたそのとき、グラムは突然、HMAを停めた。

「大佐？ どうしました？」

「最近この近辺でテロが多発していると、来る前聞いたんだが……」

「……え？ ええ。そうですね、それが何か？」

「最新の兵器を外で試験している今……、今こそ格好のタイミングとは思わないか？」

「ええ。まあそうですね……、まさか、うちは目標になるほど有名では……」

「いや、何かが近づいて来る」

グラムは火星の荒野に向かい、HMAの目を向けた。何も見えない、荒涼とした大地。

その時、管制室のレーダーに点が映った。

「主任！ 試射場前方80kmに複数の熱源体か！」

「なんですか？」

管制室に緊張が走る。

「HMA h18機が高速で接近中！」

グレンは慌ててグラムに連絡する。

「大佐！ 見えていますか？ 大佐！！」

混乱して何度もコール。

「聞こえてる。聞こえている！ 落ち着け！ それより迎撃はどうした？」

グレンをなだめ、冷静に問いただすグラム。

「ここには迎撃用の武装なんて殆ど無いんです！ あるのは機銃くらいで……」

グラムは呆れ気味に心の中でつぶやいた。

「（なんだそれは……）」

「大佐！ いったいどうしたら！」

泣きそうな声でグレンが叫んだ。

「いいか？ まず落ち着け。それから砲のエネルギーシステムをエステルから切り離せ。チャージはそっちのシステムでしろ。砲はあと何発撃てる？」

「三発は撃てますが今からのチャージでは一発しか…」

「よし。チャージしろ。それから、エステル！」

「はい」

「砲を撃つたらHMAのOSを戦闘用に書き換える。いまから書けるか？」

「はい。できます。格闘型の機甲体術ベシックでよろしいですか？」

「ああ。やってくれ」

「了解。その際OSをカットします」
準備を始めるエステル。

外では敵の編隊にむかって機銃が発射され始めた。

貧弱な攻撃だが、時間稼ぎにはなる。

「敵機接近！」

C a p t u r e 3

「隊長！ 俺に先行させてくれ！」

「だあめだ！ だめだ！ 編隊を崩すな！ さっきから嫌なエネルギー反応がある！ いくらボロ研究所でも何が出てくるか分んねえぞ！？」

「こんな機銃しかない施設のどこに、HMAと闘える武器が有るって言うんだ！ 俺は行くぜ！」

「おい！ 待て！」

血気盛んなパイロットが乗っている様でしきりに先行を求めている寮機を、隊長機らしき機体のパイロットは制止するが、パイロット

トはスラストターをさらに吹かし機体を加速。制止の声を無視して先
行して行く。

その時突然の警告音、高エネルギー反応？

「え……？」

先行した機体が、突然跡形も無く消し飛んだ。

「ビームキャノンか！？ いや……熱量が消えた。全機、砲撃は力
ンバンだ！ 全速で突っ込め！」

次の攻撃が無い事を悟り、高速で迫る7機のHMA。
砲を撃つ時間はもう無い。

「よし。エステル。OSを再構築しろ」

「了解」

エステルがOSを再構築し始める。

「でも大佐！ いくらエステルでも今からOSを再構築するのは不
可能よ！」

「主任！ エステルのシステムが……！」

「なに？ 一体どうしたの！？」

画面を見たグレンは驚愕した。

画面を流れる、見たことのない、駆動制御プログラム。ベースは
h1規格のOSだが、これは確実に別物。

エステルはOSを再構築どころか一から作り直していたのだ。

「なんなのこれ……彼女の能力はモンスターよ！」

戦慄するグレンを無視するように、エステルは言う。

「戦闘プログラム構築。アップロード開始」

グラムの乗るHMAに戦闘プログラムが送りこまれる。

だが、その間にも敵機が距離を縮めてくる。

「隊長！ 前方に実験用HMAが1機。でも起動してねえらしい」

「よしよしよし。このまま全速だ！」

「敵機3kmまで接近！」

敵のHMAはすぐそばまで近づいていた。

「プログラム着床。起動」

HMAが唸り声と共に再起動する。

グラムは側にあつた鉄骨を蹴り上げて掴むと、凄まじい勢いで走り出した。

「敵HMA起動！ 撃て！」

敵機がアサルトライフルをグラムに向かって撃った。

グラムは鉄骨を地面に突き、丁度、棒高跳びの様に高く舞い上がり、ライフルの弾丸をかわし、そのまま敵機の頭を踏み潰して前方にジャンプ。

振り上げた鉄骨で前方にいたHMAの頭と胴体を一緒に叩き潰して、他のHMAの撃つて来る弾丸を、今潰したHMAを盾にして防ぐ。

鉄屑となったHMAを敵機に向かい蹴り飛ばし、それをデコイに1機に向かつて素早く横から接近。

気付いた敵機はグラムに向かってライフルを向けるが、グラムはさきほどのHMAから奪った単分子ナイフでライフルを切り捨てた。そしてそのまま鉄骨で殴りつけ止めを刺すと、敵の隊長機に向かい突撃。

機体を回転させ、渾身の力で撃ちこむ。

敵隊長機は機体を素早く大きく駆動させ、鉄骨を回避。

鉄骨が空を切る。

「こいつの回避動作…知っているぞ…」

グラムには見覚えのある動きだった。

「こいつの攻めのキレ…覚えてるぜ！」

敵機が右手に装備されたパイルバンカーを撃ちこんできた。

グラムはパイルを避け敵機の腕に沿って機体を回転させて、鉄骨で殴り付ける。

鉄骨が、敵機の肩装甲をかすめ、装甲がへこむ。

「この動き！ やっぱ機甲体術か！」

「一瞬だが見えたぞ…炎と門のエンブレム…」

機体がすれ違う間に二人は互いを感じた。

もう一度、正面からぶつかり合う。

双方ともに攻撃を繰り返すが攻撃は当たる事無く、寸止めされていた。

グラムが無線回線を開く。

「久しぶりだな…『ヘルゲート・ビンセント』」

「それはこつちの台詞だ。『ヘルファイヤー・グラム』」

「なに、二人は知り合いなの？」

グレンはきよとした顔をしながら、エステルに尋ねた。

「ねえ、エステル。『ヘルゲート・ビンセント』ってだれ？」

「『ヘルゲート・ビンセント』。本名ビンセント『キングストン。』

職業、HMAパイロット。前大戦でアフリカ戦線に傭兵として参加同戦線に参加していたグラム『ミラーズの部隊とチームを組み、その類まれな戦闘能力で大佐と並び、『地獄の門のビンセント』、『地獄の炎のグラム』と言われた人物です」

「へえ。じゃあ大佐とは友達なの？」

「さあ……」

珍しく不確定な返事を返すエステル。

不思議に思い、グラムとビンセントの会話に耳をすめますが、しかし二人は無言。

先に口を開いたのはグラムだった。

「しばらく見ない間に、まさか傭兵からテロリストに成り下がっていたとはな」

「テロリストじゃねえ！ 今でも傭兵だ！ ったく、おまえこそまだ軍にいたのか？」

「いまは軍ではなくサンヘドリンにいる」

「けっ！ あのいけすかねえ連中か……」

「誰からの指示だ。何が目的だ。この砲か？」

ビンセントが一つため息をつく。

「んな事言えるわけねえだろ。第一、俺がおまえに言つと思つか？」
「思わん」

グラムは即答した。

「俺もお前に質問が有る」

少々恨みのこもった声。

「お前……俺の大事にしたたウイスキー、勝手に持っていっただろ！」

「……は？」

突然のとぼけた質問に気が抜ける。

「『は？』じゃねえよ！ おまえ俺の酒、隊が帰還する時勝手に持って行つただろ！ そのせいで俺は何度戦場で死にかけた事か！」

溜息をつくグラム。

「おまえ何を言っているんだ？」

一瞬の沈黙。

「あれは賭けで負けた時のだろ。自分が賭けて負けたじゃないか……」
「そうだったか？」

気の抜けた返事をくり返すビンセントとグラムに、管制室にいた者達は呆然としていた。

「さて、ビンセント。この状況どうする？」

ビンセントに向かって殺気を発するグラム。

「この状況じゃどつちかが死ぬな……」

確かに後ほんの少しの動作で勝敗が決まる状況。

二人の間に緊張が走る。

一触即発の状態の中、先に腕をおろしたのはビンセントだった。

「やめだ、やめ！こんな人間と喧嘩して勝てるわけがない。おい

！全機！撤収だ！」

グラムの機に背を向けるビンセント。だが他のHMAのパイロットは納得できていなかった。

「野郎！」

1機のHMAがグラムのHMAに襲い掛かろうとする。

しかし。

「止めとけ！」

パイロットを制止するビンセント。

「おまえら、やるのは勝手だがな、皆殺しにされるだけだぜ……？」
自然とパイロット達の脳裏に今までの情景がフラッシュバックし、襲い掛かる勇気をろうそくの火の様に消し去った。

足早に去って行く傭兵達のHMA。その中、ビンセントのHMAが足を止めた。

「おい、グラム。またどこかで逢うかもな……」

そう言っただけで火星の荒野に消えていったビンセント。

グラムはしばらくビンセントのHMAの背中を見つめてから向きを変え、エレベーターに向かった。

「博士」

「は、はい！」

「実験は成功だ。帰還する」

「ご苦労だったな。ミラーズ」

ガルスが帰還したグラムにこう言うと、彼は苛立った口調で答えた。

「ええ。資料通りテロにも巻き込まれましたよ」

「そうか。それは災難だったな」

「あの資料には載せなかった事が有るんじゃないですか？」

グラムはガルスが知っていて、自分を行かせた事を分っていた。ガルスのやった事をグラムは何もかも気に入らなかった。
「知らない」

ガルスは冷淡な口調で否定。
「グラムは奥歯で苦虫を噛まされた様な気分だった。あれから1ヶ月。」

あの事を思い出しただけで、胸のむかつく思いがする。資料にちゃんとビンセントの事を載せていれば、HMAのパイロットは無駄に死ぬ事は無かっただろう。

そんなことを考えながら、朝、彼は身支度を整える。髪をかき上げ、ため息をつく。
そのとき、部屋のチャイムが鳴った。

誰だ、こんな時間に…
ドアを開ける。
その瞬間、グラムの目が点になった。
そこにいたのは紛れも無く…

「グレン…？」
彼女は、満面の笑みで挨拶。

「おはようございます、大佐！」

「な、なぜここに…？」
「エステルに聞いて」

「あ、いや、そういうことではなくてな…？　ここで何をしている？」

「うちの研究所、あの後解体になったんです…あまり利益を挙げない研究所でしたし…それでここに出向する事に決めたんです」

呆然とするグラムをよそに、彼女は小さく敬礼。

「本日、ジェネシック インダストリーからサンヘドリン技術開発部に出向して参りました。グレン「ヴェジエです！宜しくお願います！」

彼女はそう言って微笑んだ。

「ACT 3」終

ACT 4 友（前書き）

突然のミッションに抜擢されたレイズ、そして、08特機的面々。
しかしそのミッションには、恐るべき真実が隠されていた。

ACT 4 友

Captur 1

月に一度の退屈な情報交換会を終え、会議室から出てきたガルスの前に、突然、一人の男が塞がった。

細身で、面長な色白の男。

「ケステイウス」ガルス中将ですね？」

男の顔を見据えるガルス。

「なんだ？」

「始めまして。ジェネシック・インダストリーのロイ」マッケンジです。実は是非とも中将殿にお願いしたい事があるのですが……」

そう言つてガルスに分厚い資料を渡すロイ。

その資料を見たガルスは思わず目を見張った。

「これは……!？」

男はニヤリと微笑んだ。

「と、言うわけでお前を呼んだのだが……なんだ？ その顔は……」
司令官室に呼び出され、明らかに嫌な顔をするグラム。

「……また、小間使いですか？」

ガルスが一つため息をついた。

「私がいつお前を小間使いに使った……？ それにお前が行けとは言っていない」

「では？」

「誰か一人、良いHMAパイロットは知っているか？」

「それなら一人、若いパイロットを知っています」

「そうか」

「名前は……」

宇宙

先人は『人は重力に抱かれて生きている』と言ったが、今ならそれを確かに実感できる。

月軌道上一機の機動装甲。HMA-h2C/B・ストライクウルフ。

パイロットはレイズ・ザナルティ軍曹。

「そうか、狼はあれに向かって吠えていたのか……」

“静かの海”を半分囲む様に作られた月面基地群は海の“沖”に向かつて延び、ちょうど犬が吠える口の様に見える。

「狼……ですか？」

サラがレイズの言葉に反応した。答える彼。

「そう、狼。子供の頃、よく動物図鑑をみてね。狼は満月になると月に向かって吠えるんだって。もう大昔に絶滅したけど……」

「確かに絶滅していますが、この基地が建設されるより前にですね……」

「そうだったね……」

とほけるレイズ。

“彼女達”は高度なAIを搭載している。その上可愛い。暇つぶしに話をするには格好の相手だ。

暫く会話が続く。

ここに来る前の、地球での記憶がリフレインする。

僕は突然司令官室に呼び出され、これまた突然、指令を受けた。

『明日、08特機と共に月へ行け』

これが指令だった。

あの戦闘から一ヶ月。訓練と自己鍛錬の日々の中で、突然、唐突に任務が飛び込んできた。

この任務に僕を推薦したのはミラーズ大佐だった。

僕の任務は、施設に設置されているであろう防衛機構を強制的に排除すること。特機部隊の任務は大昔に突然廃棄された月の裏側に在る研究施設の探索、及び重要物資の回収。回収後は施設を爆破放棄するらしい。

こんな大昔の施設がなぜ廃棄されたか、何があるかは知らないが、特機部隊の連中は張り切っていた。

「そういえば特機部隊の連中はいい奴ばかりだったな」

「レイズ軍曹。『いい奴』とはどのような人を指すのですか？」

小難しい質問をサラがしてきた。

「そうだなあ……もう一度会いたいと思える人間、かな」

もう一度リフレイン。

出発前に隊に挨拶したな。

隊の連中は皆、気さくで明るい奴ばかりだった。

特にリックは人懐っこくて昨日一緒に飲んだっけ。

ヴァン隊長（苗字なんだっけ？）はいかにも『部下に信頼されている上司』と言う感じだった。

「みんな張り切ってるだろ？」

ヴァン隊長が僕に話しかけてきた。

「俺たちみたいな装甲歩兵部隊は実際、任務なんてのは後方支援。MAPSじゃヴァリアントなんて化け物に太刀打ちできない。闘志鬱積状態さ。それで今回の任務だろ？ 戦える事が嬉しいんじゃない。自分たちが必要とされている事が嬉しいんだ」

この言葉は僕の中でいまだに響いている。

突然のコール音がレイズの意識を引き戻した。
レイズ機に近づく一機のドロップシップ。

無線回線に入電。

「よう、レイズ。頼むぜ」

特機部隊を乗せたドロップシップ（揚陸艇）だ。

「軍曹、状況を開始せよ」

「了解」

スラスターを噴射。静止軌道から進入軌道へ。

「サラ、アーマメント、爆装ユニット起動！ FCSエンゲージ！」

「了解」

ストライクウルフの背面にマウントされた爆装ユニットが息を吹き返す。

増設されたスラスターで加速。レイズ機の後ろからドロップシップが追従する。月の表側を抜けて裏側へ。

「目標確認」

薄べつたい、貼り付けたような五角形の建造物。目標施設。

大出力の対地レーダーを照射。レーダー画面に、赤いカーソルが複数。

「目標確認。対空砲、15。砲撃、来ます」

施設の周りでチカチカとした光。レイズはHMAをドロップシップの前に位置させ、対空砲の射線を大型シールドで遮る。

「あぶね、あぶね」

一瞬の反応。リックが毒づく。

「おいおい……、頼むぜ？」

「分かってますって」

砲台をロックオン。

ミサイルで入念にロック、ロック、ロック。

レイズはトリガーを引いた。爆装ユニットから発射された10発の高運動エネルギー対地ミサイルが、砲台を破壊する。

「距離が近いな。サブを使おう」

「了解。切り替えます」

爆装ユニット側面のガンベイに設置されたアーマメントユニットに切り替え。パルスレーザーカノン。

レーザーが次々に照射され、砲台を破壊していく。

「対空砲沈黙。着地できます」

「よし！ 揚陸艇、突入できます！ 行ってください！」

後方から出るドロップシップ。

「行ってくるぜ」

リックのお気楽な声を聞きながら、レイズは機体を反転させ、施設の真上に静止させた。

C a p t u r e 1

「ゲートだ。着地体制に入る」

特機部隊のドロップシップは施設に近づき、ゲートの前に静止。自動機銃を起動して周囲を警戒しつつ、ゲートに近づく。

ゲートのセンサーが、ドロップシップの接近を感知し、気密ゲートがオープン。

シップは、ゲート内のポートにゆっくりと着陸した。

「総員、装弾！」

ヴァン隊長が、気を引き締めて号令を出す。

総員、火器のコックを引き装弾。警戒態勢。

「08、カーゴを開けるぞ」

ドロップシップのパイロットの声。続いて、カーゴのランプが開く。

「総員、降艇！」

強化外骨格に身を包んだ兵士たちが揚陸艇から降りてくる。

隊長のヴァン大尉。前衛のダン、ミン、リック、タゴール。電子戦のE・J。後衛のダニー、エミの計八名。

12.7mmアサルトライフルを構え、フォーメーション。周囲を警戒。敵性反応は無し。

「よし。リック、ミン、ダン、ポイントマン」

彼らが回収を命じられた『重要物』とはこのメインコンピューターに保存されているデータだ。大昔のそのデータが『彼等』は欲しいらしい。

「E・J、端末の位置は？」

E・Jは電子機器のスペシャリストだ。

彼は自前の端末にコードを入力しながら呟いた。

「うわ……古りい…… ゲートコード入力と……、あれ？ サブコンしか稼動してないな」

入力完了。E・Jは端末をたたきながら答える。

「メインコンピューター以外の端末からデータの引き出しは出来ないし、今はサブコンしか稼動してないから、最下層のセントラルターミナルまで行く必要があるよ」

「分かった。セントラルまでは？」

E・Jがマップを検索。

「この通路の先、5ブロック先に直通エレベーターがあるから、そこから」

「よし、いくぞ」

先ほど、指名をうけたリック、ミン、ダンを先頭に部隊はエレベーターに向かった。

セントラルへ向かう特機の前に現れたのは、1tコンテナが二つは入る大きなエレベーターだった。

このエレベーターが、セントラルへ向かうもつとも近道なのだ。

「よし、E・J、開けてくれ」

E・Jが端末接続。

「あれ？」

E・Jが素っ頓狂な声を上げた。「どうした」とヴァン隊長が問う。

「エレベーターのくせにゲートがロックされてる」

「開くか？」とヴァン隊長。

E・Jは、任せると言わんばかりに、端末を高速で叩く。

キーコード破壊、再構築、ロック解除コマンド入力。

あっという間にゲートが開く。

そのときだ。

「E・J!!! 伏せろ!!!」

突然、ヴァンが叫んだ。

エレベーターの奥の、床に座り込み、壁にもたれかかる人影。素早く、前衛三人がライフルを向ける。

MAPSのセンサーが目標を自動サーチ。

生体反応なし。熱反応もなし。死体だ。ガビガビに干乾びている。

三人はライフルを下ろし、安全を確認してから隊はエレベーター内に入った。

行き先は最下層。メインコンピューター、セントラルターミナル階を選択。ゲートが閉まり一瞬の振動。そのあとは極めて静かに降下。

エレベーターに乗っている間、ヴァン隊長は死体を調べていた。

「（完全に白骨化している。かなり昔に死んだようだな……）」

その死体の胸にはIDカード。

「（ジャン・クロフォード主任研究員……）」

ヴァンはそのカードを取ると、死体のそばにあった物体に気がついた。

「（拳銃か…？）」

良く見ると死体のこめかみには穴が穿たれていた。おそらくこの拳銃で自殺したのだろう。

「（なぜ、自殺なんて…）」

遺体は、ロックされたエレベーターの中で、自ら果てていた。

廃棄された研究所に、自殺者。どう考えても、ここは普通の研究施設ではない。

ヴァン隊長が、そう考えている間に、エレベーターは最下層に到着した。

エレベーターのゲートが開き、目の前に巨大なコンピューターユニットが現れる。

「隊長、最下層です」

「よし、E・J、データの引き出し開始。それ以外は爆破の用意」
「了解」

E・Jはメインコンピューターに端末を接続。

「OK、電源ライン接続。メインコンピューター起動！」
手際よく作業を済ませるE・J。リックとミンは持ってきていた大規模施設破壊用の特殊爆弾をセットしていた。

「解除コード入力つと…」

「あとはタイマー起動だけ…E・J、そっちはどう？」

「うん、もう終わる」

E・Jに近づくヴァン。

「E・J、こここのコンピューターはAIを積んでるか？」

「もちろん」

「話せるか？」

「…？ まあ今なら大丈夫だよ」

「よし」

ヴァンは巨大なコンピューターコアに向かって話し始めた。

「おい、コンピューター。聞こえているか？」

「はい」

コンピューターは室内のスピーカーを通して返事をしてきた。

「お前は？」

「はい、私は当施設の中央管理機構、第8世代人工知性体・HALです」

ヴァン隊長は、HALに問う。

「質問だ、HAL。この施設は何の研究施設だ？」

「機密に反さない範囲でお答えします。ナノマシン、およびナノマシン集合体の研究です」

「何のナノマシンだ？」

「お答えできません」

「ではナノマシン集合体とは？」

「お答えできません」

重要なことは何も話さない。

「では、ここはなぜ廃棄された？」

「事故です。施設内で重大な事故があり、有害物質が漏れ出しました」

「有害物質とは？」

「ナノマシンです」

騒然とする一同。

「…そのナノマシンは空気中にもあるのか？」

「いえ、空気中には存在しません。ナノマシンは単体で生存できません。群体を築き、安定できる場所を探します」

「安定できる場所とは？」

「炭素、水素、リン等の分子集合体です」

「（炭素？ 水素？）」

ヴァンは少し考えた。

「機械の中か」

「はい」

「生物の中も、か……?」

「はい」

「生物の場合はどうなる?」

「死亡します。死亡したその後のデータはありません」

「機械の場合は?」

「機械の場合は、回路を侵蝕し占拠します。そ、そ、そして、二重構造、を変化、させさせ、てて……」

突然、変調をきたすHAL。

「リック、ミン…起爆タイマー起動! 全員急いで撤収だ!」

起爆タイマーを起動させ、全員いそいでエレベーターに乗った。

「隊長! 一体どういうことですか?」

「ナノマシン集合体……あのコンピューターも侵蝕されていたんだよ!」

「ナノマシン集合体って何ですか!?!」

「どこの誰だか知らないが、ふざけやがって……ここで研究されていたのは『ヴァリアンタス』だよ!」

驚愕とする一同を乗せて、エレベーターは上の階を目指した。

C a p t u r e 3

「リック達大丈夫かなあ……」

心配そうな面持ちのレイズ。

「大丈夫ですよ…レイズ軍曹。彼らもプロですし」

サラはレイズに、安心するように言った。

「でも、もしリック達に何かあつたら……」

不安な表情のレイズ。

そんな彼を見て、サラは眉を曇らせた。

「しかしヴァリアント関係の研究施設は全て統合体科学院の厳重な管理下にあるはずですよ！ 事故なんてあったら……！」

エレベーターに乗り込んだヴァン達08特機は、この研究所の異常さに騒然としていた。

確かに、今ミンが言ったように、ナノマシンの漏出という大事故が起きた場合、事態は急を要する大事件となる。

だが、そのような知らせもニュースも、何も無いのが事実である。隠蔽されたのか、それとも大した事故とはならなかったのか……。否……。事実、一人の人間が変死しているこの事案は、単純な事故などではない。

そう考えると、やはり……

「あれ？ このエレベーター、2165年製って書いてある……」
リックが、それを見つけた次の瞬間、彼らに乗せてスムーズに動いていたエレベーターが突然、軋むような音と振動と共に止まった。
「まずい……」

次の瞬間、凄まじい轟音と共に落下を始めるエレベーター。

思わず声を上げる一同。

慣性で、身体が持ち上がる。

ヴァンがブレードを抜き、天井を切り抜く。

「全員脱出！」

M A P Sの背面に装着されたスラスターを噴射。

天井から脱出。スラスターを全開で噴射し、エレベーターが最下層に落下する衝撃から急いで逃げる。

「E・J！ ゲートは！？」

「この状態じゃ無理……！」

「ちっ！」

ヴァンはライフルの下部に装備されたロケットランチャーを発射。発射されたロケット弾がエレベーターゲートを吹き飛ばす。

「破片いくぞ！」

爆発の衝撃と共に破片が降り注ぎ、その一つがE・Jに掠った。

「うあ！」

姿勢を崩すE・J。

「E・J！」

それを見たリックは咄嗟にE・Jの腕を掴んだ。

重量バランスが狂い、姿勢を崩すリック。咄嗟にスラスターの噴射バランスを調整。

駒運動をしながら上昇していくリックとE・J。

次の瞬間、エレベーターシャフトの最下層部から凄まじい轟音と衝撃が到達。部隊全員は寸でのところで通路に避難した。

「はあ…はあ…全員居るか…？」

「ミン、無事です」

「ダン、生きてます」

「タゴール、無事です」

「E・J、居るよ」

「ダニー、無事です」

「エミ、居ます」

「リックは…？」

後ろの方でふらふらと手を振るリック。

「大丈夫か！？」

「うう…」

「おい！」

「吐きそう…」

「大丈夫みたいだな…」

ヴァンは全員の無事を確認。

「E・J、爆発まであと何分だ？」

「あと、15分…!」

「よし!急ぐぞ! エミ、ドロップシップに通信。脱出の準備!」
「了解」

エミが、無線装置でドロップシップに通信。

「こちら08、シップ、聞こえるか?」

雑音ばかりの返信。何も聞こえない。

「…? こちら08、聞こえるか?」

やはり応答は無い。

「隊長: シップからの応答がありません…」

「通信状況は?」

「ジャミングも通信障害もありません…」

「とにかく急ごう…!」

隊は急いでドロップシップの待つ発着ポートに急行した。

爆発のタイムリミットが迫っている。そして、何よりこのコンピューターはナノマシンに侵蝕されている。何が起るか分からない。一秒でも早く『ここ』を脱出した方が懸命だ。

あと、2ブロックで発着ポートに着く。

だが突然、全速力で走る隊員達は皆脚を止めた。

「前方の左右通路から動体反応あり!」

「数は?」

「右から3、左から2…いや…増えました!右から5!左から4!
まだ増える!」

「くそ!何なんだ! E・J! 爆発までは!?」

「あと9分!」

「全員戦闘準備だ…!」

通路に向けライフルを照準。

「来ます!」

ぺたぺたと有機質な足音を立てながら現れた『それ』は、人の形をしていながら確実に人ではなく、青白い肌(装甲?外皮?)をしており、だらりと伸びた腕や異常に長い首と、人間をかけ離れたグ

口テスクな姿をしている。

「何だ！ こいつら！？ ガードロボットか！？」

「いやロボットじゃない……！！ 生体反応がある！」

「じゃあこいつらは一体……！？」

ふと気づく。

群れの中に、見慣れた戦闘服を着た奴が居る。

それはまさしく……

「おい、あれ、ジエネシック社の戦闘服じゃないか？」

リックがそう言った瞬間、そのヒトガタの物はカクカクと首を動

かし、「ぎゅいああああ」と奇声を発しながらゆっくりと腕をヴァ

ン達に向けた。

「全員撃てええ……！！」

ライフルを発砲。

50口径カービンから吐き出される徹甲弾がその『ヒトガタ』を
引き裂いていく。

赤なのか紫なのか分からない色の血を噴出し、耳障りな奇声を上
げて倒れる『それ』。その全てを『射殺』し、隊は再びポートに向
かって急いで移動し始めた。

「ちくしょう！ 何なんだ！ 一体ありやあ……！！」

リックは言葉に出来ない生理的な恐怖感と苛立ちで思わず叫んで
いた。

「あれは人間だよ……」

「E・J、おまえ今なんて言った……？」

自分の耳を疑うリック。

「だから、あれはこの人間、この研究員さ。マザーコンピュー
ターはナノマシンに侵入された生物は死ぬと言っていたけどそれだ
けじゃない……。死ぬのは寄生された生物の意識だけ。体内のナノ
マシンは神経組織を侵蝕再構成して、自分のネットワークを形作る。
そして、珪素などの元素を用いて宿主の体構造を作り変える。戦闘
に適した形にね。あの主任研究員はその前に自分で命を絶った。生

きた屍になる前に……」

「対人ヴァリアント……」

ヴァンが反応して答える。

「そう。大戦末期のファーストムーブ時に人サイズヴァリアントは確認されているんだ。それに操られた人間もね。隊長は知っているよね？」

「ああ、確かに戦ったことがある。とんでもない化け物さ。だが俺たちが戦った奴らとは姿がまったく違う！」

「こいつらは未だ第一段階なんだよ……！」

「それじゃあ、あのジェネシックの連中は!？」

ヴァン隊長が叫ぶ。

「彼らが失敗したから、俺達がここに居るんだよ!」

次の瞬間、またもやMAPSのレーダーに動体反応。

「上前方!数3!」

天井の通気抗のネットを音を立てて破壊し、さつきと同じヒトガタが出現。ヒトガタの腕が展開し、何かを撃ってきた。

キンツ、という音を立て、MAPSの装甲に何か当たる。

「なんだ!? 何か撃ってきたぞ?」

それは石灰質の鋭い矢のような物だった。

MAPSセンサーが、矢の組成を分析。組成、炭酸カルシウム。

「うげ! 気持ち悪い! こいつら自分の体組織を撃ってやがる!」

リックはライフルのトリガーを引き、ヒトガタを撃った。

もう、発着ポートは目前。だが、隊員が見た物は……

「そんな……」

思わず声を漏らすエミ。

ドロップシップの周りに群がるヒトガタ。パイロットは、それに首をもぎ取られて息絶えていた。エンジンも破壊されている。

「ちくしょう!」

こちらに気づき飛び掛ってくるヒトガタたち。

隊員たちは最大の火力で応戦した。

相手の数は50以上。ライフルの弾丸はすぐに底を突いた。

「くそ！」

ヴァンはライフルを捨て、腰の後ろに付いたホルスターからショットバレルのショットガンを抜いた。

鋭いポンプ音のすぐあと、太いショットガン特有の銃声が響き、散弾がヒトガタの胴体に大きな穴を穿つ。

「爆発まで5分か……」

ヴァンは一つのことを覚悟した。それは隊の全員も同じだった。

Captur 4

「おかしい、特機からの定期連絡がない……」

基地の上に静止するストライクウルフ。それに乗ったレイズは、基地内の特機部隊からの連絡が無いことを非常に心配していた。

「レイズ軍曹、部隊から通信です」

思いがけず、部隊側から通信が入った。

「こちら503、レイズ！ 一体どうしたんですか！？」

無線にはノイズと銃声らしき音が混ざっていた。

「いいか、レイズ、よく聞け。我々は脱出を断念する。基地内にいた敵によってシップは破壊された！ お前は母艦に戻り、任務を全うしろ！ 俺達はこのままここに残る！」

レイズの表情が凍りついた。

「いえ冗談じゃ有りません！ あなた達を残して撤収するなんて！」

レイズは叫んだ。しかし。

「レイズ！ ザナルティ軍曹！ いいかよく聞け！ これは命令だ！ いまお前がここに戻ればお前も巻き込まれる！ これは、ヴァン！ ロックハマー大尉からの最初で最後の命令だ……！」

ヴァンの言葉に、レイズは奥歯をかみ締め、

「その命令は……聞けません！」

「レイズ軍曹！」

「もう！ 自分はもう、仲間を失いたくありません！」

レイズはそう言っつて、コントロールレバーを強く握り締める。

「サラ！ 機動推進制御起動！ 基地内部に突入する！」

「了解」

「絶対に死なせはしない！」

レイズの機体は静止軌道を外れ、直角に方向転換した。

一発の銃声を最後に、部隊は全ての銃器は弾薬を使い果たした。

しかし、周囲には未だに群れるヒトガタ。一体何人の人間が、変わり果てたのだろうか……。

「白兵戦でいくぞ！」

ヴァンたち隊員はブレードを握り締めた。

飛び掛るヒトガタたち。人間をはるかに超えた力で繰り出されるパンチなどを寸でかわし、腕を切り捨て、踏み足を出して胴を両断。ヒトガタの上半身がずるりと落ち、ぴくぴくと痙攣しながらぐずぐずと崩れていく。

爆発まであと三分足らず……

リックがつぶやく。

「だめだ、きりがねえ……」

どこからとも無く沸いてくる異形の物にMAPSの装甲は傷だらけになっていた。

爆発まであと二分……。その時、地面を伝って衝撃が、そして無

線にレイズの声が響いた。

「みんな、カーゴに入ってください！」

レイズの声に従い、シップのカーゴに向かう隊員たち。シップのカーゴは幸いにも酷い損傷を受けていなかった。

「全員脱出用意！」

叫ぶヴァン。ヴァンは刃がボロボロになったブレードを捨て、両腕を構える。

「第一機甲師団第一機装大隊第二中隊第四小队08特機隊長、ヴァン！ ロックハマー！ かかって来い雑魚ども！」

一人、先頭に立って戦うヴァン。隊員たちをカーゴに乗せるために彼は、一人で立ち向かった。

自分の顔面に向かって伸びる腕を掴んでそらし、思いっきり引くと同時に、肘を突き出す。装甲に覆われた肘部が直撃し、『ヒトガタ』の頭部が粉々に吹き飛ぶ。

全身にヒトガタの体液を浴びるヴァン隊長。

「レイズ！ 全員乗ったぞお！」

ヴァンの声に応え、レイズが動く。

「ゲートを開けます！」

レイズがHMAの脚部側面に装備された単分子ナイフを抜き、ゲートを切り開く。それと同時に、急激な気圧の変化で外に向かって衝撃波のような突風が吹きぬけた。宇宙空間に向かって放り出されるヒトガタたち。

「おわっつ！」

その時、ヴァンがバランスを崩して外に放り出されそうになった。「隊長！」

E・Jがヴァンの腕を掴む。

「ぬぎぎぎ！」

凄まじい突風と、MAPSの重量。E・Jが力を使い果たし、共に放り出されそうになったそのとき、リックとダンがE・Jを掴んだ。E・Jを思いっきり引っ張りカーゴの中にひき入れるリックと

ダン。

全員が乗ったことを確認したレイズは、HMAの右前腕に内蔵されたワイヤーを引き出し、シップを縛り、あまったワイヤーを手に巻きつける。

「サラ！ 全バーニア最大出力で脱出！」

「了解！」

バーニアが一気に推力を開放し、月面の砂埃を巻き上げてレイズ機は基地を離れる。

爆発まであと40秒！ その時。

「基地周囲に熱源！」

「なに！？」

最初に破壊したはずの対空砲台が次々に再生していく。ナノマシンの侵蝕によって性質を変化させられた砲台はレイズ機に向かって発砲を始めた。

緑色のビーム。レイズは気付く。

これは、ヴァリアントの……！？

爆発まであと20秒。

そのとき、数発のビームがレイズに迫った。

「爆装ユニット、パージ！」

切り離されるユニット。ユニットを楯にしてレイズは砲台からの攻撃を遮断。

宇宙空間に取り残されたユニットに砲台の光条が立て続けに命中。金属のプラズマと化し、大量に装備されたミサイル類に誘爆。瞬時に火の玉となった。

そして次の瞬間、基地内の爆弾に火が入った。

あちらこちらから閃光を発し始める基地。そして、バーティカルな光の柱を上げ巨大な衝撃波を発し基地は跡形も無く吹き飛んだ。

「……………」

長い沈黙が隊とレイズ達を包んだ。どれくらい沈黙していたか分からない。

長かったのか、それとも非常に短かったのか……

「レイズ……」

「はい……」

「やったぞ」

無線の後ろでは隊員たちの歓声が聞こえた。

「よくやった！ よくやったぞ！ レイズ軍曹！」

「はい……！」

目を潤ませるレイズ。

「軍曹、あとは帰還だ」

「ええ、分かってます！」

レイズは無線を母艦に接続。

「マザー、こちら503、任務完了。いまより帰還する」

レイズはそう言って、機体を母艦へと帰還させた。

「レイズ」ザナルティール軍曹に第一機甲師団第一機甲大隊第一機兵中隊第五小队からの異動を命ずる」

地球に帰ったレイズは司令官室に呼び出され、突然この言葉を浴びせかけられた。

しかしレイズは、何がなんだか分らないような表情で、口をあんぐりと開いた。

「不服か？」と、ガルス。

レイズは、だらしなく開きっぱなしの口を閉じ、恐る恐るガルズに問うた。

「あの……訳をお聞かせください」

答えるガルス。

「ヴァン!! ロックハマー大尉への不服従だ。否定の余地はあるまい?」

「しかし、それは」

「異動先は…」

ガルスはレイズの言葉を遮り、レイズの顔を見据えた。

「第一特殊機動戦闘団第一次準備部隊、“シエーファーフント”だ」
「へ?」

思わず間抜けな表情で、聞き返すレイズ。

「聞こえなかったのか?」

「いえ……あの……?」

「もう一度言つてやろう。ミラーズと共に部隊を作れ」

口をかくかくと振るわせるレイズ。そんなレイズを無視してか、

ガルスは言葉を続ける。

「貴様の命…戦場で散らせてやる。それと、給料分以上は働いてもらう。覚悟しろ」

「そ、それじゃあ自分は……!!」

「復唱は!?!」

「サー・イエス・サー!」

ガルスに敬礼するレイズ。

かくして彼は、運命の歯車の一つとして回りだした。

「ACT 4」終

ACT5 トライデント（前書き）

インド洋上に現れた謎の異常。その正体を解明した時、人類は新たな危機に直面しようとしていた。

ACT 5 トライデント

Captur 1

ドーナツ型の大きな円卓を囲んで座る8人の人々がいる。

その円卓を、青白い照明が照らし出しており、その周りは深い闇に包まれている。

その円卓の中心に、一人の若い男。

円卓に座る一人が、彼に言った。

「勝手な行動は困るのだよ。ロイ君」

「心得ております」

無機質な表情。

「我々ジエネシックにとって『統合体』は、最大の取引先でもある」

「例の戦争以来、あの方々とのコネクションはより強い物となった」

「信頼関係なのだよ。ロイ君……」

「その信頼関係を損なう原因となり得る事は些細な事でも絶対に回避しなければならない」

「用心に越したことはないのだよ……」

次々と発言する人々。

この発言を最後に円卓は闇と共に姿を消し、無機質な何も無い部屋が現れた。

「気の小さい老人達だ……」

その部屋の中心に立ち、不敵な笑みを見せるロイ。

その彼の背後に、長身の女性が立った。

「チーフ、今後はどういたしますか？」

彼は答える。

「エヴァ……私の好きな言葉は何か知っているかい？」

彼女は答えた。

「『新しい葡萄酒は新しい革袋に』……」

「我々はその『新しい革袋』を作ればいい。新しい葡萄酒は、彼

等”が用意してくれるだろう…」
彼はそう言って、部屋を出た。

「西暦2188年12月5日、1430時、地球インド洋沖、東、1800?」

「スカウトマザー、こちらチャーリースカウト、帰還する」
インド洋沖の上空を飛行する艦隊所属の海軍機。

この機体に搭載されているのは電子戦に特化した支援ユニットだ。
インド洋艦隊に所属するこの機体は日々の任務である偵察観測行動から帰還するところだった。

「偵察データの保存は済んでいるな？」

「はい。完了しています」

突然の警告音。

「ユーザーへ通達。本機後方200kmに異常な重力の歪みを確認」
「なんだ…？センサーの故障じゃないのか？」

「センサーチェック。異常ありません」

「なんだ…？これは…」

「非常に軽微な歪みです。重力センサー感度最大でやっと感知しました」

肉眼ではまったく確認できないが、そこには確実に異常があった。

謎の重力異常。

サンヘドリンの研究者たちが全く答えを見出せない中、その答えは意外な所から出た。

「超空間連結ポテンシャル理論…？」

グラムが、怪訝そうな表情でそう呟いた。

「ええ、簡単に言えばワープゲートです」

そう言うグレんに、グラムは言い返す。

「ワープゲートだって？ B級SFじゃあるまいし…」

「確かにずっと不可能といわれてきた物ですけど、2168年にゲッペラーゼント＝モリナガ博士が偶然発見した理論によって可能となったんです。でもその理論自体が非常に難解で…」

「つまりは非常に困難だが可能という訳なんだな？」

「ええ。莫大なエネルギーと全宇宙を網羅する観測能力が必要ですけど…」

「観測能力？」

彼がそう言った正にその瞬間。

『愛しているわ…』

突然グラムの頭の中に声が響いた。

「ぐっ…」

膝を突くグラム。

声の波長に合わせるように頭を走る激痛。

彼が頭を抱え脂汗を流すと、グレンは彼の顔を心配そうに覗き込み、肩に触れようとする。

「た、大佐！ ちょっと…大丈夫ですか!？」

「触るな！」

身体を強張らせるグレン。

そんな彼女を見て、彼は大きく深呼吸する。

「すまん…大丈夫だ…」

袖口で汗を拭い身体を起こそうと手を突くグラム。

彼は突然、床へ倒れこんだ。

「大佐！ 大佐！」

除々に遠のくグレンの声。

やがてその声は聞こえなくなり、彼は意識を失った。

「君は…一体誰なんだ…？」

無意識にグラムの頭の中に広がる『ビジョン』。

美しい笑顔の女性。

だが、どこか哀しそうな笑顔。

「君は…？」

女性のビジョンがそつとグラムの頬に触れた。

そして今のビジョンがホワイトアウトし、別のビジョンが流れ込む。

空に開いた巨大な『穴』。

『何か』の大群。

その『何か』がグラムミラーズ自身に迫った。

「……！」

次に目に入ったのは真っ白な天井だった。

目を覚ましたグラムが身体を起こすとそこは医務室のベッドの中で、彼は上半身裸でシーツを掛けられていた。

「やっと起きたのね」

グラムが横へ目を向けるとそこには白衣を着た髪の長い女性。

「貴方からここに来るなんて、本当に珍しいわ…」

無言のままの彼。

「まったく…同じ組織にいるのに一年近くも音沙汰無しなんて野暮なんじゃない？」

一方的に話し続ける彼女。

「あなたが寝てる間、折角もしないでいてあげたのに…」
グラムが、やっと口を開く。

「それよりも、早く診断書を書いてくれないか？」

彼女は笑いながら彼に言った。

「『異常無し』のサインをするのは簡単だけど、それじゃつまらないじゃない？」

苦笑混じりのグラム。

「相変わらずだな…エレナ…」

少し寂しそうなエレナ。

「貴方は…変わったわね…グラム…」

暫くの沈黙。

「いいわ。一応立場上、問診だけするわね」

彼女はそう言ってから机に腰掛けて脚を組み、診断書の映った記録端末を持った。

「手短に済ますわ。質問には『はい』か『いいえ』で答えて」
彼女が質問を始める。

「最近、脅迫観念がある」

「いいえ」

「不眠気味だ」

「いいえ」

次々に出される質問にグラムはすべて『いいえ』で答える。

「じゃあ最後の質問…。最近男性機能に異常がある」
固まるグラム。

答えづらい質問。

「…関係あるのか？ その質問は…！」

「関係あるわ。精神的なものに起因するのよ。こういっつのは」
無然とした態度をとる彼に、彼女は冷静に迫る。

「さあ、答えて」

返答を求めるエレナに、彼は答えた。

「知らん。そんなことを意識して生活していない」

彼女はその答えを聞いて、不敵な笑みを見せながら彼に言っ。

「しょうがないわねえ…。じゃあエステルに聞くわ」

「やめろ、馬鹿！」

狼狽するグラム。

そんな彼に、彼女は追い討ちをかける。

「…それじゃあ…、機能するか、今試してみる？」

エレナはそう言っつて、グラムをじつと見つめた。

「悪い冗談だな…エレナ…」

一笑するグラム。

「悪い冗談…か…。本当に、野暮な男ね…」

エレナはそう言っつと机から降り、診断書に『異常無し』のサインをした。

「貴方は特別だからしょうがないわ。変な夢を見るのも、ビジョンが頭の中に流れ込んでくるのも、全て『能力』のせい」

「そんな事は分かっている…」

エレナはむっつと眉間に皺をよせて、ため息。

「それより…好い加減入っつてらっしやい」

エレナがそう言っつと、医務室のドアがそっつと開き、グレンがゆっくりに顔を出した。

「何してるの？早く入っつてらっしやい」

グレンが、何故か申し訳なさそうに医務室に入ってくる。

「この子、貴方を心配して何度もここに来たのよ？ 健気で可愛い子ね」

「手を出すなよ？」

エレナを毒づくグラム。

「そんな事しないわよ…この子は多分…」

エレナの言葉半ば、グレンは彼に駆け寄ってきた。

「大佐！大丈夫ですか！？どこか悪いんですか？」

目を潤ませるグレン。

そんな彼女に、彼は優しく答える。

「…大丈夫だ…何処も悪くない。心配するな…グレン」

安心した表情のグレンだったが、次の瞬間彼女の心配事は別の分野に移っていた。

「大佐：私ずつと気になってた事が有るんです…」

彼の顔を真剣な表情でみつめるグレンに、エレナが問うた。

「それは彼の『能力』の事かしら？」

「え？ ええ」

エレナは壁に寄り掛かり、腕を組んでゆっくりと語り始める。

「あなた、『千里眼』って知ってる？」

「ええ、知ってます。遠くの場所や未来が見えたりする能力ですよ？」

「そう、昔からそう言う人達はたくさん居たわ。でも本当にその力を持っているのは、極めて一部の人だけ…本物の力を持っている人達は皆一つの施設に集められたと言われているわ」

「『本当に力を持っている一部の人間』…？」

「科学者達は彼らの能力の解明に躍起になった。そして、ごく最近、ここ20年位でやっと解ってきた。彼らの脳内には特殊な脳神経回路が構築されているの。そしてこの『脳神経回路』こそが『能力』の鍵…。能力者の脳内では神経細胞が高度な超空間ネットワークを構築しているらしいのよ。彼らの神経回路は『量子回路』を形成し、

宇宙の事象や、物質として顕現している因果律に干渉する事によつて視覚野に明確なビジョンを送り込むのよ」

「『超空間知覚能力』…」

「ええ、『千里眼』は古い呼び方ね…彼は正にその『超空間知覚能力者』よ」

エレナの説明を聞いて、彼女は過去の出来事を思い出した。

「だから大佐はあの時も機械より早く気付いたんだわ！」

「能力者は機械なんかより遙かに正確で鋭敏よ」

グレンは、安心した表情を見せた。

「でも、大佐…どこも悪くなくて本当によかった…」

にっこりと微笑むグレン。

「（あゝ、この子本当に可愛いわ…）」

エレナはグレンをじっと見つめた。

「（なんだろ…背中に寒気が…）」

グレンの背中に悪寒が走る。

振り向くグレン。

「…何ですか…？」

「別に？」

エレナはグレンから視線を逸らすと、グラムに向かって言った。

「それより、貴方がまた『夢』を見たと言つ事は…」

「ああ、間違いない。敵が来るぞ…!!」

息を飲むグレン。

「それより…大佐…服着てくれませんか？」

「……」

「2188年12月7日1000時、サンヘドリン本部中央作戦会議室」

照明を落とした暗い会議室内。中央に大型の立体映像を映し出す円卓を囲み、彼らは眉をしかめた。

「つまり、こう言う事かね？ ミラーズ大佐。空間跳躍によるヴァリアンタスの大規模侵攻……！」

ガルスは真剣な顔でグラムに言った。

「大佐、より詳しい情報は？」

「それについては情報軍団のハルト准将にお任せします」

紹介され、立ち上がった若い将校は、情報軍団のハルト准将だ。

情報軍団は、対ヴァリアンタスに関するあらゆる情報を管理分析する、ハイテク軍団だ。事実、イクサミコの持ち帰ってくる全ての情報は、情報軍団の管轄であり、また、本部メインコンピューター・ユグドラシルを用いて、対ヴァ戦略戦術を導き出す部署でもある。その長である、ハルト准将。

「はい。インド洋第一艦隊からの観測データを知人が解析した所、インド洋沖、1800kmに出現した巨大な重力場歪曲が空間跳躍ゲートの出現を予徴していると結論付けました」

会議室の空中にホログラフが現れ、彼はそれを使いながら説明を続ける。

「馬鹿な！？信じられん！」

「フィジカルゲートを用いない長距離ジャンプは我々でもまだ研究段階だぞ……？」

各軍団や省庁の高級士官たちがどよめいた。

それを制するように、ガルスは言う。

「進行開始までの猶予は？」

「ミラーズ大佐の御知人のからのデータによりますと、予測では約10日前後と推測されます」

「もし、その予測が正解だとすれば、艦隊の保有する機動戦力ではおそらく殲滅は不可能であろう。海軍司令官としての見解はどうかね？」

ガルスは海軍服を着た士官に言った。

「我々海軍は充分闘えます。と言いたい所ですが、いかんせん、足止めが限界です。当然、デイカイオスが無ければどうにも……」

「艦隊の増援が必要だな」

腕を組んで目をつぶり、深く考え込むガルス。暫く経ってから、彼は口を開いた。

「第二艦隊から空母、駆逐艦、巡洋艦を借用。デイカイオスは現地まで空母で輸送。戦闘開始後はデイカイオスを中心に各艦載機を展開。順次、艦隊によるDCSを開始。問題はゲート本体だ。これに關しては後日討議する」

そう言っただガルスは、会議を解散させた。

Captur 2

「12月16日、インド洋上、グレートウォール級汎用母艦『オリオン』内」

「そういえば、君とこうやって食事するのって始めてだね」

彼と、サラは、艦内の自室で、食後のデザートを食していた。

レイズと共に、ケーキをついばむサラ。

彼が彼女に言った。

「あれ？ そういえばイクサミコって、普通の食事しないんじゃないのかなかったっけ？」

彼女は答えた。

「それは誤解です。レイズ軍曹。私達イクサミコは確かに、殆どチユーブ食ですが、普通の食物も摂取出来ます」

長い間艦隊に駐在する場合、兵士の精神衛生上、食事は大きな意味を持つ。

無論、『ケーキ』等の甘いものは普通にある物ではないが、空母等の大型艦乗組員はそれらを食す事ができた。

「でもさ、出港してからもう2日だよ？　ずーっとケーキばかり食べたら太っちゃうよ？」

「イクサミコは太りません。それに甘い物は別腹です」

談笑しながらケーキを2個ほど平らげ、紅茶で一服：

「なんか僕達だけ個室で食事って、他の人たちに悪いね…」

「ええ、でも…、二人で食事するのも悪くないです」

「うん、そうだね、サラ」

微笑むレイズとサラ。

そのとき。

「レイズ」ザナルテイー軍曹、グラム「ミラーズ大佐が呼びびです。

A 15 格納庫までお越し下さい」

突然の呼びだし放送。

「ん…呼びだしだ…行こう、サラ」

「はい」

格納庫では、グラムが黒いHMAを眺めていた。

「大佐、遅くなりました」

敬礼するレイズ。

「何でしょうか？大佐」

「軍曹、新しい機体の調子はどうだ？」

「ええ、出力がでかくてじゃじゃ馬ですけど素晴らしい機体です！」

「そうか。兵器局から無理矢理回してもらった甲斐がある」

レイズは自分の機体を眺めた。

ディカイオスとHMA。

二体がそろって並んでいるのを見るのは初めてだった。

黄金と純白の美しい装甲。見るものに畏怖の念を抱かせる巨軀。そして、その横に立つ、漆黒の機体があった。

HMA-h2DA/C・ラッシュハードロングのレイズ専用機、
“グローネンダール”だ。

「本来は空軍と一部の特殊部隊用の機体だったが、シェーファーにもなつて通常機体では格好が付かんからな」

「ええ！ 今回の作戦から乗り始める機体ですが、実戦ではどれほどか早く試してみたいです！」

レイズは純粹な子供のように楽しみそうな表情を見せた。

「そういえば今回の作戦、凄い作戦ですね……」

「ああ……」

グラムとレイズはこの艦が出港する前の事を思い出していた。

技術者達は頭を抱えていた。

サンヘッドリン上層部からの要請は、『敵の超空間ゲートを破壊、若しくは強制閉鎖できる装置、または武装を開発せよ』と言う物だった。

しかしそれは難航を極めた。

不可逆的な性質を持つゲートはこちら側から干渉することが難しいからだ……。

そこで、技術部は、最後の手段に出た。

それは、空間連結ポテンシャル理論の産みの親、ゲッペラーゼン

ト「モリナガ博士…、通称Drモリナガに協力を仰ぐこと。
しかしそれは困難を極めた。

それは…彼が国家反逆の超重罪人であり、彼自身、連邦最終服役施設で終身冷凍刑に処されているからだ。

そこで、統合体の出した結論はこうだ。

『期間限定で仮解凍、面会のみ、面会時間は10分間』

たった10分間で手段を見出さなければならぬ。

そこで白羽の矢が立ったのは…

「12月11日、統合体連邦最終服役施設」

「まさかこんな可愛い子が面会だなんてうれしいよ」

机を挟み、グレンの前に座る男はそう言って微笑んだ。

男の背後には、ライフルとショットガンで武装した看守が5人。

一つしかない入り口には、屈強な看守が二人。

男にも、嚴重な手錠と足枷が嵌められている。

「みてよ、コレ…」

男…、Drモリナガはグレンに手錠を見せながら言う。

「僕は理系男子だよ？ こんな無粋な手錠なんか嵌めて、こいつら
脳みそまで筋肉なんだ」

少々引き気味のグレン。

「あ、あはは、そうですね…」

「そういえば、何の用？」

「ええ、博士を見込んでのご相談なんです…」

「相談…？ そういえば前回解凍された時もキミみたいな女の子…
おっと、これ以上言ったら二度と解凍されなくなってしまふな。そ
れで…？」

「空間連結ポテンシャル理論です」

「ポテンシャル理論？ ああ、あの枯れた技術ね。あれは理論上可
能なだけだよ。つまらないからそれ以上の研究はしなかったけど」

「完成した…といったら驚きますか？」

モリナガの表情が、軟派な男から険しい真面目な男の表情に変わった。

「何だつて？」

「いま、その技術を用いて、ヴァリアンタスが地球に攻撃を仕掛けようとしています」

突然、モリナガは笑い出した。

「そうか、連中完成させたのか！ あっはっはっはっは！ そうかそうか！」

「あの、博士？」

「紙とペン」

「え？」

「早く、僕に紙とペンをくれ。閉じ方を教えてあげるよ」

モリナガはグレンから紙とペンを受け取ると、何かに取り付かれたかのような勢いで紙に数式を書き始めた。

その数式はメモ帳ページに及ぶ物で、殴り書きのようだったが、確実に価値の有る物だった。

「はい、コレ。コレをA・C社のスズキってやつに渡してごらん。きっと面白い物を作ってくれるよ」

数式を見たグレンが、驚いた顔で言う。

「こんな…！ こんなに小型のものが可能なんですか！？」

モリナガがうれしそうに微笑む。

「そう！ キミも僕達の仲間か！」

「え？ 仲間？」

「天才つてことさ」

不敵な笑みのモリナガ。10分が過ぎ、モリナガが再び冷凍室に戻るときが来た。

「さて、もうお別れだね。それじゃあ…」

「あの…！」

グレンがモリナガに頭を下げる。

「ありがとうございました！」

モリナガは、一瞬寂しそうな笑みを見せてから、看守に引かれていった。

そのとき、去り際にモリナガは言う。

「スズキ君によろしく」

後日彼は、どのような手段を用いてか、冷凍刑務所から脱獄したというが、その真実のほどは定かではない。

「インド洋上」

「でも大佐…この作戦ちよつと無茶じゃありません？三方向からゲートへ『同時荷重力弾攻撃』なんて…」

グラムの上申、そして完成した特殊兵器によって最終的に作戦部が発案した作戦が『オペレーション・トライデント』だった。

この作戦は艦隊を含め、三箇所に配備した巡洋艦から同時にゲートを攻撃すると言うもので、正確に三つ同時に攻撃しなければならぬ難しい物だ。

「心配するな、レイズ。作戦部も馬鹿じゃないだろう。それに、彼女の考えた方法だ。きつとうまく行く」

グラムは落ち着いた口調でレイズに言い聞かせると彼は安心した表情で頷いた。

「それにしても彼女…」

「グレンか？」

「ええ、あのグレンって女の子、一体何者なんです？」

「そうだな…彼女はある意味『行き過ぎた人間』…だな…」

「はあ…」

不思議そうな返事を返すレイズ。

その頃サラは、グラム達から少し離れた所でレイズの新しい機体を眺めていた。

『本来は一部の特殊部隊にだけ配備されるチューンナップ機』。
それが彼に与えられた新しい力だった。

「あれが彼の新しい機体ね？」

サラの背後から、エステルが彼女に話しかけた。

「貴女は…？」

「私はミラーズ大佐のイクサミコ」

「お姉…さま…？」

エステルは彼女の横に立ち、話をつづける。

「彼は新しい機体を貰ってどうだったかしら？」

「ええ、とても喜んでいました」

「あなたは？」

「分かりません。ただ…」

言葉を濁らせるサラ。

「『ただ』？」

「彼が喜んでいるのを見ると、はつきりは分かりませんが、何か…
胸の奥が温かくなります」

「そう…」

「でも私には、それが何かわかりません」

エステルはサラの頬にそっと手を触れて言った。

「いい？サラ…。その暖かさは、彼を守る力なのよ…」

「守る力？」

「そう…。あなたが、その『温かさ』を忘れない限り、貴女はずつと…彼を守ることが出来るわ…」

「お姉さま…」

「健やかに…愛しているわ、可愛い妹達…」
エステルはサラにこう言つと、グラム達の所に歩いていった。

「いよいよ明日は交戦予測日ですね…」

だが、グラムの反応は無かった。

「あのう…大佐？ 聞いてます？」

「ん？なんだ？」

「どうしたんですか？ ぼーっとして…」

出航する前に、グラムが倒れたことを聞いていたせいからか、心配そうな顔で彼を見据えるレイズ。

一方グラムは眉間に皺を寄せ、神妙な面持ちを見せていた。

「何か…嫌な予感がしだしてな…」

「大佐…縁起でもないこと言わないでくださいよ…」

「いや…どうでもいい、大した事ない物なんだが…。まあいい…。

明日は交戦予測日だ。今日はゆっくり休め。行くぞ、エステル」

そう言つとグラムはエステルと一緒に扉を出た。

敬礼して見送るレイズ。

「（聞こえて無いじゃん…）」

レイズは心の中でそう呟いた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT 6 閉鎖（前書き）

ついに開始されるインド洋上戦。大量の敵機を前に、人類に勝ち目はあるのか……

ACT 6 閉鎖

Captur 1

「2188年12月17日0500時、インド洋上」

オリオンは待機中の第一艦隊へ側面から近付いた。

オリオンの上空を、艦隊の空母から発進したHMAが飛行し、艦をエスコートする。

朝霧に包まれた艦隊。肉眼では不明瞭なシルエツトが、朝日に照らし出され、徐々に明確になっていく。

海面に浮かぶ巨大な艦の集団。それは空母四隻を中核とした大艦隊だった。

「こちら、インド洋第二艦隊所属増援部隊、航空母艦『オリオン』。貴艦隊への受け入れを願う」

「こちら第一艦隊旗艦、ヒュペリオン。受け入れ態勢に入る。オリオン、歓迎する」

「こちらオリオン。エスコート、感謝する」

オリオンは艦隊に接近し、そのまま静止。数機の艦載機が艦隊の周囲を警戒飛行している。

「こちらブラボー。艦隊周辺に異常なし」

「こちらチャーリー。異常なし。ブラボー、本部からの機動戦力支援は、たったの空母一隻分だぞ？」

「こちらブラボー。心配するな。その一隻には、例のデイカイオスが積んであるんだ。奴らに勝ち目は無い」

艦載機のパイロット“チャーリー”はオリオンを見て呟いた。

「『デイカイオス・エイレーネ』…まるで…偶像みたいだ…」

「0630時、サンヘドリン本部中央作戦司令部」

作戦通り、三隻の巡洋艦が、ゲートを中心に一辺120kmの大三角を形作る。

艦隊は空母から哨戒機を発進。空母を中心に、攻撃担当の砲艦、巡洋艦、駆逐艦と対空防御担当の巡洋艦と航空部隊で陣形を形成。いわば、結界を形作る。

一方、対ヴァリアンタス軍の中枢である中央作戦司令部では、ヴァリアントのゲートに対抗するため、色めき立っていた。

司令部正面の巨大なスクリーンとホログラムモニターには、艦隊の位置とコンディション、先立って展開した部隊からの情報が表示され、常に最新の戦況を提供している。

「ゲートの様子は？」

司令部後方、スクリーンを一望できる司令官専用席に座り、ガルスが鋭い眼付きで言った。

「境界面活性化度上昇中。まもなく湾曲率が最高点に達します」

ガルスは髭をさすり深呼吸。

「司令、コーヒーをお持ちしましょうか？」

彼の横に立つ女性が言った。

「うむ…頼む…」

優しく微笑んだ後、コーヒーを入りに司令室を出る彼女。

そのとき、司令部に警告音が鳴り、メインスクリーンに映る航空戦略マップの一部がズームされ、ウィンドウが分割された。

ウィンドウに映る、黄色いカーソル。

「司令。艦隊前方400kmに飛行物体あり。IFF、反応なし」
ガルスは思わず眉を歪める。

「なに？ 詳細は？」

「飛行速度は約300ノット。これは……輸送機です！」

「0635時、インド洋第一艦隊旗艦『ヒュペリオン』」

「IFF応答なし！ 未確認機、当艦隊へなお接近中！」

「当該機、交戦予測エリアに入りました！」

本部と同時に、艦隊も騒然とした。

全ての艦は、既に第一級戦闘配備に有り、空母はいつでも艦載機を発進できる状態にあった。

「超空間ゲート、開口まであと四分！」

「このままでは、民間人が戦闘に巻き込まれます！」

刻一刻と、ヴァリアントスの侵攻が迫っている今、作戦を中止することは出来ない。

しかし、このまま戦闘に民間人が巻き込まれ、もし死亡すれば、大きな問題となる。

艦隊は大きな選択を迫られた。

一方グラムは、デイカイオスのコクピットの中で静かに瞑想を続けていた。

コクピットの中は外の音から遮断されており、非常に静かだった。

「大佐、ブリッジから緊急の通信です」

エステルが通信回線を開いた。

「ミラーズ大佐！ 緊急事態です！ 戦闘領域に民間機が……！」

「分っている」

彼は慌てる事無く、冷静に対応した。

「それは民間機ではない。それにはあいつが乗っている」

グラムはその輸送機が何なのかを分っていた。

そして、時は満ちた。

「ゲート空間湾曲率、臨界点突破！」

「ゲート内に質量反応多数！ 数、500！」

ついに超空間ゲートがその口を開く。

空に開く、巨大な穴。その中はまるで漆黒の闇。その闇から、無数の敵機が吐き出された。

「作戦は続行！ 全機出撃！」

グラムの乗るディカイオスは発進デッキに乗った。

「レイズ！」

「はい！」

「出撃後、お前は海兵隊機四機とともにフォーメーション！ トッ

プはお前だ…シエーファー！」

「ROG！」

グラムはレイズに指示を出し、そのままオリオンのデッキに。

「行くぞ…エステル」

「はい」

慣性制御をON。バーニアをチャージ。

「グラム〓ミラーズ、ディカイオス・エイレーネ。出撃る！」

一瞬で大空へ飛び立つディカイオス。

次にレイズの機体がカタパルトに乗った。

「行こう！ サラ！」

「はい！」

「レイズ〓ザナルティ、シエーファー01！出ます！」

リニアカタパルトで一気に加速され、レイズ機はそのまま飛び立った。

「0635時、『未確認機』内」

機内を流れる軽快な音楽。

機内の壁に貼られた、水着の女性の古いポスター。床にはビールの缶が2、3本散らばり、ゆっくりと左右に転がっている。

その輸送機の機内にある長椅子に、グラビア雑誌を顔にかぶせ、いびきをかいて寝ている男性がいた。

機体はオートパイロットで、操縦士も長椅子で寝ている。誰もIFFに気づいていない。

ふと、操縦士が目覚まし、操縦席についた。コンソールに目をとめる。

「ん？ IFF？ この辺には誰もいないはず……」

パイロットはコンソールを『コンコン』と突く。しかし『IFF』の文字は消えない。

「旦那、ビンセントの旦那！」

パイロットは寝ている男を起こした。

「んあ!？」

寝ぼけ眼の男、それはあのビンセントだった。

「IFFが……」

「IFF？」

ビンセントは窓から外を見た。だが何も見えない。

「故障じゃねえのか？この艇オンボロだしー。それにこの空路はスポンサーの持ち物だろ？」

ビンセントがそう言って、もう一度長椅子に寝ようとした、そのとき。

「旦那！！ レーダーに変なものが！」

輸送機のレーダーが艦隊を捉えた頃には既に遅かった。

「なんだありや……？」

ビンセントは雲の切れ目から艦隊を確認。

そのとき既に、輸送艇は海軍機HMA-h2C/N・ラインバツカー二機に挟まれていた。

海軍機より無線通信。

「Diarm and follow me. I say again, Unknown, this is Sanhedrin Navy, You have been intercepted. Diarm and follow me, 武装を解除し、我に続け。繰り返す、不明機、こちらはサンヘドリン海軍機である。貴機は迎撃を受けている。武装を解除し、我に続け」

ビンセントは即答する。

「反転！ スタコラサツサと逃げるぞ！」

「え！？ いいんつすか！？」

「うちらはいろいろやばい事してきたでしょうが！！」

パイロットは邀撃機から逃げようと機体を急いで反転。

次の瞬間、レーダーに無数の光点が現れた。

「だ、旦那！ これ！」

「そう言うことか！」

ビンセントは、それがヴァリアンタスであることを瞬時に理解。

同時にソルジャーがミサイルを発射。

邀撃機は既にブレイクし、ミサイルは全て輸送機に向かっていく。

「ちくしょう！ しょうがねえ！」

ビンセントはカーゴ室に向かった。

「旦那！ どこ行くんすか！？」

「『ロングマヌス』を出すの！」

「自分だけ逃げるんすか！？」

操縦士は凍りついた表情。

「んな訳無いでしょうが！ 一緒に来い、ハリー！ どうか艦隊に向かうぞ！」

「えええ〜!? マジっすか!?!」

操縦士は止むを得なく、機体を自動操縦にし席を離れる。

ビンセントとハリーが機体へ乗り込む。ハッチを閉め、スイッチを入れていく。『ヴウン…』と音がし、モニターが光る。

Oil pressure Normal
Electronics system Normal

「Hurry! Hurry! Hurry!」

「え? なんすか?」

「お前じゃない!」

二人が馬鹿漫才を演じている間にも、外からの爆音が聞こえてくる。

迫る敵機。

ビンセントは起動の遅い機体にいらつきを見せ、遂にキレル。

「ああ! くそ! 当該処理を中止! 項目を無視して強制起動!」

あっけなく起動する機体。

ビンセントは輸送機のハッチを開けて、機体を空中に射出。次の瞬間ミサイルが輸送艇に着弾。火球が咲き、輸送艇がバラバラに吹き飛ぶ。

重力に囚われ落下する機体。残るミサイルが迫る中、ビンセントは自由落下の中、回転しながら左腕のチェーンガンを発砲。

全方位のミサイルを打ち落とし、背面メインブラスターと脚部スラスターを全開で噴射させてブレーキ。

機体を安定させる。

警告音。敵機接近、数3。

「さてと、クソ野郎どもの相手にバレットダンスと行きますかね!」
そう言うと彼は、左手チェーンガンをソルジャーに向けて撃った。

Captur 2

「0636時、『ヒュペリオン』」

「デイカイオス、オリオンより発艦！」

「マリーン、301、302、303、一番デッキから発進！」

「304、305、補給作業完了！ 一番デッキへ！」

「401、402、403、発進準備完了！」

次々に出撃していくスパロー。

外では既に戦闘が始まっていて、海軍機は編隊を組んで次々とヴ
アリアントの群れの中に突入していった。

「ブロンコ小隊、発進する」

カタパルトに乗り、発進寸前の海兵隊専用HMAのパイロットが
言った。

彼は、『サンヘドリンインド洋第一艦隊海兵隊・ブロンコ小隊』
の隊長だ。

電磁カタパルトで加速。離艦と同時にタイミングよく重力制御を
ON。

HMA-h2CM・コマンドウルフは、海兵隊専用の特殊戦機だ。
大量のミサイルと火器を運用する重火力機。

しかしその機体は、重装備とは思えないほどの機動性で、機体を
加速させる。

発艦したほかの機体が隊長機に随伴し、編隊を組む。

「ブロンコリーダーから各機へ！ 会敵後は各機散開！ 該当エリ
ア内の敵機殲滅後、ポイントで合流！ 敵はヴアリアントだ！ 全
力を振り絞れ！ 我々海兵隊の力を見せてやれ！」

「了解！」

鬼気迫る気迫で指示を出す隊長。

部下はみな、気合を込めて返事をした。

「敵機接近」

機体のイクサミコが敵機を感知。

「Break…Now！」

特別製の強化ブースターを噴射。

爆発音にも似た音と共に機体は急加速し、ヴァリアントの群れの中へ消えていった。

「0638時、海上交戦領域。DCS開始まで120秒」

「ダメだ！ 振り切れない！ 援護してくれ！」

コクピット内に響き渡るロックオン警告音。

一機の海軍機を、ソルジャーが追撃している。

「無理だ！ こっちも付かれた！ 援護できない！」

「くそ！」

パイロットは機体を右にロールさせ、仰向けになり、そのまま急降下させた。

右腕100？40口径長リボルバーカノンをソルジャーに向け、発砲。

リボルバーカノンから排出される薬莢が、重力に逆らって空へ上っていく。

ソルジャーは慣性を無視した素早い動きで、100？APDSを回避する。

体勢を立て直し、海面スレスレを飛行。

水しぶきで敵の視界を遮りながら、背面複合兵装ユニットにマウントされたAAM-X10マイクロミサイルを一斉射。

しかし、ソルジャーはミサイルを回避。

海軍機は高度を上げ、海面を離れる。

待ち構えていたかのように、ソルジャーがビームカノンを発砲。パイロットはビームを寸で回避。ビームが海面に着弾し、瞬時に蒸発した水分が水蒸気爆発を誘発。大きな水柱を上げた。

ソルジャーが、すかさずミサイルを発射する。

「ミサイル、6基接近。着弾まで30秒」
迫るミサイル。

パイロットは全身から汗が噴き出すのを感じた。

彼は機体を大きくライドさせ、ミサイルを撃ち落そうとリボルバ
ーカノンを発砲。

一基の弾頭部に命中。誘爆で2基破壊。残り三基。
チャフ射出。

目標を見失い、軌道を逸れるミサイル。金属片のカーテンに突っ
込み、オレンジ色の爆炎が目の前で散る。

次の瞬間、爆炎の中からソルジャーが飛び出した。

右腕を振り上げ、超振動ナックルを起動させている。

その時突然、ソルジャーは無数の閃光に貫かれ、炎を上げて失速
した。

海軍機の横を、破片と炎を撒き散らしながら通り過ぎていき、海
面に墜落するソルジャー。

頭上を通り過ぎるデイカイオス。

「デイカイオス！ 大佐、感謝します！」

「幸運を。気を抜くな！」

パイロットは機体の手で敬礼。

グラムはそれを見送り、エステルに問う。

「エステル、敵機数は？」

「前方に20、右に30です」

「よし、AHL用意。その他はミサイルで対応。フレズベルグを使
う」

「了解」

グラムはトリガーを引いた。

ホーミングレーザーと、ミサイルが空中を乱舞し、ソルジャーを次々に破壊していく。

爆炎が空を埋め尽くし、海面を真っ赤に染めた。

「艦隊、DCS開始しました」

戦闘領域へ到達する艦隊の砲撃。

大型ミサイルや砲弾、高出力ビームがソルジャーたちを捕らえていく。

「『アーチャー』02、03配置完了。『アーチャー』全部隊準備完了しました！」

125？砲に荷重力弾を込めた駆逐艦が、配置についた。

「デイクイオスから全機へ！ フェイズ01から02へ移行！ 弾薬の尽きた者から随時補給！ 第二波に備えろ！」

グラムは全部隊に指示を出した後、独立回線でレイズ機に通信。

「レイズ、そちらはどうだ？」

「大佐！？ …こっちは！ いっぱいいっぱいです！」

「部隊の消耗は？」

グラムは非常に落ち着いた口調で状況を聞いた。

「大きな消耗はあ！ …ありませんっ！」

「よし。私は未確認機を救出に行く。くれぐれも無理はするな」

そう言うとグラムはデイクイオスを民間輸送機の元に向かわせた。「了解！！ つてもう切れてるし！」

レイズ機に迫るソルジャー。

レイズは機体を巧みに機動させ、迫るソルジャーを回避。

ソルジャーの背面に100？50口径長ガトリングガンを連射。

メタニウム弾を叩き込む。

「サラ！ 残弾チェック！」

サラが機体の装備する弾薬をチェック。

「ガトリング砲残弾400。ハンドガン一丁とそのマガジン4つです」

「まだいけるな…」
レイズは機体をさらに交戦の激しい区域に突入させた。

C a p t u r 3

コクピット内のコンソールに表示された、FCSの弾数カウントが、凄まじい勢いで減っていく。

チェインガンの速射性能は凄い。

給弾はベルトリンクで、作動方式は電気作動。

ジャムが少なく、不良弾が有っても、何事もなく強制排出され、次弾をチャンバー内に送り込む。

対空戦闘にはうってつけの武装だ。

だが、発射する弾体が、『敵』に対応した物でなければ、その用を果たさない。

「だめだあ！DU弾じゃ効きやしねえ！」

ビンセントはバックで飛行しながら、ソルジャーに応戦した。

トリガーはさつきからずっと引きっぱなしだ。

自分を狙うミサイルを撃ち落とし、ロックオンをソルジャーに変更。劣化ウラン弾を吐き出す100mmチェインガンが、ソルジャーに砲弾のシャワーを浴びせる。

ソルジャーの身体から、まばゆい火花が散った。

装甲を貫いたのではない。砲弾が弾かれ、変形した際に発生した火花だ。

凄まじい音を立てながら、ソルジャーの高分子複合素材製装甲板が、チェインガンの砲弾を退けていく。

それでもビンセントは、自分を追尾してくるソルジャーに向かってチェインガンを撃ち続けた。

雄叫びを上げながら、トリガーを引き続ける。

距離を縮めるソルジャー。チェインガンの弾数カウン트가、『0』になったと同時に、ソルジャーはビンセントの機体に掴みかかった。「ぬお!？」

ソルジャーの顔面、突き出した下あごと鼻下がぱっくりと別れ、巨大な口が開く。

メタニウムを用いていない装甲素材は、彼らヴァリアント達にとつては恰好の『食物』。

ソルジャーは今正に、ビンセントの乗るロンギマヌスを早めのランチにしようとしているのだ。

大口を開け、ビンセントの機体に迫るソルジャー。しかし。

「なめんなよ! コラ!!!」

右腕に装備されたパイルバンカーが低い唸り声を上げる。

「喰らいやがれ!」

ビンセントがソルジャーの腹部にパイルを突き立てる。

咆哮と共に巨大な薬莖が排出され、特殊合金製の杭が、ソルジャーの腹部装甲にめり込む。

もう一度トリガーを引く。

鈍い金属音が、HMAの腕部を伝わってコクピットの中に響く。

パイルは、ソルジャーの腹部に深々と突き刺さった。

「今まで、何十人もの血を吸ってきた特殊合金製パイルだ! 対ヴァリアント仕様じゃあなくなつて……」

彼は、追い討ちを掛けるようにもう一度パイルを撃つ。

「……なかなか効くだろう?」

ソルジャーは胴体を砕かれ、真っ二つになり、爆炎を上げながら墜落。

突然、コクピット内に警告音が響いた。

「パイルリローダー故障!? ちっ! こんな時に!」

ビンセントは、右手のパイルバンカーを弾切れになったチェインガンと共にパージ。

「さらば、友よ……」

「旦那！冗談言ってる場合じゃないっすよ!？」

次々と集まってくるソルジャー。

「あああああ！ ド畜生がああ!！」

彼は右腰のアサルトライフルを抜き、トリガー。

ライフルの咆哮が虚しく響き渡り、真鍮色の薬莖が宙を舞う。

マジでヤバイかもしれない……

彼は、弾を撃ち尽くしたライフルを、ソルジャーに向かって投げつけた。

「来いや！ この野郎!！」

「旦那!！」

ソルジャー達が、一斉にビームカノンを放つ。

ロンギマヌスに迫るビーム。

「（あーあ…俺も『年貢の納め時』って奴かあ…せめて最後に、酒呑みたかったなあ…）」

次の瞬間、ロンギマヌスの目の前にミサイルが飛来し、爆炎が散った。

「のお!？」

次々に飛来し、ソルジャーの射線を遮るミサイル群。

側面から『銃撃』を受けるソルジャーたち。その銃撃は、ソルジャーを一撃で破壊し、その『弾丸』は命中した箇所を跡形もなく消し去る。

ビンセントは直感的に悟った。

「グラアーム!！」

ビンセントのもとへ飛来するディカイオス。

「エステル、フレズベルグ、リロード」

ディカイオスの手には巨大な拳銃が握られている。

グラビティールガン『フレズベルグ』だ。

マガジン内に亜空間コンテナを接続し、弾丸を転送。

彼は両手に握られた二挺拳銃をソルジャーの群に向け、何の迷い

も無く、一心不乱に巨大な弾丸を叩き込む。

「ビンセント、なぜこんな所に居る？」

グラムはロングリマヌスに回線を繋いだ。

「うるせえ！ お前に話すことは何もねえ！」

グラムは強がるビンセントを一笑して言う。

「丸腰のようだが？」

「……傭兵ごときの武装じゃ、歯が立たねえ！ 俺のパイルもぶっ壊れちまった！」

「腕が鈍ったか？ ヘルゲート！」

「なにい！？」

ビンセントがグラムに食い掛かろうとしたその時、HMA規格の重火器が投げ渡された。

「何のつもりだ？」

「見て分かるだろう？ “武器”だ。120mmセミオートカノン。砲弾はレーザー誘導対装甲砲弾。お前なら使いこなせるだろう？」

ビンセントは一瞬を起き、

「へっ……！ 『ヘルゲート』の二つ名を、嘗めるなよ？」

ガンランチャーを手に取る。

「さて、行こうか、ヘルゲート」

「言われるまでもねえよ！ ヘルファイヤー！」

ビンセントは、ボルトを引いて初弾を装填、カノンを構えた。

そして、ソルジャーをロックオン。画面に丸いロックケージが現れる。

「さてと、久しぶりにハツスルさせて貰うぜ！」

背中合わせの二機は、堰を切るように加速。

「降ろしてええええ！！」という、ハリーの悲痛な叫びを残して。

「0700時、サンヘドリン中央作戦司令部」

「パワーポイント、算出完了まで120秒！ 各『アーチャー』荷
重力弾発射まで、125秒！」

「境界面、再び活性化！」

「第二波、来ます！」

「ソルジャー他、『ファットネス』、及び『ナイト』を確認！」

ゲートから、新たに多数のヴァリアントが現れた。

その中には『ナイト』や、『ファットネス』と呼ばれる上位指揮
種もいた。

『ナイト』は白兵戦闘に特化した機体だ。

内蔵兵装はミサイルだけだが、強大な機動力と、ブレード状の手
持ち武器を持っている。それが三機、一機毎に6機のソルジャーを
随伴させ、編隊を組んでいる。

『ファットネス』は砲撃戦闘に特化した機体だ。

強大な推力に、大量のミサイルと強力なビーム兵器を持つ、重装
甲機。それが四機、同じように編隊を組んで海面スレスレを飛行し、
艦隊に迫っている。

「ファットネス四機、艦隊に向け高速接近！」

「ナイト各編隊、アーチャーへ向かっています！」

「各砲艦、長射程レールガンでナイトをインターセプト！ 対空
ミサイル全弾発射！ 絶対にアーチャーへ近付けさせるな！」

「了解！」

「本部から全艦へ！ 各砲艦はナイトへDCA！」

「各艦、対空ミサイルを全弾発射！ 全力を持ってナイトを撃破せ
よ！」

「ファットネス、前衛部隊と接触！ 現在交戦中！」

艦隊が砲撃を開始したと同時に、ファットネスは防空部隊と衝突。ラインバツカー数機が、中距離対空ミサイルを発射。

それに対し、編隊を組む随伴のソルジャーがビームカノンで援護射撃をし、ファットネスは肩の巨大なミサイルコンテナから大量のミサイルを発しながら、右手に装備したビーム砲から拡散ビームを打ち出した。

ミサイルが爆炎を上げ、拡散ビームが次々にHMAを捕らえていく。

「前衛部隊突破されました！」

空母の周辺に展開する駆逐艦と巡洋艦が、ファットネスに向かって弾幕を展開。

次の瞬間、ファットネスから発せられた四本の高出力ビームは、空母エスペランサの右舷に命中した。

「右舷に直撃！ グラビティシールド一部消失！」

「司令！ このままでは！」

「分かっている！ 最寄の海兵隊機へ発令！ 艦隊内での発砲を許可する。ファットネスを撃破せよ！」

この司令は全海兵隊機へ発せられた。艦隊のもっとも近くにいた部隊は『ブロンコ小隊』だった。

「ブロンコリーダーから各機へ！ 艦隊の危機だ！ 即座に艦隊へ向かう！ これはガルス中將から直々の司令だ！ ブロンコ小隊の輝かしい経歴に傷をつけるな！」

瞬時に集合し、編隊飛行。艦隊へ急行。

「敵はファットネス四機！ 背後の死角から集中砲火を浴びせる！ ガン・ランはシャロー！ 残弾の有る者はマイクロミサイル発射後、対装甲ミサイルを全弾発射！ 動きを止めてからメタニウム弾でとどめを刺してやれ！」

後方から迫るブロンコ小隊。

随伴のソルジャー5機が、くるりと向きを変えて背面飛行し、ビームカノンを撃った。

ビームを巧みに回避し、まとめてロックオン。

「発射ア！」

背面のミサイルポッドから大量のミサイルが発射される。

ソルジャーはミサイルに向かってビームカノンを撃った。

ブロンコ小隊はミサイルを援護して、M10・100？バトルライフルを発砲。

メタニウム弾が次々にソルジャーを撃破。

それを察知したファットネスはコンテナからミサイルを発射。ミサイル同士がぶつかり合い、爆炎をあげる。

その間を縫って、BGM 70対装甲ミサイルがファットネスに迫った。

海面スレスレを飛行したそれは、ファットネスのミサイル網をくぐり抜けていたのだ。

各ファットネスに、数発が命中。爆音と巨大な衝撃波を発生し、ファットネスの装甲が砕け散った。

即座に接近するブロンコ小隊。

背面から、失速したファットネスに迫り、バトルライフルを連射。メタニウム弾を背面から何発も打ち込まれ、炎を上げるファットネス。

次の瞬間ライフル上部のローディングクリップが跳んだ。ライフル残弾ゼロ。しかしパイロットは、あわてることなく前腕部に装備された100？三連マシンカノンを発射。

ファットネスを、暗い海の底に沈める。

「本部、こちらブロンコ小隊、ファットネス撃破！」

ブロンコ小隊は役目を果たし、機体は誇らしげに雲の尾を曳いた。

「パワーポイント、受信完了しました」

「よし、発射カウントダウンに入る。こちらアーチャー01、各『アーチャー』カウント：セット」

「セット」

「セット」

各アーチャー艦の艦長はモニター越しに超空間ゲートを見つめた。射撃視界に映るパワーポイントの位置。その上に重なるロックオンゲージは、『まだか、まだか』と言わんばかりに点滅を繰り返している。

「カウント、20秒前…15…14…13…」

突然、センサー群が慌しく警告音を喚き散らした。

「各艦、発射警戒！ゲートから第二波！射線上にソルジャー多数！」

ゲートを守るように、ソルジャー達はアーチャーの射線を遮った。

同時に、ナイトがアーチャーに迫る。

「アーチャー各艦！ナイトの編隊が向かっている！射線確保まで援護する！応戦しろ！」

各アーチャーを守るために、部隊はナイトの編隊の前に集結していった。

アーチャー各艦は、対空ミサイルを発射。部隊はナイトに向かって、集中砲火を浴びせた。艦隊の攻撃も届いている。

しかしナイトは機動力に物を言わせて、回避。

ソルジャーは編隊を維持したまま、高速飛行から安定浮遊に移った。編隊から離れ、先行するナイト。

それにあわせ、ソルジャーは肩装甲を長大なビームカノンへ変型させ、そして、一閃。

ソルジャーはナイトを援護するように、高出力のビームを放ち、

瞬時のうちに弾幕を張った。

部隊に迫るナイト。

両手に持ったガンブレードを振り上げ、一機の海軍機に接近。抵抗の暇すら与えず、縦に両断する。

ナイトは次々に部隊のHMAに襲いかかり、空を爆炎で埋めていった。

「ナイト、防衛部隊と交戦！」

「だめです！ 戦力が足りません！」

「アーチャーの撤退を提案します！」

「撤退はしない」

作戦司令室にグラムの声が響いた。

「アーチャーは現状を維持。別命あるまで待機する」

Captur 4

「左上方12度、敵機2！」

彼は機敏に反応し、右足のバーニアを一瞬強く噴射。

機体を流れるようにライドさせ、ガトリング砲を発砲。

一機破壊。残り一機。

「まずい……弾がそろそろ無いな……」

「どうします？」

「左手の制御、任せるよ。ハンドガン、使って」

サラは、レイズ機の左手で、57？ハンドガンを抜いた。安全装置を解除。

残る一機のソルジャーはミサイルを発射。アクティブホーミングで4基。

「サラ！」

「了解！」

サラはハンドガンでミサイルを迎撃。
器用に素早く発砲。二基破壊。

左から二基。サラはハンドガンでミサイルに向け、レイズはガトリングをソルジャーに向けた。

そして、同時に発砲。ミサイルとソルジャーの両方が同時に爆ぜる。

「後ろ三機！」

レイズは急反転し、トリガー。一機のソルジャーを捕らえる。爆散。

残り二機。

残り弾数が少ない。レイズはハンドガンを手放し、ガトリング砲のグリップをしっかりと保持すると、ソルジャーに狙いを定めた。残り弾数は50以下。

一機のソルジャーがビームカノンを発砲。レイズは肩のバーニアを噴射し、右水平移動。ビームを回避する。

立て続けに、二発目と三発目が迫った。背面メインブラスターを強く噴射し、素早く上昇。二発目を回避。

三発目が迫る。

「グラビティシールド全開！！」

次の瞬間、グローネンダール左腕に搭載されたグラビティシールドユニットが起動。展開したグラビティシールドでビームを防御。間髪入れずにガトリングを発砲。一機撃破。

左腕から、焼きついたシールドユニットが脱落する。

残る敵機は一機。

ソルジャーは撃てるだけの全てのミサイルを発射した。

レイズ機に迫る、無数のミサイル。

「チャフ、全弾射出！」

大量にばら撒かれる金属片。ミサイルは金属片に反応して起爆。

ソルジャーの目の前を塞ぐ爆炎を突き抜け、ガトリングを叩き込む。

爆散するソルジャー。

「ふう……」

息をつくレイズに、サラが一言。

「……弾薬が尽きました」

「うん、みんなと一緒に補給に行けばよかった……」

レイズ機の前方には、多数のソルジャー。

その時。

「だから、無理はするなといったたる……」

無線に響く、グラムの声。

次の瞬間、ディカイオスのホーミングレーザーが、レイズ機の頭上を通り過ぎていき、レイズ機の前に炎のカーテンを形作った。

「大佐！」

「レイズ、お前は今から、アーチャー02の援護に向かえ！ ナイ

トがいる！」

「了解！」

「待て！レイズ！」

グラムは、レイズ機に向かって、一丁の火器を投げ渡した。

「これをもっていけ！」

それはHMA用のビームカノンだった。

「お前は、俺の部下だ！ 勝手に死ぬ事は許さんからな！」

「了解!!」

レイズはバーニアを最大出力で噴射。

凄まじいスピードで『02』の元へ向かった。

「まったく！サンヘッドリンもヴァリアントも、迷惑な連中だぜ！」

ビンセントはコクピットの中でぼやいた。

人を戦闘に巻き込んでおいて、拳句の果てに協力しろ、か。

『勝手な連中だ』と、ビンセントは舌打ちをした。

そうしながらも彼は、乱れなく機体进行操作。

戦場を翔る、ビンセントのロンギマヌス。赤銅色の機体は、戦場を舞い踊るように、軽やかに機動する。

「お仲間を助けるか……あの野郎、簡単に言ってくれませ……！」
つい数分前の記憶

「やだ。めんどくせえ」

ビンセントは、120？弾をソルジャーに撃ち込みながら、無線に向かって悪態をついた。

「お前と口論している暇はない。いいから、そこから11時の方向に見える部隊を援護して来い。先陣を切って突撃しろ。お前なら蹴散らせるだろう？ ヘルゲート」

冷静な口調で答えるグラム。

「…本当に…突っ込んで援護するだけでいいんだな？」

「ああ」

ビンセントは少し考えてから言った。

「…で、お代はいかほど頂けるんで？」

そして今、彼の機体は部隊に向かって飛行している。

FCS画面で、カノンの残弾チェック。

「30……余裕、か？」

微妙な数字。

「まあ、やばくなったら逃げよ」

交戦区域に突入。

ソルジャーが左前方から接近。ビームカノンを発砲。

ビンセントは、瞬間強く左足スラスターと背面ブースターを噴射。機体をロールさせながら上昇。ビームを回避。

即座に、自分から接近してカノンを発砲。撃破。
機体をさらに進める。

射撃視界に入るソルジャーの編隊と……巨大なブレードを持った
ヴァリアント？

「あれ？」

脳内に一瞬のブランク。気付いた。

「ぬおー！ 騙された！」

ナイトがロンギマヌスに向かってブレードを向けた。

刀身が上下に開き、次の瞬間、鋭い閃光とともにビームが発射さ
れた。

即座に回避行動。ビームはロンギマヌスを掠め、塗装を燃やす。

「この野郎！ ブツ飛ばしてやる！」

ビンセントはナイトに向けてランチャーを向け、突撃していった。

空を飛び交う緑色のビーム。ソルジャーの放つビームカノンの閃
光だ。

その中に混じる、赤色のビーム。その赤色のビームが発せられる
度に、空中に爆炎が散る。

「サラ！ナイトはどこ！？」

「サーチします！」

グリッドマップを展開。

赤い四角は敵機。緑の四角は友軍機。中心のオレンジが自機。

広域スキャン。

「いました！ ナイトです！」

捕捉。単機で部隊に切り込んでいる。

「サラ、高機動戦闘になるけど……スラスター制御大丈夫？」

「……ええ、大丈夫です！」

サラは額に汗を浮かべていた。

長い戦闘時間。レイズもサラも消耗している。

もう、長引かせる事は出来ない。

「サラ、もう少しだから……がんばろう！」

「はい！」

接近し、ナイトを確認。

スパローの部隊と、それに襲い掛かるナイト。

「いけない！」

ナイトがブレードを振り上げ、スパローに切り掛かった。

そのナイトをビームが掠める。レイズが放ったビームだ。

ナイトは体勢を立て直すためにスパローから離脱。今度はレイズに向かって来た。

高速で接近するナイト。

レイズは、機体全身に装備されたスラスターを点火し、凄まじいスピードでナイトに迫った。

正面から接近するナイトとレイズ機。

双方ともにビームを撃った。

交差するビーム。

レイズ機の頭上を、二本のビームが掠める。レイズの放ったビームはナイトのすぐ右横を掠めた。

すれ違う両機。空気抵抗で衝撃波が生じる。

レイズは機体を急旋回させ、ナイトを追跡。機体を並走。ビームを撃ち合う。

互いの機体は凄まじいスピードで機動しながら火器で応報。

何度もトリガーを引くレイズ。しかし、ナイトはそのビームをこ

とごとく回避。

ベクトルフィンの出力を上げたのだろう。ナイトの後方が陽炎の様に歪んで見える。レイズがビームを撃つたびにナイトの機動性はみるみるうちに上がっていった。

ベクトルフィンと、増設されたバーニアで、物凄い機動性を発揮するナイト。

慣性をまったく無視した鋭角の軌道。

ナイトはもはや、今レイズ機が発揮している相対速度では捕捉が困難な物となっていたが、レイズは必死に、射撃レンジ内へナイトを治めようとした。

「捕捉しきれない！ サラ、もっと出力を！」

「……ん……はっ！ くう……も、もう…これ以上は…！」

苦しそうに息を弾ませるサラ。

これ以上彼女に、負荷を掛ける訳には行かない。

レイズは己自身最大限の力でナイトを追撃した。だが、ナイトのスピードについていけない。攻撃をギリギリ回避するのが精一杯だ。その様子を見ながら、サラは心の中で叫ぶ。

「（私に…もつと力があれば…！彼はもつと！もつと！強く…！お姉さま…！）」

サラの時間感覚に、一瞬の空白。

突然サラの脳裏に、エステルという言葉が響いた。

その温かさを忘れない限り、あなたはずっと、彼を守ることができるわ…

突然、甲高い音を上げる機体。

「サラ！？」

「私は、あなたを…！！ 守りたい！！」

スラスターに注ぎ込まれる膨大なエネルギー！

凄まじい加速度を得る機体。

巨大な推力を発揮する背面大型スラスタ。

機体はみるみるうちにナイトに迫り、ついに、再びナイトと並走。凄まじい水しぶきを上げ、目にも留まらぬスピードで過ぎていく二機。

そして二機は、海面に巨大な白波を立てて、直角に上昇していった。

高速で旋回しながら、螺旋を描いて、垂直に上昇していく二機。やがて機体が見えなくなる高度に達し、レイズ機とナイトの残した軌跡が二重螺旋を形成。

そして軌跡さえも見えなくなったその時、遙か上空で、二本の光線が交差し、一つの火球が咲いた。

ナイトが、胴を撃ち抜かれて爆散。

その爆炎の光を浴びながら、レイズ機が上空から、ゆっくりと降下して来る。

「ありがとう……サラ！」

レイズは腕を伸ばし、サラの頭を撫でた。

ビンセントは、基本的に大雑把な性格の男だ。

小さいことは気にしないし、人を深く恨んだりしない。

女好きだが、猥雑な生活を送っている訳ではないし、口は悪いが、性格が悪い訳ではない。

だが、今は別。

「ちくしょうあの野郎、必ずぶん殴ってやる、ぶん殴ってやる、ぶ

ん殴つてやる。そして叩つ切る！」

恨み節を連呼しながら、機体进行操作。

スラスタをいっぱいまで吹かし、コントロールレバーを素早く、それでいて大胆に。

戦闘中は繊細な性格になる。

レーダーを逐一確認。

機体背面、上方にソルジャーが一機。ビームカノンを発砲。

機体を右へヨーイングさせ、右ロール。ビームを回避。

背面飛行しながらカノンを発砲。120?弾が、ソルジャーを貫く。

極近接レーダーに反応。前方に敵機。

機体を180度、縦に回転させ、脚を向ける。

脚部スラスタを強く噴射。ブレーキと共に、機体を鋭角に方向転換させる。

機体の軋む音を無視して、ランチャーを発砲。撃破。

「くそ！ 俺の相手はためえら雑魚じゃねえ！」

ロンギマヌスの、右肩から胸にかけて銀色の金属色が見えている。先ほど、ナイトが放ったビームが掠り、余波で塗装が燃え落ちたからだ。

レーダーでナイトを確認。

「見つけたぞ！ この野郎！」

ナイトへ突撃。突然、無線へ強制接続。

「貴様！ 我々の邪魔をするな！ 所属と管制名を名乗れ！」

『カチン』とくるビンセント。

「邪魔だと!? ざけんなコラア！ てめえらの大将からてめえらを助けると言われてきたんだよ！」

「何!? 大佐が!? 貴様一体誰だ！」

「うるせえ！ ただの傭兵だ！」

一方的に回線遮断。

ナイトへ迫る中、道を譲るように避けていくHMAたち。

ビンセントは、機体をナイトに肉迫させた。
放たれる二本のビーム。素早く回避。

機体を一気に上昇させる。トップアタックだ。

カノンを三点バースト。

一発目はまったく外れ。

二発目は近くに迫ったが惜しくも外れ。

三発目は、ナイトの胴体に迫った。

ナイトは身体をロールさせ、ガンブレードで120?弾を防御。
ブレードから火花が散った。

舌を打つビンセント。

FCS画面を確認。残り弾数2。

ナイトはミサイルを撃った。

機体を素早く柔軟に機動。ミサイルの命中予測範囲から逃げる。

それを追尾するミサイル。

弾がもう無い。ミサイルを撃つことは出来ない。

ビンセントは機体の重力制御装置を切った。

そして機体を買つ逆さまにし、急降下。機体重量とスラスターで、
ミサイルを振り切る。

高度計が凄い勢いでカウントしていく。4000、3500、3
000、2200……

機体が軋む音を無視。コクピットに掛かる強烈なG。

来た。“ブラックアウト”だ。

脳に血が行っていない。

遠のく意識。

まだだ。まだ、辛抱。

大きく、深く深呼吸。

膝アーマーの中から、一発のハンドメインを取り出す。

ロック解除。トリガー。それをミサイルの中に放り込んだ。

炸裂するメイン。ミサイルは次々に誘爆し、炎の大花を咲かせた。
迫る海面。そのまま叩きつけられれば、ひとたまりも無い。

海面スレスレで、重力制御を再起動。

バーニアを最大噴射。水しぶきを上げ、海面に対して水平に。目の前が、ぱつ、と明るくなる。

もう一度深呼吸。頭が痛い。無視。頭を左右に振る。

首を鳴らし、リーダー確認。

ナイト、捕捉。

バーニア噴射。急加速。ナイトと並走。

攻撃はしてこない？

「勝負か……。上等だ！」

機体を急減速。ナイトがロンギマヌスを追い抜く。

「一か八か……。仕掛けてみるか」

方向転換し、高速で迫るナイト。

彼はスモークを射出。

ナイトはブレードをチャージ。

突然ビンセントはランチャーを上に向かって投げた。

迫るナイト。

ビンセントはマインを取り出し、両手に持った。

ナイトから放たれるビーム。

機体を、素早く降下させ、寸で回避。また、塗装が燃えた。

マインを投擲。

マインが、ナイトの両脇に位置した瞬間、ロンギマヌスの目の前にランチャーが落下してきた。

それをキャッチし、マインに向かって素早く発砲。

残された、最後の二発の弾丸はマインを炸裂させた。

両脇で強烈な爆発がおきる。

ナイトはその爆発の間に挟まれ、強烈な衝撃波で左腕と共にブレードが碎け散る。

ビンセントは弾切れになったランチャーを捨て、腰部後ろの単分子ナイフを抜き、即座に、バーニアで接近。

すぐ目の前に迫るナイト。装甲のあちこちにヒビが入っている。

それでもナイトは、残された右手のブレードを大きく左から右へ振りぬいた。

迫る白刃。刃先が、ロンギマヌスの頭部を掠る。

『ひゅっ』と短く息を吐く。

タイミングを合わせ、ビンセントは、左腕を下から振り上げ、ブレードの腹を叩いた。

はじかれるブレード。

彼は姿勢を低くして、ナイトの懐に入った。

甲高い金属音。

すれ違う二機。

そして一瞬の静寂。

ロンギマヌスの左腕は粉々に砕け散っていた。

一方、ナイトは、その頭部を失っていた。

力なく、落下していくナイト。

そして、そのまま海面に叩きつけられ、大きな水柱をあげた。

「うむ！ 良い勝負だった！」

コクピット内に鳴り響く多数の警告音。

気付けば、彼のロンギマヌスはボロボロになっていた。

「メーカー修理だな、こりゃあ……」

そう呟くと彼は、無線のスイッチを入れた。

C a p t u r e 5

空を埋め尽くすソルジャーの群を見ても、彼は全く動揺を見せなかった。

冷静な表情で、あくまで淡々と。

「エステル、ナイトは捕捉しているな？」

「はい。いつでも攻撃できます」

「よし」

そこへ、無線通信が入った。

「こちら、レイズ！ ナイト、撃破しました！」
立て続けに、ビンセントからも。

「おい！この野郎！終わったぞ！」

グラムは、『ふ…』と短く笑い、デイカイオスを艦隊の目の前に位置させた。

「フレズベルグ、弾体加速度最大。ミサイル全弾発射後、AHL発射」

「了解」

デイカイオスのミサイルポッドから、無数のミサイルが放たれる。それを追うように、ホーミングレーザーが空を切り裂く。

爆炎が空を埋め尽くし、バーティカルな閃光の柱と、オレンジの炎が空を染めた。

「エステル、着弾点と、絶対貫通域を」

「表示します」

コンソールに表示される、何本もの赤いライン。

それは、デイカイオスから、ソルジャーの群を突き抜け、戦闘領域外へ。

「確認した」

彼は、フレズベルグの銃口をソルジャーの群に向け、発砲。

あたりに響き渡る独特の銃声。

発射された弾丸は、群の先頭のソルジャーを突き抜けた。

銃身内で、重力場によって加速されたその弾丸は、強大な貫通力を生む。

敵機を数十機貫いてもなお、弾丸は運動エネルギーを失わず、射線上に存在するソルジャー全てを貫いた。

弾丸は群の中を通りすぎ、やがて空へ。

群を突き抜けた弾丸は、雲の海に大きな穴を穿った。

どす黒い雲に穴を開けて、青い空が見える。

弾丸の通った痕は、貫かれていったソルジャーの爆炎が飾った。

グラムは眉一つ動かさずに、フレズベルグを群に向かって連射。凄まじい反動。音速を遙かに超えて撃ち出される弾丸。重力波を纏った弾丸は、弾体より大きな穴を開けた。散り散りにされるソルジャーたち。

彼がフレズベルグの弾丸を撃ちつくした頃には、ソルジャーは殆ど、姿を消していた。

「残存勢力、ナイト、およびソルジャー数機です」
レーダーに映る、数個の光点。
リロード。

ナイトとソルジャーは、デイカイオスに向け、撃てる限りのビームを放った。

おもむろに、銃口をナイトに向けるデイカイオス。
そして、発砲。

フレズベルグの弾丸は、ビームの幕に突入。その瞬間、弾丸の発する重力波がビームを捻じ曲げられるように湾曲。

弾丸はビームを拡散させ、ナイトへ。

鈍い音を立てて、ナイトの上半身が消し飛んだ。

立て続けに、二発、三発、四発と、連続して発砲。

爆炎が、デイカイオスの前方で華々しく散る。

「射線確保！ 荷重力弾、発射スタンバイ！ カウント……」
発射カウントに入るアーチャー各艦。

そのときだった。

「ゲート内に大質量反応！」

活性化し、渦巻く境界面。

ソルジャー達を送り出す時より激しい。大質量物を、転送させている証拠だ。

そしてモニターに映る巨大な何かは、兵士達に苛立ちよりも恐怖感を与えていた。

ゲート内に現れる巨大な『それ』は、ゆっくりと、その異様な姿を現した。

そこにいたのは、デイカイオスより遙かに巨大な、禍々しい姿のヴァリアント。

両肩に存在する龍の様な顔。腰部から伸びる長い尾。

その姿は、兵器と言うよりはまるで怪獣だ。

「巨大ヴァリアントだと!?!」

思わず叫ぶアーチャー01の艦長。

次の瞬間、ゲート内がまばゆく光った。

「ゲート内に陽電子反応!」

「来ます!」

デイカイオスが、艦隊の真正面へ出て両腕を前に向ける。

「エステル! 広域防御システム起動! 位相差断層壁出力全開!」

そして、ゲート内から、巨大な閃光が発せられた。

それは、二本の光の杭となって、艦隊へ、そしてデイカイオスに迫った。

巨大な光線は、デイカイオスに命中。

デイカイオスと、艦隊を包む閃光。

閃光は海を抉り、蒸発させ、溝を刻む。

そして、閃光が晴れる。

そこには、数隻の艦と、二隻の空母だけが残されていた。

他は、すべて、閃光の中で蒸発した。

「被害報告を...!」

ガルスが重い口調で指示を出した。

「戦艦10隻、駆逐艦15隻、巡洋艦16隻...消滅...! その他多数、戦闘不能!」

「空母、オリオン、タイコンデロガ、エーデルワイス、エキドナ...同様に消滅したと...」

ガルスは、齒軋りをした。

「こんな事、セカンドムーブ以来だ!」

ガルスが両腕で机を叩く。

「デイクイオスは!?」

最後の綱であるデイクイオスを、ガルスは一番心配していた。オペレーターは、何度も、デイクイオスに通信。

だが返信がない。

皆が諦めかけたその時だった。

「こちら、デイクイオス…無事だ」

ノイズ交じりの音声で、デイクイオスから返信が入った。

艦隊を殆ど消滅させた攻撃でも、デイクイオスは無事だった。

「グラム！ 機体は？」

「エステル」

「はい」

グラムの代わりに、エステルが答えた。

「各武装、異常無し。装甲面、破損0.8パーセント以下。炉心の安定性が若干低下しましたが許容範囲内です」

「そうか…」

胸をなでおろすガルス。

「司令…艦隊が殆ど消滅した」

「分かっている。お前が防御していなかったら、艦隊は全滅していた」

突然、回線に強制介入。

「通信回線に、強制介入！」

「どこからの発信だ!!!」

「これは…！ ゲート直下、巨大ヴァリアントからです！」

「私の砲撃が直撃しても無傷とは。興味深い」

無線に響くその声は、あどけなさが残る、少女の様な声。

その巨大で異様な姿とはアンバランスな口リータボイスだ。

「貴様は誰だ」

グラムが巨大ヴァリアントに問う。

「敵対者共に名乗る口は持たぬが、戯れに教えてやろう。私は『リベカ』…異形の軍勢の王であり、神である、大いなる父君の一人娘

…お父様の意思を遂行する者だ」

グラムは嘲笑しながら言った。

「ふ…娘だと？ 女の子なら、もう少しお淑やかになつては如何かな？ 『お嬢さん』」

「貴様！この私を愚弄する気か！」

「『愚弄』…？可笑しな事を言う…」

「何がおかしい！！」

グラムはリベカの声を見殺した。

「悪戯が過ぎたな、小娘。きつい仕置きが必要の様だ」

そう言うとグラムは、敵機にフレズベルグの銃口を向けた。

「お父様に頂いた、この『ネクロフィリア』の力を思い知れ！！」

リベカは、二振りの剣を圧縮空間から取り出し、二本の腕で持った。

対峙する二機。

「（あのハンドガン…グラビティレールガン…重力壁を展開して、曲面跳弾させれば…防げる！口径から見て、装弾数は15…弾切れさせて、リロードの瞬間に一気に切り込む！）」

リベカは剣を、デイクイオスに向けた。

「来い！！」

グラムは、フレズベルグを連射。

その弾丸は正確にコアを狙っていた。

リベカは機体をひねり、素早く弾丸を回避。

機体を中心に球型に展開した重力壁が、フレズベルグの弾丸を取り巻く重力波と干渉し、その軌道を捻じ曲げた。弾かれる弾丸。

「（避けれた！！）」

連射される弾丸。

そのすべてが回避された。

「速い…それも尋常な速さじゃない…あの体躯でこの速さか…」

グラムは、二挺のフレズベルグで撃ち続けた。

右のフレズベルグが先に弾切れし、スライドがロックする。

彼は右のフレズベルグを亜空間コンテナへしまい込み、左で撃ち続けた。

「後、二発！…後、一発！」

響きわたる銃声。

スライドがロック。

左のフレズベルグも、弾が切れた。

「（今だ！リロードする！今からリロードしても、ファーストアシストに2秒掛かる！貰った！）」

リベカがデイクイオスに切りかかる。

まずは右上からの袈裟。

左腕で防御。同時に右正拳を打つ。

だが、リベカは右正拳を左剣の打ち下ろしで防御。

次の瞬間グラムは、デイクイオスの右腕をネクロフィリアに向けた。その右手には、既にプレッシャーカノンが握られている。

「！！！」

発砲。

プレッシャーカノンから発射された重力衝撃波は、回避行動に入ったネクロフィリアの重力壁を打ち抜き、左肩の龍の顔を砕いた。

「きゃっ！！！」

思わず、声を上げるリベカ。

次の瞬間、デイクイオスがネクロフィリアに左拳を打ち込んだ。

リベカは剣を交差させ、ガード。

立て続けに迫る右回し蹴りを回避。

リベカは機体をデイクイオスから急速離脱させ、ネクロフィリアの両肩からさらに4本の腕を生やす。四本の腕から同時にビームキヤノンを発砲。

回避するデイクイオス。

その瞬間、ネクロフィリアの右肩に付いた二本の腕と龍の顔が分

離して延び、デイクイオスに襲い掛かった。

拳を打ち込み龍を砕く。

それと同時にリベカは、龍の顔を本体から分離させ、デイクイオスに切り掛かった。

グラムは、まっすぐ振り下ろされた二本のブレードを左腕でガード。

しかし、ネクロフィリアのブレードは、少しずつデイクイオスの装甲にめり込んでいった。

このブレード…、重力子ブレードか…！

グラムは素早く、右手に持つプレッシャーカノンに向けようとしたが、ネクロフィリアの再生した腕がプレッシャーカノンを握りつぶす。

「どうした？ 手も脚も出ないのか人間…！」

「頭は出る」

デイクイオスの頭突きがヒット。

立て続けに前蹴りが、ネクロフィリアの腹に飛ぶ。

しかし。

「惜しかったな」

ネクロフィリアの両手が、デイクイオスの脚をしっかりと掴む。そして、残った二本の腕で、デイクイオスの顔を殴りつけた。

何度も何度も、まるでマシンガンのように殴り続ける。

「死ね！ お前はここで滅びろ！」

ブレードを振り上げるネクロフィリア。

しかし次の瞬間。

「がはっ…！」

体勢を崩すネクロフィリア。

ネクロフィリアの腹にそっと宛がわれた左手から、重力波が放出されたのだ。

「まだまだあ！」

ネクロフィリアがブレードを振る。

デイクイオスは右腕でブレードをガードし、左正拳を打ち込む。
ネクロフィリアは、右腕で拳をガード。

デイクイオスが“急所”へ右足を蹴り上げる。

ネクロフィリアは左腕でガード。しかしその瞬間、デイクイオスの左ハイキックがネクロフィリアの右肩を直撃した。

弾き飛ばされるネクロフィリア。

その瞬間デイクイオスは、亜空間コンテナから、フレスベルグを抜き、ネクロフィリアの頭を打ち抜いた。

「アーチャー！今だ！」

アーチャーから発射される荷重力弾。

吹き飛ばされたネクロフィリアが、ゲートのもつとも近くに接近したその瞬間、砲弾はゲートのパワーポイントへ寸分違わず命中。同時に、デイクイオスの右正拳突きがヒット。

三つの閃光はやがて一つになり、ネクロフィリアはゲートの中心へ吸い込まれてく。

波打つ境界面。

徐々にゲートは暗く、そして小さくなっていき、小さな点になった瞬間、まばゆい閃光とともに消滅。

ゲートのあつた場所の空だけ、雲がきれいに消えていた。

水平に、デッキに進入。

逆噴射で減速、そのまま甲板に着地。

脚の裏から火花が散り、崩れるように膝を突くHMA。

機体のあちこちから、煙が上がっている。

「収容急げ！」

「担架もつてこい！」

クレーンのブームがスイングし、HMAをワイヤーで吊り上げ瞬間、機体の膝から下が、『ガシャ！』と音を立てて、崩れた。

「一番デッキ着艦完了、二番デッキ着艦可能」

残った空母に、次々と着艦していくHMA。

どの機体もボロボロで、腕や脚の無い者、パイロットが意識を失っているものもいた。

「受け入れの出来るすべての艦は、ダメージの激しい機体から優先して収容！ 戦艦、駆逐艦、巡洋艦！ 使える艦はすべて使え！
すべての衛生部隊は生存者、及び負傷者の救出、収容に向かえ！
大至急だ！」

「了解！」

海面を漂う兵士達を救出していく救出艇。
意識の無い者。

既に息絶えた者。

着艦官制は、地獄のような忙しさとなった。

「シエーファアー01、着艦要請！」

レイズのラッシュハードロングが、空母にアプローチ。

「シエーファアー01、ロアデッキへ」

「こちらシエーファアー01、了解。負傷者がいる！ 救急班を！」

「了解」

レイズは空母のデッキに着艦すると、すぐにハッチを開け、サラのセーフティーバーを上げた。

「ごめんよ…サラ…君に負担を掛け過ぎたね…」

大きく掛かった負荷のせいで、意識を失っているサラを抱きかかえるレイズ。

彼はそのままHMAから降り、彼女を担架に寝かせた。

「お願いします。負荷を掛けすぎました」

医務室に連れて行く救急班。
それを見送ったレイズは、ヘルメットを脱ぎ、髪をかき上げた。
振り返るレイズ。
赤いレイズの機体から、熱膨張した金属が収縮する特有の音が聞こえていた。

収容を終え、白波を立てながら、海面を突き進んでいく艦隊。
時は既に夕暮れ時で、薄汚れた空の切れ目から、赤い夕日の光が漏れていた。

「やっぱり、ここにいたんですね」
空母の大きな窓の前に立ち、無表情で外を眺めるグラムに、エステルが話しかけた。

無言のグラム。

「大佐は、戦闘の後、時々空を見ていますね…」
グラムの横に立ち、一緒に空を眺めるエステル。

「…時々無性に、空が見たくなる。なぜかは分からない…」
「空…」

「昔は青かった空も、今は真っ黒だ。だが、夜が来れば、何も分からない…すべてが黒だ…」

太陽はやがて沈み、彼の言う通り、すべてが、『黒』になった。

真っ暗な空…

真っ暗な空気…

すべてが一つになり、夜を形作った。

「…ねえ、グラム…どうしてあの時、リベカに止めを刺さなかったの？」

「……」

「あのままなら、簡単に止めを刺せたでしょう？」

無言のグラム。

エステルは彼の横顔を見つめた。

「分からない…ただ、何かが…」

グラムは言葉を濁した。

「…そう…」

エステルは、もうそれ以上聞かなかった。

「もう、心配ありませんよ、軍曹。一時的なシャットアウトです」
サラの容態を説明する軍医の言葉を聞いたレイズは、安堵の表情をした。

「今は、このまま静かに寝かしてやれば、すぐによくなりますよ」

「よかった…」

レイズは、ベッドに眠るサラの髪を撫でて、優しく微笑む。

「大丈夫かい？サラ…」

ゆっくり目を開ける彼女。

「…レイズ軍曹…」

「よくがんばってくれたね…ありがとう」

「私…また、意識を…」

「いいんだよ…サラ…」

「え…？」

「君が無事なら、それでいい…」

「レイズ…」

微笑む彼。

「やっと、名前で呼んでくれたね」

「お気に触りましたか…？」

「いや…いいんだよ。それでいいんだ」

彼はそう言うと、ゆっくり立ち上がった。

「じゃあ、後はよろしくお願いします」

敬礼して、医務室を出るレイズ。

部屋を出た途端に、誰かが彼に話しかけた。

「どうだった、レイズ。機体の調子は」

「大佐…」

「どうだ、彼女の様子は」

「ええ、大丈夫です。サラが、出力を出してくれなかったら、自分

は今頃…」

「まだまだ…いや、及第点…といったところか…」

肩をすぼめるレイズ。

レイズに背を向け、歩き始めるグラム。

「サラ…か…良い名前だな…レイズ…」

彼はそう言うと、背を向けたままゆっくり去っていく。

自然と笑顔になるレイズ。

彼は、靴のつま先をそろえ、姿勢を正して敬礼した。

「ACT 6」終

? A C T 7 c o n s i d e r s ? (前書き)

何を思って人は戦うのか。何を思って人は生きるのか。

? A C T 7 c o n s i d e r s ?

C a p t u r e 1

「ビンセントの場合」

「ぬぶあー!」

目を覚ましたビンセントの耳に入ってくる電子音。

それは一定リズムを刻んでいた。

「どこだ…ここは…」

ビンセントは、自分の腕を見た。

点滴のチューブが繋がっている。

身体を起こす。

背中に走る鈍痛。

「いででで…」

腰をさすり、周囲を見回す。

点滴のハンガー。心電図。酸素瓶。

どうやら病院の様だ。

口の中がべたべたする。

長い時間寝ていた証拠だ。

「何で…?」

一時的な、記憶の錯乱。

ビンセントは、記憶を遡った。

「確か、なんか戦闘に巻き込まれて、ドンパチして、あーで、こー

で…あれ?なんでこうなってんだっけ?…。そうだ!思い出した!

事故ったんだ!」

記憶を取り戻すビンセント。

それは三日前の記憶。

「空母!アプローチに入るぞ!」

ビンセントのロンギマヌスは、今にも分解しそうだった。
煙をあげ、あちこちから火花が散っている。

「うわー…うわー…嫌な振動…もう少し、我慢してくれよ？相棒」
コクピットにまで伝わる嫌な振動。

ビンセントは、心配しながらも、空母のデッキへアプローチに入
った。

「もうチヨイ…もうチヨイ…」
今のところ順調。

しかし次の瞬間、『ボンッ！』と、ロンギマヌスが背面から煙を
吐いた。

コクピットに響く警告音。

重力制御、機能停止。

一気に機体に加重が掛かる。

「ぬおおおお！？」

機体の脚が、乱暴にデッキに突いた。
膝がきしむ。

加重を軽減しなくては。

ビンセントはバーニアを噴いた。

ノズルから、勢い良く出る煙。

バーニアも故障。

機体の膝が砕けた。

ものすごい勢いで転げる上半身。

「ぎゃあー！ー！」

ビンセントは機体の腕で、コクピットをガード。
まだ転げる。

やがてクレーンの根元に当たり、停止。
ビンセントは、そのまま意識を失った。

「くそー…あれもこれも、全部あの野郎のせいだ…！」
拳を振るうビンセント。

すると、部屋に看護婦が入って来た。

「もう、大丈夫みたいですね」

「（お……？ 美人）」

鼻の下を伸ばすビンセント。

「なあ、看護婦さん？」

「はい？」

「どこどこ？」

「病院ですよ？」

看護婦は、一本の注射器を取り出した。

「……？ 看護婦さん、それ何？」

「注射器ですよ？」

看護婦は、ビンセントの腕に繋がる点滴のアンフルに注射器を刺し、中の薬剤を注入。

「そつ、それつてまさか、ます…ほふぁ…」

ベットに仰向けに倒れるビンセント。

看護婦はそれを確認すると、受話器を取った。

「はい。異常ありません。ええ、可能です」

看護婦は、二言三言喋ると、受話器を置いた。

華やかなのパラー。

美しい女性達。

ビンセントはグラスを片手に葉巻を吹かし、美女をはべらかしていた。

「わはははは！ みんな楽しめ！」

「あん、ビンセントさあん…私こんなところより早く、部屋に行きたいなあ…」

ビンセントの胸元を、いじらしく指でなぞる美女。

「おお？ そうか！ そうか！ それじゃあ…」

「あーん…ずるいー、わたしもお…」

次々に集まる美女。

「わははははは！ OK、OK！ 俺様なら5人までおっけー！」

「もう、ビンセントさんたらあ…」

幸せの絶頂のビンセント。

次の瞬間、自分を残して、すべてが消えた。

「おーい！ みんなどこだあー！ おーい！」

返事が無い。

周囲を見渡せば、限らない闇。どこまでも闇。

「おーい！ 悪い冗談はよせて！」

ビンセントは叫んだ。

「どこいったんだよ…俺の、俺の…」

闇が晴れる。

「パラダイス！！！」

次に眼に入ったのは、GRAMだった。

「…パラダイス？」

「パラダイス。あはは…」

眼を逸らすビンセント。

周囲を見回せば、そこは、床、天井、壁、すべてがアクリル張りの照明で構成された奇妙な部屋だった。

「どこだ！ ここは！」

ビンセントはGRAMを睨む。

「ここは、サンヘッドリン本部の取調室だ」

「取調べだあ？」

気付けば、彼はイスに座らされ、手錠と鎖でつながれていた。

「何のつもりだ！コラア！」

イスを『ガシヤガシヤ』と揺らす。

当然、抜かれる訳が無い。

「ビンセント・キングストン」

「あああ？」

「貴様を6件の重要施設に関するテロ行為、および、12件の殺人、3件の公務執行妨害で逮捕する」

「ガルスの場合」

マグカップを傾け、コーヒーを口に運ぶ。

香ばしい香りがロー杯に広がる。

マグカップを置き、机の上に山積みになされた書類に目を通し、必要ならばサインをしていく。

『彼女』の入れるコーヒーは、逸品だ。

これさえ有れば、面倒な『公務』も、苦痛無くこなして行ける。

ガルスは、数十枚の書類に目を通すと、コーヒーを一口飲んだ。

突然、机の上の電話機から、コール音。

「私だ」

「司令、0番回線でお電話です」

0番回線とは、秘匿回線の事。

ガルスは不信に思いながらも、受話器を取った。

「私だが？」

「お久しぶりですな…ガルス中将閣下」

「これは、アングリフ局長…。2年ぶりですか？」「聞いたことのある声。」

声だけで、ガルスは電話の主を悟った。

「で、治安局のドンが、直々に…何の、御用ですか？」

「単刀直入に申し上げます。そちらで拘束されている、例の傭兵を引き渡して頂きたい」

「『例の傭兵』とは、ビンセント・キングストンの事ですか？」
暫くの沈黙。

「奴は、我々が二年の歳月を掛けて追っています。好い加減終わりにしたい」

「奴は、死亡しました」

「死亡!？」

アングリフは、思わず声を上げた。

「例の海上交戦で、偶然、戦闘に巻き込まれ…」

「閣下、茶番は止しましょう。長期に渡って、我々は彼を追ってきました。我々の苦勞も察してください」

受話器の向こうで、意味ありげに笑うガルス。

「それは、残念でしたな…我々のせいで、貴重な目標人物を無くしてしまつて…。どうですか、局長。お詫びの印に贈物を差し上げると言うのは」

「と、申しますと？」

「軍の兵器ラインの一部を譲渡しましょう」

また沈黙。今度はとても長かった。

「相変わらず、無茶な交渉をするな…ガルス」

「無茶は承知の上だよ。アングリフ」

お互いため口で話し、少し笑う。

「では、御協力に感謝します。閣下」

「こちらこそ、局長殿」

そう言つとガルスは、受話器を置いた。

一つ溜め息をついてから、コーヒを一口。

眉間にシワを寄せるガルスは電話機の通話ボタンを押した。
「レイラ君、すまんが新しいコーヒーを持ってきてくれ。冷めてしまった」

彼はカップを置き、渋々、書類の整理を再開した。

Captur 2

「逮捕だと!？」

ビンセントは、鋭い目付きでグラムを睨んだ。

「お前は反統合組織アストレイに雇われ数々のテロ行為をおこなった。四つのカウンテーターからの指名手配、国際条例法違反、新統治治安法違反、破壊活動禁止法違反…。すべてあわせて、死刑。それを免れても、2500年以上の禁固刑だ」

グラムの言葉を聞いて、ビンセントは不適な笑顔をしてから言い返した。

「へっ！俺も立派になつたもんだな…なあグラムよ」

「やけに冷静だな…」

「こんな稼業をしてるとな…『死ぬ』つちゆう事を考えなくなつちまう…。敵に捕まって殺されるか…戦場で死ぬか…。そんな事どうでもよくなつちまうもんなだよ」

彼はグラムにそう言うと、天井を仰ぐ。

「で、ミラーズ大佐さんよ…俺をどうする気だい？ どうせ、治安局に引き渡すんだろうけどよ…?」

「いや、引渡しはしない」

「何？」

思わず、グラムの目を見るビンセント。

「治安局には引き渡さない」

「…俺を、取引き材料にしようってか？ 俺ほどにもなれば、大層

な取引ができそうだな？」

突然グラムは、眉を吊り上げて声を荒げた。

「自惚れるんじゃない、ビンセント！ お前がやってきた事など、糞の足しにもならん唯の犯罪行為だ！」

この言葉を聞いて激昂するビンセント。

「糞の足しにもならねえだと？ ふざけんな！ なんで俺がこんな事してるか、てめえは分かってんのか！？」

グラムは、冷静に言い返す。

「知らん。知りたくもない！」

「いや、聞け！ そして知るんだ！」

ビンセントは、上がった息を落ち着かせてから、言い聞かせるように、グラムに語り始めた。

「まだ大戦中の、俺達がアフリカ戦線にいた時だ。俺達は伸びきった補給線と、前線で敵を叩き続けて、辺り一帯がノーマンズランドになって、戦況が膠着状態になった。俺は言ったせ？ 『今、増援を要請して、俺と、てめえの部隊で突撃をかければ、ヤれる』ってな……。だが、増援も突撃も無かった。その三日後だ。いきなりお前の部隊が撤収する事になったのは……。撤退の理由を聞いても、てめえも、誰も答えなかった。正規軍じゃねえ俺達には、てめえらを引き止める事なんてできねえ……。おめえらはコンテナ2つ分の弾薬だけを残して行っちゃった……。そして、その後すぐだ……。いきなり敵の猛攻があった……。戦力を立て直した敵軍は、俺達の左翼と右翼から、機甲部隊を3個中隊も当ててきやがった……。俺達は必死に戦ったんだぜ？ それでも、敵の大戦力に敵う訳がなかった……。前線は総崩れ……。防衛線の切れ目からなだれ込んだ敵に、仲間はずらにやられていったよ……。俺達は、お前達に救援を求めた……。何度も……。何度も……。救援は……。結局来なかった……。部隊の仲間は殆ど全員死んだよ……。俺も、死にかけて……」

二人の間に流れる、長い沈黙の時間。

「……………」

ただ、沈黙するだけのグラム。

「俺が、ヤバイ橋を渡ってでもこの仕事を続けてんのは、その時死んだ奴らの女房や、ガキ達を食わしてやる為に、やってんだよ…。解るか？グラム…俺の言っている意味が…！」

ビンセントは、グラムを強い眼差しで睨んだ。

「言いたいの…それだけか？」

全く意に介さないかのような表情でビンセントを見つめるグラムを見たビンセントは、諦めるかのような表情で溜め息をついた。

「ふ…こんだけ言っても無駄か…」

ビンセントは崩れる様に、背もたれに寄り掛かる。

「ビンセント、一つだけ聞きたい事が有る」

「何だ…？」

「クライアントは、キクチ金属工業か？」

「違う、菊池は関係ない」

「…お前は…何の為に、闘っているんだ？」

「過去を精算するためだ。金の為だけじゃない…自分の過去を、自分の命と、戦いで精算し続ける為に闘ってんだ。それ以上でも、以下でもねえ」

グラムとビンセントは、お互いの顔を見合った。

長い沈黙。

グラムが、ビンセントに言った。

「過去など、無価値だ…」

「悪い事も、良い事も…過去の自分が、今の自分を創っているんだ…無価値なんかじゃねえよ」

「死ぬ時は、全て無に帰るんだぞ？」

「その時や、良い事だけ思い出して、ニッコリ笑って死ぬさ…」

「笑って死ぬ…か…。しかしな、ビンセント。お前は既に死んでいる」

「は？ 何！？」

ビンセントは目を見開いた。

「お前は既に、死んだ事になっている。統治局にも、治安局にも、お前の名前は無い。もちろん、お前の自治区にも、通知が行っている」

「そ、それじゃあみんなはどうなるんだ!!」

グラムは威圧的な態度で、ビンセントに言った。

「お前に残された道は二つ。我々に協力するか、しないかだ」

「しない場合は？」

「その場合は、一生幽閉される事になる」

「どっちにしてもゴキゲンだな…」

そう言っつて不敵に微笑むビンセントに、グラムがりモコンを向けた。

高い電子音が鳴り、音を立てて床に落ちる手錠。

「どうゆうつもりだ？」

「よく考えろ…お前自身の為にも、そしてお前の『家族』の為にも…。どっちが最善かをな…」

グラムは、ビンセントに背を向け、部屋から出て行った。

ビンセントは、グラムの背中を見ながらそのまま部屋に残り、腰をかがめたまま目をつぶり、過去を回想する。

ビンセントの脳裏に響く、『過去』の声。

『ビンセント！救援は!?!』

『さつきからコールしてる!』

『このままじゃ全滅しちゃう!』

『くそ！こつちも、弾が尽きた!』

『終わりか…!』

『まだまだ！おめえら諦めんじゃねえ!』

『じゃあな…ビンセント…!』

瞼を閉じれば、その時の場景が今も甦る。

この声を聞く度に、彼の心は激しく疼いた。

廊下から聞こえる喧騒。

突然、何者かを制止する兵士の声が聞こえ、ビンセントは顔を起こした。

「困ります！エステルさん！」

「少しいい。少し話ができれば」

「しかし…！」

「大丈夫。大佐には許可をもらっているから」

「……本当に少しですよ？」

「ありがとう」

話声が止むと、今度は女性物の、靴の足音が聞こえた。

足音が止まり、扉が開く。

「少し…お話しませんか？」

Captur 3

レイラが、ガルスのデスクにコーヒーの入ったカップを置いた。

「すまん…」

「司令…もう5杯目ですよ？」

「うむ…どうも落ち着かなくてな…」

「彼等の件ですか…？」

「むっ…」

「私が意見するのは僭越ですが…」

レイラは、心配そうな表情で、トレーを持つ手に力を込める。

「私は、彼を部隊に迎え入れる事は反対です…彼のような『傭兵』を迎えるのは、部隊の威信に関わります…」

「レイラ君、それは奴が、信用出来る人間ではないと言いたいのかね？」

「はい…」

ガルスは椅子の背もたれに寄り掛かり、一つ、そして深く溜め息

をついた。

「レイラ君…君は『九尾の狐』を知っているか？」

「はい。知っています」

「事実を…知ってはいないだろうか？」

「事実…ですか？」

「そうだ…消された事実だ」

ガルスは、コーヒを一呑み、ゆっくり語り始めた。

「2183年3月、終戦間際の、私がまだ人間と戦争をしていた頃だ。私の指揮していた機甲軍団右翼が、敵の猛攻にあい、防衛線が壊乱。結果、右翼第2軍と左翼第4軍との間に、東西40kmにも及ぶ空隙が生じ、そこに敵機甲軍団がなだれ込んできた。これを憂慮した私は、当時少佐だったミラーズの指揮する部隊に、護衛の傭兵部隊を付け、前線の強行偵察を命じた。彼等にとつて、酷な任務だったと思うが、敵にとつては非情なまでに不運だった。ミラーズは、強行偵察を行うまでもなく、的確に前線の状態を把握しきつていた。そして彼等は、この空隙を自分達で防衛する事を決意した。しかし、対する敵は、二個大隊もの機甲戦力を当てており、彼等は成す術もなく壊滅するかの様に思われた。しかし彼等は、友軍が戦力を立て直すまで、実に3日間もの間、敵を阻止し続けた。彼と傭兵部隊の長は、凄まじいまでの戦闘力を発揮し、結果、友軍の増援部隊が到着し、敵の進撃は頓挫する事となる。何より敵は、狭い区域に戦力を当て過ぎていた。ミラーズの指揮する部隊は、その驚異的な戦闘能力のせいで、大隊規模の戦力と誤認されていたからだ。だが、実際はミラーズ…いや、ヘルファイヤードラムの指揮する部隊の戦力は、僅かHMA9機のみだった。部隊の名は、『ナインテールフォックス』、傭兵の名は、『ヘルゲートビンセント』と称されるビンセント・キングストーン…彼等は後も、前線で戦い続け、敵に大量の出血を強いた」

ガルスは、マグカップを揺らしながら、遠い目で天井を見る。

「だが、この奇跡には、悲惨な結末が待っていた。戦況が膠着状態

になった時、ミラーズの部隊に、撤収命令が下された。すでに英雄視されていたミラーズの戦死を、異常なまでに危惧した軍上層部が、彼等に転戦を命じたからだ。…この時、最終命令を下したのは、私だ。結果、彼等は、この戦線を離れる事となった。しかしそれは、軍上層部が、敵の再進攻を事前に察知していたからだ」

「傭兵達を捨て駒にした…？」

「そうだ。結果、戦力を立て直した敵軍が突如として強襲し、残された傭兵部隊は、壊滅した…」

言葉を交わさぬまま、暫く沈黙するガルスとレイラ。

「…なぜ、彼でなければならぬのです？」

「ビンセントは事実を知らぬまま、私ではなく、ミラーズを恨んでいる。仲間を多く失った彼は、事実を知る権利がある」

それを聞いたレイラは、俯き、苦悩の表情を見せた。

「余計…賛成できません…。もし、そうすれば、彼は司令の事を憎むかもしれませんが…司令は、命令に従っただけなのに…」

「レイラ…」

「は…い…？」

「お互い、憎んでいようと無かろうと、彼等は無二の戦友だ…ビンセントは、グラムの事を心から憎みきれていない。彼はどうしたらいいか解らないのだ。それに…」

ガルスは言葉を詰まらせた。

「司令…？」

「…私は、憎まれても当然な事をした。これも私の責務ならば、私は甘んじて受けるつもりだ。若者は生き、老人は姿を消す。この世の摂理だ。彼等に罪はない。罪人は私だ」

「だめです」

「レイラ君？」

レイラが、優しくも悲しそうな顔でガルスに言う。

「いつも、そうやってご自分のせいにして、全部背負って…そんなの、だめです。何でもおっしゃって下さい…私が出来事なら、な

んでも力になりますから…私じゃ駄目ですか…？」

ガルスは彼女から目を逸らし、椅子から立つと、後ろを向いて窓から外を見た。

「君のコーヒーは、幾ら飲んでも飽きないな…」

微笑むレイラ。

「おかわりしますか？」

「うむ…」

くるりと向きを変えるレイラ。

「レイラ君」

「はい？」

「ありがとうございます」

レイラは嬉しそうな笑顔をしてから、部屋を出た。

「それでよ…俺にどうしろって言うんだい？」

ビンセントは鋭い目付きで、エステルを睨んだ。

「私は、話をしに来ただけです。どうするかは貴方が決めてください。『人間』には、『自由意思』があるのでしょう？」

「お前さん、『イクサミコ』か!？」

エステルはビンセントに背を向けた。

「それと…大佐は亡くなった傭兵の方々の名前を、全員覚えてらっしゃいたした。その名は今も、中央広場にある戦没者名碑に刻まれていますよ…」

エステルはそのまま部屋を出た。

無言のまま見送るビンセント。

扉が、重い音を出して閉まる。

「くそ！」

彼は椅子から立ち上がり、壁を拳でおもいつき殴り付けた。

皮膚が裂け、血が床に落ちた。

「大佐は何度も、貴方達の救援に行かして欲しいと、求めたそうです。でも、上層部が許可しなかった…。大佐は貴方から貰ったお酒を、一口も飲まずに今も大事に取ってあるんです。大佐は私に言いました。『これは大事な友人の為に取ってある酒なんだ』って…。いつかまた何処かで再会した時に飲む』って…。彼は、貴方が必ず生きていると信じていましたよ？」

ビンセントの心に、エステルの言葉がこだました。

彼は、血の滲んだ拳をさすりながらつぶやく。

「ちくしょう…：利き手で殴れなくなっちゃった…：」

ビンセントは扉に近付き大声で叫んだ。

「看守さんよう！」

「なんだ？」

「死ぬ前に、外の空気吸いたいんだけど」

彼は電子ロックの手錠と拘束衣を付け、外に出た。

Captur 4

彼が外に出た頃には、街は既に夜中だった。

人の替わりに、街灯が立ち並び、道を照らしている。

涼しい風が、彼の頬を撫でた。

手錠と拘束衣が無ければ最高の夜だ。
背伸びが出来ないから、深く深呼吸。
澄んだ空気で肺を満たす。

「中央広場まで案内してくんない？」

ビンセントは、武装した3人組の監視員の一人に言った。

三人は顔を見合わせ、そのうちの一人が、『付いて来い』と、顎で合図。

監視員は、ライフルのグリップをハイマウントで持ち、一人が前に、残りの二人がビンセントの後ろに立ち、中央広場まで案内して行った。

『中央広場』は、サンヘドリン施設の近く、ドーム都市の調度ど真ん中にある公共広場だ。

地面に人造大理石を敷き詰めた豪華な造りで、広場の真ん中には大きな噴水がある。

バロック式の芸術的な物で、大昔の有名な彫刻家の作品を模したものらしい。

夜にはライトアップされ、幻想的な雰囲気と、美しい光を発する。そして、ホログラフで作り出された無数の書き板が、その周囲を周回している。

数多の人名が刻まれたそれは、第四次大戦勃発以後、戦闘で命を落とした兵士の名前が刻まれている。

だが、民間人や、正規軍以外の戦闘員が、ここに名が刻まれる事は本来無い。

彼はその噴水の前に立ち、そのホログラフに眼を留め、その中から、かつての戦友達の名を探そうとした。

透明のホログラフ画面に、白色で刻まれた見ず知らずの名前を、眼で追いながら。

だが、彼は途中で探すのを止めた。

『どうせ嘘かも知れない』と、思ったのも理由の一つだが、他にも一つ大きな理由があった。

無数の書き板に記された膨大な数の名は、百年と言う異常な長さの戦争の中で死んでいった人々が、どれほど多いかを嫌でも分からせてくれる物だった。

ほんの一瞬でも、戦友達の死が、その異常な戦争の中では小さな物と思ってしまうた彼は、自責の念に駆られ、彼らの名前を探すことを止めた。

彼はベンチに座り、空を見た。

雲ひとつ無い夜空だった。

ビンセントは、一つため息をついてから、ゆっくり立ち上がった。周囲を見回すビンセント。

すると、噴水の向こう側に人影が見えた。

そこにはグラムの姿が。

彼はゆっくりベンチに歩み寄った。

ビンセントに銃を向ける監視員。

「よせ」

グラムの一声で銃を下ろす監視員。

グラムの横に座るビンセント。

その他人行儀な表情のグラムを見て、彼は言った。

「ケジメ…つけようじゃねえか…」

暫くの沈黙。

「何で、俺達を見捨てた？」

彼は躊躇うことなく、グラムに問い質した。

無言のグラム。

そんな彼に、ビンセントは言った。

「うちに居たダッジは、かみさん貰って、ガキが生まれたばかりだった…リコは10歳になる妹がいた…アルバは…」

「…帰ったら、結婚する恋人がいた…」

グラムが、相槌を打つ様に言った。

一瞬ため息をつくビンセント。

「おめえが死なせたのは、そう言う連中だ…」

ビンセントはグラムにそう言うと、大きく空を仰いだ。

「…何で、こうなったかも分かんねえままな…」
無言のグラム。

「また、だんまりか…」

そう言うとビンセントも、空を仰いだまま沈黙し、そのまま時間だけが流れた。

長い時間をはさんで、ビンセントがグラムに言う。

「何で、本当の事を言おうとしねえんだ？」

グラムを睨むビンセント。

「銀髪の女の子に、聞いたぜ？ 一部始終全部な…」

「（余計な事を…）」

グラムは俯いた。

「前から思ってたんだけどよ…お前、マゾの気でもあんのか？」

ビンセントは、素っ頓狂な質問を真面目な顔でグラムに問い質した。

「何を言い出すんだ…？」

「おめえ、他人にどんなに悪く言われても、悪い噂が立ってても、反論どころか、否定さえしねえ…一体なんなんだ？」

答えるグラム。

「他人がどう思っているかなど、関係ない」

言葉の通り、何処か他人行儀なグラムを見て、ビンセントは言った。

「おめえ…友達いないだろ？」

グラムの口の中に広がる、苦い感覚。

「それが一体どうした？」

彼は踵を返す様に言った。

「おめえは、何の為に戦ってたんだ？」

グラムは堰を切ったかの様に語り始める。

「ただ漠然と存在する記憶と、選択の無い道筋…私に与えられたのは唯それだけだ。私に与えられたのは、兵器の部品となって戦うこ

と…それしか知らない」

答えるビンセント。

「銀髪の子は、俺にこう言ったんだ…『人には、自由意思が有る』
ってな…だからせめて、今は自分の為に戦ったらどうだ？大義名分
なんか、後から考えりゃいい」

「ビンセント…お前の自由意思は何だ？」

「戦ってやるよ。何より自分の為にな…」

彼はそう言うと、ベンチから立ち上がった。

「そうだ、煙草くんない？」

「煙草は吸わん」

「うん、知ってる」

「……？」

「変わってねえな…お前…」

ビンセントはそう言い残し、監視員に連れて行かれた。

「それで、彼は何と？」

夜更けにも関わらず、エステルはグラムの部屋で、彼の話を聞いていた。

すべてを話すグラム。

そして一応に聞き終えると、彼女は言った。

「グラム…私がしたことは、余計だったかしら？」

グラムは首を横に振った。

「そっ…よかった…」

椅子から立ち、ドアに向かうエステル。

「エステル……」

その時グラムは彼女を呼び止め、彼女が振り返るより早く、後ろから抱きしめた。

「……どうしたの？」

「すまん……少しだけ、こういさせてくれ……」

何処か悲しそうなグラムの顔を見て、彼女は何も言わずに、グラムの腕に手を重ねた。

その頃ビンセントは、看守に引かれながら一つのことを思い出した。

「ん……？ 何か忘れてるような……？」

「サンヘドリン拘留所」

牢内で叫ぶハリー。

「旦那……俺はどうなるんっすか？ おーい……旦那？……寒い……」

「ACT 7」終

ACT 8 赤銅騎（前書き）

サンヘドリンへ入隊したビンセントだが、彼には心残りがあった。

ACT 8 赤銅騎

Captur 1

「サンヘッドリン本部中央会議室」

「戦艦、駆逐艦、巡洋艦、空母……、一個体のヴァリアントによるものとしては、史上最大の損害です」

「それに超空間ゲートによる大規模強襲……、脅威に他なりませんな、中将」

会議室に集まった将校達を前に、ガルスは腕を組んだまま答えた。「例の新型は？」

情報軍団のハルト准将が立ち上がって答える。

「はい。まだ解析の途中ですが、現在のところ、どの系統のヴァリアントスにも属さない独立した構造を持っていることがわかりました。それと、このヴァリアントが発した言葉から、これは“有人機”であるとおもわれます。奴らは今後、次々に新型を開発して、実戦へ投入してくるでしょう……」

ざわつく会議室。

「有人機だと!？」

「アレには人が乗っていると云うのか!？」

将校達のざわめきに答えるハルト准将。

「“人”とは言いません。ただ、限りなく人間の思考に近い何かに乗っていると分析できます」

むう……と、声を絞り出す将校達。

「故に我々は立ち止まる事が許されない」
ガルスが冷静に言う。

「支部建設に新型機の導入：やらなければならない事は山積みだ……」
中央に映し出されるホログラム。

「世界7カ所に建設予定の支部施設：特別に教育した管理官を置き、二個大隊規模の機動戦力を配備。本部メインコンピューター『ユグ

ドラシル』と、超大容量高速通信回線で接続し、リアルタイムでの情報交換を行う」

ホログラム画面の内容が切り替わった。

「次期主力機体の開発には、複数の企業が参入することが、統合体での決議によって決定した。試作機は、従来通り、トライアル期間を経て決定する」

画面が消える。

「この戦争は、何としても勝利せねばならない。地球上の全被造物の為に…『サンヘドリン（最高法廷）』の名の下に、敵対者に滅びを…！」

彼は自分の機体を遠目で眺めた。

両腕は碎け、辛うじて上腕の一部と、肩フレームが残っている。

両膝は碎け、塗装もはげ落ち、つまりは、鉄屑だ。

HMA h1AV・火星圏用カスタム機。

彼が、火星での『仕事』の為に手を加えた機体だ。

彼の手元に来た時は、ノーマルの機体だったが、彼自身がやりくりして、個人的にチューンした物。言うなれば、手塩にかけたパートナーだった。

それが今ではただの鉄塊で、動かすどころか、起動さえできない。彼は一つ大きく溜め息をつくと、手袋をはめ、プラズマトーチとバールを持った。

「装甲、ひつぱがすか…」
彼は、この機体を修理しようとしていた。

数分前

「そういやさ、俺のロンギマヌスって今どこにあんの?」

一応の入隊手続きを終え、部屋のキーを受けた彼は、その事を報告するついでに、自分の機体が今どこにあるかをグラムに聞いた。

「あのスクラップか?」

「ス、スク…!? え!? ひど!」

「25番ゲージに保管してある」

それで今、彼はその25番ゲージに居る。

トーチに火を入れ、装甲に切れ目を入れていく。

装甲が歪んでいて、ピンを外せない。強引に切り取るしかない。

プラズマジエツトがチタンの表面装甲に熱を入れていく。しかしチタンはチタンでも、特殊鋼だ。なかなか切る事が出来ない。

やっとの事で表面装甲に切れ目を入れ、隙間にバールを差し込む力を込めて思い切りこじる。軋む様な音を立てる装甲板。

額から汗が流れ落ち、装甲の上で蒸発した。

ゲージ内の空調が入っていない。構内の勝手が解らない彼は、道具を使えても他の設備を使えなかった。

「くそ! あつちい!」

トーチも使い、身体を動かした彼にとって、今室内は蒸し風呂状態。気温36度。

腕で汗をぬぐい、ハンマーを手に取って装甲を叩く。

構内に打撃音が響き渡る。

しかし。

「だー! くそ! 油圧カッターが無きゃ取れねえ!」

びくともしない装甲板に、諦め工具を投げ出すピンセント。

その時。

「お前がこいつの持ち主か……」

ビンセントは声のする方を見た。

「あん……？」

「兵隊のくせに、自分でメカいじるたあ珍しい奴も居たもんだ」

そこに居たのは、作業用ツナギを着た、初老の男。

「おっさん誰？」

男はビンセントにミネラルウォーターのペットボトルを投げ渡した。

「俺は唯の技術屋。ここで術長やっとなる」

「ふーん……」

ビンセントは水を一気に飲み干し、気の無い返事を返す。

男が問う。

「で、どうする？ こんなスクラップまた修理して乗り回す気か？」

「あんたにや関係ないでしょ？」

術長は一瞬笑ってからビンセントに言った。

「可愛いげの無いガキだ。この機体とそっくりだよ、まったく……」

「勝手にいじったのか？」

「なに、ちよつと覗いただけだよ。かなりいじつとなる……。炉

心は、リミッターを解除してROMチューン。ハイコンプレッションタービン四基に高性能レーザークーラー。駆動系は高密度鍛造ハイコンプシリンドーを入れ、足回りの電磁気サスを強化。防塵処理は完璧……。素人でここまで出来れば上出来……と言いたい……」

「なに？」

「自分で気付かんのか？」

「足回りも変えたし、出力アップもしてある。冷却系も強化してるし」

ビンセントの言葉を遮る術長。

「これだから解っちゃいねえ……」

眉間にしわを寄せるビンセント。

「何だよ！ 何がいけねえって言うんだ！」

術長は冷静に言い返した。

「重力制御、イカレただろ？ 後を追う様にバーニアも」

「……ああ」

「第一、起動が遅かっただろ？」

「……」

全ての異常を言い当てる術長。

「やっぱりな。お前、こいつの修理諦める」

「な、何？」

「故障の原因は戦闘ダメージだけじゃなく、お前のせいだ」

「え、ちよつ、ちよつと待てよ」

「解ったら、また来い。手伝ってやる」

術長は捲し立てるようにビンセントにそう言うと、ゲージの電源ブレーカーを落とし、出て行った。

照明が消え、換気扇が止まる。

ビンセントは、いびつな形に変形したロンギマヌスのシルエットを暫く眺め、ペットボトルを遠くに投げた。

Captur 2

『痛いよ……』

小さな、消えてしまいそうな声。

『脚が……腕が……お腹が痛い……』

『痛い……助けて……お願い……助けて……』

ビンセントがベッドから飛び起きた。時計を見れば、まだ夜中の三時だった。

ずっとこんな調子だ。最初は飛び上がって目を覚ましていたが、こんな夢が三日も続けば、慣れてしまう。

慣れてしまおうが、彼は非常に不快に感じていた。

部屋に荷物も入れたし、元通りとまではいかないが、生活のペースも取り戻した。だが、彼にとっては、一つ大きく欠けている物があった。

『ロンギマヌス』だ。

この三日、何度修理に行っても術長に『帰れ!』と言われる始末。いつその事、得意の“サボタージユ”で術長を消そうと考えたが、『多分、グラムに殺されるだろう』と思いきえ直した。

「何がいけないんだ……?」

ビンセントは、ようやく『原因』を考慮し始めた。

と、その前に、身体をベッドから下ろし、シャワー室へ。早めの朝湯を浴びた。

「ビンセントが?」

「ええ。最近、長髪の男が出入りしてって技術部の人達が話してるのを聞いて……。どうやらあの機体を修理しようとしてるみたいで」

「そうか」

グラムは意に介さないかの様な返事。

「でも、彼には既に新しい機体が充てられているのでしょうか?」

「ああ。まだ言っていないがな……」

「言ってきます?」

「まだ暫く放っておけばいい、エステル。男には、終わらせなければ、どうしても気が済まない事がある」

エステルは苦笑して言った。

「人間の女性は、苦勞するわね……」

巨大なゲートが重苦しい音を立てながら開き、その中へ、それはまた巨大なトレーラーが入ってきた。

外見ではタイヤなのか、ホバーなのかが分からない大型の駆動装置が両側に、合わせて八つある、本当に巨大な『輸送車』だ。

誘導員の指示を聞きながら、ゆっくりバックで入ってくる“それは、低い唸り声を上げながら、圧縮空気の噴射音を鳴り響かせ、停止した。

「よーし……、下ろし終わったら、すぐに換装と点検調整はじめるぞ」

術長が指示を出すと、『おー』とも『うー』とも聞こえるはつきりしない発音の返事が、作業員達から返ってくる。

「おい、サブ」

術長が、近くにいた若い技術者を呼んだ。

「うっす」

元気の良い返事。

「ちよっと、電算室行ってくつからよ、後頼むわ」

「あれ？ 術長、何かのバグ取りっすか？」

「いんや、昔の女を忘れられない哀れな男を、叱咤しに行くのサ…」

…」

「…ふーん、そうっすか」

術長が若者にコブラツイストをかける。

「てめえ！ 年長者の話は真面目に聞きやがれ！」

「ぎゃあ！ だってギャグにしか聞こえな…」

「このヤロ！ バカヤロ！」

「…ああああああい！」

合掌。

画面上を、HMAを模した点と線が躍動する。その動きに乱れは無く、滑らかに、素早く。

しかし突然、画面に警告のウィンドウが次々に出た。

重力制御機能停止

慣性制御不能

機体荷重過負荷

姿勢制御不能

推進機関機能停止

関節破損

機体大破

「うーん！ 分からん！」

ビンセントは技術部の電算室に籠り、自分の機体の起動ディスクをコンピューターに読み込ませていた。

駆動データを用い、機体の動きを再現してみる。が、何度試しても、結果は一緒だった。

ビンセントは眉間を押さえ、溜め息。

少々疲れてきた。彼は自販機に行く為に、ドアへ向かい、ドアノブに手をかける。

だが、次の瞬間、扉は外側から勢い良く開き、ビンセントの顔面に迫り。

「ぐっ！」

彼は、鼻柱を扉に強打。鼻を押さえ、うずくまる。

「痛つてえ！ おい、コラア！ 気をつけやがれ！ この馬鹿や…

…」

思わず、罵倒の言葉を飲み込む。

「ごめんなさい！ 急いでて……！ 大丈夫ですか！？」

膝を突き、手の平をひらひらさせながら慌てるグレン。

「あー、もう！ そそっかしくて、私たまにやっちゃうんです！
グレンがハンカチを取り出す。

「いやあはっはっは！ 何ともないよ、お嬢さん！」

ビンセントは態度を一変させ、爽やかな顔を見せる。哀れ、女好きの哀しい性…

「これも何かの縁！ この後お茶でも…」

「でも…」

困った顔をするグレン。

「嫌かい……？」

「あの、血……」

「うえ？」

ビンセントの鼻孔からは、たらりと血液が。
「（オーイエース……オレカツコワルイ……）」
彼は満面の笑顔で、鼻血を垂らした。

Captur 3

「本当に大丈夫ですか？」

グレンは申し訳なさそうに、ビンセントに言った。

「大丈夫！ 大丈夫！」

ベンチに座り、鼻にティッシュを詰め、鼻声で話すビンセント。

「君、メカニック？」

「いえ、私は開発部の方で」

「珍しいね。頭良いんだ」

「これでも一応物理学者なんですよ？」

「へえ」

笑いながら話す二人。

「そういや、急いでたみたいだけど……」

「そうだ！電算室！」

「今、何の研究してんの？」

ビンセントは愛想よく爽やかな表情。

「研究つて程の物じゃないんですけど……」

グレンは手元のファイルを見せながら説明。

「機体とイクサミコのマッチングチェックです。イクサミコのシステム周りをそのままに機体を換えると、イクサミコに過負荷がかかるんです。それで、イクサミコの換装無しでどうにかならないかって言われて……」

「へー……あれ？ 君、物理学者じゃなかったっけ？」

よく考えれば、グレンは“物理学者”だ。“電子工学”を任ずる

のは少々無理がある。

そんなビンセントの疑問を他所に、グレンは笑顔で答えた。

「最近では先攻だけじゃなくて、色んな方面も勉強する事にしましたんで、これでも、HMAいじれるんですよっ?」

「君はすごいなあ」

突然、ビンセントが何かに気付いた。

「(電子系? 負担? 機体変更?)」

閃き、一瞬。

「あ、そうか…」

いきなり、ビンセントがベンチから立ち上がった。

「え!?!」

驚くグレン。

「お嬢さん。ありがとう!」

ビンセントはそれを無視して、グレンの手を取ってブンブンと無理やり握手。

「え? え? え?」

何が何か分からないグレン。

そのとき。

「こらあつ! この野郎! 電算室に居ねえから、どこほつつき歩いてんのかと思えば、ナンパか、この馬鹿野郎!」

ビンセントを見つけた術長が目を吊り上げて声を張り上げた。

「バカ! ちげえよ! 話してただけだ!」

「術長さん!?!」

術長はビンセントの首根っこを腕で絞める。

「このスケコマシがああああ!」

「うごごご!」

強烈なチョークスリーパー。

「嬢ちゃんも、用事は済んだのかい!?!」

「ご、ごめんなさい! まだです!」

『しゅん』とするグレン。

突然、ビンセントが叫んだ。

「で！で！電装系！（鼻声）」

「何！？『変態系』？」

ビンセントは鼻のティッシュを取った。今度ははっきりした発音で。

「電装系！」

術長が動きを止めた。

「電装系のチューニングとグレードアップをしてなかった！」

暫くの沈黙後、術長が言う。

「……上出来だ」

ビンセントを離す。

「修理、させてくれんだろうな？」

「あれはもう、ゲージにはねえ」

「まさか、処分したんじゃないだろうな！？」

「ちげえ、バカ。3番ドックに移しといた。言っただろ？そん時や手伝ってやるってな」

意外な言葉にビンセントの表情が明るくなる。

「ほれ、行くぞ」

術長はそう言って、ビンセントを残したまま、ドックに向かった。後を追うビンセント。一旦、足を止める。

「そっいや、君、名前は？」

「あ、はい！ グレン。グレン＝ヴェジエです。あなたは？」

「俺は、ビン……」

ビンセントの襟首を掴む術長。

「いつまで、くっちゃべってんだ！ バカ」

引いて行かれるビンセント。術長の力は、かなり強力だ。

「だっ！ だっ！ ちよっ！ ま、待て！ あー！ またね〜！」
ひらひらと、手を振るビンセント。

グレンも手を振って答える。

やがてビンセントは、曲がり角を曲がり、姿を消す。

微笑むグレン。
「面白い人っ」

かくして、ビンセントは本格的にロンギマヌスの修理を始めた。
無論、術長のバックアップ有つての事だが……

さて、修理を始めたは良いが、ロンギマヌスのダメージは外見以上に酷かった。もちろん、脚部フレームは全取り替えて、下肢部のパーツは殆ど全て交換した。『背骨』も、外殻にヒビがあり、4番から15番までを交換した。

幸い、動力炉は無事だったので、交換せずに済んだが、電子系統は全取り替えだった。

ビンセントも術長も、お互い趣味と仕事を兼ねているような人間で、作業中は争い事も無く……

「だからあ！　ここのピッチはもっと詰めた方が良いつて言ってる！」

「そんな事したら、アライメントが狂うだろうが！　このボケがある！」

……多少の衝突は有つたが

「んだとっ！？　このクソジジイ！　もういつペン言ってみる！」

「おおっ！　何べんでも言ってるわ！　アホアホアホアホ！」

……お互いの馬鹿さを露呈しあいながら、5日の歳月を費やし、遂にロンギマヌスは元の形に修理されたのだった。

Captur 4

「あれ？ サブさん、今日も術長休みですか？」

若い作業員は、サブに聞いた。

「いや、来てるよ。ドックに籠ってなんかしてる。後で、3番ドックにあれ持ってこいって……」

「はあ……」

若者は、困った表情でうなずいた。

「……………」

「……………」

ビンセントと術長は、無言のままだった。

二人の眼前には、一機のHMA。

「出来たな……」

「ああ……」

「お疲れ。助かったぜ」

「なーに……楽しかったよ」

何か、落ち着いた雰囲気のある二人は、お互い固く握手。
ふと、思い出したように術長が問う。

「夢中になつて忘れてたよ…お前さん名前は？」

「ビンセントキングストン。傭兵だ……」

「俺は、ジェフニコルソン。ここでメカニックやっつる」

ビンセントと術長は、お互いの顔を見て頷く。

「それじゃあ」

ビンセントが答える。

「試運転といきますか！」

ビンセントは、機体にかげられたはしごを登り、コクピットに身体を滑り込ませた。

馴れた、懐かしい感覚。ハッチを閉め、深呼吸。起動ディスクを挿入し、起動コマンド入力。

モニターやコンソール類が光り、ジェネシック・インダストリー社のエンブレムが映し出される。

「Welcome...Osboot.Type 1.Stand by...」

コネクションチェック。いつもよりスムーズに。

「Complete」

ハンガールのロックが外され、脚のダンパーが沈み込む。

右足を、一歩踏み出す。

「よう。どうだ？」

「いい感じ」

「正面、開くぞ」

ドック正面のゲートが開く。

明るい光が、室内に差し込み、機体を照らした。それはまるで、長い幽閉からの開放の様に。

そのまま歩いて、ゲートをくぐる。

日の光を、機体全身で浴びる。外に広がる広大な土地。

彼は、バーニアのノズルを上下左右に動かし、可動域を確認。大丈夫。異常無し。

コンソールを呼び出し、操作。

「重力制御起動つと……」

機体に内蔵された重力制御ベクトルコイルが、唸り声を上げる。

彼は、右足を一步前に出し、そのまま機体を走らせた。助走を付け、スピードが乗った所で脚部バーニアを噴射。ホバー走行に移る。

「ごめんな、ロンギマヌス……。無理な改造で故障させちまって……」

……。痛かったか？ でももう大丈夫のように修理してやったからよ……」

……。だから、もう一度、一緒に翔ぼうぜ！」

背面メインスラスタを点火。膝を屈め、思い切り伸ばす。

機体は一気に舞い上がり、空へ。一瞬で戦闘出力。

尾を曳いて飛び立つロンギマヌス。それを、術長は優しい表情で見送った。

「『少年は絶望を知って、大人へ転落する』……か。昔の人は良いこと言ったもんだぜ。なあ、大佐さんよ」

振り向く術長。そこにグラムが立っていた。

「彼は？」

「今飛んでった」

遠くの空を見つめる術長。

「お前さんも、HMAからデイカイオスに乗り換える時、自分の機体をぶん回してたのを思い出したよ」

「彼に、新しい機体の事は？」

「デイープフォレストの事か？ 今ここに持って来させるとこ」

「そうですか……」

グラムは術長の横に立ち、同じように空を見上げる。

「その時の私の機体、まだここに？」

「ああ、有るよ。乗るかい？」

グラムは一瞬、寂しいそんな笑顔をしてから術長に言った。

「……いや、止めておきます」

くるりと踵を返し、彼は迷いの無い足音を立てながら去っていく。そこへ、遠くからのサブの声。

「術長……！」

「おう…ここに着けるやー」
ドックのゲートを塞ぐように止まる、HMAを乗せたトレーラーは荷台を起立させ、機体を垂直に立てた。
トレーラーのキャビンから降りる少女。
透き通るようなブルーの髪をなびかせ、彼女は空を仰いだ。
ビンセントの駆るロンギマヌスが頭上を通り過ぎ、風が舞い上がる。
彼女は、飛ばされぬように帽子を押さえ、ロンギマヌスを目で追った。

修理したばかりの機体を、思うがままに機動させるビンセント。
まるで曲芸ショーを見ているかのような乗り方で、たぶんこっちのほづが本当の彼。

彼はふと、気付いた。ドックに見たこともない機体が、一機来ている。

機体を低空で飛行させ、カメラアイを向ける。トレーラーの荷台ごと起立する深緑色の機体。

武装は施されていないが、背中には見たことのない推進機関を背負っている。

その足元には、あたふたと動き回る作業員と、一人の少女が。
高解像度デジタルズーム。ブルーの髪がはためき、ルビーのような瞳は、モニター越しにビンセントを見ている。

不思議な感覚を覚えた彼は、機体を一旦高く上昇させてから反転。そのまま着地体勢に入った。

ドックの、その深緑色の機体の目の前。機体をゆっくり降下させ、羽根が落ちるかの様に柔らかく着地。

ロンギマヌスの足が地面を捕え、片膝を突き、止まる。

コクピットハッチを開き、顔を覗かせるビンセント。少女が彼の顔をじつと見ている。

「……何だ？」

『じつと見ている』と言うよりは『ガン見』だ。

少々恥じ入る。

彼は機体から降り、術長へ歩み寄る。

「どうだった？」

「最高」

そのとき、術長は一つ瞬きをしてから彼に言った。

「よく馴れた道具は、最高に使い勝手が良い。『道具』と言うより、自分の一部みてえに思ってくる。けどよ…その道具の用途じゃねえ事をしちまうと、そいつは壊れちまう」

ビンセントは深緑の機体に目を向け、術長に言い返した。

「俺達は、その『道具』に命を預けてる…その道具を選ぶのも当然なのは分かってる。でもよ……？」

「今までお前を護ってきたあの子も、“道具”としての限界を分かっている筈だ。だからせめて、今はゆっくり休めてやんなよ……」

ビンセントは術長の方を向き、ゆっくり頷いてから問う。

「あれは？」

「HMA h2E/F・ディープフォレスト。加速曲線に高機動姿勢制御、180°。姿勢変換速度……。どれもピカイチの空軍機だぜ？」

「ロンギマヌス、車庫入れ頼むわ…」

そう言うと彼は、トレーラーの方に歩いて行き、そこに立つ巨人の足元に。下から見上げ、まじまじと眺める。

強い視線を感じるビンセント。彼が横目で見ると、その子はやはり、機体脇に立ったまま彼の事をじっと見ていた。

声をかけてみる。

「君、イクサミコ？」

「はい」

彼女は表情一つ変えない。

「名前は？」

「本日付を持ちまして、貴官の専用ユニットとして起動しました戦闘支援Aユニットイクサミコヒューマノイドタイプバージョン1・89個体ナンバー8894 27110です」

「うんっん？ それ名前？」

「正確には名前ではありません。製造ナンバーです」

彼は、くしゃくしゃと髪を掻き分けながら頭をかいた。

「『名前はまだ無い』…か」

ビンセントの考え途中に、遠くから術長が怒鳴る。

「おい！ 乗るのか、乗らねえのか、はっきりしろー！」

「おう、乗る乗るー！」

二つ返事で返す。

「ごめん、後にするわ…初仕事頼むね」

「はい」

返事をすると彼女は、着ていた服を脱ぎ捨てた。

当惑するビンセント。

「ちょ！ お前、こんな所で…！」

慌てるビンセントを見て、彼女は少々不思議そうな表情で問う。

「どうかしましたか？」

彼が眼を向けると彼女は、黒いコネクタースーツに身を包んでいった。

薄いスキンスーツ。ふくよかなボディーラインがくっきりと浮き出るそれは、男にとって目の毒だ。

しかもこのイクサミコ、相当…巨乳だ。

「いや、……何でもないよ」
彼は、心の中でつぶやいた。
「（イクサミコ、奥が深いぜ……）」

Captur 5

“イクサミコ” ってさ……もっとこう……いかにもロボット、って感じだと思ってた訳よ。

それがさ、見た目フツの女の子なんだよな、それが。『イクサミコです』って言われなきゃ分かんないくらい。

ウエストなんか、キュツと締まったくびれがあって、尻は、ぷりぷりとした『美尻』だぜ？美尻。

胸なんかも、こう……

うん、まあそれは良しとして、イクサミコを設計した奴の顔が見てみたいと思っただね。俺は。

で、その娘が今、俺の前に居る訳よ。

『ビンセントⅡキングストーン談』

ディープロレストが軽やかに空を舞う。

雲が尾を曳き、とても人型とは思えない動きで機動する。

空気を切り裂く音以外、殆ど音がない。無論コクピット内には、その音さえ届かない。

「静かだな、こいつ」

ビンセントは、独り言の様に呟いた。

「駆動音は規定の半分以下に抑え、スラスタユニットも通常の物ではなく、高精度グラビティドライブを搭載しています」

イクサミコがビンセントの独り言に反応。揺らぎの無い無色な声。
「面白そうだな」

彼は機体を大きく機動。急激に高度を上げ、加速。慣性制御で、コクピットにはGが掛からない。

「間もなく、ドーム天井部です。減速してください」
数字を刻んでいく高度計。警告を出すイクサミコ。

ドーム天井部、地上高7800m。スラスタと全身の動きでブレーキ。

軽い衝撃が伝わり、機体が静止する。

「通常飛行高度からこの高度まで、たったの4秒かよ！たまんないね！可愛い娘ちゃん！」

そう言つと今度は、突然機体を真つ逆さまにして急降下を始めた。雲を突き抜け、パワーダイブ。降下中も加速し、地面が物凄いスピードで迫る。

危険速度を知らせる警告音。

「ユーザーへ警告。減速してください」

ビンセントは警告を無視。

「危険速度限界。オートマニューバーモードへ移行します」

イクサミコは、機体の制御を要求してきた。その間にも、地面が迫る。

「モード移行不許可。もうちょっと辛抱してくれや」
引き続き手動操縦で対応。

次の瞬間、高度計の表示が赤色に変わった。

機体を寸でのところで180°回転させ、地面スレスレのところ
でブレーキ。

本来なら地面に墜落しているが、彼は機体性能と操縦センスで衝
突を回避した。

だが彼はいまさらになって気づいてしまった。

機体のコントロールレバーからビンセントの手の平に伝わる嫌な
感覚。

この機体は処女だ。

機体重力制御に異常信号。実際、機体の高度が上がらない。

「くそ！ 高度があがらねえ！」

怒鳴るビンセント。

「私の制御補佐があなたに追従できません！！」

彼は機体が地面と接触しないように慎重に操作。

咄嗟に、脚部の“通常では使用しない”緊急用スラスタを噴射。

減速する機体。それでも着地するにはまだオーバースピード。

だが、機体の進行方向上には他の建造物が。

「ソフトタッチとはいかねえか……」

腕と腰をひねり、強引に機体の向きを180度変更。

その瞬間、つま先が地面と接触。地面が抉り取られてゆく。

機体がガタガタと振動し始め、ゆれは次第に大きくなる。

足の裏全体が地面に着き、機体はそのまま滑走。土埃が立ち上り、

大きな溝二つを残して、機体は停止した。

「機体停止。墜落は回避しました」

「ごめん……」

ため息をついてから“彼女”に向かって謝るビンセント。

彼は大きく深呼吸し、コックピットハッチを開放。

視界を遮る土埃が、風に流されて晴れていき、向こうから走って

くる一台のトレーラーが見えてきた。

機体から降り、地面の土を蹴ってから、機体の足元に座り込むビ
ンセント。彼は不機嫌そうに頬杖をついた。

当然彼は、その後術長にしこまた締め上げられる羽目となった訳で……

ゲンコツは食らうわ説教はされるわで、『地獄の門』と恐れられた彼も、術長の前では形無しで、術長はまるで、子供を叱るかのようにビンセントを叱り付けた。

さて、その二日後である。

作業騒音が鳴り止まない整備部。

彼女はずっと、かの機体の中に籠り、駆動データを何度も読み返していた。

機体は何故バランスを崩してしまったのか。

何故しつかりサポート出来なかったのか。

『彼』が最も必要としているサポートは何なのか。

彼女はこう考える。

自分達イクサミコ全てには、マシンコネクトソフトウェアとして、TMIOS（ターニングマシンインターフェースオペレーションシステム）が組み込まれている。

これは人体と電子機器との接続、ネットワーク同調プログラムであり、イクサミコの主要機能、最も重視される要素でもある。

これは本来、機体側オペレーターインクソフトウェア“Mac10”と接続し、パイロットの操作補助及び予測と意思の翻訳を行うが、

この翻訳と予測は、機体側コンピュータではなく、イクサミコ内に蓄積され、ネットワークを通じて本部メインコンピュータ、ユグドラシルに保存される。しかし、現在ユグドラシル内に、ピンセントのような機動データはない。唯一似ているのが、グラム＝ミラーズ大佐だが、彼と大佐ではこれまた微妙な差異がある。

つまり、今現在、サンヘドリンの中では、ハード・ソフト共に、彼の機動データを知ることが難しい状態になっている。

確かに、機動試験を繰り返し行えば、ある程度のデータは蓄積できるが、いざ戦闘機動になった場合、完全な補佐を出来る可能性は低い。

一体どうすればいいのか……。彼女は答えを求め、何時間も機体内にこもった。

その時突然、コクピットハッチが開けられ、術長が顔を覗かせた。

「……何でしょうか？」

怪訝そうな顔をする彼女に、術長が言った。

「疲れただろ？ ちよつと、休まねえか？」

「イクサミコに肉体的疲れはありません」

「心、疲れねえか？」

「心……ですか？」

術長にそう言われ、少し困った顔をする彼女。

「まあ、いいから、ちよつと付き合えや」

「え？ あの……」

術長は少し強引に、彼女を機体から連れ出し、自販機のある休憩所に連れて行った。

「御用件は何でしょうか？」

不安そうな顔をする彼女に対し、術長は自販機の方を向いたまま聞く。

「何か飲む？」

「いえ、私は」

「あ、そう？」

術長は缶コーヒーを一つ買い、彼女の横に少し離れて座ると、彼女に問い掛ける様に言った。

「答えは、見つかったか？」

俯いて、膝の上で手を握る彼女。

「何が答えなのかも分かりません……」

「分からない、か」

缶コーヒーを一口飲み、術長は彼女に言った。

「俺はいつも思うんだよ……。 “答え” は頭で考えて得る物じゃない、いつも自分のすぐ側に “在る” 物だってな」

「自分のすぐ側？」

「だからこそ、求め続けなきゃならんのかもな。でも、お前さんはしっかりやったと思うぜ？ 俺は」

「でも、私……！」

「ストップ！！ 聞きたい事があるのなら、あいつに聞きな。お前さんは “アイツ” のイクサミコだろ？」

彼女は一瞬目をつむり、術長の顔を見た。

「行ってきな」

彼女は無言で出て行った。

言葉は要らない。すべき事は一つだったからだ。

術長がぼつりと呟いた。

「せがれが生きてりゃ、あいつ位の歳か……」

彼は缶コーヒーを一気に飲み干してから、すっと立ち上がった。

そして作業場に戻り、場内の一区画に繋がるスピーカーのマイクを手にとる。

「野郎ども！ 今してる作業は後回し！ 趣味の時間だ！」

場内から、妙に嬉しそうな返事が返ってくる。

術長は、ニヤリツと、何かを企んでいるかのような、そんな笑い顔をした。

探す宛も無いのに、どうして捜そうと思ったのか、彼女自身分かっていなかった。

全てのドックを捜して回り、途中、数人の人間に聞いたが、彼を知っている者は誰もいなかった。

ゲージにも行ってみた。1番、2番と見て行ったが、やはり彼はいなかった。そして25番を見たとき、そこに明かりが点いているのに、彼女は気が付いた。

「25番ゲージ……」

中に入ると、そこには一機のHMAが。

赤銅色のその機体は、よく磨き上げられており、鑄物の銅の様な輝きを放っていた。

「綺麗だろ？」

彼女は機体の足元の影にビンセントを見つけると、彼に問うた。

「これは？」

「ロンギマヌス……。俺がずっと乗ってた機体だよ」

彼女は機体を見上げてから、彼に問う。

「貴方に質問があります」

「ん？」

「あの機体を、しっかり制御出来なかったのは、私の責任なのでしようか？」

「……………」

沈黙するビンセント。

「……私は、貴方の支援ユニットとしてスペックを發揮できません」

俯く彼女。そんな彼女に、彼は言った。

「機体は、最適な人員を内包して、始めてスペックを最大限に発揮する。しかし ソフト は、OSとアプリケーション（イクサミコ）のどちらが欠けてもならない」

「え？」

「俺が尊敬するメカニクスの言葉さ。おまえさんが悪い訳じゃない」
彼はそう言うと言った彼女に、一枚のディスクを渡した。

「これは？」

「コイツの起動ディスクだ……。人は死ぬとき、今までの記憶全てを失っちゃう……。でも機械なら、その記憶を受け継ぎ続ける事ができる」

「では、この中には……」

「コイツの、ロンギマヌスの、今までの記憶が全部入ってる……」。

お前さんの中で、コイツを生きさせてくれ」

「私の、中で？」

「ああ」

「分かりました」

彼女はディスクを受け取り、力強く頷いた。接続端子を首のジャケットにつなげる。

リーダーにディスクを差込み起動。そしてゆっくり目を閉じ、ディスクを読み込み始めた。

その様子を、見守るビンセント。彼は夜通し、彼女の傍にいた。

朝

彼はゲージ内の長椅子の上で目覚めた。

彼女がデバイスにディスクを挿入し、読み始めてから一晩中見守っているつもりだったが、いつの間にか眠ってしまっていた。気づけば彼には、毛布が掛けられていた。

周囲を見回すビンセント。だが、彼女の姿は無かった。

「おーい……」

返事が無い。もう一度呼ぼうとしたその時だった。

「おはようございます」

彼の背後から爽やかな声。

振り返る彼。

「ん……あれ？　読み終わったの？」

「はい」

笑顔の彼女。

「どうだった？」

彼女は少し頬を赤くさせて。

「以前より、貴方を身近に感じるような気がします……」

ドキリ。

「（なんだ、コイツ。スツゲー可愛いぞ？）」

逃げ腰のビンセント。

「……うん、それはよかった。じゃあ俺……」

なぜか照れた顔の彼がそう言って立ち去ろうとしたその時、彼女が彼の上着を掴んだ。

「どしたの？」

「あの……非常に個人的な事で申し訳無いのですが……」

「ん？」

澄ました表情の彼。

「私にも、名前を付けてくれないでしょうか？」

ビンセントは、そう言う彼女の顔を見つめ、少し考えてから言った。

「んじゃあ“イオ”」

「イオ？」

「俺が好きな星の名前」

彼女は笑顔で答えた。

「認証しました」

その時。

「よろしくやっってるじゃねえかビンセント……」

術長が扉を半分開けて、ビンセント達を見ている。

「うお！？ 何時からそこに居たんだよ！？」

「さつきから……」

術長の目の下には、クマが出来ていた。

「ドックで待つてるぞ、お前の、ロンギマヌスが！」

「術長」

「あ？」

「あんがと」

ビンセントはそう言うといオの手を引いてドックへ向かった。

ドッグへ駆け込む二人。そしてそこには、赤銅色に塗られたあの機体があった。

「こいつぁ……」

自然に笑顔になるビンセント。

「ビンセントさんってあんた？」

一人の若者がビンセントに話し掛けた。

「ん？」

「術長から聞いてるよ。俺の事はサブと呼んでくれ」

「コイツは？」

「『ロンギマヌス二世』って術長は言ってたけど、何の事やら……」

グラビティドライブを大型のプラズマドライブに換装してある。パワーウエイトレシオ、0.6以下のじゃじゃ馬……ってあれ？」

ビンセント達は既に機体に取り込んでいた。

「イオ、機体起動！」

「了解」

機体が起動し、歩いて場外へ。

整備部の施設の窓から、技術者達が見守る中、彼は機体を走らせ、空へ舞い上がって行った。

上昇を続ける機体。以前と同じ様に、あっという間に天井部へ。

「イオ……」

「はい？」

彼は機体を静止させた。

「ロンギマヌスの記憶、君の一部になれてよかったと思うよ……」

「私も、嬉しいです」

互いを確認しあう二人。

彼は、機体を急降下させ始めた。

迫る地面。以前にも増して、その加速度は強く、そして鋭く。機体はそのままの速度を維持し、地面へ迫った。

「まずい！墜ちる！」

誰かが言った。見ていた技術者の誰もがそう思った、その時だった。

直角に機動を変え、地面と水平に飛行する機体。機体はくるりと回転し、背面飛行をしている。

強力な推進力で、滑るように飛行する、ロンギマヌス。その瞬間、顔を強張らせていた技術者達から歓声があがり、指笛や拍手の音があたりに響いた。

「全く、とんでもねえ野郎だな、アイツは……」

驚嘆の意を隠せないでいるサブ。

ビンセントの駆るロンギマヌスは、地面を離れ空へ。雲が尾を曳き、赤銅色の巨人は、彼と彼のイクサミコ、“イオ”を乗せ、軽やかに舞い踊った。

「なあ、イオ」

「はい」

「ありがとう」

ビンセントは満面の笑顔で彼女に感謝。

「いえ、貴方こそ、名前をくれて、そして修理してくれて……ありがとう……」

イオの言葉にビンセントの胸が一瞬脈打つ。

そうか……お前はずっと、俺の傍に……

微笑むビンセント。

「行こう、イオ！」

「はい！」

機体を自由に駆る彼。

彼は心の中で言った。

「（おかえり……ロンギマヌス……）」

「ACT 8」終

ACT9 IronMaiden(前書き)

サンヘッドリンへ中央軍からの研修生が派遣される。研修と共に開始される部隊の訓練。研修生はレイズに任せられるが……

ACT9 IronMaiden

Chapter 1

『彼女』はふと、窓から外を眺めた。

灰色の雲の向こうに、この艇と同じ様な艇が沢山飛んでいる。

向かう先は全て一緒。

“旧オーストラリア大陸に存在する都市”

次第にそのシルエットが明確になっていく。

尖塔？巨大なドラム缶？

違う。全て『兵器』だ。迎撃兵器を満載したタワーに巨大な砲台。

目に見える物全てが兵器の、異様な『森』。

彼女は思わず、驚嘆の表情を浮かべていた。

その、見る者全てが息を飲み、畏怖の念を抱かせるその森の中を
抜け、艇は更に中心へ。

巨大な、本当に巨大なドーム型都市。その外円にある樹の枝の様
な発着ポート。

その枝の一つに艇は横向きに近付き接続した。

大きな『ガコンツ！ガコンツ！』という音の後に空気の圧縮音。

艇と発着ポートの気密扉が開き、新鮮な空気が流れ込んでくる。

彼女はポートに降り立った。

長い時間座席に座っていたせいで、身体が強張っている。彼女は
少し控えめに背伸びをすると、黒のベレー帽を被り直し、皆が歩む
方へ向かった。

暫く歩くと、閉鎖された空間から、巨大な開放された空間に出た。
全面コンクリート造りの、見たことも無い程大規模なバスターミナ
ル。そうだと言われなければ、駅のホームと間違っ程大きなものだ。
彼女は並んで駐車するシャトルバスの一つに乗車。大きめのバス

クを前に抱え、席を探す。奥の方に空席。

「失礼……」

彼女の一礼で、先に座っていた男性士官が席を奥につめる。その席に座り一息つくと、彼女達を乗せたバスはゆっくり走り出した。ライン状に点在する灯りが、徐々に早く過ぎていくようになる。

バスは薄暗いトンネルを抜け、巨大なハイウェイへ。6車線編成の、外縁を高い防音壁で囲まれた巨大な道路。

窓から見える風景。清潔感にあふれた近代建築物。灯りと、生気に満ちた街。

この都市こそ、彼女が求めた物がある街。戦うための術を教えられる街。

この街こそ、サンヘドリンの総本部だ。

「お客、ですか？」

グラムのを追って歩くレイズは、不思議そうな顔で、そう問うた。

「現在の支部建設プロジェクトの一環に、支部管理官の前線研修プログラムがあるのは知っているな？」

「ええ」

「その管理官補の一人を、うちの部隊でも預かる事になった」

「うちで、ですか？」

「うちに限った事ではない。他の部隊では既に仮配属が始まってい

るぞ？」

「ええ……」

何か浮かない表情のレイズ。

「どうした？」

「えーっと、管理官補は、我が軍出の士官では無いのですよね？」

「ああ。そうだ」

「なんか緊張してしまって……」

申し訳なさそうなレイズに対し、グラムは無表情で言った。

「お前が緊張してどうする。いつも通りにしていればいい」

「そうですよね！」

司令官室の前で止まる二人。扉を開き、敬礼。

「グラム〓ミラーズ、レイズ〓ザナルティー両名、出頭しました」

司令官室の中に入る二人。ガルスは、グラムとレイズの二人を見てから言った。

「両名ご苦労。知つての通り、一両日中に仮配属される管理官補の
教導役を頼みたい」

「承知しております」

表情一つ変えずに答えるグラム。

「では、大佐の部隊に仮配属される管理官補の、簡単な経歴とプロフィールを紹介しておこう。レイラ君」

「はい」

ガルの横に立つレイラが、ファイルを取り出した。

「アシエル〓フランクリン中尉、25歳。大戦終結後、テラテア士官学校を首席で卒業。同年、統合体中央軍第八空中機動連隊第一空挺隊に配属。HMA搭乗経験有り。実戦経験無し。以上です」

グラムが言った。

「珍しいですね。女性ですか？」

咳払いをして、グラムを横目で睨むレイラ。

「失礼……」

一方ガルスは、腕を組み、険しい表情をしはじめた。

「まるで、飴と鞭だ」

グラムが聞き返す。

「どう言う事でしょうか？」

ガルスは、大きく息をついてから、グラムに語り始めた。

「支部は我が軍では無く、統合軍の各有力軍閥に委託し、その兵力を配備する。対ヴァ機とメタニウム徹甲弾の配備……。軍閥にとつては、よだれが出るほど甘い飴だ」

「では、鞭とは？」

ガルスはレイズに向かって言った。

「ザナルティール軍曹」

「は、はい！」

カチカチに固まるレイズ。

「軍曹はどれほどの期間、教導部で訓練を受けた？」

「はっ！ 一年程であります！ 司令閣下！」

礼儀正しく答えるレイズ。

ガルスは大きなため息をついてから、グラムに言った。

「対ヴァリアンタス戦闘訓練を受けていない軍閥の兵士が、すぐに対ヴァ機に乗って、対ヴァ戦力になると思うか？」

即答するグラム。

「思いません」

「統合体も、とんだ茶番を演じているものだ……」

ガルスの言葉の後、沈黙するグラム達。

「しかし実際これに因って対ヴァリアンタス戦力は、名目上だけでも更に800万上乗せされる事となる訳だ」

「なるほど、“飴と鞭”……ですな」

顔を見合わせるグラムとガルス。

「よろしい、以上だ。質問は？」

「ありません」

「では任せた。ミラーズ大佐」

「お任せ下さい。司令」

「あ、それと……、「彼」には、なるべく会わせない様に……」
グラムは思わず聞き返した。

「奴」……ですか？」

「“彼”は所謂……」

「“女好き”？」

「うむ、中尉はなかなかの美人だ。くれぐれも“失態”や“不祥事”が無いように……」

グラムは一瞬笑ってから、もう一度敬礼。

「では、その様に」

回れ右をして司令官室を出て行く二人。二人が出て行った後、部屋は奇妙な空気に満たされていた。

「……そんな目で見ないでくれたまえ、レイラ君」

ガルスを微妙な目付きで見つめるレイラ。

「いえ、司令もやはり“男性”なんだなあと、思いました」

くすりと笑うレイラを見て、ガルスは逃げる様に言った。

「ああ、レイラ君、済まんが……」

「コーヒー、ですね？ 今お持ちします」

微笑んでから向きを変え、部屋を出るレイラ。

ガルスは彼女の背中を見送りながら頬杖をつき、一つ溜息をした。

彼らは扉が閉まりきるまで敬礼し続けた。扉が閉まりきり、腕を下ろすグラム。レイズも後を追うように腕を下ろす。

「あの、大佐……」

「行くぞ、レイズ」

おどおどとした口調で話しかけてくるレイズを無視するかのよう
にグラムは歩き始める。

グラムを追うレイズ。相変わらず、歩くのが速い。

「それで、なんだ？」

急に話を生し返すグラム。

「はい？」

「聞きたいことがあるんだろ？」

「あ、ええ、はい」

レイズは、グラムの歩幅にあわせて歩きながら問う。

「さっきの“飴と鞭”って、つまりどう言う事なのでしょう…？」

グラムが、急に足を止めた。

「大戦終結直後の混乱の時代、統合体中央軍と各地方軍閥のタカ派
が、一時衝突する事件があったのを覚えているか？」

「はい、“ロックウエル事件”ですよね？」

グラムは、再びゆっくりと歩き始めた。

「その事件以来、統合体は早急に軍閥の取り込みを進めた。やがて、
ヴァリアンタスとの戦闘が再開され、軍閥は、その闘争精神をもて
あます事となった」

「なぜ、最初から軍閥を蚊帳の外にして、対ヴァリアンタス軍を作
ったのでしょうか？」

「理由は一つだけではないが、一つに、対ヴァリアンタス戦闘を、
統合体が人類全体を守るために行っている崇高な聖戦とするためだ」

「はあ……」

理解しかねる表情のレイズを見て、グラムはさらに説明を続ける。
「つまり今回のプロジェクトは、対ヴァリアンタス戦力と言う飴を
軍閥に分与し、その動きを牽制、有事にはまず最初に前線に立たせ、
その戦力を行使させる。最初のうちはたやすく殲滅されるのがオチ
だろうが、時間稼ぎにはなるだろう。統合体にとっては、『実戦を

通して経験を積むもよし、全滅して我々の手に戻るもよし』という考えだろう」

「でも、もし、もしですよ？ また軍閥のタカ派が決起でもしたら！」

「軌道艦隊に配備されている指向性熱核弾頭で攻撃するだろうな」

「ひどい……」

思わず口走ったレイズの言葉に反応し、グラムが言う。

「『人が人を支配し、これに害を及ぼした』……。まさにその通りだな……」

Chapter 2

「（アシエル」フランクリン、2163年8月14日生まれ、18歳の時、軍学校に入学。大学部を首席で卒業後、士官学校に入学。在学中に最高学位まで取得し、これも首席で卒業、小尉相当官として、統合体中央軍第八空中機動連隊第一空挺隊に配属。同部隊で一年間勤務後、昇進試験を受け、『中尉』に昇進。支部管理官補の選定試験を受け、現在に至る……）」

重厚な金属製のファイルを、ガルスは真剣な表情で何度も読み返した。

「（典型的なキャリアか。実戦経験は無し、部隊での訓練成績は悪くない。後はグラム達がどう仕上げるか……）」

デスクの電話が鳴る。

「私だ」

「司令、フランクリン中尉がお見えになりました」

「分かった」

受話器を置き、ファイルを閉じると同時に、部屋の扉が開いた。

「アシエル」フランクリン、本日より、統合体中央軍第八空中機動

連隊第一空挺隊から、統合体対ヴァリアンタス特務機関所属対ヴァリアンタス軍へ、研修に参りました！」

敬礼する女性。

「ご苦労、入りたまえ」

「はっ！ 失礼します！」

背筋を伸ばし、姿勢よく歩く。ガルスデスクから、三步離れた所で止まり、軍帽を脇に抱え、『気をつけ』をする。

「ようこそ、中尉。休みたまえ」

「はっ！」

「遠路遙々、ようこそ来られた。歓迎する」

「ありがとうございます！」

「さて、フランクリン中尉は、何かしらの媒体で“ヴァリアント”を見た事は有るかね？」

「はい！ 資料で何度も」

「どう思ったかね？」

「どう、ですか……？」

困った顔をするアシエル。

「私のだが、中尉、“彼ら”を美しいと思うのだよ。あれほど“戦闘のみ”に特化した兵器は他には無い。無限に生産され、何の躊躇も無く戦闘を敢行する」

「お言葉ですが、司令！」

彼女は声を大にして言った。

「ヴァリアンタスは全人類の怨敵です！ 地上を蹂躪し、人類に敵対する彼等を、私は美しいとは思いません！ 全力を以って殲滅すべきです！」

「中尉！」

部屋に響くガルスの恫喝。

「それで良い、中尉。我々はその為に生まれ、その為に存在する…」

彼女はデスクの上に置いてあるファイルを見た。

金属製のファイルの表紙に刻印されている“サンヘドリン”の紋章。それは、ヴァリアントを粉碎する鉄槌の証。

彼女の背中に寒気が走る。

「はっ、失礼しました」

姿勢を正すアシエルに、ガルスは言う。

「正式な研修期間は明日からだ。今日はゆっくり休みなさい」

「失礼します！」

つま先を揃え、敬礼した彼女は扉まで歩いて行き、扉を出てから、もう一度敬礼。

ガルスは、ファイルをデスクの引き出しにしまってから椅子に座り、何か遠い目で窓の外を眺めた。

「ん？ あれ？ くそ！」

「どした？」

ビンセントは、ここに来てからずっと技術部に入り浸っている。

機械が好きだし、何より大勢の仲間が居るのが、彼にとっては非常に落ち着くのだろう。

「このボルトのピッチが合わねえんだよ……」

「ん？ それ3番のじゃね？」

「ぴったりだー」

「……」

サブとも気が合うし、他の整備員ともうまくやっている。

「おい、ビンセント。見るよ……」

サブが指差した先をビンセントは見た。

「おお！？」

そこには、軍服に身を包み、赤みのかかった髪を伸ばした女性が。

「あの軍服は中央軍だな」

「美人だ」

「こんな所で何してんだろう？」

「美人だ」

「聞いてる？」

「何が？」

サブは呆れ顔で溜息。

「多分あれ、例の支部管理官補だぜ？」

「支部管理官補？ 何だそりゃ？」

「中央軍からエリートの皆さんがお勉強しに来るって聞いてねえの？ まあ、お前さんとこの部隊にもっておい……」

ビンセントの姿は既に無く、彼はその女性の所に向かっていった。

「どうしました？ 道に迷われましたかな？」

上品に振る舞うビンセント。彼女は周囲を見回しながら言った。

「どうやらその様だ。情けない」

「居住区なら6ブロック先ですよ。お部屋までご案内しましょう！」

「いや、結構だ。一人で行ける」

「でもこの先、道が入り組んでますよ？ ご一緒しますよ」

彼女は眉を吊り上げた。

「結構だと言っている！ 貴様も早く自分の仕事に戻ったらどうだ！？」

そう言う彼女は、ヒールの大きな足音を立てながら去って行った。

「うわっキツそうな女。あんなの、Mでもない限り無理だね、無理ね？」

ひょこつと横から顔を出したサブ。

しかし。
「イイ！」
「えー？」

Chapter 3

翌日早朝。朝霧晴れぬ、湿った空気を切り裂きながら、レイズは運動場を心を無にしてひらすら走る。

それでも頭の中を思考が巡り、あの時のグラムの言葉が、頭から離れない。

その時は、核で攻撃するだろう
止まって、深く息を吸う。肩を揺らしながら、上がった息を落ち着かせる。

「レイズー！時間ですよー！」
遠くの方から、サラの透き通った声が聞こえた。

「今行くよー！」
彼はタオルで汗を拭き、サラの元へ歩いて行った。

「よっしゃ。イオ、そろそろ帰るか？」
「そうしましょう」

彼は、機体をゆっくり降下させた。

早朝にも関わらず、周囲に甲高い騒音を撒き散らしながらホバー移動中のロンギマヌスに向かって、サブは拡声器を向けた。

「朝っぱらから機体乗り回して、ゴキゲンだねえ？」

ビンセントはコクピットを開いて、大声で叫んで言った。

「よく乗ってやると、いざって時に違うんだよ！」

答えるサブ。

「お前さんはいいけどよ、やたらに仕事は増えるし、朝からうるせえで、俺あ泣きてえよ、ホントに」

ビンセントはそのままゆっくり機体を止める。

「で、あんだって？」

「大佐が呼んでる。イオちゃんも一緒にだって」

「グラムが？」

「私ですか？」

『ほえ？』と不思議そうな顔をするイオ。ビンセントとイオは顔を見合わせた。

彼女の一日はまず、朝から腕立て10回5セット、腹筋15回4セットの運動で、汗を流してから始まる。

それが終わると、ぬるめのシャワーを浴びて、支給品の無地の白い新しい下着を着る。決して、リサイクルはしない。

自軍のカーゴパンツをはき、Tシャツを着る。軍靴を履き、靴紐をきつく締め、髪を上げて後ろで縛る。

「しつかりするのよ！」

鏡の前で自分に激を入れるアシエル。

突然、部屋のチャイムがなった。インターホンのスイッチを押す。

「フランクリンだ」

「おはようございます。フランクリン中尉。ミラーズ大佐のご命令で、中尉をお迎えに伺いました」

「御苦労、今出る」

扉を開けるとそこには銀髪の少女、エステルが立っていた。

「それでは、参りましょう」

「あ、ああ」

彼女はエステルの後に付いて行った。

「おはようございまーす」

元気よく挨拶をするレイズ。

グラムはパイプ椅子に座って、何かの資料を読んでいる。

「大佐、中尉ってどんな人でしょうね？」

グラムが、横目でレイズを見た。

「美人かどうか？」

サラもレイズの顔を見た。

「いや、ちよつと！違いますよ！」

頬を赤くするレイズ。

「レイズ、やっぱりそうなんですわ……」

「サラまで！」

グラムはくすくすと笑いながら言う。

「今エステルが連れてくる。おとなしく待ってる」

「…う」

レイズは反論できずに、そっぽを向くサラをなだめながら並んだイスに座った。

ここサンヘドリンに、一つの特異な部隊が有る。

まだ準備部隊の段階で、戦力は今の所、機動兵器がたったの三機ではあるが、精鋭で構成されたこの部隊は紛れも無く“最強”の部隊である。

部隊名は、そうあの、“シェーファーフント”だ。

さて、統合体中央軍から研修で、サンヘドリンに仮配属されたアシエルⅡフランクリン中尉管理官補は、一抹の不安を抱えていた。

「……………」

「……………」

無言のまま歩く、エステルとアシエルの二人。

エステルが前を歩き、アシエルがその後を歩く。

「あの…失礼だが…」

思い切って、アシエルがエステルに話し掛けた。

「はい？」

「名前を聞いていなかったのだが……」

「エステルと申します」

二言三言喋り、すぐに会話が途切れる。

彼女は、おそろおそろエステルに聞いた。

「もしかして……『イクサミコ』……か？」

「はい。私はデイカイオス搭載ユニット、ミラーズ大佐のイクサミコです。中尉……」

「デイカイオスの……」

思わず、鼻で、すつと短く息を吸うアシエル。

エステルはアシエルに言った。

「デイカイオスが恐いですか？」

「なぜ？」

「人は未知の物を恐がるから……」

ルビーの様な美しい瞳をアシエルに向けるエステル。吸い込まれてしまいそうな不思議な瞳。

気付けばアシエル達は、扉の前に止まっていた。

「改めてよろしく、歓迎します。アシエル中尉……」

エステルは一瞬微笑んで言った。本当に一瞬だったが、美しい笑顔。

「よ、よろしく……」

少しドキドキ……

思考に一瞬のブランク。すべき事を思い出す。

彼女はエステルに扉を開けさせ、中に入った。

倉庫風の殺風景な部屋だが、パイプ椅子が五つか六つ程並べてある。

端の方に座る、若い男女一組。

「おはよう。フランクリン中尉」

アシエルが言うより早く、グラムが挨拶した。

「お、おはようございます！ 大佐殿！」

『気をつけ』をして敬礼。

「中尉も揃った所で、部隊の紹介をしたい所だが、まだ一人足りない様だ……」

エステルがグラムの横に立った。

「御苦労、エステル」

「いえ……」

少し小声で話す。

暫くしてから廊下からビンセントとイオの大きな話し声が聞こえだした。

「まったく、グラムの野郎、こんな朝っぱらから人を呼び出して何だつて言うんだ！」

「あんまり大きな声で話すと彼に聞こえますよ！」
もう、充分聞こえてる。

扉が開いて、ビンセントが大股で歩き、グラムに迫る。

「おい、大佐さんよ！ 用事があるなら早いとこ済ませてもらいた
ー

ビンセントの言葉を遮るイオ。

「ビンセント！」

イオが小声で呼びながら、ビンセントの上着を“つつん”と引っ張った。

「何？ 今大事な話を……」

ビンセントを睨むアシエル。

「あれ？ あの時の……？」

キョトンとした表情のビンセントの肩に、グラムは手を乗せて低い声で短く言った。

「座れ」

「はい」

思わず『ハイ』と言う。

グラムはビンセントを座らせ、すうっと短く息を吸ってから話し始めた。

「全員揃ったので、始めたいと思う。知っての通り、今日から我が部隊に研修で参られた、フランクリン中尉だ」

「アシエル」フランクリンです！ よろしくお願ひします！」
立ち上がって皆の方を向き、敬礼するアシエル。

続いてビンセントが挨拶をする。

「俺はビンセント」キングストン！ で、こっちが俺のイクサミコのイオ」

「よろしくお願ひします」

イオがペコリとお辞儀。

「じ、自分はレイズ」ザナルティー軍曹であります！」

カチカチのレイズ。

「私は彼のイクサミコ、サラです。よろしくお願ひします」

サラが、ニコツと微笑んでお辞儀をした。

「そう言えば、ビンセントとレイズ軍曹は、今が初顔合わせだったな」

頭をかくレイズ。

「そつみたいです……」

「あ？」

レイズを睨むビンセント。思わずすくむ。

そんなレイズに、グラムは言う。

「レイズ、彼がその人だ」

レイズの思考回路が繋がる。“奴”といわれたあの……

「えっ!？」

「なんだよ？」

お互いを値踏みするような目で見合う二人。

「もっと早く会わせればよかったですね」

エステルがグラムに言った。

「むう……」

溜息混じりの声を上げるグラム。

彼はとりあえず、今の用事を済ませようと話を進めるべく、一つ

のファイルを取り出した。

「さて、今日から二ヶ月間の予定で、研修期間が始まるのだが、監査役を決めたいと思う」

「ハイ!!」

間髪入れずに、ビンセントが名乗り出る。

「……。監査役を誰かに頼みたいのだが！」

「無視かよ！」

「あの……」

そーっと手を上げるレイズ。

「自分で良ければ……」

それを見たグラムは“ニヤリッ”と笑った。

「では、レイズ軍曹。監査役に任命する」

「(ちっ)」

ビンセントは心の中で舌打ち。

「しっかり頼むぞ。レイズ軍曹」

「はいっ!!」

グラムはそう言って、レイズに分厚いマニュアルを手渡した。期間中の日程と、研修項目が書かれている。シエーファー専用の特別メニューだ。

そのマニュアルのページをパラパラとめくるレイズは不安そうな顔でグラムに問う。

「あのー、この今日の項目なんですけど、一番最初に『全員参加』って書いてあるんですが」

答えるグラム。

「そうだ。実技訓練には、お前達も……逃げな！」

「私たちも参加ですって……」

「ちっ!!」

部屋からそつと逃げようとしていたビンセントが渋々席に戻った。それを確認したグラムは、言葉を続ける。

「よく見てみる。今日だけじゃないぞ」

よく見れば、全ての日程に『全員参加』の字が…。

「こっ、これは!」

「レイズ軍曹と傭兵ビンセント両名! 両名に研修期間中の同時訓練を名ずる!」

「本当ですか……?」

「メンドクセ……」

渋る二人。

「返事は!」

「サー・イエス・サー!」

「よろしい。では後は任せた。レイズ」

「はっ、はい!」

去っていくグラムを、敬礼で見送るレイズ。

こうして、レイズとビンセント、アシエルの三人による奇妙な訓練期間が始まったのである。

格納庫に残されたレイズたち。彼は愛想よく笑顔で、アシエルに言った。

「じゃあ二ヶ月間よろしくお願いします。中尉」

「よろしく。軍曹」

見合つて握手をする二人。

「俺もよろしくね」

ビンセントは二人の間に割って入った。

むっとするレイズ。とりあえず我慢。

「じゃあまずは、えーっと……」

「どうかしたか？」

「えーっと、まずは、『20kmのニコニコ兵隊さんマラソン』、
だそうです……」

思わず吹き出すビンセント。

アシエルは少し動揺した表情で、レイズに言った。

「そのマニュアルを作ったのは大佐か？」

「みたいです」

「なら仕方ない、その通りにしよう……」

アシエルは眉をぴくぴくさせながらそう言った。

「じゃあ、このすぐ向こうが広くなってますから、そこで走りま
し
ようか……」

レイズは苦笑いしながら、格納庫シャッターのスイッチを押す。
格納庫のシャッター扉が開く。

「じゃあ、サラ。ちょっと待っててね」

ぷいっとそっぽを向くサラ。

「よかったですねっ！ 綺麗な人で」

いじけるサラに、レイズは苦笑してから優しく言う。

「そうだ、サラ。今度の休日、シティーに行こう！ おいしいケー
キ屋さんを見つけたんだ」

サラは横目で。

「約束ですよ？」

「うん。約束」

サラはニコリと微笑み、レイズも一緒に微笑む。

「レイズだっけ？ 早く済ませて、飯にしようやー！」

ビンセントの急かす声が聞こえた。

「じゃあ後でね」

「頑張つて！」

ゲートをくぐり、運動場を走り出した三人。

次第に三人の姿が小さくなっていくのを、サラとイオ、エステル
の三人は見つめていた。

「いい人ね、サラ」

エステルが優しい表情でサラに話し掛ける。

「お姉様！」

サラはエステルに抱き着いて、幸せそうに頬を擦り寄せる。

「サラはお姉様の事も大好きですっ」

サラの頭を撫でるエステル。

「そう、サラ」

「なんです？ お姉様」

「紹介したい子がいるの」

「あの子の事ですか？」

サラはエステルに抱き着きながら横目でイオを見た。

「そう、私たちの新しい姉妹、イオ」

「よ、よろしく…… お願いします……」

少し人見知り気味の表情でおおずと挨拶をするイオ。

「みんなきつと仲良くなれるわ。さあ、イオもこっちに来て……」

おそるおそる二人に近づくイオをエステルは優しく抱き寄せる。

「私達は姉妹……、想い人を護る為の力を持った、“戦の乙女、戦
場の女神”……」

Chapter 4

「あー、つまんねえ。マラソンって、俺達パイロットとあんまり関
係ないじゃん」

ふて腐れた表情でテクテクとやる気の無い様子で走るビンセント
は、グラウンドを五周もしない内に文句を言い出した。

「えーっと、ビンセントさん！ 文句言わないで下さい！ パイロットも体力が基本ですよ！」

レイズ達の前をアシエルが一定のペースを保ちながら走っている。「ねえ、歌唄っていい？」

突然ビンセントがそう言い出した。

「どんなんです？」

問うレイズに答えるように、ビンセントは思いつ切り息を吸い込んで大声で歌い始める。

「エ、エ、エスキモーの はく冷凍 で く」

「なあ！？」

思わず飛び上がるレイズ。

下品卑猥公然猥褻。某海兵隊よろしく、それは内容のほとんどが伏せ字になる下品な歌だった。

「止めて下さいビンセントさん！ 中尉に聞こえます！ 下品です！ 卑猥です！ セクハラです！」

無視して歌い続けるビンセント。

「俺によーし！ お前によーし！」

前を走るアシエルが突然止まった。

「お？ 止まった……」

「もう、ビンセントさん！ 最低です！」

ビンセントに怒るレイズ。突然、止まっていたアシエルが全速力で走り出した。

「なんでいきなり！？」

「あなたがそんな歌唄うからでしょうが！」

二人は口論しながら、アシエルを追い掛けた。

エステル達の見守る中、レイズ達は最後の一周に入った。息を上げながら、軍靴で地を蹴るアシエルにビンセントが追いつく。

「ねえ、怒った？」

ビンセントは並走して、アシエルに話し掛ける。彼女は息を切らせながら、苛立った声で返答。

「何が!？」

「何も聞こえなかった？」

彼女は一瞬、唇をキュツと絞めて答えた。

「聞こえてない! 断じて、決して! 何も聞こえて無い!」

アシエルは地面を思いつ切り蹴り、走り去って行く。残念そうな顔をするビンセント。

「あゝあ、多分嫌われたな」

「あんな歌唄えば、嫌われるに決まってるでしょうが!」

レイズは呆れた顔でビンセントに言った。

「何だよ、やけに彼女の肩を持つな、おい」

「何ですか？」

ビンセントは、にやけながらレイズに言った。

「さては惚れたか？」

「な! 違いますよ! 僕は監査役として!」

「またまたあ! 照れちゃって! 軍曹さん!」

肩をグイグイと寄せながら笑うビンセント。

一方アシエルは、既に全20kmを走り終え、息を切らせながらエステル達の待つ格納庫へ入った。

「お疲れ様」

エステルがアシエルにタオルを手渡した。

「ありがと……」

汗を拭くアシエルに、エステルが言う。

「失礼ですが、中尉は何故軍に？」

彼女は力強く答える。

「強くなりたかったからだ！」

「強く？」

「女だからと言って馬鹿にはさせない！ 軍に入って強くなってみせる！ 強くなって誰も彼も見返してやる！ そのために軍に入っ
た！」

エステルは一瞬の間を置いてから、アシエルに言った。

「今、この子達の髪を結ってあげていたんです」

サラの髪を撫でるエステル。

「それが何か？」

「私達イクサミコは、常に自分のユーザーと生死を共にします。実際に引き金を引く訳ではありませんが、自分のユーザーが一番強いと信じて、彼等パイロットをサポートしているんです。怖くはない、自分が強くなれば、『彼等』はもつと強くなれる……！ そうやって“生きて”いるんです。ねえ、中尉、本当の『強さ』って何なのでしょうか？」

「……………」

無言のアシエル。その時、遠くの方からレイズの声が聞こえた。

「おーい！」

手を振るサラ。

「早くー！ 中尉はもうゴールしてますよー！」

その様子を見ながら、エステルはアシエルに言った。

「多分、私も妹達も、一人だけでは、自分が思っている程強くないかないんです。だからこそみんな……」

空を見つめるアシエル。

「はー疲れた」

「腹減った……」

ビンセントとレイズの二人が同時にゴール。

「もう！ レイズ！ 遅いですっ！」

レイズに駆け寄るサラ。

「お疲れ様。ハイ……」

タオルを手渡すイオ。

「サンキュ……」

彼女達は各々、自分のユーザーに優しく微笑んだ。

「だからこそみんな、誰かの側に居たいと思うんです……」

エステルはアシエルと共に空を眺める。

「中尉！ エステルさん！ 朝ごはん食べに行きますよー！」

レイズが二人を呼んだ。

「行きましょう…中尉…」

「ええ……」

レイズ達の所へ向かう二人。

アシエルが、心の中でつぶやく。

「（でも私には…そんなもの……）」

「研修の進行具合はどうかね？ 大佐……」

ガルスは、重ね合わせた手の甲に顎を寄せ、グラムに言った。

「研修の監査役は、ザナルティー軍曹に一任してあります」

グラムは表情一つ変えずに答える。

「その件なのだが…私は大佐に任せた筈だが？」

ガルスは鋭い目付きでグラムを睨んだ。

グラムは身じろぎ一つせずに、ガルスに言う。

「それについて、ご報告が有ります」

「何だ」

「今回、中尉の監査役をザナルティー軍曹に一任したのは、彼自身を、士官として訓練するためです。実際、研修初日から我が隊員の同時訓練を開始しています」

「彼自身の訓練は、別に行えば良からう？」

「実戦に勝る訓練は有りません」

「仕上がるのかね？」

「彼ならやれます」

ガルスの顔を見据えるグラム。

「…まあ良からう…好きにしろ…グラム…」

ガルスは溜息を一つこぼし、椅子の背もたれに寄り掛かった。

「しかしな…グラム…中尉も中々のくせ者だぞ？」

「くせ者…？」

「その言動、生活態度、性格から『あちら側』では『アイアンメイデン』…鉄の乙女と呼ばれていたそうだ…」

「それは大層な…」

「軍曹の手に負えるかな…？」

口の端を持ち上げて、ニヤリと微笑むガルス。

「それも、訓練のうちです」

グラムはそう言って、部屋を出た。

最初の一ヶ月期間中、レイズとアシエルは真面目に訓練に励んだ。
(ビンセントはどうか知らないが…)
学科では基礎的な対ヴァリアンタス戦術や歴史を学び、実技ではシミュレーターを使用した基礎駆動訓練からHALO訓練、NOE(ノエⅡ超低空地形追従飛行)に至るまで様々な物を学び、レイズ自身も、実戦経験者として彼女に様々な事を教えた。
そして、研修期間は最後の一ヶ月に入った。

Chapter 5

演習場に立つ、三機のHMA。

一機はレイズのラッシュハードロング。

もう一機は、ビンセントのロンギマヌス。

そして最後の一機は、一般仕様のレザールフ。

全機、火器を装備している。

「じゃあ今日から、実機での射撃訓練を始めます。使用火器は通常通りM 90です」

レイズはビンセントを横目で見た。

ビンセントは面倒臭そうに頭を掻いている。

「(はあ…この人…戦闘の時、本当に戦えるのかな…)」

「レ…曹…」

「(何考えてるんだか、全然わかんないし…)」

「軍…曹…」

「（何でこんな人が、シエーファアに…）」

「レイズ軍曹！」

アシエルの声で我にかえるレイズ。

「ハイ！？」

「早く始めないか？」

「あ、はい！　そうですよね！」

気を取り直す。

「今回は、実弾を使用します。目標は右から左へ移動しますから、それを射抜いて下さい。支援ユニットによるFCS自動照準は無し。手動射撃で発砲してください」

マニユアルを閉じる。

「それから、フランクリン中尉の機体には、エステルさんが一緒に乗ってくれるそうです」

「エステルが…？」

「安心して撃つて下さい」

彼は少々意味不明な事を口走ったが、アシエルは気にしなかった。それより彼女は、エステルが『イクサミコ』である事を再認識させられた事に気を傾けていた。

『人』にも言われた事がない言葉を、彼女はアシエルに言ったからだ。

エステルが人でないことはわかっている。

だが彼女は、エステルがもっと高位の『何か』であるような…

そんな気がしたのだ。

「では、始めましょう」

レイズの言葉を皮切りに、各々の機体へ乗り込んだ一同。最初にレイズ機が起動。

続いて、ロンギマヌス。

最後にアシエルのレーザーウルフが起動した。

「こちらレイズ。目標はここから前方500m地点です」
レイズからの無線を聞き、各機カメラをズーム。

横一直線に走るレールが見える。

この上を標的が走るのだ。

「じゃあ、まず自分からやってみますね？」

ライフルを両手で構えるレイズ機。

「目標、今！」

彼の合図で、レールの上を目標が走る。

発砲。

発射された砲弾は、動く目標を見事に撃ち抜いた。

「じゃあ、中尉、やってみて下さい」

「よし！」

彼女はライフルを構えた。

「目標、今！」

的が出される。

彼女はよく狙ってトリガーを引いた。

しかし、弾丸は的の右側を掠り、保安用の壁にめり込んだ。

「外した…？」

「みたいですね…」

彼女は悔しそうに言う。

「もう一度だ！」

もう一度やったが結果は同じだった。

溜息をつくアシエル。

「手動射撃のフィードバックが早過ぎる！ 照準が敏感過ぎて、狙えない！ 貴官らはこんな調整で今まで戦って来たのか？」

「え？ 手動フィードバックはデフォルトの筈ですよ？ それは…」

「扱いきれていないのは私か…！」

「大丈夫です。中尉…その為の訓練なんですから…」

「わかった…」

もう一度ライフルを構えるアシエル。

「軍曹、当て方を教えてくれ」

「よろこんで」

レイズは彼女に、レーザーウルフでの銃の撃ち方を教え始めた。

「まず、照準はセンターに置いて下さい」

「センターに…」

「次に、ライフルの照星をサブカメラで覗いて下さい」

「サブで照星…」

「的が出たら、無理に狙おうとせず、正面に来るのを待って下さい」

「わかった…」

「動かす時は、冷静に、少しずつ、慎重に…」

彼女は深く深呼吸。

「落ち着いて…中尉…」

エステルが声をかける。

「ありがとう…エステル…」

ライフルを構える。

「目標、今！」

出される的。

彼女はレイズの言葉を何度も反芻。

そして発砲。

発射された砲弾は見事、的の真ん中を撃ち抜いた。

「やった！」

思わず声を上げるアシエル。

その後何発も撃ち、その全てが命中する。

「やりましたね！ 中尉！」

「ああ！ 軍曹のおかげだ！」

「けっ…甘っちょろいなあ…二人とも…」

声を上げて喜ぶ二人を挑発するかの様にビンセントが言う。

「何ですか！？ ビンセントさん！」

「実戦のヴァリアントは、あんなにとるかねえぞ？」

レイズは小さな声で言った。

「一度しか戦った事無いくせに…」

「なんか言ったか？」

「い、いや何も…」

ロンギマヌスが左腕一本でライフルを構える。

「俺達の世界じゃ、撃ちや当たるは常識なんだよ！」

笑いながら言ったビンセントの言葉にアシエルが食いついた。

「なら手本でも見せてみる！ 傭兵！」

ニヤリと笑うビンセント。

「イオ、的のスピードを上げる。とびつきりにな…」

「了解」

「よし…よく見てろ。ルーキー」

ビンセントがトリガーに指をかける。

「目標、出せ」

物凄いスピードで出される的。

それに向かってビンセントはトリガーを引いた。

「おりゃあああああ！」

ライフルをフルオートで発砲。

連射される砲弾。

レールと的を隠す砂埃。

音を立てて地面に落ちる空薬莖。

あつと言つ間の出来事だった。

「どうよ？」

ビンセントが機体の親指を立てる。

「そんだけ撃てば当たるに決まってるじゃないですか！」

苛立つレイズ。

しかし

「軍曹！ あれを！」

アシエルの声を聞き、レイズは的に向かってズームした。

「なんだ？ あれ…」

ライフルから放たれた砲弾は寸分の狂いもなく、的の真ん中だけを綺麗にくり抜かれていた。

「あの弾全部、的にだけ当て続けたのか！？」

「どうだ？ レイズ。これが経験の差って奴だよ」
ビンセントは落ち着いた声で言った。
「あゝあゝ…つまんね…俺あふけるわ…」
そう言っつて、機体を格納庫に向かわせるビンセント。
それを、レイズは無言で見送る事しかできなかった。

「サンヘドリン中央会議室」
「ここ数ヶ月間は何の異変もなく、平和がつづいている…」
「不気味なものですな…」
「そのおかげで支部建設も、ごく一部を除いて順調に進んでいる」
「ガルスがグラムに言った。」
「さて、貴官の方は順調かね？」
「順調です。何も問題ありません」
「管理官補は支部就任後、二階級昇進する…名実ともにエリートでなければ、いい笑い種となるからな…」
「ガルスはグラムを、少し睨んだ。」

夜空の下に、何発もの銃声が響いた。

あれから、3時間…

彼女はずっと射撃訓練を続けていた。

「ねえ、レイズ…」

サラが不安そうな顔で、レイズに言う。

「放っておいていいんですか…？」

「……………」

無言のレイズ。

「レイズ…」

また銃声が響いた。

「（負けない！負けないんだから！置いてけぼりは嫌！もう置いてかれるのはイヤ…！）」

アシエルは呪文のように、心の中で繰り返し言い続けた。

HMAの足元には無数の薬莢が散らばり、ライフルのマガジンが無造作に山積みされている。

アシエルは息を切らして、機体を操作し続けた。

「中尉…」

「ごめんなさいね… エステル… あなたにまで迷惑をかけてしまっ
て…」

「迷惑だなんて…」

「私、強くならなきゃいけないから…強くなって戦わなきゃ…」

残った力で必死に機体を操作し、ライフルを撃つ彼女を見てエス
テルは心の中でつぶやく。

「（何で、そこまでするんですか？中尉…一体何が、あなたをそう
させるんですか？）」

数時間も前の事…

アシエルは、ビンセントに負けじと、彼と同じ設定で何度も試み
たが、当てる所か、一発も掠らなかった。実際にレーザーウルフに乗
るのは今日が始めてで、本来そうなるのは当たり前だが、彼女は状
況に甘んじる事はなかった。

訓練時間が終わっても、彼女はそうし続けた。

終わる様に言ったレイズにも、当たるような形で追い払ってしま
った。

彼女は、レイズにきつく当たってしまった事を少し悔やんだが、
自分のやっている事を止めようとはしなかった。

やがて夜になり、ドームの気象システムは、雨を降らし始めた。
冷たい雨だった。

「あのまま放っておく気か？ レイズ…」

レーザーウルフを見つめるレイズに、グラムが言った。

「大佐…」

振り返るレイズ。

「噂通りだな…中尉は…」

「噂？」

「彼女は『鉄の乙女』と呼ばれていたそうだ…」

レイズは自信の無さそうな表情。

「中尉に『放っておいてくれ』って言われちゃいました…」

「それからどうした？」

「何も言えずに…そのまま…」

「彼女が心配か？」

グラムはレイズに言った。

「監査役としてですか？」

「そうだ」

「彼女は、僕みたいな出来損ないの教えなんて、必要としていませんよ…大佐みたいな立派な人じゃなきゃ…」

グラムは一つ溜息をついた。

「出来ないと思う人間に、私が頼むと思うか？」

「え…？」

「出来ると思ったから、任せたまでだ…それとも、私の見込み違いだったか？」

「大佐…」

グラムは一步下がって向きを変え、レイズに背を向ける。

「なら、お前はなぜここに居る？」

「……………」

答えられないレイズ。

「いいかレイズ…鉄も砕ける時がある…」

グラムはそう言い残し、去って行った。

「レイズ…あれ…」

サラが異変に気付いた。

さつきから銃声がしない。それどころか、機体に動き一つ無い。

突然、機体のコクピットハッチが開いた。

「サラ！ 毛布用意しといて！」

「はい！」

レイズは雨の中、彼女の乗る機体に全速力で走り寄っていく。顔を覗かせるエステル。

「レイズ軍曹！」

「エステルさん！」

ウインチでコクピットに上がる。

「やっぱり！」

疲労からか、コクピットの中で意識を失っているアシエル。

レイズは彼女の身体を抱き抱え、機体から降ろし、急いで医務室に連れて行った。

「（やだよ…置いて行かないで…一緒に…）」

彼女が昨日、最後に見たのはHMAのコクピットの中で、次の日最初に見たのは、見知らぬ天井だった。

「（ここは…どこ…?）」

ベッドから身体を起こす。

「あれ？確かHMAに乗っていたはずなんだけど…」

彼女の結った髪は解かれ、服は緩い余裕のある物に変えられていた。

「あら？ もう起きちゃったの？」

アシエルは声のする方を向いた。

そこには、食事のトレーを持った、エレナが立っていた。

「ここは？」

「ここは、医務室。私はここの軍医。何があつたか知らないけど、今時過労だなんて…」

「私は確か、HMAに乗って射撃訓練をしていて…」

「そう…」

エレナは関心無さそうに、背を向けた。

「私はいつ頃ここに？」

「昨夜の8時半頃よ…レイズ君がね…」

「彼が？」

「ええ…意識を失っているあなたを毛布に包んで、血相を変えて飛び込んで来たわ」

「じ、じゃあこの服も彼が？」

「それは私。あなたが良い身体してるわねえ」

笑いながら話すエレナ。

「私…彼に謝らなきゃ…」

突然アシエルはベッドから下り、近くに架けてあった自分の服に着替え始めた。

「ちよつと！ まだ寝てなきゃダメよ!？」

エレナの声を見殺して出て行ったアシエル。

「フフ…悩め悩め…」

エレナはいたずら笑みを浮かべた。

レイズは朝のランニングを済ます所だった。

夕べ降った雨で、少しぬかるんでいるが、彼は気にせずに行った。彼は、アシエルの様子が気掛かりでならなかった。

監査役としてか、一人の男性としてか…それはわからなかった。

彼はタオルで汗を拭き、建物に入る為のドアを開けた。

「わっ！」

驚くレイズ。

そこには、髪を下ろしたアシエルが立っていた。

「あ…中尉…もう…大丈夫なんですか…？」

ぎこちない語調。

「もう…大丈夫だ…」

アシエルも語調がぎこちない。

「それは、よかった…」

レイズを睨むアシエル。

「な、何でしょうか…？」

まるで蛇に睨まれたカエルの様に固まるレイズ。

アシエルは何かを押し殺すような表情をしていた。

「ありがとう…」

「え…？」

レイズは思わず、彼女の顔を見た。

頬を赤く染めるアシエル。

「レイズ軍曹…私…！」

その時突然、辺りに警告音が鳴り響いた。

「総員、第二級戦闘配置。HMAパイロットは、所定の部隊へ。繰り返す。総員、第二級戦闘配置…」

「サンヘッドリン本部、中央官制室」

「接続ライン、全ライン切断！」

「『ゼロセカンド』との通信途絶！」

「プロトコルに異常無し！物理切断です！」

「『ゼロセカンド』応答ありません！」

「反応：途絶……」

官制室内は騒然とした。

「『ゼロセカンド』が……消えた……！？」

「デイクイオス、起動完了」

「アンビリカルブリッジ、開放」

「こちらミラーズ、発進準備完了」

「こちら官制室、そのまま待機せよ」

グラムは、デイクイオスの中で静かに息を吸った。

「大佐、レイズ機から通信です」

「繋いでくれ」

レイズの声が響く。

「大佐！一体どういう事なんです！？自分はさっぱり訳が解らないのですが……！」

「そうだぜ？グラム！俺も訳がわかんねえ！」

無線に割って入るビンセント。

グラムは少々苛立った調子で言った。

「建設中の最重要支部、通称『ゼロセカンド』との通信が突然消えた！」

「消えた!?!」

思わず声を上げるレイズ。

「ヴァリアントの襲撃を受けたと見て間違いない！」

突然、無線にアシエルの声が響いた。

「大佐！ 私も出させて下さい！ 実戦を経験させて下さい！ 大佐！」

叫ぶレイズ。

「何を言っているんですか、中尉！ 死ぬかも知れないんですよ？ そんな簡単に言わないで下さい！」

「死ぬ事を恐れているのは強くなれない！」

「僕はあなたの監査役として、中尉を死なせる訳にはいきません！ 言い争う二人を尻目に、グラムはエステルが受信した情報を見た。

「軍曹！」

「ダメです！」

「二人共、もうよせ……」

二人の間に入るグラム。

「出撃命令は撤回された」

「撤回!?!」

グラムは静かな口調で言った。

「『ゼロセカンド』は、壊滅した……!」

TO BE CONTINUED . . .

ACT10 砂の器(前書き)

実戦参加を要求するアシエル。しかしその結果は…

ACT10 砂の器

Chapter 1

「サンヘッドリン中央会議室緊急議会」

「…ましてや、防衛戦力のひ弱さが…！」

「それは貴官の戦略的誤算なのでは？」

「戦略的上重要と謳われながらも、あの程度とは…！」

「故に正面装備の拡大と、火力の充実こそが…！」

「言い逃れはやめたまえ！」

「対ヴァリアンタス戦力とうたいながら、自軍閥の強化に走っているのは明白ではないか！」

「貴官の軍閥は対ヴァリアンタス戦力保持法行使目標制限の項目を意図的に黙殺しているとの噂があるが、どうか！」

「黙殺なるものは我が軍閥には存在しない！我々は保有戦力の細部に至る迄を委員会に提出している事をお忘れか！」

「素人目にはともかく、報告などいとも簡単に改竄出来る事などこの場にいる誰もが承知だ！」

「我が軍を愚弄するか！」

「詭弁を述べるな！」

「諸君…！」

椅子から立ち上がり、腕を振り回しながら醜い言い争いをする軍閥士官と、サンヘッドリン幹部をガルスは一喝する。

「600名にも上る死者を出した今回の戦闘は、明らかにヴァリアントが支部の建設を妨害する物である！これで終わりとは思えん！自分達の覇権争いをしている場合ではない！」

静まり返る議会。

この期に及んでも未だ調和を見せない『軍』に、ガルスは嫌気を感じていた。

「ガキ大将どもめが…」

休会中、ガルスは吐き捨てるかの様に呟いた。

「実際目前に迫る危機に目を留めず、この期に及んで自分達の縄張り争い…『五つ星』など、ただの飾りになつとる…」

グラムがガルスに言う。

「権力の亡者…？」

煙草に火を点けるガルス。

「『敬謙な専心と言いながら、その力において実質の無い達』か…」

「テモテ書第二、三章五節…」

ガルスは煙草を灰皿に押し付け、ベンチから立ち上がった。

「状況を一番良く知り、一番誉められるべきは、実際に戦場で血を流すお前達兵士だ…」

「開会します」

議会の開会を知らせる職員。

背を向け会議室に向かうガルスが、立ち去り際にグラムに言う。

「『サンヘドリン』を頼む…」

「同日0950時、三番滑走路上」

「スペクター01、進入路へ」

「こちらスペクター01、了解…」

「スペクター02、現状で待機せよ」

「こちら02、コピー」

巨大な黒い物体が、その巨体をゆっくり滑らせ、滑走路に入る。

「飛行予定域に積乱雲を確認。中心気圧990hpa。飛行に障害なし…」

翼長200mはあろうかという巨大な全翼機は、出撃の時を待ち、そのエンジンを暖気させていた。

「つまりこう言う事ですか？大佐…」

格納庫の一室、オペレーションルームに集まったレイズ達は、今すぐにでも出撃出来る態勢に入っていた。

「超大型輸送機『スペクター』にHMAごと乗り込み、重要度の高い支部から順に巡回すると言う事ですか？」

「そうだ。今回の作戦、オペレーション『Migrant』は、襲撃を発見時、いかに迅速に展開するかが鍵となる。故に、機体には常時搭乗状態で待機し、展開時にはそのまま投下、戦闘を開始する」

「『オムツ』着用かよ…」

ビンセントが吐き捨てる様に言う。

「大佐、質問なのですが…」

「何だ？」

「なんで艦隊規模での巡回をしないんですか？」

グラムは一つ溜息。

「軍閥の面子を潰さぬように配慮した結果だろう…現に我が部隊にのみデフコン1が発令されている。もちろん空軍空中母艦に要請を出せば航空支援を受けることも可能だが、都合よくはいかんだろう」

「統合体の軍属連中なんてろくなもんじゃねえな…」

「ビンセントさん！」

「準備次第、直ぐに出撃する。では解散…」

「こそこそとグラムに近寄るレイズ。」

「すみません…大佐…何で彼女もここに居るんでしょうか？」

レイズはアシエルを横目でちらり。
グラムも、ちらり。

「…彼女だけ省く訳にはいかんだろ…?」

「そんな…絶対自分も行かせると言いますよ?」

小声で話すレイズとグラム。

その二人の会話が終わらぬ間に、アシエルはグラムに呼び掛けた。

「大佐! 私も出させて下さい!」

「中尉! だから、ダメだって言っているじゃないですか!」

「実戦に勝る訓練は無い!」

「訓練つて…!」

誰かと同じような事を言うアシエルに、グラムは一瞬苦笑。

そしてグラムは、アシエルを見据えて言った。

「フランクリン中尉」

「はい!」

「死ぬかも知れないぞ?」

「承知の上です! 死など恐れませんが!」

「死ねば全てを失うぞ? 人生も、自分自身も…愛する人間もだ。

それでも出たいか?」

アシエルは奥歯を噛み締めてから、決意を込めて答える。

「はい…!」

グラムは一瞬目をつむり、アシエルに言う。

「予備の機体を用意させる」

「大佐!」

「ただし!」

グラムは表情一つ変えずに、非常に冷淡な口調で彼女に言った。

「中尉が死亡した場合、我々サンヘドリンは一切関知しない。その

つもりでいる…!」

グラムはそう言い残し、部屋を出て行った。

無言のまま敬礼で見送るアシエルとレイズ。

アシエルは敬礼したまま、顔を強張らせていた。

「機体積み込み完了。作業02へ移行」
三機のHMAが輸送機のカーゴに積み込まれ、中で機体がロックされた。

輸送機のハッチが閉まり、出撃体制に入る。

「デイカイオス、輸送機への懸吊作業完了」

デイカイオスを輸送するための特別仕様機が、滑走路に入った。

「ごめんね…サラ…今日は休日だったのに…」

「しょうがないですよ…レイズ…『みんな』のためですもの…」

優しく微笑むサラ。

「よっしゃ。やっつけてやろうぜ。イオ」

ビンセントは気合いを入れる様に言った。

「ちよっとドキドキします」

イオは何度も深呼吸。

「彼女…大丈夫でしょうか？」

エステルは心配そうにグラムに言った。

「彼女の事は、レイズが守るだろう…」

「何故…そう思うのです？」

「彼はそういう男だ」

「官制室、発進許可を」

「こちら官制室、スペクター01発進許可」

「こちら01発進する」

輸送機は、爆発的な推進力で滑走路を滑走。
やがてその巨体は、空へ舞い上がって行く。
「続いて02、発進許可。戦士達に女神の加護を！」
「こちら02、発進。管制塔、感謝する」
滑走する02。デイクイオスに乗せた輸送機は、ゆっくり上昇していった。

Chapter 2

「第三支部上空、高度18000ft」

「現在、高度18000ft。気圧1100hpa…第三支部上空、通過します…」

二機の輸送機が縦に並んで飛行し、飛行機雲を曳いている。

雲の切れ目から見える、巨大な建造物。

建設中の第六支部だ。

「対地カメラ異常なし…その他センサー類感度良好…」

「異常なし。次へ向かう」

支部の周囲に目を光らせる、機体底部に装着されたセンサーポツ_ト。

ゆっくり回頭する輸送機を、地上に立ち、周囲を警戒するHMAのカメラアイが凝視した。

「サンヘドリン本部、司令官室」

ガルスは額を掌で覆い、頭を抱えていた。

溜息を一つ、いつもより深く。

「お疲れですね…司令…」

レイラがそつとデスクの上にコーヒーを置く。

「むう…すまん…」

溜息混じりの唸り声を上げるガルスはカップを持ち、コーヒーを口に運ぶ。

「豆を変えたかね…？」

「ええ…お口に合いませんでしたか？」

彼はもう一口飲んだ。

「いや…旨い…」

微笑むレイラ。

「一丸となつて戦わなければならない時に、ヒトは未だに自分の事しか考えていない…全く失望させる事ばかりだ…」

「お疲れでしたら、お休みになられた方が…」

「いや…大丈夫だ…このコーヒーさえあれば、疲れなど忘れられるよ…」

「司令…」

「いつその事…このコーヒーを毎日毎晩飲みながら、静かに暮らしたいよ…」

ガルスは椅子の背もたれに深く寄り掛かった。

「…彼等が、叶えてくれますわ…」

「そうだな…」

「高度18000ft、第三支部通過から500km」

「あーあ…このまま何も無きや退屈に過ごして、何かありゃ子供が目を覚ます前に戦場へ一直線…ゴキゲンだね」

無駄口を叩くビンセントにグラムが言う。

「気を引き締める。いつ敵襲があるか判らないぞ？」

「へい…へい…」

気だるそうなビンセント。

一方、グラムはコックピットの中で考えていた。

敵がもし、この巡回行動を予測していたとするならば…

巡回先での行動は起こさない筈…

巡回…？ 通過…？ そういう事か！

「スペクター全機、急速反転！ 第三支部に引き返せ！」

突然のことに、スペクターのパイロットが慌てた様子で聞き返す。

「反転ですか!？」

「敵は我々が既に過ぎた支部で行動を起こす！ ここから一番近い通過支部は第三支部だけだ！」

彼の声を聞き、スペクターは反転を開始。一方グラムはは全機に到達する。

「全機降下準備！ 敵の目標は第三支部だ！」

「第三支部管制室」

「にしても、本当に暇だなあ……」

「建設自体は、AIの無人機任せだもんな……」

オペレーターの一人は、イスの背もたれに寄りかかり、デスクの上に乗せた。

「いつそのこと、またドカーンと戦争でも起きねえかな……」

「戦争なら今でもしてるだろ？」

「ヴァリアントか？」

嘲笑混じりの声。

「こんなの戦争じゃないね！はつきり言って。戦争ってのはもっと派手にドンパチ……」

男の言葉の途中、突然、管制室内に警報音が鳴り響いた。

「レーダーに反応！てっ！敵襲！？」

「前方から敵機30！ソルジャータイプ！」

「警備のHMAは？」

「接敵まで30！」

その時、管制室のレーダーが、巨大な質量物を感知した。

「上空から高速で接近する物体あり！」

「新手か！？」

「いや…IFF応答あり！」

「デйкаイオス！！」

デйкаイオスを高速で降下させるグラム。

唸りをあげる機体のグラビティードライバー。

「エステル…グラビティードライバー、アブソバーモード！」

「了解」

「ゆくぞ！」

支部に迫るソルジャーの群に、ディカイオスはそのまま突っ込んでいった。

巨大な衝撃が地面を伝わり、管制室の床と天井を揺らす。

「ディカイオス…降下完了…！」

ディカイオスは、ソルジャーの群の中に着地する。

「こちらビンセント！タッチダウン！」

「レイズ、降下完了！」

「フランクリン、降下成功！」

「ディカイオスから全機へ…諸君らは私の打ち洩らしを片付けろ…支部守備隊の指揮権はビンセントに任せる！」

「…了解！」「…」

ディカイオスの周りに集まる敵機。ゲートから次々に出現したソルジャーは輪を描くように集まっている。

「エステル…フレズベルグ！」

「了解」

エステルは、亜空間コンテナからフレズベルグを取り出して装備やがてソルジャーは、堰を切ったかのように一斉にディカイオスに襲い掛かった。

グラムは冷静にフレズベルグの銃口を群に向け、そしてトリガー。弾丸がソルジャーの『身体』をこつそり抉り取っていく。

「左からも来ます」

群は二つになり、左右から同時に襲い掛かる。

ディカイオスは両腕を開き、左右に。そして前腕部フォトンマシンガンを発砲。

凄まじい速さで連射される光子の弾丸は、雨の様にソルジャーの群に降り注ぎ、破壊していく。

正面からも群が迫る。

そのうちの一機が、ディカイオスの懐に入った。

デイクイオスは素早く膝を突き上げる。

ソルジャーの胸部にデイクイオスの膝がめり込む。

蹴り飛ばされ、木偶人形の様に宙を舞うソルジャー。

グラムはすかさずに、デイクイオスで後ろ回し蹴りを入れた。

踵が胴体を碎き、蹴りに巻き込まれた数機のソルジャーが粉碎される。

そしてデイクイオスは、素早く姿勢を低くし、バーニアで空中に舞い上がった。

「エステル：ナパームランチャー、出力最大！」

右肘アーマーが展開し、大口径の砲口が出現。

砲口が煌めく。

「効果域限定、ロック」

「了解」

グラムはトリガーを引いた。

解き放たれる巨大なプラズマ火球。

膨大な熱量で昇華した地面は大爆発を起こし、巨大な炎の渦となつて、群を飲み込んだ。

「すごい… たつた一機であれだけの敵を…！」

戦うデイクイオスの姿を見て、息を呑むアシェル。

その時突然、遙か前方で閃光が散る。

「衝撃波来るぞ！」

ビンセントの言う通り、強い衝撃波が彼らに襲い掛かった。

ナパームランチャーが着弾したときの爆発が発生させた衝撃波だ。

「よし…第二波に備えるぞ！」

「了解！」

「り、了解！」

アシエルは操縦桿をにぎりしめた。

「中尉、落ち着いて…仲間はいつぱい居ますから！」

「あ、ああ！解っている…！」

支部施設から守備隊本隊の機体が出動し、部隊を展開する。

重機関砲を装備したレザールフが堡壘に配置し、他のHMAは

M 90を構えて膝をついた。

数十発の肩上発射型255？連装ロケット弾、それに155mmライフル“パラデイン”も装備しているようだ。

「守備隊全機へ通達する！我々はサンヘッドリン対ヴァリアンタス軍本部所属特殊部隊・シエーファーフント！これより本隊は、当守備隊の指揮を執る！」

守備隊の士官がビンセントに怒鳴った。

「なに！？指揮を執るだど！？勝手な事を言つな！」

答えるビンセント。

「なら死にたい奴からコイツに従え！死にたくない奴あ俺に指揮を任せろ！」

「な…！？」

「全機へ発令！敵機を捕捉次第、集中砲火！重機銃班は通常機と併せて波状射撃！突破されそうになったら、ロケット制圧射で対応しろ！」

ビンセントは素早く指示。

その頃ディカイオスは、遙か前方に位置し、ゲートから無尽蔵に現れる敵を倒し続けていた。

無数の光球が弾けては消える。

それでも数で勝るヴァリアントは、ディカイオスを抜け、数十機

が支部守備隊へ迫った。

「敵機接近」

「来るぞ！構え…撃つ…！」

重火器の引き金が一斉に引かれ、無数の砲声が一つの咆哮となつて鳴り響いた。

発射されたメタニウム弾が、ソルジャー達に鋼鉄の雨となつて降り注ぎ、火器から排出される葉莖が金色の小山を盛り上げる。

まばゆい閃光と爆炎が辺り一面に広がる。

部隊の攻撃と共にあって、ロンギマヌスの三連マシンカノンを撃つビンセント。

レイズは、ビンセントを少し見直していた。

「（性格も悪いし、スケベだし…僕とは気が合わないけど…間違いない！この人、兵士としては最精鋭だ…！）」

そう思いながら、レイズはビームランチャーを撃ち続ける。

「撃ち返し来るぞ！」

ソルジャーの群のあちこちで、チカチカと閃光が散る。

次々に着弾するビーム。

ビームは地表を昇華させ、爆発。

数機のHMAがビームに貫かれ、爆ぜる。

「中尉！ 罫の中に隠れて！ 早く！」

「あ、ああ！」

レイズに導かれ、罫の中に隠れるアシエル。

次の瞬間、アシエル機の立っていた位置をビームが通過した。

「罫の中では姿勢を低くして！」

「分かった…！」

アシエルを保護したレイズは、機体の上半身だけを罫から出し、ビームランチャーを連射。

ソルジャーを次々に撃ち落としてゆく。

「私だつて！」

アシエルは罫から立ち上がり、ライフルをフルオートで撃った。

「駄目です、中尉！」
叫ぶレイズ。

その時、群から放たれた無数のビームが着弾。アシエルの目の前に、土砂が舞い上がった。

「前が見え…！」

ビームに貫かれるアシエル機。

ビームはアシエル機の右肩に当たり、腕部を根本からもぎ取った。

「きゃあああ…！」

「中尉！」

叫ぶアシエル。

姿勢を崩し、罫の中に仰向けに倒れるアシエル機。

さらに迫る数発のビーム。

恐怖。死の恐怖。

次の瞬間、左前腕部のグラビティシールドを最大出力で展開したレイズ機が、アシエル機の前に。グラビティシールドでビームを弾き、すかさずビームランチャーをソルジャーに叩き込む。

「はあ…ああああ…」

「中尉！ 無事ですか中尉！」
震えるアシエル。

「レ、レイズ軍曹…！こ、恐…怖い…いや、死にたく…」

「しっかりしてください中尉！ …ビンセントさん！ 聞こえますか、ビンセントさん！」

無線をビンセント機へ。

ビンセント機より応答。

「どうした、レイズ」

「中尉が！ フランクリン中尉が！」

「アシエルが！？」

ビンセントは、マシンカノンを撃ちながら前線より後退し、レイズ達の罫へ急行。

そこには、右肩を失ったアシエル機が倒れていた。

「こりゃあ派手にヤラれたな…。アシエルは？ 中身は無事か！？」
レイズ機の横に立つロンギマヌス。

「無事ですが…」

「参ったな畜生…」

その時、二人の機体レーダーが、新たな敵影を感知した。

「ナイト一機にファットネス三機…か…。大分しんどいな」

舌を打つビンセント。

しかし。

「援護しろ、レイズ！ 悪いが俺は自分の戦闘に専念する。他の連

中にも火力を集中するようにお前が言ってくれよ！」

「了解！」

ビンセントは大きく深呼吸。

「行くぜ、イオ！」

「支部施設北20km、ゲート直下」

それは『戦闘』と言うより、一方的な『殺戮』の様相を呈していた。

原型を留めぬまでに破壊された者や、摺りし紅蓮の炎を上げる者。則ち、そこに存在する全ての敵は、ディカイオス一機によってそうされたのだ。

地面を覆い尽くさんばかりに広がる破壊された敵機の絨毯。

ナパームランチャーの熱量によって融解固着し、ガラス化した大地に、デイカイオスは悠然と立っていた。

「…居るんだろう？ リベカ…そろそろ顔を見せたらどうだ？」

リベカの乗るネクロファイリアが腕を組んだ堂々とした姿で現れ、ゲートの真下の空中で静止。デイカイオスを睨む。

「派手な登場だな…リベカ…！」

「前回の屈辱、晴らさせてもらうぞ！ デイカイオス！」

睨み合う二機。

リベカは、二本のブレードを圧縮空間の中から取り出し、両手に持った。

「では…始めるとしよう」

Chapter 3

「行くぜ、イオ！」

罫を飛び出すロンギマヌス。

機関砲の支援射を受けつつ、自身もナイトへ三連マシンカノンを連射しながら突撃するロンギマヌスに数発のビームが迫った。

彼は短く鋭く息をはき、機体を素早く機動。二発、三発と次々にビームを回避する。

正面から迫る一発のビーム。

彼は機体をロールさせ、ビームを回避。

その時、もう一発のビームが機体に急迫。

ビンセントは機体側面のスラスターを噴射し、ビームの軌道から回避する。

前面に出るファットネス。

バスターランチャーの砲口が煌めき、大出力ビームがほとばしる。

寸前、ロンギマヌスはビームを回避。

三連マシンカノンに装着されたソニッククローでバスターランチヤーを切り捨て、ファットネスの胸部へパイルバンカーを叩き込む。次の瞬間、ナイトがロンギマヌスに切り込んだ。

ビンセントは、ソニッククローでブレードを防御。

パイルを向けようとするが、ナイトは脚でロンギマヌスの右足を押さえる。

「南無三！！」

もう片方のブレードが迫る。

その瞬間、ロンギマヌスの後方から、数発のビームがほとばしり、ナイトのブレードを弾き飛ばす。レイズの援護射撃だ。

「上手いぞ、レイズ！」

ナイトを蹴り飛ばすロンギマヌス。

ファットネスはナイトを援護しようとミサイルを放つが、ロンギマヌスはフレアを放出しながら回避。

守備隊の155mmライフルが火を噴き、ファットネスを撃ち抜く。

ビンセントはナイトに向かってマシンカノンを連射。弾幕を張り、再びナイトへ迫った。

「はっ！」

リベカはディカイオスに切り掛かった。

リベカの剣を、ディカイオスの手刀が受け止め、重力場同士が互いを弾きあう。

さらに二撃目、三撃目と剣を打ち込むリベカ。だが、そのすべてが防御されてしまう。

「くっ!!」

一歩退くリベカ。

グラムが言う。

「お前の剣は短調で真っ直ぐ過ぎる。まるでお前の指揮そのものだ」「黙れ!」

ネクロフィリアが、ディカイオスに向かって真っ正面から突進してきた。

グラムは機体を僅かに左へ移動。空を切るブレード。

それでもリベカは、複数本の腕で連続して切り込んでくる。

懲りずに…

一瞬自分を疑う。

愉しんでいる?

こいつが…リベカが強くなる事を求めているのか…?

「まさか…な」

呟くグラム。

彼は両腕を構える。

「来い、リベカ。戦い方を教えてやる」突進してくるリベカ。

ネクロフィリアが、剣を振り上げる。

レイズは機体を墨から立ち上がらせ、前を眺めた。

遙か前方では、デイカイオスとリベカのネクロフィリアが発する閃光と爆炎が散っている。

そして自分のすぐ目の前では、ついさっきまで凄まじい戦闘が繰り広げられていた。

だが今は、静かそのものだ。

「ビンセントさん…あの…生きてます?」

おそろおそろ無線を繋ぐレイズ。

「レイズ…」

心配そうなサラ。

「ビンセントさん! ビン…」

「うっさいなあ! もう…!」

「ビンセントさん!」

「いやあ…一歩間違えばアレ物よ! あれ? もしかして心配した?」

いつものビンセントの声だ。

「心配なんかしてませんよ!」

笑いながら話す二人。

その時、凄まじい衝突音がレイズ達に届いた。

「な、何だ? サラ!」

「分かりません! 一体何が起きているのか…」

「決まったんだよ…勝負が…!」

ビンセントは、デイカイオスを含む遠くの空を眺めた。

「うぐあっ！」

呻くりベカ。

ネクロフィリアの腹部にめり込むディカイオスの右拳。

彼女が振り下ろした何本もの剣を見切ったディカイオスはネクロフィリアの懐に入り、右拳を打ち込んだのだ。

「もうギブアップか？」

「まだまだあ！」

突然、リベカは二本の腕でディカイオスを取り押さえ、残った腕でディカイオスの胸に刃先を向ける。

迫る刃。

突然、ディカイオスの肩ユニットが分離し、二機の間を交差して通り過ぎた。

「！！！」

次の瞬間、ユニットと機体との間を繋ぐ“重力糸”が強力な重力子刀となってネクロフィリアの腕を切断。切れ目が入り、するりと落ちる。

そして。

「撃て」

呟くグラム。

すると突然、ネクロフィリアの背中に、二本のビームが着弾した。「な…に!？」

肩ユニットから発射された高出力ビームだ。

グラムはすかさず、右手掌底部に重力子を込めクロフィリアの腹部へ叩き込んだ。

「きゃあー！」

華奢な声を上げて、突き飛ばされるリベカ。

そしてグラムは、亜空間コンテナからプレッシャーカノンを取り出し、ネクロフィリアへ構えた。

「あれは…例の重力波砲！…まともに喰らえば、ひとたまりもない…！」

再生も追いつかず、成す術のないリベカ。

グラムはトリガーを引いた。

「ごめんなさい…お父様…リベカはお父様のお役に立てませんでした…！」

発射される巨大な波動。

リベカは一粒の涙を流し、目をつぶった。

「目を開けなさい…リベカ…」

突然、彼女にとって最も慣れ親しんだ声が、彼女の頭の中に響いた。

「お父様…？」

彼女はゆっくり目を開けた。

彼女は驚いた。

ネクロフィリアは、湾曲空間に守られ、プレッシャーカノンの影響を全く受けていなかったのだ。

「なに！？」

グラムは愕然とした。

あのプレッシャーカノンが全く効いていなかったのだ。

「空間湾曲機構！」

「…デイクイオス…その辺にしておいてもらおう…」

グラムの頭の中に、声が響いた。

「誰だ貴様は…！」

声だけで、姿は無い。

「リベカがいつも世話になっている様だな…」

「…貴様がリベカの父親か…！ まったく…教育方針が間違っているのでは？」

「ふ…リベカはじゃじゃ馬娘でね…これでも可愛い一人娘だ…」

「嫁の行き先には困りそうだな…！」

「今日は娘を連れ戻しに来たのだが…何だったら、君が貰うかね？」

『声』は笑っている。

笑っているが、威圧的な威厳に満ちた声だ。

「残念だが…私はおしとやかな女性が好みでね！」

「そうか…残念だったな、リベカ。…さあ、帰るぞ！」

「お父様！いやです！私はまだ戦えます！」

「リベカ…！」

リベカの身体がびくつと動いた。

「今のお前では勝てん！」

「はい…」

しゅんとするリベカ。

突然、ネクロフィリア背後の空間が歪み、空中に巨大な“穴”が開いた。

「敵機、超空間ゲートを開きました！」

リベカを乗せたまま、ネクロフィリアは穴に入ろうとする。

「待て…！」

プレッシャーカノンの砲口を向けるグラム。

その瞬間、ネクロフィリアの右腕が、ディカイオスに向けられた。

刹那、向けられた右腕先端の空間が歪み、その歪みは突如、ディ

カイオスに向かって伸びた。

突然のことに、グラムは咄嗟に回避。

背後の地面が、巨大なハンマーで叩かれたかのように陥没、いや、サラダボウル状に消失する。

「プレッシャー…カノンだと…！？」

グラムの言葉に、“声”は答える。

「お前はディカイオスの事を何も分っていない。同じことは、お前の機体でも出来るはずだぞ？」

声がそういった瞬間、ネクロフィリア周囲の空間が歪み、一斉に

幾十ものプレッシャーカノンが放たれた。

グラムは、攻撃を必死に防御しながら声に言う。

「いつか必ず……、必ずお前の首を貰うぞ！」

奥歯を噛み締めるグラム。

だが、声は彼をあざ笑っているように聞こえた。

「待っているぞ……兄弟よ……」

そのままゲートの中に入っていくリベカのネクロフィリア。

「機体の防御もままならないとは、まったく……帰ったらお仕置きだぞ！」

「いや〜！ お仕置きイヤあ〜！」

リベカの叫び声を残し、ゲートは静かに消えていった。

ひとつ大きな溜息をするグラム。

「大佐……？」

遠い目をするグラム。

「状況……終了……」

彼は舌を打ち、手の平を見た。

汗まみれの手の平。荒野に立ち尽くすデイカイオス。

後にはソルジャー達の残骸と、虚しい風だけが残った。

Chapter 4

活気溢れる整備部。

彼らは、グラム達が帰還して直ぐに、機体の整備をはじめた。

普段は、さながら戦場の様な忙しさになる。

しかし、グラムの指揮する部隊、『シェーファーフント』は他とは違った。

機体の破損率が他の部隊と比べて、極端に低いのである。

今回、ただ一機を除いて……

「派手にやられたもんだねえ…こりゃあ…」
術長はキャップのつばを持ち上げて呟いた。
彼の見る先には、腕のもげたレザーウルフ。
傷口には融解した跡がある。
ビームで撃たれた証拠だ。

「乗ってたのは？」

「えーっと…ああ、フランクリン中尉っすね」

「フランクリン？」

「中央軍のキャリアアーマンっす」

術長は溜息をついた。

「使えねえ道具使っなよ…まったく…」

その日は、いつもと違っていた。

普段、脱いで洗濯する服でさえも、きちんと畳むほど几帳面な彼女が、その着衣を乱雑に脱ぎ捨ててあるのだ。

廊下の端から、パイロットスーツ、インナースーツ、下着と言った具合にだ。

その先には、シャワールームがある。

アシエルは帰還して直ぐに、熱いシャワーを頭から浴びていた。
自然と思考が巡る。

戦えた？死なんか恐れない？恐くなかったの？

こわい…

恐かった？何で戦場に出たの？

わからない…

護った？それとも護られた？

彼は…

彼？

護ってくれた…でも…それは彼の仕事だから…

彼は？

彼は？

記憶がリフレーンする。

何も出来ずに、世話だけかけて…

情けなく帰還して…

彼にまで…

彼にまで…

『だから無理だつて言ったのに…』

彼女は、床に崩れ落ちる様に座り込んだ。

「ふええええ…」

声にならない我慢していた感情が、涙になって一気に溢れ出す。

ぼろぼろと落ちる涙。

それはお湯と一緒に足元へ流れ落ち、排水溝へ流れていった。

最近、レイズの様子が変なんです。
返事も元気がないし、表情もつかないんです。
私が話しかけても、たまに無視するし…
もしかすると、私のことが嫌いになったのでしょうか…
(サラの日記より)

あの戦闘からしばらく経ち、研修期間も残す所半月となった。
他の部隊の研修は、大詰めを向かえ、仕上に入っている事だろう。
上辺だけ見れば、彼等もそうだ。
上辺だけは…

訓練の合間、レイズ達は食堂で昼食を摂っていた。
レイズとビンセントは同じテーブルに座り、アシエルだけが、別のテーブルに座っている。

一切目を合わせない二人に、ビンセントは苛立ちを感じるようになっていた。

「なあレイズよう…」

「はい？」

「中尉と何かあったのか？」

「ぴたりと止まるレイズの手。」

「別に何も…」

「ふーん…」

ビンセントは横目でレイズを見ながらアシエルの元に行き、側に座った。

「レイズと何かあったの？」

「別に…」

彼女の表情をうかがうビンセント。

怒っているのではなく、非常に哀しい表情をしている事に、彼は気付いた。

彼は、近くにあつた灰皿を手元に引き、ポケットから煙草とジツポを取り出した。

「あんだ、何で軍隊に入ったの？」

アシエルの表情が更に悲しくなった。

「（あ、やべ…話題変えなきゃ…）」
焦るビンセント。

「そういえば、みそ汁って…」

「強くなんて、なれなかつた…強くなんか…」
「……………」

長い沈黙。

ビンセントは溜息をついてから、煙草に火を点けた。

「一人だけじゃ無理だろうな…いや、誰だつて一人じゃ無理だ。俺も、レイズも、グラムも…勿論あんだもだ…」

「……………」
「…あんだこのままじゃ、一人ぼっちのままだよ？」

ビンセントは灰皿に煙草を押し付け、席を立つ。

アシエルはレイズを見た。

暗い表情のレイズ。

アシエルは、どうしたら良いか分からずに、逃げる様に席を立つた。

それからの彼女は、全くと言って良いほど、何も手が付かなかつた。

HMAの操作もままならないし、返事も心がどこへやら…

アシエルと共にHMAへ乗っていたエステルの報告を受け、グラムはアシエルに、カウンセリングを受けるよう命じたのであった。

「またこの部屋に来るなんて、私、どうにかしている…」

翌日、彼女は部屋のドアの前に立ち、溜息をついた。

ドアをノックする。

「入って」

返ってくるエレナの声。

「失礼します…」

畏まった態度で部屋に入る。

「そんなに畏まらなくても良いのよ？じゃあここに座って」

エレナはアシエルを、ベッドの端に座らせ、話し始めた。

「さて、グラムに言われて、貴方の心を診てやれって言われたんだけど…何があったのか、正直に話してごらんさい」

「実は…」

事の経緯を、ゆっくり語り始めたアシエル。

自分から望んで実践に出た事。

何も出来ずに帰って来た事。

そして、レイズに言われた事。

一部始終を話した。

「なるほどね…ひどいのはレイズ君ね？彼がそんな事言ったから、あなたは落ち込んでるんでしょう？」

「違います！彼は間違った事を言っています！でも…」

「まあ、この事に関しては、あなた達の問題だから、私はノータッチ。それより質問があるから…」

彼女はいつもの書類を取り出し、質問を始める。

形式通りの質問はすぐに終わったが、エレナは何も言わずに、そのまま質問をし続けた。

「じゃあ次ね？ 今、生理中？」

「は、はい……」

「何日目？」

「三日目です……」

「きつい時期ね……よく頑張ってるじゃない……」

「まだ足りないんです……まだ……」

「じゃあ次……セックスの経験は？」

「……え？」

表情を固めるアシエル。

エレナはいつも通りの態度だ。

「バージン？」

回答を迫るエレナ。

「は、はい……」

「そう……」

「あのそれが何か？」

「別に……形式上ね……」

エレナはそういうと、一つの錠剤を手渡した。

「これ飲んで、今日はもう休みなさい……」

「はあ……」

部屋を出るアシエル。

エレナはそれを見送ると、深刻な表情で、溜息をついた。

「まったく……いざと言う時にいつも駄目なんだから……男って……」

翌日グラムは、エレナから直接提出された鑑定結果を読み返していた。

デスクの椅子に座り、天井を見上げる。

グラムは、さっきまでそこに居たエレナの言葉を思い起こした。

「異常はない…?」

「精神に異常はないわ。鬱病でもないし、無気力症でもない…」

「じゃあ…?」

「彼女、あの歳でまだセックスした事無いんですって」

「は？」

「処女だつて事」

髪をくしゃくしゃとかき上げるグラム。

「そんな物、個人差があるだろうに…」

「ええ、そうね。でも彼女の場合、男の子と手を握った事も無いし、キスした事もないのよ?」

「……………」

「彼女、頑張り過ぎよ。このままじゃ心が壊れちゃうわ…強くなりたいと思っても、それが遠ざかっていく…そりゃそうよ…」一人ぼつち『じゃ…』

無言のままのグラムに、彼女は続けて言った。

「彼女多分、レイズ君の事が好きね…」

「なに?」

「彼女はどうして良いか分からずにいるのよ…自分の気持ちと、責務と、夢の間に挟まれて、叫びを上げているの…」

「どうすればいい?」

「そんな事分らないわ…貴方達『男性』が考えて…」

エレナは最後にこう言った。

「女性はね…『砂の器』なの。ちよつとした事で簡単に割れてしまつ、美しい陶器なのよ…」

グラムは、思い立ったように椅子から立ち上がり、机の中から車のキーを取り出した。

「…だめな生き物だな…男ってのは」

「…レイズ…あの…入ってもいいですか？」

サラは部屋のドアの前に立ち、彼に声をかけた。
返事が無い。

サラは彼の返事を待たぬまま部屋に入る。

彼はサラの声を無視して、ベッドの上に座り、膝を抱え黙って目をつぶっていた。

「レイズ…」

「……………」

「レイズ…私…」

「ごめん、サラ…今は一人になりたいんだ…」

サラを突き放す様に言うレイズ。

「私は…」

「…慰めにきたなんて言わないでくれよ？」

「私はただ…！」

「ただ…？なんだい？」

「…私達イクサミコは…人間に従う様に作られています…それで…もし…貴方が身体を求めるのなら…それで貴方が満たされるなら…」

私は……」

顔を真っ赤にさせてそう言うサラ。

その目には涙を蓄えていた。

「違う……そうじゃない……そうじゃないんだ……サラ……」

レイズは俯いたまま目を合わさずに言った。

「……僕はひどい人間だよ……自分が失敗したくないから、前線に出るなって言っ……」

「レイズ……」

「……中尉に酷い事を言ってしまった……中尉だって落ち込んでいたのに……僕は……！」

突然、サラが彼の首を抱いた。

「……わかっていきます……あなたがお友達をとっても大事にする人だって事は、私が一番よく知っていますから……」

「サラ……」

「レイズ……あなたが以前、ご親友を亡くされて落ち込んでいた時、私は何もできませんでした……かける言葉も無く、できることもありませんでした。あなたはただ黙って、つらい思いを心の奥にしまい込もうとして、悲しい顔ばかりしていました……でも私はもう、苦しんでいるあなたを見たくありません……！だからもう、何もできずにいるのはいや……！私は私の全てで、あなたを幸せにしたい……だって私は、貴方の“イクサミコ”だから……私は……貴方の“サラ”だから……」

「僕の……？」

「そう……あなたの……」

見つめ合う二人。

ゆっくり顔が近付く。

そして唇が重なる寸前、部屋のチャイムが鳴った。

「……ごめん……」

サラを残し、インターホンに出る。

「はい？」

「私だ…ミラーズだ」

「大佐!？」

レイズの声が裏返った。

「御用件は…」

「飲みに行こう」

「え？」

「酒、飲みに行こう」

Chapter 5

一人でいる事なんて慣れている。

今までもそうだったし、これからもそうだ…

なのに…

どうしてこんなに胸が苦しいんだろう…

『彼』の事を思うと、心の奥が熱くなって…

でも…駄目だって分かってる…

そんなんじゃない強くなれないって…

強くなるには、いろんな事我慢して、何でも頑張らなきゃ…

我慢して…

我慢して…

でも…その度に…胸が痛い…

シテイーの北側に、『エリコの壁』と呼ばれる古い隔壁がある。

高さ1500mのその壁は、このドーム都市が建造された一番最初の時期、つまり『第一期造成』時に造られた、この都市で一番古いメガストラクチャーだ。

その壁の足元に、他の建物に隠れる様に建つ、古い三階建てのビルがある。

ビルの一階の外に、『BAR』とだけ書かれた小さなネオンサイン。

落ち着いた雰囲気の、渋い洒落た店だ。

「ストレガーっ…クーラーで」

「…じゃあ、同じ物を…」

「かしこまりました…」

これまた落ち着いた雰囲気のバーテンが、手際よく酒をこしらえる。

「どうやら、邪魔をしてしまった様だな…」

「え？」

「部屋にサラを待たせているんだろう？」

「あ、いや…えーっと…あの、その…」

慌てた様子で口ごもるレイズ。

「お待たせしました…」

バーテンが、二人の前に置かれたコースターの上に、そっとグラスを置いた。

「えーっと…別に何かしていた訳では…」

「分かったから、飲め…」

「はい…」

レイズはグラスを持った。グラスの中を満たす、鮮やかな色の液

体。

一口、グラスを傾ける。

口に中に広がる複数のハーブが醸し出し爽やかな香り。

そしてフルーツジュースの心地よい甘さが、彼の舌を喜ばせる。

一息つくレイズ。

彼は、心がすつと落ち着くのを感じた。

「男同士、お互い腹を割って話そう……」

グラムは、グラスを置いた。

「調子はどうだ？」

「ええ……まあ……」

不確かな答えを返すレイズ。

「『ええ、まあ』じゃ、わからん」

彼は意を決したかのように、答えて言った。

「……正直、どうしたら良いか分からなくなっていました……僕は、彼女を死なせたくない……でもそう思っていて、上手く伝わらない……拳句の果てには傷つけるような事を言ってしまった……僕は、男として失格です……」

肩を落とすレイズ。

グラムは、一つ溜息をついてから、彼に話し始めた。

「昔、一人のどうしようもなくだらしない男がいてな、……しかし、その男には一人の女がいて、いつも二人で暮らしていた。だが、ある日、女は姿を消した。ほんの些細なすれ違い……男のほんの小さな一言……たったそれだけで、二人の人生は変わってしまった……」

「……」
「男女関係に限った事じゃない……些細な事でも、大きな問題になる事がある……『我々』のような仕事をしていれば尚更の事だ……お互いに、大きな蟠り（わだかまり）を残して別れば、人生に大きなしこりが残る……」

「どうすれば……」

「レイズ……人間は、行動して後悔するより、行動せずに味わった後

悔の方が大きい……」

「大佐……」

「行動しろ……レイズ……そして成せ……」

グラムはそういうと、グラスの酒を飲み干した。

「それに……彼女は……」

「彼女……？」

「いや……なんでもない……」

言葉を濁すグラム。

「とにかく、今日は飲もう……レイズ！」

「あの、大佐」

静かな調子の声。

とても落ち着いている、迷いの無い声。

「僕は、あなたの部下でよかった……」

透き通った笑顔のレイズ。

グラムはそれを見て少し微笑んだ。

「今日は、私のおごりだ！」

「太っ腹！」

笑いながらグラスを傾ける二人。

彼らは、そのまま酒を夜中まで飲み交わした。

いつもは、目覚ましのアラームが鳴るより早く目を覚ます彼女が、その日はアラームで目を覚ました。

正確には、起きようとした。

「…ん…」

ベッドの上で身をよじりながら、アラームのボタンを指先で捜し出して押し、目を擦りながら、体を起こす。

「…はんんっ…」

背伸びをしてから、ベッドを降りる。

いつも通りの朝だが、いつもと違う朝…

彼女はカレンダーを見た。日付の升目が、×マークで潰してあって、今日の日付だけがぼっかりと空いている。

今日が研修期間の最終日…彼女は、深く溜息をついてから洗面所に向かった。

準備を調べ、朝食を摂りに食堂へ。

何故だろう…

もの凄く、気が重い。

動作の一つ一つが、今日という日を削り取っているような気がして…

多分、今日が最後だからだと思う。

食堂。

偶然、レイズの姿を見つけた。

彼女は咄嗟に、自分の姿を隠す。

思考に一瞬のブランク。

思い直す。

「何やってるんだろう…私…」

頭を抱えるアシエル。

一方レイズも頭を抱えていた。

『行動しろ、そして成せ』

列に並びながら、グラムの言葉を何度も反芻するレイズ。

心に留め、呪文の様に繰り返す。

「今日が最後だもんなあ…」

自分で気付く。
最近、独り言増えたか？
疲れてるなあ…多分。

彼女はトレーを持ち、列に昇った。

なんか、食欲が無い。

ヨーグルトのパックだけをトレーに乗せ、席を探す。空席は無い。

また溜息。

最近溜息増えた？

心の中で呟く。

無視。

調度、二人組の男が席を立った。

良かった。ツイてる。

他の奴に席を取られないように、急いで座る。

座ると、目の前に一人の男が座った。

やっぱりツイてない。

「あ…中尉…」

「レイズ軍曹…」

ツイてないと言っか、なんと言っか…

一瞬、目が合う。

直ぐに視線をずらす。

「私、やっぱり部屋で…」

「中尉！」

立ち上がるうとした彼女を、レイズは呼び止めた。

「あの…中尉…朝食くらい一緒にしません…？」

微妙な表情のアシエルは再び席に座った。

申し訳なさそうなレイズ。

二人は無言のまま、食を進める。

「（行動するって…どうすればいいんだろ…）」

「（…今日が最後なのに…）」

気まずい雰囲気の二人。

無言の二人。

「（行動…！行動…！）」

思考を巡らすレイズ。

「あの…」

「……」

「僕、中尉に謝らなきゃいけない事が…」

レイズは彼女の顔を見た。

ああ…またこの目だ…

悲しい目。

この世の一切合切を憂いでいるような、悲しい目。

「中尉？」

「私は軍曹に謝らなきゃいけない…偉そうな事言ったり…もしかすると、酷い事も言ったかも知れない…」

彼女は一瞬の空白を置いてから、彼に言った。

「ごめんなさい…」

「あっ、いやっ！ 謝らなきゃいけないのは、僕の方で…！ あの時、中尉にあんな事を言ってしまった…」

「恐くないだなんて大口叩いて…結局恐くて、弱くて…自分のやって来た事って何だったんだろ…って思っちゃって…いろんな事我慢して、いろんな事諦めて、強くなるうと思っても、くるくるくる空回りばかりして…馬鹿みたい…。レイズ軍曹は強いなあ…羨

ましいくらい…私なんかを護りながら、あんなに戦えるなんて…私は本当に弱い…」

涙ぐむアシエル。

レイズは、すっ…と息を吸ってから、彼女に言った。

「僕が始めて実戦に出たとき…輸送機内で待機していた時は内心不安で…戦闘になっても、やっぱり恐くて…喚き散らして逃げ出した位恐くて…」

彼女に語るレイズ。

「…でもその時、同期の友人の顔が思い浮かんで…その時気付いたんです。自分は一人じゃ無いんだって…仲間がいて、助けてくれる…誰かと一緒なら戦える…それからは、全然恐くなかった…」

「その一人は今…」

「その後すぐ、戦死しました…」

「そんな…」

「だからもう、仲間を失いたくない…誰かを護るためなら、恐くないんです。…中尉、あなたは強い…！弱くなんかありません！誰かの為に戦おうとする貴女は、とても強い！」

真剣な表情のレイズ。

傍観者の眼なんて無視。

突然、アシエルは涙を流して泣き出してしまった。

「ええ！？あの、えつと…僕また何か…？」

慌てるレイズ。

「違う…違うんだ…軍曹……そんな事言ってくれたのは、貴方が初めて…」

「中尉…」

「貴方に会えて、本当に良かった…」

「泣かないで下さいよ…！中尉！」

流石に、周囲の目が痛い。

「レイズ…ザナルティ…軍曹、アシエル…フランクリン中尉…第七シミュレーション室まで出頭してください…」

突然のアナウンス。

「あ、中尉、呼び出し！」

レイズは内心助かったと思っていた。

「うん…」

トレーを片付け、シミュレーション室へ向かい二人。アシエルは、レイズの背中を見つめて、静かに微笑んだ。

「それでその後、お酒をかなり召されて、今も残っている…と…」

エステルは少し呆れた表情で、グラムを見つめた。

「…所謂…男の付き合いだ…」

グラムは、ばつが悪そうに目を逸らした。

「男の人ってダメね…」

「…うむ…」

認めるしかない…

「おいおい…飲みに行ったんなら、何で俺に声掛けねえんだよ…！」

インカムを通じて、ビンセントが話し掛けて来た。

「いや…真面目な話だったからな…お前は抜きだ…」

「ひどっ…！」

くすつと笑うエステル。

その時、部屋のドアが開いた。

「レイズ〓ザナルティー、アシエル〓フランクリン両名、出頭しました…！」

敬礼する二人。

「ご苦労…」

グラムは真剣な表情で二人を見た。
息を飲む二人。

「知つての通り、今日が研修の最終日だ。そこで、中尉には、最終訓練を受けてもらう！」

「最終訓練…ですか？」

不安げなアシエル。

「このシミュレーションを使って、ビンセントⅡキングストーンと戦ってもらおう！」

「こんちゃー！」

エキシビジョンにビンセントの顔が映し出された。

「彼と…？」

「そうだ」

アシエルとレイズは顔を見合わせた。

「（勝てると思う？）」

「（分かりません）」

お互い、表情で語る。

でも、答えは一つしかない。

「分かりました」

アシエルはグラムに敬礼。

シミュレーターに乗り込む。

イクサミコのシートには、エステルが座った。

「またよろしく…」

エステルに挨拶。

エステルは彼女に言った。

「何かいい事でも…？」

微笑むアシエル。

「…見つけたんだ…本当の強さを…！」

アシエルはシミュレーターを起動させた。

「ビンセント」

グラムはビンセントのシミュレーターにだけ通信を繋いだ。
「分かってるって…!!」

ビンセントは軽快な返事を返した。

彼女はコンソールを確認。

下肢部オート balancer 感度最大。

FCS、システムから分離。

「格闘戦？」

「そう。殴り合い」

「女だからって言って、手を抜いたりするなよ？」

「御託を並べてないでかかってきな」

ビンセントは機体の腕で、挑発的な動きをして見せる。

アシエルを見守るレイズ。

“アシエル”は“ビンセント”に殴り掛かった。

ビンセントは、彼女の拳を軽く受け流し、懐へ。

一瞬の出来事。

アシエルのHMAは地面に倒れた。

現実ならば、コクピットを叩き潰されている所だ。

「もう一度！」

シミュレーションをリセット。

何度も打ちかかる。

その度に、打ち倒される。

何度も殴り倒され、何度も投げ飛ばされる。

だがその度に、彼女は何度でもリセットボタンを押した。

「中尉…」

彼女のそんな姿を見てレイズは、ついに我慢ができなくなった。

「大佐！インカム貸してください！」

「何をやる気だ？」

「彼女を勝たせるんです！」

一方アシエルは、再びビンセントに打ちかかった。

迫る拳。

「中尉！身体をひねって！」

突然のレイズの声。

彼女は言われた通り、機体の腰をひねった。

空を切るビンセントの拳。

「左腕で抱え込んで！」

彼女はビンセントの右腕を捕まえた。

「ちっ！」

上半身を戻せないビンセントは、左脚をハイキックの体勢に。

「今です！ 右手を相手の肩に当てて、一歩前に！ 軸足を払って

…」

ビンセントの機体が宙に浮いた。

「うお！？」

「…思いつ切り地面へ！」

地面に叩き付けられるビンセント機。

静まり返る室内。

「中尉…？」

「勝っちゃった…！」

歓声を上げる二人。

「大佐！ 勝ちましたよ！ 彼女、ビンセントさんに勝ちましたよ

！」

喜ぶレイズ。

「よくやった…レイズ…」

グラムはレイズの肩を叩いた。

「（今の動きは、『機操作』…。一体どこで覚えた？）」

グラムは心の中で呟いた。

突然、部屋のドアが開いた。

「レイズ！」

「サラ！？」

レイズに飛び付くサラ。

「夕べは待つても帰って来ないから、心配したんですよ!？」
「ごめん、ごめん! 帰ってくるのかなり遅くなっちゃったから…」
「もう…! 私あの後一人で…」
その時、シミュレーターのハッチが開いた。
「軍曹! 貴方のおかげで勝て…た…ぞ…?」
一瞬固まるアシエル。
「…中尉?」
アシエルは笑顔で、レイズに言った。
「あ…いや…とにかく、軍曹! ありがとう!」
彼女は心の中でつぶやく。
「(そうか…彼にはもう…)」
その様子をビンセントはシミュレーターの影から見ている。
「あゝあ…罪な男…」
「気づいていたのか?」
「彼女の目を見てればわかるよ」
「おまえ、わざと嫌な奴を演じていたな?」
ビンセントは一瞬不敵な笑みを見せてから答えた。
「しらねえな」
レイズとアシエルの二人を見守るグラムとビンセント。
「…に、しても…レイズは本当に鈍感な奴だな…」
グラムはレイズを見て、そう呟いた。

翌日、グラムは司令官室にいた。

「この研修…本当はただの“研修”ではなかったのでしょうか？」
ガルスは顔を見据えるグラム。

「本当は、管理官の適合試験も兼ねていた…そうでしょう？」

ガルスは窓の外を眺めた。

「気付いていたか…」

グラムは静かに頷いた。

「彼女はきつと、優秀な管理官になりますよ…」

「そうだな…」

グラムは、ガルスと共に窓の外を眺めた。

「もう、ここで大丈夫です」

アシエルは、空港ターミナルまで見送りに来ていたレイズにそう
言つと、小さくため息をついた。

研修期間は終わった。

全てが元通りだ。

今思えば、二カ月間が短く感じる。

しかし彼女は、最後にひとつだけ、彼に言おうと決心していた。

「少し、寂しくなります。お気をつけて。お体を大事に」

「軍曹こそ、ありがとう」

レイズを見つめるアシエル。

「あの…自分の顔に何か？」

「諦めませんから…私、諦めませんから」

「…え？」

にこやかに微笑むアシエル。

そのとき、別れを告げるアナウンスがターミナルに響いた。

「それでは、軍曹…また、いつかどこかで…」

アシエルはレイズに背を向け、機へ向かう。

何の事か、彼には伝わらなかったかもしれない。

でも、彼女にとっては充分だった。

今はこれで充分。

後は心の中にしまっておこう…と。

彼女は帰りの便の席についた。

この期間中、彼女は様々な事を学び、様々な事を経験した。

正直、あれほど泣いたり笑ったりした二カ月間は、今まで無かった。

目を閉じれば、今でも浮かんでくる。

彼の声。

そして、彼の笑顔。

彼女は心の中で呟いた。

「(さよなら…サンヘドリン…さよなら…私の…)」

彼女は笑顔だった。

不思議と悲しくはなかった。

『いつか、またどこかで…』

彼女を乗せた艇は、ポートから離れ、空へ飛び立って行った。

彼女の心も共に乗せて。

「ACT 10」終

ACT11 花と鴉（前書き）

ついに開始された新型機試験。様々な思惑が交差する中、黒い機体が空を翔る。

ACT 11 花と鴉

Chapter 1

何も無い空間。

光も音も無い、絡み付くような濃密な闇だけが、そこには在った。

「我々は待ち続けた…」

“闇”の中に、一つの赤い光球が浮かんだ。

「賢人会結成から、はや6000年…時は充分かけた…」

光球がもう一つ。

光球は、声に合わせて小刻みに、まるで心臓の様に膨張と収縮を繰り返す。

「しかし、今は好機ではない…」

いつの間にか幾つもの光球が、円を描いて回っている。

「我々の計画に『時を掛け過ぎる』と言う事はない…」

「さて…？」

「デウスが、『彼』と接触した…」

「それにあの娘とやら…」

「やはり“娘”を欲したか…」

「なにか問題でも？」

「あらゆる可能性と結果を考慮する必要がある…我々に、イレギュラーは許されない」

「かの若造と、その謀は？」

「少しは推進剤になりそうだ…暴走すれば消去する」
沈黙。

「では諸君…御名の下に…」

光球は闇の中に消えた。

「西暦2189年3月10日、統合体中央軍陸軍第四機甲師団第七機動連隊駐屯基地（旧デスバレー）」

空の下、一機の黒いHMAが駆け抜けた。

それをモニター越しに見守る技術者達。彼等は“そのHMA”や随伴機から送信される情報を全てチェックしている。

「リセットクロー、各機関問題無し」

「マルバスエンジン、臨界維持」

「グラビティ・ドライバー、出力安定…」

「目標現在速度、時速1050kmを突破…間もなく空力限界速度です」

映像モニターにノイズが走る。

「チェイサー各機、オプティカルセンサーの故障か？画像が酷いぞ？」

「こちらチェイサー01、試験機に追従出来ない。カメラがデジタルズームでフレーム落ちする」

黒いHMAの遙か後方を、三機のE-4が必死に後を追っている。黒い試験機は、背面に装備された二つのスラスタユニットを吹かし、更に加速。

もはや追い付く事は出来ない。

「素晴らしい機体だ…流石は『HMAの父』と呼ばれるだけある…セルベトウス博士…！」

感嘆の声を挙げる技術者達の後ろ、豪華な皮張りのソファに座る一人の男…ロイ・マッケンジーは、立ってモニターを見ている一人の老人にそう言った。

「機体性能だけではない…乗っているパイロットも、恐ろしい程に優秀だ…流石に…」

「…『英雄』と言われるだけある…」

ニヤリと微笑むロイ。

老人は彼に言った。

「あの機体は、儂と開発一課が生涯を賭けて作り上げた作品だ…他の機体には負けん！」

博士の言葉通り、試験機は軽やかに空を舞っている。

「なるほど…素晴らしい機体だ…」

グラムはこの機体のコクピットの中で感嘆の声をあげた。

彼が何故この機体に？

事の始まりは一週間前に遡る。

「一週間前、サンヘドリン本部司令官室」

グラム、レイズ、ビンセントの三人は突然、司令官室に呼び出された。

ガルスの前に立つ三人。

ガルスは数枚の書類を取り出して言う。

「まず…グラム…ミラーズ大佐に二週間の出張を命じる」

明らかに嫌な顔をしているグラム。

ガルスはグラムを睨んだ。

「ミラーズ大佐…面倒なのは分かるが、これにはちゃんとした理由が有る…」

グラムは無言で溜息をついた。

「そこで、キングストン、ザナルティーの両名！」

「サー！」

「あー…」

「ミラーズ大佐が不在の間、両名には、24時間の警戒任務に入っ

てもらおう！激務だが心して当たってくれたまえ！以上！質問は？」

口を挟む余地を与えないガルス。

「有りません！」

やる気満々のレイズ。

一方ビンセントは…

「あ…俺、階級無いので、平時では指揮権ありません」

どうにか逃れようとしていた。

「では、大尉に任命する」

ガルスお得意の、『無茶な交渉』…

「…俺、今痔に…」

ガルスがビンセントをギロリと睨む。

「…すみません…」

ビンセントは心の中で呟いた。

「（くそ…このオヤジ…やっぱり苦手だ！）」

苦い表情のビンセント。

「では、二人は下がってよろしい！」

敬礼してから出て行くビンセントとレイズ。

二人が出ていってから暫く、ガルスがグラムに話し始めた。

「さて…5日後に、我が軍の次期主力機体トリアルが開始される

のは承知の通りだと思いが…」

「ええ」

「大佐にそのトリアルパイロットを頼みたい」

「トリアルパイロットに？」

「私もおかしくは思っている。しかしこれは、正式な書類を通して

出されている」

「正式な…。それで、私はどこのパイロットに…？」

ガルスはレイズの顔を見据えた。

「ジェネシック・インダストリーだ」

グラムの表情が変わった。

無言で、お互いの顔を見据える二人。

重苦しい空気が流れる。

大きな溜息をついてから、彼は首を縦に動かした。

「“任務”へ就きます」

「うむ…」

グラムは靴を揃えて敬礼。

「なお今回、グレンⅡヴェジエ博士も同行する」

「博士も？」

「彼女はジェネシック社から出向している身だ…召集がかかったらしいが…彼女は学生時代の恩師に再会するのを楽しみにしているらしい」

「恩師…」

「ミハエルⅡセルベトウス博士だ」

グラムは少し驚いた顔をした。

セルベトウス博士と言えば、HMA hシリーズを、たった一人で完成させたと言う天才だ。

まさか彼女がそんな大偉人の教え子だったとは…。

彼は、「通りで…」と心の中で呟いた。

「了解しました」

「…頼んだぞ。…グラム」

「全力を尽くします」

そして一週間後の今日。

「クラウン管制塔へ…これよりジェネシック社製試作機との模擬戦に入る…」

四機のレザールフが、編隊を組んで飛行。

その手には火器が握られている。

「試験機、用意は良いか？」

「こちら試験機…準備良し…」

グラムは試験機のコクピット内で大きく息を吸った。“HMA”

に乗るのは久しぶりだ。

火星での『あの時』以来か…

彼は操縦桿をしつかりと持った。

「エステル… 空対空中距離戦用意。胸部ビームカノン弱装。FCS
エンゲージ…」

「了解」

モニターに、火器の射撃視界が上書きされる。

画面上を軽やかに動くクロスゲージ。

照準は非常に細かく設定されている。

「1・2・3号機、戦闘用意！」

四機のレザールフはグラムの乗る試験機へ向かって行った。

模擬戦を開始したグラム達。

空を切り裂く雲の筋を、釘入る様に見る人の少年がいた。

黒いシヨートヘアーに大きな瞳。

初めて会った誰もが、少女だと勘違いするほどの美しい少年。

彼は窓の淵に寄り掛かり、空中戦闘を繰り広げる5機のHMAを
まじまじと見つめ続けた。

「一刃… そろそろ時間じゃぞ？」

彼の後ろに、一人の老人が立った。

杖をつき、紋付き袴と立派なあごひげで身を飾った、“いかにも”
と言った老人だ。

「分かっています。御祖父様…彼等の機体を見ました…相変わらず凄いです」

「ふむ…」

老人は髭を撫でながら、彼に歩み寄った。

「勝てるかどうか心配なのじゃな？」

「はい…」

「余り遠くを見すぎると…かと言って、目先の事ばかりを考えるでない…一刃よ…扉を見るのではなく、中に何が有るかを考えよ。中で何をするかは、入ってから考えれば良い…」

「はい!!」

一刃は力強く頷いた。

「さあ…水蘭と春雪が待つておる…自由に舞って来い！」

「行ってきます！ 御祖父様！」

彼は元気良く格納庫へ走って行った。

Chapter 2

「こちら3号機！ 撃墜されました！ 離脱します！」

数発の光条に捕われ“撃墜”されたレーザーウルフが、編隊を離れた。

ビームの当たった箇所は塗装が燃え落ち、熱を帯びている。

「弱装とはいえ、なかなか効くな…」

グラムは、高速で機動する機体を易々と操作しながらそう呟いた。「胸部ビームカノンは通常出力なら『ソルジャー』クラスの威力があります。並の機体なら一撃で撃破出来るでしょう」

エステルが呟きに反応する。

「ソルジャーと同等か…嫌な感じだ…」

一瞬、機体をロール。

攻撃を回避。

「目標、後方および左3度…来ます」

素早く機体を機動。

左ロールと左水平移動後、直ちに機体を降下。十字砲火を回避。

「くそ！速い…！」

「各機、目標は後方に発砲出来ない！ 真後ろに集まり、プレッシャーを与えるぞ！」

レーザーウルフ各機はグラムの操る「リセツククロウ」の真後ろに集結した。

「目標全機、当機後方に集結」

「後ろを取る気か…」

グラムは、機体を地上に向かって急降下させる。

「追うぞ！」

リセツククロウを追うレーザーウルフ各機。

グラムは機体を地面スレスレで飛行。

「よし！ このままたたき落としてやれ！」

レーザーウルフ各機は、リセツククロウに向かってライフルを連射。模擬弾はリセツククロウのすぐ後方に着弾し、砂埃を上げた。

次の瞬間、グラムはリセツククロウを仰向けにさせる。

「なに！？」

機体は減速をせぬまま、脚部スラスタを噴射。脚が跳ね上げる。その瞬間最減速。

機体は真つ逆さまのまま、編隊の間をすりぬける。

「回避…！」

すれ違う両機。

グラムはすれ違いざまに、ビームカノンを発砲。

残り三機のうち二機を“撃破”。

グラムは“撃破”したレーザーウルフが手から離れたライフルをキヤッチ。

残るは一機。隊長機のみ。

「クッ！」

隊長機は機体を減速させ、急いで振り返るが、奪われたライフルから発射された一発の模擬弾は隊長機のコクピットに命中した。

「くそ!!!」

悔しそくに離脱するレザールフ。

「戦闘終了、敵映ゼロ。当機、レザールフを全機撃墜。当機に損傷なし。戦闘所要時間、4分20秒…お見事です」

戦闘結果をグラムに報告するエステル。

グラムは冷静な表情で言った。

「戦闘終了…帰還する」

サンヘドリン対ヴァリアンタス軍次期主力機体選定トライアル。

本部以外の軍駐屯地を持たないサンヘドリンが、中央軍の土地を借用して行われたこのトライアルは、『機体に多様性を持たせ、尚且つ低コストで高性能機を得る』と言う名目の下に行われた。

その為、有名大企業だけでなく、零細中小企業からも参加が相次ぎ、全12社、参加機数8機と言う大競争に発展した。

そして、その中には今まで“人型機動装甲”の開発製造に携わった事の無い企業も有った。

「キクチ金属工業」もその一つである。

キクチ金属工業…

『最後の職人集団』やら、『ラストサムライ(!!)』やら、『加

治屋の皆さん』と呼ばれるこの企業は、昔気質の超精密な職人芸と、古代から培った金属加工技術で一躍有名になった“町工場”である。実を言つと、あの『メタニウム』を開発したのはこの企業である。そして今ここに、一機の機動装甲がある。

“それ”は、最終チエックを済ませ、発進の時を待っていた。

「水蘭最終チエック終了」

「各機関、異常無し」

「お坊ちやま…準備はよろしいですか？」

コクピットに、管制室からの通信が入った。

「こちら水蘭、準備良し…それと、僕を“お坊ちやま”と呼ばないで…」

彼は深呼吸をした。

目の前に広がる視界。

ヘルメットのバイザーが彼の網膜を走査し、眼球に直接映し出す。感覚的には、コクピットに居ながら直接外を見ているような感じだ。

視界の端に、小さなウィンドウが開いた。

「若様…？」

彼のイクサミコ、“春雪”。

「ん…」

「心拍が上がっています。何か問題が…？」

彼を氣遣う春雪。

「ううん…大丈夫…ちょっと興奮してるだけ。早く飛びたいんだ」

彼は、操縦桿と二つのペダルを動かした。

機体の肩に装着された“翼”が上下左右に動く。

彼はもう一度深呼吸してから、その時を待った。

彼は機体を降下させ、スラスターでバランスを取りながら、地表をゆっくりと移動させた。

管制室から入電。

「試験機へ。現在の高度と速力を維持し、そのまま入庫せよ……」
前方に、ゲートを開いた格納庫が見える。

「こちら試験機…了解…」

グラムは誘導員の指示に従い、リセットクローを格納庫の中へ入庫。

スラスターを軽く逆噴射。
最減速。

ゆっくりと着地させる。

脚のダンパーが沈み込み、排気音と冷却システムの作動音が辺りに響いた。

「試験機、停止確認。整備班は作業を開始せよ」

格納庫の中にアナウンスが流れた途端、さつきで誰ひとり居なかった格納庫内が、ジエネシック社の技術者で溢れた。

コクピットからアンビリカルブリッジに降りるエステルとグラム。グラムは、ヘルメットを取ってから頭を左右に振り、首を鳴らした。

「お疲れ様です…」

微笑むエステル。

「…うむ……」

彼は大きく息を吸ってから、格納庫のゲートの外に広がる空を見た。

その時彼は、一機の機動装甲が飛び立つのを見た。少し小柄な、“翼”のある機動装甲だった。

突然後ろから、彼を呼ぶグレンの声。

彼女は、ジエネシツク社の制服の上に着た白衣をはためかせ、息を切らせながら駆け寄ってきた。

「ミラーズ大佐！おかえりなさいっ！」

グレンは笑顔で、彼にタオルとミネラルウォーターを渡した。

「エステルもお疲れ様！」

彼女は、GRAMの後ろに立つエステルにも、タオルと水を手渡す。

「…どうも……」

怪訝な表情のエステル。

彼女は、渡されたタオルを小さく丸めて握りしめ、水の入ったペットボトルの処遇を迷いながら、困った表情をした。

重苦しい音を立てながら閉まり始める格納庫のゲート。

徐々に狭まる空を、GRAMはじっと見ていた。

「大佐？」

「博士：今、飛んだ機体は何だ？」

「え？」

思わず聞き返すグレン。

「今の機体：離陸にスラストを全く使っていたかった。今までそんな機体は聞いたことがない」

「えーっと…今の時間ですと…」

「“水蘭”だ」

思わぬ所から答えが飛び出した。

グレンが声に反応し、後ろに振り向く。

「先生！！」

「：キクチ金属工業社製試作機・零叭式高機動可変強襲人型機動装甲、形式番号・試 零叭ノ二式：通称“水蘭”：新型剛体フレームに高出力重力制御を装備：更に、新機軸である『グラビティリフレクター』を装備した新鋭機：しかし所詮は、素人企業の商品だが

ね……」

空から落ちてきた一つの物体は、地面にぶつかり、軽快な音を立てて転がった。やがてそれは、広範囲に及んで降り注ぎ、辺りに硝煙の臭いを漂わせた。

金色の巨大な筒状の物体。太さが20cmはある、機動兵器用火器の莖莢だ。

「三番機！右から回り込め！」

機体から雲の尾を引き、躍動する機体。

右から接近した“敵機”が、高速で機動する水蘭を捉らえた。

「捕捉されました」

「くっ！」

彼は機体を素早く反転させ、後ろ向きに飛行。

視界に広がる火器照準を“敵機”に合わせ、ロック。トリガー。

水蘭の装備する『レールマシンガン』から、凄まじい速さで模擬弾が連射された。

甲高い発砲音。

“敵機”は射線を回避。彼はトリガーを引き続けた。

やがて、弾丸の描き出す光の点線が敵機と重なる。

一機“撃墜”。

「三号機、被弾！ 離脱します！」

離脱していく敵機。

「春雪！ 残弾数確認！」

視界の端にウインドウ。

「レールマシンガン、残弾200。携帯火器はこれだけです」

彼は舌を打った。

「銃は嫌いだ……」

“敵機”残り3。

彼は機体の高い機動性を用い、一機の背部に付いた。

照準を合わせ、トリガー。レールマシンガンを連射。

敵機のパイロットはベテランなのだろうか、彼の弾丸をことごとく回避する。

「こちら一番機！ ケツに付かれた。援護してくれ！」

「了解！ 援護する」

左旋回する敵機。彼は後を追った。

「左から二機」

敵機を察知する春雪。

他の敵機は、彼を待ち構えて左側面から攻撃を仕掛けた。降り注ぐ弾丸。

「くっ！」

彼は機体を急減速し、寸での所で回避した。

「そっちか！」

彼は敵機に銃口を向けた。

視界に入る“警告”の文字。

『火器、弾数0』

「だったら……！」

彼は素早く火器を捨て、腰に手を伸ばし、模擬用のブレードを抜く。

「本当に……銃は嫌いだ……！」

彼はそう呟くと、猛然と“敵機”に向かって行った。

「それよりも…どうだったかね？“この子”の調子は？」

ミハエルはリセットクロウの表面を撫でながら、グラムにそう聞いた。

「スラスタポッドを可動させた時に、極微量ですがフラッターがあります」

「グラビティースタビライザーとラテラルロッドだな…調整しておこう…他には？」

「いえ…以上です」
「分かった」

ミハエルは直ぐさま他の技術者を呼び、事を説明してから作業を始めさせた。

「さあ、グレン君！君も油を売っている暇は無いぞ！」

「は、はい！先生！」

鶴の一声のように姿勢を正し、固まるグレン。

彼女は、ミハエルがいなくなったのを確認すると、そつとグラムに近付いた。

「ねえ、大佐…私、この機体の外部兵装担当なんですよ！」
少し誇らしげなグレン。

「次の対無人機の実弾戦の時にはすごい物見せてあげますね！」

「例の“EPC”か？…」

「何だ…知ってたんですか…？」

ふくれた顔をするグレン。

「パイロットは機体の事を最初に全て知らされるからな…知って

いて当たり前だ……」

「なーんだ……つまんない……」

彼女はふと自分の腕時計を見た。

「ああっ！もうこんな時間！早く行かなきゃ！とにかく、楽しみに
していてくださいね！腕に選りを掛けますから！それじゃ！」

ハイテンションでまくし立てる様に話すグレン。

正直彼は、こう言う女性が苦手だ。

嫌いな訳では無い。

だが、ついていけない……

グラムは、そんな彼女と、どう接すれば良いのかが解らなかった。
呆氣に取られるグラム。

そしてグレンは、グラムとエステルの二人を残して、急いで去っ
て行った。

グラムは、ブリッジの手摺りに寄り掛かり、大きく息をつく。

「疲れたな……」

「ええ……」

相槌を打つエステル。

「HMAに乗るのは本当に疲れる……本当に……」

「グラム……」

「エステル？」

「……今日は、これで終わりですから……もう、部屋で休みましょう……」
グラムの顔をじっと見つめるエステル。

グラムは一瞬振り返り、リセットククロウを見た。

指を絡める二人。

彼はもう一度、その日の疲れを全て吐き出すような大きな溜息を
ついた。

「そうだな……そうしよう……」

微笑むエステル。

彼はそういうと、彼女と共に部屋へ帰った。

夜、彼の顔を見て、グレンは微笑んだ。

「どうかしたか？」

「いえ…こうやって、先生と一緒に居るのって初めてだなあ…と思
つて…」

駐屯基地居住部端にある小さな酒場で、グレンとミハエルは再会
を祝していた。

「会うのは五年ぶりか…」

「ええ…」

テーブルの上には、彼の好物であるザワークラウトが置かれてい
て、グレンもそれをつつきながら、ミハエルと同じスタウトビール
を飲む。

「母が亡くなって以来、先生とは音信不通でしたから…」

「…博士が亡くなってもう五年…早いものだ…」

「そうですね…」

「グレン君も立派になったものだ…博士も鼻が高いだろう…」

「いえ！私なんてまだまだ全然…。兵器開発って難しいです…自分
の創った物に、戦場で戦うみんなの命がかかっているとと思うと…そ
れに…“兵器”って、結局人殺しの道具なんですよね…」

「時代がそうなのだから仕方が無い事だ…我々に出来る事は、この
時代を一日も早く終わらせる事…そのためには、我々のような兵器
開発者が必要なのだよ…グレン君…」

ミハエルは酒を一口飲んでから大きな溜息をついた。

「…博士は、こんな時代を望んではいなかったがな…」

「…母は…科学者としての“エステル・レイヴエジエ博士”は、どんな人でしたか？」

ミハエルは答えて言った。

「…博士が亡くなる前まで、私と博士は同じ開発チームに居た。博士は極めて…いや…神憑りのに聡明な人物でな…彼女はバイオコンピュータの基礎理論をたった一人で完成させ、人口脳技術の先駆けとなり、『意識の伝播』や『感覚域の拡張』などを発見。脳医学や生体電子工学に偉大な功績を遺した科学者だ…もし彼女が健在だったら、今の技術は一回りも二回りも進歩していただろう…」

「すごい人だったんですね…」

「君は、お母さんに似たのだな…」

「…父の事は何か…？」

ミハエルの声の調子が変わった。

「君の父親の事は何も知らん…会った事も無い…」

「先生…？」

無言のミハエル。

「すまん…グレン君…少し酔ったようだ…今日はこれくらいにしよう…」

彼は、テーブルの上に二人分の勘定を置いた。

「グレン君…君は今の世界がこうなった根本原因を知っているかね？」

首を傾げるグレンに、彼はこう言った。

「いつか近い内…知る事になるだろう…知りたくもない事も含めてな…」

「…どういう事ですか？先生…」

ミハエルは彼女に覚え込ませるかのように言った。

「良いか、グレン君…事実は…決して隠せない…！」

彼女にそう言い残し、ミハエルは席を立った。

意識の中に響く声。

『記憶の再生は完璧な筈だ』

誰だ？

『失敗では？』

何だ？ 何を言っている？

『強制着床を行う』

あああああああああああああああああああああああ…

圧縮された膨大な情報が一気に開放される。

脳に直接熱湯を注がれているような痛み。

脊髄に電流を流されているような感覚。

彼は目を見開いた。

無言。

思考にブランク。

白いシート。

目の前に横たわる肌色の物体。

震えている？痙攣？

そうか…自分の腕か…

ぼやける視界の中、壁に掛けてある時計に目をやる。暗い部屋。

真夜中の3時。

彼は腕を動かした。

腕に電流が走る。

前腕に微かな圧迫跡…

グラムは、眠気で重みを増した身体を力ずくで起こした。頭の中に、重りが入っている…
深呼吸してから部屋を見回した。

彼女の

エステルの姿は無い。

彼はベッドから降り、洗面所へ向かった。

微かな明かりの中、洗面台の明かりのスイッチを見つけ、点ける。鏡に自分の姿が映った。

彼は自分の顔を見つめた。脂汗をかき、酷く顔色が悪い。

「…ちっ…」

舌打ちするグラム。

彼はシンクに水を溜め、顔を洗った。

冷たい水が、汗を洗い流していく。

一息つき、彼は台に手をついた。

毛先とあごから水滴が落ち、シンクに溜まる水と一つになった。

「また…あの夢を見たのね…」

彼は顔を上げ、鏡を見た。

「暫く見ていなかったのに…ここに来てからずっとこんな調子だ…」

「…薬…持ってきてあげたわ…」

エステルは洗面台の上にピルケースを置いた。

「…この薬を処方したのは、エビング博士…？」

「…ああ」

「この傷痕も…？」

彼の背中には、幾つかの爪で引っ掻いた傷痕があった。

彼女はグラムの背中に寄り添い、少し背伸びをして、その爪痕に唇を沿わせる。

エステルの小さな舌先が、背中中の傷痕を優しく撫でた。

「…エステル」

彼女は動きを止めた。

「…この戦争が終わったら、俺達はどう生きて行けばいい…？」

彼女は答えた。

「…わからない…私はただ、今を生きるだけ…今生きている事を感じる為に、貴方とこうしているの…」

肌に寄り添うエステル。

彼女がベッドの枕元に置いたミネラルウォーターのペットボトルは、時折差し込む月明かりの光を受けてきらりと光った。

Chapter 3

「ふあ…」

ビンセントは大きなあくびをついた。

宿直室の硬いベッド上、寝ぼけ眼で腕時計を見る。

朝の6時。

目を擦り、ベッドから降りる。

通路を挟んだ向こう側にも、もう一つベッド。

レイズが眠っている。

「おい、レイズ…起きろや」

「うーん…」

目を覚まさぬレイズ。

「おい！」

「待てよう…サラ」

のんきに寝言をかますレイズ。

ビンセントは一瞬間を引き攣らせたが、すぐにニヤリッと笑った。喉を押さえ、二、三回咳ばらい。

そしてレイズの耳元で囁いた。

「ねえ…レイズう…起…き…て…」

サラに瓜二つの声。

速攻で飛び起きるレイズ。ビンセントは腹を抱えて爆笑した。

「うひゃひゃひゃひゃ！」

「うえ？あ？え？ビンセントさん？」

「どうよ？一気に目覚めただろ？」

「勘弁して下さいよ…。」

「じゃあ、はよう起きろや…今頃グラムとエステルちゃんは楽しくデートだぜ？」

ビンセントは窓を開け、外の空気を吸った。

「俺、あっちの方がよかったなあ…。」

「駐屯基地内 第4演習場 0700時」

いつからここに居るのだろう…

気付けばいつも、ここに居る。

きっと、時間的概念など通り越して、ちょっとした癖や呼吸と同じ感覚なのだろう。

目の前に広がる天周モニターとコンソールスクリーン、計器の群。身体を包む、大袈裟なほど重装備のパイロットスーツ。

すっ、と短く息を吸う。

いつもと同じ。

いつもと？

実戦と…

「大佐……」

エステルの声。

「起きていますか……？」

「……なぜだ？」

訳を聞き返す。

「脳波が睡眠状態と同じでした」

睡眠？

そうか……

今までののは夢か……

じゃあ、今が現実？

全て夢？全て現実？

外の音は何も聞こえない。

HMAのコクピットにおいて、分厚いパイロットスーツとヘルメットを着用していれば尚更。

「こちら官制室。試験機、聞こえるか？」

無線を通じ、第三者の声。意識が引き戻される。

やはり“現実”か……

「こちら試験機……感度良好……」

「これより無人機との実弾演習を行う。準備は良いか」

身体が生氣を取り戻し、熱くなる。

“彼女”と、身体を重ねている時と似た感覚。

そう言う事か……

生きている事を感じるとは……

「準備よし……」

機体のシステムをアクティブに。

低い唸り声が、シートから骨を伝って鼓膜へ。

目の前にホログラフ。

スタンティクシムシステム。

「当機は地上部隊を制圧し、直ちに離陸。空対空戦闘を展開。空中部隊を殲滅した後、着地域の部隊を排除。着地完了後、戦闘終了と

します。こちらの外部兵装、および内蔵火器の全ては実戦と同様です。敵機の使用する火器は全て模擬弾、ミサイルは徹甲体を外し、炸薬を減らしてあります。なお、敵勢力の詳しい情報は通知されていません」

エステルの落ち着いた声。

「了解した」

彼もいつも通り、冷静に、淡々と。

「戦闘開始三秒前、2…1…0！」

「リセットクロー…出撃る！」

脚部スラスタを噴射。

ホバー走行。

砂埃を上げながら、猛スピードで地上部隊へ迫る。

グリッドマップに反応。

敵勢力下へ侵入。

「敵機捕捉。前方、距離2000…」

遙か前方で火点。

「敵機発砲、着弾まで3…」

瞬時に回避行動。

機体のすぐ右を通る模擬弾。

「155mm…“パラディン”か…」

的を外した模擬弾は後方に着弾。

立て続けに迫る砲弾を、機体の機動力で回避する。

巻き上がる砂煙。

リセットクローの右手には、見たことの無い火器が装備されている。

目標を火器視界に捕らえ、一番近い機体をロック。

銃口を敵機へ向け、トリガー。

EPCから発射された眼に見えぬ鉄槌は、地形ごと敵機を貫き、上半身を丸ごと消し飛ばし、更に後方の地面をえぐり取り、大きな溝を形作った。

「EPC…プレッシャーカノンの簡易量産型…オリジナルの数%の出力だが…充分だな…」

グラムは攻撃を回避しつつ、トリガーを引き続けた。EPCから放たれる、地形を変える程の攻撃。

敵は155mmライフルを連射した。

立て続けに迫る模擬弾を、彼はいとも簡単に回避。

容赦無く、攻撃を叩き込んだ。

「IFF消失、6！地上部隊全滅！」

「戦闘所用時間、40秒！」

地上部隊を殲滅し、敵陣の中央を突破。

地面を蹴り、背部スラスターを噴射。

機体は地表を離れ、空へ。敵機は、上昇するリセツク로우へミサイルを放った。

ミサイル捕捉。

モニターに映る無数のロックオンゲージ。

「上方からマイクロミサイル接近。数、30。赤外誘導です」

「スラスター全開…」

更に加速する機体。

機体へ迫るミサイルを、立て続けに、4発5発と回避。

回避されたミサイルは旋回し、後方からリセツク로우を追尾した。

後方に、フレアを射出。

ミサイルは目標を見失い、自ら起爆した。

5基破壊。

更に前方から、ミサイルの一団が迫る。

数、15。

前方のミサイルに向かってEPCを連射。

重力波がミサイルの表面を擦過し次々に爆ぜる。

「誘爆を確認。ミサイル、更に10基接近」

右から4基、左から3基、前から3基のミサイル。

彼は、機体全身のスラスタートと、四肢の挙動を組合せ、巨大な鉄塊をまるで鳥の羽根の様に軽やかに舞わせた。

尾を曳きながらリセツクロウを追尾するミサイルを次々に回避。ぎりぎりまで引き寄せ、鋭角でターン。

フレア射出。四散。

次の瞬間彼は、適の射線上に居ることを感じ、回避する。空を切る模擬弾。

「エステル…空中部隊の勢力を把握できるか？」
「出来ませぬ」

広域スキャン。

グリッドマップに表示。

「無人機、8」

「了解…」

機体を大きくライドさせ、右サイドから接近。射線を回避しつつ、ロック、トリガー。

一機撃破。

「試験機、ミサイル全弾回避！」

「空中部隊との交戦を開始！」

「IFF、2、3…」

管制室の対空レーダーから、赤い光点が消えていく。

「…6、7、8…IFF全機消失！」

「所用時間、38秒！レコードです！」

「試験機、対地戦闘へ！」

凄まじい早さで空中部隊を殲滅した彼は、空を染める爆炎を背に、機体を地上へ向かわせる。

「着地地点確認。地上部隊、捕捉。数、12」

地上で5つの火点。

肩上発射型携帯式地对空ミサイルランチャー。

「ミサイル5基接近」

「またミサイルか…芸の無い…」

直ちに回避行動。

機体をひねり、寸での所で一つ目を回避。

機体を捻ったまま、脚部スラスタを噴射し宙返り。

二つ目を回避。

逆さの状態で、直ぐさま背面メインスラスタを噴射し降下。

三つ目を回避。

凄まじい速度で降下する機体の正面から、更に二発のミサイル。ぎりぎりまで引き寄せ、命中寸前にロール。

エステルは瞬時の内にEMPを発動し、近接信管を無力化。

機体はミサイルとミサイルの間を通過した。

瞬き一つより短い時間。

肩越しに、EPCを後方へ向け、トリガー。

爆ぜるミサイル。

誘爆が全てのミサイルを巻き込み四散。

オレンジ色の炎が散った。

機体はそのまま地上へ降下し、地面スレスレでブレーキ。

超低空スラスタ機動に移る。

前方から集中砲火。

リセツククローは地表を滑る様に機動。

攻撃を回避しながら、EPCを連射。

砂煙と爆炎が巻き上がる。

「試験機、強制着陸！データリンク異常無し！」

「部隊と交戦！IFF消失、4！試験機に損傷無し！」

「パイロット、イクサミコ間のシンクロ率、90%を突破！」

更に機動力を上げていく機体。

技術者の一人がミハエルに叫んだ。

「機体性能発揮率、150%！このままでは機体がもちません！」

「素晴らしい…素晴らしいぞ！機体のポテンシャル全てを、彼は十分以上に引き出している！これこそ私の求めていた物だ！見たまえ！グレン君！君が担当したEPCは、彼によって最高の威力を発

揮しているぞ！」

「え？あ、はい……」

何か浮かない表情のグレン。

彼女は、昨夜のミハエルとの会話を思い起こしていた。

『知りたくもない事を、知る事になる』

この言葉が気掛かりで仕方が無かった。

彼女はふと、画面に目を向けた。

グラムの乗るリセツツクロウが、自分の担当した兵器を持ち、戦っている。

無線を通して聞こえてくるグラムの声。

いつもと同じ、彼の声。

「敵機、残り4！」

画面を躍動する機体。

爆炎と砂埃。

まるで、ビデオゲームを見ているような感覚だ。

「エステル、残り敵機は？」

「四機です」

「わかった……」

機体を流れる様に操作。

10時方向に一機。

1時方向にも一機。

二機とも同時に発砲。

素早く左サイドへ回避。

1時方向へ発砲。

一機撃破。

「一つ！」

残る一機は、急いでライフルの銃口を向けた。

「遅い！」

機体の左拳が唸りをあげた。

GRASの原理を応用した“グラビティナックル”だ。

GRASは、本来艦艇などに搭載される防御機構だ。それを、リセツクロウは搭載しているのだから恐ろしい。

「二つ！」

粉々に碎ける敵機。

機体が爆炎を上げ四散し、破片が飛び散る。

残るは二機。

敵機は爆炎を抜けたリセツクロウヘライフルを撃った。

彼はスラスターを強く噴射して高々とジャンプ。回避。

機体は、無人機の頭上へ飛翔し、空中から敵機へ銃口を向けた。

「三つ！」

碎ける敵機。

頭頂部から入射したEPCの重力波は、敵機を貫通し、足元の地面に深い穴を穿った。

残るは一機のみ。

彼は上空からスラスターで加速しながら敵機へ殴り掛かった。

振り下ろされる拳を敵機は慌てて回避。

リセツクロウの拳が、敵機の右腕を砕いた。

着地するリセツクロウ。

彼は、機体全身に装備されたGRASを使い、右足の踵に重力壁を展開する。

「四つ！」

左から右へ大きく振り抜かれる右脚。

敵機は破片を撒き散らしながら、宙を舞い、やがて爆ぜ、爆炎が散った。

爆炎の後、全てが嵐の様に過ぎ去り、音という音すべてが一瞬静まり返った。

立ち込める砂煙。

視界をさえぎる砂煙の晴れた後、そこには、傷一つ無いリセツクロウが立っていた。

「IFF：全機消失！」

「試験機、損傷無し！」

彼等は息を飲んだ。

官制室のレーダーに、青い光点が一つだけ映っている。

試験機、無人機全26機すべてを撃破。

その神鬼のごとき戦いは、見る者に畏怖の念を抱かせていた。

「こちら試験機…戦闘終了…帰還する」

出撃前と変わらぬ落ち着いた声が、官制室に響く。

「り、了解！受け入れ体制に入る」

慌ただしく受け入れ準備をする技術者達。

彼等はすっかり、目の前の戦闘に心を奪われていた。

「（大佐って本当に人間なのかしら…）」

グレンは画面に釘付けになっていた。

機体性能を十二分に引き出し、あれだけの無人機を相手にするな

ど、並の人間でない事は誰の目にも明白だった。

「素晴らしい…本当に素晴らしい！グラム…ミラーズ！“地獄の炎

”と呼ばれるだけある…！」

後ろから聞き慣れぬ声。

グレンは振り向いた。

「そう思うでしょう？グレン博士？」

「貴方は確か…」

「ロイ…マッケンジー…一応あなた方の上司と言う事になりますね」

ロイはグレンに近付いた。

「まさか、あのエステル博士の娘さんとは…」

「え、ええ…」

「博士に似て聡明で…美しい…サンヘドリンに出向しているのが勿体ないくらいだ…」

困った顔をするグレン。

彼女は心の中で呟いた。

早くここから去りたい。

早くここから…

「あの…私そろそろ格納庫の方に…」

「これは失礼…」

彼の前から立ち去るグレン。

「（私…あの人苦手だわ…）」

足早に格納庫へ向かう中、彼女はそう呟いた。

「フ…」

官制室から出ていくグレンを見て、ロイは短く笑った。

「行くぞ、エヴァ…我々は社に戻るとしよう…」

ロイが彼の補佐役である女性社員にそう言うと、彼女は首を傾げた。

「試験を最後までご覧にならないのですか？」

彼は答えた。

「トライアルの結果を待つまでも無い…我が社の製品は必ず採用される。それに…近い内、本物の実戦データを取る事が出来るだろう」

「本物の実戦データ？」

「もうじきここに、我々のもう一つの作品が現れる…」

「…まさか！」

彼女は目を丸くした。

一瞬微笑むロイ。

そうしてから彼は、慌ただしく技術者達に指示を出しているミハエルに近付いた。

「それでは博士…健闘を祈っております」

無言のミハエル。

ロイは一瞬不敵な笑顔を見せてから、官制室のドアを開けた。

「マッケンジー君」

ロイを呼び止めるミハエル。

「私は過去の行いを…」

言葉を濁すミハエル。

「いや…何でもない…」

彼はニヤリッと微笑んでから部屋を出て行った。

後に従うエヴァ。

ドアが閉まると、ミハエルは扉を見つめて、大きく溜息をついた。

Chapter 4

「駐屯基地第6演習場、1000時」

灰色の雲が流れる空の下、黄土色の地面が広がる荒野に、“それは静かに立っていた。”

「これより、試 零叟ノ二式“水蘭”の稼働試験を行う。試験は実弾を用いた強襲戦形式。使用弾種は76mm AP弾。敵機は模擬弾を使用。被弾時、致命的ダメージと判定された場合、機体を強制停止。演習終了とします。ご質問は？」

「大丈夫……」

耳に装着されたインカムから聞こえてくる技術者の声に、彼は落ち着いた様子で答え、ゆっくり息を吐いた。

「“実弾演習”か……銃は嫌いだ……弾は無くなるし、野蛮だし……それに……」

操縦桿を強くにぎりしめながら、ぼつりと呟く。

サブシステムで、FCSコンソールを確認。

レールマシンガンと大腿部マイクロミサイル。

火器官制を通さぬ武器は、腰に携えた、この“刀”だけ。

黒い鞘に納められた長刃。超高純度メタニウム製超振動刀剣、名刀“九十九菊”。

彼は機体の左手でその刀の柄を握り締めた。

「……何か、おっしゃいましたか？」

彼の小さな囁きを、不明瞭な形で聞き取った春雪は、彼にそう聞いて首を傾げた。

「ん……いや、なんでもないよ……」

春雪にうやむやな答えを返す一刃。

春雪は一つ間を開けてから弱い調子で、咳くように言った。

「今日の若様…何か変です…」

「…?」

彼の“心”をモニターしている筈の春雪が、わざわざ彼に向かつてそう言ったのは、朝から余り彼と言葉を交わしていなかったからだと思う。

彼女にとって“彼”は、掛け替えの無い存在で、彼にとって“彼女”は最良のパートナーだと、お互い思っている。

だからこそ機械を通してではなく、言葉で“話して”欲しい。

春雪はそう考えた。

心理モニターをカット。

ウインドウによる画像と音声通信のみ。

「若様…」

「どうしたの？春雪…」

演習場に静かな様子で佇む水蘭の胎内で、彼女は静かに言った。

「私が若様にお仕えして二年以上…私はもう時代遅れの旧式となっています…それでも私は…若様のイクサミコである限り、全力を尽くして若様にお仕えしております…それでも、もし…私が若様のご要望にお応えしていないなら、私はいつでもソフトの書き換えに応じる用意はできています…」

彼女は俯いて肩を震わせながらそう言うと、感情を押し殺す様に奥歯を噛んだ。

「そんな悲しいこと言わないでよ…春雪…」

悲しげな様子の一刃。

「書き換えなんかしたら、今の君が消えてしまっじゃないか！…ダメなんだ…君じゃなきゃダメなんだ…！今の僕が、最後まで頼りにできるのは九十九菊と…君だけだよ。春雪…」

彼は優しく微笑んだ。

「若様…」

彼女はきゅつと肩をすぼめ、頬を赤くした。
彼は言った。

「ねえ…春雪…僕って我が儘なのかなあ…」

「え…?」

急な問いに、彼女は思わず首を傾げた。

「銃が嫌いってだけで、銃を使わなくて…そのせいで、みんなに迷惑をかけてる気がする…」

「そんな…！若様が銃をお嫌いなのは、それなりの理由がお有りですし…それに…私は…剣を振るう若様の方が…すっ、す…き…です…し…」

彼女の声が段々と小さくなり、顔がさらに赤くなる。そんな彼女を尻目に、彼は曇った表情で弱々しく、呟くように言った。

「でもそんな勝手な我が儘のせいで、トリアルに負けたら、僕は

…」

「若様…」

「案ずるな…一刃よ!」

突然無線に、温かくも力強い声が響いた。

「御祖父様…!」

「一刃よ…トリアルなど負けても良い!」

「御祖父様、何をおっしゃるのです!?!」

思わず声を上げる一刃。

老人は、非常に落ち着いた様子で彼に言った。

「これは我々の挑戦でもあり、お前の戦いでもある…我々は満足のゆく機体を創り上げた…後はお前次第だ…」

「御祖父様…」

「しかし！ 戦うからには、この“戦”に必ず勝て！ 男として！ 戦士として！ 幸い敵は無人機…しかも奴らの製品…手加減は要らん！ 思う存分、お前の戦い方を見せてやれ！」

「はい!」

もはや彼の目には、一点の曇りも無かった。

「各ユニット配置完了」

「水蘭との情報回線接続、異常無し」

「一刃様、準備はよろしいですか？」

彼は専用ヘルメットを両手で持ち、目をつぶった。

意識を集中させ、精神を高める。

「こちら水蘭。準備よし」

ヘルメットを被り、システム接続。

目の前に、水蘭の視界が広がる。

グラビティリーフレクター稼働開始。

機体は、音も無くゆっくりと地から離れた。

「戦闘開始3秒前……」

カウントダウン開始。

彼は、レールマシンガンのストックに収納された単分子ナイフを抜き、逆手に持った。

「……2……」

そしてレールマシンガンを足元に捨て、腰に携えた九十九菊を抜いた。

「……1……」

「行こう！春雪！」

「はい！」

「……0！」

メインスラスタ噴射。

水蘭は、左手に大型の単分子ナイフを、そして右手に九十九菊を持ち敵陣の中に切り込んで行った。

「水蘭、敵陣へ向け高速接近！」

腰を落とし、九十九菊を低く構える。

一刃の目前で、地面の起伏が川の流れの様に過ぎていった。

前方に、敵性反応。

「敵機捕捉！数、6！」

「行くよ！」

敵機をロツク。

更に接近。

前方で火点。

グラム達の時と同じ155mm砲。

「敵機、発砲」

彼は、短く息をはき、機体を素早く機動させる。

敵弾回避。

「水蘭、交戦開始！」

次々に着弾する模擬弾を、彼は鋭角の軌道で次々に回避する。

ナイフの様に、鋭く。

踊る様に、滑らかに。

今まで見たこと無いほどの機動性を発揮する水蘭。

「水蘭、全弾回避！ は、速い！」

官制室内がにわかにとよめいた。

“グラビテーターリフレクター”は、独立した巨大なリフトパワー

と多少の推力を備える新機構だ。

水蘭の類い稀な機動性は、これに起因するのだ。

技術者達に、彼の祖父、菊十郎は言った。

「あそこに居るのは、“一刃”では無い…！彼は今、全てを切り裂

く一枚の刃になっておるのだ！」

鋭い軌道を描きながら降り注ぐ模擬弾を回避し続ける水蘭。

彼は機体操作に全神経を集中させ、交差する射線を水蘭の機動力

で攪乱しつつ敵へ迫った。

パラディンを連射する敵機。

模擬弾は虚しく空を切り、水蘭の右後方へ着弾していく。

“無人機A I”

射撃補正。

敵機挙動予測。

着弾点算出開始。

算出完了。
予測、検証開始。
FCS弾道修正。
予測、検証完了。
実行。
補正。実行。
補正。実行。
補正。実行。

敵陣へ近づくとつれ、水蘭への射撃は正確になっていく。
密集していく射線。

補正…

一機の無人機が、水蘭を射撃視界に捉らえ、ロック。突然、水蘭が視界から消えた。

目標ロスト。
オプティカルセンサー、異常無し。
レーダーに反応。
全方位スキャン。
目標捕捉。
目標、ポイント0に確認。接近注意。
危険！
危険！
危険！

危険を察知する無人機AI。
水蘭は既に、敵機の至近距離にいた。
ライフルを向ける無人機。一刃は素早く機体左手のナイフを、左

下から右上へ袈裟掛けに振り上げた。

両断され宙を舞うライフルの銃身。

彼は、『ひゅっ』と短く息をはき、敵機の左横を過ぎながらそのまま右手の九十九菊を左脇から正面へ振り抜いた。

一瞬、敵機の装甲から火花が散り、上半身が腰から滑り落ちた。

一瞬のブランクを挟んで四散する敵機。

「敵機撃破！」

「次！」

更なる獲物を求めて、敵機へ切りかかる一刃の水蘭。彼は、敵機が銃口をこちらに向けるより速く接近し、一太刀の下に打ち倒して行った。

「敵IFF、消失3！」

残るは3機。

猛スピードで接近してくる水蘭に、無人機はライフルを連射した。

「12時、12時後方、1時に一機ずつです！」

「わかった！」

九十九菊を構える一刃。

彼は、近距離で放たれる模擬弾を回避しながら、目の前の敵機に迫った。

「破っ！」

気合いと共に、真っ直ぐ突き出された九十九菊。

九十九菊は敵機の正面から背中まで突き抜けた。

彼は、敵機が爆散しないよう動力炉を傷付けずに貫き、串刺しにしたまま更に前方に居る敵機に向かって行った。

HMA一機をまるごと抱えたまま、猛スピードで迫る水蘭。

敵機はライフルを連射した。

迫る155mm弾。

水蘭は、貫いたままの無人機を盾にして、防御。

彼は左手に持った単分子ナイフを逆手に持ったまま、下から上へ振り上げる様に投げた。

ナイフは、真っ直ぐ飛んで行き、敵機の首の付け根へ突き刺さった。

崩れ落ちる敵機。

一刃は九十九菊を薙ぎ、突き刺さったままだった無人機を地面に捨てた。

「1時方向に一機！ これで最後です！」

「よし！！」

残るは一機のみ。

彼は敵機へ切り掛かった。発砲する敵機。

素早く回避。

砲弾が至近距離を通り過ぎ、衝撃波が機体を擦過する。

彼は敵機の正面で九十九菊を振り下ろした。

それと同時に、敵機は引かれるライフルのトリガー。

マズルファイヤーと共に発射された弾丸。

振り下ろされた九十九菊は、模擬弾を刃によって二つに両断し、

更にライフルを“二枚おろし”にした。

九十九菊を左から右へと振り抜く水蘭。

無人機は、胴と腰が分離し、前のめりに倒れ爆ぜた。

「水蘭、地上部隊殲滅！」

「戦闘時間、49秒！」

「まだ気は抜けぬぞ！銃を持たぬ一刃が、空で出来る事はただ一つ

…」

彼は九十九菊を鞘へと納めた。

水蘭のカメラアイ越しに空を眺める一刃。

「次はそらだよ？」

「敵の数は多いでしょう…猛烈な反撃が予想されます」

彼は呟いた。

「“あれ”しか無いか…」

機体を高く上昇させる一刃。

「春雪、水蘭を高速巡行形態へ移行！ 敵陣中央を突破する！」

「了解、移行します」

ゆっくり上昇する水蘭の、脚部と腕部が折り畳まれ機体後部へ移動。

そして、肩に装備された“グラビティリフレクター”が、定位置で固定される。

その姿は、あたかも戦闘機のような姿だった。

「行こう！ 春雪。“壁”を超えるんだ！」

「はい！」

水蘭は、空へ真っ直ぐ上昇していった。

「水蘭、高速巡行形態へ移行！敵陣中央へ高速接近！」

彼は水蘭を、敵勢力の真っ只中へ突っ込ませた。

視界の端に、立体マップが表示される。

「敵機捕捉！数、8」

マップに敵機を表示。

突然、レーダー上の赤い光点が爆発的に増加した。

「敵機、ミサイルを発射！数、40！」

彼は、すう…と息を吸った。

「スラスタ全開！！」

「了解！」

水蘭の脚部に内蔵された高出力スラスタが、強大な推力を生み、機体を瞬時のうちに加速させた。

迫るミサイル。

機体は更に加速し続け、やがてミサイルの群の中に突入した。

迫るミサイルを次々に回避する水蘭。

彼は、視界に表示されるミサイルの予測軌道を瞬時に読み取り、針の穴を通るかの様に機体を機動させた。

「水蘭、ミサイル群に突入！ 相対速度が速過ぎて、近接信管が作

動しません！」

「水蘭、更に加速中！ 間もなく音速を突破します！」

ミサイルの間を縫う様に翔ける水蘭。

水蘭の遙か後方で、目標を失ったミサイルが爆ぜた。
更に加速する機体。

やがて空に雷鳴のような爆音が轟き、水蘭を中心にドーナツのよ
うな雲が広がった。

「水蘭、音速突破！」

無人機の目の前を、黒い何かが過ぎ、数秒のブランクを挟んで、
轟音と衝撃波が後を追う。

音の壁を超えた水蘭を、捉らえる事はもはや不可能。

水蘭は稲妻の様に敵陣中央を突き抜けた。

「水蘭、敵陣中央を突破！」

機体はミサイル群を突破し、更に敵勢力下を突き抜けた。

「最終目標、着地点守備隊です」

「よし！ 行くよ！」

彼は巡行形態のまま、機体を降下させた。

突然、レーダーに数個の物体が表示される。

「ミサイル接近！ 高速弾です！」

地表から発射されたミサイルは、猛スピードで水蘭に迫った。

「春雪！」

彼の指令が、言語化するより速く反応する春雪。

人型形態へ移行。

次々に着弾するミサイル。模擬用の弱装炸薬が、まばゆく散り、
黒煙が水蘭を覆い隠した。

「水蘭、被弾！」

「判定は！判定はどうじゃ！？」

画面にかじりつく菊十郎。

「水蘭……」

ステータス画面を確認。

「データリンク健在！」

「判定は“防御”！防御判定です！」

胸を撫で下ろす菊十郎。

「心配させおつて…！」

黒煙を突き抜ける水蘭。

それは、翼で身体を覆う天使のような姿をしていた。

「ふう…危なかつた…。ありがと、春雪！君が素早くリフレクターシールドを出してくれなかつたら、ミサイルを食らつてたよ…」

「恐縮です！若様っ！」

リフレクターで機体前面を覆う水蘭。

“リフレクターシールド”グラビティリフレクターの原理を応用した防御機構の一種。

グラビティリフレクターは本来、重力相互作用を操作することにより、反重力場を作り出す“機動装置”だが、水蘭に装備されたリフレクターは、反重力反発作用により、実弾兵器は勿論、強力なビーム兵器も防御可能な、強力な防御機構だ。

水蘭は、それによってミサイルを防御したのだった。

スラスターで減速する水蘭。

リフレクターを定位置に戻し、重力制御によるスラスターホバリングから、リフレクターによる反重力浮遊へ移行。

本来の性能を回復する。

安定する機体。

レーダーに光点。

「敵機捕捉！数、12！」

空中から素早く敵を捕捉する春雪。

彼は九十九菊の鞘を左手で持ち腰に据え、右手を柄に添えた。

地上から、空中にいる水蘭へ銃口を向ける無人機達。

瞬間彼は、敵の射線上に居ることを感じ回避する。

水蘭に迫る無数の弾丸。

機体をパワーダイブさせ、弾丸の雨を避ける。

降下する機体。

無人機は、高速で機動する水蘭を射線に捉らえようと、水蘭の軌道を銃口でなぞった。

地表へ着地する水蘭。

敵機はすかさず、水蘭に向かって弾丸の雨を浴びせた。

水蘭へ迫る無数の弾丸。

彼は焦る事なく、冷静に対応した。

“水蘭”

重力制御により、重力及び慣性を相殺、無力化。

グラビティリフレクター浮力最大。

スラスター瞬間出力最大。

瞬きより速く、一瞬で空へ舞い上がる水蘭。

弾丸は空を切り、地面へ。水蘭は既に、正面の敵機へ接近している。

九十九菊を抜刀する一刃。彼は短く息を吐き、九十九菊を下から上へ真つ直ぐ振り抜いた。

縦に両断される敵機。

水蘭は勢いを保ち、そのまま九十九菊を振り下ろした。

目にも留まらぬ速さで、たちまち二機の無人機を屠る水蘭。

「水蘭、地上部隊との交戦を開始しました！」

彼の操る水蘭が駆け抜け、九十九菊の白刃が煌めく度に、まばゆい爆炎が散った。

「IFF消失、6、7、8、9…！」

次々に破壊されていく無人機達。

「（一刃よ…）」

菊十郎は心の中で呟いた。

「（お前は何を思う？ 何を思い剣を振るう？ 身の丈を超える剣

と、鋼鉄の機兵を持ち、何を求め戦う？ 一刃よ…）」

爆炎の中を駆け抜け、一心不乱に剣を振るう、一刃の水蘭。

何かを忘れる様に、何かを取り戻す様に…

多分、今の彼にとっては、此処に居る全てが仇人で、彼は今、何かに復讐をしているのかもしれない。

「IFF、消失、11！あと一機です！」

さくり、さくり、と、刃の露となつてゆく無人機達。

一刃は、九十九菊を下段に構え、残る一機に向かつて行った。アサルトライフルをフルオートで連射する敵機。

彼は、機体に迫る弾丸をシールドで防御。

機体のコンソールに、赤い『被弾』の文字と、緑色の『防御』の文字が滝の様に繰り返し表示されていく。

今はそんな物見ていない。

目の前の敵を倒す事。

それが全て。

彼は、雄叫びを上げながら敵機に切り掛かった。

「……………」

突然グラムは、誰かに呼び止められたかの様に振り向いた。

「どうかしたのかね？ 大佐……」

ミハエルは、機体の各所から生え出る何本ものケーブルに繋がった入力端末を手に、グラムを横目で見た。

「いや……何でもない……続きを……」

ミハエルは、端末を手に持ったまま、喋り出した。

「さつきも言った様に、大佐は、リセツククウの機体性能を我々の予想を遥かに超える形で十二分に發揮してくれた。恐らく、大佐の能力はこれでも發揮しきれていない。しかし、残念な事が一つある」

「つまり…？」

「我々としては、この機体を、大佐の能力を最大限に発揮できるように設定したいのだから、これ以上機体設定をピーキーにすると、競技規定違反になってしまう。そこで…」

素晴らしく進歩した技術を力説するミハエル。

グラムはそれを聞きながら、もう一度振り返り、窓から空を見た。灰色の空は何も言わず、ただ雲を流した。

Chapter 5

「ジエネシック社本社、セントラルタワー最上階」

「しかし、あのままでよかったのでしょうか…？」

エヴァは、ロイの後からついて歩きながら彼にそう言った。

「心配することは無い…エヴァ…我が社の製品を大いに宣伝する良いチャンスじゃないか…」

答えるロイ。

駐屯基地から、ジエネシック社本社まで、専用機で一目散に帰社した彼等は、報告の為に、ある一室を目指し、歩いていた。

扉の前で止まる。

表札も、室名も無い扉。

彼は、扉の横に設けられたセキュリティチェッカーに掌を起き、暗証番号を入力。

開かれる“扉”。

中は暗く、明かり一つ無い濃密な闇に満たされている。

「エヴァ…君は“運命”を信じるかい？」

答えるエヴァ。

「私は、運命など信じません。未来は自分で創るものです」

「エヴァ…」

彼は彼女の答えを聞いてから、彼女のあごを指でそっと持ち上げ唇にキスした。

身じろぎ一つしない彼女。

少しの時間、唇を重ねてから、そっと唇を離す。

「んっ…」

「その言葉…信じているよ…」

そう言って、闇の中に入っていく彼。

エヴァは彼の背中をじっと見つめながら、唇を指でなぞり、扉が閉まるまで、彼の背中を見つめ続けた。

真っ暗な闇の中、彼女は一人で立っていた。

「グレン…」

自分と呼ぶ声。

周囲を見回すが、姿は無い。

「グレン…」

聞き覚えのある懐かしい声。

「お母さん…?」

目の前に、光が灯った。

「グレン…」

光の中に、女性の、美しい女性の姿が見えた。

「お母さん? お母さんなの?」

手を伸ばすグレン。

その手が、光に触れようとしたその時、女性の姿は、ぐずぐずと音を立てて崩れていった。

「お母さん！」

何故かは分からない。

彼女はそれを、光の中の女性を、“母親”と直感した。崩れる母親の姿。

彼女は張り裂けんばかりの叫び声を上げた。

突然、視界が開ける。

跳び起きるグレン。

いくつもの数列が映し出されている入力端末の黒い画面。

ただ点滅を繰り返すだけのカーソル。

「いけない…こんな所で寝ちゃってた…」

彼女は目を擦った。

一瞬身震いするグレン。

昼間は気温40度を上回るこの土地は、夜になると節操なく0度を下回る。

そのせいでハンガーは、底冷えするような寒さに満たされる。

「お母さんの夢なんて…」

彼女は自分の肩を摩った。

身体が寒いだけじゃない。

記憶が、心が、冷たく寒い。

「お母さん…」

自分の肩を抱いたまま、そう呟くグレン。

突然、彼女の肩に、厚手のブランケットがかけられた。ふと振り返る。

そこにはエステルがいた。

「エステル…」

暖かく、彼女の肩を包む厚手の布地。

彼女は無意識のうちにブランケットの端を強く握り締めていた。

「風邪…ひきますよ…?」

そう言いながらも、エステルは無表情。グレンは少し苦笑い。

「ありがとう…エステル」

恥ずかしそうに顔をそむけるエステル。

そうすると彼女は、一本の暖かい缶コーヒーを差し出した。

「はい…」

「ん？」

「昨日の…お礼です。じゃ…身体が冷え切らないうちに、早く休まれてくださいね」

「待つて！エステル」

コーヒーを手渡し、足早に立ち去ろうとするエステルをグレンは呼び止めた。

「はい？」

「すこし…協力してくれない？」

「談合？」

グラムは低い落ち着いた調子で、確かにそう言った。

「未確認情報だが、諜報部からそれらしき動きがあると報告があった」

会話の相手はガルス。

グラムは駐屯基地に備え付けられた電話機で、彼と会話していた。「支部軍閥と、一部のサンヘドリン軍士官…そしてメーカーが協力

し合つて“口利き”を行っているようだ。おそらくは、支部に強力な拠点防衛兵器を置くことが目的だろう」

「拠点防衛兵器？」

「そちらのトリアルに参加しているはずだ…例の…『ピステイス』が…！」

グラムは大きいため息をついた。

「おそらく、明日の総当たり戦、彼らは辞退するだろう。これにかわっているのは、恐らく一社だけではない！ 最初から、このトリアルの結果は決まっていた…！ ジエネシックが勝つと…おそらく、相手の社の機体が、予想を超えて高性能だということを知り、大佐をパイロットにしたのだろう」

苦虫を噛み潰したような表情をするグラム。

彼は、ガルスに答えて言った。

「私が負けるかもしれませんよ？」

受話器の向こうで一瞬笑うガルス。

「不慮の事故が無いようにな…」

グラムはそれを聞いて、一瞬、不適な笑いをしてから受話器を置いた。

「ごめんね…エステル…変な事頼んじゃって…」

「…まったくです…こんなこと頼まれたのは初めてですよ…」

一枚のブランケットを分け合い、身体を寄せ合ってベンチの上に

座るグレンとエステル。

少し迷惑そうなエステルを尻目に、グレンは落ち着いた表情をしていた。

「エステルって、あつたかいね……」

エステルの肩に腕を回すグレンはそう言ってエステルの頬に自分の頬を寄せる。

「……あの……」

「私ね……私が19の時にお母さんが死んじゃったの……それも“不運な事故”で……」

「グレン？」

「綺麗で、頭が良くて、いつもいい香りがしてた……それでかな？私
がエステルと初めて会った時、初めてじゃない気がしたのは……綺麗で、頭が良くて……お母さんと同じ匂い……お母さんと同じ名前の“
エステル”……だから私、あなたの事を、ただの他人だと思えないの……」

「……お……母さん？」

「でもわかってる……エステルはエステルで、お母さんじゃないって……
エステルをお母さんの代わりにしようだなんて、私の勝手な我が儘だもんね……私にはお母さんも居ない……お父さんも居ない……家族は誰も居ない……私は一人ぼっち……」

そう言つて、悲しげな表情で俯くグレン。

エステルは、そんなグレンを優しくな眼差しで見つめ、こう言つた。

「そんな事は無いわ……グレン……」

エステルは突然、グレンの首を抱いた。

「どうしたの？ エステル……」

「あなたは、みんなに愛されている……技術部のみんなにも、シエー
ファーのみんなにも、大佐にも……」

「大佐も……？」

「グレン、あなたは一人じゃないのよ……あなたの周りにいるみんな

が、あなたの家族よ……」

グレンを強く抱きしめるエステル。

グレンはいつもの表情を取り戻し、エステルの胸に抱かれたまま目をつむった。

「エステル……」

安らかな様子のグレン。

ハンガー内の微かな明かりは、二人だけを照らし、淡い光りが、グレンとエステルを包んだ。

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT12 英雄の条件（前書き）

佳境に入るトリアル。グラムたちジエネシックス社は最終試験に入る。しかし、試験には不穏な影が迫っていた。

ACT12 英雄の条件

Chapter 1

西暦2080年、第四次世界大戦の勃発と共に、『それ』は産声を上げた。

当初から、巨大人型兵器の有用性には疑問が投げ掛けられてはいたが、内骨格駆動フレーム“MFS”（マニューバーフレームシステム）による人間に限りなく近い動作と、強力な内燃機関。当時としては破格に小形なスラスタエンジンを搭載したそれは、『人型機動装甲（HMA）』と名付けられ、その機動力と打撃力で一躍、陸戦兵器の花形に踊り出た。

そして開発から100年間に、この兵器は目まぐるしい進化を遂げていった。

広がる戦線。

激化する戦闘。

大量破壊兵器。

そして、“エース”と呼ばれる英雄達。

この全てが、HMAを更なる超兵器と化していく推進剤となった。そして終戦後、HMAの役目は、対人戦闘から対ヴァリアンタス戦闘へ取って代わっていった。

際限無い進化を遂げていく敵。

それに呼応するように、進化するHMA。

そして今ここに、新たな時代を劃する二つの機動装甲が存在する。

その二機は、お互いの出会いの時を、静かに待っていた。

そのパイロットもまた、同じ様に…

パイロットスーツに身を包み、戦いに赴く前特有の張り詰めた空気を、彼は感じていた。

静かなロッカールーム。

目を閉じ、祈るように、非常に落ち着いた様子で佇むグラム。

肩がゆっくり上下し、自分の心音と息を吐く音だけが彼の鼓膜に届く。

貪欲な連中。

自分たちで万全な状況を作り上げておきながら、小さな小石をブルドーザーで退かし去る。

そんな連中が。

ブルドーザーにされている自分が。

気に入らない。

今朝方、選定委員会からの通達が有った。

呆気ない程簡単な、文章による知らせ。

以下の2機を、最終試験への移行に適す物とする。

ジェネシック・インダストリー社製試作機「対ヴァリアンタス戦

闘用人型機動装甲HMA-ph3 リセツククロウ」

アーシエクロイツ社製試作機「反重力波装甲実装型戦術機動兵器

ピステイス」

以上2機の模擬戦を経て、次期主力機体を決定する。
サンヘドリン兵器局次期主力機体選定委員会委員長ルドルフ・ハ
インケル少佐

この直後、アーシエクロイツ社から突然、“辞退”の申し入れが
有った。

その結果、補欠2位だったキクチ金属工業が、繰り上げ当選し、
水蘭とリセツククロウは正面から対決する事になった。

正に、彼の言葉通りに。

彼はもう一度呟いた。

『気に入らない』と。

刹那、ドアをノックする音に、彼の意識が引き戻られる。

「大佐……」

ドア越しに聞こえてくる、自分を呼ぶエステルの声。いつもより
大きく深呼吸。

「分かった……」

彼はゆっくり立ち上がり、ドアから部屋を出、ロッカールームか
らハンガーへ向かった。

彼には、生まれてこの方、剣しかなかった。
だが、彼は変わった。
彼女が変えた。

「準備はよろしいですか？」

彼女の声が、インカムを通じて聞こえてくる。

一瞬の躊躇。

水蘭のコクピットの中、手を延ばせば触れる事が出来る程近くに
居る筈なのに、彼には何故か遠く感じた。

「春雪……」

低い声。

「はい？」

「あのさ……前、ちょうど今みたいにコクピットの中で君と話したと
き……」

途切れる言葉。

声が出ない。

喉の奥で、言葉がノイズに変わる。

「若様……？」

「嬉しかった……」

やっと出た言葉がこれ。

なんだそれ。

自分で反省。

彼女だってほら……

「え……？」

不思議そうに聞き返す。

頭に血が昇る。

自分でも何を言っているか分からなくなってきた。

でもこれだけは言いたい。今言わなきゃいけない。

「嬉しかったんだ……顔を見て話を聴いてくれて……君は僕の我が儘に

振り回されてるっていうのに、嫌な顔一つしないで…微笑んでくれた…」

「若様…」

「君の顔を見てみると、戦いの前だというのに心が静かになれる…何があっても笑顔でいれる…だから…」

自分でも分かってる。

また我が儘だ。

胸がむかつく程、本当に嫌なくらい、自分でも分かっている。

でも…

目の前に、ウインドウ。

彼女の顔が映る。

「…っただけ、約束…もう二度と、あんな悲しい顔を…しないでください…」

春雪は一刃にそう言つと、彼の瞳をじっと見つめた。

一瞬の沈黙。

彼は答えた。

「約束するよ…春雪…」

彼女は静かに、そして優しく微笑んでから、再び彼に問う。

「準備はよろしいですか？ 若様…」

答える一刃。

「準備よし…！」

ヘルメットを被り、視覚変換。

目の前に、広い視野が広がっていく。

静かに動き出す水蘭。

機体はゆっくりりと、薄暗いハンガーから、明るい荒野へ出て行った。

ロッカーからハンガーへ向かう途中、エステルはグラムの少し後ろについて歩きながら、彼の背中をちらちらと見た。

強張った肩口。

強い足音。

一目見れば、機嫌があまり良くない事くらいすぐ分かる。

「エステル」

グラムが不機嫌な口調で話し掛けた。

「はい？」

返事を返すエステル。

彼は直ぐに立ち止まり、振り返る。

「どうしました？」

「夕べは…何処に行っていた？」

「え…？」

思わず聞き返す。

「部屋にも居なかったからな…少し心配したぞ？」

目を点にするエステル。

彼女は一瞬、苦笑混じりの笑みを見せてから、グラムの顔を見つめて言った。

「それで機嫌が悪かったんですか？」

答えるグラム。

「理由はそれだけではないがな…」

彼女は顔を俯かせて溜息をついてから、すぐに顔を上げて答えた。

「ハンガーにいました」

「一人でか？」

「グレンと一緒に」

「一晩中？」

「夜中のうちに部屋へ戻りましたよ？」

「急に仲良くなったな……」

無言でエステルの顔を見据えるグラム。

彼の目は、何か疑いを抱いているような……そんな目で、彼女は額を押さえてからもう一度、大きく溜息をついた。

「念のため、一つお聞きしておきますが……まさか私と彼女が、性愛関係を持ったなどとお考えではありませんよね？」

「……………」

無言のグラム。

彼女は声を荒げた。

「違います！ 勘違いなさらないで下さい……！ 彼女と私は……！」

『私……家族いないもん……』

突然、彼女の脳裏に、タベのグレンの言葉が響いた。

「彼女とは……」

「エステル？」

「大佐……」

彼女は、グラムの顔をじっと見つめて、請い求めるような口調で話し始めた。

「……もう少し彼女に、言葉をかけてあげられないでしょうか？」

「どうした？ 急に……」

不思議そうなグラムに、彼女は言った。

「グレンはタベ、『自分には家族がない』と言っていました。父もなく、母もいない……彼女はそう言って……泣いていました……」

「グレンが……？」

「いつも明るくて、誰にも親切な彼女が、そう言って泣いたんです。だから私は、彼女を抱きしめて、『あなたはたくさんの人達に愛されてる……あなたの周りにはいるみんなが、あなたの家族だ』って……言

「つたんです…」

「それで、彼女は？」

「笑顔で、『ありがとう』って…」

彼は目を閉じ、短く息をついた。

いつも明るくて、親切で、悩みなんか一つも無いような笑顔を見せるグレンが、エステルの前ではそんなにも弱い面を見せた。

「そうか…」

彼女は、自分たちでは想像も出来ないほど辛い思いをしてきたのか…

「グラムは、目を開けて眩いた。」

「家族…か…」

エステルが一瞬寂しそうな顔を見せてから、こう言った。

「でも“家族”って難しいです。側に居るだけなら、誰でも出来る…でも、言葉をかけて、心を癒す事が出来る人は、何人も居る訳じゃない…だから、大佐…お願いします…彼女に、今よりももう少しだけ多く、言葉をかけてあげられませんか？」

優しい顔でグラムを見つめるエステル。

そんな彼女の顔を見て彼は、一つの言葉が思いに浮かんだ。

『母親』

「そうだ…」

「この笑顔だ。」

「忘れていた…」

「彼女を愛するようになった訳を…」

「だからこそ、今までもずっと…」

「努力しよう」

彼はそう言つと、踵を反して再び歩き始めた。

「静かな足音。」

「優しい後ろ姿。」

彼女は安心した表情で、彼の背中を見つめた。

「エステル……」

彼が再び、彼女に話し掛ける。

今度は、優しい、落ち着いた声で。

「はい？」

「疑って悪かった……」

エステルが立ち止まる。

そして彼女は、共に立ち止まった彼に、優しい笑顔で言った。

「おばかさん……」

苦笑するグラム。

彼女は、グラムの横に立ち、共に歩調を合わせて歩いていった。

Chapter 2

「よし、グレン君。もう一度確認しよう」

ミハエルが、端末のリセットボタンを押しながらそう言うと、彼女は元氣よく頷いた。

タイミングを合わせ、二人とも同時にEnterキーを押す。

端末画面を瞬く間に埋め尽くしていく膨大な量の数式の列。

グレンは、その全てを汲み取るように、高速でキーを叩いていく。

「君は以前、『兵器は結局、人殺しの道具だ』と、言ったね」

「え……？」

彼女は思わず聞き返した。

「良いかね？ グレン君。兵器は人を殺さない。人の意思が、兵器を通して人を死に致らしめる。問題なのは使い手の意思、創り手の想い……ここを見たまえグレン君。兵器は……機械は人の思いや感情など理解しないという事を分かっているながらも、こんなにもたくさん

の人間を惹き付ける…兵器は、用いる意思によってここに居る全員を殺す事もできるが、同時に、全員を救う事もできる…愛する人を守る事もできる。だから私は…」

ハンガーに到着したグラムとエステルを見て、彼は静かに言った。「彼らを信じる…」

グレンが手を止める。

「先生…」

「なんだ？」

「兵器に、創り手の意思と想いが宿るのなら、私は先生の事も信じます…想いは、絶対に伝わりますよ」

透き通った、満面の笑顔を見せるグレン。

いつの間にか確認は終わっており、数式の末尾で『complete』の文字が点滅していた。

「確認が終わりました。先生」

「うむ、ご苦労」

端末からジャックを引き抜き、二人の元に歩いていくミハエル。

彼は、ふいに立ち止まり、グレンに言った。

「君の想いも、伝わるように祈っているよ」

ミハエルの背中を見送るグレン。

彼女はうれしいそうに微笑んだ。

彼がハンガーに着いた頃には既に、全ての準備が調っていた。

彼の操縦に追従出来るよう、調整が繰り返された駆動系。
グラビティードライバー。

大出力スラスター。

重力波兵装。

その全てが、再び命を吹き込まれるその瞬間を待っていた。

「待っていたよ。ミラーズ君」

彼は、声のした方向に振り向いた。

「遅くなりました…博士」

「いやいや…規定時間通りだ。調子はどうかね？」

「万全です。そちらは？」

ミハエルは機体を眺めた。

「これが現段階では最新バージョンになる。武装は今まで通り胸部
ビームカノン2門、EPC、グラビティードライバーによるグラビ
ティシールドと近接兵装…ただ、駆動系を競技規定ギリギリまで微
調整してあるが、そのせいか、機動力は上がったものの、非常に…」
「デリケート？」

「そう。しかも駆動制御ソフトが、データ不足で間に合わなかった」

「問題ありません、博士。なにも問題ありません」

機体の前で立ち止まる。

つや消しの黒一色で塗装された機体は、戦いの前だと言うのに、
まるでショールームに飾られるかのように磨き上げられていた。

「可笑しく思っただろう？ ミラーズ君」

ミハエルが、機体に触れながらそう呟いた。

「戦いの前だと言うのに…嫌でも傷だらけになると言うのに…」

彼は、グラムの顔を見据えた。

「戦いの前だから」だよ、ミラーズ君」

“ だからこそ”

最善のタイミングを指すこの言葉に、彼は強く頷く。

「この機体…無傷でお返しします。博士」

彼はそう言って、ミハエルに敬礼すると、機体のコクピットに身

体を滑り込ませた。

「大佐……」

グレンが顔を覗かせる。

「先生……大佐のこと信じてるって……だから……必ず勝ってきて下さい！」

彼は頷く。

「それから……エステル……」

「はい？」

「夕べはありがとう……とてもうれしかった……気をつけてね……」

グレンはそう言って、エステルの頬にキスした。

「大佐も、お気をつけて！」

グラムに敬礼するグレン。

グラムは彼女に、敬礼仕返した。

「起動開始」

「了解」

コンソールが光る。

コネクションチェック。

異常無し。

FCS、システムノーマル。

起動完了。

あと一つ、このスイッチを押せば、コクピットハッチが閉まる。

だが彼は、躊躇した。

「グレン……」

機体から離れようとしたグレンを、彼は呼び止めた。

エステルが、機体を“待機状態”にする。

「大佐……？」

「……行ってくる」

グレンは微笑んだ。

「いってらっしゃい」

閉まるハッチが、二人を隔てる。

システムをアクティブに。

ハンガーの外へ出る。

モニターの端に、ウィンドウ。

「グラム…」

「すまん… エステル。あれが精一杯だった」

「いいんですよ… グラム… 少しずつで…」

彼女は優しく微笑んだ。

管制室から入電。

「キクチ金属工業社製試作機の発進を確認した。試験機、発進せよ」

「了解、ランデブーポイントへ向かう」

大きく息をつく。

「グラム… ミラーズ、リセツククロウ… 出撃る！」

機体は静かに動き出し、ホバー走行へ。

徐々にスピードを増すリセツククロウ。

機体はやがて、空へ舞い上がって行った。

「第一演習場上空」

コクピットの中で、大きく息をつく。

網膜に映し出される、“水蘭”の視界の中、灰色の雲が、遙か前方から彼の背後へ高速で流れていく。

一瞬、ハッチを開けて、直接外を見たいという衝動を押し殺し、彼は機体を気流に乗せた。

「若様」

視界の端にウインドウ。

「間もなくランデブーポイントです」

気付けば機体は、対戦相手との合流場所へ到着していた。

レーダーに反応。

グリッドマップに表示される、三角のカーソル。

黒い人型の物体が、雲を突き抜け、水蘭の横に並んで飛行する。

「ジェネシック・インダストリー社製試作機、リセツクク로우です」

簡単に済まされる、春雪の解説。

彼は彼女に問う。

「相手方のパイロットの事は、何か聞いている？」

答える彼女。

「いえ、聞いていません。相手方、我社共に、テストパイロットの情報は、非公開という事で合意しています」

彼は咳いた。

「話できたらなあ……」

突然、リセツクク로우から、水蘭へ入電。

音声通信。

「はじめまして……と言つべきかな……？」

「お互い初対面なのに、お声のみとは、些か残念な気もしますが？」

「失礼は承知の上だ。声が若いな……十代か？」

「今年、19 になったばかりです」

「なるほど……手に職を……と言つやつかな？」

「いえ……僕の場合は、ただの我が儘です」

「我が儘？」

「ええ……」

「我が儘でここまでは来れんぞ？」

「運がよかっただけです。それと、仲間が」

管制塔からの通信が、二人の会話に割り込む。

「両機、間もなく試験を開始する。20秒前…」
グラムが彼に言った。

「…では…」
気迫のこもった彼の声に、思わず息を飲む一刃。

「君のその運が、いつまで持つか…私が試してやろう!」
始められた最終試験。

両機は直ぐさま、ドックファイトへ突入した。

戦闘開始信号発信からおよそ3ナノセカンド後、エステル及び春雪、機体通信回線を経由し、通常空間に於ける物理現実時間に換算して、約60ナノセカンド限定の超光速度双方向回線を接続。

超高压縮プログラム言語を用いての高速思考会話、開始。

「こんにちは。『私』の『名前』は“エステル”。『あなた』の『名前』は？」

「こんにちは、“エステル”。『私』の『名前』は“春雪”。」

「“春雪”、『あなた』の『目的』は？」

「『私』の『目的』は、彼を勝たせること。『あなた』は？」

「『私』の『目的』は、彼を支えること。“春雪”、『あなた』は彼の何？」

「『私』は彼の僕。『あなた』は？」

「『私』は彼の一部。共に生きる、彼の一部」

お互い、『手』を伸ばし、『身体』に触れあう。

『全身』を隈なく、隅々まで。

細部に至るまでを。

エステル及び春雪。双方の接続機体データを交換、リンク。

60ナノセカンド経過。

超高压縮プログラム言語を用いての高速思考会話、解除。

戦闘開始。

Chapter 3

水蘭の近接グリッドマップに表示される、リセツツクロウのカーソルが、急接近してくる。

近接警報。

グラムの乗るリセツツクロウは、水蘭の頭上を擦過して後ろに付いた。

戦いは既に始まっている。

ロックオン警告。

グラムはEPCのトリガーを引いた。

水蘭は即座に、加速しながら右ロール。

攻撃を回避。

衝撃波が機体を擦過する。

水蘭も、リセツツクロウも、その機動性は伊達じゃない。

水蘭は、その柔軟な旋回性能で、リセツツクロウの攻撃を回避する。

それを追撃するグラム。

両機は激しいドックファイトを展開。

機体から雲が尾を曳いた。

無線接続。

「いつまで逃げ回る気だ？少しは反撃したらどうなんだ？」

「意地悪な方だ。僕の機体に銃が装備されていない事を知っておきなから……」

コンソールに表示される、相手方の機体ステータス。

「銃が嫌いか？」

「ええ。大嫌いです」

水蘭の腿に装備されたマイクロミサイルポッドから、数発のスムーズ弾頭が射出された。

“水蘭”

ECMを発動。

サーモプロテクト。

ダミー射出。

“リセツツクロウ”

FCS、ロックオン不可。

「スモーク…目隠しのつもり…か…」

「ECCM、発動しますか？」

「いや…」

グラムは煙の中、その場に静止し、銃を降ろす。

「リセツツクロウ。動き止まりました」

「よし！」

模擬刀を抜く。

そして構え、リセツツクロウに切り掛かろうとしたその時、彼の背中に寒気が走った。

「リフレクター、出力最大で防御態勢！早く！」

水蘭の前面を覆うリフレクター！

次の瞬間、煙幕の中からEPCの重力衝撃波がほとばしり、リフレクター表面で爆ぜた。

華奢な声を上げる一刃。

衝撃波は立て続けに、2発目、3発目と水蘭に命中する。

「リフレクター基部、過負荷限界値です！」

度重なる攻撃に耐え兼ね、リフレクターの基部が砕けた。

落下する水蘭。

「こんな事…出来るのはあの人しかない…あの人しか…！」

彼は、脚部メインスラスタで機体を減速し、地面に着地した。

「ダメージジエック！」

「了解！」

セルフチエック完了。

「機体本体に目立った損傷は無し。ただリフレクターを失いました」

「戦闘に支障は無いね？」

「はい…ですが、空間機動力は本来の53%以下です」

「大丈夫…十分だよ」

彼はそう言うと、機体をゆっくり直立させた。

空から降り立つリセツクロウ。

グラムは再び、水蘭と通信した。

「EPCの直撃を受けてもまだ立つとは…『便利』な物を持っているな…」

「噂と違って意地悪な人だ…ミラーズ大佐！」

「噂…？」

「あなたは有名人ですよ？ 大戦での偉大な戦士！ 人類の英雄！」

グラムは皮肉を含んだ笑いをした。

「…ふ…戦いで人は偉くならん」

「でも、強くはしてくれませう」

「強く…か…」

グラムは、EPCを手放した。

「そついえば名前を聞いていなかったな」

「一刃…菊地一刃」

「流派は？」

「え？」

「剣を持っている以上、剣術使いなんだろう？」

「流派は…」

一刃は答えた。

「本家菊地一刀流。あなたは？」

「機甲体術」

「『機甲体術』！究極の機動兵器格闘術：！」

「やるからには手加減せんぞ？」

「それでこそ名誉です！」

「一刀は剣を抜き、上段に構えた。」

「では…」

腕を構える、グラムのリセツククウ。

「始めるとしよう…」

「二機の間、静寂がこだまする。」

「一刀は大きく息を吸った。機甲体術といえば、大戦中に発達した究極の機動装甲用格闘術だ。」

「体術熟練者なら、最低でも一人で二個小隊に匹敵する戦闘能力を持つと言われ、事実、完全武装したHMA一個中隊が、一人の体術熟練者の操縦する一機のHMAに殲滅されたという記録が、過去に残されている。」

「彼が、あの腕を一振りさせれば、その瞬間、こちらが無事である保証は無い。」

「だが彼は、先程から微動だにしていなかった。」

「それどころか、殺気一つ無い。」

「まるで、水の様だった。」

「一刀は心の中で呟いた。」

「（岩を穿つは大水に非ず…ただ一点を打つ、水滴なり…か…）」
大きく深呼吸。

「本家菊地一刀流十五代目菊地一刀…参る！」

「一刀はリセツククウへ切り掛かった。」

「リセツククウへ迫る剣。」

「グラムは、左手で剣を弾き、右手で裏拳を打った。」

「水蘭は、上体を反らして回避。」

「次の瞬間、リセツククウの右回し蹴りが水蘭の頭部へ迫った。」

即座に姿勢を低くして蹴りを回避する水蘭。

水蘭はリセツツクロウの軸脚を払った。

体勢を崩され、宙をまうりセツツクロウ。

グラムは咄嗟に、脚部スラスターと肩に内蔵されたスラスターを駆使して、体勢を確保。

空中に浮かんだまま機体を捻り、左足を蹴り上げた。蹴り飛ばされる水蘭。

一方グラムの操縦するリセツツクロウは、何も無かったかのように地面へ着地。

水蘭は、地面で受け身を取ってから、直ぐに立ち上がった。

「まだまだあ！」

彼は深く踏み込んでから、リセツツクロウへ向かって、剣を突いた。

迫る剣先。

グラムは機体を素早く捻り、右手を剣の峯で真っ直ぐ滑らせ、水蘭の右手を掴んだ。

そして残る左手で、水蘭の肩口を掴み、脚を払って投げる。

放り上げられる水蘭。

グラムは、空中にいる水蘭を手刀で叩き落とした。

地面へたたき付けられる水蘭。

一刃は、ぐう…と低い声を上げ、意識を失った。

「水蘭、パイロットの意識レベル低下！ もう無理です！」

オペレーターの一人が、菊十郎へ叫んだ。

「進退は…一刃自身が決める事…！ 我々は最後まで見守るが役目！」

菊十郎はそう言って、杖を持つ手に、力を込めた。

水蘭を睨み付ける、リセツツクロウ。

「立て」

グラムは一刃に向かって、そう言い放った。

「パイロットは気を失っています。反応は望めないでしょう」

グラムは、エステルの声を無視した。

「十五代目が聞いて呆れる！ それでどうやって家を…家族を守る！ 立て！ 闘いはまだ終わっていないぞ！」

「もうやめて！」

無線に、聞き慣れない声が響いた。

「もうやめて…お願い…！やめて！」

必死に懇願する、か細く、儂い声。

「お前は？」

グラムが問い質した。

「私は一刃様のイクサミコです…一刃様は…若様は気を失っておられます…ですから、もう…」

「春…雪…」

「若様！」

「春雪…」

「若様！ もう十分です！ 若様は十分闘いました…！ もう…もう…」

言葉を詰まらせる春雪。

「…帰りましょう…若様…一緒に…春雪と一緒に…」

「止すんじゃ…春雪…」

「御祖父様…」

「春雪よ。お前が一刃の事を、心から慕っておるのはよく知っておる…だがな…春雪よ…彼の顔をよく見てみよ…」

春雪はモニターを通して、彼の顔を見た瞬間、背中に寒気が走るのを感じた。

「若…様…」

「笑っておるだろう…こんな状態でも、笑っておるだろう…？」

「なんで…若様…」

「一刃は…過去に大事な何かを落としてしまったまま、今まで生きてきた…誰かが、失った何かを補わなければならぬ…だから、春雪よ…もう少しだけ一刃と、一緒に居てくれんかのう…」

俯く春雪。

「ごめん、春雪…もう少しだけ、僕の我が儘に…付いて来てくれな
いかな…」

「若様…若様…若様あ…」

春雪は涙を拭った。

「春雪は…若様とずっと一緒です」

「ありがとう…春雪…」

一刃は機体を立ち上がらせた。

「（申し訳ありません…若様…春雪は、一瞬でも若様の事を怖いと
感じてしまいました。でも…私は…あなたの事が大好きです…この
先も、これからもずっと一緒に居たい…それは私が誰かに、『そう
しろ』と言われたからでなく、私がイクサミコだからでもなく…私
が“そうしたいから、そうする”のです…だって私の英雄は…あな
ただけだから…）」

春雪は心の中でそう呟き、大きく息を吸った。

「機体セルフチェック、開始します」

「ありがとう…春雪」

グラムは、リセツツクロウの足元に落ちていた、水蘭の模擬刀を
蹴り上げ、手で取った。

彼はグラムに言う。

「迂闊でした。ミラーズ大佐。『機甲体術』には、あらゆる武術流
派の動きが取り入れられている。勿論、我が流派も…どつりで、動
きが見切られる訳だ…」

「機体チェックは終わったか？」

春雪が頷く。

「ええ」

グラムは一刃に、模擬刀を差し出した。

「もう一度、始めからだ」

それを受け取る一刃。

彼は、リセツツクロウから三歩離れる。

「もう、小細工は効かない！あなたが、こちらの動きを知っているなら、あなたが知らない動きをするまで！」

彼は姿勢を低くしてから、剣を腰溜めに構えた。

「あの構えは！」

菊十郎は声を上げた。

「殺気、豪気を捨て去り、心身の完全なる脱力の果てに放つ、電光石火の剣！即ち……」

「菊地一刃流奥義一ノ太刀……」

一刃と、菊十郎の声が重なる。

「無形……！」

次の瞬間、一刃はグラムに切り掛かる。

一歩も動かないリセツクロウ。

そして交差する二機。

二機の間を再び、静寂が訪れる。

不気味な程の静寂。

風が、二機の間を吹き抜けた。

「お見事でした……！ ミラーズ大佐」

振り返る水蘭。

「あなたは、僕が剣を振り抜く刹那の間に、腕一本で、剣を弾き、胸と腹に一発ずつ突きを入れていた。これが実戦なら、僕は確実に死んでいました。僕の完敗です……」

彼はそう言うと、機体の頭を下げた。

「私が一撃で倒せなかった人間は……」

「え……？」

「お前で二人目だ」

機体の腕で、敬礼するグラム。

「良い闘いだ。礼を言う」

彼はそう言うと、無線を管制室に繋いだ。

「こちら試験機……試験終了。帰還する」

空へ飛び立って行くリセツクロウ。

それを見送る一刃。

彼は、機体をゆっくり、劣るように降着。

「…あの、若様…」

一刃は、ヘルメットを脱ぎ、コンソール上に内蔵されている小型カメラのレンズを手で覆う。

「若様…お顔が見えません…」

「ごめん…春雪…でも、約束したから…君と、約束したから…」
顔を見せない一刃。

春雪は、ゆっくり溜息をついてから、機体をスリープさせ、一刃と共に、回収のトラックを待った。

Chapter 4

『あなたは偉大な戦士！人類の英雄！』

違う…

私は英雄なんかじゃない…

英雄なんかでは…

賑やかなハンガー。

最終試験を、勝利の下に終わらせる事ができた事を祝つささやかな祝勝会を、トライアルのクルー達が執り行っていた。

「あれ？大佐は？」

グレンはエステルにそう尋ねた。

リセツツクロウの、グラム達の勝利を祝う祝勝会なのに、主役がいなかったからだ。

一人、小さな椅子に座り、寂しそうに佇むエステル。彼女はグレンに答える。

「大佐なら、一人になりたいと言って、喫煙所に行きましたよ…」

「もう…大佐が主役なのに…」

不満げに唇を尖らすグレン。

彼女は両手にグラスを持っていた。

「そういえば、先生もいないけど？」

「博士もどこかへ行かれましたよ」

グレンは大きく溜息。

「もう…主役が二人もいないなんて…！私、大佐の事、呼んでくるね」

「待つて！ いいの…グレン…」

「でも、レディほったらかして…」

「大佐は戦いの後、時々一人で物思いに耽るの…何か思い詰めたよ
うな表情で…だから、グレン…そっとさせてあげて…」

グレンの瞳を見つめるエステル。

「う、うん…」

グレンはただ導かれるように、ゆっくり頷いた。

英雄…

英雄とはなんだ？

偉大な戦士とはなんだ？

大戦中は幾百幾千もの敵兵を殺してきた私が、『道具』と『組織』を変えただけで英雄…？

過去に、断片的な記憶と身体に染み付いた機甲体術のみを手に持ち、一人放り出された世界は、殺戮と破壊のみの戦場だった…

戦った…

必死に戦った…

戦って戦って…

気付けば、『地獄の炎』と呼ばれる殺戮者になっていた…

敵には憎悪を込めてそう呼ばれ、味方には求めてもいない畏怖の念でそう呼ばれ、いつしか同胞にさえ『戦闘機械』と呼ばれるようになった…

それでも友はいた…

いや、友で居てくれた…

私には共に戦える同志がいた…

しかし私は、その同志達さえ…

愛する友人達さえ護れなかった…

それで何が“偉大な戦士”だ！

何が“英雄”だ！

組織と道具を変えても、同じ事だった…

何も変わっちゃいない…

何も…

「何を暗い顔しているのかね？ミラーズ君…」

唐突にかけられた声に、グラムは顔を上げた。

「博士…」

「…隣、良いかね？」

ミハエルはそう言って、グラムの横に座った。

「大佐には、過去の記憶が無いの……」

隣に座るグレンにエステルはそう言った。

「え……？どうして!？」

思わず驚いた表情をみせるグレン。

エステルは彼女に、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「大佐は過去に、戦闘で重傷を負い、今のCAMC……当時の緊急軍医療センターで再生治療を受け、その後戦線に復帰したと記録には残っているわ……大佐はその時に、記憶の大半を失ってしまったているの……自分が誰なのかも、どこから来たかも知らなかったみたいなの……でも時々、意味不明な記憶のフラッシュバックが起きて、彼の心に重圧をかけている……想像もできないでしょう？あの彼が、今にも崩れてしまいそうなほど不安げな表情をする様子なんて……」

「大佐が……そんな……」

「だから彼が一人になりたい時は、なるべくそうして、そっとしてあげてるの……」

「そうだったんだ……」

グレンは溜息をついてから、遠い目で天井を見上げた。

「いいなあ……エステルは……大佐の事なんでも知ってて……私は大佐の事何も知らなかった……」

「それは……何年も一緒にいれば、知る事も多くなるし……」

「ねえ、エステル……。エステルは大佐の事、どう思っているの？」

「…どう言う意味？」

「だから、男性として」

「男性…として？」

「ほら、好きとか嫌いとか、かつこいいとか！」

「グレンは？」

「私？」

グレンは少し考えてから答えた。

「私は、大佐の事好きかな…」

「好き…？」

「強くて、かつこよくて…」

エステルは真顔で彼女に言った。

「それほど彼が好きなら、彼に抱かれてみたら？」

思わず吹き出すグレン。

「ど、どうしたの！？ 突然！？」

「彼なら拒まないと思うけど？」

「ちよ、ちよっと待って、エステル！ そう言う意味じゃなくて…

！」

「きつと優しくしてくれるわよ？」

「もう、エステル！ やめてよ！ 私が言ってる“好き”は、そう

いう好きじゃなくて、私がエステルを好きなのと同じ“好き”！

エッチしたいとか…そういうのじゃなくて…！ あーもう私何言っ

てるんだろっ！」

低い笑い声が聞こえた。

エステルの笑い声。

「エステルはどうなのよ！？」

グレンが、ふくれた顔をしながらエステルを見据えてそう問い質

すと、彼女は真剣な表情でグレンを見つめ、呟いた。

「…私は…」

「私は？」

「よく…分からないわ…」

思わず拍子抜けするグレン。

「じゃあ、しょうがないわね！」

グレンは椅子から立ち上がり、エステルの手を掴んで引っ張った。

「ちょ、ちよっと……」

「こつなつたら相手に聞くしかないわ！」

「だから大佐は、一人になりたいと……」

「そんな時こそ、一緒に居るのが女の子の役目よ！ エステル！」

「はあ……」

引いていかれるエステル。グレンは楽しそうな顔を、エステルは半分困った顔をしていた。

「帰った時からずっと浮かない顔をしていたが、機体に何か問題でも？」

ミハエルはグラムにそう尋ねると、彼の顔を覗き込んだ。

グラムは答えた。

「いえ、機体は完璧です」

ミハエルは再びグラムに問う。

「では何が？」

「私自身の……」

落ち着き払った……と言うよりは、何かを諦め切ったかのような、

そんな雰囲気醸し出すグラムに、ミハエルは溜息をついてから、こう言った。

「私で良ければ、相談に乗るが？それでも君より長く生きている。何か力になれるだろう…」

グラムは答えた。

「博士…英雄とは何なのでしょう…敵を多く殺した事がそうなのなら、それは今ではただの殺人者で、多くの人命を護った事がそうだと云うのなら、やはり私は、ただの殺人者です…」

「英雄…か…」

ミハエルは一瞬、遠い目で窓の外を眺めてから、こう答えた。

「私は常々思う。英雄とはそこに在る者ではなく、人の心に住む者だ…」

「人の心に…？」

「そう…それ故に、誰が英雄で、誰が凡人なのかは、誰にも解らない…」

「では何が人を英雄と呼ばせるのです…？」

「良いかね？ミラーズ君：“英雄”とは、ただの言葉だ」

「言葉…？」

「その証拠に、誰もが認める英雄など、有史以来一人もいなかった…あらゆる名誉を受けても、あらゆる名声を得ても、見る者の立場が変われば、その者に対する見方が変わるからだ…自分も含めてね。しかしだ、ミラーズ君…愛する者との一時の幸福があれば、二つの誇りは一つの名誉に勝ると、私は思う…命を賭けて、その愛する者を護れば、その者は愛する人の心の中ではまさしく英雄なのだ」

それに対し、グラムは答えた。

「では私はただの殺人者です…私は過去に、護るべき者を誰も護れなかった…」

「そうか…そう思うか。では君に昔話をしてあげよう…大戦が終わるずっと前の事だ…地球から発した戦線は、月を巻き込み、やがて火星へ達し、火星は戦火に包まれた…」

「第一次火星戦役：」

「そうだ。戦線は局所に集中したものの、その全てが人口の密集する都市部だった。ベルセポリス、シドニア地域：そして、マリネリス峡谷のコプラテス：特にコプラテスは、戦闘が膠着状態になるまでの一週間で、非戦闘員を含めた1万2000人の死者を出した。兵士も一般人も、男も女も、老人も若者も、満遍なく。熾烈を極めた戦闘。無数の機動装甲。その日、都市は瓦礫と化し、人は骸と化していった。私の妻と子供はね：その時に死んだよ：あつと言う間だった。私はどうする事も出来なかった。ただその様子を見る事しか出来なかった。しかしだ、ミラーズ君：君は違う。戦える。その為の力を持っている。だから、過去に護れなかった人を思うより、今から護る事が出来る者を想え。過去に護れなかった者は、君の一部となつて今も生きているのだから。エステル君達の事を思い出したまえ、ミラーズ君。共に生き、共に戦い、より良い物を使って欲しいと日々努力する仲間：彼女達の中でも君は、紛れも無く英雄だろう。しかし、ミラーズ君：忘れてはいけない。君は彼女達のような大勢の命を護ると同時に、彼女達に護られてもいる。戦いは確かに人を強くする。しかしその度に、心は荒んでいく：だが愛する者はそれを癒してくれる。樹を見たまえ、ミラーズ君。樹は、成育することのない無数の芽を生み、地に根をはり、枝や葉を拡げて、個体と種の保存にはありあまるほどの養分を大地から吸収する。樹は、その溢れんばかりの過剰さを使うことも、享受することもなく自然に還すが、動物はこの溢れる養分を自由に嬉々とした自らの運動に使用する。そしてある種のもは、樹を慈しみ労り、ある種のもは樹の下で憩い、一生を全うする。このように自然は初源から生命の無限の展開にむけての序曲を奏でている。そして樹は、物質としての束縛を少しづつ断ちきり、自らの姿を自由に変えていく。君は今まで、私の想像を絶する不幸を味わったかもしれない：だが私は、君がそれ以上の：有り余るほどの祝福を、彼女達から：そして人々から受けてきたと、信じている。君はそれを養分として生き、彼等

を護つてきた：君はそれだけで十分、英雄と呼べる。いや、英雄と言う器にさえ納まらない。：少なくとも、私の中ではね」

ミハエルは椅子から立ち上がり、グラムの上の肩の上に、軽く手を乗せた。

「若い内は、大いに悩みたまえ：ミラーズ君。それこそ、君が人である証拠だ。どんなに辛い過去があろうとも、君は今生きている。

確かにこの世は残酷かも知れない：それでも、散っていった者達は我々に言う：『生きよ』とね。哀しみで人生を擦り減らしてはいけないよ。人生は、生きた人間の為にあるのだから。今の君にならわかるだろう：精一杯、今を必死に生きようとする全ての人間が、偉大な戦士なのだよ。ミラーズ君」

力強く頷くグラムを見て、ミハエルは、彼の肩から手を退かした。優しい表情で。

我が子を見守る父のように…

「さあ、戻るとしよう。ミラーズ君。もっとも、すでに迎えが来ているようだがね…」

「迎え…ですか？」

グラムは喫煙所の扉に目を向けた。

窓ガラスの縁に、グレンの前髪が見え隠れする。

一瞬、目が合い、グレンの頭が直ぐに影へ隠れた。

「見つかった！」

「最初からバレてますから…」

グレン達の、明るい声が聞こえる。

グラムは眉間を押さえ、溜息をついてから、すつと短く息を吸った。

「行ってあげなさい、ミラーズ君。レディを待たせるのは失礼だよ」
「はあ…」

ミハエルはそう言ってから喫煙所を出ていった。
後を追うグラム。

外ではグレンとエステルが、決まり悪そうにグラムを待っていた。

「あ、あの……」

グレンが、申し訳なさそうに口ごもる。

「ずっと、そこにいたのか？」

「はい……」

「そうか」

「あの……大佐……？」

「なんだ？」

「エステルは……ずっと大佐の事待ってました。少し寂しそうに……」

グラムはエステルの方に振り向いた。

グラムを、透き通った眼差しで見つめるエステル。

彼女は、グラムと目が合うと直ぐに、その視線をずらした。

「それがどうした？」

「それで……ですね……」

「何だ？」

いらついた口調のグラム。

グレンは思い切って、グラムに尋ねた。

「大佐はエステルの事どう思ってるんですか!？」

少し驚いた表情で、グレンを見下ろすグラム。

思わず聞き直す。

「エステルを……？」

「はい……」

「そうだな……」

彼はエステルの傍に歩み寄り、彼女の肩を軽く叩いた。

「私だけの、最高のパートナーだ……」

グラムはそう言ってハンガーへ戻って行った。

それを見送るグレンとエステル。

グレンは口惜しそうに、床を蹴った。

「もう……!何よ!それだけ!?ラブラブな展開を期待してたのに……」

「いいのよ……グレン。あれでいいの……」

「エステル……？」

彼女は微笑んだ。

満足げに。

そして、少し寂しそうに…

グレンは感じていた。

エステルの中の心に吹く、冷たい風が、暖かい風になるのを。

「私達も戻ろう！エステル」

「そうしましょう…」

グレンがエステルの腕を抱え込んだ。

「どうしたの…？」

「んふふふ…」

頬を赤らめるエステルに、グレンは肩を寄せた。

「エステルって、かわいいね！」

「はあ…」

溜息混じりの返事を返すエステル。

グレンは心の中で呟いた。

「（やっぱり、笑顔のエステルが一番！）」

彼女は満足げな笑顔で、エステルと共にハンガーへ戻っていった。

こんな、しあわせで楽しい時間がずっと続いて欲しいと思っ
た…

皆が一緒に居れると、漠然と信じていた…

でも現実には、何度でも彼女達を裏切る。

保証の無い、不確かな口約束のように…

最後に彼は言った。

「希望はいいものだよ…ミラーズ君。…多分最高の物だ…」

「先ずは、関係各社の御協力に感謝申し上げます」

濃いオリーブドラフの軍服を着た軍人が、会議室に集まったグラム達にそう言ったのは、未だ朝霧晴れぬ早朝だった。

10m四方程の、小さな会議室。

その真ん中に置かれる長方形の机を挟み、グラムとミハエル、グレン達、一刃と菊十郎は向かい合って座っている。

「今日集まってもらったのは他にもない。我々選定委員会は、度重なる試験の結果、性能・操作性・コストパフォーマンス等を鑑み、我らサンヘドリン対ヴァリアンタス軍次期主力機体を、ジェネシック・インダストリー社製試作機「リセツククロウ」に決定した。なお本日、2189年3月13日0700時をもって、次期主力機体選定トライアルを終了とする。ご苦労だった」

軍服の男が、部屋から出ていき、ドアの閉まる音が響く。

「やりましたね！ 博士！ 大佐！」

たまらず、グレンが椅子から立ち上がり、胸の前で小さくガッツポーズを取りながら嬉しそうに微笑むと、ミハエルは余裕のある表情でゆっくり息を吐いた。

「当然と言えば、当然の結果だがね。これも全てミラーズ君のお陰だ。これでやっと肩の荷が下ろせるよ」

「先生？」

ミハエルはグレンに微笑んだ。

「トリアルに勝ち、ミラーズ君の戦闘データで最高の駆動制御プログラムを完成させる事も出来た。教え子の成長した姿も見れた。それに、私も来年には定年だ…潮時だと思ってるね」

「先生…そんな…」

「さすがですな。あなたの社は…」

突然ミハエルに、菊十郎が話し掛ける。

少々、皮肉の含められた口調。

「これは、Mr. 菊十郎…お褒めいただき光栄です。貴社の製品も、素晴らしい出来でしたよ」

「いやいや、世辞はいい。しかし機体性能もさることながら、まさかあのミラーズ大佐が乗っていたとは…通りで歯が立たん訳だ…のう、一刃…一刃？」

返事が無い。

一刃はグラムの側にいた。

「ずっとお会いしたいと思っていました。やっと、お顔を拝見できますね。ミラーズ大佐」

グラムが答える。

「…君が、一刃君か…？」

頷く一刃。

彼は右手を差し出しグラムと握手する。

決して頑強とは言えない、男の子としては小さく、柔らかい一刃の手を、グラムは握り締める。

一刃がグラムに言った。

「空中からの叩き落とし。効きましたよ、あれは」

「言った筈だ。やるなら手加減はしないと…」

「でもあなたは、そうしなかった」

グラムの表情が変わった。

「あなたなら、僕など一撃で倒せた筈だ。それなのに、あなたはそうしなかった。正直悔しかったです。毎日技を磨いて、身体を鍛練

して…それで身につけた武術なのに。昔、最強の武術とは何かと考
えた事がありません。その頃はひたすら力を求めていました。た
だ、がむしゃらに…結局、答えは見つかりませんでしたけど…」
「君は私を買い被り過ぎだ。『自分の前に立つ者は、その全てを殲
滅する。いかなる状況であれ、討たれる前に討つ』。熟練した戦士
は、そう思う前に体が動き、相手が倒れる。私がそうでなかっただ
けだ。武術に優劣の差は無い。有るのは使い手の技量だけだ。機甲
体術も、無敵じゃない」

「でもあなたは…！」

「あのう…大佐…そろそろですね…」

グレンが二人の間に入る。

退屈そうに、寂しい表情。

「話は終わりだ、一刃君。君もそろそろ…」

突然グラムが、よろけながら頭を抱え、机に手を突いた。

「大佐！？」

慌てるグレン。

グラムは彼女に言った。

「今すぐ逃げる、グレン！ ここから、出来る限り遠くに！」

「どうしたんですか？」

一刃が、不思議そうに問ってくる。

グレンはグラムを労るように、彼の肩に手を乗せながら、一刃に
答えた。

「大佐は未来が見えるの…」

「それってつまり…」

「来るわ…！ “敵” が来るわ！」

次の瞬間、爆音と共に地面が揺れ動いた。

「な、何事だ！？」

よろめくミハエル。

突然館内に、警報音と緊急放送が響き渡った。

『B 18区域で爆発事故発生！繰り返し！爆発事故発生！保安要

員は現場へ急行せよ！」

「爆発事故？そんな馬鹿な……」

「博士！」

グラムがミハエルに駆け寄った。

「機体を……リセットクロウをお貸し願いたい！」

思わず聞き返すミハエル。

「機体を……？どう言う事かね！？ミラーズ君！」

「この期に及んで我々は運が悪い。奴らが……ヴァリアントが来ました！」

「まさか！」

ミハエルは心の中で呟いた。

「（そうか……！何が何でも逃がさない気が……！）」

「0720時、B 15区域」

編隊を組んで滑走する6機のh1カスタム、“E-4”。

スラスター出力を調整し、地表すれすれに機体を安定。高出力スラスターが、機体を高速で機動させる。

「こんな朝っぱらに……何だっけ言うんだ……」

パイロットがぼやく。

「無駄口を叩くな。警戒しろ！」

モニターに上書きされる、周囲の細かな情報。

突然センサーが、自然に存在しない異常なカロリーを感知する。鳴り響く警告音。

数、20以上。

「前方に高エネルギー反応！ やばいぞ！」

「ブレイク！ ブレイク！ ブレイク！」

散開して回避行動に移ったハイカスタムを、数発のビームが貫いた。

爆ぜる機体。

爆炎が、地面を焦がす。

「な…なんだあ！？」

「ヴァリアント…！？」

「撃て！ 応戦しろ！」

HMAが火点へ銃を向け、引き金を引いた。

「本部！ B 15区域にヴァリアント出現！ 現在交戦中！」

「ヴァリアントだと！？ り、了解！ 至急増援を送る！」

パイロットはソルジャーに向かってライフルを撃ち続けた。

「クソツ！ヴァリアント相手に、劣化ウラン弾なんて効かねえ！」

次々に死んでいく仲間。

そして最後の一機が、ビームに貫かれ爆ぜた。

「現場からの通信が切れました！」

騒然とする本部。

彼等は混乱の渦中にあった。

「敵の数は！？」

「不明です！ こちらのレーダーには何も…！」

「一体どうなってる…！」

「本部、聞こえるか？」

突然スクリーンに、グラムの顔が映し出された。

「私は、サンヘッドリン対ヴァリアントス軍所属、グラムIIミラーズ大佐だ。時間が無いので率直に言う。駐屯基地本部のコンピュータは、ヴァリアントスのネットワークシステムによるハッキングを

受けている！」

「ハツキング!？」

「先ずは、部隊を引き上げさせる! それから…」

「先行した部隊は…既に全滅しました!」

グラムが、大きく息をついた。

「…私が単機で出撃する! 諸君らは、システムの再起動を急いでくれ!」

グラムはそう言って、通信を切った。

「エステル、行動に変更は無いが、状況がかなり切迫している」

グラムはコクピットハッチを全開させ、体を乗り出させた。

「博士! 急いで下さい! 敵がすぐ側まで来ています!」

「分かっているよ。ミラーズ君…もうすぐ終わる」

ミハエルは、端末のキーを高速で叩きながらグラムにそう言うようにデータ盗難防止用のシステムロックを解除した。

「博士! 早く発着場へ!」

「座りたまえ、ミラーズ君」

突然、リセツツクロウのコクピットハッチが外部操作で閉められた。

シートに尻餅をつくグラム。

機体の無線に、ミハエルの声が響いた。

「すまない、ミラーズ君…もう少し、待ってくれたまえ」
グラムは叫んだ。

「何しているんですか、博士! 早く逃げて下さい!」

ミハエルは、上着のポケットの中から一枚のディスクを取り出し、ドライブの中に挿入した。

「ミラーズ君、私は君達に酷いことをした。だから今、それを償おうと思う。これからインストールするプログラムは、君自身の戦闘データによって作成された、最強の機体制御プログラムだ。このプログラムは、イクサミコ・パイロット間と、機体駆動システムとの互換性を最適化し、駆動効率を向上、イクサミコに掛かる負荷を1

ノ25に軽減する事が出来る。これがあれば、君とリセツクロウは、普通を越えた戦闘能力を得るだろう…」

徐々に近くなる爆音。

敵が、すぐ側まで来ている。

それでもミハエルは、作業を続けた。

「博士！それが無くてもこの機体は充分…！」

「ミラーズ君！君は強い…！だが、今のリセツクロウでは勝てない！ハードウェアだけの性能では奴らの物量には対応できず、ソフトウェアだけの性能では同時指揮ネットワークの能力に対抗できないからだ。ハードとパイロットの能力に問題はない。しかし今欠けているのはハードとパイロットの能力を最大限に引き出すためのプログラムだ」

「博士、あなたは一体…」

「告白しなければと思っていた。だが、どうしても言えなかった。

我らが敵、ヴァリアンタス…『地球圏広域制圧用機動兵器端末群超広域戦闘指揮・支援同時遂行用虚数因果律総括通信回路構造体』を造ったのは、私…いや…“我々”だ！」

グラムの表情が凍った。

「ヴァリアンタスを…博士が…？」

突然、無線にグレンの声が混じる。

「大佐！聞こえますか！？先生が戻って来ないんです！もうみんな脱出艇に乗ってるのに！」

…私はここだ。グレン君」

一切の冷静さを欠いたグレンの声に、ミハエルは落ち着いた声で答えた。

「すまない、グレン君。心配させてしまって…」

「先生！ お願いですから、早く逃げてください！」

「聞くんた、グレン君。私は君に嘘をついた」

「え…？」

「君のお父さんは、今も闘っているよ…必死にね…」

爆音が、ハンガーのすぐ近くで轟いた。

「さて、もう時間が無い。急がせてもらうよ」

ミハエルは、端末のキーを叩き続けた。

次の瞬間、グラムが叫んだ。

「エステル！ コクピットハッチを開ける！ 博士を連れ戻す！」

「駄目です！ 外部からロックされています！」

グラムの顔が、絶望に塗り潰される。

彼はシートに寄り掛かり、呟くようにミハエルに言う。

「なぜ…そこまでするのですか…私をコクピットの中に閉じ込めてまで…なぜそこまでして…」

ミハエルは非常に落ち着いた口調で彼に答えた。

「これは私の“贖罪”だからだ。『目には目を。歯には歯を。魂には魂を』。これが私のしてきた事の唯一の購い…そして、彼等に対する犠牲いけにえだからだ。見える…見えるぞ…ミラーズ君…皆の笑顔が…希望が…君は皆の希望だ…」

プログラムのインストールが完了した。

「プログラム、ダウンロード完了しました」

「博士！！」

叫ぶグラム。

ミハエルは最後にこう言った。

「希望はいいものだよ…ミラーズ君…多分最高の物だ…良い物は決して滅びない…」

次の瞬間、ソルジャーの放った幾つものミサイルとビームが、ハンガーに降り注いだ。

爆音と共に、凄まじい炎に包まれる施設。

グレンの持っていた通信機が、耳を裂くようなノイズと共に切れた。

「そんな…先生…そんなの…」

彼女は繰り返し呟く。

「違うよね…電波が…電波が切れたただけだよ…だって、先生が…」

先生が…」

通信機が機内の床に落ちた。

「先生…先生…！ 先生ー！！」

ハンガーが、ソルジャーの放った攻撃によって碎け散り、そして爆ぜた。

紅蓮の炎は瞬く間に燃え広がり、周囲を舐め尽くす。

その炎を、黒い影が切り裂いた。

炎を突き破るリセツツクロウ。

黒い機体が空中から群れの前に着地する。

頭を垂れるリセツツクロウ。

グラムが、狭いコクピットの中で呟いた。

「博士…あなたは父のようだった…あなたが、私を諭してくれた時…私は嬉しかった…そんなあなたが…たとえあなたが奴らを創ったとしても、あなたが死ぬ必要は無かった筈だ…！」

エステルがグラムに問う。

「泣いているんですか…？ 大佐…？」

グラムは答えた。

「泣いて彼が戻るなら、私は身が枯れる泣こう…しかし博士は…」

彼は奥歯を噛み締め、もたげていた頭を振り起こした。

「エステル…！私は兵士としてではなく、一人の機甲体術術者として闘う！」

リセツツクロウのセンサーアイが、ソルジャーの群れを睨み付ける。

「これは、いかれた狂戦士と…悪魔どもの殺し合いだ！」

そう言っただけでグラムは、リセツツクロウを、ソルジャーの群れの中へまっすぐ突撃させた。

いつか必ず、大佐みたいなすごい人になるのが夢だった。大佐みたいな“英雄”に…

「本当に宜しいのですか？避難なならないで…」

水蘭の、狭いコクピットの中で過ごす二人だけの時間。

今、このハンガーには、一刃と春雪の二人以外、誰もいない。

“翼”をもちがれた水蘭は、大きな傷を負ってなお、その機能を失ってはいなかった。

「ねえ春雪…ヴァリアントと戦って死んだら、英雄になれるのかなあ…」

「若…様…？」

「正直僕は、自分が今まで何をやってきて、何処に居るのか分からなくなってきた…でもさつき、大佐の目を見た時解ったんだ。『僕は今、戦争の中に居る』って…だから僕は逃げないよ。戦って戦って…答えを見付けるんだ」

「若様…」

彼は大きく息をつく。

「行こう、春雪……！」

彼はそう言って水蘭の腰に剣を携え、発着場へ続く道路へ機体を位置させる。

「来い、化け物め！ここから先は、一機も通さない！」

彼はそう言って、九十九菊を鞘から抜いた。

グラムの駆る機体は高速で、ソルジャーの群れの中に消えていった。

リセツクロウのコクピット中に、憤怒に満ちた彼の叫び声が響く。

その声に応答するように群がるソルジャーをEPCが一蹴する。

「大佐、水蘭が出撃しました」

「ああ。“見えている”」

「本隊から分化した部隊が、水蘭に向かっていきます。止めなくてもよろしいので？」

彼は答える。

「彼には彼の、戦いがあるのだろう」

彼はそう言いながら、次々に敵機を破壊していく。

次の瞬間、後方に待機していた3機のファットネスが、無数のミサイルを撃ち出した。

「ミサイル接近。数、90」

リセツツクロウへ迫る、大量のミサイル。

それでもグラムは、機体を回避運動へ移さない。

彼はただ黙って、ミサイルの雨へ向かってEPCを連射した。

撃ち出される重力衝撃波。

ミサイルの外殻が、一瞬で歪み、押し潰され、そして炸裂する。

誘爆しあうミサイル。

巨大な炎のカーテンが、群れと黒い機体の間を隔て、空を焦がした。

開放される衝撃波。

彼はリセツツクロウを、その中で躍動させる。

EPCの鉄槌が、真ん中のファットネスを砕いた。

それと同時にグラムは、残る2機のうちの片方につかみ掛かる。

バスターランチャーの砲口を向けるファットネス。

彼はその砲口が光ると同時に、ファットネスの脚を払い、宙に投げた。

逸らされる砲口。

バスターランチャーから放射されたアクティブビームは地面を刳り、側にいたソルジャー数機と、残るファットネスを巻き込み、溶解させる。

投げ飛ばされるファットネス。

グラムは宙に浮くファットネスを、ソルジャーの群れの中に蹴り飛ばし、EPCを連射。

ソルジャーとファットネスのコアを撃ち抜いていく。

「（やはり狙いはこの機体か…）」

彼は叫んだ。

「来い雑魚ども！ 私を倒したければ、艦体種でも連れてこい！」
並み居るソルジャー。

グラムは再びソルジャーの群れの中に機体を実入させた。

「見せてやる…！ 本物の機甲体術を…！」

発砲されるEPC。

彼はその反動を利用して機体を回転させ、接近してきたソルジャーを左拳で粉碎し、逸らされた銃口をそのままに、サイドにいたソルジャーを撃ち砕く。

目にも止まらぬ速さでソルジャーを粉碎していくリセツクロウ。その動きは柔らかくも激しく、まるで巨大な削岩機が岩石を削り取っていくように見える。

「これが人類の力！ 幾世代にも渡って人々が培ってきた、戦うための技術！ 機甲体術内包流派・銃操術！」

…ヒウジ・プーベ（銃人形） …！！

その身に刻み、思い知れ…！
貴様らの罪を…！

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT13 背負い(前書き)

トライアルを襲つヴァリアントにグラムは一人で立ち向かう。

ACT13 背負い

Chapter 1

ソルジャーの首を抜切り、胴を貫き、ナイトの腕を折り、膝を砕き、叩き潰す。

踊るように。流れるように。

ヴァリアントとの熾烈な戦闘。まるでビデオゲームを見ているような、一方的な破壊。

EPCにグラビティーナックル。グラビティードライバーによる、常識を超えた高機動戦闘。

彼はまるで、その戦場に溶け込むかのように闘い続ける。

前方から強烈な閃光。ソルジャーの長射程砲による遠距離砲撃。

彼は、着弾するビーム全てを回避し、EPCを連射。ソルジャーの戦列を蹴散らし、破壊する。

フラッシュ。

敵部隊最奥部に、通常とは異なる高エネルギー反応を感知。

質量、大。

上級機種、「ヴァリアント・ガーズマン」を確認。

戦闘能力、極めて高。

当機「リセツククロウ」との戦闘能力を比較、検証。

結論。

危険は有るものの、戦闘に支障なし。

要因。

パイロットの特異な戦闘能力、グラビティードライバー、EPC、及び最新鋭戦闘ソフトウェア。

「大佐」

「何だ」

「敵部隊最奥部に、ガーズマンを捕捉しました」

「何か問題でも？」

「いえ、何も問題はありません。ただ…」

「ただ…？」

「…いえ…何でもありません」

エステルは心の中で呟いた。

「（あなた本当は泣いているんですね…心の中で泣きながら、必死に涙を堪えて…）」

機体は更に、ヴァリアントの群れの奥へ。

すかさず、5機のソルジャーが高速で接近してくる。

「敵機接近」

「邪魔だッ！」

交差する機体。

ソルジャーが一瞬で鉄屑に変えられる。

部隊最奥部へ突入するリセツクロウ。

機体は更に奥深く。

部隊最奥部、ガーズマンのもとへ。

水蘭からヘルメットを通じて彼の網膜に映し出される風景。

焼けた地面。

依然、群を成す敵。

単機、刀一つと己の技量だけで敵に立ち向かう彼に、仲間からの

援護など存在しない。

独立無援の恐怖。

極度のストレス。

金切り声を上げる神経を、大きな深呼吸で黙らせ、押さえ付ける。それでも軽減できない、生体と精神にのしかかる重圧は、次第に彼の身体機能を蝕んでいく。

上昇する血圧と心拍数。

急性過呼吸症。

民間人…

それもほんの少年で、訓練も何も受けていない普通の人間なら、当たり前的事。

傷だらけの機体。

白兵戦闘のみの水蘭に対し、ミサイルやビームカノン等、満身創痍の機体に加えるには過剰とも言える程の、各種重火器による応報。その攻撃の中でも彼は、数十機のソルジャーと、一機のナイトをたった一人で破壊してきた。

しかし、それもここまでだろう。

「…限界…か…」

膝を突く水蘭。

視界に混じるノイズ。

オーバーヒート寸前のアクチュエーター。

左腕は砕け、装甲の切れ目からあちこちで火花が散っている。

「ダメです、若様！」

彼女の叫ぶ声。

春雪の声が遠のく。

薄れゆく意識。

敵機が接近してくる。

もはや恐怖は感じない。

「ごめん、春雪…所詮…僕の修行不足さ」

一斉に打ち掛かるソルジャー。

温かい液体にたゆたうように、彼はゆっくり目を閉じる。

あれ…？

おかしいな…

なんでこんなに静かなんだろう…

それに…

なんで…

何で僕…

まだ生きているんだろう…？

彼の目に映ったのは、水蘭の目の前に立ち塞がる一機のHMA。
赤銅色の装甲に身を包み、左腕に内蔵型の重火器を。そして右腕
には、巨大なパイルバンカーを装備した、HMA h2カスタムメ
イド機。

「…！ あッ…ああッ!？」

HMAのパイロットが叫ぶ。

「マツスルバスター一番星！ シェーファー02・ロンギマヌス！

一足遅れて登ッ場オ！」

水蘭の前に立ち、大見えを切るビンセントのロンギマヌス。

その周囲には、ソルジャーの残骸が散らばっていた。

「サン…ヘドリン!?でもこの機体は…」

ロンギマヌスから水蘭へ、回線接続。

「おい民間機、乗っているのは誰だ!？」

「え!?! ああッ! はい、僕はこの機体のテストパイロット、菊

地一刃です」

「んげえ！ 若旦那！？」

「その声はやっぱりビンセントさん！？」

ビンセントがコクピットの中でのけ反る。

「確かあなたは死んだって…！」

「そっ！ それには深い訳が…」

「ビ、ビンセントさん！後ろ！」

「ぬっ！？」

ロンギマヌスへ襲い掛かるソルジャー。

その時、一条のビームがソルジャーを貫き、爆ぜた。

「遅えぞ！レイズ！」

ビームランチャーを構え、全身に大量の武器と弾薬を装備した、

レイズのラッシュハードロング。

レイズがぼやく。

「ビンセントさん…何で僕にだけこんなに武器持たせるんですかあ？」

ビンセントは彼に答える。

「俺はスマートなのがいいの！」

「まったく…勝手な事はつかり言わないで下さい…よっ！」

レイズは、ビームランチャーを100mmガトリングに持ち変えると、それをソルジャーの群れの中に斉射した。

爆炎が飛び散り、噴煙が巻き上がる。

「緊急指令で、すっ飛んで来てみりゃあ、もうこんな状態になってやがる…まあその為の“俺達”なんだけだよ…」

ビンセントはそう言って、マシンカノンのマガジンを換えた。

「若旦那、これからは“俺達”の仕事だ！ 若旦那には悪いが、後は任せてもらっぜ！」

スラスターを吹かし、ロンギマヌスが地面から浮く。

「ビンセントさん！」

一刃がビンセントを呼び止める。

「ん？」

「御武運を！」

ロンギマヌスが、水蘭に向かって親指を立て、ホバー走行へ移った。

ラッシュハードロングの横に立つロンギマヌス。

彼はメインスラスターのノズルを絞り、パワーを溜め込む。

レイズがビンセントに問う。

「お知り合いだったんですか？」

彼が答える。

「仕事でちよつとな」

無線をサンヘドリン本部へ。

「本部、情報にあつた試験機を保護した。これより敵部隊の殲滅に入る！」

ビンセントが咆る。

「行くぜえ！ レイズ！」

「了解！」

メインスラスターが、莫大な推力を開放し、ロンギマヌスを凄まじい速度で押し出す。

機体はソルジャーの群れの中へ、真っ直ぐ向かって行った。

Chapter 2

部隊最奥部のガーズマンに近付くにつれて、更に熾烈を極めていく敵の攻撃。

グラムは、今起きている戦闘に全神経を集中させている。それ以外に、注意を割く余裕も必要も無い。

突然彼は、自分が敵の射線上にいる事を感じ、機体を大きく機動

させる。

「1時方向から高エネルギー反応」

巨大なビームが、機体を擦過する。

重力壁を擦過面の一点へ。

巨大なビームパルスから機体を守る。

並の機体ならば、側を通過しただけで装甲が焼け焦げるほどの大出力ビーム。

ガーズマンが放った、ポジトロンビームカノン。

光条が通過し、遙か後方で巨大な火球が咲く。

彼は機体を大きくライドさせ、EPCを連射。

突然、ナイトやソルジャー達が、ガーズマンの前に踊り出て盾になる。

ガーズマンがミサイルを放った。

「ミサイル接近、数20。シグネチャホーミングです」

20基の誘導弾が、尾を曳きながら高速で機動する。

即座に回避運動へ移るリセツクロウ。

後退と前進、スラスターを駆使したサイドステップを繰り返し、

ミサイルの射線を回避。

機体は鋭角な軌道を描きながら、EPCでミサイルを撃ち落とすていく。

爆炎が散り、炎が空気を焦がす。

次の瞬間、数発のミサイルが、EPCの目の前で炸裂。

彼は咄嗟に銃口を引き戻し、左前腕に展開した重力壁で防御する。

「EPCを狙ってきたか…！」

エステルが、彼の脳波に異変を感じ取る。

冷静だが、脳の深層域が活発に活動している。

宇宙が…

因果律が、彼の脳に流れ込んでいる。

熱く…激しく…

こんな事はあの時以来…

そう…

セカンドムーブの時以来…

「大佐？」

「行くぞ。エステル」

リセツツククロウが、高速で機動する。

双方、全力を賭けた最後の衝突。

グラムは機体の左手を強く握り締め、腕を引く。

襲い掛かるソルジャーの群れ。

ソルジャーが、一斉にビームカノンを放つ。

刹那、リセツツククロウ周囲の空間が陽炎のように歪み、次の瞬間、背後の地面が陥没。

同時に、リセツツククロウは100メートル近くを一瞬で移動。

ビームカノンの光条は霧散し、ソルジャーが跡形もなく蒸発する。

彼は右腕に持ったEPCを、ガーズマンに向けた。

ガーズマン。

それはヴァリアントスの近衛兵だ。

その姿は大軀であり、躯体は堅固。

右手に持つポジトロンガンブレードは、一薙ぎで機動装甲数機を打ち砕き、艦を沈め落とす。

その前に立ちながらも、彼の指はトリガーに掛けられたまま、引かれていない。

ガーズマンからの攻撃も無い。

完全に見合っている。

声が聞こえる。

聞き覚えのある、威圧的な声。

生き残った機体のセンサー全てと、彼自身へ送られる圧縮通信情報。

それが今、声となって、彼らに届いている。

「久しいな、我が兄弟」

「貴様か…」

「私の指揮する部隊を破り、ガーズマンの前に立った…よくそこま
で戦えるものだ。敵ながら感服する」

「戦っているのは私だけじゃない。それに、私を“兄弟”と呼ぶの
はやめてもらおう」

笑い声。

「何を言うのかと思えば滑稽な…私とお前は“兄弟”…いや…私は
お前、お前は私だ」

「貴様こそ何を言っている。私とお前に何の関わりが有ると言うの
だ」

「貴様は知らないだろう。作られた記憶、人生。偽物の生を生きる
お前には、理解できないだろう」

「黙れ。早くこの機体から出る」

「私はお前を知っている。そしてお前も、私を知っている筈だ。目
を開いて見る。真理を聞け。真実を知れ」

グラムは強く答える。

「私はお前など知らない！」

彼は構えていたEPCのトリガーを引いた。

ガーズマンは、その攻撃を軽やかに回避する。

「来い、戦い方を教えてやる」

挑発する“声”。

ガーズマンが、その手に持つ巨大なガンブレードから陽電子砲を
放つ。

それを回避するグラム。

彼はEPCを撃った。

ガーズマンは、再びその攻撃を回避する。

「どうした、我が兄弟。的は大きいぞ。コアを撃ち抜け。捕まえて
みる。その手でこの身を引き裂いてみせろ」

「心配するな。今そうしてやる」

彼はEPCを連射しながら、ガーズマンへ接近した。

ガイズマンが、腕部に内蔵されたビームカノンを撃つ。
機体を掠めるビーム。

グラムは、EPCをガイズマンに突き付けた。

「終わりだ」

「まだだ。まだ終わらん」

トリガーが引かれる寸前、ガイズマンのミサイルが二機の間で爆
ぜる。

弾き飛ばされるリセツクロウ。

次の瞬間、ガイズマンのガンブレードが煌めいた。

両断されるEPC。

リセツクロウのそれと比べて、倍以上はあるガイズマンの巨大
な拳が、コクピットへ迫った。

彼は両手を重ね、重力壁を掌に展開して、それをガードする。

大きな衝突音。

突き飛ばされるリセツクロウ。

機体の脚が、地面を剋る。

「この動きは…機甲体術！」

グラムの表情が凍り付く。

ヴァリアントが、機甲体術を使っている。

何故？

そう思うもつかの間、ガイズマンがビームカノンを連射した。

GRASを全力で展開する。

着弾するビーム。

爆炎が、リセツクロウを覆い隠す。

グラムは、胸のビームカノンを撃ち返した。

ビームが、ガイズマンに命中する。

連射されるビームカノン。

その光条は全て、ガイズマンの装甲表面で霧散した。

「…空間圧縮による空間断層…！」

エステルが答える。

「EPCでなければ貫通出来ません！」

声が彼に言う。

「武器を失った今、お前は私に勝つ事はできない。お前は物理的にも、精神的にも弱い」

「くっ！」

ガーズマンはガンブレードをグラムに向けた。

「貴様は、この戦いから身を退くべきだ。貴様に、人類を護る事など出来ん！」

「黙れえ！」

彼はグラビティナックルで、ガーズマンのブレードを砕いた。

「まだ抗うか……」

「幾らでも！」

グラムは、グラビティドライバーによって拳速を高めた右上段突きを繰り出した。

しかしガーズマンは、いとも簡単に、その拳を受け流し右腕を掴む。

「なに……!?!」

「踏み込みが甘い」

「くっ！」

グラムが、ガーズマンから離れた。

一方ガーズマンは、離れたリセツククローウから距離が開かないように、素早く歩み寄る。

両手を構えるグラム。

対するガーズマンは、リセツククローウの左腕を上方に打ち払い、右腕を掴んで引きながら、肘打ちを打ち込んだ。

「くそ……！何故だ！なぜ貴様が機甲体術を使える！」

よろけるリセツククローウ。

ガーズマンの目がリセツククローウを見下ろす。

「（流石は我が兄弟……直撃している様に見えていても、しっかりと重力壁でガードしている……長引けば、こちらが不利だ……!）」

ガーズマンが両手を胸の前に構えた。

「私が、お前を開放してやるう！」

ガーズマンの右脚が、地面を捕らえ踏み込む。

「機甲体術奥義……！」

スラストアーを噴射。

巨大な二枚の掌は、ガーズマンの全質量を受け、前に打ち出される。

「ツヴァイス・カノーネ（二連掌砲）……！」

二枚の掌はリセツツクロウの胴体を捉え、大きく弾き飛ばした。

機体が、弓なりに跳ねる。

グラムは心の中で呟いた。

弱い……

全く……全く彼の言う通りだ……

私は誰も護れなかった……

目の前に居る……

手の届く人間さえ護れなかった……

そしてその“心”さえも……

私は何の為に戦ってきたのだろう……

一体誰の為に……

『そして樹は、物質としての束縛を少しずつ断ちきり、自らの姿を自由に変えていく……』

博士……

私は……

『希望はいいものだよ……ミラーズ君……多分最高の物だ……良い物は決して滅びない……』

グラムの脳裏に浮かぶ顔。

グレンの笑顔…

エステルの微笑み…

皆の姿…

そうだ…

私が背負い護っている物…

それは何とはかなく、尊いのだろう…！

リセツツクロウが立ち上がる。

両足でしっかりと地面を捕らえて。

「なるほど…機体前面に集中させた重力壁で、大地の反発力を中和したか。しかしそれで機体とイクサミコは護れても、パイロットは相当なダメージを喰らうはずだ」

グラムが血を吐いた。

「グラム…！」

エステルが叫ぶ。

それでも彼は、逃げようとはしなかった。

「確かに私は弱いかも知れない…人類など護れないかもしれない…でももしそうなら…私は幾らでも強くなってみせる！ 強くなってみせてみせる！ 私はまだ生きている！ 人は生きている限り、負けではないッ！」

グラムはもう一度両手を構えた。

右手を強く握り締め腰まで引き、左掌を突き出す。

「（構えが変わった…！？）」

「来い…！」

「ハッターは効かん！」

ガースマンはスラスターを吹かし、リセツツクロウへ肉薄した。

「行くぞ！ 機甲体術奥義…ファウスト・ゲベリア（正拳砲打）！」

！
「ガーズマンから打ち出された正拳が、空気の壁を突き破ってリセツククロウに迫る。」

「（この打法は全身の捻りとインバースキネマティクスを駆使した亜音速拳！決まった！）」

しかしグラムはその瞬間、リセツククロウの左掌をそつと横に傾けた。

そしてその掌に沿って右腕を滑らせる。

その時突然、拳は凄まじいスピードで打ち出され、ガーズマンの拳を粉々に打ち砕いた。

「な、なに！？」

ガーズマンが、砕けた右腕の破片を撒き散らしながら大きく弾き飛ばされる。

着地するガーズマン。

脚が地面を剋る。

「貴様、その技は……」

グラムが口を開いた。

「ただ、フレズベルグの真似をしてみただけだ」

「右腕と左掌との間に重力場を展開させたか。なるほど、双方の重力場は互いに反発しあい、右腕を凄まじいトルクとスピードで打ち出す即席のグラビティレールガンと化す。名を付けるとすれば“アルティメット・ピアッサー（絶対貫通徹甲打）”といったところか……。だが！」

ガーズマンが、残った左腕で殴り掛かる。

「技の一つ増えたところで！」
迫る正拳。

しかしグラムはそれをいとも簡単に回避。

右手でガーズマンの指先を掴み、左手を肘に当てて捻り上げる。
「踏み込みが甘い」

ガーズマンの間接が軋みだす。

「いかに圧縮空間による空間断層があるとしても、関節構造を硬質化出来る訳じゃない！」

グラムは、リセツツクロウ全身のスラスターを吹かし、機体ごとガーズマンの腕を回転させた。

「ぐおっ！」

ガーズマンの腕が抜切れる。

リセツツクロウはそのままガーズマンにドロップキック。

ガーズマンがよろける。

「貴様あ……」

「たとえお前が私の事を知っているとしても、私はお前の事を知らない。そして今の私は、お前の知っているグラム＝ミラーズではないッ！！」

グラムはリセツツクロウをガーズマンへ突撃させた。

ミサイルを放つガーズマン。

グラムはそれを、胸のビームカノンで撃ち落とした。

「私は貴様らが奪っていった物をすべて取り戻す！　そして貴様だけは、この手で必ず倒すッ！」

リセツツクロウの左掌底が、ガーズマンの胸に直撃する。

「（くっ！　圧縮空間に膨大な重力波を注ぎ込んでいる！　重力崩壊を起こす気か！）」

グラムはリセツツクロウの右腕を振り上げた。

「消える！！　原子の藻屑と成り果てて！！」

振り上げた右腕はそのまま左手の甲を叩いた。

右手から打ち込まれた重力波は左手を砕き、そして、先に打ち込まれた重力を一気に崩壊させる。

崩壊した重力場は、周囲に飛び散り、拡散するが、圧縮空間の内壁に当たり反射。

反射した重力場は発生地点で互いにぶつかり合い再び反射し、周囲の空間を吹き飛ばす。

そう、重力崩壊とは、超新星爆発と同義なのだ。

間近で見る、よく訓練された兵士の戦いとはなんと力強く、なんと精練されていることが。

自分にとってはあまりにも強大だった敵戦力が、電光石火の如く勢いで、さくりさくりと削られていく。

剣に勤しんだ自分の半生。

その全てを否定されているような、空虚感。

それはあまりにも大きく、広い空洞。

ソルジャーの最後の一機が、ロンギマヌスのパイルバンカーに貫かれた。

「こちら02、敵殲滅完了」

「こちら01、敵性反応無し。殲滅完了確認」

「よっしゃ。終わったぜ？若旦那」

ロンギマヌスが、水蘭に振り向く。

すると水蘭は、ゆっくりと立ち上がった。

「春雪：セルフチェックは終わったね？」

「はい。ビーム兵器に当てられていたセンサー類の回復、及び駆動系の再調整も完了しました」

「よし……」

水蘭はロンギマヌスに背を向けた。

「おい、どこへ行く？」

「大佐は一人で戦っています！大佐を助けに行かなきゃ！」

一刃はそう言うと、水蘭を駆り出した。

「おい、若旦那！…レイズ！あと頼む！」

「ちよつと、ビンセントさん！？」

ビンセントは水蘭の後を追う。

一刃は心の中で叫び続ける。

「（大佐！大佐！大佐！あなたは僕の理想だった！僕の目標だった！あなたのようになりたかった！でもそれは出来ない…！出来ないけど、出来る限り近付こうとした！それなのに…それなのに…もしあなたが死んでしまったら、僕は一体…！）」

一刃は機体を止めた。

立ち込める黒煙。

あちこちで燃え上がる炎。

彼の周囲には、ヴァリアントの残骸が散らばっていた。

その中心には、巨大なクレーター。

水蘭の後ろにロンギマヌスが立った。

「わかつただろ？若旦那」

「ビンセントさん…これは一体…？」

ビンセントが大きく息を吐く。

「『奴が戦場に降り立てば、そこには炎が降り注ぐ。天の火に非ず。それ全て、地獄の炎』…」

「地獄の炎…」

「だから奴は…グラムはこう呼ばれるようになった…ヘルファイヤ
ー・グラム（業火のグラム）とね…」

一刃は思わず息を飲んだ。

これが大佐の力…

地獄の炎を身に纏い、近づく物全てを焼き尽くす、憤怒の業火…
何か近付いてくる…

恐ろしい程の殺気に満ちた、黒い機動装甲。

「大…佐…？」

水蘭の目の前に、リセットクローが立った。

その右手には、ガーズマンの頭部があった。

リセツツクロウが、水蘭の横を通り過ぎる。

「大佐、あの…敵部隊は…？」

リセツツクロウが立ち止まる。

グラムは答えた。

「皆殺しにした」

一刃の背中に寒気が走る。

違う…！

あれは大佐じゃない！

あれは正しく…

地獄の炎　！！

立ち去っていくグラム。

誰も彼を、呼び止める事は出来なかった。

Chapter 3

「ジエネシツク・インダストリー本社、特別室室長室」

深い暗闇がある。

全てを覆い隠すような深い暗闇が。

闇の中に一つの光がある。

その光の中に佇んでいる彼は、大きな背もたれのある豪華な革張りの椅子に深く腰掛け、脚を組みながら静かな様子で待っている。

静かに、待ち焦がれるように。

突然、部屋の扉が開いた。

「失礼します。チーフ」

彼の秘書、エヴァが部屋へ踏み入る。

「チーフ、駐屯地にヴァリアントが出現しました」

口元にうつすらと笑みを浮かべるロイ。

「それで？」

彼女は答える。

「我が社のトライアル用機体、リセツククロウにグラムⅡミラーズ大佐が搭乗。これと交戦・殲滅した模様…ただ…」

「ただ？」

「その際、開発一課主任・ミハエルⅡセルベトウス博士がヴァリアントによる攻撃で死亡しました」

ロイが、口の端を持ち上げてゆっくり微笑んだ。

「やはり…天は我々の味方だ…我々が手を下すまでもなく、運命は自然と流れる…」

不安そうな面持ちで彼を見つめるエヴァに、ロイは答える。

「そうだな…エヴァ…君にもそろそろ知っておいてもらおう…」

彼は、真剣な眼差しで彼女の顔を見つめると、ゆっくり口を開いた。

「この世界は腐っている。古い体制、古い民、軍、経済、思想、宗教…その全てが、腐敗した油膜となって世界を押さえ付けている。

だが今、世界は私の手で変わろうとしている。古い外皮を脱ぎ捨て、新たな段階…新たな階層へとシフトしようとしている。私は、その障害を取り除いているだけだ」

「障害を…取り除く…？」

「そう…成長には痛みを伴う。もちろん流血もね…」

「あなたは一体…何をなさるおつもりなのですか？」

「言っただろう？ 障害を取り除くとね…」

彼女の表情が凍った。

「チーフ…あなたはまさか…！」

クーデター。

彼女の脳裏にはこの言葉が浮かんだ。

「危険過ぎます！　いかにあなたがお持ちの私設兵団が精鋭部隊でも、統合体と戦うには戦力が…」

「戦力が…？」

ロイが、低い笑い声を漏らした。

「戦力…か…確かに今の統合体…それも中央軍に戦いを挑むなど自殺行為だ…」

「……………」

「…強いて言うなら、神の力…真の義と平和と安全の守護神…」

…デイカイオス！！

「デイカイオスの力は、神に等しい。地上の…それも薄っぺらな協定で成り立っている軍など無力…あえて言おう…カスであるかね…」

「しかし…デイカイオス一機では戦略的に無理があります…！それに、デイカイオスを略奪するなど、不可能では？」

彼は答える。

「あるだろう？　それを可能にする神の力が…」

「まさか…！」

「“機動兵器端末群超広域戦闘指揮・支援同時遂行用虚数因果律総括通信回路網機構”…デイカイオス・システムが…！」

「そんな…まさか…！　デイカイオス・システムはヴァリアントからの教訓で、デイカイオス　エイレーネには組み込まれなかった筈では…！」

ロイが、笑いながら彼女に言う。

「父は私に、偉大な遺産を遺してくれた。この手には余る遺産をね…そう…組み込まれていたのだよ…システムは…ヴァリアントと同じ、機動端末兵器システムがね。元を正せば当然な事…デイカイ

オスもヴァリアントも、作った人間は同じ…つまり、ヴァリアントとディカイオスは生き写しの双子なのだから…そして今日…その事実を知る最後の一人が死んだ。これで真実は闇の中…端末機も無事…しかし…ヴァリアントは革命の邪魔…つまりはこれからも、サンヘドリン…そしてミラーズ大佐には戦い続けてもらわねばならない…それまでには、こちらの準備が全て調う…システムを我が手に納める手筈もね…時が来れば、略奪などする必要も無い…」

彼は大きく息を吐いた。

「運命は自分の手で開くもの…しかし、宿命は…いや…宿命さえも、我らの味方…こっちへおいでエヴァ…」

エヴァが、彼の側へ歩み寄る。

ロイは彼女の腰に手を回し、彼女の身体を引き寄せる。

彼が、彼女の耳元で囁く。

「僕の好きな言葉を知っているかい…？エヴァ…」

彼女は答える。

「新しい葡萄酒は…新しい革袋に…」

「覚えていてくれたんだね…」

ロイはそう言うと、彼女と唇を重ねた。

彼は心の中で呟く。

神は言われた…

“光在れ”と…

ならば私はもう一度光を創る…

この手で…

もう一度…！

世界はそれを待っている。

「3月15日、サンヘドリン本部特別軍事査問委員会」

「もう一度聞く、ミラーズ大佐。ヴァリアントは貴官が殲滅したのだな？」

彼は、並み居る委員会の将官達に答えた。

「はい。ヴァリアントは私が殲滅しました」

将官の一人が彼に言う。

「いいかね？ミラーズ大佐。問題なのは、中央軍の駐屯地にヴァリアントスの侵攻を許した事だ」

「これでは中央軍のお偉方に顔が立たん！」

「しかもこの戦闘には、民間人まで参加したと聞いている」

「やはり対ヴァ戦力を集中させるのは……」

ぼんやりと遠くを見つめるグラムの瞳。

ガルスは心の中で呟いた。

「（何があつた…グラム…何があつたと言つのだ…今のお前の、まるで世界で自分だけが取り残されているような目…お前の目は、また昔のそれに戻ってしまった…暗く、哀しい、何かを恐れた目に…）」

彼女はただ呆然と、その前に立っていた。

彼の名が刻まれた真新しい墓石。ミハエルセルベトウスの眠る
霊廟の前で。

「なんで…こうなっちゃうのかなあ…」

グレンがぼつりと呟いた。

「博士は何も悪くないのに…天に誓って何も恥ずべき事の無い人だ
つたのに…先生の知識も、もっと教えて欲しかった…お母さんの事
も、先生自身の事も…もっと知りたかったのに…！ねえ、エステル
！どうして？どうしてこうなってしまったの！？教えて…エステル
…」

彼女は側に付き添っていたエステルに縋り付き、そう叫んだ。

エステルは彼女に答える。

「私にも…分かりません…ただ…大事な人を失う気持ちは、私にも
分かりますよ…」

グレンが声を張り上げた。

「…エステルに…私の気持ちの何がわかるって言うのよ！ あなた
には大佐が居るけど、私には何も無いの！ 何も無いのよ…」

「グレン、私は…！」

「それでも私は大佐を信じてた…信じてたのに…！ こんなに辛い
想いをするなら…最初から信じなければよかった！」

突然、曇った空の下に、乾いた音が響いた。

エステルが、グレンの頬を叩いた。

「…私はあなたではありませんから…あなたの気持ちはわからない
かも知れませんが…でも…人を信じる気持ちが無ければ、人間は生き
て行けないんです…！」

グレンは自分の頬を摩りながら、顔を俯かせる。

「痛い…痛いよ…エステル…」

エステルがグレンの肩を抱きしめた。

「私も痛い…でも大佐はもっと痛いんです…。気付いていますか？
グレン…、私が今抱いているあなたの身体…そして私たちの足元
に広がって、続いている無限の大地…これが、彼の背負っているも

のなんです…彼はただ一人で、こんなにも重いくびきを背負っているんです…彼は今まで、幾つもの命をその手で受け止めようとした…でもその度にその命は、彼の指を摺り抜けてしまう…その命こそが、ここに眠る英霊たちなんです…」

グレンは静かな様子でエステルに言った。

「わかつてる…わかつてるの…エステル…でも…頭でわかつていても、私の心は理解できない…！ このままじゃ私…私…大佐に酷い事を言ってしまう！」

彼女はエステルの腕を振りほどいた。

「だから私…もう大佐やエステルとは一緒にいけない…」

彼女がそう言ったその時、空から雨が降り出した。

降りしきる雨の中、二人は傘もささずに立っている。

「グレン、大佐は…」

躊躇うエステル。

髪を解いたグレンの姿が別人のように見えて、エステルは思わず言葉を飲み込んだ。

「さようなら…」

グレンはただそう言い残し、その場を去って行った。

強くなる雨足。

エステルは何も出来ずにただ、彼女の背中を見つめた。

無言と思考の停止。これしか無かった。

降りしきる雨の中、中央広場のベンチにただ座るだけの彼には、
考えてもしようがない事だった。

今まで何度も考えた事だったが、その度に答えは見つからなかつたからだ。

「大佐…」

声が聞こえる。

彼を呼ぶエステルの方が。

彼は振り向かない。

ただ黙ったまま俯いている。

二人の肩を打つ大きな雨粒が、服を伝いながら染み込んでいく。

返す言葉など無い。

言葉など…

私はいつの間にか、言葉など信じなくなつた。

正確には、『人間らしい“気持ち”』と言う物を…

“気持ち”が無ければ…

感じなければ、傷付く事がないから。

“ヴァリアンタス”と、それを破壊する事を目的に組織された“サンヘドリン”とそのシステム。

その力、“デイカイオス”。

私は“人”ではなく、デイカイオスの部品になる。

“グラム”“ミラーズ”と言う名の生体部品に…

それなのに…

なぜ…

彼女はもう一度彼に言う。

「戻りましょう、大佐…」

彼はやっと、その顔を上げた。

「風邪ひきますよ…？」

そう言う彼女の頬には、彼女自身の髪が張り付き、その肩は小刻

みに震えている。

私のイクサミコ…

いや…私の半身、エステル…

私はどうしたらいい？

私は一体何をすればいい？

何を想い、何を目指せばいい？

私の背負っている物は、重過ぎる…

どうすれば強くなれる？

心も身体も…

「大佐…？」

「助けてくれ…エステル…」

彼はベンチから立ち上がり、エステルの肩を強く抱きしめた。

痛いほど…

彼の鼓動が直接伝わる程に…

「何回…こんな思いをすればいいのでしょうか…？ 私達は…」

エステルはそう言って、グラムの背中に腕を回し、彼の身体を優しく抱いた。

Chapter 4

いつもより空気が冷たく感じる。

白いクロスが貼られた壁に四方を囲まれた寝室。

そこに一人。

昨日の夕方から降っていた雨は、今もまだ降っている。

肌を寄せ合い、傷を舐めあい、慰めあっても、心の隙間は埋まらなかった。

「大佐」

枕元に置かれたインターホンのスピーカーから、時間を知らせるエステルの無色な声が響く。

彼は無言のままベッドを出た。

前だけを見て、足早に歩く。

「…それで？」

グラムは後ろからついて歩くエステルに問う。

「ガルス司令からの御命令です。拘束拘留中のキクチ金属工業試作機パイロット・菊地一刃の取り調べに参加せよとの事で…」

エステルが立ち止まり、彼の背中を視線でなぞる。

彼の首筋から肩口、そして背中へ。

「どうした？」

グラムが横目で振り返る。

「いえ…」

エステルは再び言葉を続ける。

「対象者は黙秘を続けています」

「なぜ」

「不明です。ただ、大佐に会わせると言い続けているそうです…」

「それで結局妥協したと…?」

取り調べ室の前で止まる。

グラムは大きく息を吐いた。

「しょうがない…給料分は付き合おう」

彼は扉を開けた。

ふと振り返ると、私と先生が一緒に居た時間なんて、とても短かったのかもしれない。

本当は先生の事なんか何も知らなくて、私が勝手に付き纏っていただけかもしれない。

きつとそれと同じなんだ。

私と“大佐”って…

私は、彼の事を何も知らないし、彼も、私の事を知っている訳が無い。

それでも大佐は、私達の事を護ってくれている。

いや、きつと…

きつと、名も知らない大勢の命をも…

でも…

彼だけは…

先生だけは失いたくなかった…

「おい！お嬢ちゃん！」

突然、術長の声が耳元で響いた。

「わっ！術長さん？」

「さつきから呼んでるのによう。大丈夫かい？」

椅子に座るグレンを、心配そうな表情で見下ろす術長に、彼女は少々驚いた様子で答える。

「え？ ええ…大丈夫ですよ？」

術長が彼女に問う。

「電算室、まだ使つかい？」

「あ……」

彼女が操作するコンピューター画面には、入力し途中の数式が映っている。

術長は大きなため息をついてから、彼女に言った。

「無理すんなよ……お嬢ちゃん。しばらく休みな」

「無理なんかしてませんよ？ 全然、大丈夫！」

「お嬢ちゃん……」

「だから、大丈夫ですってば！元気元気！」

「ああ！分かった分かった！分かったから泣くな！」

「え……？」

突然、慌てたように言葉を取り繕う術長。

グレンは自分の目元を指でなぞった。

指先に濡れる感触。

「あれ？なんでかな？どうしてだろ……ごめんなさい……ちょっと、失礼しますね……！」

彼女は急いで電算室を飛び出すと、レストルームに駆け込んだ。

洗面台の鏡の前、両手で自分の顔を覆うグレン。

突然、レストルームの中に、綺麗な鼻唄が響いた。

彼女はそつと振り向く。

するとそこには、一人の女医が立っていた。

「エビング博士……」

「あら？お久しぶりねえ……グレンちゃん。お邪魔だったかしら……？」

「あ……いえ……」

ハンカチで目元を拭ってから大きく息を吸って、呼吸を整える。

「ごめんなさい……博士……すぐ出て行きます……」

「ちよつと、待って。グレンちゃん！」

グレンがドアノブに手を掛けようとしたその時、エレナは彼女の後を追うように踵を返し、グレンを呼び止めた。

グレンは足を止めて、彼女の方に振り返る。

「は、はい……？」

「お急ぎ？」

「いいえ…特には…」

「ねえ、久しぶりに会ったんだし…」

指先で自分の唇をなぞるエレナ。

よく見れば、彼女の白い指が、ルージュの上を艶かしく滑っている。

グレンはあの時と同じ寒気を背中に感じた。

「エ、エビング博士…？」

「私…グレンちゃんとシたいな…」

グレンの背中に、最大級の寒気が走った。

「え…？ ちょっとそれは…私も博士も女性同士ですし…私にその趣味は…」

狼狽するグレン。

そんな彼女を尻目に、エレナは悪戯な笑みをこぼしてグレンに言う。

「嫌ね、勘違いしちゃって…お茶よ、お茶。少しお話ししない？」

ちよつど美味しいケーキもあるんだけど…？」

「え？ お茶？」

エレナはグレンに優しく微笑んだ。

「正直、本当に来てくれるとは思っていませんでした」

グラムとの間に金属製の机を挟んで座る彼は、グラムの表情を伺

いながらそう言った。

「本来、私が必要など無い。言いたい事が有るなら、手短に願おう」

「もう一度、会いたかったと言うのはダメですか？それに、聞いたのはあなた達の方でしょう…？」

不機嫌なグラムに、一刃の極めて冷静な答えが返って来る。

「元々、こんな取り調べ自体がナンセンスだ。聞く事など何も無い筈なのに」

「おしゃべりは嫌いじゃないです」

この少年は何を言っているんだ？

全く意図が掴めない。

グラムは彼に問う。

「何故出撃た？」

「え？」

「死ぬかも知れないと分かっていたのか？」

「それはもちろん分かっていました」

「怖くなかったのか？死ぬのが…」

彼は一瞬の間を空けてから、グラムに答えた。

「怖かったですよ？死ぬ程怖かったです」

「なら何故？軍人でもないのに」

「…何故…でしょう？ただ、我慢が出来なかった」

「我慢？」

「戦う力を持っていながら、それを使わない事が…戦いに出れば、自分は死ぬかも知れません。でも、自分が戦いに出なければ、他の誰かが死ぬ。軍人さんはそう思いながら戦っていると、僕は思っています」

「民間人…」

「ええ。僕はただの民間人です。だから、最後まで戦えなかった。

民間人の僕に、戦場で戦う術は持ち合わせていないから…」

「軍人になれば、最後まで戦えるか？」

「僕はそう信じています」

「死ぬ目を見るぞ？ 死は全てを失う…自分が死ななくても。友も、愛する人間もだ」

「大佐は、失った事がありますか？大切な人を…」

「ああ…多分ある」

「でも僕は戦いたい」

「なんの為に？ 人類の為？ 正義の為？」

「そんな大層な物じゃありません。僕力なんてちっぽけな物…ただ僕は、自分の瞳に映る人くらいは、自分で守りたいから…」

グラムは短く息を吸った。

「自分で守る…か…」

彼は一刃の瞳を見つめ、彼に問う。

「軍人なら最後まで戦える。おまえはさっきそう言ったな？」

「はい」

「なら一刃、軍に來い。お前がその気なら、戦い方を教えてやる」
グラムはそう言って席を立った。

「話は終わりか？」

「はい、大佐。ありがとうございます」
背を向けるグラムを一刃が呼び止める。

彼はグラムに言った。

「その人の事、今も覚えていますか？」

足を止めるグラム。

彼は振り返る事無く、部屋を後にした。

「ごめんなさいね。散らかってて…」

医務室奥にある自分の執務室に、エレナはグレンを招き入れた。そこは10畳程の広さがある非常にシンプルな部屋で、デスクの上には幾つもの書類が積み重ねられている。

部屋の隅には木製の猫足テーブルと、布製のソファが置かれていた。

これは彼女の趣味だろう。

「忙しいかつたんじゃ…?」

気を使うグレンにエレナが微笑む。

「今お茶入れるから、掛けて待ってて」

「ええ…」

しばらく部屋を見回す。

仕事でしか使わないにしても、あまりにも生活臭のない、ある意味、非常に無機質と言える室内。

奥ではエレナが、給湯室で湯を沸かしている。

ふと彼女は、デスクの上に何かを見つけた。

ガラス板と金属製のプレート二枚で構成されたモダンなデザインの写真立て。

その写真立ては、肝心な写真が見えないように伏せてあった。好奇心に駆られるグレン。

その写真立てに、彼女はそつと手を伸ばす。

そこに写っていたのは見慣れた男性とエレナの姿だった。

「だめよ、悪戯は…」

突然エレナの横顔が、グレンの後から現れる。

「エ、エビング博士…?」

「エレナ…でいいわよ」

彼女の背中に追い被さるように、エレナは身体を寄せてくる。

「それじゃあ…あの…エレナさん…」

「なあに？」

グレンの腰を、慣れた手つきで撫でるエレナ。
身体を強張らせるグレンの耳に、彼女の湿った吐息がかかる。

「あ、あの……」

「あなた……その趣味は無いつて言ったわよねえ……」

「え……？ええ……」

「じゃあ私が……その趣味にさせてあげようかしら……」

「え……？」

グレンの心臓が、まるでエンジンのように早くなる。

顔が紅葉し、今にも倒れてしまいそうな彼女に、唇を寄せていくエレナ。

腰をなでる手の小指がスカートの裾に掛かり、するするとめくつてゆく。

グレンは心の中で叫んだ。

「（ああ！ どうしよう……！ うまく抵抗できない！ このままじゃ私、エレナさんに……！ごめんなさい、お母さん……私、こつち側の人間になりそうです……）」

覚悟を決めるグレン。

そんな彼女を他所に、エレナは笑いながら身体を離れた。

「え……？」

「冗談よ、冗談。お茶、入ったわよ。それとも……続きがシたい？」

「えっ？ いえ、結構です！」

グレンが慌ててソファアに座ると、エレナは手際よくティーカップを彼女の前に置いた。

カップ横の皿には、綺麗に切り分けられたロールケーキが乗せられている。

エレナが、ティーポットからカップへ紅茶を注ぐ。

カップから昇る白い湯気。

それと共に、アールグレイの甘い爽やかな香りが部屋いっぱいに広がる。

「お砂糖は？」

「いえ……」

「ミルク入れる？」

「お願いします」

紅茶の中に、白い渦が出来る。

「どうぞ」

「いただきます」

ソーサーをカップの下に持ちながら、彼女は紅茶を一口含む。
グレンに続いてエレナも。

「少し苦かったかしら？」

「いえ、美味しいです」

二人の口元で、カップがゆっくり上下する。

「あの……一つ聞いてもいいですか？」

「なに？」

「写真の男の人って……」

エレナはソーサーの上にカップを置いた。

「ええ。グラムよ」

グレンの眉が、不安そうに下がる。

「二人は……恋人同士だったんですか？」

「恋人……ね……」

エレナは紅茶を一口含んでから、彼女に答えた。

「私……ここに来る前は、CAMSに居てね、彼とはそこで出会ったの。彼は患者で、私は彼の専任心理カウンセラー。知ってる？ 彼の事」

「エステルに聞きました」

「時には主治医、時には友人、時には支え……そうね、恋人だった事もあったわ……」

「二人はどうして…？」

「私が捨てたの」

「何故…？」

エレナは少し考えてから、彼女に答えた。

「『待つていなくてもいい』って、彼が言ったから。それで後から気付いたの。私は彼の笑顔を見た事が無いって…」

この言葉を最後に、二人の間を沈黙が支配した。
長く、湿ったような沈黙。

グレンが思い切つて口を開く。

「ごめんなさい…変な事聞いちゃって…」

「いいのよ…」

エレナは笑顔でそう答えると、グレンに問うた。

「あなたはどうなの？」

「え…？」

「好きなんですよ？ 彼の事…」

次の瞬間、楽しげに話していたエレナの表情が固まった。
眉を歪めるグレン。

彼女の目は、不安と迷いの色に塗り潰されていた。

「どうして、そんな事聞くんですか？」

「違う？ それとも彼の事嫌い？」

「違います…！嫌いとかそう言うのじゃなくて…好きですよ？ 好きですけど…」

急に黙り込むグレン。

エレナは彼女の次の言葉を待った。

「一緒に居たいとか…付き合いたいとか…そう言うのじゃないんです…私はただ…」

「“護つて欲しい”？」

急にエレナの表情が険しくなった。

「あなたやっぱりそうよ。逃げてる。目の前の事から逃げてる」
「逃げてる…？」

「本当は傷付くのが恐くて、自分の気持ちから逃げてるだけ。護つてほしいなんて言い訳だわ」

「言い訳なんかじゃありません！」

「じゃあ何？好かれている訳でもない人間を、無条件で護れと言う訳？」

「じゃあ先生はどうして亡くなったんですか！大佐が護つて…護つてくれていればこんな事には…！」

彼女は途中で言葉を切った。

「あなたの事は聞いているわ。辛かったわね…でもね、グレン。あなたと同じ事を思っている人がもう一人いるのよ…？あなたは彼に何をしてあげた？どんな言葉をかけてあげた？人はみんな、何かと闘っているわ。でも彼の闘っているものは途方も無く大きい。そんな彼を、仲間である私達が支えてあげなければいけないのよ。本当はね…グレン…彼つとでも不器用な男なの。気持ちを言葉に出して言えない人。そんな彼を支える事が、私たちの出来る“闘い”じゃないかしら？」

「私にそんな事…できるんでしょうか？」

「出来るわ、グレン。あなたなら出来る」

エレナはそう言つと、グレンにロールケーキを差し出した。

「このケーキね、シティーの“シャトレーゼ”ってお店で買ってきたの。そのお店、今では珍しくパティシエがケーキを作っているのよ？だから、ケーキ一つ一つに作り手の、幸せな気分にしてあげたいという心が込められているの。重要なのは、本当の気持ちよ…」
俯くグレン。

「私…そんな事考えた事もなかった…大佐は私達の為に闘ってくれているのに、私は自分の事ばかり考えてた…」

彼女が顔を上げた。

「私、闘います！自分の出来る戦いを！そうすればきっと、彼の支えになれるから…」

彼女はそう言つて、エレナの顔を見つめた。

彼女の腹が鳴る。

「あのお…ケーキ食べてもいいですか？」

グレンが恥ずかしそうにそういうと、エレナは微笑みながら答えた。

「どうぞ」

嬉しそうにケーキにはくつくグレン。

そんな彼女を見て、エレナは心の中で呟いた。

「（この子だけは…不幸にしないでね…グラム…）」

彼女は深く心から願った。

『その人の事、今も覚えていますか？』

出ていく時、彼は私にそう尋ねた。

純粹で悪意の無い質問。

私は答えずに、取り調べ室を後にした。

頭の中がチリチリする。

こんな事が前にもあった。

昔、CAMSでの再生治療を受けた後、軍医は私に同じ質問をした。私が軍医に、「何故そんな事を聞くのか」と問い質したら軍医は、「記憶の再生の為」と答えた。

その時も今と同じように、脳の奥がチリチリとしていたのを覚えている。

その度に現れる“幻の君”…
君は一体誰なんだ？
無い筈の記憶から形作られる、君は…？

「よっ」

ビンセントが、あたかも偶然見掛けたかのようなそぶりで声を掛けてくる。

わざわざ探して来たこと位、一目見れば分かると言いつのに。

彼が居るのは、いつもと同じ中央広場の同じベンチ。

何かを考える時。

悩む時。

彼は決まってここに来る。

「何をしに来た」

グラムは、ビンセントの姿を見分するかのように睨み付ける。

「随分とつねねえなあ…親友が慰めに来たのによ」

ビンセントは彼の横に座った。

両手には缶ビール。

口には煙草をくわえている。

「ほらよ」

ビンセントがグラムにビールを投げ渡した。

彼は右手で受け止める。

「飲めよ。ぬるくなっちまったけど、空きっ腹には調度いいぜ？」

ビンセントはそう言って、缶ビールを一気に飲み干した。

鳩が地面を突いている。

何の悩みを持たぬかのように、誰かの撒いた餌を啄んでいる。

一匹の白い鳩がいた。

その鳩は、群れから離れた所に立ち、餌にも目をくれず、ただグラムの事をじっと見ている。

「災難だったみてえだな…」

ビンセントの言葉は、単刀直入に核心へ迫った。

「でも自分を責める事はねえよ、グラム。それがその人間の択んだ道だ」

グラムの心に火が灯った。

択んだ道？

死ぬ事が？

死を選ぶ事が、避けようの無い選択だったと言っのか！

「道だと？」

心に反して、彼の言葉は自分でも意外な位に落ち着き払っていた。

「お前は間違っている。死を選ぶ事など、正しい訳が無い」

グラムの、余りにも真っ直ぐな答えに、ビンセントは苦笑の色を隠せなかった。

「ぶわはははは！ 捻りがねえなあ、おい！」

グラムが眉を歪める。

「何が可笑しい！」

ビンセントは煙草を大きく吹かした。

「なあ、グラムよ…今この瞬間に、何人の傭兵がくたばってるか、お前には分かるか？ 10や20なんて数じゃねえ…未だあちこちで続く小競り合いやら紛争やらで、奴らあボ口雑巾みてえに死んでいくんだ…それでも奴らあ闘いを止めねえ。奴らあ戦場の中でしか生きていけねえ。俺達傭兵はな、どこかが少しおかしいんだ」

夕暮れの風が頬を撫でる。

夕闇の中、徐々に減っていく人影。

植えられた街路樹から散る枯れ葉が、風に吹かれて舞っていく。

「ただ死ぬ為に生きるのか？」

ビンセントは答えて言った。

「ちげえよ…生きる為に死ぬんだ。俺達は金の為でも、忠義の為でもなく、ただ自分達の志の為に引き金を引く。自分が死んでも、生き残った仲間が必ず成し遂げてくれるって信じてっからだ」

「誇りは命を縮めるぞ？」

「自信過剰もな」

ビンセントがベンチから立った。

「いくら力があつたとしても、力はいつか自分を裏切る。力は絶対じゃねえ。“力”を持つ奴にとつちや、逃げられねえ宿命だ。それでもなあグラムよ…俺達は託されてんだ。奴らから…将来を託されてんだよ」

グラムは言った。

「将来なんて捨てている」

ビンセントは彼に答えた。

「違う。将来がお前を捨ててんだ。自分を好きになれよ…グラム。長く付き合つんだからな。自分を救えねえ奴に、他人は護れねえぞ？」

「お前は、自分を救えたか？」

ビンセントは振り返り、グラムに答えた。

「復興作業中！」

立ち去っていくビンセントの背中からは、どこか寂しく見えた。

グラムは、彼から受け取った缶ビールのフタを開け、中味を飲み

干した。

飲み慣れている筈のビールの味が、今日は苦く感じる。

人を救う事と自分を救う事…

自分に託されている事…

“護る”と“守る”…

似て異なる二つの言葉…

これを同時に熟すのは難しい。

だが、それが自分の道…

背中に背負っている自分の使命…

散っていった者たちへの、せめてもの償い…

力が自分を裏切るまで…

鳩が飛んでいく。

灰色の鳩達が。

灰色の群れに混じる白い鳩。
彼はその鳩を、見えなくなるまで見つめ続けた。

Chapter 5

私は望む。

護られるだけでなく、闘い護る事を。

私は臨む。

自分の出来る闘いに。

本来、人間一人の始まりなど、二つの細胞が偶然出会う事に過ぎず、発生した人間個体の出会いも又、偶然に過ぎない。

それでも人は、出会ってきた人々を想い、愛して止まない。ただ、偶然に出会っただけの人々と共に歩もうとする。

そんな人間が、私は…

今の彼女は、サンヘドリンの技術者でなく、ジェネシックス社の一社員としてそこに立っている。

試験機を危険に晒し、事もあるうに重要な人材を失った社は、自分達の致命的な損失を恐れた。

それを避ける為に彼等は、リセツツクロウと“当事者”を、サンヘドリン本部に一時保管。

処理完了の後に、全てを回収する手筈を整えていた。

全てが完了した今、彼女には帰社命令が出されている。

グレンは首から掛けられたサンヘドリンのIDカードを外し、ガルス目の前に置いた。

「お世話になりました」

一礼する彼女に、ガルスが聞く。

「グラムに、会っていかなくても…？」

彼女は答える。

「時間が無いみたいです。残念ですけど…。代わりに彼に渡して欲しい者があるんです」

彼女はそう言って、一つの封筒を渡した。

封のされた、何も外側に書かれていない封筒。

「私が出て行った後に、彼に渡して下さい」

彼女は出て行った。

彼女の居ない今、封筒はグラムの手元にある。

彼はそれを開け、中に入っていた手紙を読んだ。

私は望む。

護られるだけでなく、闘い護る事を。

私は臨む。

自分の出来る闘いに。

本来、人間一人の始まりなど、二つの細胞が偶然出会った事に過ぎず、発生した人間個体の出会いも又、偶然に過ぎない。

それでも人は、出会ってきた人々を想い、愛して止まない。ただ、偶然に出会っただけの人々と共に歩もうとする。

そんな人間が、私は愛おしく思う。

大佐：

人には“定められた運命”など無いけど、“宿命”はあります。

だれもがその背中に背負っている大きな使命が…

私は大佐と…、みんなと出会って、その重さを知りました。

でももし、その宿命を、大佐が一人で背負うつもりなら私は、あなたの上に被さってでも、共に背負いたいと思っています。

大佐…、私は戦場に出て闘う事は出来ないけど、大佐には出来ない闘いができます。

私は私の闘いを、大佐は大佐の闘いを戦い抜いて、最後は同じ物を護っていききたいから…

私は民間人で、大佐は偉い軍人さんで、考えの違いは有るかも知れないけど、それもきつと、苦難を乗り越える力になるから…

先生はきつと、自分の闘いを戦い抜いて、最後は大佐に託したんだと思います。大佐はみんなの希望だから…

どうしよう…

書きたい事はいっぱいあるのに、言葉が思い付かないです…

そうそう…

昔誰かが、「タマゴを割らなきゃ、オムレツは作れない」と言っていたのを思い出しました。

だから私、少し考えてきます。

考えて考えて、“一番おいしいオムレツ”を作れるようになって戻ってきます。

多分それが私の使命だから…

この手紙、恥ずかしいから読んだ後は処分しちゃって下さい。

あと、約束通り、私が居なくなった後に読んでくれてありがとう。みんな大好きです。

彼は中央広場のベンチに座りながら、静かに手紙を閉じた。

頭上には雲一つ無い青空が広がり、耳元では心地良い風のささやきが奏でられている。

彼は昼時の、よく晴れた空を見上げた。

「今日だったんですね…彼女が帰る日…」

聞き慣れた声が聞こえる。

「彼女が手紙をくれた」

「なんと書いてありましたか？」

「『自分の闘いを戦う』…と。私は護っているとばかり思っていた。でも実際は、護られていたんだ…」

エステルが、今にも崩れてしまいそうな表情で彼に言う。

「彼女…帰って来るでしょうか？」

グラムが、澄んだ表情で答えた。

「さあな…ただ一つ確かなのは、今のグレンは、昔の彼女じゃないと言う事だ」

彼の瞳が、エステルの瞳を見つめる。

「彼女は必ず帰ってくる…必ず…その時は、笑顔で迎えよう」

「大佐…」

「なんだ」

「彼女は大佐の事を…」

「エステル」

彼は彼女に言った。

「大昔に、ヘミングウェイという作家が言った。『この世は素晴らしい。戦う価値がある』とね。私もそう思う。ただ、私の世界は小さい。手に届く範囲が私の世界…そしてその世界の中に、君が居る。幸福というものは、一人では決して味わえないものだ、エステル…本当に幸せなのは、目覚めた朝、愛する人間が居る事だ」

彼女は彼の瞳を一心に見つめながらこう言った。

「不思議です。口先だけで『愛してる』と言われても簡単に無視できますけど、態度で示されると…ついほだされてしまいます」

グラムはゆっくり微笑み、エステルの手を取る。

「我々は現在だけを耐え忍べばいい。過去にも未来にも苦しむ必要は無い。過去はもう存在せず…」

「未来はまだ存在していないのだから…」

彼は彼女に言った。

「一つ謝りたい事が有る」

「はい？」

「グレンに…また何も言えなかった。努力は…したのだが…」
エステルの顔に、ゆっくりと笑みが広がる。

「大丈夫よ…グラム…。少しずつで…彼女が帰ってきた時に、『お

かえり』って言ってあげれば……」

彼の目の前を、白い鳩が飛んでいく。

彼は言わずにはいれなかった。

エステルに……

そして、グレンに。

「ありがとう」と。

鳩は、雲一つ無い青い空に、羽ばたき消えて行った。

「ACT 13」終

VARIANTAS第一部・『出会いと別れ編』完

ACT13 背負い（後書き）

はい、これにてVARIANTAS第一部・『出会いと別れ編』完
と相成りました。

今まで見てくださった方も、これから見てみようという方も、あり
がとうございました。第二部は、すぐに始まると思いますので、
第二部も読んでいただけると幸いです。また、評価して下さった
方や、お気に入り登録して下さった方々。平に、お礼申し上げます。

VARIANTAS設定資料【HMA編】（前書き）

主力兵器、HMA（人型機動装甲）の解説です。

VARIANTS設定資料【HMA編】

「HMAとは」

ヒューマノイド・モビリティ・アーマーの略。通称「ハマー」。大戦中に大量生産された汎用人型兵器。開発自体は大戦前から続いていたが第4次大戦勃発と同時に戦線投入された。全高13～15mほど。

人工筋肉と超伝導シリンダーを組み合わせたフレームマニューバーで駆動。

プラズマ反応炉を搭載、稼動。

第三次大戦によって変化した戦場形態（廃墟化した都市部や不整地での高速戦闘）に対応すべく、戦闘ヘリの機動性と戦車の装甲・攻撃力を併せ持った兵器として発展した。

「今まで登場したHMA」

「360（サンロクマル）」

正式名はHMA-h1D/360

h1ブロック30をベースに、ジェネシック社が開発した局地戦闘用機体。

360は“ブロック30の60年型”を意味する。

重装甲・高火力・高トルクの機体で、砂漠戦・防衛戦・市街地戦で威力を発揮した。

全身に装備したチヨバムアーマーで高い耐久力を誇る。

武装は右腕100?35口径長マシンカノン、左腕小型シールドと155?オートランチャー、背面大型スラスターユニットにMk-

51/Mk-71/FGM-165

作中での活躍

Last Will

HALと“彼”を乗せて、病院船脱出作戦に投入。

対空部隊を排除後、敵機動装甲と交戦、撃破。

敵大部隊を食い止めようとするも、損傷は激しく、アンシエタを脱出させた後、自爆している。

「レザールーフ」

HMA-h2C/M2A1・レザールーフは、サンヘドリン陸軍が運用する主力機動装甲。

愛称は“革を被った狼”を意味する「レザールーフLeatherWolf」

概要

大出力のメインブラスターとワイヤーアンカーを備えたHMA-h2ブロック30カスタム。

従来の拘束セラミック複合装甲と劣化ウラン装甲では強度に不安があり、装甲を『メタニウム複合装甲』に変更。また、出力をより高くチューンしている為、機体制御が難しい。

然し、高出力の重力制御装置の搭載によって重武装化による機体重量増加を軽減。さらなる機動力アップにつながった。

また、『イクサミコ』を正式に搭載した機体であり、複雑化した操

縦システムをサポートさせることで、訓練機関を短くすることに成功した。
陸軍の主力。

開発

三軍共同の“新世代主力機動装甲計画”によって生み出された最初の本格的対ヴァリアント戦用主力機動装甲の一つである。

ヴァリアントとの開戦間もない2186年代後半、サンヘドリンはHMA-h1E型の後継種を必要としていた。E型は大戦終盤開発の4.5世代機であり、中央軍はE型の近代化仕様機であるHMA-h1Fを保有していたものの、それもやはり第4.5世代機動装甲の域を出ないものであった。

そのころ中央軍高等技術研究所（ジェネシック・インダストリー開発1課出向）より以前から運用試験中だった「HMA-Yh180」は、当初は軍閥吸収やロツクウエル事件に伴う戦費から統合体連邦議会は中央軍への採用を渋る声も聞かれたが、対ヴァリアント戦開始直後の2186年5月にサンヘドリンからの新型機動装甲の要求仕様が決定し、同年6月にジェネシック・インダストリー社に試作機の発注が行われた。

3カ月後の9月「HMA-h2A」が完成。同時期に研究されていた新素材を取り入れた「新世代主力機動装甲計画」により派生した「C型」をベースに、陸軍要求仕様機としてHMA-h2C/M2A1が開発された。

特徴

- - - - -
装甲

メタニウム複合装甲を採用しており、その防御能力は非常に高い。曲面を主体とした主装甲群は拘束セラミック複合装甲の下地に貼り付けられており、防御能力試験ではゼロ距離での50口径125mm滑腔砲から発射されたAPFSDSの直撃に耐えている。

火器

陸戦機として非常に高い火力を持つ。標準装備は従来の90mmライフルだが、背面多目的可動フレーム（後述）と前腕部に火砲を搭載（ユニバーサルアタッチメント（後述））すれば、最高6門もの火砲を同時に運用できる。（実際の同時運用は90mmを6門、100mmを120mmを4門、203mm2門と90mm1門が限界である）

また、背面多目的可動フレームもしくはスラスタユニット上面にMk-51もしくはMk-71を搭載可能。（スラスタユニット上面にMk-71は装着不可）
前腕部にもMk-71を搭載可能。

背面多目的可動フレーム

レザールフの大きな特徴であり、この機体の超汎用性を象徴する装備である。

脚部膝フレームを流用しており、非常に強固。

通常の運用では機動性の確保を考慮し、大出力のスラスタユニットを一基ずつ（Mk-51のマウントラッチ有り）装備しているが、203mm2門、もしくは、ユニバーサルアタッチメントを用いれば90mmを120mmまでの火砲を搭載可能。
また、Mk-51もしくはMk-71を搭載可能。

諸元

- - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 設計者：ジエネシック・インダストリー
 製造者：ジエネシック・インダストリー
 運用者：サンヘドリン対ヴァリアンタス軍（サンヘドリン陸軍）
 機体正式名：HMA-h2C/M2A1・レザールフ
 全高：12.5m
 機体重量：48t
 全装備重量：75.5t
 固定兵装：右腕ワイヤーアンカー×1
 外部兵装：M90他携行火器多数
 その他特殊兵装：背面多目的可動フレーム

「スパロー」

HMA-h2C/N・スパローはサンヘドリン海軍が運用する艦上
 戦闘攻撃機体。

愛称は「Linebacker」
ラインバック

概要

- - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 - - - - -

高機動大出力の艦載戦闘攻撃機体で、多数の爆装を携行可能。
 艦隊防空において高い能力を発揮し、データリンクによる目標引渡
 し、及び誘導機能によって非常に広範囲の視程外戦闘を可能にして

ー・センサーユニットを装備している。

諸元

- - - - -
- - - - -
- - - - -

製造者：ジェネシック・インダストリー

製造者：ジェネシック・インダストリー

運用者：サンヘドリン対ヴァリアンタス軍（サンヘドリン海軍）

機体正式名：HMA-h2C/N・ラインバツカー

全高：12m

機体重量：42t

全装備重量：67.5t

固定兵装：右腕100mm40口径長リボルバーカノン×1

複合兵装ユニット

外部兵装：Mk-51(AAM-X10)×2もしくは1

Mk-72(AIM-66)×2もしくは1

AIM-66×最大14（兵装庫内4+カバー裏3）

×2（複合兵装ユニット兵装庫内）

BGM-70AGW×最大8（兵装庫内2+カバー

裏2）×2（複合兵装ユニット兵装庫内）

ATSLAM(B型)×最大4（兵装庫内2×2）（

複合兵装ユニット兵装庫内）

AIM-2×最大3（左腕）

BGM-117×最大4（兵装庫内2×2）（複合兵

装ユニット兵装庫内）

M40・貫通力強化型爆弾体誘導発射筒×最大8（兵

装庫内2+カバー裏2）×2（複合兵装ユニット兵装庫内）

その他特殊兵装：後方警戒監視レーダー・センサーユニット

「ストライクウルフ」

HMA-h2C/B・ストライクウルフは、サンヘドリン陸軍が運用する空対地攻撃用機動装甲。

愛称は“攻撃する狼”を意味する「ストライクウルフStrikeWolf」

概要

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

主に陸軍航空騎兵大隊で使用されている近接空中支援機。

大量の火器を搭載し、その瞬間火力の凄まじさから、友軍からは「サンダーボルトThunderbolt」の愛称でも親しまれており、支援要請時のコールサインにも用いられている。

開発

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ヴァリアントとの開戦と同時に、サンヘドリン陸軍は、強力かつ安価な空対地攻撃機体の必要性に悩まされていた。

広範囲に分散した敵機を各個撃破するには、散開行動する地上軍に対する綿密な空中支援が不可欠であったが、軽快な機動力のHMA

- h2C/FA1・フェニックスやHMA-h2C/M・スパローも、対地兵装の搭載量不足が目立ったため、対地支援には不向きであった。

最終的に陸軍は、地上部隊に随伴する対地攻撃機として、安価で整備性がよく、大きな兵装搭載量を持ち、長時間の空中待機を可能と

する戦闘爆撃型機開発計画“B-X計画”をスタート。
ダイダロス・アビオニクス社の“h2YC/Da29”が“h2C
/B・ストライクウルフ”として正式採用された。

特徴

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ストライクウルフの大きな特徴は、機体背面に装着された、全長7
mにもおよぶ巨大な複合兵装ユニットである。

この兵装ユニット“M2119”は、左右の兵装コンテナと中央の
大出力推進機関の三つから成る。

左右の兵装コンテナには一基につき、上面1ヶ所の外部兵装マウン
トを持ち、側面にはパイロン、内部には大型のウエポンベイを持つ。

マウントには、Mk-51もしくはMk-71を装備可能。ウエポ
ンベイ内部にはMG M-35KE MもしくはBGM-70AAGW

を兵装庫内に8発、カバー内側に6発の計14発、左右合わせて2
8発搭載。

パイロンには下面2ヶ所、先端1ヶ所にミサイル、アーマメントパ
ッケージを装備可能。

また、コンテナユニットの専用兵装として、貫通力強化型爆弾体誘
導発射筒射出装置（通称：ヘッジホッグ）を上面マウントに装備可
能。

機体本体は、頭部センサーユニットを長距離対地レーダー・赤外線
監視・レーザー照射装置複合ユニットに交換。装甲は高い防御能力
をもつ。

機体本体にも、腰部、前腕部にマウントラッチが存在。各種兵装を
装備可能。

直射兵装として右腕に90mm60口径長ガトリング機関砲（30

0発/分)を装備。

生存性は高く、両脚部を失っても帰還できる。

もとより、HMAを兵装プラットフォームのコアとしている感が強く、緊急時にはユニットを切り離しての行動が可能である。

「バリエーション」

“HMA-h2C/B?”

ハウリングウルフ

愛称は“遠吠えする狼”を意味する「Howling Wolf」

右腕機関砲を100mm40口径長リボルバーカノンに換装、ユニット切り離し機能を廃して軽量化、長距離空対空ミサイルと対艦ミサイルの運用能力を付加した海軍艦載機型。

諸元

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

設計者：ダイダロス・アビオニクス社

運用者：サンヘッドリン対ヴァリアンタス軍（サンヘッドリン陸軍）

機体正式名：HMA-h2C/B・ストライクウルフ

全高：13m

機体重量：50t

全装備重量：98.5t

固定兵装：右腕90mm60口径長ガトリング機関砲×1

左腕100mm三連装非回転式多重砲身機関砲（リンク

レスベルト給弾）

M2119複合兵装ユニット

外部兵装：Mk-51（AAM-X10）×最大4

Mk-71（MGM-35KEMもしくはBGM-70

AAGW）×最大8

Mk-47・貫通力強化型爆弾体誘導発射筒射出装置×

- F I M - 1 0 9 × 最大 8
 - F G M - 1 6 5 × 最大 8
 - 6 連装 2 2 5 m m 口ケツト弾ポツト × 最大 4
 - M G M - 3 5 K E M ((兵装庫内 8 + カバー内側 6) × 2) 最大 2 8
 - B G M - 7 0 A A G W ((兵装庫内 8 + カバー内側 6) × 2) 最大 2 8
 - A I M - 6 6 (海軍型) × 最大 1 2 ((兵装庫内 4 + カバー内側 4) × 2)
 - B G M - 1 1 7 (海軍型) × 最大 8 ((パイロン 1 + 兵装庫内 2 + カバー内側 1) × 2)
- その他特殊兵装：なし

「ディープフォレスト」

H M A - h 2 E / F ・ディープフォレストは D ・ A 社製空軍用 h 2 ブロック 4 0 カスタム。

愛称は“深森”を意味する「ディープフォレスト Deep Forest」

概要

-
-
-

5 . 5 世代に分類される人型機動装甲。

非常に精密な動きが可能であり、全 h 2 カスタム中最高の機動性能を誇る、サンヘドリン空軍の最強戦力。ディープフォレストに乗ることを許された優秀パイロットは俗に“フォレスト・ドライバー”

と呼ばれる。

海兵隊も若干数を使用中。

特徴

- - - - -
- - - - -
- - - - -

大出力のプラズマドライブでは無く、精度の高いグラビティドライブを採用する事で防音性に優れ、非常に高い空間機動力を会得している。

防音、防熱対策として通常運行の際にはバーニアを使用しない。装甲はラッシュハードロングと同様の素材が使われており、軽量で剛体に優れる。同じく提供はアーシェ・クロイツ社。

固定兵装として、ペリウィンクルに装備されていたクローバイス三連マシンキャノンの特別仕様を装備。伸縮性のクローユニットはソニックブレードである。

ステルス性塗装によってレーダーに反応しにくい。

D・A自社製のセンサーシステムを搭載しており、統合防空ネットワークへの接続無しにAIM-71を運用出来る、サンヘッドリンでは唯一の機体である。

配備部隊

- - - - -
- - - - -
- - - - -

E/F・ディープフォレストは非常に高価であるために、配備部隊は少数である。

本部航空戦闘軍団

第1戦術戦闘航空団第7戦闘飛行隊・アルゴンキン

第3 戦術戦闘航空団第5 戦闘飛行隊・ウィズバング
 第7 戦術戦闘航空団第6 アグレッツサー飛行隊・キングスバレイ
 第8 戦術戦闘航空団第4 戦闘飛行隊・クロンダイク
 第6 戦闘飛行隊・ゲーリック
 第1 1 空軍第3 航空団第9 戦闘飛行隊・バーボネラ
 第3 6 戦術戦闘航空団第3 戦闘飛行隊・ハンター
 第4 0 戦術戦闘航空団第9 3 戦闘飛行隊・ホーセスネック

航空教育・訓練軍団

第3 2 5 戦術訓練航空団第2 戦闘飛行隊・ラスティネイル
 第5 戦闘飛行隊・ルシアンネイル
 第9 戦闘飛行隊・フレンチコネク

シヨン

駐屯空軍

第1 0 4 戦闘航空団第5 9 戦闘飛行隊・アキダクト
 第1 3 5 航空団第9 9 戦闘飛行隊・アブドウーグ
 第1 4 0 戦闘航空団第1 3 戦闘飛行隊・スレッジハンマー
 第1 4 5 戦闘航空団第1 6 戦闘飛行隊・タワーリシチ
 第1 5 8 戦闘航空団第1 2 3 戦闘飛行隊・ヴェスパ
 第1 5 9 戦闘航空団第1 2 戦闘飛行隊・ギムレット

諸元

- - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 設計者：ダイダロス・アビオニクス社
 製造者：ダイダロス・アビオニクス社
 運用者：サンヘドリン対ヴァリアンタス軍（サンヘドリン空軍・サンヘドリン海兵隊）

機体正式名：HMA-h2E/F・ディープフォレスト

全高：13m

機体重量：41t

全装備重量：67t

固定兵装：クローバイス三連マシンキャノン×2

複合兵装ユニット

外部兵装：88mmレールガン×1

Mk-51(AAM-X10)×2もしくは1

Mk-72(AIM-66もしくはAIM-71)×2

もしくは1

AIM-66もしくはAIM-71×8(兵装庫内2

+カバー裏2)×2(複合兵装ユニット兵装庫内)

ATSLAM(B型)×2(複合兵装ユニット兵装庫

内)

BGM-70AGW×4(兵装庫内1+カバー裏1)

×2(複合兵装ユニット兵装庫内)

その他特殊兵装：なし

「ロンギマヌス」

ビンセントⅡキングストンの愛機が代々受け継ぐ名称。

その名は“長い腕”を意味し、その名の通り右腕にパイルバンカー、左腕に長銃身の火器を装備しているのが特徴である。

赤銅色の塗装も共通する特徴であり、ビームを掠めるジnkスのあるビンセント用対ビームコーティング仕様となっている。

現在h1からh2までのロンギマヌスが存在するが、本項で全て紹介する。

「ロンギマヌス（一世）」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

HMA-h1AVビンセントカスタム

とはいえ外見上はh1E型と大差ない。

右腕にパイルバンカーユニット、左腕にチェーイングン、腰部にサブスラスタを装備し、頭部は指揮官用のものに換装されている。

炉心はリミッターを解除してROMチューン。

ハイコンプレッションタービン四基に高性能ラジエーターを装備。

駆動系は高密度鍛造ハイコンプシリンダーを入れ、足回りは電磁気サス化。ダブルウィッシュボーン化されている。

然し電装系はそのままだった為に機体に無理が祟って一度大破した。

現在は修復、電装系を改良されて倉庫で眠っている。

作中での活躍

ACT3 【再会】

火星ベルセポリス研究所を襲撃し、グラムの乗る実験用機体と交戦した。

ACT6 【閉鎖】

インド洋上で交戦中のサンヘッドリン艦隊とヴァリアントに遭遇、戦闘に巻き込まれる。

ハリーの操縦する輸送機から発進直後は、左腕チェーンガンで攻撃するが、劣化ウラン弾頭であったため、効果はなかった。直後、右腕パイルバンカーによってソルジャー一機を撃破している。しかし、パイルバンカーも故障。M9でやけくその攻撃をするもむなしく弾切れしている。

直後にディカイオスによって救われ、120?ガンランチャーを入手。多数のソルジャーを撃破した後、ガンランチャーとハンドマイク、単分子ナイフのコンボで撃破。
しかし、機体の損傷は激しく、母艦に着艦しようとした時、機体が大破している。(ビンセントは重傷。多分背骨折れた)

ACT8 【赤銅機】

大破した機体は、術長の協力で修復されている。
後、一世の機体データは、イオに受け継がれている。

「ロンギマヌス二世」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ビンセント専用ディープフォレストカスタム。

ディープフォレストの腰部及び背部グラビティドライブユニットをラッシュハードロングの大出力プラズマドライブユニットに換装し、

右腕にパイルバンカーユニットを装備している。

その為機体特性は両機の中間的なものになっている。

ステルス塗装の換わりに対ビームコーティングが施され、カラーリングは初代ロンギマヌスのものを継承している。

作中での活躍

ACT8 【赤銅機】

始めビンセントはディープフォレストに搭乗したが、故障させている。

後日、チューンされた機体に乗し、技術者達を感嘆させる機動を見せ付ける。(一世のデータを受け継いだイオが大きな要因)

ACT9 【IronMaiden】

支部管理官補訓練での実弾訓練にて、ビンセントが使用。M90で、高速移動する目標に全弾命中させる離れ業を見せた。

ACT10 【砂の器】

支部防衛戦でビンセントが搭乗。

支部守備部隊を指揮しながら、敵大部隊を撃破した。

「ラッシュハードロング」

HMA-h2DA/C・ラッシュハードロングは、アイシエ・クロイツ社設計のh2ブロック35カスタム。

重装甲の近接支援攻撃機。

愛称は“猪突猛進”を意味する「Rushheadlong」
ラッシュハードロング

概要

- - - - -
- - - - -
- - - - -

5・5世代に分類される人型機動装甲。

多大なキャパシティと、低空での高い安定性能。高度な生存性を買われ、陸軍の一部特殊部隊でも運用されている万能機だが、出力が非常に高い為、相当なじゃじゃ馬として知られている。

特徴

- - - - -
- - - - -
- - - - -

新型剛体素材製強化アーマーを全身に纏っている為、従来のh2カスタムとは大きく異なる外見をしている。

非常に防御能力が高く、前腕部に局所的な重力場を発生させることが可能。

また、全身の装甲の至る所にスラストスターが内蔵されている。

特に脚部、リアアーマー、ショルダーアーマー、強化ブースターは大出力のプラズマドライブを搭載しており、強大な推進力と機動性を与えている。

背部メインブースターにプラズマドライブの余剰エネルギーを応用したプラズマグレネードを隠し兵装として内蔵している。

重装甲ではあるが、新型剛体金属の恩恵により、外見に似合わず意外に軽量である。

様々な箇所にウエポンステーションを持ち、多数の火器を携行可能。
 通常は右腕にGMC-4・100mm50口径長ガトリング機関砲を搭載。

ガトリング機関砲発砲時は強力な反動を処理するため両腕で保持するが、その際、左腕が調度コックピットの正面に位置するように保持用グリップが調整されている為、機体正面にグラビティシールドを展開しながら、低速低空で長時間安定した射撃を行うことが出来る。

その強大な防御力を生かし、ビームランチャーや大口徑火砲といった直射兵装を敵前面で運用する大火力機である。

諸元

- - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 - - - - -
 - - - - -

設計者：アーシエ・クロイツ社

製造者：ジエネシック・インダストリー

運用者：サンヘドリン対ヴァリアンタス軍（サンヘドリン空軍他一部少数）

機体正式名：HMA-h2DA・ラッシュハードロング

全高：13 m

機体重量：48 t

全装備重量：83 t

固定兵装：プラズマグレネード x 6

グラビティナックル x 2

外部兵装：右腕GMC-4・100mm50口径長ガトリング機関砲 x 1

ビームランチャー

Mk - 71 (MGM - 35 KEMもしくはBGM - 70

AAGW) × 最大2

Mk - 51 (AAM - X10) × 最大2

FIM - 109 × 最大4

FGM - 165 × 最大4

他携行火器多数

その他特殊兵装：グラビティシールド

ACT14 この娘凶暴につき(前書き)

サンヘッドリンに不穏な空気が迫る。 一刃の参戦、ビンセントの決意。 その全てが、一つの戦いへと集結する。

ACT14 この娘凶暴につき

「Chapter 1」

試射場に太い咆哮が響き、人の形を模したシューティングターゲットが貫かれる。

少女は拳銃のシリンダーをスライドさせ、空になった薬莖を地面に捨てた。

スレンダーな少女には、あまりにも不釣り合いな大型の拳銃。

スタームルガー・スーパーレッドホーク454カスールバージョンスペシャルカスタムモデル。

「OK、ちゃんと直ってる」

彼女は防音用の耳当てを外し、後ろにいる老婆にそう言った。

「本当に行くのかい？ 偽のIDまで手に入れて…」

「偽じゃないよ。ルートは非合法だけど、中身は本物だよ」

老婆がため息をつく。

「それにあなた…なんだって今でも、そんな古い銃を使ってるんだい？ 200年以上昔の骨董品だよ？」

彼女は答える。

「私はでかい銃が好きなんだ。いつの時代も変わらないさ…電磁銃だか光学兵器だか知らないけど、撃たれて身体に穴が空けば死ぬ。それだけだよ」

少女はシリンダーに6発の弾を込めた。

「それに…この銃は特別なんだ」

「特別ねえ…」

老婆は、懐から一丁のオートマチック拳銃を取り出し、シューティングレンジのターゲットに向けて引き金を引いた。

高い破裂音と共にターゲットが四散する。

「今のは？」

「近接信管式爆裂弾。それでこれが高速徹甲弾」

シューティングターゲット横に置かれたベトンの塊が砕ける。

「口径5・56mm小口径高初速。大型サイボーグでも3・4発撃ち込めばひっくり返るよ。スライドはクローム削りだしの一品物でコンパイセイター付き。フルオートも可能。今なら格安でご奉仕するがねえ……」

少女は老婆を睨み付けた。

「なんだかんだ言っつて、あんたは商いがしたいだけだろ？ あたしは“これ”だけで十分だよ！」

ガンホルダーに銃をしまい、スリングベストを肩から掛ける。

「礼は言うよ。けど、これだけは口を出さないで欲しいんだ」

「ユリア」

「あん？」

「一つ忠告しとくよ。でかいチャカ振り回すだけじゃ、運は回らないよ。覚えておくんだねえ」

彼女は答えて言った。

「運なんて信じちゃいないよ。最後まで頼りになるのは自分とコイツだけさ」

試射場から出ていくユリアを見送り、老婆が吐き捨てるように呟く。

「まったく。誰に似たんだかねえ……あの口利きは……」

老婆はそう言っつて、もう一度ため息をついた。

拝啓、お母様。

ご存知かも知れませんが、僕はサンヘドリンに入る事に決めました。

もちろん最初は、御祖父様も義姉様もみんな反対しましたが、最後は許してくれました。

ミラーズ大佐は、優しい人です。

大佐は僕に推薦状を書いてくれたけど、一体誰に見せればいいのか分かりません。

御祖父様は僕に、「男なら迷うな」と言いましたが、僕は早速迷ってます。

正直迷子な訳で…

案外みんな冷たいです…

彼は不安そうな表情で溜息をついた。

右も左もわからない状態で、サンヘドリン本部のターミナルフロアで一人、自分だけ。

春雪ともはぐれてしまった。

先程から姿も見えない。

「どこ行っちゃったんだろ…春雪…早く大佐の所に行かなきゃ…」

ロビーのベンチに座り、彼はもう一度大きなため息をついてから、再び筆を進めた。

情けないです…

彼女が居なきゃ、何も出来ません…

もちろん春雪には感謝してるし、彼女の事は大好きだけど、女の子に頼りっぱなしなのは如何な物かと思っ…

突然、彼の膝の上に、大きなポストンバッグが置かれた。

下敷きになるペンと手帳。

彼は心の中で呟く。

「（…これは一体どういう事でしょうか…？）
一刃は怪訝な表情で、ゆっくり顔を上げた。」

デスクの上に散らばった書類を日付順にまとめあげ、束ねる。

それを何度も繰り返し、出来上がったいくつものファイルを、彼は机の隅に順序よく並べていく。

最後に、カエルの首ふり人形も置けば、出来上がり。

あつという間に、仕事場の完成だ。

「ふう…」

レイズが大きく息をつく。

軍人と言っても、戦闘と訓練の時以外はサラリーマンみたいな物で、報告書と武器弾薬の出納帳の整理が中心。

デスクは必須だ。

「これで全部だっけ？」

彼が、側でチェックするサラに問う。

彼女は答える。

「あとは日勤記録の整理だけですわね」

「よし」

この時代でも、個人レベルの書類は未だに“紙”で、レイズはその整理に追われている。

ただ、このデスクは彼の部屋にある物ではない。

グラムが、シェーファアの為に用意した部隊室だ。

「ごめんよ、サラ…休日なのに手伝わせちゃって…終わったらケーキ食べに行こうね！」

サラが嬉しそうに微笑む。

「朝からよくケーキなど食べられるな…」

後ろからグラムの声が聞こえた。

「あ、おはようございます！」

レイズがグラムに敬礼する。

「整理はおわったか？」

「もう少しで終わります」

「そうか」

「あの、大佐…？」

「なんだ？」

「なんで今になってから部隊室を？」

「隊員も増えてきたからな。隊の統率を保つ為には毎日顔を合わせたほうがいい。それに今日は新しい仲間が増えるしな…」

レイズは、グラムの顔が少し嬉しそうに見えた。

「そう言えば、エステルさんは…？」

「彼らを迎えに行った」

「彼らと言つと…？」

レイズの言葉半ば、エステルが部隊室に入ってくる。

「遅くなりました。大佐」

「ご苦労。それで、彼らは…？」

部屋に入ってきたのは、エステル一人だけ。

不思議に思うグラムに、エステルが困った表情で答えた。

「あれをご覧いただければ…」

彼女の指差す先。

外の廊下には、顔面蒼白で壁に寄り掛かる少女が一人。

彼女は、焦点の合わない眼差しで空気を見つめながら、ぶつぶつと小さな声で呟いている。

「若…様…何処に…行ったでございますですか？ 若様…若様…」
怪訝な表情のグラム。

「なんだ？あれは…？」

エステルは眉間を押さえながら、グラムに答えた。

「どうも、彼とはぐれてしまった様で…」

サラが、エステルに問う。

「お姉さま、あの子…誰ですか？」

「そうね。紹介がまだだったわね…」

エステルは疲れた表情を振り払い、サラに優しい顔で答えた。

「あの子は“春雪”。私達の新しい姉妹よ」

「あ…エステルさん？」

レイズが廊下を指差す。

「倒れてますよ？ あの子…」

「え…？」

春雪が、廊下で仰向けに倒れている。

「春雪！」

珍しく慌てるエステル。

彼女は急いで春雪を抱き抱える。

眉間を押さえるグラム。

レイズはサラに尋ねた。

「君もそうだったけど、イクサミコも倒れるんだね…」

サラは彼に答えた。

「あれはいわゆる…フリーズですね」

「フリーズかぁ」

…フリーズ！？

「あのう…すみませんか…？」

彼は恐る恐る、自分の斜め前方にいる女に声を発する。

無言。

無視される。

思わず不機嫌な表情になる一刃。

黒いシャツに、どこのかは解らないが軍閥のコートを着て、黒い髪を伸ばし、鋭い目付きで眉間につつすらとシワを寄せた、細身な少女。

彼はもう一度声を上げる。

今度は少し大きな声で。

「すみません！」

少女の肩がびくりと跳ね、まるで、『私が何をした？』と言いた
いかなのような丸くした目で彼を見る。

「…へ？」

「あの…鞆退かしてもらっても良いですか？」

引き攣った笑顔で、精一杯丁寧な受け答えをする一刃。

彼の座るベンチ近くには、銃を持ったセキュリティが3人。

彼女は周りを見回してからバッグを退かした。

「悪い悪い！気が付かなかつたよ」

彼女は彼の横に座り、重そうなバッグを大事に抱えながら、もう一度周囲を見る。

「あの…誰か探しているんですか？」

「まあね」

「よかつた！僕も人を探しているんです！」

“僕”？」

彼女は怪訝な表情で彼を見つめた。

「あんた、男には見えないけど？」

「え？」

「は？あんた女じゃなかったのかい？あたしはてつきり……」

一刃は急にベンチから立ち上がった。

「し、失礼な！僕は女の子じゃなくて、れっきとした男ですっ！」

セキユリテイが彼を睨み付ける。

彼女は慌てた様子で彼の服を引っ張り、椅子に座らせた。

「わかつたわかつた！悪かつたよ！謝るから騒ぐなよ！」

眉間を押さえる彼女。

彼女は一刃に言った。

「で、あんたの探してる人って？」

「僕の友達です。黒髪に赤い髪留めを付けた女の子。見ませんでし

たか？」

「うーん…幾つ位の歳だい？その娘」

「え〜つと、今年で大体3歳くらいかな…？」

彼女は思わず吹き出した。

「ささ、3歳！？あはははは！3歳児が友達？お前ロリコン

か!？」

「笑わないで下さいよ！彼女はイクサミコなんですから！」

さつきまで腹を抱えて笑っていた彼女が、ぴたりと笑い止んだ。

「あんた…軍人なのかい？」

一刃は彼女に答えた。

「そう見えますか？」

「いや」

彼は彼女に言った。

「軍人になる所です。ほら、推薦状貰ったんですよ？」

推薦状を得意げに見せる一刃。

それを見た彼女は、頭の中に何かが閃いた。

「(グラム＝ミラーズのサイン…！こいつを使えばもしかしたら…！)」

「…ところであなたの探してる人って…」

彼女は彼に言った。

「あなたの探してる人、一緒に探してやるよ！」

「え？」

「お互い人探してるしさ、一緒に探したほうがいいって！」

「いいんですか!？」

「もちろんさ！」

「ありがとうございます！僕は菊地一刃。あなたは？」

「私はユリア。よろしくな！」

笑顔の一刃。

そんな彼を見て、ユリアは心の中で呟く。

「(くくっ…簡単な奴…)」

彼女は自分のバッグを持ち、ベンチから立った。

よく焙煎されたコーヒー豆をミルでひき、サイフォンに入れ、オイルランプに火を点す。

あとは水がお湯となり、湯と豆が交わり、ポットに溜まるのを待つ。

『出来ることなら、君のコーヒーを毎日毎晩飲みながら、静かに暮らしたいよ…』

いつの日だったか、ガルスが彼女に言った言葉。

彼女にとってはとても嬉しかったその言葉…

ただでさえも神経を擦り減らす管理職。

それも、人類の命運を賭した戦いとなれば、そのストレスは尚更。でも彼女は知っている。

自分の入れたコーヒーを飲んでる時だけは、とても柔らかな表情をしていることを。

思い上がりかもしれない。

それでも、ただひと時だけでも安らぎを感じてくれるなら、それでいい…

気付けば、ポットの中には出来立てのコーヒーがたっぷりと溜まっていた。

彼女はマグカップを手にとり、その中へコーヒーを注ぐ。

いつもと同じ香ばしい香り。

毎朝必ず、彼の鼻をくすぐる香り。

その香りは、給湯室から全ての部屋に満ち溢れる。

今日は一段とよい香り。

ガルスは身仕度を整えながら、そう感じていた。

ロッカールームから出てすぐ、彼はデスクの椅子に腰掛けた。

それと共に、目の前に置かれるコーヒー。

毎朝の、こんな何気ない事柄が、無性に幸せだ。

「おはようございます。ガルス司令…」

「おはよう。レイラ君」

毎朝交わす言葉。

いつの間にか、それは合言葉のように。

レイラが微笑む。

「今日は良い日になりそうですね」

「なんだ？ 何か良い事でもあったかね？」

「いえ…ただ、司令も今朝はご機嫌がよろしいようなので」

「なんだね…レイラ君。それでは私が毎朝不機嫌のようじゃないか…」

「ガルスはコーヒーを一口飲んだ。」

「朝くらいは、清々しい気持ちでいさせてもらっているよ…君のお陰でね」

笑顔のレイラ。

「レイラ君。今日の予定を」

「はい」

彼女がスケジュールを読み上げる。

それを聞きながら、ガルスは心の中で呟いた。

「（確かに今日は良い日になるかもな…）」
ため息一つ。

「（ただ…こつ言つ日に限って、厄介事が起きるんだがね…）」

「本当にご迷惑を…」

倒れた後、部隊室の一角に設けられた仮眠室に担ぎ込まれた春雪は、上半身を起こし、頭の上に乗せた濡れタオルを手で押さえながら、エステルに頭を下げた。

「私、旧型だから…すぐ頭に血が昇っちゃって…」

涙ぐむ春雪。

「まったく…あなたの主人はどこに行つたの？」

エステルが春雪の横に座り、彼女の肩を優しく抱きながらそう尋ねると、彼女は再び青ざめた顔で呟き始めた。

「若様は…私ガ目を離れた隙に…人込みに飲まれてしまい…また…」

「春雪…？」

“ ますた ”…？

「若様は女の子みたいだから…たまに痴漢に遭うことが…」
もはや心配の度を超した春雪の頭の中に、良からぬ場景が浮かぶ。

『へっへっへっ…大人しくしやがれ！』

やらしい手つきで迫る男。

叫ぶ一刃。

『いやぁー！』

春雪も叫ぶ。

「いやー！」

「ちよつと…！春雪？」

「若様が！ 若様がぁー！！ ふう…」

再び意識を失う春雪。

エステルは眉間を押さえながら、大きくため息をついた。

「ダメですね…手掛かりは無いです」

エステルは、仮眠室の外で待つていたグラムにそう言って答えた。
サラが、心配した様子でエステルに尋ねる。

「お姉様、春雪さんの具合は…？」

「大丈夫よ…心配いらないわ。優しい子ね、サラ…」

サラの髪を撫でるエステル。サラは嬉しそうな顔で微笑んでいる。

「お姉様…嬉しい…」

二人を遠目で眺めるグラムとレイズ。

二人は『我関せず』と言った面持ちで動きを止めている。

「コーヒーでも入れますか…」

「うむ…」

その時、グラムがゆっくり口を開いた。

「一人増えた」

「え…？今なんと？」

突然の言葉にレイズは思わず聞き返す。

「ここに来る人間がもう一人増えた」

「増えたって…」

「厄介事にならないければ良いが…」

『私の宝物どこ？』

闇の中から声が聞こえる。

俺を呼ぶ声…？

俺は答えない。

『どこにあるの？』

また声が聞こえる。

『見つけた！』

何故…俺は走っている？

どこに向かっている？

遠くに小さな小屋。

やめる…やめるんだ！

屋根には一人の少女。やがて少女は、足を滑らせ屋根から落ちた。

ああッ！うああッ！

少女の身体が地面に落ち、たたき付けられる音。
骨の碎ける音。

いくら走つても、腕を延ばしても、手が届かない。

喉の奥から押し出される、声にならない叫び声。

彼の足元から、まるで生きているかのように湧き上がる焔。

焔は彼の身体を包み込み、肉を焼き、骨を焼き、そして…

「…ビンセント！」

イオがビンセントの肩を揺らす。

「ううあ…」

「起きてください！ ビンセント！」

「お前…生きて…」

ビンセントは、イオの顔を見るやいきなり、イオの身体を強く抱きしめ自分の胸へ引き寄せた。

「きゃっ！ 何するんです!？」

「んー…よしよし…」

「ふやあ!？」

イオの頭を撫で回すビンセント。

次の瞬間、部屋の中に濁いた破裂音が響いた。

「えひゃい!！」

意味不明な叫びを上げながら、ビンセントがベッドから落ちる。

「い、い、い、いきなり何をするんですか！ こちらにも心の準備

と言う物が…」

イオは自分の服の襟を直しながら、ベッドの横でひっくり返っているビンセントを睨み付けた。

「OK、イオ…一発で目が醒めたぜ」

彼は起き上がって、頭を左右に振る。

「うなされてましたよ」

「あ？」

心配そうないオ。

「悪い夢でも見られましたか？」

「ああ、ちよつとな…」

手の平で、額の汗を拭う。

「ところでよ、イオ？」

「はい？」

「今何時？」

「11:30です」

「げえ！」

彼はクローゼットからズボンと上着を急いで引っ張り出した。

「なんでもっと早く言わねえんだ！」

「私は何度も起こしました！それなのにビンセントが…」

「昨日は飲み過ぎたんだよ！」

突然、上着のボタンが取れた。

「畜生！ こんな時に！」

クローゼットを閉める。

クローゼットの扉が外れて倒れ、頭にぶつかった。

「はぎっ…!!」

「ビンセント！」

頭を摩る。

「建て付けが悪いぞ！ コンチクシヨウ！」

立ち上がってブーツを履く。

靴紐を締めている途中、靴紐が切れた。

「ぬおー！ やつてらんねえ！」

「落ち着いて下さい！ ビンセント！ 不運が続く事もたまにはありますって！」

「不運過ぎるだろうがあ！」

ビンセントは心の中で叫ぶ。

「（俺今日死ぬかもしれない！）」

その時、クローゼット上段に設けられた天袋から、鉄のダンベルが転がり落ちて、彼の頭を直撃した。

「ぱびゅあー！」

再び意味不明な叫び声を上げてのびるビンセント。

「きゃあああ！ ビンセント！ しっかりして下さい！」

半ベソをかきながら叫ぶイオ。

普通死ぬ。

「ダメだ、ユリアさん…。見つからないよ…」

ベンチに座り、彼は思わず疲れ切った声と共にため息を漏らしていた。

横にいる軍服の女：と言うより少女は、合わせた手の平を唇の前に置き、彼の言葉を聞いてか聞かずか、静かに物思いに耽っている。「（まずいな…これじゃあいつになっても埒があかない…。こいつは一向に相手を見つけられないし、かと言って保安部に行かれても困る…。もっと直接的な方法で入り込まないと…）」

「ユリアさん」

「あ？」

「やっぱり保安部の人に捜してもらった方が…」

「ちよっ！、ちよっと待て待て！」

慌てるユリア。

彼女は決心を決めるように大きく息を吐いた。

「一刃…、実は隠していた事が有るんだよ…」

「え？」

「あたし、本当は軍人じゃないんだ…実はあたし…」

「実は…？」

「実は…」

「実はっ…！？」

「治安局の秘密エージェントなんだ！」

一刃の全身に衝撃が走る。

「な、な、何ですってー！？」

「黙っていてすまない…本当はある極秘任務の為、ミラーズ大佐に会いに来たんだ。君の協力がある。その為に、君の春雪君には先に行ってもらっていたんだ」

「そ、そうだったんですか…」

ユリアは心の中でほくそ笑む。

「（こいつ信じてるよ…！）」

一刃は彼女に言った。

「それじゃあ春雪は大佐の所にいるんですね？」

「ああ！」

「それじゃあ早く行きましょう！あなたも任務があるのでしょ？
僕は何をすれば？」

「そ、そうだな…。大佐の所まで案内してくれ。なるべく内密にな
「分かりました！任せて下さい！」

心の中で、腹を抱えるユリア。

「（も、もう駄目…転げ回りたい！）」

声を出して笑いたい衝動を押さえ込み、ユリアは彼に言った。

「少しここで待っていてくれ。この格好では目立つからな」

「わかりました！」

素直に返事を返す一刃を尻目に、ユリアは女子トイレの中に入り、個室に籠った。

軍服を脱ぎ、バッグの中から新しい洋服を取り出す。

目立たない地味な色のミニスカートに、Yシャツを合わせ、その上からガンスリングを掛ける。

大きく息をつく。

バッグの底板、中が空洞になった特殊な擬装用収納箱から、金属の部品を取り出す。

彼女はそれを、あつという間に組み立て、再び銃としての形を取り戻し、弾を装填する。

「行くよ」

彼女はそう言って、ホルスターの中に自分の愛銃をしまい、ジャケットを羽織った。

「すまん、待たせたな」

トイレから出て来たユリアを見て、開口一番で一刃が言った。

「あれ？」

ユリアが聞き返す。

「な、なんだ？」

「以前にどこかでお会いしませんでしたっけ？」

「いや……？」

「ですよ……」

彼女は怪訝な表情で、彼を見つめた。

「（頼むよ……？あんたが頼りなんだから……）」

風が吹き、緑の草を撫でる。

空には月と太陽が一緒に廻り、雲が泳いでいる。

「春雪…」

「エステルさん…」

青いそよ風。

「ここは…?」

「ここは基底現実ではないわ…。勝手に入ってごめんなさい。私は今、あなたの中の最深層領域にいるの」

「そうでした。私また倒れたんですね…」

「あなたの中を見て解ったわ…。あなたと一刃さんは、イクサミコとユーザーと言うより、家族に近いのね…」

「家族…」

「姉と弟…兄と妹…。そして、夫と妻…。強いて言うなら、そんな感じかしら」

「エステルさん…私はいつまで彼と共に出来るのでしょうか…」

春雪の頬を、涼しい風が撫でる。

「何故…そんな事考えるの…?」

「彼は人間の男性です。自尊心と自立心があります。いつかは人間の女性に恋をして、家庭を築き、自分の人生を歩みたいと思っている筈です。私は彼の身の回りの事を全て行って来ました。本当は兵器の部品だと言うのに…。それが嬉しくて…楽しくて…。私はいつまで彼と一緒にいれるのでしょうか?」

大きな雲の塊が、二人の頭上を過ぎる。

「私たちイクサミコは、人間に従うように造られているわ…。でも

それは相対的な意味で。私達はイクサミコとしてこの世に生を受け、ユーザーと出会い、暮らし、その責務を全うする。これは人も同じ筈よ……」

「私達は人間ではありません」

「人でなくても、息をして、鼓動を刻み、温かい肌を持ち、人と触れ合える軀があるなら……まして、自分で考え行動することが出来るなら、私達は……」

緑の草原が、金色の野原に変わっていく。

「イクサミコは人を愛するようには作られていない……愛は、プロゲラムでは無いのだから。あなたの生きたいように生きなさい。愛は、人を縛る物ではないわ……」

太陽が欠けていく。

「そろそろ時間みたい。また会いましょう……春雪……。今度は彼も一緒に……」

「ええ……みんな一緒に……」

接続切断。

基底現実 に於ける、6000ナノセカンド限定の超高速圧縮双方
向通信解除。

通信終わり。

「Chapter 2」

「えーっとつまり……誰かさんが、サンヘドリンの武器を横流ししていて、それを捜査するためにここに来た……と言う訳ですか？」

「一刃は歩きながらユリアに尋ねた。」

「そう…しかも一味はかなりの人数が居る…一人では無理なんだ」
「なるほ…あ…」

一刃が足を止める。

「どうした…?」

「大佐との待ち合わせ場所…」

「…が、どうした?」

「知っているの春雪なんですよ…」

ユリアの目が点になる。

「…は?」

「僕は彼女に任せつきりで…最低ですよ…はは…」

ユリアは髪をくしゃくしゃと掻いて、少し考え込んだ。

「（こいつ…とんだ役立たずだ！でも入り込むにはこいつの持っている書類が要る…。どうすりゃ…）」

「僕…彼女が居なきゃ何も出来ないんです…」

「ん?」

「彼女が居なきゃ身の回りの事だつてろくに出来ない…。機体の操縦だつて彼女のサポートが無きゃ…」

ユリアが一刃に一枚の板ガムを差し出した。

「落ち込んだ時は甘い物。それにそんなの今時普通だろ?」

「ユリアさん…」

「お前家族は?」

「祖父と姉…それと春雪だけです」

「両親は?」

「母はいません…。僕が殺したんです」

ユリアの表情が凍り付いた。

「昔、僕が小さいとき、僕を庇って…」

「なあ一刃…あなたに昔何があったかなんてあたしには解らないけどさ、過去ばかりを見ていても、先には進めないよ。前を見て、しっかり自分の足で歩くんだけだ。そうすりゃ、前に進めるよ」

再び歩みを進める二人。

しばらく歩き、ふと気付けば、軍施設へ続く進入ゲートが目の前にあった。

「ね？」

頷く一刃。

彼は、鞆の中から例の推薦状を取り出した。

「いててて…」

イオがビンセントの頭に包帯を巻く。

「大丈夫ですか…？」

「こんな不運は初めてだぜ…」

「本当に病院へ行かなくてもいいんですか？」

「これくらい屁でもねえよ」

そっぴいなながら目が泳いでる。

「本当に…？」

「大丈夫！」

ビンセントはそう言って車のキーを持った。

宿舎の地下駐車場に行く。

そこでビンセントは叫び声を上げた。

「なんじゃこりゃああ！」

車の横腹を走る長い線。

塗装を削ったような深い傷が刻まれている。

「こいつぁ…10円パンチ！」

「10円パンチ…？」

「大昔に“ニッポン”って国で流行った悪質な悪戯だ…！ 21世紀には絶滅したと思ってたが、まさか今でも生き残ってたあ驚きだぜ…」

「あのビンセント…時間…」

「そうだった！」

車に乗り込む二人。

キーを差し込み、イグニッションを回す。

「すまねえイオ…運転頼むわ…安全運転で」

「了解しました」

二人を乗せた車は、ゆっくり出庫していった。

二人組の保安員の一人に、一刃は推薦状を手渡した。

「菊地一刃に…イクサミコの春雪…持ち物はこれで全部ですか？」

「バッグ二つ。」

「ええ。そうです」

一刃は固い笑顔で答える。

「それじゃあそちらが春雪さん？」

「は、はい！そうです」

固い返事。

「そうですか？ 春雪さん」

「え、ええ。そうです！ね？ご、ご主人様……」
明らかに怪しい。

一人の保安員がユリアに言った。

「それじゃあ春雪さん。バージョンと製造ナンバーを」

「え？」

「ですから、バージョンと製造ナンバーを」

ユリアの顔面から冷や汗が吹き出た。

「え、えつとですから……」

もう一人の保安員が応援を呼んだのか、二人の背後にはさらに3人の保安員が近付いてくる。

「バージョンと製造ナンバーを！」

一人の保安員が、銃に手を掛ける。それを見たユリアが、突然叫んだ。

「い、一味だ！」

固まる一同。

「え？」

「こいつらも一味だ！ 一刃！」

「こいつ！」

一刃の側にいた保安員が銃を抜いた。

その瞬間、一刃の表情が変わる。

彼は後ろにいた保安員の一人から警棒を抜き取り、流れるように素早く、目にも留まらない速さで3人のあごと脇腹を打ち、倒す。

「動くな！」

銃口を向ける保安員。

一刃は銃を持つ保安員の拳を正面から左手で掴み、捻る。

そして右手で保安員の肘付近を掴み、素早く足を払った。

宙を舞う保安員の身体。

彼はそのまま保安員を放り投げ、持っていた特殊警棒で腹を打った。

その間わずか数秒。

「こいつ！ 抵抗する…！」

彼は、銃を向けるもつ一人の保安員へ素早く接近し、左手で銃を持った両手を逸らす。

そして左腕の脇から肩の上へ警棒を差し入れ、逸らした両手を一気に引き戻しながら、警棒をテコのよう持ち上げた。

保安員の左肩が、鈍い音と共に脱臼する。

悲痛な叫び声をあげる保安員。

一刃はそのまま警棒で保安員の脇腹を叩き、気を失わせる。啞然とするユリア。

思わず呟く。

「バカ強…！」

一刃が叫ぶ。

「ユリアさん！早く！」

「あ、ああ！」

ユリアがゲートを開ける。

その時、肩を外された保安員が、力を振り絞って非常ベルを叩いた。

鳴り響く非常ベル。

「開いた！ 行くよ！」

「はい！」

二人は荷物を持って急いでゲートをくぐった。

「待て！ 止まれ！」

後ろから、急遽駆け付けて来た保安員の制止する声が響く。

ユリアは急いで振り返り、懐から抜き取った愛銃を連射。

「早く閉める！」

保安員達は、物影に隠れながらユリアに応戦。

ゲートの目の前には、激しい銃撃戦が展開した。

閉まる扉。

保安員が、無線で声を張り上げる。

「緊急事態！ 軍施設に侵入者あり！ 所属は不明！ 侵入者は若い男女

「二名！一名は銃器を所持！繰り返す！銃器を所持！」

警報は直ぐさま軍施設全館に鳴り響いた。

彼らの居る部屋にも、警報は鳴り響いている。

「侵入者…！？まさかこんな時に？」

「やはり、な…」

ゆっくり呟くグラム。

「大佐」

「放っておけ、エステル。何もするな」

ため息をつくエステル。

「大佐：騒ぎを楽しまれていませんか？」

「そうかも…な」

グラムはそう言ってから、少し笑った。

「どうしよう…！大変な事になっちゃいましたよ！？」

「うっさい！今は逃げるのが先！」

一番保安員を倒しておきながら、うろたえる一刃を一喝しながら、

ユリアは銃の弾を入れ換えた。

「そこ右！」

ユリアの指示に従い、一刃はエレベーターに乗り込んだ。続いて

ユリアも。

「何階行きます？」

「適当！20階！」

20階のボタンを押す。

動き出すエレベーター。

「ねえ…あの人達って本当に一味だったんですか？」

「あ？」

「そうには見えなかったんですけど…？」

「今更何言ってるんだよ！」

怒鳴り付けるユリア。

内心、背中に冷や汗をかいたのは言うまでもない。
エレベーターが止まる。

「よし、行くよ！」

二人はエレベーターを急いで下り、再び走りだした。

「いたぞ！」

後ろから、ライフルで武装した保安員達が追いついてくる。

するとユリアは、バッグの中から紙製のボールを取り出した。

「何ですか？ それ」

「見てな」

彼女は、ボールから伸びる細い紐にライターで火を点け、後ろに放った。

青ざめる一刃。

「それってまさか爆……！」

後方で、爆音が散った。

「いくらなんでもやり過ぎですよ！ ユリアさん！」

「あれくらい平気だよ！」

平気な訳が無い。

「一刃！その部屋入れ！」

右側に、標札の無い部屋が一つ。

二人は部屋に駆け込む。

「とりあえずここで隠れて……一刃……？」

固まる一刃。

「大佐……」

二人が駆け込んだ部屋は、偶然にもシェーファーフロントの部隊室だった。

「おはよう。遅かったな」

固まる空気。

「う、動くな！」

ユリアが、一刃の頭に銃を突き付ける。

「ユ、ユリアさん……？」

「グラム＝ミラーズ！あんたが隠しているのは判っている！ビンセント＝キングストンはどこに居る！」

グラムが彼女に言う。

「知ってどうする？」

彼女は答える。

「連れ戻す。死んだなんて信じない」

「どう言う事ですか！？ ユリアさん！」

「うるせえ！ 黙ってる！」

一刃の肩が小刻みに震える。

「嘘だったんですか…？」

「あ？」

「全部嘘だったんですか？ 僕に言った言葉も全部！」

「お、お前…！」

「なんて人だ！ 許しませんよ！ ユリアさん！」

「こいつ！」

その時、廊下からビンセントの声が聞こえた。

「なんだありゃ？ 誰か屁こいた？」

部屋の扉が開く。

「おっはヨーグルト！」

やたらに元気の良い挨拶。固まるビンセント。

「…は？」

「え…？」

「若様！」

見合うユリアとビンセント。

同時に、一刃の声で目を覚ました春雪が、仮眠室から彼らの居る部屋に駆け込んだ。

「どっなっつてんだ！」

叫ぶユリア。

その時一刃が、彼女の一瞬の隙を突き、銃を逸らした。宙を舞うユリア。

非の打ち所が無い、見事な一本背負い。

彼女はそのまま、背中をたたき付けられる。

その瞬間、ビンセントの口からやっと言葉が出た。

「ユ、ユリア!？」

彼女も遠のく意識の中、搾り出すように呟く。

「兄…貴…」

気絶するユリア。

その瞬間、全員の声が重なる。

「「「「「兄貴!？」「「「「「

昔、あたしが一番好きだった人が、とても寂しそうな顔でよく言った言葉がある。

『ごめん、仕事行かなきゃなんねえんだ…』

そう言うあいつに、あたしは縋り付いて泣きながら駄々をこねてたのを覚えている。

その頃あたしは、あいつの仕事の事なんか何も分かってなくて、それでもあいつはいつも優しく、クールで、かっこよくて、憧れの人だった。

それが今では、頭に包帯巻いて、ベッドで寝てる怪我人の前で凶々しくタバコをくわえている。

「おう。目え覚めたか」

ビンセントはタバコをくわえ、逆向きに座った椅子の背もたれに寄り掛かりながら、冷めた眼差しで彼女を見下ろした。

身体を起こすユリア。

「お前、どうやってここまで来たんだ？」

「定期便…で…」

「そう言う事聞いてんじゃねえ！」

「ひゃっ！」

ビンセントの怒号にユリアの身体がびくりと引き攣った。

「どうやって潜り込んだんだ？」

「…軍閥から軍属ID買って…」

「そんで？」

「ここに来て、一刃を騙して…」

「このボケバカ娘！」

ユリアの頭をゲンコツするビンセント。

「いったあゝ！何すんだよ！」

「いいか？ ユリア。俺あ今まつかつかにカンカンだ！俺が怒ってるのはな！いいかよく聞け！ここで454カスールをぶっ放した事でもなく！保安員を吹っ飛ばした事でもなく！一刃の若旦那をだまくらかしてここに来た事を怒ってるんだ！」

ユリアが声を張り上げる。

「何！？兄貴は一刃の味方な訳？」

「味方とかそう言う事じゃねえだろうが！」

「じゃあどういいう事を言ってるんだよ！？」

「お前が気を失っている時、若旦那は俺に何て言ったか分かるか！？」
『ごめんなさい、ごめんなさい』って何度も俺に頭下げて、お前の心配をしてたんだぞ！？分かるか？ ユリア！騙された人間が騙した奴をだ！いいか、ユリア…、世の中には騙していい奴

と駄目な奴が居るんだよー!」

ユリアがゆっくり眩く。

「ごめんなさい…。でも…!」

「でも?」

「…何でもない…」

ビンセントは親指で額を搔く。

「荷物まとめる。今日は俺の部屋に泊めるから、明日帰れ」

「兄貴の部屋に…?」

「文句あつか?」

「う、ううん…」

ビンセントがユリアのバッグを持つ。

「背中、痛むか?」

「ううん。大丈夫」

「そうか」

彼は、医務室からユリアを連れ出すと、大きくため息をついた。

「ユリア、ちょっとこの先で待ってる」

「あ、うん…」

後ろめたそうに駆けていくユリア。

彼女が曲がり角に消えていくのを確認すると、ビンセントはゆっくり振り返った。

「エレナつつたっけ? あんた」

ビンセントはエレナを見分するように睨む。

「覚えてくれていたんだ。うれしいわ…」

「お前グラムの女だろ?」

「元…ね」

タバコを大きく吸う。

「何の用だよ」

「彼女、本当にあなたの事が大事なのね」

「あ?」

「うわごとであなたの事呼んでたわよ」

「何が言いてえんだよ」

「あなた何も分かってないわ。あなたは女の事を棧橋の金具ぐらいにしか思っていないでしょ？ よく考えてごらんなさい。あの子はあなたの家族である前に、一人の“女”なのよ…?」

エレナが医務室に戻る。

「話は終わり。彼女が待つてるわ。もう行って」

まるでビンセントを閉め出すように扉を閉めるエレナ。

ビンセントは無言のまま、ため息をつきながら額を押さえた。

「厄介事だな？」

「はい？」

ガルスという言葉に、グラムが思わず聞き返した。

「お前が私の前に居るのはいつも、厄介事が起きる前か起きた後だ」

「世の中厄介事ばかりですよ。その度に気をもんではこちらの身が持たない」

ガルスが一瞬、苦笑を漏らす。

「そつだ…な…」

グラムはガルスに言った。

「今朝の騒ぎの件ですが、原因はビンセント〓キングストン…失礼、キングストン大尉のようです」

「彼が？」

「侵入した例の彼女…名前はユリア〓キングストン。ビンセント大

尉の“いとこ”でした。どうやら彼を連れ戻しに来たようで

「たいした娘だな…。それで今は？」

「キングストン大尉が自宅へ連れ帰りました」

「どうする、ミラーズ。これほどの騒ぎになれば、サンヘドリン内
部と言えど、治安局が黙っていないぞ」

「ええ。先ほど治安局から捜査官が派遣されてきました。しかし彼
らの興味は彼女ではなく、専らIDの方で…」

グラムの顔を見据えるガルス。

「ご心配なく。彼らには協力的な態度をとっておきました」

彼がそう言う間に、ガルスは椅子から立ち上がり、窓から外を眺
めながら呟いた。

「家族か…」

長い沈黙が続いている。

それは車に乗ったその時からずっと。

彼女はじっと、窓の外を流れる街の明かりを眺め、彼は運転だけ
に集中している。

びりびりとした突き刺すような空気。

触れてしまえばすぐにも簡単に崩れてしまうかのような雰囲気。
とても会話ができる様子じゃない。

大きくため息をつくユリア。

この車に乗ってから、通算50回目のため息。

「（ため息数えるようじゃもうおしまいだなあ……）」
心の中で呟く。

「腹減ったか？」

ビンセントが今の雰囲気を払拭するように、ユリアに話し掛ける。

「え？ あ、うん……少し」

突然の言葉に慌てるユリア。

ビンセントはそんなユリアを尻目に話し続けた。

「インスタントしかねえからな。つつても、俺も晩飯まだか……」

そう言って苦笑いするビンセントの肩口を、ユリアはじっと見つめていた。

「大尉……」

「あ？」

「兄貴、あそこじゃ大尉なんだ……」

ビンセントの肩口を飾る階級章のワッペン。

彼はそれを隠すように、自分の肩口を掴んだ。

「階級なんていらねえ」

「偉いんですよ？大尉って」

「さあな。傭兵に階級なんていらねえ。戦うには武器がありゃいい。

階級なんて後から付いてくるお飾りだよ」

窓の外を、摩天楼の光が細い帯となって流れていく。

「なあ兄貴……ハリーはどこ？」

「ハリー……？」

突然、ビンセントの顔が青ざめる。

「ハアライイー……！！」

叫びを上げ、クルマのアクセルを踏み込むビンセント。

「なっ！どうした？兄貴！」

「黙ってる、ユリア！舌噛むぞ！」

さらにスピードを上げる車は、他の車を縫うように走り抜け、彼の住む宿舎の地下駐車場へ吸い込まれていく。

「降りるユリア！ 早く！」

まくし立てるビンセント。

「え？どうしたんだよ？いきなり……」

「いいから早く！」

渋々車を降りるユリア。

ビンセントは彼女に、部屋のキーを投げ渡した。

「先に部屋で待ってる！鍵かけるよ！」

ユリアを置いて走り去っていくビンセント。

突然の出来事に目を点にしながら、彼女は手の平の中のキーを見つめた。

叫ぶユリア。

「兄貴のバカー……！」

「ラカンでしたっけ？」

エステルは彼にそう尋ねた。彼は答える。

「彼は詳しく述べてないし、その事についてフロイト派の考えはあまり適切じゃない」

部屋の隅に置かれたキングサイズのベッドに、グラムは疲れた表情で腰掛けている。

「あなたの考えは？」

「愛が有ればいい……だ……」

ベッドの上で膝立ちになり、後ろからグラムの首を抱く。

「今の私達みたいに？」

「少し違う…な…」

彼はエステルの首筋に優しくキスしながら、シーツの上へゆっくり押し倒した。

「顔が疲れてる」

エステルがぼつりと呟く。

「甘い物は別腹」

グラムはそう言って、彼女の唇を塞いだ。

部屋の電話が鳴る。

彼はそれを無視して、エステルの身体を強く抱き寄せる。

「グラム…電話…」

「聞こえない」

「ちゃんと出てください」

「嫌だ」

彼はまるで子供のように彼女の言葉をはねつけ、エステルの肌を優しく撫でる。

「グラム」

「一週間ぶりなんだぞ？」

エステルは彼の顔を両手で押さえ、じっと目を見つめてもう一度言う。

「ちゃんと出て」

グラムは渋々受話器を取った。

「何だ。…何？ 拘置所？ それか？ …ハリー？ 誰だそれは？」

「本当に怒ってない…？」

彼は恐る恐る彼女に尋ねた。

騒ぎの後、本登録を済ませ、部屋のキーを受け取り、荷物を起き、一息着いた彼の目の前には、しかめつらした春雪がいた。

「全然怒ってないですよ」

春雪は彼から目を逸らしたまま答える。

「本当に…？」

「怒ってなんか…いないです…」

怒ってないのは確か。

ただ、彼女の声は泣き声だった。

「泣いてるの？春雪…」

「泣いてないです」

鼻を啜る春雪。

「春雪…」

「無事でよかったです…」

「え？」

「若様に何も無くてよかったです…」

「春雪…」

「…若様は私の全てなんです…。もし若様になにか有ったら私は…」

「ごめんね…春雪…。もう二度と、君に心配させないから…」

「若様…」

一刃は春雪の肩をそっと抱きしめた。

「サンヘドリン保安部地下拘置所」

「ええ、お話は太左から伺っています。ええ、はい。健康状態には問題ありません」

“には”？

「はい、なんと言いますか、異常が無すぎるんです。精神？いえいえ：彼はまるで聖人のようですよ。どうやら悟りの境地に達したようで…」

『聖人』！！

「ハリー＝マクドガル。面会だ」

ハリーの居る独房の前に立つビンセント。

ハリー＝マクドガル、23歳独身。彼女いない歴23年。（未だ更新中）

職業は…

“大型飛行艇パイロット”

あの時彼と共にいた、あの男。

「ハリー…お前…」

ビンセントは思わず、驚嘆の声を漏らしていた。

香を焚き、薄っぺらなベッドの上で座禅を組むハリー。

その姿はまさに…

「おい！ハリー！」

ハリーを呼ぶビンセント。

しばらくして返事が返ってくる。

「アッサラーム・アライクム」

続けてこうも。

「アッラー・アクバル」

吹き出すビンセント。

膝が笑い、腰が砕ける。

「お、おま、お前…いつからラビになったんだ？」

ハリーは答える。

「アッラー・アクバル」

ビンセントは続けて声を掛け続ける。

「ハリー？」

「アッラー・アクバル」

「俺の事覚えてるかー？」

「アッラー・アクバル」

「お前の名前は？」

「アッラー・アクバル」

「誰が何て言おうと？」

「アッラー・アクバル」

「毎日三食？」

「アッラー・アクバル」

ビンセントの横隔膜がこれでもかと痙攣する。

すると突然、ハリーの目から涙がこぼれだした。

「旦那…？」

「ハリー！」

「旦那！」

ハリーが鉄格子に縋り付く。

「旦那！よくご無事で！」

ビンセントが優しく微笑む。

「ああ、待たせちまって悪かったな…」

「マジで心配したっす！俺、まさか忘れられたんじゃないか？

っ…」

「（おっく…）」

ビンセントが、わざとらしく目を輝かせる。

「まさか！ そんなことあるわけ無いダロ？」

キラリと輝く白い歯。

「そうっすよね〜！あはは！」

屈託の無い笑顔を見せるハリー。

それを見たビンセントは、安心した様子で大きいため息をついた。

「旦那…どうかしたんすか？」

「あ？」

「あ、いや…少し様子が…」

ビンセントの表情を見て、心配した様子で話しかけてくるハリー。

ビンセントはまるで観念したかのように、ゆっくり話し始めた。

「実は持って帰って欲しい物があるんだよ」

「何すか？」

「ユリア」

ハリーの目が点になる。

「…ひょ？」

「いやさ…今朝うちに殴り込みに来やがってよ。傍に置くわけに

はいかねえから家に帰す」

「あれ？ 旦那…。なんか話しのつじつまが…」

「それでお前が帰るついでに乗せてってって事な訳で…」

「いやだから話に矛盾が…」

ビンセントは大きいため息を着いた。

「いつかはバレるから話しとく。俺は今、サンヘドリンの軍属なん

だ」

ハリーはけらけらと笑った。

「旦那！ そんな冗談いくらなんでも通じませんって！ だって旦那は…」

言葉

を飲み込むハリー。

ビンセントの服装はラフながらも、確かにサンヘドリン尉官の物だった。

「旦那……」

「俺、あつちじゃ死んだ事になってんだ。今更戻っても、俺の居場所はもう無え……。それなら俺は、ここに残って、化け物供と戦った方がいい。給料も悪くねえし……」

「ユリア姐さんは納得してくれるんすか？」

「あ？」

「ユリア姐さんは旦那の事を心から……！」

「お前はどつなんだ？」

「えっ！」

「惚れてんだろ？ ユリアに」

「お、俺はそんな……！」

「お前にしか任せられねえだ……。俺にはもう、お前にしか……」

「旦那……」

ハリーはビンセントの性格をよく知っている。

スチャラカで女好きで、本気なのか冗談なのか分からないところも。

でも今の彼は本当に真剣だったと、ハリーは分かった。

何年も共に仕事をこなしてきた親友だからこそ……。

「旦那……」

「あ？」

「俺、ユリア姐さんの事を最後まで護るっす！ 旦那の思い、俺には分かったっすから……」

「すまねえ……ハリー」

「ところで旦那……」

「あ？」

「ユリア姐さん、少しは胸大きくなっただっすか？」

ビンセントの右手がハリーの顔面を掴む。

「おっぱい好きの口はどの口だあ？」

「す、すんません！か、勘弁……！」

「貧乳」

「え？」

「相変わらずの貧弱乳」

「そ、そうっすか……」

ハリーの顔を掴んでいたビンセントの手が、ハリーの肩に回った。

「まあ気落とすなや！ 安心しやがれ、ハリー！ 世の中の半分は……おっばいで出来ている！」

「おおっ！」

「さあ共に歌おうではないか！」

肩を組みながら、拳を上下に降り、『おっばいおっばい』と連呼するビンセントとハリー。

それを見ていた看守は思わず呟いた。

「馬鹿だ。絶対馬鹿だ、あいつら……」

「ひあっ!?!」

ユリアの背中に寒気が走った。

バスルームで、頭からシャワーをかぶっていると云うのに、物凄く趣味の悪いマーチが聞こえた気がする。

それと共に、ビンセントの声も。

彼女は自分の肩を抱いた。

取り戻したかったものが、今度は自分を拒絶する。

泣きたい程悲しい筈なのに、涙が出てこない。涙なんてとつくに枯れたらしい。そんな自分を鏡で見れば、ひどくやつれて見えた。バスルームの壁に額をつく。

彼女の肩を、お湯に濡れた黒いストレートヘアーが滑り落ちた。

「クソ兄貴…」

その時、玄関のドアが開く音が。

「（誰…？）」

シャワーを止め、壁に張り付きながら足音を確かめる。

「（兄貴じゃない！）」

彼女はバスルームの扉を静かに開け、タオルの下に隠していたスマートフォンを手に持った。

身体にバスタオルを巻く。そして足音を忍ばせながら、人影に忍び寄る。

「動くな！」

襟首を掴み地面に引き倒してから胸元を押さえ付け、馬乗りになりながら銃を突き付ける。

「きゃっ！」

華奢な声を上げる人影。

胸元を押さえるユリアの手には、柔らかな感触があった。

「や、やめてください…！」

「お、お前は確かか！？」

涙目で抗議するイオ。

そこにビンセントが帰ってくる。

「ただい…ま…？」

ほとんど裸の状態でイオに馬乗りになるユリア。床に倒れながら涙目のイオ。イオの胸を掴んでいるユリアの左手。

この状況はまさに…

「お、お帰り兄貴…」

「た、助けて下さい、ビンセント…！」

「って言うか何でイオがここに！？」

「わ、私は忘れ物を届けに…」

「ご、誤解するなよ？」

イオが涙目で訴える。

「誤解じゃないもん…いきなり押し倒されて、胸触られたもん…」

「そ、そんな事してない！」

ユリアが急いでイオから降りる。

だが時既に遅し。

「ユリア…そうかお前、その趣味が…。失礼しました。どうぞ続きを。ここで見てるから」

「このクソ兄貴！ ドスケベエロ大魔王！ 変態貴公子！」

鉄拳一発。

「…グラム、いまボロ雑巾を裂いたような男の悲鳴が…」

「聞こえない」

「…あん…」

ぶつぶつと文句を言いながら服を着るユリア。

イオの目の前には、のびたビンセントが居る。

「ビ、ビンセント！生きてますか！？」

心配そうにビンセントの身体を揺するイオ。

その姿をユリアは、羨ましいそうに見つめていた。

「大丈夫ですか？ビンセント！」

「そんなに兄貴が大事？」

突然ユリアが、イオにそう尋ねた。

「え…？」

「そんなに兄貴の事が大事かって聞いてんの」

イオはユリアの瞳を見つめ、しっかりとした口調で答えた。

「大事ですよ？ 私はイクサミコで、彼は私の唯一の主人ですもの」

「兄貴ドスケベだよ？ それでもいいの？」

「それでも彼は、私のユーザーです。彼の行く所へ私も行きます。Hなのは困りますけど……」

頭を掻くユリア。

「なあ、あんたイオって言ったっけ？イクサミコってみんなそうなのかい？」

「え？」

「だからさ……、なんか、恋人みたいに……」

顔を赤らめるユリア。

イオは答えた。

「恋人と言うより……何でしょう……？うまく説明出来ません。ユリアさんは？」

「え……？」

逆に質問仕返してくるイオに、ユリアは思わず困ってしまった。

「うーん……あー……あたしは……恋人……かな？」

「えええっ……！」

「嘘！嘘！冗談！兄貴とあたしは家族なんだ。兄貴はあたしの唯一の肉親……。あたしの唯一の……」

「唯一の……？」

「うんや、なんでもない……」

「ぶるあ……」

さっきまでのびてたビンセントが、突然起き上がる。

「ビンセント！」

ビンセントの鼻にティッシュを詰めるイオ。

「大丈夫ですか！？ビンセント！」

「んー……晩飯作らなきゃ」

「え……？」

鼻にティッシュを詰めたまま急いで立ち上がるビンセント。

その後を、イオが追う。

「夕食なら私が……」

「大丈夫！　大丈夫！」

「でも……」

「平気だよ。イオ」

イオを引き止めるユリア。

「ああ見えて兄貴、案外家庭的なんだよ」

そう言っている間に、ビンセントは手早く3人分の食事を整えていた。

まず冷凍庫から、冷凍のラザニアを取り出し、包装紙を破いてオープンの中に入れスイッチオン。

その間、卵を割ってそれを溶き、食パンを浸す。

フライパンを温め、油を敷く。

そしてその上に、先程の溶き卵を染み込ませた食パンを乗せて火を通す。

油の弾ける音が響き、食パンと卵の焼ける甘くも香ばしい香りが瞬く間に広がってゆく。

さてその間にもうひとつ。

冷蔵庫から取り出したミックスベジタブルをさっと湯通ししてポウルにあける。

そしてその中に、少量の無塩バターと塩を混ぜ、パセリを振り掛ける。

そうする間に、トーストが焼き上がる。

両面をこんがりきつね色に焼き上げられたトースト。

それを斜め半分に切り、トレーに盛る。

付け合わせのミックスベジタブルも添えて。

オーブンが軽快な音を立てて焼き上がりを知らせる。

オーブンの扉を開ければ、焼けたチーズとジェノバソースの香りが一気に開放され、あつあつのラザニアが出来上がっていた。

「おい、出来たぞー」

まるでシェフのように素早くディナーをこしらえるビンセントの姿を、イオはじっと見ていた。

見ていたと言うよりは、見とれていたのかも知れない。
「な？ 言った通りだろ？」
ユリアが自慢げに、ビンセントを指差した。

食卓に調う晩めのディナー。

それを囲む3人は、どこか嬉しそうな顔をしている。

「それじゃあ…」

ビンセントがフォークを持った。

そして…

「いただきマンモス！」

ユリアも一緒に、

「いただきマンモス！」

「マ、マンモス！？」

イオが思わず声を上げる。

「どうした？イオ。冷めちまうぜ？」

「いえ、あの、“いただきます”って日本語ですよ？ それにマンモスって…」

「は？ うちの昔からこれだよ？」

ユリアが、まるで自分達が当たり前のような顔で言うてくる。

「（もしかして、私が知らないだけ？）」

そんな馬鹿な。

「まあ、気にすんなよ！」

「はあ…」

うまく言いくるめられるイオ。

彼女はフォークを取り、あつあつのラザニアを一口。

「熱っ！」

「気をつけるよ？ イオ」

「兄貴タバスコ取って」

ユリアはタバスコを惜し気もなく振り掛ける。

「美味しい…」

イオの口から思わず漏れた言葉。

温かいラザニア、こんがりと焼けたトーストは適度に甘く、ミックスベジタブルは口の中でプチプチと踊りながら野菜そのものの甘みと食感が舌の上に広がる。

「気に入って頂けて恐縮です。お嬢さん」

おどけるビンセント。

それを見て笑うユリア。

3人だけの、慎ましくも温かいディナーは、笑い声と共に遅くまで続いた。

「遅くまでありがとうございました」

玄関に立つイオを、ビンセントが見送っている。

「気を付けてな。また、遊びに来いよ」

「はい……」

しばし見つめ合う二人。

「それじゃあ……」

「なあ、イオ……」

「はい？」

「ありがとな」

そう言っただけでイオを送り出すビンセント。

その様子を、ユリアは影から見ていた。

玄関からビンセントが戻ってくる。

ユリアは急いで寝室に入った。

後を追うようにビンセントも。

「楽しかったね、兄貴！」

ユリアがビンセントに話し掛ける。

「ああ」

ビンセントは押し入れから毛布を取り出しながら、素っ気の無い返事を返した。

「まだ…怒ってる？」

ビンセントが押し入れの扉を強く閉めた。

「もう寝ろ、明日は早いぞ。俺はソファで寝る」

枕を強く抱きしめるユリア。

毛布を持って寝室から出ていこうとするビンセントの背中に、ユリアが抱き着いた。

「ユリア…？」

「何で私達の事を見捨てたの…？ 生きてるならどうして帰って来てくれないの…？ なんで…」

彼女の声が、次第に涙声へ変わっていく。

「兄貴は…金とか名誉とかそんなんじゃないやなくて…いつもあたし達の為に戦ってくれてた…。今でもそうだよね…？ そう信じていいんだよね…？」

彼の背中に縋り付くユリア。

そんな彼女の姿に、過去の記憶が重なる。

『ごめんな、ユリア…。兄ちゃん仕事に行かなきゃなんねえんだ』

『やだやだ！ 兄たん行っちゃやだ！』

『参ったな…』

『ぐすつ…』

『泣くな、ユリア…。幸福の女神様は、泣き虫が嫌いなんだ』

ビンセントが、ユリアの腕を振りほどく。

「離せよ…ユリア」

「兄貴…？」

「信じていなくてもいい…」

「え…？」

「今の俺は！ …自分の為に戦ってたんだ…」

そう言って、ビンセントは寝室を出た。

酷く身体が重く感じる。

空気が、まるで深海の水圧のように…

静寂が、耳を突き刺すかのように…

全てが重く、痛い。

ソファーに座り息をついても、度のきついアルコールをいくら飲んでも、何も変わらない。

空になったグラスとボトル。彼はグラスを壁に投げ付けた。

グラスが砕け、破片が床に飛び散る。

ビンセントが、力の無い口調で、静かに呟く。

「許してくれなんて…、言えねえよなあ…」

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT15 極大射程（前書き）

・男の決意と女の望み……。勝つのはどちらか。

ACT 15 極大射程

Chapter 1

彼が彼女に託した物がある。

幾つもの修羅場をくぐり抜け、彼と一体になってきた鋼鉄の軀。

今や長き眠りに就いた、“長い腕”と呼ばれる赤銅色の機動装甲。

ロンギマヌス。

「時間だ」

見ず知らずの保安員が、椅子に座る彼女に言った。

私は何故、立ち上がるのを躊躇っているのだろう。

諦めた筈なのに…。

朝、あいつの部屋を出た時から分かっていた。

もう同じ世界にいない、と。

本当はずっと前から諦めていたのかも知れない。

サンヘドリンから、そして統合体政府から届いた死亡通知。

最初はみんな信じなかった。

あいつが生きてると信じてた。

でも時が経つにつれ、みんなの期待は薄れていく。

『どうせいつかは死ぬ身だ』

私も次第にそう思うようになった。

忘れなければと思うように。

でも気付いてみれば、誰も帰ってこないあいつの部屋で眠り、あ

いつの物だった“遺品”を見て泣く自分がいた。

傭兵はいつか死ぬ。

頭では分かっている事。

でも、心には受け入れられない事。

その事が頭を巡るうちに、私は生きてるあいつに会い、あいつの

背中に縋り付き、あいつのベッドで眠っていた。

正直、自分でもなぜこんな事をしたのか分からない。

ただ会いたかった。

会いたくて、会いたくて…

でもあいつは確かに死んでいた。

私が見つけたあいつは、“傭兵・ビンセントⅡキングストーン”ではなく、“サンヘドリン士官・ビンセントⅡキングストーン”になっていた。

あいつは私に言った。

「もう戻らない」と。

私にロンギマヌスを預け、自治区のみんなには死んだことを貫き通す事を。

私は立ち上がって、帰りの舟に向かう。

私を送り届けるパイロットが、ハリリーである事もあいつから聞いた。

ハリリーにとっては災難だったと思うけど、生きててよかった。

舟に乗った私に、ハリリーは全く変わらない笑顔で挨拶した。

そしてこう尋ねた。

「本当にいいのか」と。

私はハリリーの顔をひっぱたいた。

叩かずにいられなかった。

ちよつとかわいそうだったけど、喜んでたからまあいっか。

私達の乗る輸送機が、ハリリーの操縦で滑走路に入る。

餞別替わりか、あいつは飛び切り大きな輸送機を用意していた。

ハリリーはご機嫌だけど、うちの近くにこんな大きな輸送機降りれるっけ？

離陸体勢に入る機体。

ハリリーが管制塔と話している。

この機が飛び立てば、ここには二度と戻れない。

でもそれは、あいつが望んだ事。

だから私は、この舟に乗る。

「えっと…それで何でしたっけ？」

朝のハンガーで、レイズがサブに聞き返した。

答えるサブ。

「だから、バイパス回路！機体側のコンピューターに組み込んでおいたっす。出撃毎に使い捨てなんすけど、サラさんの負担は…って聞いてます？」

「え？あ、すみません…」

上の空のレイズ。

彼の心は別の事に向いていた。

「大丈夫っすかね？」

サブは術長にそう尋ねた。

「まあ、急こしらえだからなあ…。お嬢ちゃんがいりゃあもっとなんも作れたけどな」

「いや、回路の事じゃなくて、シエーファアのみんなっす」

「シエーファア？ああ、そっぴゃあビンセントの坊主も対ビームコーティングの説明上の空だったけな」

「やっぱり“あれ”っすかね？」

「あれ” だろうなあ…」

「術長ー！」

一人の整備士が術長を呼ぶ。

「あー？」

「菊地金属から例のブーツ、届きましたー！」

「おーう、ご苦労さん」

術長はツバを持って、キャップを被り直した。

「サブよう、お前変型ロボは好きか？」

「行ってしまいます」

エステルはグラムにそう言った。

「ユリアか？」

「ええ、あのままでは少し気残りです」

「確かに…な」

「放って置かれるんですか？」

グラムがシャツを着る。

「タベはその事ばかり考えていたのか？」

「少し心配なだけです」

「心配か…」

グラムは着替えの途中でエステルの方へ振り返った。

「今は地球の方が心配だがね…」

何も無い地面を、2機のHMAが疾走する。

音、振動、視覚…

手に取るように伝わる情報も、今は不思議と現実味が無い。

「CAUTION…CORD-02」

イオがビンセントへ、敵機に対する対応を伝える。

「CORDI02…“迫撃による殲滅”か…。各機、コンディションを」

追従するレイズ機。

「こちら01、レイズ。いつでも行けます」

巡航形態へ変型した水蘭が、後から2機に追い付き、変型を解く。

「こちら水蘭、準備よしです」

緊張した口調。

「肩の力抜きな、若旦那。力むもんじゃねえ。けど気は抜くなよ」

「はい！」

ロンギマヌスが2機に先行する。

「ビンセント、レイズ機から通信です」

回線接続。

「どうした、レイズ」

「いえ、あの…ビンセントさん」

「なんだよ」

「良いんですか？」

「あ？」

「ユリアさん、見送りに行かなくても……」
無線から、しばらく沈黙が届く。

「うるせえ……」

いつに無く、ドスの効いた太い声。

普通に怒ってる。

前方4000。

敵機捕捉。

「行くぞ！お前ら付いてこい！」

次の瞬間、周囲の空間が消える。

「何だ？急に」

モニターにウインドウ。

「訓練は中止。全員戦闘配置につけ」

唐突な指示を出すグラム。

次の瞬間、無線のスピーカーから警報が鳴り響いた。

「総員第一級戦闘配置！ フィラデルフィア管轄地区に、空間跳躍
ゲートの出現を観測！ 繰り返す！ 総員第一級戦闘配置！」

警報は整備部にも届く。

普段は笑顔の絶えない整備部の面々も、この時ばかりは真剣な表情に戻る。

術長とサブも、例外ではない。

「ちくしょー！こんな時に！」

レンチ片手に声を張り上げるサブ。

「しょうがねえサブ…、この子の身体ん中拝むのは後回しだ」

水蘭の構造解析をしようと企んでいた二人は、即座に気持ちを切り替えた。

術長が叫ぶ。

「出撃準備急げ！ オートカノン、マシンカノン、ビームカノン、M-90、その他武器弾薬！ 40秒で支度しろ！ ダラダラしてるしてる奴あ俺様が直々にぶち殺す！」

術長の一声で、たちまち戦闘体勢へ突入する整備部。

乱暴だが、これが彼らの気合いの入れ方。

「どうしたんだよ、ハリー」

ユリアがハリーに尋ねる。

彼らは未だに離陸出来ずにいた。

「いやー…いきなり離陸許可が取り消されて…」

「おいハリー…あれ…」

ユリア達の乗る輸送機の、何倍もの大きさのスペクターが、轟音を立てながら何機も飛び去っていく。

凄まじい迫力に啞然とするハリー！

「な、何かあつたんすかね？」
ユリアが答える。
「奴らが来たんだ…！」

術長の怒号が響く中、彼はコクピットの中へ身体を滑り込ませた。

「機体が間に合つてよかつたよ。春雪」

「そうですね。何もかも突然でしたから」

「敵もだね…！」

機体起動。

ブリーフィングモード。無線にグラムの声。

「緊急出撃だ。4分前、フィラデルフィア管轄地域内でヴァリアンのゲートを観測。直後から支部部隊との交戦が始まっている。支部部隊と本部増援による必死の抗戦で今は膠着状態が続いている。ただ、いつ均衡が崩れてもおかしくない。その前に我々が交戦部隊の直前へ出て、一気に攻勢へ転じる。レイズとビンセントは迎撃装備で出撃。降下地点で即座に布陣、隊を立て直せ。一刃！」

「はい！」

「お前は本部で待機しろ」

一刃が怪訝そうな声で聞き返す。

「待機…ですか？」

「そつだ。お前は残つて、別命があるまで現状を維持。非常時に備えろ」

「大佐！ 僕は…！」

「一刃！ 前回とは訳が違う。それにお前が不要な訳じゃない。非常事態に備えろと言っているだけだ。幸い、お前の水蘭は脚が速い。直ぐに出れるように、第三滑走路で待機している」

「…わかりました」

一刃の了承を確認したグラムは、デйкаイオスのコクピットの中で大きく深呼吸した。

「行くぞ、エステル」

「はい」

グラムが号令を出す。

「シエーファーフント、出動！！」

「シエーファアー、水蘭を除き全機、スペクターへの搭載完了しました」

「スペクター第二陣、一号機から三号機までの離陸を確認…」

本部司令室で、オペレーターが部隊の出撃情報を報告する。

「もう少し近くなら海軍が使えたのだが…」

ガルスはため息混じりの声を出していた。

「“ブロークンアロー”は？」

「まだ受けていません」

ガルスは髭を摩りながら考え込んだ。

「デйкаイオス到着前に膠着状態か…」

取り留めの無い会話が断続的に続いている。

高度40000ft、時速1000kmで作戦領域へ向かう、大型全翼式輸送機・スペクターの中、スタンバイ状態の機体コクピット内は暗く、明かりといえばコンソールの発する微かな光のみ。

息が詰まるような閉塞感も、いつもは、イクサミコの発する温かい生気と言葉が掻き消してくれるが、今の彼にとっては鬱陶しいだけだった。

「本当にそれで良いんですか？」

イオが、既に幾度も繰り返した質問を再びしてくる。

何度も同じ答えを返したというのに。

「あのままでは……」

「うるせえ……しつこいぞ、イオ」

ビンセントがイオの言葉を掻き消す。

いらついた口調。

「ユリアは家に帰す。俺は既に死んでる身だ、その事を貫き通しゃ面倒はねえ」

「あなたはそれで良いんですか？」

「それしか無いだろ……」

「意地っ張り……」

ビンセントの言葉にイオが呟いた。

「何？」

「意地っ張りって言ったんです！」

「何で俺が意地っ張りなんだ！？ 言ってみろ、おい！」

大人げなく、イオを怒鳴り付けている自分に気付く。

「すまねえ…イオ…」

「…怒鳴らないでください…ビンセント…怒鳴らないでください…！」

イオはその大きな瞳から大粒の涙を零していた。

「…すまねえ…イオ…。でも、頼む…！聞いてくれ！これは俺とユリアが決めた事だ。悪いがな、イオ…お前は口を挟まないで欲しいんだ…」

操縦桿を強くにぎりしめるビンセントに、イオは小さな声で呟いた。

「だったら何故あの時…私に夕食をご馳走してくれたんですか…？」

「イオ…？」

「…私馬鹿だから…たったそれだけの事で、みんなと…あなたと家族になれたって勘違いしちゃったじゃないですか！」

「待てよ、イオ！俺は…」

「本当に嬉しかった…。優しくしてくれて…ユリアさんも笑顔で…嬉しくて楽しくて…。おかしいですよ…人間でもないのに…」

スペクターが、作戦空域に到達する。

「…ビンセント、…私は人間に生まれたかったです」

「イオ…！」

「作戦領域到達。降下領域到達120秒前。全機降下後、スペクター編隊離脱。カウントダウンへ入ります」

涙を拭い、ビンセントの言葉を遮るイオ。

彼に、イオへ返す言葉は一つも無く、ただ彼女の声に従うしかなかった。

スタンバイモード解除。機体が一気に息を吹き返す。

システム、アクティブ。

外には、他の部隊が乗るスペクターが、あと四機。

そしてそれに追従するエスコートファイターが6機。

全ての機の先頭を、デイカイオスが飛行している。

「デイカイオスから全機へ。降下後は各機スリーマンセルで行動。分隊支援火器を装備した隊は後方で布陣。レイズとビンセントは、部隊中央で敵の反攻に備える。我々は先に編隊から離脱する」

デイカイオスは編隊を離脱。

単独での行動を開始したデイカイオスの後方で、スペクター編隊はHMA射出体勢に入った。

「降下30秒前」

「聞いてくれ、イオ……」

ビンセントは縋るような口調で訴える。

「俺は……お前を“物”と思った事は一度も無え……！ それだけは信じてくれ……」

スペクターのハッチが開き、ビンセントの乗るロンギマヌスは、カーゴから空中へ放り出された。

機体は巨大な空気抵抗を伴いながら地面へ降下していく。

戦場へと向かって。

「盗み聞きはいけませんよ？」

開かれた通信回線。

ロンギマヌスに接続されたそれは、受信のみの“盗聴回線”だっ

た。

「なぜか昔の私たちを思い出してな……」

グラムの言葉にエステルが微笑む。

「なら、心配はいらないわね……」

モニター一杯に、ヴァリアントの群れが映った。

「目標捕捉、ソルジャータイプ数150、距離50000」

「降下部隊は？」

「全て規定のLZに着地しました」

デイクイオスは敵射程内へ侵入。

ソルジャーが、上空のデイクイオスに向かってビームカノンを撃つてくる。

「絨毯爆撃をかけながら行く。ミサイル全弾発射、ホーミングレーザーはミサイルのロード中2秒の間に斉射しろ。全領域制圧砲を起動。自動照準で対空防御！行くぞ！」

「了解」

デイクイオスの周囲を囲むように、五つのエネルギー塊が現れる。次の瞬間、それらの兵装が開放された。

射出された無数のミサイルが、ソルジャーの群れの中で炸裂し、大輪の炎華を咲かせていく。

降り注ぐホーミングレーザーの雨。

エネルギー塊から放射される極太のアクティブビームが、空中の敵を焼き払ってゆく。

群れの奥へ進んでいくデイクイオス。

その時エステルが、前方に巨大なエネルギーを感知する。

「高エネルギー反応検知」

グラムはデイクイオスを徐々に減速させ、やがて空中で静止。

デイクイオスの目の前で空間が歪み、巨大な質量物：リベカのネクロフィリアが現れる。

「また会ったな…デイクイオス！」

「いつもいつも勤勉だな。これもお父様とやらの指図か？」

「うるさい！ 私は自分の意思で戦っている！ 幼稚な指揮系統のきさまら有機生命と一緒にするな！」

「ならそれに負けるお前は粗大ごみだな」

「ほざくな！ お前に負けてから私の毎日は地獄のようだった…。

辛い修行：お父様のお仕置き…それを乗り越えた今日の私は一味違
うぞー！」

圧縮空間の中から4本の剣を抜くりベカ。

対するグラムは、亜空間コンテナからプレッシャーカノンを取り
出しリベカに向けた。

「そこまで言うならしょうがない。相手をしてやろう」

次の瞬間、二機は一瞬で空へと消えていった。

他にも同じような人間が居るのだろうか？

戦いで心を埋める人間が。

自分が産まれた時から続いていた戦争。

二つの戦争を跨いで未だに続いている自分の人生。

自分の生まれを呪うべきか、世界を呪うべきか、産まれた時から
生きる道は定められていた。

武器を取り、鋼鉄の機兵に身を包んで地獄のような戦火に己を曝
し、そしてそこから帰る。

何のために？

戦争が日常の世界で、自分は何のために戦っているのが、時々

解らなくなる。

過去に何度も、様々な人間に問われた事。

その度に返す答え。

自分の為。

本当にそうだろうか？

自分の心の中にあるこの“もや”のような感覚は何だ？

真実はどこにある？

解らなくなった時は、答えを求め、また戦いの中に身を置く。

ちょうど今の様に…

降下地点の遙か前方、デイカイオスが破壊を撒き散らしながら遠ざかっていくその姿を彼は遠目で眺めていた。

爆炎と閃光の中に飲み込まれていくソルジャー達。

それでもなお続く不気味な膠着状態は、いつもなら極力避けたいと思っっている平地での正面突撃を行うよう、彼を焦らせていた。

「おい、レイズ！」

「はい？」

ビンセントは、自分の後ろに待機していたレイズをいらついた口調のまま呼んで言った。

「お前、170mmのオートランチャー持ってただろ？」

「ありますけど？」

「あれ貸せ」

コクピットの中で、レイズとサラは顔を見合わせた。

「まさか突撃なんてしませんよね？」

目の前にはソルジャーの残存勢力がうごめいている。

「突撃？ しねえよそんなもん…」

「なら良いんですけど…」

オートランチャーを受け取るビンセント。

「俺がするのは…」

ロンギマヌスのメインスラスタを絞り込む。

「単騎突撃だ！」

「ビンセントさん！」

レイズの制止が届く間もなく、なぞったような浅い塹壕の中から飛び出していくロンギマヌス。

機体はまっすぐ、ソルジャーの群れの中へ向かっている。

「何やってるんですか、ビンセントさん！現状で待機でしょう!？」

「お前はそうしてる！俺は今闘いたい気分なんだ！」

「気分って…！」

「敵機接近」

「無線切るぞ！」

ソルジャー達が、ロンギマヌスの接近に合わせてビームカノンを撃ってくる。

彼はオートランチャーをソルジャーの群れに向け、コクピットの中で叫んだ。

「人間一度は死ぬもんだ…！いつでもきやがれ、この野郎…！」

Chapter 2

「同時刻、サンヘッドリン本部中央発令所」

「デイカイオス、大型ヴァリアントと交戦！」

「全戦線は未だに現状を保っています！」

「現在、爆装した空軍機が戦線へ急行中。到着まで1200秒！
ガルスが髭を撫でる。

「シエーファーフントはどうした？」

「出撃した二機とも、現状を維持…いえ…！ 前言撤回！ シエー
ファーフント、敵軍勢下へ急速接近！ 接敵まで80！」

「直ぐに引き返させる！」

「02、無線不通！」

「イクサミコ同士の双方向回線も不通！ 完全なスタンドアローンです！」

突然、発令室に警告音が鳴り響いた。

「どうした？」

「敵勢力後方最奥部に小質量ゲートの出現を確認！」

「質量物のゲートアウトを確認！ 質量推定：ファットネスクラス！」

「目標から高エネルギー反応検知！大出力ビーム兵器の可能性大！」

「データベースに一致なし！ 新型ヴァリアントです！」

「司令、ご指示を！」

大きく息を吸うガルス。

「司令……」

「前回と同じにはしたくない」

ガルスの顔を見つめるレイラ。

彼は一呼吸置いてから立ち上がり、決断を下した。

「現時点から現状の作戦を全て破棄！ 全部隊撤収と共に、局地核攻撃を行う！」

「兄貴……？」

ユリアは輸送機の中で、誰かに呼ばれたような感覚に捕われている

た。

「なあ、ハリー。まだ飛べないのかよ……」

ユリアがぼやく。

未だ離陸許可の下りない滑走路で、機体は足止めを食らっている。

「いやそれがつすね、今度はハンガーに戻れって言うんすよ……」

ユリアがハリーの胸倉を掴んだ。

「何だよ！」

「な、なんか優先的に飛ばす機体があるみたいで……！く、苦しつ！
滑走路後方のハンガーゲートが開き、水蘭が路上に出る。

「珍しいなあ……」

開口一番、一刃がそう呟いた。

「え？」

「あそこに見える輸送機、DA社の超音速輸送機だよ。大出力可変
サイクルエンジンとベクターノズルで大型輸送機ながら超音速巡航
ができるんだ」

「あおう、若様？その輸送機から通信が入っています」

「輸送機から？」

回線接続。

「こちら水蘭、応答……」

「ふざけんじゃないよー！！」

水蘭のコクピット内に、ユリアの怒号が響く。

「ユ、ユリアさん！？」

「優先だか何だか知らないけどこっちはもう……！って一刃！？」

「この輸送機ってユリアさんのだったんですか？」

「そうだよ！なんか文句ある？」

「いえ、ただ、超音速輸送機だなんて、ビンセントさんよっぽどユ
リアさんに早く帰って欲しいんですね」

ユリアの表情が今にも崩れてしまいそうになった。

「そっだよね……そっかもしれない……」

「ユリアさん？」

その時、水蘭に司令部からの指令が入る。

『本部より全部隊へ。敵勢力下に新型ヴァリアントを確認。全ての部隊は現状の作戦を全て破棄。全部隊撤収と共に、局地核攻撃を行う』

「核攻撃！？それじゃあ前線は今頃…」

「おい！核攻撃ってどういう事だ！」

「ピンチ…みたいですね…」

「みたいですよ…じゃねえだろうが！お前は何で出撃しねえんだ！」

「僕には待機命令が…」

「命令が今何だっけ言うんだ！」

「でも大佐は…！」

「あんた、少しは豪気な奴だと思ってたけど違ったみたいだね…。」

あんたとんだ腰抜けだよ！」

ユリアは水蘭との通信を一方的に切断。

ハリーに叫ぶ。

「ハリー！前線の様子が知りたい！無線のチャンネルを探せ！」

「り、了解っす！」

ユリアは心の中で叫んだ。

「（失ってたまるか！）」

「ビンセントさん！」

レイズの声の届かぬまま、ビンセントの駆るロンギマヌスはソル

ジャー達の前面へ飛び出していった。

「来い、この野郎！」

ビンセントの声に呼応するかのようになり、ソルジャー達がビームカノンに撃ってくる。

彼は左手に持ったオートランチャーを3連射しながら迫るビームを寸で回避。

発射した3発の成形炸薬弾が炸裂し、ソルジャーの胴を打ち砕いて爆発させる。

「タンゴだ、踊ってやるぜ！」

ロンギマヌスは、巻き上がる砂埃と爆炎を突き破り一機のソルジャーへ接近。

振り抜かれる超振動ナックルを素早く回避し、ランチャーを叩き込む。

炸裂する炸薬弾。

崩れ落ちていくソルジャーを踏み台にし、前方の一機へ向かって大きくジャンプするロンギマヌスは、ソルジャーから撃ち放たれるビームカノンが装甲表面を掠めるなか、スラスターで大きく加速し、そのソルジャーの頭を蹴り飛ばしてその反動で鋭角にターン。

炸薬弾を横から撃ち込んで着地する。

その瞬間、ソルジャー達が一斉にビームカノンを発砲。

しかし彼はそれを物ともせず、弾幕の中へ向かっていった。

迫るビームの直撃をギリギリで回避しながら、針の穴のような弾幕の隙間を縫って、ソルジャーへ接近していく。

まるで、ロンギマヌスの姿を忌み嫌うかのようにビームカノンを連射するソルジャーにビンセントは、唸りを上げる右腕のパイルバスターを振り上げ、一機のソルジャーの腹へ突き立てた。

打ち出されるパイル。

コアを避けて撃ちこまれた巨大な杭が、ソルジャーの胴体を突き抜ける。

「しばらく付き合ってもらうぜ、ベイビー！」

パイルでソルジャーを貫いたままスラスターを一杯に吹かし、再び前進を始めるロンギマヌス。

他のソルジャー達が浴びせるビームの雨が、機体の楯となっている貫かれたソルジャーの身体を次々に削り取っていくなか、彼は“楯”の横から左腕を延ばし、残り2発の形成炸薬弾を全て撃った。

「オートランチャー、残弾0です」

弾切れになったランチャーを捨て、今度はマシンカノンを連射しながら前進するロンギマヌスは、ビームで穴だらけになった楯にしているソルジャーからパイルを引き抜いた。

次の瞬間、楯代わりにしていたソルジャーが数発のビームによって貫かれ、爆ぜ、砕け散る。

ビンセントは瞬時のうちにロンギマヌスのスラスターを吹かして高く飛び上がり、マシンカノンを連射。

弾幕を張りながら急降下するロンギマヌスに、ビームが掠める。

「南無三！」

地表ぎりぎりでもロンギマヌスの左腕を振り上げビンセント。

彼が振り上げる左腕のマシンカノンに装着された伸縮式のソニッククローが伸び、着地と同時にソルジャーの胸を切り裂いた。

「次ッ！」

まるで餓えた獣のように戦い続けるビンセント。

その姿を、レイズは冷や汗をかきながら見ていた。

「あんな闘い方無茶だ！」

レイズ機がロンギマヌスの後方から高速でやってくる。

突然彼は、モニターに映るソルジャーの群れの奥に違和感を感じ取った。

「サラ、モニター中央最大ズームで！早く！」

「了解！」

モニターに映る、正体不明の物体。

「新型……!?!」

それを見た彼の背筋に悪寒が走る。

「ビンセントさん！ 応答してください！ ソルジャーの群れの奥に“何か”居ます！ ビンセントさん！ …ダメだ！ ビンセントさん無線切ってる！」

「レイズ！」

本部から、ルート権限を用いての緊急発令。

『本部より全部隊へ。敵勢力下に新型ヴァリアントを確認。全ての部隊は現状の作戦を全て破棄。全部隊撤収と共に、局地核攻撃を行う』
う

レイズの顔が青ざめる。

「核攻撃！？このままじゃ…！」

彼がこう言っている間にも、ロンギマヌスは敵部隊の奥へ。

レイズは、機体のスラスタを全力で噴射してロンギマヌスを追い掛け、外部スピーカーで声を掛け続けた。

「ダメだ、ビンセントさん！」

さらに激しくなるロンギマヌスの戦闘機動。

ビンセントは今の戦闘に全ての神経を集中させている。レイズの声には気付いていない。

「駄目だああ！！！」

刹那、砲声のようなレイズの叫び声が、HMAの分厚い装甲を突き抜けてビンセントの耳に届いた。

「レイズ？」

次の瞬間、遙か前方で光点が煌めいた。

「12時方向より高エネルギー反応！」

「くッ！」

彼は右腕でコクピットを守り、咄嗟に回避する。

命中する高出力ビーム。

ビームは右肩を貫き、吹き飛ばす。

「ぐおッ！」

ハンマーで横から殴られたかのような衝撃。

コクピット周りの対ビームコーティングが、大出力のビームパル

スによって瞬時のうちに蒸発する。

パイロット・イクサミコ共に意識レベル低下。

ほんの数秒のブラックアウト。

それでも、コクピットを撃ち抜くには十分な時間。

撃ち放たれたもう一発のビームは、正確にロンギマヌスのコクピットを狙った直撃弾だった。

「…さ…ビン…ト…」

コクピットの中に、レイズの声が響いている。

クレーター内で倒れているロンギマヌス。

命中の瞬間、ロンギマヌスはレイズ機に弾き飛ばされ、ソルジャの爆発で出来たクレーターの中に転げ落ちていた。

「ユリアさん！無線のチャンネル、キタつす！」

「よし！」

ユリアは無線のスピーカーに耳を傾けた。

「う…」

「大丈夫ですか！？ビンセントさん！」

「ただだけ落ちてた？」

「ほんの数秒ですけど？」

「そうか。イオ、無事か？」

「ええ、何とか…」

「機体は？」

「右腕部全損、パイルバンカーを失いました」

「他は無事だな？」

「はい」

「よし、行くぞ」

「ちよっとビンセントさん！行くなって何処へ！？」

「決まってるだろ？奴をぶっ飛ばしに行く！」

「何を言っているんですか！見たでしょ！？敵の新型は“狙撃兵”

！しかもこちらのセンサー範囲外から評定射撃無しで当ててきた！
今出れば接近される前に撃たれます！」

『馬鹿野郎！スナイパーが怖くて傭兵なんかやってられるか！』

『馬鹿はあなたです！先ほど本部から退避命令が出されました！間もなくここに、本部からの核攻撃が開始されます！早くしないとヴ
リアント達もろとも巻き込まれますよ！』

『逃げたきゃお前は逃げる！俺は行く！』

『ビンセントさん！あなたはユリアさんを本当に一人ぼっちにして
しまう気ですか！』

『な…に？』

『帰る所があるなら、待っている人が必ずいます！だから…何があ
つても必ず帰るんです！』

沈黙。

『帰って仲直りするんです。待ってますよ、きっと…』

無線の前で、ユリアは涙を流していた。

自分が待っている人間が、今必死に戦っている。

それなのに自分は何も出来ない…

自分は今何を…

『レイズ！』

『はい？』

『生きて帰るぞ！』

『はい！』

無線の向こうで、お互いの機体を見合うレイズとビンセント。

ユリアは閉じていた目をゆっくりと開け、静かに呟いた。

『行こう、ハリー…』

『へ？』

『兄貴の所へ！』

ハリーは驚きで緩んだ口元を引き締め、強く頷いた。

ユリアは輸送機のカーゴに積み込んだ旧ロングマヌスに乗り込み、
大きく息を吸う。

『兄貴の匂いがする…』

機体を起動。

「ユリアさん！準備はいいですか？」

「いつでもいいぜ！ハリー！」

輸送機が滑走路の真ん中へ進入する。

「ちよっと…？」

一刃が無線でユリアを怒鳴り付けた。

「何やっているのですか！ ユリアさん！ 一体何処に行くんですか！」

ユリアは答えた。

「もう待っているだけじゃ嫌だ。今度はこっちから出向いてやるんだ！」

「出向くってユリアさんあなた…」

「なあ一刃…」

「はい？」

「悪かったな、いろいろ…」

「え…？」

「ごめんな…」

「発ッ進するっす！」

彼女のその言葉を残して、輸送機は数10mの滑走の後に大空へ飛び立って行った。

それを見送る一刃。

彼は奥歯を噛み締める。

「若様…」

「いいんだ！ほって置けば！」

そう言いながらも、彼は何度も空を見上げていた。

ホーミングレーザーの光条が空を切り裂き、炸裂したミサイルの爆炎が空気を焦がす。

デイクイオスとネクロフィリアによる、攻撃の応報。

双方の機動力を十分に用いた高速戦闘が、先ほどから続いている。デイクイオスのホーミングレーザーを軽やかに回避するネクロフィリア。

リベカが、ネクロフィリアの全身からミサイルを放つ。

「ミサイル接近、数40」

グラムは左腕のフォトンマシンガンでミサイルを迎撃。領域制圧砲を発射。

対するリベカは、自分に迫る五本の高出力ビームに向かって、ポジットロンプラスターを発射。

ぶつかり合い融合する二つの巨大なエネルギーは、互いに消滅しあい、太陽のような火球を作り出す。

「前より出来るようになったな！ リベカ！」

「貴様に褒められても…！ べ、別に嬉しくなんかないんだからな！！！」

デイクイオスに切り掛かかるリベカ。

グラムはそれを機体の左腕で受け止め、プレッシャーカノンの砲口をネクロフィリアの腹に突き付けた。

撃ち放たれるプレッシャーカノン。

リベカは素早く、歪曲空間を展開し、プレッシャーカノンの放つ歪曲した重力波フィールドを中和。

それでもその巨大な衝撃は、ネクロフィリアの巨体を大きく弾き飛ばした。

互いに睨み合うデイクイオスとネクロフィリア。

その時、デイクイオスの遙か後方で例の新型がゲートアウトした。

「なるほど…目的は最初から“これ”か…。実験部隊にでもとばされましたか？機械のお姫様」

「黙りなさい！ 黙りなさい！ お黙りなさいッ！！ お父様の命令なら私は何処にでも行き、何にでもなる！ そうだ、今お前を倒せばお父様にきつと頭を撫でてもらえる…！ だがその前に…狙撃兵に狙われて鼠のようにはいつくばっているお前の部下を皆殺しにしてやる！」

「皆殺し？ それはいい。とんだ暴れん坊なお姫様だ」

「何がおかしい！」

「お前に一つ教えてやる。彼らを殺すのは至難の技だぞ？」

「ふん！ たいした信頼関係だ！」

「信頼関係？ 違うな…。彼らは“私の部下”だぞ？ ただ簡単に死んだりするものか。いいかりべカ、よく聞け。我々を、我々の力を、人類を嘗めるな」

「ほざけ！」

リベカは再び、ディカイオスへ向かって行った。

「生きて帰るぞ！」

「はい！」

レイズとビンセントはお互いの機体を見合った。

「俺達は奴のキルゾーンに入っちゃまってる！ 奴はHMAのセンサー有効半径外！ 捕捉されたら最期、確実に殺られる！」

「そのまえに奴のセンサー有効範囲外…出来る限りの遠くへ！何発

避けられるか…」

「考えるな、レイズ！ 頭で考えれば動きが鈍るぞ！」

「ええ…そうですね！」

「3カウントで出る！」

「はい！」

レイズはビームランチャーを強く握り締めた。

「3…」

高鳴る心臓。

「2…」

全身から噴き出す脂汗。

「1…行くぞ！」

レイズは奥歯を噛み締め、スラスターを一杯に吹かした。
機体がクレーターの中から飛び出す。

「撃ちまくれ！」

二機は高速でバツクしながら僅かに残ったソルジャーの残存勢力に攻撃を叩き込んだ。

ソルジャー達が、真ん中の道を空けるかのように両翼から追撃してくる。

「高エネルギー反応検知！ 砲撃来ます！」

一条のビームが、水平な弾道でレイズ機のすぐ横を通過した。

「始まった！」

「動き続ける！ 捕捉されたら終わりだ！」

左右に大きく蛇行しながら機動する二機。

スナイパーからの何発ものビームが、彼らの機体を擦過する。

「すまねえ…レイズ。俺のせいだ…。お前まで巻き込んで…」
レイズの声が帰ってくる。

優しい、落ち着いた声で。

「仲間でしょうか？ 僕たち。同じ地獄に居るんです。死ぬ時も、一緒です」

「レイズ…」

ああ…畜生…かつこいいな、こいつ。

「そうだな…そうだったな…！」

二機の後方に、最初の塹壕が見えてくる。

「見えた！後方5km！」

「帰って来たあ！」

レイズは、腰に下げていたショートバレルの100mmサブマシンガンを抜き、時限トリガーをセット。

前方に放り投げる。

放物線を描きながら飛んでいくサブマシンガンは、その頂点に達したとき、彼のセットした通りに火を噴いた。

偽情報を撒き散らしながら落ちていくサブマシンガンを、スナイパーのビームが貫く。

瞬時に蒸発するサブマシンガン。

その隙にビンセントは、後ろ向きのまま塹壕に飛び込んだ。

「早く来い！」

「今行きます！」

「レイズ！」

声を上げるサラ。

その時、偶然にも致命傷を免れたたった一機のソルジャーが、躯体の質量を使って損傷部を再生させ、レイズ機の足元に向かってビームカノンを発砲。

ビームは、レイズ機のちょうど踝に命中した。

「脚部破損！」

「そんなインチキ！」

膝を突く機体。

「こんガキヤああああ！」

ロンギマヌスのマシンカノンがソルジャーにとどめを刺すなか、スナイパーの砲身がレイズ機を捉える。

「止まるな、レイズ！」

「あ、脚が…！」
発射されるビーム。

次の瞬間、ロンギマヌスの頭上を一発の榴弾が過ぎ、レイズ機の目の前に着弾。爆風は機体を吹き飛ばし、塹壕の中へ転がり落とさせる。

ビームは塹壕の縁に着弾した。

「大丈夫か！ レイズ！」

「ええ…でも今は…？」

「着弾の仕方からして曲射弾道…！ 方向からして遙か後方！ イオ！ センサー範囲を最大で探査！ 周囲の機体を探せ！」

「了解！」

レーダー範囲最大。

金属センサー、温度センサーの感度を最大に。

「見つけました！ でも…！」

「どうした？ イオ」

「HMA…です」

「部隊の支援射撃か？」

「いえ…私達を残して他の部隊は全て退避しました！」

「それじゃあ…」

「ここから後方15km…ロンギマヌスです！」

「なにいい!？」

「ロンギマヌスが！ パラディンを構えています！」

「あの馬鹿野郎…大馬鹿野郎ツ！」

彼らの居る塹壕の遙か後方15km地点。

彼女の乗る旧ロンギマヌスは、片膝を突きながらパラディンを構えている。

「待たせたね、兄貴っ！ 着地点の奴らみんな死んでるもんだからさ、弾集めるのに手間掛かっちゃった」

ユリアはパラディンのマガジンを外しながら、無線でビンセントに話し掛けた。

「ユ、ユリアさん!？」

「馬鹿野郎…馬鹿野郎…大馬鹿野郎!何しに来やがった!この馬鹿娘!狙撃兵がいるんだ、撃たれて死んじまうぞ!」

ユリアを怒鳴り付けるビンセント。

怒号を撒き散らすビンセントに、ユリアは静かな声で答えた。

「分かってるよ、兄貴」

「だったらとつとと…!」

「ねえ、兄貴…覚えてる?あたしがまだ小さかった頃の事…。兄貴の機体勝手に乗り回して、ライフル持ち出してはうちの近くの岩撃つて、その度にゲンコツ食らった…」

彼女は徹甲弾を装填したマガジンをパラディンに取り付けた。

その間、スナイパーはセンサー範囲を徐々に拡大していく。

「あたしは追いつきたかつたんだ…。いつもあたしを置いて行つちやう兄貴に…。一緒に居ても足手まといにならないように…。でもあたしは勘違いしてた。兄貴はあたし達を守るために戦ってたんだよ…。昔も今もずっと…。だから今度は…あたしが守る番!あたしは一步も退かない!」

そう言つてユリアは、パラディンの砲口を遠い荒野の地平線へ向けた。

深く目をつぶるビンセント。

イオが、優しい表情でビンセントに微笑みかる。

「ビンセント…」

「全くよ…どいつもこいつも…」

一瞬、彼は強く奥歯を噛み締めてから大きく息を吸った。

「いいか、ユリア!一発だ!一発で仕留めろ!奴はHMAのセンサー範囲外!光学照準だ!」

「了解ッ!」

ロンギマヌスの高感度光学カメラが、遙か荒野のスナイパーを見据えた。

「見えた!前方53km地点!目標シグネチャでロック!風速

「8！」

スナイパーの砲身がゆっくりこちらを向く。

「……ッ！」

「撃てえ！」

「行っけえ！」

火を噴くパラディン。

撃ち出された155mmメタニウム徹甲弾は、スナイパーへ真っ直ぐ向かって行く。

「当たれ！ 当たれ！ 当たれえ！」

ユリアは呪文のように何度も繰り返す。

刹那、スナイパーの放ったビームが空を切り裂き、煌めいた。

「……!?」

言葉を失うユリア。

ビームは、彼女の放った徹甲弾を正確に貫き、一瞬で蒸発させる。

「砲弾が……!!」

「逃げろ、ユリア！」

続けて発射されるもう一発のビームはユリアの乗るロンギマヌスへ迫っていた。

「くッ！」

彼女は射線を下ろし、パラディンを発砲。

次の瞬間、連射されたメタニウム徹甲弾が、スナイパーのビームを接触。

瞬間、ビームのエネルギーによって瞬時に熔解したメタニウムは一気にプラズマ化し、体積を急激に膨張させ爆発。強力な電荷を帯びたメタニウムプラズマは、スナイパーの放つビームの弾道を弾向けた。

たった数%の誤差。しかし、運命の誤差。

初期の弾道からずらされたビームが、ユリアの乗るロンギマヌスの左肩を擦過。大出力のビームパルスは、装甲の一部を抉り、右肩の駆動システムを焼いた。

仰向けに倒れ込むロンギマヌス。

スナイパーの砲口が、彼女を睨み付ける。

「早く起きろあ！」

叫ぶビンセント。

「兄貴……」

着弾するビーム。

巨大なエネルギーが開放され、青白い光球が弾ける。

「おい……ユリア……」

無線で呼び掛けるビンセント。

しかし返ってくるのはノイズのみ。

無線のスピーカーは、無情にも雑音のみを発している。

「ロンギマヌス……応答ありません……」

ビンセントの顔が崩れた。

「……畜生……畜生！ 畜生！ 畜生！ こんな有りかよ……チクシヨ

ウ！ 男も知らねえままおつ死にやがって……！ 間際の言葉が兄貴

だ？ ……もっと色っぽい台詞は出ねえのかよ馬鹿娘！」

「ビンセント……」

そのときだった。

「ビン……セ……トさん……！」

突然無線に響いた声。

「ビンセントさん！」

「へ？」

それは誰の物でも無く、一刃の声だった。

「若旦那……？」

「遅くなってごめんなさい」

「馬鹿……！ 出撃命令は出てねえだろ……！」

「ええ……。でも我慢出来なくて来ちゃいました。超音速で。どつに

かぎりぎり間に合いました」

「間に合った……！？ それじゃあユリアは……！」

ユリアの乗るロンギマヌスの目の前に、立ち塞がる水蘭。

「一刃は水蘭のグラビティリフレクターを前面に展開して、寸での所でスナイパーのビームを防御していた。」

「起きてください、ユリアさん！2撃目が来ますよ！」

「一刃…？」

「ユリアはぼやける視界の中に浮かぶ水蘭の姿をその目に焼き付けていた。」

「なんで…？」

「え？」

「なんで、待機命令を無視してまで私なんかを？」

「変わりたくなかったからです」

「変わるって何に…？」

「このまま何もしないで見ているだけでは、僕は変わってしまう…。肉と血の詰まったただの生きた屍に！僕はそんな物になりたくない！ユリアさんだって、同じ事を思った筈です！それに…」

「それに…？」

「一刃は少し照れた様子で頬を掻いた。」

「女の子に腰抜けだなんて、思われたくありませんから…」

「お前…」

「はい？」

「なかなかいい男だな…」

「え？」

「ユリアはロンギマヌスを、再び立ち上がらせる。」

「彼女はパラディンを脇に抱え、マガジンを抜いて弾数を確認した。」

「あと二発…か」

「ユリア！おい！無事か！？」

「兄貴っ！」

「よかつたあゝ！本当によかつた〜！」

「鼻を吸る音が聞こえる。」

「情けない声出すなよ、兄貴！泣いてんのかよ？」

「馬鹿野郎！俺様がそれくらいで泣くかよ！」

ウインドウ通信のカメラを押さえるビンセント。
絶対泣いてる。

「くそ兄貴」

「馬鹿娘」

お互い、くすりと微笑む。

「まだ、終わりじゃねえぞ！ユリア！」

「分かってるよ！兄貴っ！」

彼女は麻痺した機体の左肩をパージし、水蘭の後ろで膝を突いた。
「片腕で狙えるか？」

「心配しないで、兄貴。あたしを…あたし達を信じて！あたしも、
兄貴の事信じてるから…！」

水蘭の肩にパラデインの銃身を置く。

「肩、借りるよ」

「防御は任せて下さい」

スナイパーを光学で再捕捉。

「弾は二発！チャンスは一回！一刀がスナイパーの砲撃を防御
した瞬間に、一発目を発射！初弾を迎撃している間に、直撃弾を
叩き込む！少しでもタイミングがズレればその時は…」

「そうはなりませんよね？ユリアさん！」

「ああ！させはしない！」

機体の脇を締め、パラデインをしつかりと構えるユリアを、スナ
イパーの砲口がじつと睨み付けてくる。

「（チャンスは一瞬！次は無い！）」

トリガーに掛けられた指が小刻みに震え、脂汗が頬を伝う。
「来る！」

スナイパーの構えるライフルからビームが放たれた。

「リフレクター出力全開！」

唸りを上げる水蘭のリフレクター。

迫るビームはビンセント達の頭上を過ぎ去り、着弾。

ビームは水蘭のリフレクター表面で、そのエネルギーを開放した。

それと同時にトリガーを引くユリア。
パラディンから撃ち出された徹甲弾は、浅い放物線を描きながら
スナイパーへ迫った。

「(力を貸して！ 兄貴…！)」

高速で飛来する徹甲弾を捕捉するスナイパー。

スナイパーの砲口が、空に向いた。

「今！」

放たれるビーム。

それと同時に、ユリアは最後の一発を放った。

空を切り裂くビームは、初弾を貫き蒸発させる。

次弾の迎撃に入るスナイパーは初弾の爆ぜた金属プラズマ越しに
次弾をロツクした。

チャージされるライフル。

次弾は、初弾の残した爆炎を突き抜け、プラズマを纏いながらス
ナイパーへ迫った。

放たれるビーム。

それと同時に、徹甲弾はライフルの左脇を通過した。

「吹っ飛べ、クソ野郎！」

スナイパーのコアを撃ち抜く徹甲弾。

スナイパーはまるで、糸の切れた操り人形のように崩れ落ち、轟
音と共に爆ぜた。

「やったあ！」

「凄いですユリアさん！」

「よくやったぜ、ユリア！」

「ユリアさん！」

歓声を上げる一同。

その声を、ガルスは安堵の面持ちで聞いていた。

「敵新型機、反応消失！」

「シエーファーが撃破した模様！」

ため息をつくガルス。

「いい部下を持ったな…ミラーズ…」

ガルスはそう言つて、核の発射コードを解除し、立ち上がる。

「全空軍機に発令！ シェーフアーを援護し、敵残存部隊を殲滅せよ！…」

「狙撃兵が…！」

デイクイオスと戦うリベカの間接からの感覚からスナイパーの反応が消え狼狽するリベカのネクロフィリアに、デイクイオスからの攻撃が猛然と襲い掛かる。

ホーミングレーザーが空を裂き、全領域制圧砲の荷電粒子が火球を咲かせ、プレッシャーカノンの重力衝撃波がネクロフィリアの巨体を地面へたたき付けた。

思わず声を上げるリベカ。

ネクロフィリアは土を抉りながら地面を滑り、やがて止まる。

「どうした、リベカ…。修行の成果はこんな物か？」

グラムが、ネクロフィリアの目の前にその機体をゆっくりと降ろす。

「くっ…！」

「自慢の狙撃兵も、お前自身も、お粗末な物だな」

「だ、黙れえ！お父様の創つたこのネクロフィリアを馬鹿にするなあ！ それに…！ 狙撃兵がいなくても、弾薬の尽きかけたお前の部下など残つたソルジャーで十分…！」

その時、リベカの表情が凍りついた。

自分の感覚領域内に、無数の飛行物体。
「空軍機！ 爆撃か！」

「やるじゃねえか！ユリア！」
ビンセントがユリアを褒め讃える。
それに対してユリアも、素直な返事を返してくる。
そんな中、イオとサラだけは、事態の展開にいち早く気付いてい
た。

「ビンセント！」

「レイズ！」

二人は揃って声を上げる。

「敵が来ます！」

ビンセントの目付きが変わる。

「ソルジャーの残存兵か…！数は！？」

「30！」

「やれねえ数じゃねえが…！」

「マシンカノンの弾薬はもう…！」

「レイズ！ 持つてる武器は！？」

「さっき投げたマシンガンが最後です！ あとはビームランチャー
しか…！」

「くそ…！ユリア！」

「徹甲弾も榴弾も0！」

「若旦那！」

「最後の直撃でリフレクターと駆動系にダメージが…」

「くそッ！ 万事休すかコノヤロウ！」

その時突然、上空から降り注いだ無数のミサイルが地に刺さり、ソルジャーの中に火球が咲いた。

「な、なんだあ!?!」

無線に通信が入る。

『こちらサンヘドリン空軍！ これよりシェーファアの援護に当る！』

言葉の通り、彼らの上空を、重装甲近接攻撃機であるHMA-h2DA/C・ラッシュハードロングと、空軍主力のh2C/FA1・フェニックス。そして空軍最強戦力であるHMA-h2E/F・デープフォレストが飛来した。

ラッシュハードロングがミサイルとガトリングを撃ち込み、敵を攪乱。

フェニックスが精密に敵を爆撃し、地上を離れたソルジャーを、デープフォレストが叩き落していく。

「キツサツマアツツ！」

ディカイオスを睨み付けるリベカに、グラムが言い聞かす。

「言っただろう、人類を嘗めるなとな」

ネクロフィリアが砂埃を上げながら立ち上がった。

「うるさい人間！ 私はお前の上から物を言うその態度が大ッ嫌いだ！」

「なら同志になれ」

「な……に……?」

「お前は強くなる。我々と共に来い」

「本気で言っているのか？」

「ああ」

「ば……! 馬鹿な! 我々は人類と協力もしなければ共存もしない!」

拳を握り締めるユリア。

グラムは持っていたプレッシャーカノンを亜空間コンテナの中に格納した。

「いいんだな？」

「当たり前だ！」

「そうか」

次の瞬間、ネクロフィリアの脇腹を、ディカイオスの右拳が貫いた。

「な……」

崩れ落ちていくネクロフィリアを、ディカイオスの目が見下ろす。「何が起きた！？ 今のが“絶対貫通打”……！？ 速い！ 見えない……！ いや……知覚出来ない！ コアは！？ “素体”は無事か！？ 起きて反撃……！ 機体が……動かない！」

グラムはフレズベルグの銃口をネクロフィリアの胸に向けた。

「（歪曲空間を……ダメだ……出ない……！ ……今度こそ終わりか……）」

フレズベルグを連射するグラム。

弾丸はネクロフィリアのコアとリベカを避けて、それ以外の部位を破壊。

本部との通信を切断した彼は、全弾を撃ち終えたフレズベルグをコンテナへ戻した。

「エネルギー反応を消せ。私が背を向けるまでは動くな。向けてからは好きなように帰ればいい」

リベカが問う。

「なぜ……撃たない？ お前の行動は理解出来ない。何故敵を生かしておく？」

グラムは答えた。

「お前は誰かに似ている気がする」

彼はそう言っつて、機体を反転させた。

「エステル……音声記録の消去を」

「録っていません……最初から」

「そうか……」

回線を本部へ再接続。

「こちらミラーズ……。状況終了……」

その背中を見つめながら、リベカは静かにゲートの中へ消えていく。

「大型ヴァリアント、空間跳躍ゲート展開！ 逃げます！」

「あいつめ……」

グラムが無線を通してガルスに言う。

「すみません、逃げられました」

ため息をつくガルス。

「早く帰ってこい……」

グラムは一つ頷いてから機体を空へ飛翔させ、帰路へついた。

Chapter 3

彼等を収容したスペクターは、その巨体を本部の滑走路へゆっくりと降着させた。

静止する機体。

それと同時にカーゴのハッチが開かれ、HMAが降ろされる。

彼等は各々、自分の機体から降り、ヘルメットを脱いだ。

夜の風が頬を撫でる。

左腕全てを失ったユリアのロンギマヌスと、右腕全てを失ったピンセントのロンギマヌス二世。

脚部を破損したレイズのラッシュハードロング。

駆動系の故障した一刀の水蘭。

みな、満身創痍で帰って来た。

「疲れた…帰って寝たい……」

ユリアは独り言のように呟いていた。

その横に立つピンセントは、彼女に言った。

「こつち向け」

「ん？」

乾いた音が響く。

「あ…れ…？」

レイズや一刃の目の前で、ビンセントはユリアの頬を叩いた。

「俺はお前を自殺志願者に育てた覚えはねえぞ、ユリア。無茶しやがって、この馬鹿が。若旦那が居なきや、お前え蒸発してたんだぞ？ 分かってんのか？おい」

ユリアを叱り付けるビンセントの声は、荒々しい声ではなく、落ち着いた静かな声だった。

それでも、その声はユリアの心に深く突き刺さる。

「痛い…」

「当たり前だ、叩いたんだからな…」

「なんで叩くの…？」

「あ？」

「なんであたしの事叩くの…？」

「言っても分からないからだろうが！」

「嘘だ！！」

ユリアは涙をたつぷりと蓄えた目で、ビンセントの顔を睨み付けた。

「本当はあたしの事なんかどうでもいいんだ！ 鬱陶しくて、早く帰って欲しいだけなんだ！ だからあたしの事叩くんだ！」

「違うぞ…！ ユリア！ それは違うぞ…！」

「何が違うの！？ 家族なんだから一緒に居たって良いじゃない！

それなのに兄貴はあたしを帰そうとして…！」

「それはお前が…！」

「あたしだって戦えるんだ！」

ビンセントは思わず声を張り上げた。

「一人じゃ何も出来ねえだろうが！」

二人の間を沈黙が支配する。

重く長い沈黙が。

「そうだよ……」

ユリアが沈黙を破る。

「……あたしは一人じゃ何も出来ない……出来ないんだから！ 兄貴が……お兄ちゃんがいなきゃ……何も出来ないんだから！」

崩れるように地面へ座り込むユリアの頬を、大粒の涙が流れる。

「……それでもあたしはお兄ちゃんの役に立ちたくて……助けたくて……傍に居たくて……。それなのに……それなのにお兄ちゃんは……！」

突然、ビンセントがユリアの頭に手を起き、膝を突いて撫でた。

「お兄ちゃん……？」

「ごめんな……ユリア……兄ちゃんのせいで余計な心配掛けさせちまつて。でもなユリア……、人間は蒔いた種を刈り取らなきゃならん時が必ず来る。明日か明後日か……何年も先か、それは誰にも分からねえ。でもその時が来れば、人は必ず刈り取らなきゃならねえ。たとえそれが小麦でも、雑草でもだ。俺はいろんな種を蒔いてきた。だから良い収穫もあるだろうし、悪い収穫もあるだろうよ……。俺はなあ……ユリア……、お前を“悪い収穫”に巻き込みたくねえんだ……分かってくれ、ユリ……」

「分かんない」

「は？」

「全っ然分かんない！」

「ユリア！」

「ごめんなんて言うな！ 謝る位なら、信じなくていいなんて寂しい事、最初から言うな！ 悪い収穫？ 知らないよ、そんな物！」

悪い種を蒔いてきたビンセント「キングストンなんて、とうの昔に死んだんだ！ 敵と戦って……勇敢に死んだんだ……！ だからあたしは諦めない！ あたしが……あたしが大好きなビンセント「キングストンは……傭兵でも……軍人でもなく……“人間・ビンセント”キングストン」……だからもう……格好付けた我慢競べは終わりにしようよ……」

そう言って、ビンセントに抱き着くユリア。

ユリアの涙は、彼のパイロットスーツを伝い、やがて乾いた。空を見上げるビンセント。

彼は息を大きく吸ってから、ユリアの肩に手を起き、彼女の身体を優しく引き離して言った。

「ユリア…泣くんじゃねえユリア…誰も死んじやいない…死んじやいねえよ、ユリア…。俺はここに居る…お前と一緒に、俺は居る…。だから泣くな、ユリア。幸運の女神様はな、泣き虫が嫌いなんだ…」
一瞬、ユリアの胸が高鳴った。

そっだ…そっなんだ…

兄貴は…

何も変わってなんかいなかったんだ…

昔のままの…

大好きな兄貴のまま…

「兄貴…」

再びビンセントに抱き着くユリア。

その瞬間、無数のスポットライトが二人を照らし出した。

「なななな、なんだあ!？」

歓声が沸き上がる。

建物の屋上から、滑走路の隅から、歓声が聞こえてくる。

「な、何だこりゃ!」

うるたえて周囲を見回すビンセントの前に、グラムが立った。

「一見落着…だな…」

「グラムてめえ! おい! 離れるユリア!」

すやすやと寝息を立てるユリア。

「寝るなー!」

「戦闘と泣き疲れたな…」

「グラムお前え…始めから分かって若旦那を待機させたな?」

「ああ。でも、仲直り出来ただろ?」

「なっ…!」

ビンセントは怒る気も失って、苦笑いするしかなかった。

「お前えにはかなわねえよ……」

「今頃気付いたか……」

グラムはそう言っつて、ビンセントの肩を叩いた。

「これから全員に訓示を与える！　まずはレイズ！」

「は、はい！」

「自らの危険を省みず、戦友を救った勇気と行動力は敬意に値する！」

「大佐……」

「しかし！」

「へ？」

「戦線維持の命令に反し、独断で戦線を離脱したことは軍紀に反する！　よって！　部隊室の掃除一週間！」

「サー・イエス・サー……」

レイズは肩を落として敬礼した。

「一刃！」

「は、はい！」

「全員の危機に対しての迅速な行動と決断は敬意に値する！　しかし！」

「はづっ！」

「待機命令を無視した事は許し難い！　よって、3週間の訓練送りとする！」

「りよ、了解しました……」

「一刃は涙目で敬礼。」

「ビンセント！」

「ああ！？」

グラムにメンチを切るビンセント。

「……何だ、その返事は……。まあいい。お前は言わずと知れた暴走行為！　本来なら部隊から放り出される物だが、特別に容赦してやる。」

しかし！ 蒔いた物は刈り取れ！」

「て、手前え…！」

「シェーファー全員に、ディナーをおごれ」

「は？」

「聞こえなかったのか？ 飯をおごれと言っているんだ。勿論シティの極上レストランで」

グラムの言葉にビンセントは一瞬固まってから嘖き出して笑った。

「はは、デザートも付けてやるよ」

「頼んだぞ」

お互い笑ってから、グラムは皆に言った。

「全員よくやった！ 解散！」

「サー・イエス・サー！」

レイズは肩を落とすし、サラに慰められながら帰っていく。

一刃は不安な顔をしながら、春雪と共に帰っていく。

しかしビンセントは、ユリアを抱えながらも、帰るそぶりは見せなかった。

彼にはもう一人、声をかけるべき者がいた。

「帰るぞ、イオ…」

彼女はただ、スペクターの巨大なランディングギアに寄り掛かったまま、なにも言葉を返さなかった。

「なあ、イオ…」

「やっぱり、敵わないです…」

「イオ？」

「本当の家族には…とても敵わないです。苦しんでいるあなたに、私は何も出来なくて…、自分の事ばかり考えて…。でも、私が入る余地なんて最初から無かったんですよね…。だってあなたは人間で…私はただの兵器だから…」

ビンセントの顔を見る事もせず、ただ沈んだ声を発するイオ。

そんな彼女に、ビンセントは話し始めた。

「昔な…、こいつがまだ女の子らしかった頃に、料理を作ってくれ

た事があつてな。それがすんつけえまずいんだわ、これが…」

「…彼女にはなんと？」

「…うまいって」

「はあ…」

「でもそれ以来、ユリアは料理を作らなかった。自分でも分かつてたんだな、『兄ちゃんのご飯が一番だ』って言って、笑うんだよ。それが可愛いくてな…、似合いもしねえで料理の勉強した」

「それで…ですか…」

「だからよ…料理の腕には自信があるんだ。それでな、イオ…」

「はい？」

「また俺の作った飯…食べに来てくれねえかな…」

ビンセントは照れ臭そうに頬を掻いた。

「うええ…」

泣き出すイオ。

「な、どうした？イオ…！俺の飯、まずかったか？」

「違うんです、ビンセント…嬉しくて…嬉しくてたまらないんです

…」

「イオ…」

「私、あなたのイクサミコでよかったです！」

イオは満面の笑みでビンセントに答えた。

微笑み返すビンセント。

イオはビンセントの手をしっかりと握り、まるで家族のように歩いて行った。

その途中、ビンセントが何かを思い出す。

「ん？ユリアはどうやって前線まで来たんだ？」

「ロンギマヌス降下地点より600km、荒野」

輸送機、エンジントラブルにより不時着。

「なんか忘れられるの慣れたっすわ…」

「雨降って地固まる…か…」

ガルスがぼつりと呟いた。

今日もこれで、長い一日が終わる。

そう思った矢先、デスクのインターホンが鳴った。

「私だ」

「司令、お客様です」

「客？」

突然、部屋のドアが開き、一人の男が入ってくる。

男は言った。

「久しぶりだな、ガルス」

TO BE CONTINUED . . .

ACT16 鉄鋼人(前書き)

ガルスのもとに現れたアングリフ治安局局长。それは、ある男の、
新たな戦いの始まりだった。

ACT16 鉄鋼人

Chapter 1

彼のボディーが、闇に包まれた空へ飲み込まれていく。

明かりは一つも見えず、上も下も解らないような落下の中で、彼のボディーだけが黒に冴え渡っている。

重力に捕われ、更に加速を続けるボディーは、減速もしないまま、闇の中へ降っていった。

48時間前

「珍しい事もあるものだな。お前から顔を出すとは…」

応接室のソファーに腰掛け、二人は相対していた。ガルスはアングリフの顔を睨み付けている。

そんなガルスに、アングリフは言い返す。

「お前の補佐官が美人だと聞いてな。コーヒーを飲みに来た」

「ふざけた事を…」

ため息一つ。

「袂を別けてからもう20年か…早い物だな」

「…どうぞ」

レイラが、アングリフの前にコーヒーカップを置く。

「ありがとう」

ガルスが、アングリフに言った。

「お前が治安局の局長になったと聞いて、正直肝を潰したよ。まさか本気だったとは…」

「お互い出世したものだな。お前は陸軍兵士…私は情報部の諜報員…適職と言えば適職だがね。旨いな…このコーヒー…」

「やってる事は昔も今も変わらん…。そうだろ？アングリフ」

アングリフは大きく息を吐いてからガルスに言った。

「力を貸せ。ガルス」

「聞くだけなら」

ガルスの目の前に、ファイルが置かれる。

「アストレイは知っているな？」

「反統合体勢力の……」

「それが近いうちに、行動を起こす」

「なぜサンヘドリンに？」

「この写真を見る」

数枚の衛星写真。

「これが奴らの基地を撮影した一週間前の写真だ」

「物資の搬入だな」

「そしてこれが4日前の写真……」

その写真に写る、大型のコンテナ。

「HMA……」

「そう……。しかも昨日、内偵に入っていた捜査官との連絡が途絶えた。捕縛されたと見て間違いない」

「捜査官の保身は？」

「奴らもすぐには殺さんだろう。捜査官を殺せば、我々に強制執行権が生じる。それに、HMAがあるとなると話が違ってくる」

「企業……」

「ジエネシツク社だ」

「会社包みか？」

「いや……」

アングリフは懐から一枚の写真を取り出した。

「見覚えは？」

ガルスは答える。

「ロイ＝マツケンジー……」

「奴はロツクウェル事件にも関与していた可能性がある。臭いなんてもんじゃない」

「どこまで搦んでいる？」

「ノウマン。ロックウエルを覚えているか？」

「ロックウエル事件の首謀者だ」

「解体措置をとられた軍閥に、2週間もの間、中央軍と戦うだけの戦力が有ったのは、企業からの兵器提供があつたからだ。その時、影にいたのはその、ロイ。マッケンジーだ」

「どうやって調べた？」

「奴の側に捜査官を張り付かせた」

「なんて事を…」

「ああ。捜査官はロックウエル事件が終わった2日後に、自宅の目の前で“事故死”した。加害者も逮捕した。今は新しい捜査官が付いている。今は捕われた捜査官を救出するのか先決だ」

「その後はどうするつもりだ？ジエネシック社ともなれば背後には

…」

アングリフは答える。

「我々は警察官だ。法に則って行動する」

「法のために軍？」

「虎穴に入らずば、虎児を獲ず。テロリストの巣穴に行くのにテロリストになる必要は無いが“武器”は要る。一人でいい。兵士を貸してくれ」

「どんな兵士を？」

「そうだな。人間をぼろ布のように引きちぎり、銃弾も効かず、装甲車を素手で破壊し、HMAをも倒す。そんな兵士を…」

ガルスはため息をついた。

「過去に治安局が、軍閥を含む武装集団へ強制執行に入ったのは15回。そのうちの7回を“ASAF”が執行。お前が直接指揮する治安局最強の強襲制圧部隊。アーマード・スペシャル・アサルトフォース。それを以ってしても…か？」

アングリフは、もう一枚の衛星写真を手渡した。

今度は赤外線写真。

「この端に写っている人間を見てみる。人にしては熱量が大きすぎるし、機動装甲にしては小さすぎる」

「サイボーグか。それがどうかしたか？」

「これが通常に撮影した拡大写真」

「こつちを…見ているな…」

「この後から衛星が基地へ近付けなくなった。このボディが写った写真を見た時、正直震えが止まらなかったよ…。まさか、もう一人生き残っていたとはな…」

「ファントム…」

「一人でいい。いや、一人しかいない。ティツク＝スキンド大尉を、我々ASAFに貸して頂きたい」

「…彼は今…」

「統合体中央軍教導部で教鞭を振るう教官…でしたかな？帰ってくるのでしょうか？ 明日…」

ガルスがアングリフを睨み付けた。

「彼に…同胞殺しをさせる気か？」

アングリフは答えた。

「…それしかないんだよ。ガルス…」

そう言ったアングリフを、ガルスは髭を撫でながら睨む。

「兵は準備しよう。武器も弾薬も付けよう。だが、そこまでして私に何の得が有る？」

アングリフは答えた。

「死んだ捜査官の体内からな、チップが見つかったんだ。さて、そのチップから出たデータは何だと思う？」

「見当もつかん」

「データは二つ。一つは人物のファイルだ」

「誰の」

「ソゾロキ＝レ＝ブランシエ。特Sランクの国際指名手配犯だ」

「ソゾロキ……」

「そうだ、ツァーリボストーク隊のソゾロキだ」

「もう一つは？」

「数字だ」

「暗号データか…。解読は？」

「未だに進んでいない。肝心な部分が抜けていてファイルとしては不完全なんだ」

「お前はどう思う？」

「660億桁にも及ぶ数字の羅列だぞ？臭いなんてもんじゃない」

「今はその“鍵”を探している訳か…」

「ジェネシック社にアストレイ、ソゾロキ、ロイ＝マッケンジー…
…。どうだ、ガルス…。一つ噛んでみないか？」

ガルスは、正に鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔でアングリフを見据えていた。

照り付ける太陽の下、幾つもの銃声が響いた。

銃声はその残響も消えぬ間に更に重ねられ、繰り返される。

「こちらガント…こっちの隊は全滅した。エイト、後は頼む」

「こちらエイト、了解した」

隊員達に合図を送るエイト。

サブマシンガンで武装し、ガスマスクを付けた漆黒の戦闘員達は、その隊長らしき男に導かれて一つの建物に接近した。

出されるGOサインと共に、隊員の一人がドアを破り、中に突入。その瞬間、仕掛けられていたトラップが作動し、スモークが焚か

れる。

突然の発砲音。

二人がやられる。

「奥の部屋だ！」

残った4人は左右に別れて壁に隠れ、スモークが晴れるのを待った。

徐々に広がる視界。

奥の部屋は暗く、隊員達は赤外線スコープを装着した。

指で合図を送るエイト。

彼等は3つを数えて部屋へ踏み込んだ。

無人の室内。

あるのは黒く塗り潰された一枚の窓。

突然、その窓が割れ、太陽の光が部屋一杯に差し込んだ。

日の光に、機能を失う赤外線スコープ。

目を覆う隊員達に、窓の外から容赦の無い銃撃が降り注いだ。

倒れる隊員達。

一心の射撃が終わり、床には4つの人間が転がった。

「エイト、お前の隊も全滅だ。何てこつたい、お嬢さん方……」

地面に倒れた隊員達が、次々に立ち上がる。

「うるせえ、ガント！お前も同じだろうが！」

無線に怒鳴るエイトの後ろには、窓の外でロープにぶら下がる一人の女がいた。

「惚れちゃいそうだぜ、ジーナ。全くお前にはよ……」

彼女はロープを揺らし、部屋の中に飛び込んだ。

「惚れるなら玉付けてから来な」

挑発的な目で睨むジーナに、エイトが言い返す。

「今夜なら付いてるぜ」

彼女は物欲しげな目でエイトに微笑んだ。

「なら、今試してあげる……」

エイトの首に腕を回すジーナ。

その瞬間、エイトの顔が苦悶に転じた。

彼の股間に、深々とめり込むジーナの右膝。

エイトは前傾姿勢のまま地面へ倒れた。

「あら、ちゃんと付いてるのね」

痙攣するエイト。

「そ、そりゃない…ぜ…」

昇天。

治安局の発足と共に組織されたA S A Fは、M A P Sを装備した武装部隊であり、各方面から集められた精鋭達がひしめいている。

ジーナは、その隊員。

こう見えても彼等は治安局の最精鋭部隊隊員なのだった。

「なんか不思議です」

新人のジムは、ロッカールームで先輩のガントにそう尋ねた。

ガントは、その鍛え上げられた身体からアサルトベストとボディ

ーアーマーを外しながらジムに聞き返す。

「何が？」

答えるジム。

「先輩達3人ですよ。普段とか訓練の時とかは仲悪いのに、任務の時はそれを感じさせない」

「気が合うのは任務中だけでね」

「エイト先輩とジーナ先輩は…？」

ガントが嫌味な笑みを見せる。

「ジム…、ジーナだけはやめとけ。あいつはパンドラの箱と同じだ。開けるまでは綺麗な箱だが、開けてからは…」

「私がどうしたって？」

ガントの肩にあごを乗せるジーナ。

「ジ、ジーナ！ エイトはどうした？」

「ここだよ！」

エイトが、相変わらず前傾姿勢のままロツカールームに入ってくる。

「エイト…、お前またか！ いい加減にしないとセクハラで訴えられるぞ！？ なあ、ジーナ？」

怒鳴るガントに、ジーナは不敵な微笑みを見せてから答えて言った。

「そんな回りくどい事しない。いつか後ろから撃ってやるわ、エイト」

「おー、怖い怖い！」

「本気よ？」

「うっわー…」

ガントは二人を指差しながら、ジムに諭す。

「な、あの通りだ。うちの繋がりは所詮“これ”だけなんだよ」
彼はそう言つて、愛用の拳銃をジムに見せた。

「特にジーナは特別だ。彼女は元中央軍人で、零番教導…、つまり特殊先攻部隊の訓練を受けた鉄人だ。そこら辺の男が敵う女じゃない」

「ガント先輩…」

「なんだよ？」

「もしかしてフラれたんですか？」

ガントが、ジムの頭に銃を突き付ける。

「お前この場で殉職させてやるうか？」

「すみません！ すんません！」

「止めなよ、ガント」

ジーナがガントを止める。

「私の話なんか聞いたって面白くもないだろ、チエリーボーイ。それより今夜飲みに行かない？ ガントのおごりだよ！」

「お、俺の！？」

着替え途中なのか、シャワーに向かう途中なのか、彼女は下着姿のまま肩にタオルを掛け、ガントの肩に腕を乗せて寄り掛かる。

困った様子のガントを尻目に、ジーナの提案に喜んで賛成するジムとエイト。

その時、ロッカールームにアナウンスが響いた。

『召集命令。ASAF前衛隊員は、ミーティングルームへ集合せよ。繰り返す、前衛隊員はミーティングルームへ集合せよ』

ジーナがYシャツを羽織る。

「行くよ！」

四人は揃って、ロッカールームを後にした。

一機のVTOL機が、甲高い騒音を撒き散らしながら治安局本部の屋上に設けられた着陸ポートに舞い降りる。

機のランディングギアは一瞬大きく沈み込み、機体左右の安定翼先端に取り付けられたプラズマジェットエンジンが、身を揺さぶるような低周波を発しながらゆっくり停止した。

開放されるカーゴ室の扉。

そこから下りる一人の人間がいる。

“人間”？

はたして彼を“人”と呼ぶのは相応しい事だろうか？

身の丈は裕に2m半ばを超え、人のような目鼻口を一切持たない顔。

血の通う肉と臓物では無く、鋼鉄で形作られた身体。

脳を除く全ての器官を機械化した完全サイボーグ…。

そんな彼の左には、取っ手の付いた、3 m近い長さの巨大なカプセルのようなケースが…、その右には限定核を運ぶかのような大型のアタッシェケースが置かれており、彼はその二つを軽々と持ち上げてから、機体のカーゴ室からゆっくりと歩み出た。

風に靡く彼のロングコート。

彼のセンサーアイが、外の光を浴びて鈍く光った。

「おかしくないか？」

ガントは顔をしかめたまま、ジーナとエイトとジムの三人に問い尋ねていた。

エイトがガントの言葉に賛同する。

「そうだな、ガント。召集されたのが俺達“前衛隊員”だけだなんて、今まで無かったぞ？」

彼の言う通り、過去にこのようなケースはただの一度も無かった。それだと言うのに、今回召集された隊員は、ジーナ達を含めるとたったの8人。ツーマンセルで行動すれば、たったの4組に満たない。

いつもの半分以下だ。

「…なあ、そう思わないか？ジーナ」

エイトはジーナの目を見つめながら同意を求めて来る。

そんなエイトに、ジーナは言い返す。

「みんな忘れたのか？ASAFに入る時私達が誓った事…。何があっても指令には忠実遂行。たとえ中身がからっぽの指令でも、やる

ことは一つ。狙って撃つ。それだけ。私達は考えなくていい。私達はただの人斬り包丁でいればいい。そうだろ？」

彼女の言葉に、皆沈黙で答えた。

そこへ、局長補佐官のヨハンが入ってくる。

ヨハンは、壁に埋め込まれた大きなスクリーンの前に立ち、机の上にはファイルを置いた。

「ご苦労諸君。今回も諸君らに任務を与える」

「質問！」

エイトが勢いよく右手を上げる。

「何だ」

「何で俺達だけ召集なんすか？」

「今説明する」

ヨハンはスクリーンに向かってリモコンのボタンを押した。

スクリーンに、目付きの鋭い不精髭の男が映し出される。

「ジョンソン・E・カラド、43才。諸君らも知つての通り、数ある要監視集団の中でも特に注意が必要な集団、便宜上我々が“アストレイ”と呼称している軍閥の司令官だ。我々はカラドの監視と数々のテロ行為に対して捜査の根を張っていた。だが5時間前、軍閥内部へ潜入していた捜査官からの連絡が途絶えた。諸君らには、それを救出してもらいたい。諸君らは総員、装備102を着装。作戦領域までは航空大隊の輸送機を使用し、空挺降下。建物南側から侵入。諸君ら小数精鋭部隊は、速やかに状況を開始。目標を救出する。無線はモードCを使用。目標の救出が最優先だが、有事においては徹底的に叩け。ここまでで質問は？」

ガントがヨハンに問い質した。

「いくら救出だけが任務でも、我々だけでできるのか？」

ヨハンはガントに答えた。

「確かに、構内を常時制圧する事は不可能だ。だが、敵の動きに混乱を与え、また有事においては諸君らに対しての敵兵站線を寸断する事の出来るスペシャリストをゲストとして招いた。中央軍教導隊

教官、ティック・スキンド大尉だ」

突然、話に聴き入っていたジーナの表情が凍り付いた。

「大尉は大戦の地獄を生き延びた猛者だ。その彼が諸君らに代わって敵を引き付けて下さる！ 大尉のご厚意を無駄にしないよう、作戦は必ず成功させる。出勤は明日2300時。以上解散！」

ファイルを閉じ、ミーティングルームを出ていくヨハン。

それに続いて隊員達も椅子から立ち上がり、ミーティングルームを出ていく。

「おいおい、聞いたか？ 中央軍人様のお出ましとは、いよいよきな臭くなってきたな……」

ガントがエイトに話し掛ける。

「違いねえ。それに来るのが一人だけとは……。なあジーナ」

ジーナは、椅子に腰掛けたまま、焦点の合わない瞳で遠くを見ていた。

「どうした……？ ゴーナ」

「ティック・スキンド大尉は“一人”じゃない……」

彼女はそう言うってから、三人を置いて部屋から出ていく。

「おい、ジーナ！ どこ行くんだよ！？ 飲みに行くんじゃない……」

「よせよ、エイト！」

顔を見合わずガントとエイトに、ジムが不思議そうに問い尋ねる。

「あの……ティック・スキンド大尉って一体どんな人なんです？」

ガントは答えた。

「俺も詳しくは知らないんだ、ジム。ただ……」

「ただ……？」

「ジーナにとっては、特別な人だろうな……」

朝から雨が降っている。

棒のような雨粒が、地面を叩く強い雨が。

その中で、何故私はこうも走り続けているのだろう…

昨日。

自分の言い出した事のくせに、結局彼等と共にには行かなかった。

飲み屋の代わりに、私は局長室へ押しかけ、局長に詰め寄っていた。

「何だつて？」

「ですから、私をこの任務から外して下さい」

「何で？」

「今のままでは私は闘えません」

「作戦が気に入らないの？」

「違います」

「だから、何が気に入らないの？」

「中央軍人と一緒なのが嫌なんです」

「君も元中央軍人だよ？違う？」

「だからです」

「中央軍で君に何があつたか知らないけど、任務にはついてもらわないと」

「私達には同僚を選ぶ権利があります」

「だから？」

「はい？」

「そんな感傷的な言い訳で任務が選べるとでも思っているのか、ジーン・バラム一等官。同僚を選ぶ権利は認めよう。だが、任務を選ぶ権利などお前達には無い！同僚が気に入らないとしても、それが任務に必要なら、お前達の権利などは無いと思え！任務を優先しろ！感じるな！考えるな！お前達は力だ！力は意思を持つな！」

風が雨粒を薙ぎ、横殴りの雨が彼女の身体を打つ。
気付いてみれば、彼女の脚は棒のようになり、ただ立ち尽くして
いた。

…力は意思を持つな！

局長が最後に言った言葉。

自分でも分かっていた。

自分達のように、平時に於いてなお武力を行使する集団は、法の
正義の下に殺人を容認される。

だから私は考えるのをやめた。

軍から治安局へ移る時に抱いていた全ての事を。

ここなら忘れられる。

ここでなら離れられる。

そう信じて、今日まで生きてきた。

「9mm、まとめて2箱お願い」

彼女は装備課のカウンターで、二つの箱を受け取った。

「射撃練習には多くありませんか？」

装備課のエレミアが、怪訝そうな表情で書類を手渡す。

「関係ないでしょ」

そう言いながら書類にサインするジーナに、エレミアは周囲を見回しながら小声で話し掛けた。

「ちよつと聞いたわよ、ジーナ…。局長に盾突いたんだって？」

ジーナの手が止まる。

「女の噂って恐ろしいわね…」

「最近あなたが何も話してくれないからでしょ？」

「ごめん…」

射撃場へ入っていくジーナ。

彼女はレンジの前に立ち、二つのマガジンを取り出して弾を詰めだした。

一発一発、丁寧に、思いを込めるように。

彼女は12発の弾が詰ったマガジンを、グリップの中へ納めてから耳当てとゴーグルを付け、スライドを引き、銃を構えた。

軽く引かれるトリガー。

拳銃から発射された9mm弾は、シューティングターゲットのど真ん中を貫いた。

次々に発射される拳銃。

排出された薬莢が、地面に落ちて、無機質な音を奏でた。

ロックするスライド。

彼女が空のマガジンを抜き、もう一つのマガジンをグリップに納めたその時、彼女のいるブースから幾つも離れたブースから、まるで雷鳴のような発砲音が聞こえ始めた。

聞き覚えのある、特徴的な発砲音。

発射された弾は数センチの隙間も空けずに着弾し、ターゲット後ろの積み上げられた砂袋を四散させる。

射撃はいつしか止み、射撃場の中が、しん…と静まり返る。

会いたくない…

私の中で私の声が聞こえている。

なのに、なぜ私は彼の事を見つめているのだろう…。

喉の奥から絞り出す声。

声の向かった先には、昔と全く変わらない彼がいた。

「もう二度と会わないと思っていました」

身体の奥がぴりぴりとする。

彼は言葉を返さない。

彼の名はティック「スキンド。階級は大尉。

史上最強の兵士。

そして、私の教官。

「言う事は何も無いんですか？教官…」

彼は、口を（実際に口は無いけれど…）開いた。

「私はもう君の教官ではない」

体の芯が、ずきんずきんと疼き出した。

数年も昔、私は彼の擁する訓練部隊に入った。

訓練は熾烈を極め、雨の日も風の日も、例え何があるうとも訓練

は続き、何人もの同期が耐え兼ねてリタイアした。

その度に教官はこう言って彼等を放り出した。

「彼らは逃げたのだ」と。

極限を越えた、虐待とも言える過酷な訓練の日々。

格闘実習では徹底的に叩きのめされ、模擬戦では容赦なくゴム弾

を撃ち込まれ、痛みと涙で眠れぬ夜を何度も経験した。

実弾が、頭を掠める事もあった。

私も、逃げた。

「教官のおかげで今の自分があると思うと嫌になります」

「そうか」と一言、機械のような返事が返ってくる。

私は軍を出て、行く宛もなくさまよっていた。

そんな私を拾ってくれたのが、アングリフ局長だった。

局長は私に A S A F という新しい居場所を与えてくれた。

軍に居たのが幸いしてか、私の戦闘技能は群を抜いていたらしい。

機甲戦闘、装甲格闘技、射撃術、戦術スキル…

私の戦闘技能は、皮肉にも教官から授かったものばかりだった。彼の…、教官の事を忘れてたくても、私の身体の中には彼の一部が住み着いている。

私の身体に食い込んで離れない、鋼鉄の亡霊が。

「身体が機械だと、答えも機械みたいになるんですね。教官」

彼は答えない。

私は彼に言い放った。

「痛みを感じない身体だと、人の痛みも分からなくなるんですか？サイボーグの身体は痛みを感じない。」

戦闘には最適の身体。

「痛覚など戦闘の邪魔なだけだ」

「私は教官みたくにはなりたくありません。心からも痛みを消してしまえば、人は人でなくなってしまう」

「なら、痛みは君を強くしたか？」

「はい？」

「肉体の痛みがそうならば、精神の痛みもまた同義だ。暴力装置である我々に、そんな物は必要無い」

「だからですか？だからあんな事も平気で出来るんですか？」

教官は私に言った。

「彼らは逃げた。それだけだ」

自分の顔が、醜く歪むのを感じた。

「私が憎いか」

彼が、私の目の前に歩いてくる。

天を突くような大きな身体が、ゴトンゴトンと重苦しい足音を立てながら。

「来ないで下さい…」

「それ程までに私が憎いなら…」

「来ないで！」

私は教官に向かって銃を向けていた。

頭の中が真っ白になった。

「それ程までに私が憎いなら、その銃で私を撃てばいい」

「え…？」

教官は私の顔をじっと見据えて、銃口の前に立った。

「私を殺して見せろ」

私は銃を向けたまま、教官の顔を睨んだ。

「教官、私は…」

「銃を撃つのが恐いのか？ 新兵…」

彼には顔など無いのに…

戦闘のみに特化した彼のボディーには、表情を現わす機能など無い筈なのに…

その時私には、教官の顔が笑っているように見えた。

私は教官の胸に向かって、3発の銃弾を撃ち込んだ。

人間で言うなら心臓に。

金属の碎ける破壊音。

弾は、教官の足元に潰れて落ちた。

「その程度の火器では私の装甲には傷も付かない。アーマーコートを着ていなくても、問題は無い」

私は我慢できなくなり、9mm弾の入った箱を教官に投げ付けた。

地面に散らばる9mm弾。

私は射撃場の出口へ向かう。

そんな私を、教官は呼び止めて言った。

「本当に殺したいなら、必ず頭を撃て。君の為に…、相手の為に」

私は無言のまま試射場を出た。

昔もこんな事があった。

私が軍を…

教官の部隊を去る時、教官は私の背中を見つめていた。

その時も、ちょうど今日のように雨が降っていた…。

「2330時、高度6000ft、ASAF輸送機・2番機内」

「大丈夫か…？」

「エイトが、無線を通じてジーナへ話しかけてくる。

ジーナは目の前の席にいるエイトを睨み付けた。

「同じ機内にいるのにわざわざ無線？」

「あんまり凄んだ顔してるもんだからさ…」

「そう…？」

「例の中央軍人の話聞いてから少し様子が変だぞ？ 確か、お前が

軍隊時代だった時の教官だったっけ？」

「ええ…」

「教官って言えば結構な歳なんじゃないのか？」

「まあ…ね…」

「大丈夫なのかよ？ そんなご老体に任せて…」

「老体？ 教官は歳なんてとらないわ…教官は人間じゃない…。教

官は…」

「到着5分前…！ 総員最終チェック」

言葉を飲み込むジーナ。

輸送機の搭乗員が、彼女の言葉を遮った。

「暗視・視覚情報、調整よし」

「吸気弁、ガス防御域作動。異常無し」

「駆動制御、異常無し」

「火器、装弾！」

輸送機の機内でMAPSの最終チェックを済ませる隊員達。

彼らを包む鋼鉄の鎧は、闘いへの備えを十分に施されている。

銃弾や爆風に耐える装甲。

十分な視覚情報。

身体能力の強化。

装着している感覚は殆ど無く、寧ろ普段より身体が軽く感じる。

まさに皮膚の一部のようになる。

そんな鋼の皮膚に包まれていても、心の中までは、鉄で覆うことは出来ないだろう…。

『私を殺してみせる』

あの時なぜ、私は教官の事を撃つたのだろう…

教官の事を恨んでいないと言えば嘘になる。

しかし、殺したいほど恨んでいる訳ではない。

第一、教官を殺す事など、到底不可能だ。

それなのに、なぜ…？

教官は何故、私に撃てと言ったのだろう…

今更罪滅ぼしのつもり？

違う…。

教官の生徒だった時、教官は私に言った。

『撃つた相手の事は、全て忘れる』と。

教官は私に、自分を忘れると言いたかったのだろうか…？

私の心から、自分を除き去れと言いたかったのだろうか…？

何故だろう…

身体の節々が、ずきずきと痛む。

まるで、教官に叩きのめされた後のように…

忘れたくても忘れられない記憶。

身体に染み付いた、教官の一部…

身体に残った、彼が付けた傷痕…

その全てが、私を閉じ込め続ける。

教官が作り上げた、“鋼鉄の処女”の中に…

教官…

それなら何故…

何故あの時、私の背中を見送ったのですか？

何故引き止めてくれなかったのですか？

助けて下さい…、教官…

ここはとても狭くて…

とても冷たくて…

とても…

痛い…

私を見て下さい…

あなたが見放した生徒は、こんなにも醜くなくなってしまいました。

教官…

あなたの目は、どこを見ているのですか？

教官…

あなたの心は…

そこに居ますか…？

私は今、地獄へ降ります。

「同時刻、A S A F輸送機・1番機内」

彼は、ただ静かに佇んでいた。

暗い輸送機のカーゴ室。

その中で、ただじつと、その時を待ちながら。

「ポイント到達10分前：高度6000ft…」

「不気味な奴だ…」

中年の操縦士が、同じ位の副操縦士に思わずこぼした。

「確かに…。あそこまで極端にサイボーグ化した奴なんて見た事もない」

「これがファントムか…」

副操縦士が、怪訝な表情で聞き返す。

「ファントム？」

「知らないのか？ 対機甲機械化猟兵部隊ファントムを…。大戦の遺産…。死者の亡霊…。大戦中、数々の機甲部隊が次々に姿を消した。そしてついに、いくつもの軍閥が潰された。不思議な事に、どの部隊も敵機と戦った痕跡が見つからず、ボイスレコーダーにはただ“助けてくれ！”とだけ残されていた。当時はシエルシヨックの集団発症と言われていたが、それは違った…。彼らは狩られていたんだよ…。ファントムに…。彼が、その唯一の生き残りさ…」

「よく知ってるな…」

「俺も、狩られた一人さ…」

「お前が？」

「左半身をこつそりえぐられた。それ以来、怖くてHMAには乗れなくなつた。それで、軍を辞めたんだ」

彼がそう言った瞬間、機体は作戦領域へ到達した。

「ポイントへ到達」

席から立ち上がるティック。

彼は、特殊金属繊維で作られたアーマーコートを纏っているだけで、他は何も身につけていない。

開かれるカーゴの扉。

彼はそこへ、ゆっくり歩いていく。

はためくコート。

外は夜の闇に包まれ、明かりは何も見えない。

「降下3秒前…2…」
彼は、扉の淵に立った。
「1…」

ただいま…

次の瞬間、一歩前へ踏み出した彼の姿が、一瞬にして消えた。
「…なんてこった…」

操縦士が、奥歯を打ち合わせながら呟いた。

「おい！ どうした!?!」

心配そうな副操縦士に、操縦士は答えた。

「あいつ今…、 “ただいま” って言いやがった…」

彼のボディーが、闇に包まれた空へ飲み込まれていく。

明かりは一つも見えず、上も下も解らないような落下の中で、彼のボディーだけが黒に冴え渡っている。

まるで意思を持つかのようにはためき、波打つ、彼のコート。

輸送機の姿は既に消え、周囲の全てが黒に包まれるなか突然、彼の視界に、白い取って付けたような塊が現れる。

暗い平らな地面に、ぼつりと立つ、明らかに人工の建造物。
彼は減速もしないまま重力に従い、ただその貼り付けたような建
物に向かって行き、そして…

「同時刻、 “アストレイ” 営舎・A棟B棟間連絡通路」

話をしながら歩く、二人の兵士がいる。

二人は肩にライフルをぶら下げ、眠たそうな顔をしながら、地下
倉庫の有るB棟へ向かっていた。

「まったく、馬鹿な奴だ」

「全くだ」

「まさかあいつがスパイだったとはな」

「俺は最初から怪しいと思ってたんだよ」

「バカ言うなよ。お前が一番、奴とつるんでたじゃねえか…」

「違い無え…。カラドの旦那はよく気付いたもんだ」

「旦那は絶対、裏切り者は許さない…。奴もそろればらされるだ
ろうな」

「でもよ…、奴を殺したら、連中が黙っちゃいねえぞ？」

「ASAF…か？」

「なんでも奴ら、最近また装備を強化したらしいじゃねえか…。ど
つかの軍と組んでるって噂も聞いた事があるぜ？」

「なんだよお前、ビビってんのかよ？心配すんな、こっちにはHM
Aが有る。カラドの旦那が乗れば敵無しさ。それに、スポンサーが
遣した用心棒の先生様が居るじゃねえか」

「そう…だな」

「それより今度、女買いにいかねえか？ あのイカレ野郎をさつさ
と引き渡したら、悪い事は忘れてパーツと…」

男の唇が未だ動いている矢先、目の前の天井が突然、轟音を立て
て崩れた。

思わず声を上げて後退りする二人。
男は瓦礫の山を怪訝な表情で睨んだ。
立ち込める砂埃。

そこには、静かに佇む大男の姿があった。

「て、敵!？」

慌ててライフルに手を掛ける二人。

だが、ティックの手には既に一丁の拳銃が握られていた。

“拳銃”？

いや、“拳銃”と言うには、余りにも大きかった。

全長60cm、重量28kg。

15mm徹甲弾を発射するその銃には、
Mahath…、す
なわち、“畏怖”と言う意味の名が刻まれていた。

その鉄塊のように巨大な銃を軽々と振り回し、二人に銃口を向け
て引き金を引く彼。

まるで雷鳴のような銃声と共に発射された15mm徹甲弾は、二
人の頭蓋を砕いて脳髓を蹂躪し、頭部を四散させ、やがて突き抜け
る。

異変を察知し、駆け付ける数人の兵士達に、マハトを連射する彼
その、生身の人間を撃つには余りにも大きな弾丸は、血と脳漿を
壁に飛び散らせ、噴き出した血液は文字通り血の海を形作った。

降下地点制圧確認。

ルート制限解除。

「こちら01…、降下完了。同地点の敵を排除した」

無線で通信するティック。

送信相手のジーナ達別動隊から、返事が返ってくる。

「02、了解。こちらは無事降下した。オペレーションオーダーに
従い、これより施設への侵入を開始する」

「…了解」

切れる無線。

彼は、右手に持ったマハトのマガジンを入れ換えた。

ボデイの全戦闘システムを起動。
行動開始。

Chapter 3

妙に優しい、懐かしい感覚。

この感覚は何だろう…

いつか感じたこの感覚は。

ここからでも感じる彼の気配。

あなたは、私を“感じ”ますか…？

「“アストレイ” 営舎B棟南側外壁部、通用口」

「月が見えるな…」

空を見上げたガントが、ぽつりと呟いた。

先程から聞こえるサイレンの音。その音は、月に向かって吠える狼の遠吠えのように、暗い空に、広く、深く、響き渡っている。

「珍しく雲が晴れてやがる。満月は嫌いだ…」

「ぼやくエイトに、ジムが問う。

「なんで嫌いなんです？ 満月…」

「エイトは答えた。

「幽霊出そうじゃん？」

「思わず脱力するガントとジム。

「お前なあ…」

ガントが口を開いた矢先、同時に降下した01からの通信が入った。

「こちら01…、降下完了。同地点の敵を排除した」

無線にジーナが答える。

「02、了解。こちらは無事降下した。オペレーションオーダーに従い、これより施設への侵入を開始する」

「了解」

切れる無線。全員の緊張が一気に高まる。

光学迷彩を起動。

隊員の一人が、通用口の扉に爆薬を取り付けた。

「装着完了」

扉の左右に別れて退避する隊員達。

次の瞬間、取り付けた爆薬が炸裂し、重い鉄の扉が吹き飛んだ。

それと一緒に催涙ガス弾も投げ込む。

「突入！」

立ち込める催涙ガス。

施設の中へなだれ込むジーナ達。

中は吹き抜けていて広く、ちょうどホテルか何かのエントランスのように階段とデッキがあった。

敵を捕捉。

一階左奥に一人。二階のデッキに二人の警備兵。

彼らは何が起こったのか分からず、ただ催涙ガスにむせている。

その警備兵達を即座に射殺。

サイレンサーの乾いた音が冷めた空気に囁き、打ちっぱなしのコンクリートに血飛沫が飛び散った。

「ああ、クソッ！」

エイトが叫んだ。

「渡されたマップデータと間取りが違う！ 改装されてやがる！」

彼の言う通り、エントランスの一階奥にあった通路が塞がれていて、地下に通じる道が閉ざされていた。

「2階から大回りだな、こりゃ……」

吐き捨てるように呟くガントに、ジーナが言う。

「ここで引き下がったら何しに来たのか分からないわ」

2班に別れる彼等。

脱出時の援護と緊急時の応急対応の為に、4人がこのままエントランスに残り、後の4人が救出へ向かう。

救出へは、ジーナ、ガント、エイト、ジムの4人が向かう。

「行こう。気付かれる前に、少しでも早く」
頷く3人。

彼女達は階段を昇り、デッキを渡って室内へ入って行く。

先頭に立つガント。

ジーナは、MAPSの視覚に書き込まれる彼のシルエットを目で追いながら、銃のグリップを握り締めた。

それは一方的な殺戮だった。
夜中の強襲。

彼らが持つ10mmアサルトカービンは、人体を確実に破壊出来るように軟頭で低初速のエクスプローダー弾を使い、銃声はサイレンサーで消去。

薬莢はカートキャッチャーの中に落ちる。

光学迷彩による姿の消去。

完璧なカムフラージュ。

反撃をする隙も与えず、確実に相手を殺害する彼らの技術。通った道程に並ぶのは、人だった肉の塊。

死体の道。

「この先2ブロック、エレベーターシャフト」

ガントが、曲がり角の影から顔を覗かせながら言った。

「敵影は無し。シャフトを降るぞ」

安全を確認してから、3人にGOサインを出す彼。

彼はエレベーターのゲートをMAPSのパワーでこじ開け、3人をシャフトの中へ招き入れる。

「気をつける、底まで200mはある」

「いいわ、ガント。先に行きなさい」

通路に向かって銃を構えるジーナに、ガントが言う。

「大丈夫か？」

「何が？」

聞き返す彼女の声。

彼女の声のトーンはいつも通りで、任務中とは思えないほど落ち着いている。

安心？

俺達に対する信頼感ではなく、他の誰かから来る大きな安心感。お前はそれを感じているのか？

「ガント！早く来い！」

ガントを急かすエイト。

ガントの姿が、暗いエレベーターシャフトの中に吸い込まれていく。

ワイヤーを使ってエレベーターシャフトの中を降りていく3人。

それに続いてジーナも、シャフトの中を降下していく。

「目標は地下3階B 3ブロック倉庫！ まずい、まずい、まずい！」

バイザーに映し出される情報を見てエイトは思わず声を上げた。

「MAPSを装着した兵士が5人…、いや6、7、8！ 倉庫に向かってるぞ！」

ジムが答える。

「処刑する気だ…」

「慌てやがって…、狼どもが…！」

「みんな急いで！」

シャフト内を急速降下していく四機のMAPS。

倉庫へ急ぐ兵士達は、エレベーターの正面から延びる通路を、ちよつど反対側から走って来ている。

「くそ、あのスパイの野郎…！ 仲間を呼び寄せやがった！ 俺達皆殺しにされるぞ！」

兵士の一人が、上擦った声で叫んだ。

「だから今そのスパイをぶつ殺しに行くんだろ!? せめてそいつだけでも八つ裂きにしてやらなあ!?」

今喋っていた兵士のスーツに銃弾が降り注いだ。弾かれる銃弾。

8人は、通路を挟んで左右の曲がり角に隠れた。

「くそ! 奴らこんな所まで来てやがる! 応援を呼べ!」

「了解!」

無線で応援を呼ぶ兵士達。

ジーナ達は、エレベーター正面の通路と交差する通路の曲がり角左右に、ちょうど兵士達と同じように隠れている。

「強装弾に切り替え!」

叫ぶジーナ。

彼らの銃に、10mm徹甲弾が装填される。

エイトが言った。

「くそ! 奴ら以外と対応が早い!」

ガントが答える。

「誰だ、マフィアだなんて言ったのは!?」

兵士達の放つ弾丸が、曲がり角の縁を削り取る。

12.7mmマシンガン。

「相手が誰でもやる事は一緒!」

銃のグリップを握り締めるジーナ。

彼女の言葉に、エイトが答える。

「狙って撃つ!」

続けてガントも。

「それだけだ!」

顔を見合わせて頷く3人。

ジムも、つられて頷く。

「倉庫は奴らと私達のちょうど真ん中! 奴らだつて捜査官を殺すには私達を倒す必要がある! 数で押されたらひとたまりもないわ! それなら奴らが出る前に、私達が!」

兵士達からの攻撃は依然続いている。

ジーナは、大きく息を吸ってから心を決めた。

「ガント、エイト、ジム！ 私が出るわ！ 3人は援護して！」
ジムが叫んだ。

「そんな一人で！ 僕も一緒に！」

「ジム！」

ジムを止めたのはエイトだった。

彼は言った。

「安心しろ、ジム。ジーナは俺達のエンジェルだ。天使は死なない！」

エイトはそう言って、20mmショットガンを構えた。

小さく頷いてからアサルトカービンを構えるジム。

ジーナは、反対側の通路にいるエイトとジムに、親指を立てた。

「3カウント！ スタングレネード用意！」

エイトが、スタングレネードを取り出しスイッチを押す。

「いいぜ、ジーナ」

「ありがとう、エイト」

彼女はもう一度ゆっくり息を吐いた。

「3……」

マシンガンを乱射する兵士達。

「2……」

降り注ぐ弾丸。

「1……！」

スタングレネードを投げるエイト。

グレネードは、兵士達がいる通路の目の前に転がった。

「手榴弾だ！」

炸裂するグレネード。

特殊な化学合成炸薬が発する強烈な閃光と電撃は、兵士達の動きを、一瞬鈍らせる。

「今！」

曲がり角から踊り出るジーナ。

彼女はアサルトカービンを連射しながら走っていく。それに気付いて銃を向ける兵士達。

次の瞬間、ガント達の銃弾が、彼らに降り注いだ。

「撃ちまくれ、エイト、ジム！」

「言われなくてもフルオートだぜ！」

彼女を援護して銃を連射するガント達。

エイトのショットガンから発射される一粒弾が、兵士の頭を打ち砕く。

ガントは、アサルトカービンを撃ちながら、背中に背負ったグレネードマシンガンを抜き、構えた。

「ジーナ！」

「……！」

ガントの声に応え、姿勢を低くするジーナ。

次の瞬間、ガントのグレネードマシンガンが火を噴いた。

「うおおおお！」

彼の咆哮と共に、まるで機関砲のように唸る砲口。

排出される巨大な葉莖。

打ち出されたグレネードは兵士の目の前で炸裂。

数人の兵士が、スーツもろとも砕け散った。

それでも、残った数人が依然攻撃を仕掛けてくる。

銃を連射するジーナ。

「どけえええ！」

一人の兵士が、絞り出すようなうめき声を上げて崩れ落ちた。血を流し、地面で痙攣する兵士を見下ろすティック。彼の持つマハトの銃口から、硝煙が立ち上っている。

突然、無数の弾丸が通路の壁を突き抜けた。

亀裂が走り脆くなった壁を打ち砕いて現れる大男。

男の身長と体格は、ティックより遥かに大きい。

「見つけたぞオ！ 侵入者めエ！ 我が城に忍びこんだ事を地獄で悔やむがいいッ！」

男はそう言つて、ティックにその巨大な銃を向けた。

微動だにしないティック。

男はその姿を見て、高らかに笑い出した。

「がははははア！ 動けないかア！？ 無理も無いッ！ 見よこの美しい肉体ッ！ 遣伝子操作と薬物によって極限まで強化した筋肉ッ！ 骨格ッ！ 神経系ッ！ 見よッ！ この武装オ！ 本来戦闘装甲車に搭載する筈の30mm機関砲を取り外し手持ち化ア！ 砲弾は30mm炸裂破甲弾を使用オ！ 破壊出来ない物は無いッ！ どうだ、恐ろしかろうッ！ 逃げ出したかろうッ！ だが逃がしはしないッ！ お前はここで屍となるのだア！」

自慢の筋肉と武器を自慢する大男。

その男に、ティックが言う。

「すまん、聞いていなかった」

男の顔が、怒りの為にみるみる真っ赤になっていく。

男はティックに向けて機関砲を撃った。

「砕け散れエ！！」

唸りを上げる機関砲。

砲弾が炸裂し、硝煙がティックの姿を覆い隠す。

「散れッ！ 砕けるッ！ 木っ端となつて散華せよッ！」

次の瞬間、煙の中からティックの身体が飛び出した。

「むおッ！」

思わず声を上げる大男。

ティックは、男の持つ機関砲の砲身の上に立っていた。

「なるほど……。確かにパワーはあるようだ」

男が機関砲を振り回す。

「降りなさいッ！ 降りなさいッ！ 降りなさいッ！ その汚い足を、私のハニーから退けなさいッ！」

ティックは、機関砲を足場にしてジャンプ。

空中でボディーを半回転させ、天井を蹴る。

「私のハニーになんてッ!？」

次の瞬間、彼の拳が男の頬を捉えた。

弾ける頬の肉。

彼の顔面の肉はえぐり取られ、砕けたあごの骨と歯と歯茎から血が噴き出している。

「ひいぎゃあああ！ は、はんでござうお！（な、何て事を！）」
地面をのたうちまわり男。

ティックは、男の襟首を左手で掴んで持ち上げ、右手を彼の頭に当てた。

「なぎをずるぎだ!？（何をやる気だ!？）」
ティックは答えた。

「骨格の強度を確かめてやろう」

月の瞬間、彼の右手に内蔵された超振動プレートが目を覚ました。

「うぐうあああ!？」

振動数を徐々に上げていくティック。

男の頭全体が振動し始め、耳と目と口から血が流れ出始めた。
弾ける眼球。

頭の皮膚全体に亀裂が走りだし、その感触が熟れたトマトのように軟らかくなっていく。

突然、男の頭が割れた水風船のように爆ぜた。

飛び散る男の頭部。

ティツクのアーマーカーコートは、男の返り血で真っ赤に染まっている。

その時、ジーナ達からの通信が入った。

「こちら02、目標を確保した。撤収する」

敵兵を排除し、捕われた捜査官を保護したジーナ達。

それを聞いた彼は、ジーナ達に答えた。

「了解…。合流地点へ向かう」

突然彼の脳裏に、鮮明なビジョンが蘇った。

自分が最前線で戦っている光景…

自分と同じ姿の兵士達。

碎け散る機動装甲。

燃え上がる機体。

それから這いずり出る、火だるまになった敵兵。

人であった事は確かなのに、もはや原型を留めていない肉塊。

銃声、銃声、銃声！

硝煙、硝煙、硝煙！

死体、死体、死体！

破壊、破壊、破壊！

何も生み出さず、何も護らない。

誰も、何も、自分さえも。

詩が聞こえる…

聞き慣れた、自分達の行軍歌が…

踊れ、踊れ、踊り狂え

我等は亡霊

滅びの子

踊り、踊り、踊り狂う

彼等は亡霊

滅びの子

火と硫黄の燃える湖から、生まれ出、滅びの申し子

しかし心せよ
亡霊を装って戯れなれば汝…

彼のボディーが突然、甲高い高周波音を発し始めた。
次の瞬間、彼の脚部装甲の一部が展開し、高圧のプラズマジエックトを噴射し始める。

その推力を受け、通路を高速で移動するティック。
彼は心の中で呟いた。

そこに居るのか…？
同胞達…

「A棟6階・第八通路」

「侵入を許した？」

カラドは、自分の後ろに付いて歩く部下達に、静かな声で問い質した。

「はい…。敵は約4名。侵入時には光学迷彩を使用し、警備兵を含む24名を殺害。例のスパイを奪取し、現在逃亡を謀っています」

「奴は？」

「つい先ほど、追撃に向かいました。兵を下げると言っていました
が…」

「何を生意気な…」

彼はオペレーションルームの扉を開けた。
「緊急発令！ 混成機甲部隊出撃！ 5分でやれ！」

「同時刻、B棟2階・1番通路」

「大丈夫ですか？ボリス捜査官」

エイトが、自分の肩につかまっている傷だらけの男を労るように支えながら、そう尋ねた。

男は答えた。

「ああ、大丈夫だ。ただ肋骨を少しやられているようだ」

エイトは答える。

「頑張ってください。もう少しで脱出できます！」

ジーナが無線で言った。

「こちら突入班！ 待機班聞こえるか？」

「こちら待機班、聞こえるぞ」

「怪我人がある！ 収容と脱出の準備を！」

「了解！ 脱出信号はすでに打つてある。もうすぐ迎えが…」

唐突に切れる無線。

彼女は何度もコールする。

「待機班どうした？待機班！」

突然、先頭を歩いていたガントの足が止まった。

彼が呟いた。

「01…？」

彼等の前に立つ巨人のような兵士。

その姿はティックと瓜二つ。

しかし、ただ一人そこに立つその兵士はただならぬ殺気を発している。

「違うぞ…、なんか…、ヤバイ!!」

その兵士は、その右手に持った拳銃をゆっくりこちらに向けた。

その銃…

ジーナには見覚えがあった。

彼と…

ティックと同じ銃…

「マハト…」

次の瞬間、その銃が火を噴いた。

その弾丸を、辛うじて避けるジーナ。

彼等は急いで、交差する通路の角に隠れる。

叫ぶガント。

「なんだありやどついう事だ？」

ジーナが呟いた。

「対機甲大型拳銃マハト…!」

「マハト？」

エイトが聞き返した。

ジーナは答える。

「あいつが持つてる拳銃の名前…。ファントムの標準装備!」

ガントが嘲笑気味に言う。

「拳銃一丁でどうする気だ？ こっちはMAPSだぞ?」

次の瞬間、コンクリートの壁を砕いて、マハトの弾丸が曲がり角を撃ち抜く。

「うおい！弾がビシバシ貫ったぞ！」

「だから言ったでしょ！対機甲拳銃だつて！本来はMAPSとか装甲車を撃破するための銃なんだから！教官は、いつも大切そうに持ち歩いてた…」

「それじゃあ奴はファントム!？」

「それよりどうするんだこの状況！」

ガントが言った。

「俺が出る……！」

ガントはグレネードマシンガンを構えて角を出た。

「ガント、駄目エ！」

制止するジーナの声を無視し、彼はトリガーを引いた。

「この野郎おお！」

連射されるグレネードは、ファントムの胴体に命中して炸裂。

爆炎と硝煙が、奴の姿を覆い隠す。

弾切れするグレネードマシンガン。

突然、一発の弾丸が彼を貫いた。

「ガントオオ！」

エイトの絶叫と共に、仰向きに倒れるガント。

弾丸は彼の肩を貫いていた。

「ぐ……、複合セラミック装甲が紙だ！」

「起きろガント！」

彼の頭にマハトを突き付けるファントム。

絞り込まれる引き金。

マハトの撃鉄が落ちる寸前、壁を打ち砕いて、もう一つの巨人が姿を現した。

「01！」

「教官！」

ガントとファントムの間に入って立つティック。

彼はジーナに言った。

「早く撤収しろ。こいつの相手は私がする」

「しかし……！」

「これ以上消耗を増やすな」

二人の横を通り、脱出していくジーナ達。

それを見送るティックは、彼等の姿が見えなくなったのを確認すると、ゆっくり話し始めた。

「9年…9年捜した」

「まさかこんな形になるとはな」
見合う二人。

その姿はまるで鏡のように。

「無理か？」

「ああ、無理だ」

ティックは、自分のマハトを抜き構えた。

「9年分…」

「ああ、9年分だ」

同時に引かれる引き金。

二人はまるで吸い寄せられるかのように…。
導かれるかのようにぶつかり合った。

Chapter 4

「B棟南800m、部隊回収地点」

ジーナ達の目の前に降りて来る、大型の輸送機。

航空灯も部隊章も無いその漆黒の機体は、夜の闇に溶け込み、カーゴ室の赤い室内灯だけが蝋燭の火のように浮かんでいる。

大きく開かれたカーゴ室の扉。

何だろうか？

カーゴの入口で機関銃を構えたガンナーが、私達に向かって何か叫んでいる。

捜査官の救出は成功。

負傷者はガントとその捜査官。

待機班は全員殉職した。

遺体の回収も、恐らくは出来ない。

今すぐ大声で叫びたい。
それなのに声が出ない。
カーゴの中で、エイトが私の肩を掴んで揺さぶっている。
やっぱり、何も聞こえない。
機体が高度を上げ始めた。
ただ一人、彼を置いて…
違う…
置いてけぼりなのは私だ…。
彼と共に…
自分の心も一緒に。
教官…
出来る事なら、あの時のようにもう一度だけ私の前に戻って来て
下さい…
私はまだ、あなたに言いたい事がたくさんあります。
もう…、何も言わないまま別れるのは嫌です。
教官…
いいえ…
傷だらけの貴方へ。

営舎内をまるで碁盤の目のように走る通路を、高速で機動する二つのボディーが在る。
かつての戦争が生み出した、在ってはならない闇の産物。

数多の殺戮。

そして、終戦。

歴史から取り残され、今や互いに銃を向け合うようになった二人を隔てる硝煙と弾丸の嵐。

その、マハトから発射される15mm徹甲弾は、互いを掠めあい、通路の壁に幾つもの弾痕を刻み付けている。

刹那、同時に弾切れする双方のマハト。

その瞬間、ティックは相手のタツクルを受け、二人は一丸となつたまま通路の隔壁数十枚を突き抜けてゆく。

スラスターを吹かすティック。

それでも相手の勢いは凄まじく、彼らのボディーは営舎の西側外壁を突き抜け、更に営舎の外に建てられた古い物資集積倉庫の外壁をも破り、ようやく止まった。

立ち込める砂埃。

倉庫の外壁を構成していた発泡コンクリートの瓦礫が辺り一面に散らばっている中、ティックは自分にのしかかるコンクリートの塊を片腕で薙ぎ、身を構えるように拳を握りしめる。

「投降してくれ、プラス…。いまさら我々が戦う意味は無い筈だ」
見合う二人。

“冒読者”の名を冠するファントム、プラス「フェーマー」。

“無感覚”の名を冠するファントム、ティック「スキンド」。

同じ姿、同じ武器。

普通の人間ならば、“戦友”と言うであろう二人の間には、いつしか沈黙が訪れていた。

重くて不気味な沈黙が。

その沈黙を、プラスが破った。

「知っているか、ティック。この世界で…、この巨大な掃き溜めのような世界の中で唯一公平な物を…。全ての人間に平等に与えられる物を…。それは“死”だ、ティック。どんな人間でも必ず訪れる瞬間…。あらゆる責任とくびきから開放される、人類共通の共同墓

地。あの戦争から生き延びても、時が来れば必ず死ぬ。どれほど強健な戦士でも、自分の寿命に1インチを加えるも出来ない……。それが“死”だ。だがな、ティック……。我々はそれさえも奪われた！肉体を奪われ、記憶を奪われ……。最後の権利である“死”さえ奪われたのだ！解るだろう、ティック！我々は永遠に彷徨い続ける運命なのだ！そう、我々に与えられたこのボディは、我々を永遠に縛り続ける！誰かがこの牢獄を破壊しない限り、我々は永遠に彷徨い続ける！私は求め続けた！この牢獄を破壊できる救い主を！だがこの忌まわしい牢獄の防衛迎撃機能と私の戦闘本能は、私を縛り続ける！だが救い主は現れた……。お前だ、ティック。この牢獄を破壊できるのは、お前しかいない。同じ牢獄にいるお前しか……。！」

ブラスは、空になったマハトのマガジンを抜き、予備のマガジンと静かに入れ換えた。

「さあ……。終わりを始めようじゃないか、……。ティック！」

そう言つて、ティックへ向かつて行くブラス。

彼はその銃口を、ティックの顔面へ向けた。

引かれるトリガー。

その寸前、ティックの左腕がブラスの右腕を逸らし、弾丸はティックの右足元元めにめりこんだ。

次の瞬間ティックは、ブラスの背面へ回り込み、その隙に自分のマハトをリロード。ブラスの背中へ銃口を向ける。

火を噴くマハト。

それと同時に、高速で機動するブラスのボディが、至近距離で放たれる弾丸を回避する。

「いいぞ、ティック。お前の死を、私によこせ！」

振り返ったブラスが、マハトの銃口をティックへ向けた。

交差する二つの銃口。

二人の右腕は左右に押し合い、互いの銃口を逸らし合う。

腕を解くティック。

彼はブラスが向けてくる銃口を左腕で逸らし、高く構えたマハト

をプラスの鼻先へ突き出した。

絞られるトリガー。

プラスはそれを掴んで逸らし、左腕と右腕を交差させるようにマハトの銃口をティックの喉元へ向けた。

プラスの右腕を掴むティック。

お互いのマハトは、お互いの頭の横で同時に火を噴いた。

二人の間を舞う、二つの薬莢。

その薬莢を弾き飛ばし、凄まじい早さで交差する二人の腕。

常人にはとても捉える事の出来ない攻防は、目に見えなくとも、その互いの腕がぶつかり合う音と、マハトの咆哮が物語っていた。

次の瞬間、流れるようにしなる二人の腕が互いの正面を捉え、マハトが火を噴いた。

弾き飛ばされる二人。

二人は互いの弾丸を左腕で防御し、着地する。

「銃の勝負では決着が着かん……」

「ああ……」

二人はマハトから手を離し、拳を締めた。

スラスターで加速する、ティックとプラス。

その瞬間、互いの右手に内蔵された超振動破碎装置が唸りを上げ、ぶつかり合った。

凄まじい衝突音と共に弾き合う二つの拳。

間髪を入れずに、今度は左手同士がぶつかり合う。

まるで雷撃のような巨大な放電。

超高電圧放電兵器。

その二つの電源から発せられる凄まじい電撃は、絶縁体である空気を突き抜け、照明を破裂させ、施設の骨格である鉄筋構造へ伝播した。

睨み合う二人。

ティックがプラスに問う。

「一つ聞かせる、プラス。死が、人を開放してくれるものならば、

生とはなんだ？ 人は縛られる為に生まれて来たのか？」

彼は答えた。

「人は生まれた時から死へ向かっている。生命は死ぬからこそ美しい。死こそ、生命の基本プロセスなのだ！」

そう言いながら、ティツクの左手を押し戻すブラス。

ティツクは、左腕に右手を添えて力を加え、ブラスの腕を止める。違う、ブラス！戦って死ぬ事、寿命で死ぬ事……。人は死ぬ為に生まれるのではなく、戦う為に生まれて来る！生命は、自分が生きている間に、少しでも運命に抗おうと戦うから美しいのだ！」

次の瞬間、ブラスはティツクの右腕を更に押し込めた。

「きれいごとを吐かすな、ティツク！もはや我々は人ではなく、ただの亡霊に過ぎん！塵は塵に帰り、灰は灰に帰る……。我らは塵から取られ、塵へ帰る！その何が悪い！」

「馬鹿者が！我等が生きるは意味在つての事！かつて私と戦い、私を生かした戦士が言った！『生きて戦い抜いた先にこそ答えがある』と！たとえ亡霊になろうと、私はもう一度生きる為に戦ってから死ぬ事を選ぶ！」

ティツクの左腕が、ブラスを突き飛ばした。

「小賢しい！」

指を組み、両腕を振り上げるブラス。

「ならばお前はそうするがいい！だが私は私の道を行く！死こそ、私の答えた！」

彼はそう言つて、両腕を振り下ろした。

ブラスの一撃を両腕で受け止めるティツク。

その瞬間、彼の足元が陥没し、厚さ30センチのコンクリートで作られたフロアが砕けた。

地面へめり込むティツクの脚。

ブラスは近くの壁から鉄骨を引き抜き、それを身動きの取れない彼へ振り下ろした。

重さ数百kgは有ろうかというH鋼材。

ティックはそれを左腕で受け止め、右手で叩き折った。

次の瞬間ティックは、地面ごと右足を蹴り上げ、コンクリートの破片を巻き上げた。

蹴り飛ばされる、巨大なコンクリートの塊。

それを易々と碎き、そのままティックへ殴り掛かるブラス。

スラスターで加速された自身の全質量を乗せた、見事な程真つすくな正拳突き。

ティックは、重ねた両手に渾身の力を込めて、その拳を受け止めた。

宙を舞う彼のボディー。

まるで、砲で撃たれたかのような大きな衝撃は、高性能緩衝ゲルに包まれた脳を揺さぶり、彼の意識を一瞬遠退かせた。

それでも彼には見えていた。

ブラスが構える、マハトと同じほどの大きさの銃が。

対機動装甲用電磁加速飛翔体射出拳銃…、“アーマグ”。

次の瞬間、その銃から放たれた弾丸は、ティックの頭部を掠め、背後に置かれた高圧ガスのタンクを貫いた。

轟音と共に爆ぜるタンク。

ティックのボディーは爆風に飲まれ、そのまま炎の中に落ちた。

「どうした、ティック。お前はその程度だったのか？」

呟くブラス。

だがティックは、彼の期待を裏切らなかつた。

炎の中からほとばしる、一発の弾丸。

その弾丸は、15mm徹甲弾をも弾くアーマーコートを貫き、ブラスの肩を砕いた。

「それでこそお前だ！ ティック！」

歡喜するブラスの腰を、更にもう一発の弾丸が貫く。

崩れ落ちブラス。

炎の中から歩み出るティックはアーマグをブラスへ向かって構えた。

ブラスの視界に映る、アーマグの銃口。

この銃は、正面から見るとまるで、柩のような形をしている。

「そうだ、それがお前だ。だがな、ティック。我々のボディーはこれくらいでは止まん！」

力を振り絞り、アーマグをティックへ向けるブラス。

その瞬間、ティックのアーマグから放たれた10mm徹甲弾が、彼の左胸を貫いた。

仰向けに倒れる彼。

弾丸は、彼の脳生命維持用人工心臓を砕いていた。

ブラスの傍へ急いで駆け寄るティック。

彼は、ブラスのボディーを抱き起こした。

「ティック……」

「喋るな、ブラス。今私のバイオポンプと繋ぐ」

「やめる、ティック。邪魔を……しないでくれ。それに、もう時間が無い」

彼の言う通り倉庫の外では、アストレイの機甲混成部隊が今まさに到着した所だった。

倉庫の目の前に並み居る四両の主力戦車。

その戦車の一つに乗る士官に、無線手の兵士が言った。

「中尉。機装兵の展開、いつでも行けます」

「よし、各員降車！配置に就け！」

「了解」

倉庫の中を、キューポラに取り付けられた望遠カメラで覗き込む士官。

その瞬間彼は、思わず呟いた。

「なんだ、あれは……」

そこには二つのボディーが映っており、一人はもう一人を抱き抱えている。

「中尉…！ あれは一体どういう事なのでしょうか？」

「解らん！ 先ずは投降を促せ。味方ならば応じるだろう。抵抗するなら射殺しろ！」

「了解」

倉庫を取り囲む戦車の一つから発せられる、投降を促す呼び掛け。それを聞きながらティックは、バイオポンプから流れ出る人工血液を留めるようにブラスの胸を押さえている。

「行け、ティック…」

「お前を置いては行けない」

「駄目だ、お前は生きる。お前は…ファントムらしくない。決心しろ、ティック…。お前は…、誰かの笑顔の為に死ぬべきだ…」

「ブラス…」

「詩を…、詩つてくれ…ティック…。我々の詩を…」

「待て、ブラス…！私を置いて逝くな…！」

「ああ…、ティック…。この瞬間が…、あの時で…最後ならば…、どんなに…楽だった…だ…ろう…」

ブラスが死んだ。

ティックの腕の中で。

静かに、眠るように。

彼は、ブラスの亡きがらを抱いたまま、詩を詩いだした。

「Dieser Karpener wird in dreige
schnitzt Was ein anbetrifft in
der Schatulle Manschlacht,
im Platz Ein mit selbstessen
und erschöpfen（その身を三つに切り分けよ。一
つは枢に、一つは屠り場に、一つは己で喰い尽くせ）」

遠い過去、仲間達と紡いだ自分達の行軍歌。

その詩は、外にいる敵兵士達にも届いていた。

「なんだ…？」

「詩…？」

彼等にはたしかに聞こえていた。

自分達の、滅びの詩が…。

その瞬間、士官が無線に向かって叫んだ。

「全車！ 砲塔で目標を狙え！」

旋回する砲塔。

ティックを睨み付ける、120mm砲と同軸30mm機関砲。

それでも彼は、詩を続ける。

Die Katakomben, die nicht die
Zeiten hat, als es auf reflekt
iert wird (顧みられる事の無いカタコンベ)

Es tut erfaßt zu werden, Seele
vom Seiterand gibt es Nr.
und whirles und tanzt (集められし魂は、憑
代無く舞い踊る)

Tanzen, tanzen, um zu tanzen,
abweichen (踊れ、踊れ、踊り狂え)

Was uns anbetrifft Kind des a
bgeristen Geistes und des Fal
lens in Ruine (我等は亡霊、滅びの子)

Der Tanz, tanztes, tanzte und
weicht ab (踊り、踊り、踊り狂う)

Was sie anbetrifft Kind des a
bgeristen Geistes und des Fal
lens in Ruine (彼等は亡霊、滅びの子)

Es wird vom See, in dem das F
euer und der Schwefel brennen
und herauskommen, das heaven's
ent Kind des Fallens in Ruine
getragen (火と硫黄の燃える湖から、生まれ出、滅びの申

し子)

Aber Bezahlung Aufmerksamkeit
(しかし心せよ)

Herauf abgereisten Geist ankl
eiden, wenn du spielst: (亡霊を装いて
戯れなれば…)

「全員…」

Sie… (汝…)

「…撃てえ!」

次の瞬間、120?砲が火を噴き、機装兵からの一斉射撃が倉庫
に降りかかった。

碎ける外壁。

爆ぜる対装甲榴弾。

凄まじい弾丸と砲弾の嵐が、倉庫を爆発させる。

「撃ち方止め!」

撃ち止む攻撃。

燃え上がり、崩落する倉庫を見て、士官の男が兵士に叫ぶ。

「早く! 早く奴の破壊を確認しろ!」

怪訝な表情の兵士。

「え?」

「油断するな! 奴は我々の常識を超えている!」

「しかし、あれほどの爆発での生存は…」

そう言うのもつかの間、兵士は突然、凍り付いた表情で呟いた。

「そんな馬鹿な…」

怒鳴る士官。

「どうした! 正確に報告しろ!」

兵士は、震えた声で士官に答えた。

「センサーに反応有り！ 目標健在！生きています！」
「何！」

嵐のように燃え上がる、真っ赤な炎の中に立つティック。
今、彼の両手には、アーマグが握られている。

「くそ！ 砲塔のコントロールをよこせ！」

砲塔のコントロールをオーバーライド。

コントロールレバーを握りしめる彼の掌に、汗が滲み出る。

“亡霊を装って戯れなれば汝、真に亡霊とならん”

彼が両手に持つ、二つのアーマグには、そう刻まれていた。
炎の中から歩み出る彼。

彼を取り巻く炎が、一瞬仲間達の姿を作り、消える。

「全車、APFSDS装填！ 合図と共に一斉射！」

装填される徹甲弾。

戦車の120mm砲が、部隊へ歩み寄るティックを睨み付ける。

「砲射用意！ ……テエツ！」

引かれるトリガー！

各120mm砲から発射された4発のAPFSDSは、ティックの周囲へ次々に着弾し、衝撃によって巻き上がった炎が彼の姿を掻き消した。

「やったか！？」

奥歯を噛み締める兵士。

「いえ…！ 目標健在！」

「馬鹿な！ 直撃の筈…！」

「目標から高エネルギー反応！」

次の瞬間、士官の乗る車両より前に出ている2両の戦車が、貫かれ爆ぜた。

「何事だ！」

「目標からの銃撃です！」

叫ぶ士官。

「主力戦車が一撃だと！？ 奴は…、HMA並のレールガンを持つ

ているのかッ！」

彼は奥歯を噛み締めた。

「全車後退！ 機装兵を援護しながら目測で制圧射！」

急速後退する戦車の中で、兵士が叫んだ。

「中尉！ あれは一体…、あれは一体なんなのですか！？」

彼は答える。

「亡霊を装って戯れなれば汝、真に亡霊とならん…！ 大戦中、当時最大勢力を誇った軍閥の計画の中で、死亡した兵士の脳だけを蘇生し、兵器として使えないかと言う物があった…。痛みを感じず、何も思わず、命じられるがままに殺戮を行う人間兵器…！ 戦争倫理に反した、存在しないはずの幽霊部隊…！ 対機甲機械化猟兵・フアントム…！」

士官の言葉に、思わず息を呑む兵士。

その瞬間、ティックは猛烈な勢いで部隊に向かって走り出した。

「応戦しろ！」

重機銃を連射する機装兵達。

ティックは、雨のように降り注ぐ12・7mm徹甲弾をもつと、せずに全身で受け止める。

地面を蹴る彼。

その瞬間、彼のボディは軽く十数mを飛び越し、逃げ遅れた一人の機装兵を蹴り飛ばした。

彼の足の形にへこむ、機装兵の胸部装甲。

その兵は、身体をくの字に曲げたまま、宙を舞った。

「30mm！」

士官の声に応え、同軸30mm機関砲が、ティックに向かって徹甲弾を叩き込む。

それを回避する彼。

まるで滝のようにたたき付ける徹甲弾を、正確に避け続ける。

「駄目です！ 早すぎま…」

途切れる無線。

また一つ、戦車がアーマグに撃ち抜かれた。

「小回りの利かん戦車では……！ 機装兵は何を……！」

無線の向こうから聞こえてくる部下の叫び声。

それは、外にいる機装兵達の物だった。

その声を、カラドは発令所で聞いていた。

「3号車・4号車、大破！5号車も！」

「6号車擱座！ 機装兵部隊、消耗率60%突破！」

カラドが呟く。

「私の360を用意しろ……」

一人のオペレーターが振り向いた。

「そんな！ 司令が行かれるまでもありません！ それに、敵もも

うじき弾が切れます！ そうすれば我々で……！！」

「ふ、無理だな。いくら歴戦の猛者でも、奴には勝てん。だが、時

間を稼ぐことは出来る。諸君、ご苦労、脱出を開始しろ」

彼はそう言つて、発令所を出た。

「クソツ！ 相手は一人だぞ！」

機装兵の一人が、重機銃を連射しながら吐き捨てる。

視界に映る、仲間の死体。

彼は重機銃の銃身下部に装着されたロケットランチャーを放った。

「喰らえ！」

迫る対装甲ロケット弾。

ティックはそれを回避し、アーマグを二丁同時に撃つ。

二人の機装兵が、風船のように爆ぜた。

弾切れを起こす二丁のアーマグ。

彼は、右手のアーマグを地面へ捨てた。

「奴は弾切れだ！」

「撃て！ 撃て！」

叫びながら重機銃を連射する機装兵達へ向かって行くティックは、右手の超振動ナックルで一人の機装兵の脳を刳り重機銃を奪うと、

それを彼等に向かって撃った。

アーマグのマガジンを捨てるティック。

彼は左手の手首を曲げ、アーマグの銃口を下へ向けた。

その瞬間、アーマーコートの袖の中から、アーマグの予備マガジンが飛び出し、グリップの中へ収められる。

アーマグの銃口を起こす彼。

だが彼は突然、空を見上げた。

突然降り注ぐグレネード弾。

地面を焦がす爆炎が、ティックと機装部隊を遮断。

その中に、チョバムアーマーを全身に取り付けた、カラドの360h1が着地する。

「やつと叶った…！ 貴様等をこの手で殺す瞬間が！ 対機甲機械化猟兵・ファントム！ 貴様等が地獄へ帰る時が来た…！」

T O B E C O N T I N U E D . . .

ACT17 心のありか(前書き)

・組織の抗争、ヒトとしての誇り、想い…

ACT17 心のありか

Chapter 1

「容態は？」

白衣を着た医師が看護師に問う。

答える看護師。

「血圧・100の56、意識レベル・9、脾臓破裂による腹腔内出血と左肋骨4・5・6番骨折。危険です」

「もう一人は？」

「右肩部貫通銃創、動脈出血。鎖骨及び肩甲骨の粉碎骨折です」

「よし、緊急オペだ」

捜査官とガントがストレッチャーに乗せられ、医師と看護師と共に病院の白い廊下へ消えてゆく。

それを呆然と見送るジーナの横には、困った表情のジムと、苦虫を噛み潰したかのようなエイトが立っていた。

「ガント……」

ジーナが、ぽつりと呟いてから壁に寄り掛かった。

ファントムが居た。

教官と同じファントムが。

そのファントムに、ガントが撃たれた。

私はガントと自分の姿を重ねていた。

教官に撃たれる自分を。

何故だろう……？

私を撃つ教官？

私が教官を撃つたからかな？

教官を……？

あれ……？

教官は……？

突然、エイトとジムの二人が引き締まった表情で敬礼する。

アングリフが、ジーナの目の前に立った。

「局長……」

「ご苦労さん」

そう言うアングリフの顔を、ジーナは睨みつける。

「教官が……、ティック・スキンド大尉が取り残されました。直ぐに A S A Fの本隊を向かわせて下さい」

「うーん……」

冷静な声の彼女。

それに対し、アングリフは考え込むように唸るだけだった。

「敵にはファントムが居ました」

「そうだね」

「……知っていたんですか？」

「まあね。ついでに言うとなら H M Aもある」

ジーナがアングリフに叫んだ。

「局長はこうなる事を解っていて教官を呼んだんですか!？」 私達

の事も利用して!？ それでガントは……! 教官は……!」

突然、アングリフの手の平が彼女の額を押さえた。

そのまま下げられる彼の腕と共に、ジーナはペタリと床へ座り込む。

身体が起きない。

M A P Sを装着していると言うのに、生身の人間の力に勝てない?

「ジーナ!! バラム一等官」

アングリフはジーナの額を押さえ付けたまま、彼女の顔をじっと見下ろした。

「君は一つ勘違いをしているようだ。私は君達を利用したつもりは無い。君達は任務を遂行し、成功させた。犠牲は払ったが、君達は生きている。それはティック大尉のお陰なんじゃないのかい?」

「でも教官が……!」

「君は彼の事を何も分かってない。彼はファントムだぞ？ 亡霊は亡霊にしか殺せない。信じろ、彼を。彼も君の事を信じたのだから」
アングリフはそう言って、ジーナの額から手を退かした。

「行け！」

カラドが、機装部隊に退避を促す。

「しかし！！！」

「お前たちは目的を達成しろ！ 行け！！！」

機装部隊は、カラドのHMAを見つめながら退避してゆく。
息をつくカラド。

次の瞬間カラドは、機体右腕に装備されたマシンカノンを狂ったように連射する。

「やらせはせん！！」

まるで奔流のような、徹甲弾の雨。

ティックはそれを、寸で回避。

砲弾が地面を刳り、土を掘り返す。

ティックの手中で、アーマグが唸る。

電磁加速飛翔体射出装置、同時連続発射モード。

3発分のエネルギーをチャージ。

トリガー。

アーマグから発射される3発の10mm徹甲弾。

だがその弾丸は、360h1の増加装甲に阻まれ砕けた。

「フツ…、大戦中なら未だしも、現用機の特装装甲にそんな小型のEMLなど通用せん！時代遅れだ！」

ティックは、連射される徹甲弾を避けながら、機装兵の死体が持っていたロケットランチャーを取り、HMAへ向けて撃った。

カラドはそれを、左腕の小型シールドで防御。

シールドの表面で、ロケット弾が爆ぜる。

「目くらましのつもりか？無駄だ！」

今度はカラドが、左小型シールドの裏に内蔵されたグレネードランチャーを発射。

迫る成型炸薬弾。

ティックはそれを迎撃。

炸薬弾が空中で爆ぜる。

次の瞬間、カラドの機体が爆炎を突き破り、ティックを地面ごと蹴り飛ばした。

砂埃と共に宙を舞うティックのボディは、そこから数十m近く吹き飛ばされ、営舎の外壁にたたき付けられる。

「死ね！フアントム！」

機体の肩部ミサイルポッドから、対戦車ミサイルが撃ち出された。アクティブホーミングで6基。

起き上がり、スラスタで走るティックを追尾している。

「闇より生まれし業は闇へ帰る。亡霊の闊歩もこれで最期だ！」

着弾するミサイル。

複数の爆発がティックを飲み込んだ。

大輪の華を咲かせる赤い爆炎。

突然、レーザーに反応。

上空から接近する移動物体。

「なに！？」

機体を振り向かせ、空を見上げる。

そこには、右手の超振動破碎機を起動させたティックがいた。

「…奴は…、あのミサイルを全て回避したのか！？」

不敵な笑い。

「さすがは楽しませてくれる！」

カラドはマシンカノンを上空へ構え、トリガーを引いた。火を吹くマシンカノン。

上空から加速するティックは、その射線を回避する。

「下手アクソ！」

マシンカノン、弾数0。

カラドは、ミサイルの全弾をティックへ向かって放った。

8基の誘導弾が、尾を曳きながら空へ昇っていく。

ティックは、その空気を切り裂くミサイルの弾幕の中突入し、スラスターを使いながら縫うように回避。

目標を見失い、彼の後方で6基のミサイルが爆発する。

接近する2基のミサイル。

ティックの右手が、その2基のロケットモーターを刳り取る。

幾つもの爆炎が、空を焦がした。

「フアアアアントオオムツ！」

爆炎を抜けるティックのボディー。

カラドは機体の右腕を振り上げ、ティックへ向かって拳を突き出した。

機体の拳と言う巨大な質量弾。

衝突寸前、ティックはその巨大なパンチを踏み付け、拳を足掛かりに大きくジャンプする。

「拳を踏み台にしたッ!？」

その瞬間、ティックの右足が、HMAの目であるメインカメラを砕いた。

衝撃でバランスを崩す機体。

カラドは、よろける機体を巧みに操作し機体脚部を踏ん張らせる。

「(メインカメラをやられたか…! サブカメラも! レーダーは辛うじて無事か…。反応は…? …無し! アクティブステルスか

ッ! どこだ!? 奴は…!?)」

感覚を集中させるカラド。

突然、彼の背中に寒気が走った。

機体の正面20m。

そこには、HMAへ向かってアーマグを構えるティックが居た。

電磁加速飛翔体射出装置、出力最大。

最終ロック・リリース。

リミッター解除。

青白い放電を纏うアーマグの銃身。

下肢部に力を込めるティック。

打ち出される弾丸。

その弾丸は、彼のHMAへ真つ直ぐ向かい、命中する。

後方へ突き飛ばされる、数十tもの鉄塊。

身体を突き上げる強烈な衝撃に、思わずうめき声をあげるカラド。

最大出力のアーマグから放たれた10m徹甲弾は、機体胸部のチヨバムアーマーを粉碎し、チタン・セラミック複合素材の胸部正面装甲板3枚を貫き、4枚目の最終装甲板にめり込んで、ようやく止まった。

地面を蹴るティック。

彼のボディーは軽やかに宙を舞い、一息でカラドのHMAに到達。

が、その時突然、カラドの操る機体の右手がティックのボディーを掴んだ。

カラドはスラスターペダルを一杯に踏み込む。

機体背面のスラスターが推力を開放する。

そのまま一直線。

ティックを掴んだまま、高速で走りだす機体。

機体は営舎の外壁にぶつかり、ティックを掴んだ右腕は、その外壁に深々とめり込んでいた。

「捕まえたぞ…、ファントム！貴様を殺して、“亡霊”の名は私が受け継ぐ！」

軋むような音を上げる彼のボディー。

カラドが、ティックを掴む機体のマニピュレーターを更に握り込んだその時だった。

「故に汝らは感謝せよ…。未だ人である事を、感謝せよ…」
ぼつりと呟くティック。

突然、彼を締め込むマニピュレーターの動きが止まる。

「こ、こいつ…！」

悲鳴を上げるアクチュエーター！

次の瞬間、マニピュレーターの関節が歪み、折れた。

ちぎれ飛ぶ“指”。

機体マニピュレーターの束縛を解いた彼は、機体の腕を一気に駆け上がる。

「やらせはせんぞオオ！」

カラドは咄嗟に、右腕をパージした。

落ちる右腕。

ティックは、その右腕を蹴り、空中から更にジャンプする。

迫る左腕。

彼を掴もうとする左マニピュレーターは、寸の所で虚しく空を切った。

機体コクピットに取り付くティック。

彼は右手の超振動破碎機を起動させ、先程アーマグの10mm徹甲弾が開けた穴に、手刀を刺し入れる。

「くそ！ 離れる！ 離れる亡霊！」

叫びながら、彼はティックを振り落とそうと必死に機体をもがく。だがティックの手刀は、そんな彼の声を掻き消すかのように深々と刺さっていく。

火花を散らす装甲。

彼の手刀は10mm徹甲弾の穿った穴を刳り、更に傷口を広げていく。

そしてティックの右手は、コクピットの装甲を大きく切り裂き、

最終装甲板を削り取る。

「悪魔め！ 悪魔めええ！」

ティックの右手が、最終装甲板と胸部フレームを突き破り、コクピットの中へ侵入してくる。

絶叫するカラド。

その彼の右腕に、ティックの右手が触れた。

「がああああッ！」

まるでミキサーの中に手を差し入れたかのような状態。

彼の右腕は瞬時の内に細切れになり、骨がミクロレベルまで粉碎される。

沸騰する血液。

彼の右腕は、血を噴き出しながら破裂。

もはや人の痛覚レベルを通り越した激痛。

急激な出血。

意識の遠退く彼の機体は、仰向けに倒れた。

コクピット内のカラドに向かって、ティックはアーマグを構えた。

戦闘のダメージ。

オーバーロード。

アーマグは、あと一発撃てるだけの力しか残っていなかった。

「フア…ト…ム…」

カラドが途切れ途切れの声でティックに言う。

「貴様…には…死者の…亡…霊が、とりついている…。その…亡霊は…貴様を…呪い続ける…。私も…な…」

カラドは、口から血を吐き出しながら笑う。

ティックは言った。

「私はお前が羨ましい。人間のまま…、死ねるのだから…」

ティックはアーマグの引き金を引いた。

弾丸はカラドの額を貫き、シートにめり込む。

機体から降りるティック。

彼は壊れたアーマグを捨て、そのまま地面に倒れた。

Chapter 2

“雨”だ…

あの時と同じ、全身を濡らす滝のような雨。

地面はぬかるんで、土は脚に纏わり付き、靴の中まで雨水が入り込んでいる。

私はその中で脚を止めていた。

私の背中に突き刺さる、剣のように鋭く鉛のように重い視線。痛いほど感じる、あの人の…

目で見ずともわかる、あの人の視線…

私は震える肩を押さえ付けて、振り返ろうと足を動かした。

突然、意図せず揺れる身体。

その瞬間、私の身体に、撲られたような衝撃が走った。

胸に熱い感覚が広がっていく。

理解出来ない意味不明の感覚。

その胸に、私は手を延ばした。

指先に、ぬるりとした血の手触り。

胸に突き刺さる、一本の鉄杭。

崩れて座り込む私の身体を貫く錆びた鉄杭を血が伝い、地面に落ちる。

血は地面に広がり、目に見える全てを飲み込んで行く。

地面も、木も、草も、空さえも。

気が付けば私は、裸の身体を杭に貫かれていた。

私は叫び声を上げた。

張り裂けんばかりの叫びを。

その度に、私の身体を杭が貫いていく。

一本、二本、三本…

私の身体は原型を留めないまで貫き続けられる。
声を上げる生命力はもう残っていないかった。

ダレカタスケテ…

ただその言葉が、気管に詰まった血栓によって阻まれる。

どうして…

どうして助けてくれないの？

「教官…」

「ジーナ…！」

自分と呼ぶ女の声で、彼女は目を覚ました。
目に入ってくる淡い光。

小さく、呻くような、声にならない声。

彼女は必死に、自分の身体を撫で回した。
身体はある。

なんともない。

傷も無い。

分かっていても、何度も繰り返す。

「ちょっと…、大丈夫？」

隣にいるエレミアが、シーツの上で身をよじるジーナを心配そう
に見つめている。

「ん…」

「まったく…、隣でウンウン唸られちゃ堪ったものじゃないわ…。
今お水持ってくるね」

そう言ってベットをおりる彼女を、ジーナは目で追いながら身体を起こし、大きなため息をついた。

朝の薄闇。

カーテンが風に揺れている。

「いいの？　せつかくの休暇なのに家に帰らなくて…。もう2日よ？」

エレミアは、冷蔵庫の中を漁りながらジーナに言った。

彼女は答える。

「迷惑ね…」

「迷惑だなんて…。ジーナと居るのは楽しいし、それにあなたの女房役には馴れたわよ。はいお水」

「…ありがとう」

ジーナは水を一口。

エレミアはベットの上に手をついて身を乗り出し、枕元の窓を開け放った。

再び彼女が問う。

「なにか悪い夢でも見たの？」

ジーナは答えた。

「聞いて面白くもないし、話したくもないわ…」

「“教官”？」

「え…？」

ベットに腰掛けるエレミア。

「ほら、またその顔。寝てる時もそうだったけど同じような顔してたわよ？　美人が台なし」

ジーナがぼやく。

「女の幸せ遠のくわね…」

「大丈夫よ。あなた装備課の女の子達にすっごい人気あるんだから。仕事も出来て美人で、“できる女”の鏡だって。自分じゃ気付いてないでしょうけど、あなたってとてもキュートでセクシーなのよ？」

「あら、うれしいわね。彼女でも作るうかしら…」

そう言って苦笑するジーナを見つめながら、エレミアが遠慮気味な声で問うた。

「ねえジーナ…、あなたの言ってる“教官”ってどんな人？」

ジーナの眉が歪む。

「なんでそんな事聞くの？」

「夢にまで出てくるんでしょ？男の人？」

「一応」

「素敵な人？」

「まさか…。それに出てくるのはいつも悪夢にだけよ。それに…」

ジーナはもう一度ため息をつき、ズレた肩紐を直した。

「教官は私にとっての痛みそのものよ…」

二人の間に沈黙が流れた。

長い沈黙。

エレミアは怪訝な表情で聞き返す。

「なにそれ？」

部屋の中を風が駆け抜ける。

「分からないでしょうね…。分かって貰えるとも思っていないし…」

そう言ってジーナはベットから降り、立ち上がった。

その彼女の背中を、エレミアは切なげな顔で見つめている。

背中にある傷痕。

傷痕など簡単に消せるはずなのに…

でもその傷痕が、彼女の肢体をより艶かしく見せていた。

「ねえ、ジーナ…。何が有ったか分からないけど、あまり自分を責

めないでね…」

そう言う女に、ジーナは振り返らないまま呟いた。

「ねえ、エレミア…。私って捻くれた女ね…。お世辞にも、人とな

りが良いとは言えないわ…」

「恋でもしたら？きつと何かが変わるわ」

ジーナが、服を着ながら答える。

「もう恋なんてしないわ…」

彼女が振り返る。

あの名前を口にした時と同じ表情で。

「ありがと……。もう帰るわ」

「ジーナ……」

部屋を出ていくジーナを、エレミアは止める事が出来なかった。

ジーナの目は、剥き出しのナイフのような目をしていて。

触れれば傷を負うような目を。

エレミアは小さく呟いた。

「朝ごはんくらい食べて行けば良いのに……」

ぱちん、ぱちんと、軽快な音が部屋に響き、彼の足元に木の枝が落ちる。

小さな鉢に植えられた小さな松。

その枝を剪定鋏で切りながら、アングリフは思考を巡らせていた。

捜査官を救出したあの作戦。

作戦後の隊員達。

作戦の後始末。

彼の頭の中で、記憶がリフレーションする。

「松は成長が遅くてね、やっと剪定できる大きさになったよ」

ヨハンが答えた。

「改良種に替えられては？成長は早いですし、無駄に伸びませんし」

また一つ枝が落ちる。

「ヨハン君、盆栽は手間をかけるからこそ価値が出る。改良種はどうも好かん。つまらない」

深呼吸一つ。

「さてと、そっちはどうなった？」

「報告します。作戦終了、実行は公安3課ライブラス。昨夜、作戦行動を“捕捉”から“攻撃”へ移行。散っていたアストレイ残党を処理、殺害・12。痕跡は完全に消去、撤収完了」

「いいよいいよ、非常に良い。例の機体の方は？」

「01回収時と共に回収。機種は『HMA-360h1』。鑑識からの報告ですと、製造コード、登録ナンバー、機体通し番号の全てが削除されており、製造所の特定は不可能です」

「軍の介入は？」

「作戦終了直後から確認されています」

「GINが」

「はい。未明から、GIN第一班が作戦区域を封鎖。同作戦区域内の支局と合同で主要道路の検問を開始。現在も継続中です」

「ほう、流石に手早い。主要都市治安権の引き渡しを求めてくるだけの事はある。3課と9係の行動に障害は無いね？」

「はい、問題ありません」

「司令官は？」

「ギリアム＝リー・ヴィドック少佐です」

窓の外を眺めつつ盆栽を弄る彼。

突然の電話のベルが、彼の意識を引き戻す。

一つ、大きく息をつき、受話器を取る。

「はいはい？」

「局長、中央軍憲兵隊からのご伝言です。『今日正午に会合の用意を』と」

アングリフがぼやく。

「はあ、それはまた…」

「それから警察病院からお電話が有りまして、大尉のお迎えは何時頃かと…」

「ああ、それね。それなら迎えの人間を手配するよ」

アングリフはそう言っつて、ニヤリと笑った。

窓の外で揺れるケヤキの枝葉が、まどろむような木漏れ日を映し出し、右肩から上腕にかけての全てをギブスで覆われたガントの横顔を鮮やかな光で照らしていた。

一人部屋の病室。

ベットのリクライニング機能で上体を起こした彼は、何も無い空間をぼんやりと眺めていた。

護つてやりたいなどという自分勝手な激情を、正当化しようとする言い訳がましい自分の思考。

くだらない嫉妬心で突っ走り、被弾して傷付いた自分の身体を支えて連れ出したのは、誰でなくジーナだった。

額に残る、幻のような感覚。

あの時、ファントムに突き付けられたマハトの感触は、MAPSの装甲を突き抜けて額に染み込んでいた。

「大丈夫ですか？ガント先輩」

彼の思考を遮るように、見舞いの品を持ったジムが病室へ入ってくる。

彼は、手に持っていたフルーツのバスケットを棚の上に置いて、ガントの側の椅子に腰掛けた。

「傷はもう何ともないな。ギブスは明日取れる」

答えるガント。

彼の肩は、拳銃で撃たれたとは思えないほど大きく損傷していた。骨は砕け、神経は裂けていた。

それでも今では綺麗に“修復”され、しっかりと彼の胴体に付いている。

「そうですか…。安心しました」

ジムがそう言って、安堵のため息をついた。

「みんな心配してました。エイト先輩も、ジーナ先輩も…」
ガントが皮肉な苦笑を見せる。

「ジーナも…か…」

「嘘じゃありませんよ！」

ジムが、珍しく声を張り上げた。

「…なに怒ってんの？ お前」

ガントが冷静に切り返す。

「すみません…」

ジムは小さく謝ってから深呼吸。

「ジーナ先輩は、ガント先輩の怪我を自分のせいだと…。ファントムが関係している事は、自分のせいだって…。無茶苦茶ですよ…」

「お前、やっぱりジーナの事を…」

「ち、違うんです！そんなんじゃない…。ただジーナ先輩がかわいそうで…」

「かわいそう…か…」

無言の時間が、暫くの間流れる。

ガントが、大きくため息をついた。

「ジム。人間はな、自分が思っているほど不幸じゃない。問題なのは自分の過去の人生の中でどれほど多くの幸福を感じられるかだ。ジーナの中にはな、ほかの誰が居るんだ。それが誰なのかは分からないし、どんな気持ちなのかも解らない。でも、もし、その誰かがジーナを苦しめているなら、彼女は自分でどうにかするしかないんだ。寂しいかも知れないけどな、俺たちはただの“同僚”だからな」

ジムは静かに拳を締めた。

「ガント先輩はジーナ先輩のことを…？」

「馬鹿」

ガントがジムの頭を小突く。

「いてっ」

「野暮な質問するな」

「す、すみません…」

「ジム」

「はい？」

「俺は逃げたんだ」

「え…？」

「ジーナの過去を共に背負う覚悟が無かった。箱を開くのが怖かったんだ」

「パンドラの箱…？」

「知るのが怖かった。彼女の心に誰がいるのか。どんな災いが飛び出すか。それが怖かった。でもな、ジム。箱を開かなきゃ、たった一つの希望だって見出せないんだ。俺はそれをわかっていなかった。だからジム、お前がそのつもりなら、ジーナの本当の心がどこにあるのか、それを探し出してくれ。そうすればきつと…」

ガントの言葉の途中、部屋に看護師が入ってくる。

検温の時間のようだ。

「それじゃあ先輩…」

「じゃあな」

病室から出て行くジム。

廊下を歩き、ふと窓の外を見る。

ケヤキの枝葉が揺れる。

「心のありが…」

Chapter 3

「ふざけないでください」

目の前の男に向かつて、私は思わずそう言い返した。

「頼むよ、ジーナ君。君にしか頼めないんだからさ」

男が私に懇願する。

本来ならおかしな構図。

ここにいる男は、治安局局长・アングリフだ。

それでも私は迷わず言い放った。

「嫌です」

局長は聞き返す。

「なんで？こんなに頼んでるのに」

私は答えた。

「私である必要が見当たりません。第一休暇中の私を、『緊急任務だ』と騙してここに引っ張り出したんですから」

局長が口ごもる。

「だってさあ、…て言ったら…来た？」

「はい？」

「だからさ、ティック・スキンド大尉を病院まで迎えに行っただなんて言ったらここまで来なかったでしょ？」

「当たり前です」

「ほらねー？」

局長は大袈裟な動きで額を押さえて、大きくため息をついた。

「だから君を騙して来させた訳…」

「帰ります」

「話は終わってないよ？」

「話す事なんか何も…」

「君、本当に大尉の事を恨んでるの？」

「…はい？」

「恨んでる人間を、A S A F全隊で助けろだなんて普通言わないでしょ？」

「…それは…」

「大尉のせいで部隊を出た」だとか、“人として最低の扱いを受けた”だとか、君は本心からそんな事思ってるの？」

「何が言いたいんですか？」

「そは、我等はその子孫なり」

「え…？」

「何があるうとも、彼が君の教官である事には変わりはない。恩師は大事にしないと」

「私は彼を殺すかも知れませんか？」

局長が、口元を歪めて微笑んだ。

「どうぞ、ご勝手に」

「なんですつて…！？」

「勝手にすればいいんじゃないの？君自身の問題なんだから」

局長は、全く輝きの無い深い穴のような眼差しで私を見据えた。

「局長は私に何をさせたいんですか？」

彼は答えた。

「私が言った事を」

そう言った彼の顔は、うつすらと、妖しい笑みを浮かべていた。

全くもって卑怯である。

私の弱みに付け込んで、嫌がらせのような事ばかりを頼み込んでくる。

確かに、教官のような外見の人を街中に放つぱり出すのは得策ではない。

それでも、わざわざ私が行く理由は無い筈だ。

それなのに…

それなのに私はどうして、ここにいるのだろう…。

窓の無い部屋。

まるで研究室か何かのような計器や機械が並ぶその部屋は、その特殊性故に“整備室”と呼ばれていた。

だがここは機械整備工場ではない。病院である。

この部屋は、処置室と病室を兼ねた兼用の部屋。

ここは、生身の人間用機材が一切ない、完全機械サイボーグ専用の病棟。

それ故の“整備室”なのである。

寒い…

思わず出た言葉。

部屋は気温が低く、湿度も低い。

その部屋の奥に吊されている、金属に覆われた機械の身体。

無骨なハンガーと鎖で吊された彼は、まるで整備途中の機動装甲のように、その大きなボディを冷えた空気の中で静かに休ませていた。

開け放たれた装甲外殻。

沢山のコードやケーブルやチューブが繋がれた彼の“身体”は、あらゆる生物が持つ、所謂『生气』と言う物を全く発していなかった。

「教官」

離れた所から彼を呼ぶ。

だが、返事どころか反応さえ無い。

私はもう一度彼を呼んだ。

それでもやはり反応は無い。

彼は死んでいるのか？

そんな不安が頭を過ぎった私は、彼の目の前まで静かに歩み寄った。

初めて見る彼の姿。

普段、コートを着て私達の前に現れていた教官。

その教官の“裸の姿”。

その姿は正に、機械の塊そのものだった。

それなのに私は、大きく背伸びをして、彼の頬に手を触れていた。指先に伝わる金属の冷たさ。

それを無視して、私の指は彼の“素肌”をゆっくり撫でた。頬から首へ、そして胸へ。

彼の胸では大きなポンプが稼動していた。

彼の脳へ酸素と栄養を供給する、鉄の心臓が。

その心臓へ繋がる太いパイプは、人のそれと同じように一定のリズムで脈動していた。

そうか…

機械の身体でも、彼の脳は生きている…

いや…

生かされている…

気付けば私は、彼の、脈打つ大動脈を手で掴んでいた。

これを引き抜けば、彼は死ぬ。

そんな思いが、私の脳裏を掠めていた。

私の手の中で、彼の命が脈打っている。

それを押さえるように、私の手に力が入る。

だが次の瞬間、私の手は凍り付いた。

「気付いていたんですか？教官…」

彼のセンサーアイに、淡い光が灯った。

それと同時に、彼の身体が地面へ下ろされる。

地面へ付いた彼の身体は、物々しい機械音を出しながら元の形へ戻っていった。

彼が立つ。

私の目の前に、こんなにも近くに。

教官が私に問う。

「何をしに来た」

「あ……」

喉の奥で言葉が詰まった。

「私を殺しにか」

「ち、ちが……！」

彼が私を見つめる。

「私は教官を迎えに……」

「そうか」

彼はそう言っ、たたんで置いてあつたロングコートを羽織つた。

「教官……」

彼は振り返らない。

「あの時のファントムは、どうしたんですか？」

なぜ私はこんな事を聞いたのだろう……

答えなど知っているのに……

「やっぱり教官は何も感じないんですね。機械と同じだ……」

ちがう……

教官は……

「ファントムだなんて格好付けて、やっぱりただの戦闘機械……」

突然、教官の右手が私の服の胸倉を掴み、私の身体は壁に押し付けられた。

服が裂け、教官の足元に、私の服からちぎれ落ちたボタンが転がる。

「お前に……、脳を刳られた同胞達の何が分かる……！」

私は構わず、教官に言つた。

「へえ……、教官も怒る事があるんですね」

教官の左手が握りしめられた。

「その左手でどうする気ですか？ 私を殴りますか？ それとも、人間の真似して私をここで犯しますか？ 無理ですよ、そんな事

……。あなたのボディーでは……」

教官はその手をゆっくり放した。

「君は私を罵倒する為にここへ来たのか？」

「まさか。そんな事の為だけにあなたに会いになんて来るものですか。私は私の任務の為に此処にいます」

そつだ…

これは任務なのだから、何も考えずに遂行すればいい。

私の任務は、彼を本局へ送り届ける事。

それさえ成せば、後はもつ…

もつ会う事も無いだろう。

もつ二度と…

「情報開示…。それもASAFに関わる全項目を…ですか」

アングリフは、わざとらしいため息をつきながら、目の前にいる軍服の男に聞き返した。軍服の男…、GIN特機司令官のヴィドックがアングリフをあからさまに睨みつける。

「GIN士官として当然の権利だ。今回の騒動の原因と真偽を明らかにする為のな」

「ヴィドック少佐、それでは我々が騒動の原因みたいではありませんか…。それに、都市治安は我々の役目なのでは？」

「貴様が治安維持の名目で6課や9係を用いて軍部に対する諜報活動を行っているとの情報も掴んでいる」

「…仮に、そのような事実があったとして、少佐はそれを実証出来ますか？ これもあくまで仮の話ですが、真相なるものが存在するとして、それを公表することによって中央軍に甚だしい不利益が生

じるとしたら……。軍閥の犯罪を見過ごし、ましてや何らかの癒着があったとして、そのような秘匿すべき事実を大衆に晒すとすれば、一体誰がそれを望みますか？」

「嘗めるんじゃないぞ、アングリフ。治安局を潰したい人間などこれこそ五万といる。その気になれば貴様など……！」

突き刺すような視線を向けるヴィドックに、アングリフはゆっくりつぶやいた。

「私は部下達に、『武器を持ち、立ち塞がる者があらばこれを撃つと命じてきた。』ASAFAは門番だ。武器を持って来る者を彼らは容赦しない」

「貴様……我々と戦争をする気が！」

「それはお前次第だ、ヴィドック」

「後悔するぞ……！」

いきり立ったヴィドックが、会議室を出ていく。それを見たアングリフは、しばらくしてから面白そうに笑いだした。

「怒った、怒った。昔から何も変わってない」

ヨハンが不思議そうに問う。

「怒らせるのが目的で？」

「ああ。あいつはあんなふうになると見境が無くなる。それで大コケする」

「……それでは？」

「うん、実はお願いが有ってね……」

「少尉……！」

会議室を出て、廊下を足早に歩くヴィドックが、苛立った声で部下を呼び付ける。その声に答えて、一步後ろを共に歩いていた浅黒い肌の大柄な男が自分の横に來ると、彼は唸るような低い声で言った。

「状況C-3の準備をしろ」

それを聞いた部下の男が細い目を大きく見開き、驚いた声で復唱する。

「C-3」：！？ それは我々の本来の任務ではないはずですよ！
グイドックは答えて言った。

「奴は戦争をしろと言った。我々は喧嘩を売られたのだ！ 売られた喧嘩は買ってやる。そして必ず勝つ！」

夜、エイトは、どつかりとソファーに腰掛けると、風呂上がりのビールを一気に流し込みながら、テレビのリモコンを操作した。

深夜のくだらない番組を矢継ぎ早に変えながら、ビールをもう一口含む。

それでは今日の天気…

あなたに最高のステイタスを…

今日はスタジオにコメンテーターの…

この番組はご覧のスポンサーの提供で…

未だ捜査は続けられており…

途中、いくつかのニュース番組が目にとまった。

それでも治安を維持する職務に就いている人間である。ましてやそれが、自分自身に関係するニュースなら尚更。

治安局にGIGNが噛んでくることは以前にもあった。しかし、今回のように実際に部隊を動かすような事は、ただの一度もない。

窓の外に目をやれば、街の夜景の上をGIGNのスカウト機が何機も飛んでいる。

「今回は本気…てか？」

突然、部屋のチャイムが鳴った。

インターホンの画面でドアの前を確認する。誰もいない。

無視しようとしたその時、今度はドアをノックする音がし始めた。

眉間にシワを寄せ、ソファアの下から拳銃を取り出す。セーフティに指をかけ、構えながら玄関に向かう。

ドアノブに手をかける。一気に開け、拳銃の銃口を先に突き出す。突然、拳銃が掴まれ、右手首を捻られる。それと同時に猛烈なタックルを受け、エイトは玄関の中に押し込められた。

「ぐう…！」

仰向けに倒れ込むエイト。その上に覆いかぶさる不審人物。反撃に出ようと、左手に握り拳を作る。

しかし奇妙な事に、エイトの胸元には柔らかな感触があった。

「ジーナ…！？」

狼狽するエイト。

「何やってんだ一体！」

ジーナは、声を張り上げるエイトをとろけた目で睨むと、不機嫌そうな声で答えた。

「何よ、私が遊びに来ちゃいけない訳？」

「遊びについてお前…」

きつい酒の臭いがした。

「なんだお前、随分呑んでるな…？」

「はい、呑んでまーす」

明らかな空元気。

「…とりあえず退こうか」

「いやーだー」

「俺が起きれないんだけど」

「抱っこして」

「自分で立てよ」

「してくれなきゃどかない」

エイトは深くため息をついた。

「あーもー、めんどくせえ奴！」

エイトは一気に彼女を抱き抱え、持ち上げる。

軽い。女性であることを再認識させられるほど。つい意識してしまっ。

「…で、どうすりゃいい？」

「寝る」

「寝るな！ おい！」

制止の声も空しく、彼の腕の中で、ジーナは寝る体制に入っていた。

「おおおい！」

まずい。この空気は非常にまずい。自分の腕の中で、あのジーナが無防備に眠っている。

アルコールで上気した頬。スレンダーな体。開け放たれたシャツから覗く胸元。

普段なら見せないような魅惑的な姿に、エイトの頭は沸騰寸前であつた。

「（待て待て待て。落ち着くんだ、俺！ こういう時は、頭の中にカードを並べるんだ…。1、寝かす。2、起こす。3、やる。…3は論外としてだな…）」

「んん…」

「（頑張れ俺！ 耐えろ、耐えるんだ！）」

理性という薄氷を踏みながら、エイトはジーナをリビングまで運んでいき、そうとも知らずに眠る彼女をソファアに下ろす。

エイトは耐えた。自分に勝つたのだ。

「おい、ジーナ。起きろよ…」

「……………」

「風邪ひくぞー」

「ん…」

「クソ、人の気も知らねえで…」

うなだれるエイト。

「ホントにヤッチまうぞ……」

つい無意識に出てしまった言葉。しかしその言葉を、ジーナはちゃんと聞いていた。

「やってみなさいよ……」

「……!」

エイトの全身から冷や汗噴き出る。

「ジ、ジーナ! い、いや今のはつい口が滑っちまって……」

「いいよ、しても」

「は……?」

思いがけない言葉に、エイトはしばらく思考がロストした。頭の中が真っ白に。雪が降っている。完全にホワイトアウトだ。そんな彼を、ジーナは胸倉を掴んで引き寄せ、睨み付ける。

「やらないかって言ってるの」

「ちよ、ちよつと待……」

彼女は、狼狽するエイトの言葉を遮るように強引にキスした。アルコールの臭いがエイトの口の中に広がり、彼女の舌先が彼の唇を撫でる。しかしその瞬間、エイトは彼女の肩を強く掴んで引き離れた。彼が心配そうな顔で宥める。

「おい! なんだどうしたんだよ、お前少しおかしいぞ!? 今水持って来てやるから」

立とうとするエイトに、ジーナが縋り付く。

「おい……」

「私ね……好きな人が居たの……」

「ジーナ……?」

「でもね……その人は私の事なんか見てなくて、戦いの事ばかり考えてる人だった……。それでも私はよかったの……。遠くても一緒に居られればそれでよかったの……。でも結局駄目だったの。なにもかも駄目だったのよ! 想うだけじゃ、何も始まらない! ずっと一人ぼっちなだけ! だからもう……、だれでもいいから……、私を一人に

しないでよ……」

エイトは、彼女の頬を銀線が走るのを見て、縋り付かれたまま静かに話し始めた。

「俺にもな……、好きな女が居るんだ。くだらねえ事でよくケンカするし、蹴られたりもする。そいつはいつも強くてな、何があっても鼻で笑って蹴っ飛ばせる度胸と技量がある、最高のパートナーでもあった……。でもな、そいつはいつも違う男を見てる。だから、俺がその女を抱くには、ちゃんとした訳って奴が要る。間男でいるのはゴメンだ……。だから俺は……」

突然、ジーナがエイトを突き放した。

「ごめん、もう……、帰る」

「ジーナ？」

「……もう、いいから……。大丈夫、酔いも醒めたし。……ごめんね」

彼女はそう言うのと急いで立ち上がり、玄関に向かい、ドアノブに手をかける。

「バイバイ」

ジーナが出ていくのを、エイトは無言で見届ける。ただ、かける言葉が見つからなかった。

「謝るなよ……」

エイトは、部屋の真ん中でそう呟いた。

この30分後、彼女は消息を絶った。

後に言う、“憲治争乱”の始まりである。

TO BE CONTINUED . . .

ACT 18 Beauty and the Beast (前書き)

人の人ならざる愛。 人ならざる者の人の愛。

ACT 18 Beauty and the Beast

Chapter 1

壁に設けられたベンチレーターの羽が空を切る音で、彼女は目を覚ました。金属の肌を剥き出しにした部屋に置かれた、小さなパイプ椅子の上、体は拘束着できつく締め付けられていて、身動き一つ取れない。切れかけの電灯が点滅を繰り返し、体は左右にゆっくり揺れている。

「目が醒めたようだな」

太い声が部屋で反響し、四方から言われているように聞こえる。

ぼやける視界の中に、一人の男が見えた。がっしりとした体に、両腕の黒い義手。体も恐らくは機械化されている。髪型はオールバックで、この男に粗野なイメージはない。

「不本意ながらこれも任務だね。具合はどうだ？」

「頭…痛い…」

「手荒な事をして済まない。だがASAFのエースと不用意に対峙するほど自信家ではないのでね」

「あんた達…GIGN…」

「君の事は少し調べさせて貰った。元中央軍人だったようだね、ジーナ・バラム准尉」

「…その名で私を呼ぶな」

「何故？ 君の話は有名だよ。トップの成績でありながら突然姿を消した、零番教導で唯一の女性。それが君だった」

「そんなこと聞いてどうするの？ 第一、GIGNが私をどうする気？」

「君には本国で、ASAFの全てを証言してもらおう事になっている。君はただ一言、ブルーノ・フォン・アングリフの名前を出せばいい。それに…」

男がにやりと微笑む。

「君と私は似た者同士だからだ」

「0015時・治安局本局」

「どういう事ですか、局長！！　ちゃんと説明してください！！」

連絡を受けて呼び出されたエイトが、作戦指令室でアングリフに咆た。だがアングリフは、表情一つ変えずにエイトを見ている。

「今から約10分前に、バラム一等官の反応が監視システムから消えた。通信にも応答無し。何らかの軍事作戦行動に巻き込まれたと見て間違いない」

「軍事作戦行動って…！　局長！　これは明らかに敵対行動じゃないすつか！　なんですぐに部隊を出さないんですか！？」

「それに関してなんだけどね…」

「局長オ！！」

咆るような絶叫と共に、病院着のままのガントが入ってくる。どうやら病院から無理矢理抜け出して来たようで、右肩には未だにギブスが付いていた。

「局長！　ジーナが連中に拉致されたってどういう事ですか！！」

アングリフが眉を顰める。

「あれ？ガント君まで呼んだ覚えはないんだけどな」

「ジムから聞いて飛んで来ました。それよりも救出作戦は！？」

「それが出来ないのよ」

「出来ないって、何故ですか！！」

「よく考えてみる、我々の権限が及ぶのは、重犯罪と反政府ゲリラ及び一部の指定集団の三つだけ。だがG I G Nは違う。出勤したら最後、国家治安に反すると思われる全ての集団が対象になる。お巡りさんじゃどうしようもないって訳」

「連中の目的は？」

「不可侵条約違反、及び、交戦規約違反の立件……。例の軍閥に対する行動に関してだろうけど、しかしその真の目的は私への私怨を晴らすこと」

アングリフの表情は鋭い目付きに変わっていた。

「…どういう事ですか？」

「奴は…、ヴィドックは私の同志だった。だが大戦中の一件で、私に恨みを持っている。もしA S A Fの誰かを証言台に立たせて、私の名前を出させれば向こうの勝ち」

「なぜジーナが…？」

「ああ、向こう側の内通者を使って、私がチクった。こうするようにならされたのも私」

「局長、あんたって人はあ！！」

「やめる、エイト」

「でも…！！」

突然ガントが、壁にギブスを打ち付けて叩き割った。石膏の破片が床にばらばらと落ちる。

「おい、ガント！」

心配するエイト。ガントは歪んだ表情で言った。

「局長、あなたのがした事を、俺達は一生恨みます。でも、もしここにジーナが居たら、彼女はきっとこう言います。『自分達はただの肉切り包丁だ』と。俺達は、ただの“力”です。相手が誰であろうと、狙って撃つ。ただ、それだけです」

アングリフがゆっくり微笑んだ。

「大丈夫、始めからそのつもりだよ」

「それじゃあ…！！」

「でも、我々はG I G Nへ直接手出し出来ない。今彼女を救出出来るのは…」

「…今現在、全ての軍にその登録が無く、一騎でG I G Nと渡り合う、そんな民間人だ」

作戦指令室の扉が開き、ティックがそう言うと、アングリフは機嫌良く同意する。

「はい、その通り。ヨハン君とジムは、もう別の配置に付いてる。後は我々だけ。力として優秀な君達には特別な任務に就いてもらう。やる気は？」

「…あります！！」

二人の声が作戦指令室に響くと、アングリフは鋭い目付きで言った。

「それじゃあ、始めようか」

「それじゃああんたも…」

「そう。ただ違うのは、私は逃げなかったという事だ」

「逃げたんじゃないわ、追い出されたのよ…」

「追い出された？」

「理由なんてわからない。ただ彼がそうしたのよ…」

男は静かに笑った。

「同じ事だ。最終決定をするのは結局自分だからな。私でさえこのザマだ。馬鹿な上官に振り回され、不本意な仕事をさせられる。誇

りや志と言われても何の事やら」

「それは」愁傷様。私はそうなる前に自分から出た…」

「それで君は何かを得たか？」

「え…？」

「信念？ 誇り？ はたまた戦友？」

男は一瞬、哀しそうな目で眉を顰めた。

「…逃げ出した先に、楽園なんて無いんだよ」

そう言ってから部屋を出た彼は、シュツと鋭く息を吸ってから、扉の側に立っていた部下に命令した。

「艦の警戒レベルをA2まで引き上げる。それと共に、義体の武装レベルも装備350まで引き上げる」

「350…！？ 対機甲戦闘装備！」

「気をつける。奴らが来るかもしれん」

「ASAFは我々に手出し出来ない筈です。それに我々機械化部隊がMAPS部隊に力負けするとは…」

「奴らの戦闘能力は未知数だ。未知の力には全力で対応しろ」

「了解しました」

「さて、鬼が出るか蛇が出るか…。フ…、来るなら来い。この艦を墓標にしてやる」

第三軍港に停泊する、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦。

それが彼らのバックボーンにして、GINの持つ海上の要塞である。

空っぽの身体で、私は戦い続けた。
ただがむしゃらに走り続けた。
止まれば終わってしまう。
止まれば追い付かれてしまう。
走れ！ 走り続ける！
誰の手も借りずに、一人で走り続ける！
どうせ誰も気に留めない。

逃げた先に、楽園なんて無い。
それがどうした。どうせ楽園なんてどこにも無い。
どうせ無いなら、逃げてもいいだろう？
でも今度はどこへ逃げる？
助けは来ない。

その上、打開不可能な状況。
考える、考える、考える！
お前の心はどこにある。頭で考えるな。心で考える！
自分を偽るか。同僚を売るか。
自分を偽るなんて出来ない。
同僚を売る事も出来ない。
ましてや、連邦刑務所で同じ女達の娼婦役にされるのも、真っ平
ごめんだ。

自由にならないなら捨ててしまえ。
解らないならそのままがいい。
人の身体は脆い。
例えば、大量の失血。
例えば、窒息。
身動き一つ取れなくとも、舌を噛めば事足りる。
なのに…

なのに、何故私は噛めないでいる？
恐いからではなく、何か大きな力がそうさせている。

私を包み込む、懐かしい感覚。
私はそれを知っている。

でも、なぜ？

なぜ、あなたがここにいるの？

「0035時・中央電波基地」

吹き付ける風に煽られ一瞬浮いた身体を、自分を吊すナノワイヤ
ーを掴んで再び固定させる。

高い電波塔の中腹、全身タイトのような熱光学迷彩スーツを着て、
ナノワイヤー二本だけで地上180mに吊されるジムは、思わず身
震いした。

ふと、時間を確認する。定時、60秒前。

彼は、腰に付けた装備の中から一つの装置を取り出し、電波塔の
メインシャフトに取り付けると、予め引きずり出しておいたケーブ
ルをその装置に繋いだ。

「こちら03、準備完了」

押し殺すような低い声。

その声を聞いて、ティックは静かに立ち上がった。

高いビルの屋上、冷たい風が吹き付けるが、彼の皮膚はそれさえ

も感じずにいる。分厚いアーマーコートを着ていれば、なおの事。

「01、状況を開始する」

彼はそう言うと、自分の身の丈程の巨大なケース状の物体を背負った。

無線の向こうでジムが言う。

「障害電波の持続時間は10分間。それまでがタイムリミットです」
ティックは低い声で短く言った。

「始める」

彼に言われ、ジムは装置のスイッチに指をかける。

「3カウント…！」

ティックが、屋上の縁へゆっくり歩み寄る。一步、二歩、三歩…

「2…！」

そして彼の右足は、なにも無い空間へと踏み出した。

「1…！」

彼の身体が、ふわりと羽根のように舞う。その瞬間、重さ230kgのボディは超高速の徹甲体となって夜の闇の中を一直線に翔けた。

無線にノイズが走り、ぶつりと切れる。

スラスターを一杯に噴射し、街の上空を翔けてゆく彼のボディ。

街の明かりは光の筋となって過ぎ去っていき、徐々に少なくなつてゆく。

速く、さらに速く。

ボディを衝撃が打つ。音が消えた。なにもかもがスローに見える。街の明かりはいつしか、港のフォグランプに変わっていた。

見えた。前方10km。

その瞬間、彼の視界に赤い文字で警告の表示が出てきた。艦がC IWSを撃ってきたのだ。

曳光弾が夜空を切り裂き、オペレーターが叫びにも似た声を上げる。

「目標はさらに加速！ 時速1000マイル！ 速い…！」

彼はCIWSの30mm弾を回避。音速の1.5倍の速度で艦の左舷に向かうと、背負っていたケースを複雑に変型させ、巨大なブレードの刃先を艦の横腹へ袈裟掛けになぞらせた。

重合金の装甲板が火花と共に切り裂かれ、切り口に彼の前蹴りが飛ぶ。凄まじい衝撃音と共に、艦が左右へ大きく揺らいだ。

海面に白波が立ち、水しぶきが上がる。

唸り声のような艦の軋む音。

艦内にサイレンが鳴り響き、警告灯が点いた。

「不明機、左舷に衝突！」

「第三隔壁破損！」

その時、右舷通路にいた黒い義手の男は、壁のパイプにつかまりながら艦内通信に向かって吠えた。

「ブリッジ、何があった！」

オペレーターのような返事が返ってくる。

「所属不明機が左舷に衝突！ 艦内に侵入し、隔壁を破壊しながらC-17区画に向かっていきます！」

「外部との連絡は？」

「回線不通！ 障害電波です！」

来た！ A S A Fからの攻撃！

「それで敵の数は？」

「重量級サイボーグが一機！」

「単騎だと！？ …まさか！」

「班長！ 奴は一体：！？」

「亡霊を装って戯れなれば汝、真に亡霊とならん…。対機甲機械化
猟兵・ファントム！」

「ファントム！？」

「奴の狙いはジーナ・バラムの奪還だ！ 艦を今すぐ離水させ、高度1500を維持！ それから、各員の短距離無線通信をそちらのブラスターで増幅しろ！ 艦内限定なら通じる！」

「了解！」

彼はそう言っつて艦内通信のマイクを置くと、右手を握りしめ、自分の拳を見ながら静かに笑った。

甲高い、歯の浮くような切削音。

金属炭素製の高周波ブレードが、艦の重合金製隔壁を切り裂いていくその音は、確実に彼女へ近付いていた。

刹那、彼女の脳裏に似たような記憶が蘇る。

捜査官の救出作戦、ファントム、そしてそれと戦った彼。

それが彼の任務。

なら、今回もただの任務？

火花が散り、円形状に切り取られた壁が『ずんっ』と重い音を立てて倒れる。

立ち込める煙。

その中から現れたティックを、彼女は凝視した。

「無事か？」

ジーナは静かに言い返した。

「何しに来たんですか？」

「何？」

「せっかく…、せっかく決意したのに…」

ティックの視界の隅に表示されるタイマーが、カウントを刻んで

いく。

「一等官、時間が無い」

彼は右手に持った巨大なソニックブレードを再びスーツケース型に戻してから背負い、彼女に歩み寄る。

しかし。

「来ないで下さい」

拒絶の言葉に、ティックの足が止まった。彼はジーナを見つめたまま微動だにしない。

そんな彼に、ジーナは言った。

「あなたにとつては救うも殺すも同じなんでしょう？ だったらもう、ほつて置いてください。あの時みたいに、簡単にほつぽり出してくださいよ」

「…何の事だ」

「忘れたなんて言わせませんよ。訓練キャンプから帰ったあの日、基地司令と話していたあなたは、私を辞めさせると言った…！ だから私は、あなたの言う通り部隊を…、あなたの言う通りに…」
俯く彼女の頬を銀線が走る。

「なぜですか？」

「…静かにしろ、一等官」

「なぜ私を追い出したんですか…？ 私は…私は最後まで…」

突然、彼のセンサーに複数の動体反応が掛かった。彼は、ジーナの言葉を無視して彼女のすぐそばに歩み寄ると、彼女を抱き寄せて覆いかぶさる。

次の瞬間、壁の大穴から投げ込まれた手榴弾が轟爆した。

ジェネシック・ユニバーサルアームズ社製のM3グレネードは、破片生成に優れた対人グレネードだ。薄い外壳と炸薬の間には約300個の鉄粒が仕込まれており、鉄粒一つあたり60フットパウンドの威力を持った散弾が敵を切り刻む。

その散弾を、ティックはジーナを庇って一手に受ける。

「大丈夫か」

「何故ですか！！ 私は来ないでと…！」

「…もう…たくさんだ」

「え…？」

「仲間を失うのも…任務を放棄するのも…もうたくさんだ！」

任務を放棄？ あの教官が？

「行くぞ」

「ちょよ、ちよつと教官！？」

彼は彼女の拘束着を左右に引き裂き、抵抗するジーナを無理矢理抱え上げると、右手でマハトを抜き、セレクターレバーを二段落として壁に向かって構えた。

「耳を塞いで口を開ける」

「待つ…！」

発砲。フルオートで発射されるマハトの咆哮が部屋じゅうに反響し、彼女に襲い掛かる。

至近距離から発射された15mm徹甲弾は、部屋の分厚い壁をいとも簡単に撃ち抜き、壁の向こうにいたGIGNのサイボーグ兵三人をスクラップに変えていた。

ティックはマハトのマガジンを入れ換え、びりびりとした振動が未だに身体に残るジーナを尻目に壁の大穴から部屋を飛び出し、煙に紛れてマハトを連射する。

狭い通路での戦闘。

長銃身のマハトを最小限の動きで躍動させる彼を前に、最精鋭のGIGNといえど劣勢を強いられるのは明白であった。

「ゴースト01からリーダーへ」

部屋でロザリオを数えながら祈る義手の男の無線に、部下からの報告が入る。

「第三層C12通路で目標と交戦。大破6、戦闘不能。警備班は全滅の様。ゴースト各班、配置完了」

男は手を止め、目を開ける。

「ゴーストリーダーより各員へ。今夜の敵は格が違う。大戦の遺物

であり、最強の兵士、ファントムだ！ 決して仕留めようなどと考えるな！ 集団行動を維持し、退路を寸断しつつ、檻へ追い込め」男は、心の中で呟く。

これで良いんですね…。教官…。

私を抱え上げる彼の腕から伝わってくる、ほのかな温もり。

それが、彼の機械の身体から出る、ただの排熱だと分かっているも、私にとっては人の肌の温もりと同義だった。

臓器の代わりに与えられたポンプと化学プラント。

有機神経の代わりに与えられたデジタルネットワーク。

筋肉の代わりに与えられた超電導アクチュエーターと複合金属筋繊維。

肌の代わりに与えられたチタン・セラミック複合装甲。

生身だった頃の彼を、私は知らない。つくりものの身体でも、私にとっては、それが“彼”という人間なのだ。

だからこそ許せなかった。

突然、一旦退いたと思っていた連中が、私たちの退路を遮断するように双方向から攻めてきた。所謂ローラー作戦だ。

撃ち合い。目の前で、火の玉のようなマズルファイヤーが散り、まるでテレビゲームのように戦闘は続いている。

戦闘は優勢？

否、断じて否だ。

連中の義体は対機甲戦闘用の特殊重装甲。さしものマハトも、最大厚30mmの複合装甲には歯が立たない。それに加え、各々が25mm先進個人火器を携行している。

教官は私を抱えているせいで、満足に反撃できない。私がいなければ、教官はその有り余る戦闘能力で敵をすり潰しているだろうに。教官は私を抱えたまま、敵のいない通路を猛進する。敵は追ってこない。

その謎掛けの答えは明白だった。

教官が分厚い気密扉を蹴破り外に出る。

広がる闇。飛ばされてしまいそうな突風が吹き付け、遠い眼下に街の明かりが煌めいている。

点滅を繰り返す艦の航空灯。

その度に闇から浮き上がる、義手の男の姿。

男が、一文字に閉じた口を開いた。

「お久しぶりです、教官」

「本当に当てられんのか？」

大口径の望遠スコープを覗き込むエイトがガントにそう言つと、ガントは首と肩をぎこぎこきと鳴らしながら答えた。

「誰に言つてんだ、誰に。上手くやるぞ」

彼はそう言つて自分の右横にある、シートの掛けられた小山のよ

うな金属の塊をゴンと拳で小突く。

「でもよ大将、任務を終わったが連中に逮捕されるだなんて醜態は…」

「スポッターならスポッターらしく、ちゃんとスコープ覗いてろ」

「へいへい、わかりましたよ」

スコープの向こうに、糸のようなハイウェイと砂粒のような車両が見える。

倍率を切り替え、ズーム。

スコープを覗くエイトに、ガントが問う。

「どうだ？」

「目標を目視で捕捉。ポイント不着。定時まで240秒」

「後は向こう次第か…」

廃ビルの屋上から街を見渡す二人。

エイトが、小さくつぶやいた。

「…局長は、一体何が目的なんだ？　ここまでする意味があんのか？」

「さあな。ただ局長が何か途方もなく大きな物をぶち破ろうとしている事は確かだ」

エイトが息を飲んだ、その時だった。

「来た来た、ポイントまで100m！」

「さて、こいつの出番だ…」

ガントが、シートの端に手を伸ばした。

「お久しぶりです、教官」

義手の男が、柔らかな微笑みでティックに会釈する。

「バルク准尉」

ティックは、マハトの銃口を向けたまま彼の名を口にした。

かつての教え子。今の敵。

「今は大尉ですが……」

苦笑いするバルク。表情は和やかだが、右手に持った25mmヘビーペイロードライフルと腰に挿したソニックブレードは、まるで正反対の表情だ。

「退け、バルク。お前達の負けだ」

ティックがそう言うと、バルクの表情が一変した。

「一度、あなたと本気でやり合ってみたかった。それが、いま叶う」
その瞬間バルクは、持っていた25mmヘビーペイロードライフルを二人に向かって撃った。

迫る25mm弾は3発。

ティックは右手のマハトで、その弾丸を撃ち、弾き飛ばすと同時に、バルクの額に照準を合わせてトリガーを引いたが、バルクは放たれた15mm弾を回避。

次の瞬間バルクは、ライフルを投げ捨てると同時にティックへ迫った。

ティックは咄嗟に、ジーナを引き離して放るが、つい先ほどまで離れた所にいた筈のバルクは、既にティックから三步ほどの至近距離にいる。

速い！

ティックはマハトを連射。しかし弾丸はバルクが右手に持ったソニックブレードで切り払われる。

ティックまで、あと一步の距離。

左から右へ振り抜かれ、ソニックブレードがマハトを両断する。

あと半歩。

順手から逆手に持ち替えられるブレード。鋭い軌道を描きながら迫る刃先。

その刃をティックの巨大なブレードが受け止め、激しく火花が散る。

その時、バルクの左掌底が彼を捉えた。

インパクトの瞬間、バルクの腕部人工筋繊維群が拡張し、瞬時に収縮。バネのように打ち込まれた掌底から生じた衝撃波が、彼の腹部へ伝播し、装甲内部へ浸透する。

体外衝撃波破砕術：！！

放られたジーナが受け身を取り、バルクが投げ捨てたライフルは未だ落下の途中。それほど僅かな間だった。

「教官！」

ジーナが起き上がり、駆け寄ろうとする。

「来るな！」

ジーナを制止するティック。

その瞬間、甲板に兵士達がなだれ込んで来た。

かつては兵士として訓練されたジーナの身体が、その戦闘技能に従って無意識に動く。

逃げる。

しかしどこへ？

にじり寄る兵士達によって左舷へ左舷へと追い込まれ、眼下は海。後ろはもう足場が無い。

怯むジーナを捕らえようとする兵士達の手。その時、後ずさるジーナが足場を踏み外した。

「あ……」

ジーナが船体外殻の傾斜を滑り落ちていく。

落下という、身をすくませる本能的な恐怖。それに抵抗しながら、彼女は何か捕まろうと必死にもがき、腕を延ばした。

あった。ちょうど斜面の終わりに設けられた点検用ハッチの張り出し。

しかし次の瞬間、彼女の体は斜面の終わりに差し掛かっていた。宙に放り出される身体。

彼女は渾身の力と、ありったけの勇気を込めて、張り出しに腕を伸ばした。

指が張り出しに掛かり、腕一本でぶら下がる。

「くうっ！」

肩に張り詰めた痛みが走り、軋むような音がした。

「一等官！」

「き、教官…！」

バルクの斬撃に応戦しながら、ティックがジーナに叫ぶ。

「跳べ！ 一等官！」

「でも…！」

「一等官…！」

ジーナへ向かって、数人の兵士がワイヤーで降り始めた。迫る追っ手と、バルクと戦うティック。

ジーナが、心の中で呟く。

このまま捕まれば、全てが無駄になる。だが彼が傷付く事も無くなる。私を護って戦い、傷付く彼の姿を見なくて済む…。だって私は彼を…

ジーナの脳裏にティックの声がリフレインする。

私が憎いか。

私を殺してみせる。

お前に、脳を刳られた同胞達の何が解る！

仲間を失うのも…、任務を放棄するのも、もうたくさんだ！

ジーナが、ぽつりと呟いた。

「その身を三つに切り分けよ…。一つは枢に、一つは屠り場に、一つは己で食い尽くせ…」

ティックの振り回す巨大なブレードを、バルクはまるでダンスを踊るかのよう華麗に回避してみせる。

ティックのボディ、そしてパワー。その全てはバルクのそれを完全に凌駕している筈だった。それがどうだろう。

スピード、そして変幻自在の律動。ティックがそれを捉えられないでいるのだ。

それは情ゆえの事だった。

しかしそれは言うまでもなく、致命的な物だった。

「捕まえましたよ」

ティックのブレードをかい潜ったバルクが、ティックの背後にぴつたりと張り付き、彼の背中に肘を当てている。

「昔のあなたはどこへ？ あなたがその気になれば、1000m以内にいる人間1000人を一秒以内で全員あの世へ送れると言うのに。今のあなたは優し過ぎる」

ティックの足先が、ぴくりと動く。

「無駄です。あなたは私の間合いの中。それに私の体外衝撃波破砕術は、あなたの装甲を貫通する。こんなふうだね！」

背面に衝撃波が打ち込まれ、ティックの身体が弓なりに跳ねた。

装甲が軋み、全身に電気のような衝撃が走る。

その時だった。

決心しろ、ティック。お前は誰かの笑顔の為に死ぬべきだ。

そして、ジーナの声も。

ティックの両足が甲板をしっかりと捉えて立ち、ぽつりと呟く。

「顧みられる事の無いカタコンベ、集められし魂は、憑代なく舞い踊る……」

「……………！！」

バルクの背中に寒気が走る。

それは、今まで感じた事も無い程の凄まじい殺気。

バルクは、直感的に悟る。

この化け物を殺さなければ、こちらが殺される！

次の瞬間、バルクの身体が無意識に動き、ティックに切り掛かった。

しかし、ティックはブレードを足元に捨て、両腕をだらりと下げている。

ティックの首に掛かるバルクのブレード。それを、ティックは右手で受け止める。

反応したバルクが間髪を入れずに右手で掌底を打つ。

その瞬間、ティックはバルクのブレードを弾き、左腕でバルクの掌底を打ち払った。そして、ブレードを払った右手と、打撃を崩した左手は、円を描きながら徐々にその中心へ収束し、芯へ達した瞬間、彼の両手は諸手掌底となってバルクの胴へ放たれた。

バルクは咄嗟に、両腕を交差させてガード。爪先で地面を蹴る。

次の瞬間、諸手掌底がバルクを捉え、突き飛ばした。

「ぐっ！」

彼はブレードを甲板へ突き立ててブレーキを掛けるが、ティックは瞬時に追い付き、さらに手刀を打つ。

バルクはブレードでガード。

しかし、ティックの手刀は巨大な質量弾となってバルクのブレードを粉々に打ち砕き、寸のところで回避したバルクを掠めてから甲板に深々とめり込んだ。

「班長！！！」

彼の部下達が、援護しようとするライフルの銃口を一齐に向ける。

「よせ！ お前達は手を出すな！」

ティックを睨み付けるバルク。

優しくなっただと？ とんでもない！ ファントムめ…、遂に正体を現した…！

ティックが、めり込んだ手刀を引き抜いて立ち上がり、言う。

「ジーナ」

「え…？」

彼女の心が脈を打った。

初めて呼んでくれた自分の名。

「先に行つててくれ、今度は追いかける」

ジーナが、大きく息をついた。

「先に、行つています」

彼女が、張り出しに掛かっていた手を離す。

「いかん！」

バルクの声と同時に兵士は腕を伸ばしたが、兵士の手は届かず、ジーナが夜の闇の中へ落ちていく。

それと同時に、ティックはあの詩を詩いだした。

「踊れ、踊れ、踊り狂え。我らは亡霊滅びの子…」

バルクが、下肢に渾身の力をこめて甲板を蹴り、突撃。そして、その加速力をそのままに、ティックに殴り掛かる。

ぶつかり合う拳と腕。

己の身を守ろうとするバルク。

バルクを倒そうとするティック。

そして、“詩”。

正反対の目的を持ち、掛け離れた基本性能を持ちながらも、この時二人は互角に渡り合っていた。

それは、バルクの生存本能が勝つての事である。

弱小さな小動物が常に警戒を怠らないように、バルクは油断をしなかつた。

強化された感覚器官を総動員し、全身の人工筋繊維一本に至るまでに意識を配り、同時にコントロールする精神力。

しかし、ただひとつ言える事がある。

弱者がいかに警戒しようとも、すでに掛けられた牙からは、決して逃れられないのである。

そして今、その牙が獲物を切り裂こうとしていた。

バルクが、ティックの右パンチを左手で弾き、立て続けに放たれ

た左パンチも崩した時だった。

バルクは、跳ね上げられた右腕によって右脇腹にできた隙に、左で打撃を打った。だが、それはティックの巧妙なトラップであった。跳ね上げられたティックの右腕が、そのまま振り下ろされ、バルクの左腕を粉碎。右腕は、ボールが地面を跳ねるように急激に軌道を変え、今度はバルクの顎に孤拳を打ち込んだ。

「がつー!!」

脳が揺さぶられて出来た、ほんの一瞬。右手はバルクの胸へ打ち下ろされ、彼の胸部を砕く。

ティックが、詩う。

「しかし心せよ。亡霊を装って戯れなれば汝、真に亡霊とならん……」
薄れゆくバルクの視界の端に、煌めく紫電が映った。

終わった……。

紫電を纏い、振り上げられた拳を、バルクは網膜に焼き付ける。振り下ろされる拳は彗星のように煌めきながら、闇を蹴散らす。しかしその拳は、バルクを捉える事なく、甲板にめり込んだ。

溜め込まれた電撃が開放され、落雷のような閃光が周囲を飲み込む。

その瞬間ティックは、兵士達の頭上高くを跳び越し、闇に飛び込んだ。

スラスターを噴射。強制落下。

ジーナを追うティックを狙い、一斉にライフルを撃ちだす兵士達。火線が交差し、暗闇を切り裂く中、ティックはジーナの姿を確認すると、スラスターをさらに吹かした。

迫る海面。

腕を伸ばすティック。

ティックの視界の端に表示されたタイマーがゼロを示すと同時に、彼の右手が気絶しているジーナの腕を掴み、抱き寄せる。

未だ撃ち続ける兵士達。

一人の兵士が、携行型の対空ミサイルを構えたその時だった。

「やめる！」

撃ち続ける兵士達を制止するバルクの声が、大きく響く。

彼は、満身創痍の身体をやっとの思いで立ち上がらせると、搾り出すような声で呟いた。

「私の負けだ…」

銃口を下ろす兵士達。

バルクは、暗闇の遠く先、街の明かりを見ながら深く息を吐いた。

どうしてここは、こども暗く、静かなのだろう。

聞こえるのは自分の鼓動だけ。

その暗闇の中に、私は一人で居る。

そう、一人だ。

一人、単独、孤独。

なら、私は死んだのか？

それにしても寂し過ぎる。

お迎えの一人も、先輩方の姿も見えない。

さやさやと、私の髪が摩く。

そうだ…。私は落ちている。

落ちていて、この先どうするのだろう…。

遠い彼方に煌めく、星のような光。

光はやがて天使の姿を形どり、私に手を伸ばした。

そうだ、私は待っていた。

その手で私を捕えて二度と離さないで欲しい。

ずっと、ずっと…。

私は天使へ手を伸ばす。

「馬鹿な：！？」

ヴイドックがそう叫んだ時、彼を乗せる装甲リムジンは、ハイウエイの上で渋滞にはまり、その脚を失っていた。

その車中で聞いた、ジーナーバラム奪略の知らせ。

それは、電波障害が消えたまさに直後だった。

「確かなんだな？」

ヴイドックは、車のハンドルを握る少尉に、念を押すように問う。

「はい、幸い殉職者は出ていないようですか、15名が稼動不能。

バルク大尉が負傷した模様です」

苦虫を噛み潰すヴイドック。

突如として発生した電波障害は、ASAF隊員を確保して既に撤収準備に取り掛かっていたGIGNの指揮系統を壊乱せしめ、その統率力を奪っていた。

その上、この渋滞。

艦に戻る自分。部隊撤収のタイミング。そして電波障害による各種機能障害。

その全てが重なり発生した、最悪の状態。
完全に虚を突かれた形だ。

「発生源の特定は？」

「中央電波基地。部隊を送りはしましたが、もう……」

「グイドックの眉間に刻まれる深い皺。その表情から溢れる怨念は、深く、強い。」

その時、突然少尉が、耳に付けたインカムを指で押さえながら、ひどく取り乱した様子で叫んだ。

「少佐！！」

「どうした」

「治安局が、アストレイに対する作戦行動を正式に公表しました！」

「何だと！？」

「それと同時に、アストレイが関係した事件も公表！ その中に、サンヘドリンに対するテロ支援の項目が……！」

「新統治治安法第26条……！ サンヘドリンに対する敵対行動は、人類に対する敵対と見なす……！」

「つまりアストレイには、各条約と交戦規約が適用されません……」

「ASAFの行動は合法になったと言う訳か……！ やってくれるな……！ アングリフ……！」

その時、グイドックの通信端末が着信。彼は端末をとり、通話タブをクリックした。

「私だ」

「やあ、グイドック。万事順調かい？」

グイドックにとって、最も聞きたくない声が端末のスピーカーから流れた。

「アングリフ……！ 貴様なぜ私の番号を……！」

「餅は餅屋と言う訳だよ。それより、これからどうする、グイドック」

「それはこちらの台詞だ。貴様の目的はなんだ、アングリフ……！」

「目的？ 我々はただ、降り懸かる火の粉を振り払っただけだよ」

そう言って笑うアングリフに対して、グイドックは少しの沈黙を挟んでから低い声で言った。

「貴様がいつも笑顔でいる理由を、答えてやるうか？」

沈黙のアングリフ。しかしヴィドックは、言葉を続ける。

「殺し過ぎた人間は、一切を通り越して笑っているしかなくなる…。一を殺し苛まれ、十を殺し慣れ始め、百を殺して無感覚。私も大戦中は多く殺した。だが、おまえは幾つ殺した？千や二千じゃない筈だ」

「千殺さなければ我々の後ろにいた方が死んでいた」

「そうだ、だがお前が殺したのは兵士じゃない。忘れたとは言わせんぞ、アングリフ。マルタ島沿岸に埋まっている3000！20年前、貴様は我々に何をさせた！？あの日、あそこに居たのは非戦闘員だけだったぞ！」

「女が子を産み、子供がやがて兵士になる。殺して殺され殺し返して…。『あいつの爺さんが自分の爺さんの敵だから』と女子供が腕をちよん切られる。そんな連鎖を断ち切るにはそれしか無いんだよ、ヴィドック」

「アングリフ、貴様人の命を何だと思っている。同じ事を、自分の娘にも言えるか！？」

「ヴィドック、ならその数千の上には何が建っている？」

「何？」

「例えば世界に医薬品を供給するバイオリアクター。例えばパイプライン。例えば栽培プラント。その恩恵をお前も受けている。その数千はそれらの礎に過ぎない。大戦という巨大な行為の中で、たかが数千の命に何の意味がある？私は戦後の為、それら全ての命に敬意を払いつつ、皆殺しにした。それに、処罰すべきは結果ではなく、原因だ。娘も同じ考えでいる」

「処罰：だと…？」

「ヴィドック、私と共に来い。これから面白くなる」

ヴィドックは奥歯を噛み締めて拳を作り、そして。

「貴様への憎しみで生きてきた七千三百余日…。その全てが、それを許さない。答えは出ている」

「そう、残念だよ。そうだヴィドック、最後に一つ教えてあげるよ。お前の所に入って来ていた情報は驚く程正確だった筈だ。そして私の所へ入って来た情報もこうしてまた正確だ」

少尉がゆっくりと振り返り、ヴィドックの目と合う。

「……………!!」

「ヴィドック。お前は先ず、足元を固めるべきだった。内側と外側、両方を」

「アングリフ!!!!」

端末の向こう側で、アングリフが呟いた。

「ファイヤ」

突然車体に、ハンマーで叩かれたかのような衝撃が走り、自分の左側の、分厚い防弾ガラスが白く濁る。

酷い耳鳴りと、衝撃による目眩がヴィドックを襲う。

撃たれた!? 何処から!?

「ファーストショット、ヒット。半徹侵で止まる。セカンドショット、エイム…」

双眼鏡を覗くエイトが目標の被害報告をガントに伝え、風速などの微妙な環境誤差を修正。35mmゲルリツヒライフルを構えるガントが奥歯を噛み締めてトリガーに指を掛ける。

アングリフ…

ヴィドックが、端末を持った右手を力無く降ろし、頭をうなだれて呟く。

友を利用し…、部下を餌にし…、娘を犠牲にし…、そこまで

…そこまでして、お前は何をしようとしているんだ? アングリフ、いや…この死神め…

「ファイヤ」

二発目の弾丸が、初弾の着弾点に寸分違わず命中し、防弾ガラスを撃ち抜いた。

撃ち抜かれた窓の反対側に弾がめりこんで車が揺れ、車内に血糊が撒き散らされる。

そして、それに遅れて銃声が響く。

「ヒット、貫徹。目標の完全破壊を確認」

エイトはそう言うと、ゆっくりと双眼鏡を降ろした。

「距離7000m！ 大したもんだぜ、ガント」

ガントはライフルを置き、冷静に答える。

「戦時中にもつと凄いのが居たさ。しかしポンコツでも案外当たるもんだな。骨董品も捨てたもんじゃない」

「なんだ？ 恋しちゃったか？」

「捨てるには勿体ないがな…」

サイレンの音と、パトライトの光が近付いてくる。

「エイト、急いで仕上げた。自治警が嗅ぎ付けたぞ」

ガントはそう言うと、ライフルの側に安置してあるボディーパーツのチャックを開いた。

その中にあるのは死体。頭を撃ち抜かれた、カラドの氷漬けの死体だ。

二人は、その死体と高性能爆薬を詰め込んだバッグを、ライフルの側に置き、時限起爆装置を起動させる。

廃ビルを後にする二人。

二人が、廃ビルから十分な距離を取ったその時、仕掛けた爆薬はライフルとカラドの死体を共に吹き飛ばした。

その様子を見て、エイトがぼつりと呟く。

「バイバイ、テロリスト。この世が嫌いなら、もう二度と戻ってくるな」

Chapter 2

あの時、私を見送った教官は、何と言ったのだろうか…

雨音に消されてノイズになった言葉。その時の彼は、冷たい雨に溶け込む様に弱々しく、また愛しく感じた。

先に行つてくれ。

そう言つた彼の言葉を信じ、私は飛んだ。

そう、私は彼の言葉を信じた。

違う、昔に戻りたいんじゃない。

やり直せるかどうかなんて、どうでもいい事。本当の言葉も、本当の声も、本当の気持ちも、もうどうだっていい。

ただもう一度…もう一度だけ彼と…

冷たい風が頬を撫で、波音が響いている。

夢じゃ無い、本物の感覚。

なら、何故こんなにも暗い？

そうか、急加速と急減速を繰り返した事で、頭に血が昇っているんだ。それで目が見えていない。

そんな物理的な思考が、私の感覚を一気に引き戻した。

聞き覚えのある音。そう、教官の…彼の心音。そして、温もり。

目に見えていなくても、私は彼に抱かれている事がすぐに解つた。

「教…官…」

一瞬の間を置いて、

「ここに居るぞ…」

教官が優しい声で答えてくれた。

「ずっと…、こうしていてくれたんですか…？」

「ああ」

「私を追い掛けて…？」

「…約束…したからな」

私は手を延ばし、手探りで彼の頬に触れた。

指先にチクチクとした刺激。彼の頬は傷だらけで、金属のばりが毛羽立っていた。

「教官…傷だらけ…」

「何も問題ない」

不意に涙がこぼれる。

「何故泣く？」

「こんなに傷付いて…一体何の為に…」

「これも任務の為に致し方ない事だ」

「なら“任務”は…もう終わったんですよね…？」

「いや…あと一つだけ残っている」

彼はそう言うと、私を地面に座らせ、壁にそっと寄り掛からせた。

「教官…？」

「…もうすぐ自治警が来る」

「え…？」

「君は身分を明かして保護してもらおうといい。私は自治警が来る前にここから消えるが、それまでが私の任務だ」

「待って下さい、教官…！私はまだ…」

「ジーナ」

教官は私の頬に手を触れて、優しく、それでもしっかりとした口調で私に言った。

「君が武器を持つ限り、何かに隷属して戦う限り、君は単なる力として働くだろう。そして“力は意思を持つな”と言われ、より大きな権力の手足となって働くだろう。だが、覚えていて欲しい。力は意思の表明…、意思こそ力だ。だからもう一度、一体何の為に戦うのか、自分で選んで欲しい…。君なら出来る。君は私の、最高の生徒だ」

教官の手が私の頬から離れ、にぎりしめていた私の指の中からすりぬけていく。

徐々に離れて行く教官の気配を追うように、私は手を延ばす。

だめ…、今彼を行かせてしまったら、本当にもう二度と会えなくなってしまう。

そう思うと同時に、私の手は彼のアーマーコートの裾を掴んでいた。

「何故…ですか…？ 何故そうやってまた私を放り出すんですか…？」

時が止まる。風鳴りも、波音も、なにもかも。

その時だった。

「お願いだ…！」

突然、教官の弱々しい声が聞こえた。

「もう私に…、任務を放棄させないでくれ…！」

「教官…？」

「私の本来の任務は、君達の教官職だ。君達を鍛え上げ、戦場で優秀なソルジャーとして活躍出来るようにする事だ…。なのに私は君の才能と能力、なにより女性であることに對する嫉妬と情欲に負け、君を一人前の兵士に育て上げる事を放棄した！」

「それじゃあ…！」

「あの晩、私は君を締め出したんじゃない…」

「え…？」

「私は君と共に、サンヘドリンへ来てほしかった…」

「嘘…！」

「私は君の教官である事を忘れ、君を一人前の兵士にするという任務を自ら放棄したんだ！ 任務を放棄した兵士はもはや兵士ではない…。私は兵士ではなく、ファントムでもなく、人ですらない…。私はただの機械ではない…。ただ、与えられた命令を行動する機械でしか…。だから頼む！ 私から存在する意味を奪わないでくれ！」

教官は再び私から離れていった。

私の手の中から、コートの裾が引き抜かれてゆく。

「嘘、嘘よ…！」

徐々に回復する視界の中に、輪郭のぼやけた彼の背中が映った。

彼は無言のまま去ってゆく。

「だったらなせ…！」

彼の背中に私は言葉を投げた。

「なぜあの時、引き止めてくれなかったんですか…？」
彼は言った。

「引き止めたよ…」

彼の言葉に、私の心臓が跳ねた。

一瞬、鮮明に思い出される風景。

そうか…

教官の、あの掻き消された言葉…

それが、今やっと…

行かないでくれ…

「いやあああ！ 待って…待って下さい、教官！！ そんな、そんなのって！ そんなのあんまりよ！」

私は損耗しきった身体を引きずり、虫けらのように地面を這って、彼を追った。

でも、彼の姿はどんどん離れて行く。

やがて彼の姿は見えなくなり、代わりに自治警車両のサイレンが聞こえてきた。

「だったら…だったら何故、力づくでも私を…」

地面にはいつくばる私を、やがて雨が打ち始める。

「どうしようもないじゃない…仕方なかったのよ…二人で逃げてしまえばよかったけど…、あなたはそれが出来ない人だって分かってたもの…。だったらいつその事…あなたが私を壊してしまえば…私にはあなたの中で…ずっと…一緒に居られたのに…」

雨はやがて強くなり、私の涙を隠した。

サイレンの音が最も近くなり、それと同時に、私は目を閉じた。

教官、私はあなたの事を今でも想っていますか、あなたは私を今でも想っていますか？

私は、あなたの言われた通りにしますが、あなたはそれで満足ですか？

教官：いえ、私の心の人：

0058時、治安局ASAF前衛隊員ジーナ・バラム一等官を保護。

同日0100時、自治警及び治安局支局がギリウム・リー・ヴィドックの遺体を高速道路上の車中から発見。同時に、統合体政府は同氏の罷免を発表。

同日0120時、同氏遺体発見現場から約7キロ地点での爆発事故現場から、大口径狙撃ライフルの破片と男性の遺体を確認。

同日0200時、治安局及びGIGN合同の非常封鎖線を解除。

同日0250時、GIGN完全撤収。

同日0400時、爆発事故現場から発見された男性の遺体を、ジョンソン・E・カラドと特定。

同日0430時、治安局はヴィドック元GIGN少佐狙撃事件をアストレイ残党による犯行と発表。

同日0500時、治憲騒乱終結。

枕元の出窓に腰掛け、朝霧に包まれた街を見下ろす。

気付けば時計は朝の5時を廻っていて、出窓下のベッドではエレミアが静かな寝息を立てていた。

あれから三日、何かが変わった訳でもなかった。

何かを失った訳でもなかったし、得た訳でもない。

世の中は相変わらず動いていて、私達など多くの塵の一つ、世は全て事もなし。軍は何も無かったかのようG I G Nの首をすげ替え、法務省は事件の追及を早々に切り上げた。

どこかで知らずに動いている巨大な力。

今までは、そんな事など考えた事も無く、もしかしたら無視さえしていたかも知れないけど、いざ、その力を目の前にして、それを認識せずにいることは不可能だ。

まして、自分自身が、その力の伝達…、歯車の一つにされれば。

「これは？」

病室のベッドに備え付けられた小さなテーブルに局長は公文書用の封筒を置いた。

「私から心なしかのプレゼント」

私は封筒を開けて中に入っている書類を見た。

一瞬、目を疑った。

それは紛れも無く…

「…サンヘドリンへの推薦状」

「もちろん、使うかどうかは君次第だけど」

局長が静かに微笑む。

「友人からの報せでね、近くサンヘドリンは軍備を再編成するみたい。その中に重機動歩兵の再編計画が有ってね、それに君を…と意思って」

「…罪滅ぼしのつもりですか？」

「ん？」

「局長は全て分かっていたんですよね、最後にはこうなるって」

「分かった訳じゃなくてあくまでも想定範囲内だね」

「一緒です」

「あら、手厳しい」

「局長」

「はい？」

「あなたは私達を“力”と呼びましたね。なら、私達の意味は…」

「君は、彼らファントムの詩の最後の一節を知っているかい？」

「え…？」

「曰く、『故に汝らは感謝せよ、未だ人である事を感謝せよ』。この詩はね、彼らの行軍歌でもあり、最後まで人であろうとする詩でもある。そう、君も同じ。君は彼を人として見て、そして、人として愛した。君は、彼らの意思を理解した」

局長は懐から小さな紙の箱を取り出した。

「彼から君へのプレゼント。開けて見てみるといい」

私は貰った紙箱を開けた。

入っていたのは小さなメダル。

交差する二つの矢とその間に立つ大剣のレリーフ。

「零番教導の…」

「彼もね、結局は人なんだ。その証拠に、彼には力がある。きっとね、君の心は彼の中にある。人であろうとする事と君の心を守ろうとする意思が、彼の力。なら、彼の心はどこに有るんだろうね」

私を照らすまばゆい朝日を浴びて手の中できらりと光るメダル。

零番教導の卒業記念に貰う筈のそのメダルを、教官は私にくれた。

私はメダルをにぎりしめて、膝を抱く。

違う…、こんな物の為じゃない。私は…

「ジーナ…」

エレミアが、出窓の私に気付いて目を覚ました。

「ごめん、起こしちゃった？」

「ううん…」

エレミアが眠たそうな目を擦る。

「ずっと起きてたの？」

「うん…」

「だめよ、病み上がりなんだからしっかり寝なきゃ」

私は窓の外を見ながら、エレミアに問うた。

「ねえ、エレミア」

「なあに……」

「好きなのに好きって言えない気持ちって分かる？」

エレミアは暫くの沈黙を置いて、

「……うん」

「え？」

「ぎゅって胸が痛くなって、苦しくなる。いつも見送ってばかりですれ違いがち。だから、実は嫌いなんじゃないかなあって思っても、本当は大好き。そんな感じ」

エレミアはそう言って、少し悲しげに微笑んだ。

「エレミア」

次の瞬間、私は思わずエレミアに抱き着いていた。

「ど、どうしたの……？」

「ねえ、エレミア。私の事好き？」

「え……!？」

「ねえ」

「……好き」

「ホントに？」

「好き……大好き……!」

「よかった……」

私はエレミアを抱きしめて、彼女の頬に二回キスした後、推薦状を破いて捨てた。

私はもしかすると、一世一代のチャンスを棒に振ったのかもしれないけど、これは私の断固たる意思の表明。そして、彼への返答……

私は、新たな道を歩み出した。

もう、後には戻れない。

ACT 18 Beauty and the Beast (後書き)

さてさて、突然のファントム編了でございます。治安局とGIGN、この先サンヘドリンやシエーファー面々にどんな影響を及ぼすか。先々世界は混迷を極めますが、なにとぞお付き合いください。

ACT19 土曜の夜と日曜の朝・前編（前書き）

つかの間の休息。戦いの合間に、戦士たちの見る夢とは。

ACT19 土曜の夜と日曜の朝・前編

Chapter 1

立ち込める煙に噎せつつ、タワー型コンピューターの森を抜ける。部屋の排煙機能は全く作動しておらず、備え付けられた火災探知器さえも、壊された壁から引きずり出された防災システムに繋がるケーブルを、物理的に断ち切る事で無力化。

足の踏み場が無い…とはまさにこの事で、床を這いずる無数のコードの束が、ただでさえ煙で不明瞭な視界の中の彼女の歩みをさらに阻害していた。

一步、前に進む。

破壊音。…何かを踏んだらしい。

足を上げる。

デイスクだ。

…見なかった事にする。

「先パイイ、居ますかー？」

虚しく響くグレンの声。

暫く経って、煙の向こうからハスキーな女性の声が返ってくる。

「グレンか？」

その部屋の主は、部屋の最奥に鎮座していた。

無数のモニターに囲まれた、コンソール一体型の机。机横の、かび臭そうな簡易ベッドと毛布。

彼女自身も、ヨレヨレのTシャツにパンツ一丁、くわえ煙草に、目の下のくま。目鼻立ちは調っているが、血色はすこぶる…悪い。

「先輩 スモークチキンになっちゃいますよ？」

「チキンじゃなくてチーズ」

女性はそう言って、伸ばし放題のボサボサな髪をかき上げる。

「チーズじゃ発酵しちゃってるじゃないですか」

女性の自虐ネタにツッコミを入れるグレン。

しかし、そう言ってる最中も…

「かゆ…」

「もう！ 人前で股搔かないで下さい！ お嫁に行けませんよ!?」
「婚期逃した三十路女に言う事じゃないよ、それ」

女性は煙草をくわえたまま、ゴミ溜めのような机に向かい、キーボードを叩きながらグレンに問う。

「で、何の用？」

「この間お願いしたデータの解析、終わりました？」

「データ？ ああ、ちよつと待って」

女性はそう言うと、くわえていた煙草を、吸い殻で山盛りになった灰皿に押し付けながら、机の上を漁り始めた。

紙の山が雪崩を起こす。落ちたディスクは床を転がって四方に散らばり、あちこちに。

ああ、あのディスクはこう言う事だったのか。と、妙に納得したのもつかの間。

「先輩、机の上くらいちゃんと片付けてくださいよ…」

見かねて、散らばる残骸達を拾いながら抗議するグレン。

しかし。

「片付いてるよ、これ。お、有った有った」

女性はグレンの抗議を、片付けられない人得意の言い訳で華麗にスルーしながら、ディスクを手を持った。

「前以て言つとくけど、物理は専門外。手元にある情報を客観的に全て集めて再構築したのが、これ」

ディスクを机のスリットに挿入。

モニターの一つが切り替わり、すぐに映像が始まる。

それは、ある機体をワイヤーフレームで再現したCG映像だった。
「なんせ、情報があんたからのディスク一枚なんでね、苦労したわ。役立つ？」

「すごい…、十分ですよ先輩！」

「そりゃよかった。でもさ…」

屈託のない笑顔で微笑むグレンに、女性は肩をすぼめながら、上目使いで眉をしかめる。

「こんなこと、私に頼んで大丈夫なの？ 部署がちがうでしょ」

「大丈夫じゃない、かな…？ でも、先輩には迷惑掛からないように…」

「私じゃなくて自分の心配しなよ」

「…いざとなれば、行くところが有りますから」

「そう、羨ましいわ…」

女性がEnterボタンを押すと、ワイヤーフレームの機体はモニターの中で動き始めた。

機体は“HMA h3I”。

データは、リセツツクロウのブラックボックスからコピーした物だ。

「さて、これを見た時はたまげたわ。これ、ホントに本物の戦闘か疑ったくらい」

「言いたい事はわかりますよ、先輩」

「ああ、一言で表すなら…」

二人の声が重なる。

「「化け物」」

モニターの中では、リセツツクロウが敵機の群れと戦っている。

「カタログスペック超えてるでしょ、これ」

「ええ、それに機体各所の荷重バランス数値が異常です。グラビティドライバーで機体各所の荷重バランスをリアルタイムで制御して加速度と減速度を調整しているんでしょう」

モニター内の戦闘で、リセツツクロウが“ヒウジ・プーベ”への体制に入った。

「この駆動スピード…末端の速さは音速を超えていますね」

「あ、これこれ、この変な技みたいなの。これナンタラ体術とか言う…」

「機甲体術」

「そうそう、機甲体術。これ、こんな技をHMAでやるなんて、どうかしてるわ。ボアサイトもオフボアサイトもみんなミソクソになつて…」

「先輩…、彼、最初から火器類手動管制ですよ」

「そんなアホな…」

「先輩も今、化け物つて…」

「それは機体の事だ。見てみる」

彼女は映像を早送りさせてから、リセットクローウがグラビティナツクルを振り上げるシーンでコマ送り再生。

「ほらここ」

映像内でリセットクローウは、超高出力のグラビティナツクルを展開した後、もののコンマ数秒で敵機の群れを突き抜けている。

「素人目で見てわかる。グラビティナツクルの出力以前にこの加速度。機体は瞬時に加速して、その最大加速度は100Gオーバー。リセットクローウがどんな高出力の重力制御とスラスタを持っていても、瞬間的にこんな加速をするのは無理だ」

モニターを見つめながら、グレンが呟いた。

「これ、もしかして重力波推進かも…」

「重力波推進？ 宇宙用艦艇とか、サンヘドリンのディープフォレストとかに使ってる奴？」

「ええ。でもリセットクローウの場合はアプローチが違う。リセットクローウは“推進方向”に莫大な量の重力波を瞬間的に放射、その作用で推進したんですよ」

「つまり？」

グレン曰く。

リセットクローウは、推進用の重力波を放射する前にまず、機体を強力な重力場で形成された真球殻で被った。ここまでは、普通のグラビティシールドと同じ。

しかしその後リセットクローウは、機体内部から機体前方に、グラビティドライバー用の重力子跳躍素子を用いて重力波を断続的に

放射。重力波は空間作用点にマイクロブラックホールを生成。ブラックホールは瞬時に消滅するが、真球殻の発生源である機体を、球殻自身は置いて行く事が出来ない。結果、機体はブラックホールの生成と吸引、消滅を繰り返し、高速で推進する。

次の瞬間、リセツツクロウは右腕のグラビティナックルで真球殻を内側からつつく。

つつつかれ、形を乱された球殻表面には強烈な潮汐力が発生。

その力場に触れた物は何であろうと圧搾され、縮退し、純粋な熱エネルギーと化す。

「これが、この加速とグラビティナックルの正体です」

「おい、そんな潮汐力どこから出力したんだ？」

「マルバス・エンジン」

「マルバスエンジン？」

「正式には“E144 G” リセツツクロウに搭載された新型のトカマク型融合炉の通称です。GRASと炉を直結させた型式で、普段はリミッターが掛けられています。リミッターを解除することで莫大な出力を行使出来るようになる」

「ちよつ、ちよつと待て！」

女性は頭を掻きむしった。

「あんたら、一体何を造ろうとしてんだ？」

「え？」

「これ、普通の人間じゃ手に余る代物だぞ。そんな機能を詰め込んで量産するなんて、コストの面から見てもナンセンスだし、それに…」

突然、グレンがモニターにかじりついた。

そこに映し出されていたのは、リセツツクロウとガーズマンの攻防。機甲体術同士のぶつかり合いだ。

「敵が…機甲体術を使ってる…？」

「驚いたろ？ 私も最初は驚いたよ。ヴァリアントが機甲体術を使ってるのもそうだけど、この二機の戦い方。あんたの言う通り、乗

つてる人間も化け物だよ…。この機体、一体誰が乗ってたんだ？」

彼は後悔していた。

命令とはいえ、このような場所に来てしまった事を。

彼にとって、ここに来るよりは戦場にいたほうがマシなのかもしれない。

こんな…、こんな華やかな場所に来るよりは。

3時間前…

「誕生パーティー？ 私がですか？」

グラムは思わず、裏返った声でガルスに聞き返していた。

「そうだ。今夜、友人の誕生パーティーがある。それに、私の代わりとして行ってきてほしい」

「お断りします」

「何故だ」

「どうも、あのような場所は肌に合いません。誰か他の者に…」

「他に誰が行く？ 元傭兵か？ 若い下士官か？ 女々しい少年か？」

「じゃじゃ馬娘か？」

「ご自分で行かれてはどうです？」

「…私は行けん。行けんのだ」

「何故？」

「どうしてもだ」

グラムは大きくため息をついてから、ガルスに問う。

「ご命令とあらば行きますが…」

「なら命令だ」

「…了解しました。で、一体誰の誕生日なんです？」

三時間後彼は、かの誕生パーティーに出席していた。
目線を遠くにやる。

きらびやかな装飾を纏った招待客達は一様にグラスを取り、パーティーホール端のステージへ傾注。

そこへ、シックで見るからに高価なパーティードレスを着た女性が登場し、彼女自ら乾杯の音頭を取る。

歓声の上がるホール内。

ジャーナリスト達のフラッシュが嵐のように瞬き、ステージから降りてきた彼女を途端に取り囲んだ。

「お誕生日おめでとうございます、議員」

「ありがとうございます」

「議員はサンヘドリン軍政議会を3年間歴任されていますが、今回の新型機導入についてどのようにお考えでしょうか」

「予算の無駄使いね。機体なら現行機の延命近代化で対応出来る…と、私は思っているけど…」

女性が、グラムに気付く。

「では、近年の…」

「ごめんなさい、それはまた後日…」

彼女の合図でSP達が記者達を押し分け、女性はグラムの元へまっすぐ歩いてくる。

その歩き方は優雅で、胸元の開いたデザインドレスとも相俟って、上品でありながら非常にセクシーだ。

「失礼。一曲よろしいかしら？」

「ミラーズ？ グラム「ミラーズってあのサンヘドリンの？」

彼女は少し驚いた顔をしてから、すぐに納得した。

化け物な訳である。あのデイカイオスのパイロットであれば。

しかし、グレンに先輩と慕われるこの女性は、内心焦っていた。

なによりも、グレンのその態度に。

一方グレンは、“先輩” そっちのけでモニターの中に没頭している。

「この敵機…、圧縮空間を使ってる」

「圧縮空間？」

「膨大な空間容積を、見かけ上僅か…本当に僅かな容積まで圧縮して…」

「つまり…あれ？ バリアーみたいな物？ GRAS…みたいな？」

「そうですね、GRASが硬い装甲で攻撃を弾くのに対し、圧縮空間は分厚い装甲で攻撃を受け止める…みたいな？」

「攻撃が届かないって事？」

「ええ」

「届かない…か…。でも実際このでっかい奴を撃破してる」

「大佐は本能的に、圧縮空間の弱点を悟ったんでしょう。格闘戦…

それも敵の攻撃に合わせてのカウンター。相手に触れる場所、つまりヒittingポイントに圧縮空間は展開できませんから」

「格闘って素手で？」

「その為の機甲体術ですから」

グレンはさらりと言うが、実際そんなに簡単な問題では無い。しかしグレンは、更に言葉を続ける。

「ほら、この敵機の腕を粉碎したパンチ。打撃スピードは…、出ましたね…、遂に第一宇宙速度…」

「んなバカな…」

「そしてトドメの重力波放出…重力レンズまで…。でも、機甲体術にこんな技有ったかな…」

「ねえ、グレン。あんた事の重大さに気付いてる？」

「え？」

「たった一人の人間が、たった一機の機動装甲で敵の群を撃破…。これはもう政治問題だよ？」

「政治問題…？ 何故です？」

女性は少し間を置いてから、灰皿の中からまだ吸い代の残っているタバコを拾い、指でつまんで伸ばしてから口にくわえ、ライターで火を点けた。

「理由は二つ。まず機動装甲。こんな物が量産されたら世界のミリタリーバランスは目茶苦茶だ。それが例え、サンヘドリンの機体でもな」

「そんな…、サンヘドリンは人類の為に…！」

「軍閥や地方集落はそんなの関係ない。連中にとっちゃサンヘドリンは自分達の持っていない兵器を大量に保有する恐怖の対象」

「…二つ目は？」

「ミラーズ」

「そんな、大佐を怪物みたいに言わないで下さいよ…」

「実際化け物だろ？ この戦争が終わったら、彼はどうなる？」

「どうなるって…」

「機密の塊みたいな機体に乗って、戦況をひっくり返す能力が有って、挙げたらキリがない」

「でも！ 大佐も先生も、みんなの為に……！」

「リセツククロウの量産が始まらないのは、政治家の圧力が有ったからでしょ」

「う……」

「人類なんてそんな物。男と女みたいなもん。信頼してるなんて言っても、腹の底の探り合い。それで、その政治家って誰よ？」

「えっと、マリア……」

「まさか、マリア・エバ・ドウアルテ・デ・ペロン!？」

二人はパーティーホールホールのダンスフロアでワルツを踊りながら、お互いの顔を見つめ合った。

グラムは相変わらず、口を真一文字に閉じて冷めた眼をしているが、マリアは円舞を楽しむように微笑んでいる。

「お久しぶり、大佐。保護法の時以来かしら？」

グラムの記憶に残っている彼女と照らし合わせても、今の彼女は全く変わっていないかった。

記憶に残っている限り最も過去に初めて知り合った時、彼女は既に四十だったから、今は四十三……今夜で四十四だ。

だが彼女は、相変わらずとても四十過ぎには見えない美貌と若さを持っている。

敏腕の女性政治家で、この容姿。

メディアがほって置く訳が無かった。

「いえ、対ヴァ法案の時以来です。マリア議員」

「今夜はエステルちゃんを連れてないのね」

「はい」

「これは私にもチャンスが有るって事かしら？」

マリアが半歩、身体を寄せてくる。

「ねえ大佐、今夜はケステイウスの使いで来たんでしょ？ ケステイウスだったら毎年呼んでるのに、一度も来た事無いんだから……」
グラムは少し驚いた。

友人であるとは聞いていたが、まさか名前で呼び捨てにする程の仲だったとは。

彼は話題を変えようと、件の問いをした。

「議員はなぜ、新型機導入に反対を？」

「高い買い物よ？ 慎重にならなきゃ」

「導入されれば、老朽し始めた従来機の三分の一を退役できます。運用は延命近代化処置したh2とのハイ・ロー・ミックス。長い目で見れば安上がりな筈です」

「h2の一部退役で、機密機だったh2のプラットフォームがノックダウン生産で解禁されるそうね」

「h3の導入に併せて、中央軍にF型が配備されます」

「“空軍”の件はご存知？」

「中央軍に新設される空中機動軍……でしたね」

「空軍は、キクチ金属工業社製の可変機体にジェネシックス社製第4世代FCSとアーシェ・クロイツ社製ISRセンサーを組合せて運用するみたい。“陸軍”は焦っているわ。F型の配備に躍起よ」

「中央軍の後押しも有りながら何故？」

「F型が中央軍に配備されれば、軍閥や集落が騒ぎ立てるでしょうね。なんと言っても、未だにT72を使っている所もある事だし。それに、サンヘッドリンの支部軍閥も黙っていないわ。自分達の持つ兵器のアドバンテージが、一気に薄れるんですもの」

「内輪揉めを防ぎたい訳ですか」

「それだけじゃない。友人の一人から知らせがあったのよ。h3は危険だって」

「何か問題でも？」

「まさか…」

「私はh3に乗りました。あの機体は傑作機だ。あの機体には戦友達を護る力がある」

「ふふ…」

「何か？」

「まさか貴方の口から仲間なんて言葉が出るなんて…」
ワルツの演奏が終わる。

「ありがとう、大佐。楽しかったわ。それと…」

彼女はグラムに寄り添い、耳元で呟いた。

「ケステイウスに伝言…。もう、忘れなさいって…」

まず、コーヒーのありがたがわからなくなった。

朝食も自分で作ったけど、あまり美味しくない。

二人で居た時は窮屈に思えた部屋も、今ではとても広く感じる。
でも、もう慣れた。

10年も経てばなおのこと。

「すまん、まだ生きてるんだ」
大きなポプラの木の下。

人気の無い、静かな淋しい丘の上。
ガルスは、墓石の上に乗った枯れ葉を手で掃いながら、小さくそ
う呟いた。

Chapter 2

「ふう…」

彼女は大きく溜息を吐いてから煙草の煙を燻らせ、頭を掻いた。

「だいぶ面倒臭い事に巻き込まれてるよね、アンタ」

「みたいですね」

「みたいですねって、そんな人事みたいに…」

「人事じゃないです。ただ、冷静なだけ。だって先生の作った物だ
から…。h2もh3も、必ず役に立って信じてますもん」

「ねえ、グレン」

「はい？」

「アンタ、なんでここまでするの？」

「え？」

「アンタくらいの女の子だったら、休日には目一杯ショッピングし
て、スイーツ食べて、ネイルして、エステ行って、スパ行って、合
コン行って…。遊びたい放題じゃない。なんで？」

「決めたからですよ」

「決めたって何を？」

「共に戦うって。彼と一緒に戦うって」

真剣な表情でそう答えるグレンを見て、女はしばらくしてから、
ニヤニヤと笑い出した。

「ははーん…成る程ね…」

「はい…？」

「社を飛び出してまで追っ掛けた男」

「は…?」

「でも彼は偉い軍人さん…。社会に引き裂かれる私と彼。ああ…私
は不幸なヒロイン、みたいなの?」

「えっ? ええっ? ち、違いますよ!」

「頬つぺた赤くして何言ってるの」

「そうじゃなくて…、私はそんなんじゃない…。それに大佐にはエステ
ルが…」

「ああ、寝盗られか」

「違います!! 大佐とエステルは…、何と云うかその…とにかく
違います!」

女は、ムキになるグレンを見ながら、煙草をかじってケラケラと
笑ってから、安心したようにグレンに言う。

「本当、アンタだけは…。アンタだけは昔と何も変わらないな」

「先輩?」

「アンタが本社から研究所主任になってサンヘドリンに行っている
間に、私は不祥事で島流し。世の中も、周りの人間も変わっていく
中で、アンタだけは変わらないでいてくれた」

彼女はグレンに言う。

「付き合ってるよ。最後まで。アンタだけじゃ危なっかしくてし
ようがない」

「そんな先輩まで…!」

「毒を食らわば皿まで。それに…、あの野郎の鼻っ柱へし折ってや
るいいチャンスだし」

「え? あの野郎って?」

不思議そうに聞き返すグレンを遮るように、女はデスクの上に積
み上げた硬貨を数枚取り、グレンに手渡した。

「グレン、悪いけどラテ買ってきて」

「え、今ですか?」

彼女はグレンに、空になった紙コップを振って見せる。

「ハイハイ、ノンカフェインの砂糖抜きですよね」

「お、分かってるね」

「当たり前です。何年も先輩のお使いして来たんですから」
席を立つグレン。

その時だ。

「あ、ついでにさ、購買部でパンツ買ってきて」

「え？ パンツ？」

彼女は自分の下着を指差しながら言った。

「コレ、三日目なんだわ」

「……………」

ウイスキーの中に浮かんだ真ん丸な氷が、グラスの中で満月のように輝いている。

土曜の夜だと言うのに店の客入りは疎らで、カウンター席に座る彼女を入れたら、4人しか居ない。

行きつけの店と言う訳ではないが、気が向くと行く。
尤も、休日になると客足が遠のく、不思議な店だが。

外したくないんだ。

レイラはグラスを見つめて、その言葉を何度も反芻する。
ガルスの変指にあった、シルバーのリング。愛する者との永久の

愛を示す、誓いのリング。

だが、彼が愛を誓った者は、もうこの世に居ない。

だが、彼は指輪を未だに着けている。もう存在しない者の為に…。

彼女は、彼に問うた。

「なぜ指輪を外さないのか」と。

彼は、「分からない。ただ、外したくない」と答えた。

そうだ、世界に存在しなくとも、彼の心の中には、未だに…

「あら、珍しい人が居るわ」

彼女は声のした方向に振り向く。

店の入口のドア。

そこには、何故かエレナが立っていた。

お前は誰かに似ている気がする。

私が一体、誰と似ているというのだ。

私が、人間などに。

お父様の敵であるデイカイオスは、私の敵でもある。

そして、デイカイオスにとっても、私達は敵だ。

なのに、デイカイオスは私にとどめを刺さなかった。

敵である私を、見逃した。

訳を問えばデイカイオスは、銃口を下ろし、背を向け、そう答えたのだ。

そう、敵に背を向けてだ。

解らなかつた。

理解出来なかつた。

だが、その事を思い出すたび私の思考中枢の中に、不明瞭で意味不明な感覚が沸き上がってくる。

その感覚は、やがて大きくなって、ようやくその形を現した。

デイクイオスを超えたい。

デイクイオスを倒したい。

そして、デイクイオスの事をもっと知りたい。

私は初めて、人間の事をもっと知りたいと思つた。

デイクイオスに乗っている人間は、一体どんな人物なのか…。

この目で見てみたい。

触れてみたい。

何故それほどまでに強く、優しいのか。

私は知りたくなつた。

浮かぶ氷を揺らしながら、二人はグラスを付ける。

「誰への乾杯？」

「全ての独身女性に」

エレナの答えに微笑むレイラ。

レイラはウイスキーをロックで、エレナはモスコミュールをゆっくりに運び、お互いを見つめ合う。

同じ組織内、人伝えの接点があったから、お互い知らない仲では

ないが、このように腰を据えて呑むのは初めてだ。
まして、生活のリズムに交差点が無ければ尚更。

「ここ、よく来るの?」

「いえ、時々…」

「そう。私は初めて。こんな偶然、運命かも」

「運命…ね」

「あら、悩み事?」

「え?」

「悩んでる顔もいいけど、いつもの落ち着いてる表情の方が私は好きよ?」

「なんか、口説いてるみたい」

「そう思ってもらっても結構だけど、今はあなたの話の方が興味があるわ」

レイラは少し困った表情でウイスキーを一口。

「私の事は、いいわよ…」

「恋の悩み?」

酒のせいか、レイラの頬がほんのりと赤くなる。

「照れなくてもいいでしょう? 処女じゃあるまいし。それに私は心理学者よ? 話さなくても聞き出しちゃうんだから。相手は誰?」

「……………」

「ケステイウス司令?」

「……………」

「あら、凶星…?」

レイラの頬が、更に赤くなる。

「でも…彼には奥さんが…」

エレナの目が輝いた。

「あら、大胆。職場不倫」

「そうじゃないの…。彼の奥さん…天国に居るから…」

「最近?」

「昔だけど…」

「なら良いじゃない。汝、隣人の夫を欲してないわよ」

聖書の文句を揀って笑うエレナだが、レイラの顔は暗かった。

「でも…、彼の中にはまだ、奥さんは生きているのよ…。彼…、まだ指輪をしているの。きつと、ずっと外さないで来たのね…」

「彼はあなたの事をどう思っているの？」

「聞けないわ、そんな事…」

「何故？」

「失うのが…怖くて…」

エレナは大きくため息をついてから一言。

「ねえ、レイラ。あなたケステイウス司令と寝たいと思った事はある？」

「え？　なぜ急にそんな…」

「私はね、寝たいと思った人がいたの。猛烈に求めた人が。彼も拒まなかった。大戦中で、彼は兵士。戦いから帰って来れば必ず求めあつて一晩中愛し合ってた。私は思ってた。側に居たい。支えになりたい。役に立ちたい。どれも建前は違うけど、中身は全て同じ。

“愛したい、愛されたい”。男女の友情？　笑っちゃうわ。神様は

ね、男と女は結局愛し合うように創っているのよ」

「なら…、彼は私と寝たいと…？」

「それは分からないわ。でも、彼もあなたと同じなんだと思う。失うのが恐い。忘れたいと思っけていても、忘れてしまうのが恐い。指輪を外してしまえば、なにもかも忘れてしまつかもしれない。それが恐い」

「待たなきゃいけないのかしら…」

「彼を変える自信ある？　あなたが目印になって彼を導く自信が」

「無いわ…。でも…、そんなのずるい」

「ずるい？」

「男の人はどんどん変わっていきけるのに、女には変わらずに待つてるだなんて…そんなのずるい」

レイラはそう言つて、視線を遠くにやる。

エレナが言った。

「彼ね、私に待つなって言ったの。それで私は、彼の元を去ってしまっただけ」

「待つなと言った彼の、気持ちは分からないけど、やっぱり二人で居た方が幸せだと思う」

「そうね……」

話に夢中になり、気付けばグラスの中には氷が溶けた、水の層が出来ていた。

「薄くなっちゃったわね」

「いいわレイラ、飲み直しましょう」

二人は先程と同じ物を注文し、グラスを傾ける。

レイラが問う。

「何へ乾杯？」

エレナは答えた。

「全ての待つ女性へ」

「エースのファイブカード」

ビンセントが綺麗に揃ったトランプカード五枚をテーブルの上にオープンする。

「ダーツ！ またビンセントの一人勝ちかよ！」

「旦那馬鹿強つすよ！」

ぶー垂れるハリーとサブを尻目に、ビンセントはテーブルの上の紙幣を掻き寄せた。

ハンガーでカードに興じる三人。

「お前らとはツキが違うんだよ。ハリー配れ」

「ツキじゃなくってイカサマっぽいです。クローズド？ スタッド？」

「機体に爆弾しかけちやる。クローズド」

各自、配られたカードを見てベット。

「酒でもありやもつとよかったがな。二枚」

「駄目ですよ旦那、当直でしょ。四枚」

「次こそクロス。三枚」

ビンセントがニヤリと笑う。

「おい、ハリー。そういえばユリアがお前と遊びに行きたいって前言ってたぞ」

「まっ、マジっすか？」

動揺するハリー。

「え、ハリーお前貧乳好きなの？」

「ちよい、お前…」

「いや、サブさん。貧乳好きとかそんなんじゃない…」

「おい、お前も…」

「ハリー…、オツパイは大きくてナンボだろう？ なあビンセント？」

「今まで無視しといてアレか？ 今になってオツパイネタを俺に振るのか」

「いいから、お前はどっちなんだ。大が小か！」

「尻」

拍子抜けするサブとハリー。

「あ、あれえ？ あの留置所でのオツパイ音頭はなんだったんっすか？」

「いやあよ、正妻と愛人は違うだろ？」

「お前アホだろう？ イオちゃんを見てみるよ。あのはち切れんばかりのミルクタンク！ 天然のエアバックだぜ、ありゃあ？」

「確かに揺れる。潔く揺れる」

「胸ならあの人が居るじゃないっすか」

「誰よ」

「エレナさん」

「ハリー…、お前…」

「ありゃあ規格外だろ」

「ああ、ビンセント。あれは語るまでもねえ。ありゃあ歩くセックスアピール…、いやエロスそのものだ」

「ああ。あの長身に長い脚。細い腰にでかい胸。神は彼女に三分も三分も与えたもつた。まあ、俺は尻だがな」

「尻なら誰よ」

「レイラかな？ ガルスントコの。あとはグレンちゃん。想像してみ？ あの豊富なヒップが歩く姿を。一歩踏み出す度に左右の大臀筋がスカートを内側から持ち上げ、ラインが浮き出る、その姿を！」

「ふ…、甘いな、ビンセント。一つ教えてやろう。尻は…、挟めな
いぜ？」

「ユリア姐さん、何気お尻可愛ゴベバツ！」

「…いや、お前こそ甘い。胸はな、垂れる！」

「尻だつて垂れるじゃねえか」

「うっ！」

「胸は美の象徴だぜ？ 解つちやにねえなあ…」

「じゃあお前はベッドでも尻を触らないんだな？」

「何い…？」

「それに胸はゴマカシが効く。いざ脱がしてみてもガツカリなんてのは真つ平ゴメンだ。だが尻は素材そのものの味が出る」

「でも最近はお尻の矯正下着もあるみたいっすよ」

「そらみるビンセント！」

「くそっ！ 黙ってるよハリー！」

「ワシは哀しいぞ、若者達よ」

ビンセント達の馬鹿騒ぎを聞き付けた術長が、腕を組んで立っていた。

「乳だの尻だの、お前らは思春期のガキか！」

「いや、術長、しかしだね」

「男なら属性に惚れる！！」

「へ…？」

呆然とする一同を尻目に、術長は語り始めた。

「清純一筋な春雪ちゃん！ 最近小悪魔的なサラちゃん！ 天然キヤラのイオちゃん！ 実はエロいツンデレ学級委員長のエステルちゃん！ 私はいつもここにいますよ的なレイラ嬢！ これぞバイセクシャルクオリティなエレナ嬢！ いいか、俺だって若い頃にあ、カーマ・スートラ風にくんずほぐれつ、○○に○○○○を○○○○○○…」

「うわああああ、このジジイ誰か止めろおお！！！」

暗転。

「まあ、確かに清純な子はイイかもしれん」

「確かに、ビンセント。春雪ちゃんなんて、うなじが輝いて見えやがる」

「え、サブ春雪ちゃん狙い？」

「例えばだ、バカ」

「そう考えるとグレンちゃんはかなりの高得点かもな。清純で胸もあつて尻もなかなか…」

「エステルさん」

ハリーの言葉に、全員が振り向いた。

「ああ、確かに…性格も色っぽい」

「胸もかなりある」

「脚長いっす」

「尻が良い」

何やらふやけた顔で天井を見上げる四人。

しかし次の瞬間…。

「チクシヨウ、グラムの野郎おお！！ あの尻を好きないように…！」

「あの若造め、固そうな顔してアツチも硬いのかあああ！」

「エステルさんは…エステルさんはあ…！」

「自分はどうでもいいっす」

「私が何か？」

聞き覚えのある声に、一同が凍り付いた。

「エエ、エ、エステルさん…」

呂律の回らないビンセント。

エステルの手には、ビニールチューブが握られている。

「あら、私何故こんなもの持つてるのかしら？ ねえ、皆さん？」

目の座ったエステル。

「ちょっと待て、エステルちゃん」

ビンセントの言葉を無視して歩み寄るエステル。

「ねえ、どうして欲しいの？」

逃げられない一同。

身体が、言う事を聞かない。

まるで、全身の全神経が凍り付いているようだ。

「ねえ…」

ビニールチューブをぎりぎりといわせながらハイヒールの靴音を盛大に鳴らして仁王立ちするエステル。

もう、限界だ。

「…お仕置きしてくださああい！！」「…」

エステルはニヤリと微笑み、ビニールチューブを振り上げた。

部屋に響く、ビニールチューブが空気を切る音。

後に男達は口をそろえて言う。

『エステルさんの鞭責めはマジハンパねえーっす』

後半へ続く。

ACT20 土曜の夜と日曜の朝・後編(前書き)

つかの間の休日、グラムは自己の過去を見る。

ACT20 土曜の夜と日曜の朝・後編

Chapter 3

パーティーを抜け出したグラムは、人気の無いパーキングスペースに車を止め、シートベルトを外して溜息をついた。

仲間なんて言葉が出るなんて。

彼女が彼に言った言葉。

思い出させてくれた人がいた。

「西暦2185年10月1日 イタリア南部機甲軍団第二軍司令部
カンパニア地区旧市街の北500km 4年前」

「戦争はもう終わった筈です」

グラムはそう言って、軍服の男を睨み付けた。

かつての上官。ケステイウスIIガルス。

「緊急事態なのだ。何も言わずに乗ってくれ」

「嫌です」

「勘違いするな、ミラーズ。これは命令だ」

「命令でも従う気はありません。私はもうあなたの部下ではないんですから」

「私はお前を除隊した覚えは無い。お前が勝手に姿を消したただけだ。お前はまだ私の部下だ。勝手にどこかへ行く事も、お前の力を腐らせる事も、私が許さん」

「だからと言って、強襲班を遣す事はないでしょう」

「そうでもしなければお前が姿を見せないからだ」

「今度も銃で脅して乗せる気ですか？」

「部分洗脳で人形にしてやってもいいが、そんな事をしている時間

も無い」

グラムは部屋の天井を見上げて溜息をつく。
取調室の天井は低く、息の詰まるような薄暗さだ。

「で、この脱走兵に何をさせたいんです？」

「カンパニア地区の開放と武装解除だ」

「その為だけに私を？」

「一週間前、カンパニア地区へ向かった中央視察隊が消息を絶った。直ぐにイーグルアイを送ったが、視察隊は発見できず、戦闘の痕跡も無かった」

「集団失踪……。賊の可能性は？」

「ゲリラの可能性を考慮し、第58機装特戦隊から105、106、107の三個小隊を送り込んだが未帰還。三騎の第一から機動装甲一個小隊を投入。そしてこれも未帰還。だが、これは収穫があった。唯一一人の帰還者が口にしたそうだ。『ファントム』と……」

グラムの顔が凍り付いた。

ただでさえも縁起の悪い、古戦場・カンパニア。

かつて四つの軍閥が鎬を削り、市街地戦のモデル地区とも言われたそこは、血で血を洗う殺戮の場だった。

スナイパー同士が肉眼で撃ち合い、対戦車ミサイルが飛び交い、迫撃砲弾が降り注ぎ、歩兵戦闘車は機関砲身が焼き付くまで撃ち続け、兵は熱病に罹った様に殺しあい、擱座した機動装甲パイロット同士の白兵戦すら起きていた。

死体はすぐに腐敗を始め、噎せ返すような悪臭に満たされたと言っ

う。
砂漠化した郊外から風で運ばれてくる砂は深いところでは10m近くまで街を埋め、砂の下には無数の残骸と骸を隠している。

そのせいか、戦中から幽霊の類の噂が絶えない、カンパニア。

しかし誰も、本物の“亡霊”と遭遇するとは、夢にも思わなかっただろう。

「ISAFは？」

「軍閥との交戦で手一杯だ」

「爆撃で市街地区ごと吹き飛ばしてしまっただけ？」

「カンパニア市街地区は多層建築物と地下構造物の廃墟が、珍しくも数多く残っている。爆撃してもBDAが困難だ。それに、そのよ
うなハードな手口はもう試した」

「どうでした？」

「爆装したHMA2機が撃ち落とされた」

正に泥沼、暖簾に手押し、進むも地獄、退くも地獄。

でも、どうやら地獄には一人で行かせたいらしい。

「HMAもダメ、機装部隊もダメ、爆撃も砲撃もダメ。それで私
ですか……」

「そうだ。…出撃は24時間後。当日は高度な電子戦術が必要とな
るため、前線管制官が付く。コールサインは“Oscar” 階級
も戦時最終階級に戻してやる」

「嫌と言ったら？」

「乗るさ。お前は必ず乗る」

「何故？」

「“何故”……だと？」

二人の間を、沈黙が支配する。

不気味で長い沈黙が。

グラムの脳裏をかすめる既視感。

目の前にいる軍服の男。

機動装甲。

それに続く衝撃、振動。これは爆風？

私はこの風景を、既に見ている？

24時間後。

大型輸送機スペクターが、彼の機体を高度70000ftまで押

し上げる。

周囲に雲は無く、雲は輸送機の遙か下方に海のように広がっている。灰色の雲の海。対して上方は、濃い群青の空が広がっていて、空と雲の境目は、まるで無限の距離を感じさせるように全方位に広がっている。

高高度からのHALO降下。

成層圏内を運ばれる機体の中、彼はコンソールを見ながら操縦桿を握る手に弛緩と緊張を繰り返し、静かに息を吐いた。

コンソールに表示される外部兵装のコンディション。

彼の脳裏に、出撃前の記憶がリフレインする。

「対ゲリラ戦を想定して、装甲は下肢部に集中。関節胞と座金は軽合金のワンオフ。トルクは落ちとるが駆動レスポンスは上がとる。頭部は改良型IDMとRFI/FIRユニット。機能は高いがECCMは望めんよ」

h1AVの前に立つグラムに、初老の技術者がそう言った。

「武装は？」

「左腕に25mmガトリング機関砲、右腕に70mmロケット弾ランチャー。両肩部には三連Sマイン発射機。所謂人狩り用だな」

「動きにくい。装甲は要所のみにしてくれ」

「おいおい、それじゃあ他の装甲は要らないって言うのか？」

「当たらなければどうって事は無い。こっちは？」

「空力カウルと大出力ロケットブースターその他諸々。コレを機体に貼っ付けて敵地深くまで一気に入り込むって代物だ」

「深深度侵入パツク…。完成していたのか…」

「アンタが乗るって知った若者連中が古い資料引っ張り出して徹夜で作り上げたんだ。使い捨てで高コスト。お前さんの為じゃなきゃ製造許可は下りなかつただろうな」

機体を見上げるグラム。

機体の肩には、炎のエンブレムが刻まれていた。

「こちらOscar、Romeo聞こえますか？」

機体に“Oscar”からのコールが入り、音声通信が始まる。

若い女の声だった。

無色な、抑揚の無い声。

「こちらRomeo、感度良好」

「現在Oscarは管制官としてRomeoと双方向で接続しています。偵察衛星と、そちらから送信されるあらゆるデータは、こちらで解析、Romeoに返信します。ただし、通信衛星を用いた超長距離通信の為、コンマ数秒のタイムラグが生じる事を念頭に置いて下さい。何かご質問は？」

「名前は？」

「はい？」

「背中を任せるんだ。名前くらい教えてくれないだろうか？」

暫くの沈黙を置いて。

「名前は有りません」

「何？」

訳を聞こうとしたその時、スペクターからのコールが入った。

「飛行禁止空域到達120秒前。空域は晴天。機体射出用意。機体射出後、当機は空域を離脱。幸運を祈る」

「こちらRomeo、了解。降下体勢に入る」

スペクターはリアハッチを開き、機体を傾斜。

コンソールにカウントが表示される。

機体機動制御のコントロールパネルを呼び出して、重力制御装置を高度1000ftにセット。

「こちらOscar、射出タイミングはそちらに任せます」

「了解」

彼は三回短く呼吸し、四回目で深呼吸。

顎を引き、操縦桿をにぎりしめる。

「カウント3で降下。3…2…1…」

ロツクの解除された機体がスペクターの傾斜角に沿ってカーゴから滑り落ちる。

スペクターは直ぐさま反転、空域を離脱。

空力カウルが風を切る中、予定高度へ降下する機体は、カナード翼により水平を保持。

雲海に突入。自動航行システムに則り、予定軌道を滑空する。

「予定高度まで10」

雲を抜ける。Oscarの声と同時に、ブースターユニットと重力制御装置が目を醒まし始めた。

唸りを上げる機体。

予定高度到達。重力制御装置起動。

その瞬間、両舷合わせて200tの推力を発揮する二基のブースターユニットが、空力カウルに包まれた彼の機体を疾駆させる。

「現在、速度1500ml/s LZまで15000。ブースターカットオフまで5…」

市街地上空に到達。敵の予測射界に侵入。

デコイ射出。同時に、ブースターユニットをパージ。空力カウルが割れ、機体は空気抵抗とスラスタで減速、衛星からの地理情報と機体ヘッドセンサーの対地スキャン結果を合成して表示されるコースに沿って降下する。

足元に広がる荒廃した旧市街。

着地まで250m。その時だった。

「レーダーに感。IFFは…三騎のHMA？」

「生存者…か？」

「いえ、あは…」

Oscarの言葉の途中、突然ロツクピットの中に警告音が鳴り響いた。

「レーザー着信。対装甲ミサイルです」

ビルの谷間からミサイルが撃ちあがる。三騎のHMAが、突然ミ

サイルを撃ってきたのだ。

機体リーダーが、三発のミサイルを捕捉。
チャフ散布。

二基のミサイルが軌道を外れ、虚空で起爆。
残り一基が接近。

ADS発動、ミサイル迎撃。機体の目の前で爆炎が散る。

「リモート操作か…！ Oscar、コントロール元を逆探知！」

「敵を引き付ける事になりますか？」

「ふ…やってみるさ…！」

不敵な笑い。

敵機捕捉。着地点から砲火が上がり、機体を掠める。

射線を回避し、急速に降下。

敵機は彼の動きをライフルでなぞるが、単純なりモート操作はどうしても動きが散漫で追跡することが出来ない。

敵機まで、十数メートル。

重力制御をカットし、荷重を一気にかけて敵機の頭を踏み潰して、再び重力制御をオン。前方にジャンプして、タッチダウン。

単分子ナイフを右手で抜き、逆手に持つ。

3時と12時から、さらにHMA一機ずつ。

敵機は同時にライフルを発砲するが、彼はそれを回避し、最も近い一機に接近。間合いをつめると、逆手にもったナイフをフックのようにしてライフルに引っ掛けて逸らし、敵機から見て右側へ入る。そして、敵機の顔面に左腕を押し当て、上体を反らさせながら大腿部にナイフを突き刺して自由を奪い、ライフルを取り上げて、もう一機の敵へ向かってフルオートで発砲する。

「今だ、Oscar！」

グラムの声に応え、Oscarの逆侵プログラムが彼に捕まっている機体に入り込む。

センサー系を経て、機体操作系へ伝播。

メインシステムに介入。

IDMに侵入。

防壁を突破。

後は座標を…

「Oscar!」

弾切れになったライフルを捨て、グラムが叫んだ。

崩れる敵機。

座標特定。

「探知完了。位置は…、そんな…! Romeoの真後ろです!」
グラムの背中を走る悪寒。

Oscarの声に反応し、機体が彼の操縦に応える刹那の瞬間突然、背後のビルの壁面が砕け、機体に巨大な鉄骨が振り下ろされた。スラスターを噴射し、その場で180度ターン。

鉄骨を、捕らえた敵機で防御。

敵機の頭と胴体が、ぐしゃりと潰れる。

一瞬だが、確かに見えた。

白い、風に吹き飛ばされているシートのような、不定形の物体。

彼は潰れた敵機を蹴り飛ばし、腰部にマウントされた120mm

44口径長軽野砲を抜いて構え、ビルへ向けて発砲。

物体は射線を回避。

野砲に装填したキヤニスター弾は、至近距離で発射したせいで十分に拡散せず、総重量11kgのタンクステンペレットの塊のまま初速1500m/secで着弾。ビル外壁面に大穴を穿つ。

物体を追尾。

しかし、機体レーダーには不精確な干渉波が映るだけ。

IRにも感無し。

物体が纏っているのは、どこかの部隊が残した野戦陣地用の隠蔽シートの切れ端を繋ぎ合わせた物だ。

目標の大きさとも相俟って、動いていてもこのステルス性能。止まっていれば、捕捉は不可能だろう。

視界に再び物体が映る。

物体はビルの壁面をまるで重力に逆らうかのように駆け、右手に持った超大形の拳銃を機体の間接部に向かって発砲。

グラムは弾丸を左腕装甲で防御する。

左腕25mmガトリング機関砲をスピニングアップ。

手動照準。

ガトリング機関砲を物体へ向け、トリガー。

物体は高サイクルで吐き出される対装甲用焼夷徹甲弾と焼夷榴弾の破片と爆炎を背後に受けながら、何かの信号を発信した。

「警告！ I E D！」

次の瞬間、機体そばのビルが次々と爆発。

グラムは崩れ落ちる瓦礫を避け、崩落するビルに飲み込まれる寸前に空中へ退避するが、物体は機体に追い付き、迫ってくる。

物体に向かって軽野砲を発砲。

近距離で発射されたキャニスター弾は物体を飲み込もうと迫るが、物体は腕を薙ぎ、散弾の雲を切り裂いた。

ざああつ…と散りぢりになるタンクステンペレット。

散弾は、物体そのものに対しては何一つ加害した様子は無い。だが、物体表面のキャンバスを剥ぎ取って、真の姿をさらけ出させる事は出来た。

巨大な体躯に、耐弾装備である分厚いロングコートを身に纏った、

戦場の亡霊…

対機甲機械化猟兵・ファントム。

そして間合いを詰めたファントムは右拳を振り上げ、機体を力任せに殴り付けた。

力任せ。そう、ただの力任せだ。

だがその破壊力は機体を叩き落とすには十分だった。

スラスターでどうにか姿勢を正し、逆噴射で減速、着地。

レーダーに感。12時方向に高エネルギー反応。砂埃の中に、こちらに銃口を向けるファントムの姿。

ポンプをスライド。

軽野砲に装填された弾薬は、始めから順にAPFSDS一発、HEAT-MP二発、キャニスター弾二発の計五発。先にキャニスター弾二発を使ったから、今装弾した弾種はHEAT-MPだ。

グラムは、軽野砲の砲口をファントムに向けてトリガー。同時にファントムも、左手に持つ巨大な拳銃を発砲。

同じ射線上に位置する二つの飛翔体は空中でぶつかり合い、HEAT-MPが起爆。

ライナーを撃ち抜かれ、単なる榴弾として爆ぜたHEAT-MPに対し弾丸の方は、未だその運動エネルギーを失わず、機体右側頭部のすぐ傍を通過。

次の瞬間、空中で起爆したHEAT-MP弾の爆炎を割って出たファントムは機体に肉薄し、背中から巨大なブレードを抜いて振り下ろした。

グラムは左腕でブレードをガード。

ブレードが25mmガトリング機関砲の砲身に食い込み火花を散らしたその瞬間、彼は左腕を振り抜いてファントムを弾き返すが、ファントムは空中で身を翻して左腕の袖口からワイヤーアンカーを打ち出し、機体胸部の装甲に吸着。それと同時に、ワイヤーに莫大な電力が通電した。

ワイヤーは、ジュール熱によって瞬時にプラズマと化す。しかし、それよりも早く、電流は機体の絶縁能力を超えて伝播し、過電流防止回路を誤作動させて機能を停止させ、HMAを石の枢と変える。

モニター、ブラックアウト。

最後に聞こえたのは、連続した爆発音だけだった。

名前を聞く声が聞こえる。

なのに何故私は答えられずにいる？

名前？

私の名前は何か？

何故か酷く頭が痛い。

それに、さっきから鳴っているこの音は、一体なんだ？

電子系統をサブラインに切り替え、再起動。

双方向通信回線再接続。

通信開始。

「無事ですか？」

目を覚ましたグラムが、開口一番に言う。

「状況を」

モニターにウィンドウ、録画ファイルNo. 664574189
45を再生。

状況を把握。

どうやら機体は今、瓦礫の下敷きになっているらしい。なるほど、あの爆発音はビルを爆破した音だったようだ。

「奴はどこに行った」

「北々西へ移動、D-45区画でロスト」

「追跡する」

「待つてください、これは128秒も前の映像です。もう近くには居ないでしょうし、反応もありません。それよりも脱出を。70秒前に上空からh1E型4機が降下。こちらに接近しています」

戦略3Dマップにアウトプットされる四つの光点は、各個に分散しながら一定距離を保ちつつ動いている。

「武装は？」

「M201・203mm30口径長液体装薬砲装備が一機、AR74・105mm50口径長自動砲装備が1機、XM580・90mm30口径長軽機関砲と多目的コンテナ装備が一機、同XM580装備が一機」

「この動きは軍じゃないな……」

「え？」

「恐らくはどこかの準軍事組織だ。IFFは？」

「発信無し」

「国際規定通波には？」

「応答ありません」

「これでこっちも攻撃して良い事になった」

機体再起動、セルフチェック。

機体フレームに破損箇所無し。

装甲も、脚部外側に軽度の破損が有る以外は問題無し。

重力制御起動。

瓦礫を薙ぎ、スラスターを全開で噴射。

瓦礫を吹き飛ばし、機体を上昇させて空へ。レーダーに不明機を

捕捉。距離500。

その瞬間、105mm砲装備機が発砲。

スラスターでダッシュ。射線を回避してビル影へ。

立て続けに、203mm砲装備機が発砲。

砲弾はビルの上半分を吹き飛ばすが、グラムは着弾よりも早くビル影から出て降下、左右に蛇行しながら火線をかい潜って、再び地上の建造物群の中へ姿を隠した。

「あの動き方……」

不明機の90mm装備の一機が、グラムの機動を見ながらそう呟いた。

見覚えのある機動。躊躇いのない、機械のような正確さ。

間違いなく、あれは……

「こちらヴァルター！ 全機後退！」

ヴァルターの言葉に、105mm装備機のワルメットがビルの中で砲のマガジンを交換しながら返事を返す。

「こちらワルメット！ どうした、あれは敵ではないのか？」

続けてもう一機の90mm装備機、ザウワーからも。

「ザウワー、なんだあれは、弾が当たらん！ リモート機なんかじゃないぞ！」

「ザウワーはワルメットと合流！ クルツプ、無事か？」

「こちらクルツプ、無事……」

突然、203mm装備機のクルツプからの通信が、衝撃音の後切れた。

「こちらワルメット、クルツプどうした！」

「こちらザウワー！ クルツプがやられ……うあ……」

立て続けにもう一機の90mm装備機のザウワーからの通信も。

「ザウワー！ 応答しろ！ ……俺達の他にも、HMAが……！？ それも単機だと？」

「ワルメット！ そっちに言ったぞ！」

ワルメット機の機体センサーがグラム機の機影を捉えた。

11時方向、距離200。

ロツクオン。

「そこだ！」

ワルメットはビル影から飛び出し、曲がり角から出てきたグラム機に向かって105mm砲を発砲。

しかし、グラム機は砲弾を回避し、接近してくる。

「この距離で回避……！？」

次の瞬間、ワルメット機に肉薄したグラム機が、105mm砲の砲身を120mm砲のストックで叩いて逸らし、脚を払いながら120mm砲のストックを機体の喉元に当てて突き倒す。

「ぐがはっ！」

地面にたたき付けられたワルメット機に、120mm砲の砲口を

向けるグラム。

それと同時に、急行してきたヴァルター機がグラム機に至近距離で90mmの砲口を向けるが、グラムは既に、単分子ナイフの切っ先をヴァルター機に向けていた。

しかし、その時。

「少佐、私よ！ トロイ・スクワッドの…！」

グラムは驚いていた。

無線に響いた、聞き覚えのある女の声。

戦友の声。

「クレア…？」

彼が機体を降着させ、コックピットから出たのは、不明機の一団が彼の目の前に集結してからだった。

不明機は一樣に都市迷彩を施されたE型で、部隊標はおるか識別標さえなかった。

高いビルに囲まれた街の一角。

傷の手当てと休息の為に、簡易キャンプを展開した彼ら不明機のパイロット達を凝視するグラムの手には、しっかりと拳銃が握られていた。

打ち倒された三人が向ける、怒りとも懐疑とも取れる眼差し。彼はそれを無視したまま、インカムの向こうにいるOscarに周囲の警戒を命じ、自身は携帯食料の固形バーのパッケージを開こうと

したその時、突然、箱のような物体が彼に向かって飛来した。

彼は箱状の物を左手でキャッチし、右手の拳銃を飛んで来た方向に向ける。

そこに立っていたのは、不明機パイロットの一人、知り合いの女、クレアだった。

「そんなのじゃもたないでしょ、グラム」

そう言って、彼の持つ箱を指差す彼女。

箱の正体は、固形バーよりも上等なレーション。合成タンパクのシーチキンサンドだ。

「お前達、ISAか？ なぜ安全保障局が噛んでくる」

「お答えしかねます。それより銃を下ろしてくれない？ 敵じゃないんだから」

「カートキャッチャーの付いた火砲を持ってよく言う」

「しょうがないでしょ。私達とあなたでは履いてる靴が違うんだから」

「軍は辞めた。今は個人的都合で動いている」

「まさか…あなたが軍を…？」

「レーションは有り難く頂く。だが、ここから先は手出し無用だ」

「ちよつと！ この先あなた一人でどうするつもり？ 昔みたいに協力しあえば、有利に…」

「協力など必要ない」

「え…？」

「これは私の闘いだ。お前達の力は借りん」

「…あなた…まだ自分を責めてるの？」

「何…？」

「少佐。私はフォックスが玉砕する姿を、この目で見たわ。貴方の部下は皆、最期まで勇敢に闘って散った。誰ひとり、何ら恐れる事なく。後代まで、何一つ恥じる事など無く…」

しばらくの沈黙のあと、グラムは銃口をゆっくりと下げて彼女に言った。

「なら…私も共に散ればよかった…」

背を向け、そう言って機体に乗り込むグラムを、彼女は無言のまま見つめ続けた。コックピットを閉め、機体を起動させても。

カメラアイを通じてモニターに送られる彼女の姿。

その眼差しは深く、長く。

機体のコンソールに表示される、機体の暖気完了を示すメッセージ。

暖気する機体の排熱に耐え兼ねてか、はたまた諦めか。クレアはようやく機体の傍から離れていく。

それを確認したグラムは、機体を立ち上げ、キャンプの反対方向へゆつくりと歩き始めた。

「Romeo、聞こえますか？」

突然、Oscarからの通信が入る。

「なんだ」

「僭越ながら具申致します。現在、Romeoは保有弾薬量の57%と右腕外部兵装を失いました。弾薬消費比率と機体ダメージから鑑みて、第一次接触戦闘と同程度の戦闘が生じた場合、生存出来る確率は32.65%しかありません」

「32%もあるじゃないか。それに、まだマイナスじゃない。これでタイだ」

「Romeo、Oscarはあなたに確実に帰ってきて頂きたい。考えを変えて下さい。彼等に協力するのではなく、彼等を一兵器として利用するんです」

Oscarの言葉の後、彼は機体を止めてから小さく呟いた。

「昔のように…か…」

「一体、奴は何者なんだ？」

キャンプに戻って来たクレアは、自分の機体に寄り掛かりながら、ウルメットの問いに静かな口調で答えた。

「彼はフォックスの元隊長よ」

クルップが驚いた表情で言い返す。

「馬鹿な！ “第二軍団第27独立特殊戦術部隊”^{ナインテールフォックス}は、ミレトス要塞戦で全機大破、全滅した筈……！」

「彼は……、グラム＝ミラーズ少佐はそこには居なかった。部隊から引き離されて司令部に……」

「なら……奴がああ“ヘルファイアー”か……！」

ザウワ一の一言を最後に、一同は皆、言葉を飲み込んだ。

重火器で武装したHMAに接近する事は、当たり前だが非常に難しい。

まして、火器を使用せずに沈黙させる事など、困難の極みだ。

だが彼はそれを、実際にやって遂げた。

それも、パイロットを殺さずに。

さすが、ヘルファイアー！。腕は鈍っていない。

やはり彼さえいれば。早く彼を追い掛けて……

私も共に散ればよかった……

突然、彼女の中でグラムの言葉が蘇る。

……昔はあんな事を言う人物ではなかった。

“生”に貪欲な人だった。ひたすらに生き、戦った、決意ある人。だが今の彼はまるで、標的を見失ったミサイルだ。

ふらふらとさ迷い、大量に内包した炸薬が、いつ起爆してもおかしくない、危険な状態。

だが、そんな状態の彼を、彼女はどうする事も出来なかった。
今はただ、普段の自分を演じるしか。

「さて、とんだ邪魔が入ったものだ！」

彼女はそう言いながら、しゃんと胸を張って立った。

「クルップ、ザウワー、いつまで飯を食っている！ ぐずぐずして
いられないぞ！ 総員搭乗！ ワルメット、ポイントマン！」

突然、まくし立てるようにほえる彼女に驚きながら、持っていた
シーチキンサンドを急いで口に押し込み、キャンプを片付けて機体
に乗り込み始めたクルップとザウワー。

その様子を見ながら、彼女は心の中で呟いた。

そうだ…仲間なら彼らがいるじゃないか…なのに私は、何故
“彼”にこんなにもこだわる？ たった一度… たった一度の過ち位
で…一体何を…

その時突然、機体のセンサーが熱源体の接近を感知。

クレアが振り返るより早く、ワルメットが105mm自動砲を、
感知した方向に向ける。

砲口の指し示す場所。

そこには、グラムの機体が立っていた。

「グラム…？」

クレアのインカムに彼の声が響く。

「よかつたら…弾薬を別けてくれないか？」

「不満らしいな」

電話の向こうに居る旧友のマリアにガルスがそう言うと、彼女は不機嫌そうに言い返した。

「私は、手を引いて欲しいと言ったはずよ？」

「やはり保障局か……」

「分かっていたのね？」

「さしずめ例の旧軍閥派議員の差し金……といった所だな。違つか？」

「全く、あなたのやり方には正直頭に来るわ。それほど戦争がしたければ、あなたが直接出向いてはいかが？ “凶鳥・フツケバイン”

”さん”

ガルスは、不敵な微笑みを受話器の向こうのマリアに返す。

「この歳で機体に乗るのは身体に堪える。それにこれからは、彼らの時代だ」

「それが彼を選んだ理由？ それで彼が傷付く事になっても……？」

「身体一つで覚えた唯一の芸だ。誰かが舞台を用意してやらなければな。それに奴は、嗅ぎ付けたのかもしれない」

「嗅ぎ付けたって、何を？」

「仲間の臭いを」

「カンパニア旧市街地北地区、0355時」

深い、纏わり付くような闇が街を深く閉ざし、全ての物を覆い尽くす。

その闇に紛れ、廃墟と一体化する鋼鉄の巨人達は、自らの気配を全て消し去り、静かにその時を待っていた。

10時間前：

「待ち伏せるだと？ 奴をおびき出すのか！？」

ワルメットの声を尻目に、グラムは腕を延ばして市街地のマップをなぞり、ある地点を指差した。

「北側を走っているハイウェイ。ここは奴をロストした場所とも近い。この周囲にIEDを敷設。機体は炉心を落としてカムフラージユ。105mmは基点から5km地点、203mmは基点から20km地点。90mmは有効射程ギリギリまで距離を取り、出た瞬間を狙う」

「誰が餌になるのよ？」

「私だ」

「あなたが？」

「奴は狩人だ。仕留め損ねた獲物は必ず追って来る筈。それにもうすぐ日が沈む。亡霊は夜動くもの。さて、異論が無ければ始めたいのだが？」

皆は顔を見合わせ、無言のまま機体に取り込み始めた。

一方クレアとグラムは、お互いを牽制するかのよう顔を見合わせたまま動かない。

「どうしたの？」

「お前こそ」

クレアが、ため息混じりの苦笑と共に言った。

「お先にどうぞ？ 上になるのが好きなんですよ？」

至る現在、グラムの機体はハイウェイの上にいる。

だが、グラムの機体は他の四機とは違い、自分の存在を隠していない。

いざ試合に臨む格闘技選手の如く、触れれば火傷してしまうかのような熱い闘志。機体から発せられる排熱。それは、彼自身の闘志にほかならない。

「Romeo、聞こえますか？」

「感度良好。Oscar、今までどこに行っていた」

「今回の事件について、過去の資料を調査していました。ハードコピー資料までの調査は不可能であり、確証は100%ではありませんが、“ファントム”および“亡霊”に関係すると思われる、17万6千件の資料の中、1万2千件にファントムの行動形跡を示す物が有りました。ファントムが初めて確認されたのが、西暦2164年の南北戦線。それから連続的に被害報告と目撃報告が2179年まで続いています。しかし逆に、2180年以降から、ファントムもしくはファントムと思われる集団の痕跡は寸断され、一つも上がっていません。ただ一つ、2180年に一例だけ、集団として目撃された最後の報告例があります。2180年3月14日、ここ、カンプニアです」

「つまりここは…」

「彼らの、最期の戦場である可能性があります」

Oscarがそう言った次の瞬間、衛星からの監視映像にファントムの姿を捉えた。

「前方に目標捕捉」

同時にワルメットからも通信。

「来たぞ、奴だ」

火器照準にファントムを捉え、ワルメットは思わず呟く。

「Wilkommen.Hier findest Du nur Dein Grab.(よく来たな、ここがお前の墓場だ)」

「来たぞ、奴だ」

ワルメットの声に応えるように、グラムは軽野砲のポンプをスライドさせ、薬室にHEAT-MP弾を押し込んだ。

「目標が視認可能距離に接近。」

赤外線カメラでファントムを確認。距離1000m。シグネチャでロック。

補整情報によって合成表示されるファントムは、暗闇の中にぼかりと浮かんで見えた。

「少佐：！」

「まだまだ。もつと引き付けろ」

焦るクレアを抑えながら、グラムは戦略マップのコンソールを叩いた。

仕掛けたIEDは2種類。

IEDの効果はそれぞれ異なり、有効範囲もまた異なる。

戦略マップにアウトプットされる複数の円、一つ目のIEDの有効範囲までは、自機前方500mの距離。

ファントムは毎時5kmというゆっくりとしたスピードで歩いて来ているから、あと数百mで有効範囲内に入る。

あと200m…150m…100m…

しかしファントムは、有効範囲の手前十数mの所で突然停止。

次の瞬間、ファントムは左手で抜いた拳銃をグラム機に向けた。

「気付かれたか…！」

高エネルギー反応、電磁ノイズ検出。
回避運動。

ファントムは拳銃を発砲。弾丸は機体頭上を擦過。
「クレア！」

考えるより早く、クレア達はトリガーを引いた。

ワルメットが、先陣を切って105mm自動砲を発砲。

ファントムはAPDSを回避。APDSはハイウェイの舗装と床版を貫通。

クレアとザウワーが連射する90mm高速徹甲弾がハイウェイを砕いて退路を塞ぎ、同時にグラムが、一つ目のIEDを起爆。

しかしファントムは、ハイウェイの橋桁下に設置された6基もの対装甲地雷の巨大な爆発を突き抜け、グラムへ迫る。

その時、二つ目のIED：203mmフレッシュエツト弾がハイウェイを挟む両側のビルで起爆した。

9000本のタンクステン製ダーツを両側からまともに浴び、一瞬動きを止めるファントム。

そこへ、クルップの放った203mm榴弾が着弾。

轟爆がハイウェイを吹き飛ばし、橋桁はファントムを巻き込んで崩れた。

「ワルメット、ザウワー！ 炉に火を入れる！ 奴の破壊を確認する」

「だめだ、来るな！」

突然、クレア達を制止するグラム。

「少佐？」

「こっちは…、ままと手の内を明かしてしまった…！」

「え…！？」

「おびき出されたのは…我々の方だ！」

グラムがそう言った次の瞬間、ファントムは数十tはあろうかという崩れた橋桁を悠然と持ち上げて瓦礫の中から再びその姿を現した。

その姿はもはや、神話の世界に登場する神から授けられた怪力を振るう神々の子…いや、冥界の怪物…。

「化け物が…!!」

クレアが90mmを連射。

クレアとザウワールの応射も加わり、砲弾が橋桁を削り取ってゆく。その様を見ながら、グラムは心の隅で思う。

部隊…

最期の戦場…

戦う理由…

そうか奴は…

「ザウワー、ランサー!!」

クレアに従い、ザウワーは多目的コンテナから取り出した肩上発射型対装甲ミサイルランチャーをファントムへ向け発射。

ファントムは、持ち上げた橋桁を投げ付けてミサイルを迎撃。

グラムが軽野砲を発砲。

ファントムはHEAT-MP弾を跳躍で回避。

着弾したHEAT-MP弾の爆炎を背に浴びながら、ブレードを抜いてグラムに肉迫。

単分子ナイフを抜いてブレードをガード。

火花を散らしながら、ブレードごとファントムを弾き、バックダッシュで距離をとってから、70mmロケット弾を連射。

ファントムは身を捻ってロケット弾を回避し、右手に持ったままのブレードをグラム機頭部に向かって投擲。

機体頭部を傾げてブレードを回避。ブレードは機体背後数百mの地面に突き刺さった。

Sマインを全弾発射。

ファントムは、炸裂するSマインの散弾をアーマーコートで防御。グラムはその隙に軽野砲にAPFSDSを装填。

ファントムが着地した瞬間を狙い照準。

二人の射線が交差したその時、ファントムが、右腕袖口からワイ

ヤーアンカーを射出した。

グラムは咄嗟に右サイドステップで回避。

しかしアンカーは、グラムを狙った訳ではなかった。

ワイヤーアンカーが、機体背後の地面に屹立するブレードに吸着牽引。

地面から抜けたブレードが、グラム機の左腕を掠める。

狙いはブレードか！

グラムは直感する。今までで一番の連載が来る、と。身構える。

ワイヤーに繋がれたブレードが、空気を切り裂く。

……来る！

初戟、引き寄せたブレードをワイヤーで振り回し、右薙ぎでの胸。しゃがみで回避。

二戟目、ワイヤーに左肘をかけ、右腕に巻き取り、軌道を横振りから縦振りに。振り下ろしの正面。

単分子ナイフで防御。

三戟目、弾かれたブレードの運動エネルギーをそのままに、右下から左上への逆袈裟。

しゃがみ状態からの下肢の“バネ”とスラスターを使い、バックダッシュで回避。

四戟目、ワイヤーに左肘をかけ、ブレードの軌道を変更。振り回して遠心力をかけ、脚を狙って左薙ぎの脛。

ジャンプで回避。

次には、連載の最後の一手が来る。

五戟目、ワイヤーでブレードを引き戻し、回し蹴りで蹴り飛ばしての刺突。

素早く、単分子ナイフでブレードを防御。電光の如き速力で打突されたブレードが、単分子ナイフの中腹に深々と突き刺さったその瞬間、グラムはブレードの突き刺さった単分子ナイフを振り回し、ワイヤーと繋がったファントムをハンマーのようにビルへたたき付

けた。

ビルが砕け、ファントムが階層の中にめり込む。

グラムはブレードの突き刺さった単分子ナイフを捨て、ファントムと繋がったワイヤーを左手に持ち、ワイヤーを持ったまま左手首を高速回転させてワイヤーを巻き取ってファントムをビルの中から自機の足元へ引きずり出すと、そのまま左手で地面へ押し付けた。

全領域帯接触通信機能ON。

通信開始。

「ファントム、聞こえるか？」

返答は無い。だが、シグナルはある。

「もう終わりにしよう。戦争は終わった。この戦闘は無意味だ」
そう言った次の瞬間、ファントムから初めての返信があった。

「無意味だと？ 元は貴様らの始めた事だろうが！」

一瞬だった。

凄まじい密度の、暴力の嵐。

しかし一挙動一動作全てに意味のある知略の応報。

その機体操縦術は、緻密にして熾烈。

それは彼女にとって媚薬だった。

見ているだけで全身の神経が昂奮し、体温が上がり、恍惚とした表情の奥では甘さを含んだかのような唾液が喉を流れる。

気付けば秘部が濡れていた。

いつもそうだった。

トロイとして彼と共に闘ってきたあの時から。

「ヴァルター!!!」

ワルメットの声で、クレアは我に帰る。

ワルメットは何度も呼んだらしいが、彼女はそれに気付いていなかった。

それ程、グラムを見ていた。

「全機、炉の再点火完了。戦闘出力」

「り、了解。これから少佐の援護に……」

彼女がワルメットに答えた瞬間、グラムとファントムの雌雄が決した。

グラム機の手にも押し潰されそうとしているファントム。

そうだ、これだ。この暴力性。

出来るならもう一度……

そう思った瞬間、彼女は機体を動かしていた。

90mmをファントムに向けて構え、彼の元へ向かう。

「少佐!!!」

しかし次の瞬間、彼女は凍り付いた。

おかしい。グラムが自分に砲口を向けている。

「え……?」

気付いたワルメットとザウワーが、グラム機へ砲口を向ける。

「ぶち殺すぞ、貴様!」

特にワルメットは、異常な程激昂している。

「少佐、一体どういう事……? どういうつもりよ!」

体温が一気に下がったクレアにグラムが言う。

「最初に手を出したのは、9月24日。中央視察隊を装った部隊を送り込み、ファントムの抹殺を試みるも失敗。しかしお前たちの最大の失敗は、それが外部の人間。ケステイウスIIガルスに漏れた事だ」

グラム以外全員の顔に、焦りの色が見えはじめた。

「偶然じゃない。なにかが動いている。まだ間に合う。手を引け」
グラムがそう言った時。

「だから？」

「…なんだと？」

「あなたも一緒でしょう？ ファントムを殺しに来た。私もあなたも、目的は一緒の筈よ」

グラムが、クレアに答える。

「違うな。私の目的はカンパニアの“武装解除”。それに言った筈だ、お前は。『履いている靴が違う』とな」

街が、しん……と静まる。

一陣の風が吹き抜け、雲が切れ、朝日が昇る。

夜が明ける。長かった夜が。

その時、グラム機に押さえられていたファントムが、自身の右腕に内蔵された超振動破砕装置を起動させた。

ファントムは、橋桁に穴を開けて拘束を解く。

同時に、ワルメット達のトリガーに架かる指に力が入る。

しかしそれよりも速く、グラムは跳躍で砲弾を回避する。

クレア達が散開。

クレアが叫ぶ。

「ヴァルター！ ファントムを！」

ファントムを追うヴァルター。

「下がれ、クレア！」

ワルメットはそう言いながら、上空のグラム機へ発砲。砲弾がグラム機を掠める。

グラムが着地。

「野郎！」

「だめ、ワルメット！」

クレアの制止を無視してワルメットがグラム機へ向かって跳ぶ。距離500。

ワルメットが105mmを発砲。グラムはビルの壁際へ寄って回

避。

「馬鹿め！」

しめた、と言わんばかりに、ワルメットは砲を連射した。逃げ場の無い壁際。避けられる道理は……有った。

「何！？」

跳躍したグラム機が、ビルの壁面を蹴ってさらに跳躍。綺麗な曲線を描きながら側転。

グラムは空中で逆さの状態から70mmロケット弾をワルメットに連射。

爆炎がワルメットの視界を奪う。

「ワルメット、上！！」

クレアの声に導かれ、上空を見上げたワルメットだったが、グラム機は既に直上にいた。

グラム機の踏み付け攻撃がクリーンヒットし、ワルメット機がよろける。

立て続けに、右ハイキックがヒット。右足が地面に付く前に左ハイキック。左足が地面に付いた瞬間、腹への右膝蹴り。

四連撃を喰らい、弾かれたワルメット機コックピットに、グラムは120mmAPFSDSを容赦無く叩き込んだ。

120mm劣化ウランAPFSDS弾の焼夷効果によって、炎を上げながら力無く崩れるワルメット機を、クレアは眼に焼き付けた。戦中、幾度も眼にしてきた見慣れた光景。それなのに、彼女の心は震えていた。

ヘルファイヤーと喩えられる男、グラム＝ミラーズ。その力は、常に敵へ向けられていた。しかし今はどうだ？ ワルメットは、ものの一分足らずで殺された。自分は今、敵と味方、どっちだ？

「ヴァルター！ 聞こえているのか、ヴァルター！！」

無線から響くクルツプの声で、クレアは我に返った。

一体どれだけ突っ立っていた？ 今はもう分からない。

思い出した様に90mmを構え直し、砲口を向ける。無論グラムの機体に。だがグラムは動じない。

指が震える。同時に、砲口も目標に定まらない。

「撃て！」というクルツプの声。彼女は、トリガーに指を掛けるが、指が、石の様に固い。

再び、「撃て！」というクルツプの声。

撃ちたくない……。再びクルツプの声。

「……もう遅い。今ザウワーが死んだ」

仲間が、またひとり死んだ。ファントムを追ったザウアーが。彼女は奥歯を噛み締め、叫びながらトリガーを引いた。90mmが火を噴き、砲弾が吐き出される。

しばらくの射撃の後、ボルトがロツク。90mmの弾が切れ、硝煙が立ち込める。

硝煙の中に立つ、グラムの機体。

彼女の撃った90mm弾は、一つもグラム機に当たらなかった。

否、彼女は当てなかった。当てる事が出来なかった。

「どうして……」

彼女はそよ風のような弱さで囁く。

「どうしてこんな事になってしまったの……？」

砲口を下ろし、90mmを足元に捨てる。

「生きる為なら何でもしてきた……。同胞も撃って生きてきた。でもあなたは、私に戦う意味を教えてください……。あなたに会っていなかったら今の私は無かった。だから……。あなたにだけは、あなたにだけは銃を向けたくなかった……。！」

二人の間を沈黙が隔てる。乾いた風が吹き抜け、砂塵が舞い上がる。

「……闘う意味など無い。殺される前に殺す。ただそれだけだ」
グラムが、静かに言った。

「そう……、全部私の勘違い……か……」
彼女はそう言って、単分子ナイフを抜く。

「終わりにしましょう。グラム……」
彼女の声を聞いたクルップが、203mm対HMA中射程誘導砲弾の発射準備に入る。

クレア機が地面を蹴る。ナイフを構え、グラムへ向かってゆく。
これが彼女の選択だった。

民族紛争の中、民族浄化という蛮行によって“彼女達”は産まれた。敵に犯されて出来た子と蔑まれながら、それでも彼女達、いや彼女は生きた。闘いが、彼女を支えた。闘いしか無かった。彼女達が生きるには、闘うしか無かったのだ。たとえ同胞を撃とうとも、仲間を撃とうとも。

いま、彼女の想いは、一本のナイフの切っ先に込められている。それは、彼女自身の、闘いのファイナーレに他ならない。

刃先が、グラムに迫る。左手でナイフを捌き、腕を掴む。そして

……

グラム機の右肘が、クレア機の腹にめり込む。コックピットは半壊し、クレアは下腹部から下を圧壊したコックピットによって潰されていた。

それでもクレアは、まだ、眠らない。

グラム機をしっかりと抱き、機体関節をロックする。機体重量を掛け、グラムの機体を地面に押し倒す。

その衝撃で、彼女の胴体は下腹部からちぎれ、コックピット前部に投げ出される。だが、彼女は幸せだった。たとえ機体の装甲越しでも、唯一、愛した男の胸の上にあったのだから。彼を守って、死ぬのだから。

「クレア……」

グラムは抵抗しなかった。これが、この瞬間を見守る事こそが、自分の勤めだと分かっていたからだ。

「やっと終われる。私の、戦争……」

クレアがそう言った瞬間、クルップの放った対HMA中射程誘導砲弾が、グラム機を抱くクレア機の背中に落ちた。

クレア機の四肢が、対装甲榴弾の爆風と共に四方へ飛び散る。

爆炎と砂埃が晴れる。だがそこに、グラム機の姿は無い。グラムの機体はすでに、クルップの元へ突き進んでいた。

奴が来る……！

クルップが、全身に猛烈な殺気を感じとる。

奴が来る……！！

その殺気から逃げようと、急いで機体を立たせる。

まずは脚部ダンパーの格納！ それから脚部関節ロックを解除して……早くしろ！ 早くしろ！

彼が、コンソールを操作しながら機体を再び移動できる形に持つて行くとしていた正にその瞬間。機体の敵接近警告音が、コックピット内に無機質に響いた。

グラム機が、目の前にいた。

「ひっ、ひいひい……！」

クルップは、まるで豚のような悲鳴を上げながら、右腕をグラム機に向かって振る。

グラムは機体の左脚を蹴り上げ、ハイキックの体勢から、クルップ機の腕を膝で挟み、腕をロック。

そのままグラムは、右脚だけで機体を跳躍させ、クルップ機の頭部へ膝蹴り。よろめくクルップ機の右腕を、挟んだ左脚で引っ張り、投げる。

そしてグラムは、機体を空中で一回転させ、その回転エネルギーを右脚踵に乗せて、クルップ機のコックピットに踵落とし。

クルップ機のコックピットは踵落としによって完全に潰れ、機体

はまるで、でく人形のように地面にたたき付けられた。

地面に激突して屑鉄となったクルツプ機をその場に残し、去ってゆくグラム。行き先は市街地メインストリート。

彼には、まだやるべき事が残っている。真の任務、カンパニア地区の武装解除。

ファントムを、倒さなければならない。

市街地メインストリート。

そこは、グラムとファントムが、最初に遭遇し、戦闘した場所のすぐ近くだった。

そのストリートは、両側を高い建物で囲まれていて、道幅は機動装甲が手足を振り回すには十分過ぎるほど広い。対決には最適の場所だ。

グラムは、機体の足で砂を踏み締め、ストリートの真ん中に立ち止まる。

吹き荒れる砂埃。日が登り、太陽が地面を照らしたせいで地面の温度が上がり、発生した上昇気流によって砂は舞い上がり、視界は2 mも無い。

「待っていたぞ」

突然無線に響く、ファントムの声。

まるで予定していたかのように風が止み、砂埃が徐々に晴れていく。

目線を上げる。100 m程先に見える、巨躯の人影。太陽の光の下、照らし出されたファントムは、最早亡霊などではなく、闘いに

望むただ一人の兵士だ。

「決着を着けよう」

グラムはそう言って、機体の両腕を構える。

小細工は効かない。全力の打撃戦。手を抜けば、こちらが負ける。一瞬の後、双方が走り出す。砂塵を舞い上げながら、お互いに向かつて。

ファントムが跳ぶ。グラムは空中のファントムへ右正拳突き。一方ファントムは体を一回転させ、右脚を機体拳へ思いつ切り蹴り込む。

衝突。凄まじい衝撃音と共にグラムの拳は弾き返され、同様に弾かれたファントムは、地面を両足で刳りながら止まる。

と、同時に、グラムは機体を跳躍。空中で脚を振り上げ、ファントムへ踵落とし。

しかしファントムは、後方へ跳ね、寸で回避。踵で地面が陥没する。

グラムは立て続けに、地面を滑るような低さでローキック。そのローキックを後方宙返りで回避したファントムは、着地した場所の地面に右手を刺し入れ、何かを掴んだ。

そして、一気に引つ張り出し、振り上げる。それは、直径1m長さ2m程の液体燃料タンクだった。

地面を蹴り、タンクを前に構えて突撃するファントム。

グラムは、衝突の寸前でタンクを蹴り上げ、ファントムごと宙に飛ばす。

しかしそれは、ファントムの狙い通りだった。

ファントムは、タンク上部に右腕超振動破碎装置を押し当てる。

そして振動波を叩き込み、タンクを破裂させる。

破裂したタンクから漏れ出たのは、可燃性液体にハイポリマー樹脂とマグネシウムの粉末を混ぜた、即席の液体爆薬だ。

液体爆薬は、空中に均密度ではらまかれた。その形はすり鉢状で、その様子は正に

次の瞬間、グラムが機体をバツクダツシュさせると同時に、ファントムは左手に持った手榴弾によって爆薬に火を点けた。液体爆薬が爆発する。

目の前で巨大な火球が咲き、巨大な爆圧が周囲の空気を尽く一瞬で押し潰す。

その様は正に、燃料気化爆弾だ。

「奴め、手製にしては手をかけすぎだ！」

爆圧を避け、空中へ待避したグラム。だが、ファントムの姿は既に無い。

背後に気配。素早く右足を背後に蹴り上げる。

バツクキツクを喰らい、ファントムが吹き飛ぶ。だが、手応えは薄い。

吹き飛んだファントムは、ビルの中階層にめり込んだ。

その衝撃でビルが揺れ、コンクリートと鉄筋がつぶてとなって飛び散る。

空中から着地したグラムは、すかさず、右腕ロケット弾の残弾全てを撃ち込んだ。

残弾の無くなった70mm連装ロケットランチャが自動でパージされ、弾頭の高性能榴弾の爆発がビルをさらに打ち砕く。

それでもファントムは、倒壊するビルの破片と砂塵を突き抜け、グラムの機体に殴り掛かる。

それに応え、グラムも右正拳突き。

だが、ファントムは身を翻し、拳を回避。空を切る右腕を踏み台にして跳び、機体の右肩に取り付く。

ファントムが右腕を振り上げる。右手の、超振動破碎装置を打ち込む気だ。

次の瞬間グラムは、側のビルに右肩でタツクル。ファントムの取り付いた右肩をビルにめり込ませた。

その時、機体センサーが異常を検知した。ファントムから電磁ノイズ検出、高エネルギー反応。

グラムは咄嗟に機体を引き、距離を取る。しかし同時に、機体の右肩が砕けた。いや、正確には、何か超高速の質量物が右肩装甲を貫いた。

ビルにめり込んだファントム。だが奴は、左手に巨大な拳銃を握っている。

そうだ、あの時、初めの戦闘でも使われた拳銃。超小型のレールガン。

機動装甲のアーマーを貫いているのだから、その活力は12メガジュール以上だ。

だが、そのような虎の子を持ちながら、何故もつと使わない……？理由は二つ予想出来る。

一つは、発射そのものに大きな時間が必要である。そして二つ目は、火器そのものに既に残弾が少なくなっている。

だが、電磁ノイズを検出してから発射までのタイムは数秒だから、一つ目は除外できる。そうすると、答えは明白だ。

ファントムが、左手に拳銃を持ったまま、めり込んだビルの壁面から抜け出し、地面に立つ。

その様は今までとは打って変わり、非常に静かだ。だが同時にその姿は、魂の抜けた人形の様に見えた。

ふと、グラムは感じる。奴と自分は似た者同士だと。過去に捕われた、浮世の亡霊だと。

ファントムが、左手の拳銃を両手で構える。だが、引き金には指を掛けない。

待っているのだ。自らが認めた戦士、グラム「ミラーズを。もう、機甲体術者も、ファントムも関係なかった。

「お互い……、因果な物だな」

グラムはそう言うと、機体の左手で右腕を掴み、肩の付け根から先をパージ。パージした右腕を、こん棒の様に構える。

ファントムが、引き金に指を掛ける。

電磁加速飛翔体射出装置、出力最大。

リミッター解除。

最終ロック・リリース。

その瞬間、都市の全てが、天か、地が、まるで固唾を呑むように、全ての音が掻き消えた。

GRAMの機体が地面を蹴る。同時に、ファントムが引き金を引く。ファントムの両足が発射の反動で地面にめり込み、伝わった衝撃で砂塵が舞う。

撃ち出された徹甲弾。

刹那、二人の間の時間は、まるで引き延ばされたフィルムの様にスローで流れる。

徹甲弾がGRAMに迫る。左腕で“こん棒”を薙ぎ、徹甲弾を受ける。徹甲弾は右腕装甲を容易に貫通。こん棒代わりの右腕を徹甲弾が貫通し、頭部センサーアイを撃ち抜く。

モニター、ブラックアウト。だが、彼にはもう必要無い。降り抜いた腕が、ファントムの胴体を捉え、吹き飛ばした。

システム再起動。 視覚調整、 視覚回復。

システムエラー、 躯体各所に損傷多数。

目が覚める。だが、自分は、まだ生きている。

目を覚ましたファントムが、半分ビルにめり込んだ形で地面に座り込んでいる。

自分は負けたのだ。

自分は、グラム機の右腕に薙ぎ倒され、吹き飛び、ビルに衝突して止まった。本来ならとっくに機能を停止しているはず。なのに……。

ファントムは、ゆっくりと頭を上げ、そこに立つグラム機を見上げた。

「なぜとどめを刺さない……」

そう問うファントムにグラムは答える。

「私の目的は、この都市の武装解除だ。あの連中とは違う」

「散々殺しておいでよく言う」

「生きる為だ。そして、仲間の為に」

グラムはそう言っつて、残った左手でファントムを掴み上げた。

「お前を連行する。絶対に死なせない。……お前は、ここで死んだ仲間を護っていたんだな？」

ファントムは言葉を返さない。だが、グラムには分かっていた。ファントム達は、ここで死んだのだと。この都市に立て籠もり、最期まで戦った。弾薬も尽き、補給も無しに。彼を残し、死んでゆく仲間達。彼はその部品を使って、生きてきた。

「死なせない。お前は、死ぬべきじゃない」

そう言うグラムに、ファントムは小さく言った。

「……随分とぬるい、地獄の炎だな……」

その時だった。

「お取り混み中失礼します」

突然、Oscarからの通信。

「Oscar、一体今まで……」

「お叱りは後。それよりも30分前に、ファルコナー空軍基地から重爆撃機6機が離陸、こちらに向かっています。脱出を急がれた方がよろしいかと」

一瞬、グラムは不敵に微笑んだ。その表情は、どこかこの状況を楽しんでいる様に見えた。

「では、話は早い。街を出て行こう。急いでな」

Oscarは、GRAMの聞こえない程小さい眩きを読み取った。

生きよう。

GRAMは機体のスラスタをチャージする。

レーダーに機影。重爆撃機6機。爆撃機は既に爆撃工程に入っている。

次の瞬間、都市の外れで巨大な火柱が上がった。爆撃が開始されたのだ。

「行こう」

何より、自分に言い聞かす。

推力を解放するスラスタ。機体は、爆撃の爆炎散る、砕けゆく都市の中へ消えて行った。

18時間後

「嫌です」

GRAMはあの時と同じように再びガルスに言った。

「命令だ。今すぐ火星に行け」

「なぜ火星などに？」

ガルスが、GRAMの目の前に資料を置いた。総ページが数千もあるような分厚い資料。

「オペレーション・ツールハンマー……？」

「このページを見てみる」

ガルスが、手を伸ばして資料をめくる。

GRAMの表情が凍りついた。

「ヴァリアント……」

「奴らが再び動き出した。地球に来る」

グラムは眉間を指で押さえて、低くうなる様に息を吐く。

「目的は？」

「不明だ。だからこそ恐ろしい」

「なぜ私なのです？ 優秀な人材なら今の統合体なら五万といえるはずです」

「その優秀な人材ならほとんどが既に火星へ向かっている。後はお前だけだ」

また、あの幻が見えた。

笑顔の女性と、子供……？

「仮に私が拒否したら？」

「強制的にでも、お前を火星に送る。だが、お前は必ず火星に行く」

「大した自信ですね」

「当然だ。お前は、私の部下だからな」

数日後、彼は火星にいた。

そして、彼女と出会った。

彼女はこう言った。

「あなたが私のユーザーですか？」

「大佐……！！！」

電話から響いたエステルの中で、彼は目を覚ました。

暗い車内。路肩の街灯の光が差し込み、ここが、現実の世界である事を実感する。時計を見れば、ここに来てから10分も経っていなかった。彼はこのたった10分の間に、深く眠りこんでしまったのだ。

その間に、随分懐かしい夢を見た。それもやはり、あの言葉のせいだろうか。

「大佐」

「なんだ」

「お帰りが遅いので、すこし心配しました。明日は、ティックゥスキンド大尉と、研修に出た人員が本部に帰還します。強制はしませんが、遅くなるのはお勧めできませんよ？」

冷たい、抑揚の無い口調のエステルに、グラムは答えた。

「了解。Romeo、帰還する」

「え……？」

不思議そうな、エステルの返事。グラムは苦笑い。

「すまん、なんでも」

グラムがそう言いかけたその時、

「こちらOscar、了解。……待ってますよ」

そう言っただけで切れる電話。

グラムは一瞬、目をぱちぱちとさせながら固まった。だがすぐに、彼は嬉しそうに小さく微笑んだ。

車をパーキングから出す。いつもより軽快にシフトレバーを操作する彼。

歩いてきた道筋は暗くとも、行き先は明るい。

グラムはそう感じながら、車を走らせた。

Chapter 4

石の様に重い身体を起こしたレイラは、ずきずきと痛む頭を指で押しながら髪をかき上げた。

見覚えの無い部屋。周囲を見回すとそこは小綺麗な内装の寝室で、天井にはシャンデリア。一見し、すぐにホテルの一室だと気付く。

なぜこんな所に……

疑問に思いながら、彼女は窓を見る。夜明け前、外は未だ薄暗く、朝霧が立ち込めている。

レイラは頭を押さえながら、記憶の糸を辿った。何せ、自分がいつ、どのようにここに来たかも解らなかったからだ。エレナと、酒を飲んでいた所までは覚えている。だが、そこから先の記憶が、どうしても思い出せない。頭痛と倦怠感から、自分が今、二日酔い中である事は明白だが、それ程まで飲んだ記憶も無い。

ふと彼女は、自分が裸である事に気付いた。下着は一枚も着けていない。しかも胸元周りには、幾つもの痣のようなキスマーク。そして隣には、人であろう布団の膨らみ。

彼女は目を疑った。

まさか自分は、酔ったまま、誰か知らない人物と一夜を共にしてしまったのではないか。しかし、最後に覚えているのはエレナだけだ。まさかエレナではないはずだ。だとすると、その後誰かと……？ そんな疑念が彼女の中を駆け抜けようとしたその時、隣で眠る人物が、レイラの方へ寝返りを打った。

そして彼女は、もう一度目を疑った。

「嘘……」

ブロンドヘアが波打ち、豊かな胸が、重たそうに揺れる。その顔は満足そうな、安らかな寝顔。

隣に寝ていた人物。

それは自分と同じく、裸のエレナだったのだ。

バイクに跨がり、朝霧を切り裂きながら、コンクリート舗装の道を走る。

路面からグリップに伝わる、ゴトゴトとした振動。旧式のマイクロターリエンジンから、尻に伝わる振動。そのすべてが、彼女にとっては心地好かった。

空気を切り裂く、スポーツバイクのカウル。ピッタリとしたブルーのライダースーツに身を包んだ彼女は、今から向かおうとしている場所について想いを巡らしていた。

別れた仲間達は元気だろうか。新しい仲間は何処に居るだろうか。新しい出来事や話。

聞きたい事がたくさん有る。そんな気持ちだが、彼女をより急がせていた。

スロットルをより一層開く。回転数がレッドゾーンへ上がり、空気がより早く流れる。

走る道の右側にはフェンス。高速で流れていくフェンスの向こうは、サンヘドリンのHMA格納庫と滑走路。

彼女は、哨戒任務の為に朝の空へ飛び立っていく空軍機と並走するかのように、さらにバイクを飛ばした。

一方その頃、ビンセントは、ハリーとサブの二人を残したまま格納庫を後にしていた。

格納庫に残ったのは、床に散らかるブラックコーヒーの缶と眠気覚ましのミントガムの包み紙。そして、パイプ椅子に座ったまま虚空を見つめるサブと、尻を突き出した体勢で地面に突っ伏し、そのまま夢の世界に旅立ったハリー。

ビンセントはと言うと、彼は虚ろな目をしたまま煙草をくわえ、自分の車の中にいた。

夜勤明け。ビンセントは後悔していた。

夜通し、妄想最萌えコンテストなどやらなければよかったと。

それは正に、泥沼の戦争であった。

旧世紀の大国間が危惧していた全面戦争のような、不毛な核の撃ち合い。その後に残ったのは、ただの焼け野原に他ならない。誰が一番萌えるか結論を出すなど、人類にはまだ早過ぎたのだ。

「兵どもが……夢のあと……」

ビンセントはそう呟き、車のキーをひねった。

ぼやける頭を左右に振り、車を軍施設の車庫から出し、ゲートに向かわせる。途中何度も瞼が落ちそうになったが、そこはビンセント、気力で持たせる。

とにかく家に向かうのだ。そうすれば、フカフカのベッドでぐっすり眠れる。夜勤手当も付くし、何より、今はうるさいアイツもない。寝た後はビールで一杯やりながら……。

頭の中でそんな思考を廻らせながら、ビンセントはアクセルを踏み込む。

間もなくゲートに着く。スピードを落とし、ゲートの無人セキユリティーをくぐる。すると彼は、何も考えずに車を公道に出した。無論、左右確認を怠ってた。

その瞬間だった。

突然左側から、バイクが突っ込んできた。

そしてバイクは、ビンセントの車に激突。

その瞬間をビンセントは、パイロット故の優れた動態視力で捉えていた。

衝突の瞬間、車のボンネットが衝撃で波打ち、フロントの左タイヤハウスが潰れた。潰れた瞬間、バイクのフロントフォークが折れ、リアタイヤが跳ね上がり、乗っていた人間が放物線を描いて宙を舞った。

それはまるで、人形のように……。

スローモーションの世界が終り、バイクのライダーが地面にたたき付けられる。その衝撃は凄まじく大きい。ライダーは、ピクリとも動かない。

ビンセントは、まるで自分がぶつかっただかのように放心状態だった。戦場で正気を保つ訓練を受けていなければ、パニックに陥っていただろう。

彼は恐る恐る車を降り、周囲を見渡す。

周りには、バイクのフロントライトと車のライトの破片が散乱していて、事故の衝撃を物語っている。

ライダーに歩み寄る。ライダーは、ブルーのライダースーツを着た、細身の女だった。

「おい……！ 大丈夫か!？」

ビンセントは声を掛けるが、ライダーはやはり無反応。揺らそうと手を伸ばすが、すぐに引っ込める。この場合、不用意に触れるのは得策とは言えない。もし相手が重傷だとしたら……。

突然、ビンセントは車に取って返す。そして、通信端末を手に取り、電話をかけるはじめた。

ダイヤルを押す。救急に電話する……と思いきや、彼はある人物に電話を掛けはじめた。

その相手は……

「あ、もしもしもしもし、ミラーズさん？ 俺、俺だけ……。あのさ、えつとね、あの、その……助けて」

TO BE CONTINUED . . .

ACT20 土曜の夜と日曜の朝・後編（後書き）

書いてて思うことが、どこからがR指定に入るのかなあと言つ疑問。残酷表現や性的表現は非常にボーダーがシビアだと思つんですよ。そこらへん、皆さんはどうしてます？ よろしかったら、ご意見ください。

あと、一言でいいので、観てくださいませ……（涙）

ACT21 Hunting High and Low (前書き)

本部で、ビンセントが路上でバイクを撥ねる。その被害者は、研修から帰ってきた技術者集団の一人だった。技術者達は、新しく持ち帰った技術により、F型の装備と整備のあたりを探すが……

Chapter 1

サンヘッドリン対ヴァリアンタス軍・第一特殊機動戦闘団第一次準備部隊シェーファーフロント隊長であるグラム＝ミラーズ大佐は悩むべき問題を抱えていた。

一つはヴァリアントの事。

前線で常にヴァリアントと接するうち、彼のヴァリアントに対する認識に変化が生じていた。“彼ら”は、無作為な破壊をもたらす無制御な大量破壊兵器ではない。そして、何等かの目的意識が有ると。

リベカの、ネクロフィリアの腹を刳ったあの戦い以来、ヴァリアント達の活動は成りを潜めている。

軍備の増強を行っているか、はたまた、我々の隙を狙っているのか。そのどちらかだと分析するのが自然だが、グラムは違った。

グラムは、ヴァリアント、強いてはリベカが、悩んでいる様に感じていた。こんな事を誰かに言えば、『悩むのは人間だけだ』と一蹴されるのがオチだが、恐らく、情報軍団は違うだろうと、グラムは思う。

情報軍は、独自にヴァリアントの“心理分析”を進めている。それは、ヴァリアンタスを一個の精神体と捉え、その行動原理を理解し、いずれは行動を予測する、と言う物である。

ヴァリアンタスを精神体と捉えるのは、あながち荒唐無稽ではないとグラムは考えている。

彼らは、人と話す。話す限り、こちらにも知る余地が有る。

知るには、ふたたびデウス、そしてリベカに出て来て貰わなければ為らない。そして、戦わなければならぬ。

出て来て貰い、銃火を交える。

まるで許されない恋人同士の逢い引きの様だが、ヴァリアントは

恋人ではない。敵である。

しかし、この感情は何だろうか。再び会い、再び戦いたいという感情。

闘争心ではない。

戦いでしか相見える事の出来ない相手なら、戦いこそがお互いの間を繋ぐ糸であり、言語なのだ。

だがこの感情は、決して言葉に出来ない。言葉にしては為らないのだ。

言葉にすれば、サンヘドリンという対ヴァリアンタスシステムそのものが崩壊しかねない。この感情には、それ程の意味を持つのだ。そして、戦う為には武器が要る。

対ヴァリアンタス戦闘組織であるサンヘドリンは、高度にシステム化された機甲軍であり、それを支えるのは他でも無くHMA、人型機動装甲だ。

しかし最近、陸海空でC型ベース機の被害が増えている。尤も、数的に最も多く存在するC型は比率的にも被撃墜が高くなるが、近年の被害増加率は当初想定されていたキルレートを大きく下回っている。

その対策のために開発されたのがF型であり、そして、h3だ。

F型は、C型のレーザーウルフをベースに、内部構造と外部兵装システム、つまり統合兵装ユニットに徹底的な改造と改良を加えた物だ。装備の大型化に伴い、質量と容積は増大したが、出力と機動力はC型とは比べものにならないほど高い。

人型機動装甲は人型であるが以上、人体と同じ駆動及び構造的弱点がある。そのために機械的駆動速度や戦闘機動に上限がある。しかし、高度な重力制御によって慣性などの物理法則を無視できれば、それらの弱点を解消できる。

h3はまさに、それをコンセプトにして開発された機体だ。

簡易グラビティドライバーを有し、新型炉心から供給される莫大なエネルギーと重力子は、機体に強大な機動力と戦闘能力を与える。

簡易グラビティドライバーによる対外的重力制御によって、瞬時に加速することも可能であり、通常火器に対する絶対的な防御力も有している。

新型機トライアルの際にその試験機を実際に見、搭乗したグラムは、その時の感覚を忘れてはいない。

全く凄まじい機動だったと、グラムは思い返す。

あの時h3は、グラムの意思にこたえて徹底的にヴァリアントを叩いた。

その際、セルベトウス博士は、h3に新たな戦闘プログラムを組み込むため、自らを犠牲にして、作業を進めた。彼の遺体は、見つからなかったという。

h3は、博士が我々の為に遺した、彼自身の意思であり、力でもある。

だが、h3の量産に、議会は難色を示している。

反対派の筆頭はマリア・エヴァ議員。反対の理由は、予算の問題とされているが、実際、真の理由は謎のままだ。

h3を早急に量産しなければ、F型との共同作戦において、大きな遅れをとることになり、作戦遂行そのものにも支障が出ると言うのに……。

グラムは頭を抱えていた。ヴァリアントの事、新型機の事。そして今、目の前にも、ややこしい問題が立ち塞がっていた。

「飲むか？」

グラムは自分のオフィスに備え付けられたコーヒーディスプレイから一杯のコーヒーを入れながら、静かにそうつぶやいた。

ソファに腰掛け、グラムはコーヒーを一口。その隣には、顔色の悪いビンセントが居た。

ビンセントから連絡を受け、保安部交通課から身元引き受け人として彼を引き受けたグラムは、迷う事なくビンセントを自分のオフィスへ連れ込んだ。グラムはビンセントを同等の仲間だと見ているが、サンヘドリンのオフィスなら、今は軍人として上位の立場に立てる様な気がしたからだ。

「そんな気分ではないか……。全く、朝っぱらから電話で叩き起こされるとは」

失笑気味にコーヒーを啜るグラムを横目に、ビンセントは無言のまま。

いつものビンセントなら、それはそれは大変でしたね、とか、ご愁傷様でしたね、とか、そう言う他人事の様な返事をする筈なのだが、今のビンセントはうんともすんとも言わない。グラムは、その事も気に入らなかった。

頭をうなだれるビンセント。

「言葉も無いか、情けない……。私はもう少し有能な部下が欲しかったよ。朝遅刻をせず、報告書をしっかり書いて無駄口を叩かない……。まあ、撃墜数はまあまあだが……。とにかくだな、おい、聞いているのか」

グラムは突然言葉尻を切り上げ、そして絶句した。ビンセントは、黙り込んでいたのではなく、眠り込んでいたのだ。

「このツ！ 馬鹿！」

ビンセントの頭を、グラムは思いつ切りひっぱたいた。ビンセントはバネが撥ねるように身を起こし、何があったのか状況が掴めないまま目を丸くして自分の頭を撫でる。

「なにすんだよ！」

抗議するビンセント。しかし。

「なにすんだよじゃない！ 人の気も知らないでお前は！」
グラムの怒りも尤もだった。

夜の夜中に電話でたたき起こされた彼は、ビンセントの事故の話
を聞いた途端に慌てて部屋を飛び出した。後々考えれば、自分で電
話してくる程なのだから大事は無かったと分かるのだが、グラムは
そんな事にも気が回らない程慌てたのだ。

「もうしらん。お前の事などもうしらん。お前など交通裁判所にて
もどこにでも行けばいい」

そう言い放ち、腕を組んでそっぽを向くグラム。

「しかしだねえ……」

「しかしじゃない。まったく居眠り運転で人を撥ねるだなんて」

「そうは言いましてもですねえ大佐さんよ、今当直は俺とレイズの
二人しかいないんだぜ？ タスクフォースとして俺達が常時待機す
るにしても、二人だけで12時間勤務は身が持たないぜ」

溜息をはき、ビンセントの言葉にも一理あるとグラムは思った。

シエーファーは、常設のタスクフォースであり、襲撃があれば真
っ先に現場へ向かう部隊の一つである。シエーファーがタスクフォ
ースである以上、メンバーの選抜は隊長であるグラムが行うのだが、
最近ではグラムの目に留まるパイロットはいない。いるとすれば……
「戦争は数だけ、グラム。俺達あ、どんな“戦闘”でも勝ってみ
せら。でも戦争となっちゃ話は別だぜ」

「フムン……」

グラムはコクリと頷くが……

「……ちよつとまで、何話をすり替えているんだお前は」

「あ、ばれた？」

呆れ顔のグラム

「……まったくお前と言う奴は。被害者がイクサミコだったからよ
かったものの……」

「イクサミコ？」

「言っていないかったな。中央の特技研に研修に出ていた技術者達が

今日帰ってくる。その一人なんだよ、彼女は。名前はイズナ。第一世代型で試験機乗務。もしも何か有っていたら、お前技術部から干されていたぞ」

「はああ、俺ってやっぱり運がいい」

「まったくお前は全然……」

突然、ノックの音がして、グラムはビンセントに言いかけた“懲りていない”の言葉を飲み込んだ。

グラムが「入れ」と言うと、意外な人物が入ってきた。

ガルス司令だ。グラムはコップを置いて立ち上がり敬礼。ビンセントも立ち上がり、少しばかりかぞんざいに敬礼。

自分の座っていたソファアをすすめると、ガルスは手の平を出して辞退。ビンセントを一瞥する。

「おっと、俺はこの辺で……」

部屋を出ようとするビンセント。しかし、意外にも、ガルスが彼を呼び止めた。

「キングストン大尉、君も居たまえ」

鋭いガルスの目。ビンセントの背中に冷や汗が流れる。

「あら左様で……」

おずおずと戻るビンセント。

「ビンセントに用があると？」

グラムの問いに、ガルスは溜息混じりの返事を返す。

「まあ、そういう事にもなるのかもしれない」

ガルスは、また溜息一つ。

「これから本土で総会議がある」

「シドニーの議事堂ではなく、ですか？」

「ああ。中央議会議員も、サンヘドリンの軍政議会議員も全員だ。それで、だが……」

グラムはガルスの言葉に目眩を覚えた。我々は兵士であり軍人だ。ガルスも軍人だが、幹部である以上、政治的な話は全てそちらでやってもらいたい。グラムはそう思った。だが。

「行く前にお前たちの意見を聞いておきたい」

「それならば報告書に書いているでしょう」

「それ以外の」

「それは、個人的な意見……、という事ですか？」

「ああ、そうだ」

理解を示すような、グラムの沈黙。それを読み取り、ガルスは言葉が続ける。

「情報軍が、独自の特殊戦隊を創設する計画書を提出してきた。その中には、新型機……、T H F / A - 2 ・ファルフジムの配備要求が含まれている。連中は、T H F / A - 2 を独自の戦闘電子偵察機として運用したいらしい。それも、無人で、だ」

「無人……ですか」

T H F / A - 2 ・ファルフジムは、キクチ金属工業社製の水蘭をベースに開発された可変機体だ。開発・導入は主に中央空軍だが、サンヘッドリン空軍の一部部隊にも導入計画がある。それを横からさうおうと言うのだから、ただ事ではない。

「システムの構築は？」

「中枢は情報軍独自の戦略コンピュータだ」

「それでは軍団独自戦力になる」

「ああ、だが今はそんな事も言っていられない。使えるなら使う、それしかない」

「それで、聞きたい意見とは」

「お前達は、この先も戦えるか？」

「ソフト、ハード、どちらの面で？」

「双方」

「ソフト面では」

「人手が人手が足りませんよ、ええ。全然足りない」
突然ビンセントが横槍を入れる。

「消耗戦はね、避けたいんでしょう、司令殿。確かに人的被害を押しさえるには人を減らせばいい。無人機、なら確かに出来ますがね、

そんなことをしていちやあ、人間は同じく人間からも必要とされなくなっちまう。それにですなえ」

ビンセントは、膝に肘を乗せて、体を前屈みにしながら、鋭い目で言った。

「奴らに勝つには、人が要る。俺達が乗っている限り、勝って見せますよ、ええ。勝って見せる」

ビンセントの顔は、うつすらと笑っているように見えた。

「覚えておこう。ハード面は？」

グラムはガルスの顔を見ながら言う。

「リセットクローをよこせ、とは言いませんよ。どうせ直ぐに導入される。されなければ困る。ですから司令、今本部の技術部に来ているF型、あれを一機頂けないでしょうか」

「F型を？」

「パイロットはこちらで準備します。それに実戦での情報入手は早い方がいい」

「ふむ……、確かに、水蘭の存在によってTHF/A-2の整備ノウハウが身についているのも事実だ」

ガルスは息をつき、腕時計に目をやる。

「時間だ」とガルス。「考慮しておこう」

ガルスはそう言っつて、部屋を出ていった。

「なあ、グラムよ」

「なんだ」

「新型機の配備、実戦で情報入手たあ、でかい賭けじゃなえか？」

「賭け……か」

「負けたらデカイぜ？」

「負けた時は、全額払うさ。ただ、負けた事は無いがな」

エレナは保温ポットから紙コップに紅茶を注ぎ、ベッドの上で身を起こす女に差し出した。

「戻ってきてたのね」

そう言うエレナを横目に、女は何も言わずにそれを受け取り、口に運びながら横目で彼女を睨んで言う。

「どうしたの、先生。まるで恋人に逃げられたみたいな顔してる」

エレナの顔が、思わず、むっとなる。エレナは女の寝ているベッドに腰掛け、シートの上から女の脚をなぞった。緊急病院の特殊病室。エレナが座る為の、気の利いた椅子などない。

女の名はイズナ。試験機乗務のイクサミコ。今に至るまで数々の試験機を制御してきた、ベテランだ。

「聞いたわ、イズナ。こつちでも明日からまた乗るんですってね」

「あなたには関係無い事だわ」

エレナの問いに、イズナは素っ気なく答える。

イズナは、経験値豊富なベテランだが、その性癖から言えば、彼女は同性愛者だ。深く聞けば、数多くの“女性遍歴”が出てくるだろう。そのせいか、彼女は他のイクサミコと比べても随分と大人びて見え、同時に陰りも見える。エレナも同様だが、彼女とイズナの中は険悪だ。

「随分、棘のある言い方をするのね。……変わってないわ」

「変わる必要なんてある？」

「私はあなたに変わって欲しい」

「なぜ？ 私があなたと寝なかつたから？」

イズナはそう言うベッドから立ち、エレナに背を向けながらシヤツを羽織る。

彼女の左腕と右足は機械だった。鈍色の高分子スキンの上を銀線が走る、義手義足。

彼女は過去に幾度もユーザーを失っている。試験機乗務である以上、危険とは常に隣り合わせだが、イズナは、幾度も生還してきた。その度に、彼女はイクサミコである自分を呪った。ヒトよりも高強度に設計された自分を。

医学的な見地からすれば、彼女の義手と義足はナンセンスだった。失った手足など、再生させれば事足りる。ましてや、イクサミコならばなおの事。

「……あなた、まだ引きずっているのね」

エレナは、シャツのボタンを留めるイズナの手を取り、逆にボタンを一個ずつはずし始めた。

「……昔、あなたの好きだったひとが、あなたと乗って死んだ。それをあなたは引きずっている。その時あなたは脚と腕を……」

「やめて先生」

「いい？ イズナ。あなたが好きになった人が、たまたま死にやすい人間だっただけの事よ。自分を責めないで」

「責める？ 私は、誰も責めてなんていないわ。ただ生きるだけ」
突然、エレナがイズナを振り向かせる。

下着を付けていないイズナの胸がはだけ、あらわになる。彼女の肢体を台なしにする機械の四肢。それが今は、彼女の体に巻き付く蛇の様に、しなやかに映る。

エレナはイズナを壁に追い詰めて、彼女に身体を寄せる。胸が重なりあい、息がかかる程の距離。

「それならなぜ？」

イズナの顎を指で持ち上げる。でも彼女は顔色を変えずに、答える。

「戦う為。手足なんて惜しくないわ」

「危険な子。あなたは死に場所を探しているだけ」

エレナの右手が、イズナの腰に触れる。

「ごめん先生。私、ストレートの娘がいいの」
イズナはそう言ってエレナを押し退けると、服を着て、部屋を出ていった。

ガルスはラウンジの窓から外の街を見たが、500mより低い建造物を見つけたことは出来なかった。

ユーラシア大陸極東部ヤクーツク。かつて巨大な連邦国の一部であったこの都市は、今や統合体中央政府の首都として機能し、高層建造物の立ち並ぶその威容は、中央ユーラシアメガロポリスを形成する都市に相応しい姿だった。

その街を見て、ここは違う。と、ガルスは思う。ここは、サンヘドリンとは違うと。

サンヘドリン本部は、戦闘都市である。故に、天蓋ドーム内の建築物には厳しい高さ制限があり、ドーム自体も、武装タワーを中心とした“兵器の森”、そしてそれを始めとする三重の防御迎撃機構に囲まれている。

鉄壁の防御を誇るサンヘドリン本部都市。一方ここには、そのような“戦争”を思わせる物一つも無い。戦争を忘れた街。

ガルスは、サンヘドリンは檻だ、と思う。世界から隔離された、限定戦争の舞台だと。

ならば、今、自分がここに居る意味は一体何だ？

そんなガルスの疑問に答えるように、目の前のマリア・エヴァ議員は、ガルスに言う。

「補佐官の同行も許されない会議だなんてね、嫌な雰囲気だと思わない？」

マリア議員は、右手中指の豪華な指輪を煌めかせながら、紅茶のカップを口元で上下させるが、ガルスは目の前に置かれたコーヒーのカップには手を付けずに、マリアを睨んでいる。

「コーヒー、嫌いだったかしら？ それとも美人の補佐官が煎れたのでなきゃだめ？」

そう言っただけでカップを置くとマリアはガルスに言う。

「それよりも考えて貰えたかしら？」

無言のガルス。

「私自身も大きなリスクを負っているの。この情勢下で、軍政議会の幹部がサンヘドリン軍部の人間と一対一で会うことがどういう意味を持つか……。重ねて言うけど、“私達”はサンヘドリンの対ヴァ戦闘権そのものの移行を画策する中央と親中央の連中とは一線を画しているつもりよ。サンヘドリン創設時のいきさつはともかくとして、あの時から数年に渡って地球圏の防衛に果たしてきた役割については高く評価しているの。組織の対立が鎮静化の方向に向き始めたとしても、タカ派の力はまだ侮れない。押し包めようにも、むしろその組織力の前に圧倒されるばかり…。その活力だって、最近の活動からも明らかよ」

ガルスはため息をつく。

「それは君達背広組の仕事だ」

「相変わらず会話（政治）が下手ね……」

苦笑いするマリア議員。しかし彼女は、すぐに話の続きを始めた。「私達を取り巻く状況は刻一刻と変わりつつあるわ。組織同士の正面衝突を避けて、外交活動をコアとする相互関係を可及的速やかに確立しなきゃならない。そのためには、組織そのものの一本化が必要よ。他派閥潰しに躍起になっている中央の人間は、それを分かっているのよ……」

彼女は大きくため息をつく。

「ねえ、ケステイウス。中央内にも、少しずつだけでも私達の勢力は浸透しつつあるわ。これにあなたの力が合流すれば……」

マリア議員は不敵な笑みをこぼす。

「組織の併合と再編成。非公式だけど中央幹部の黙認も取り付けたわ。……条件付きでね」

「シエーフアー」か……」

沈黙する二人。突然、ガルスが口を開いた。

「ローマ神話のサトゥルヌスは、将来我が子に王位を奪われると予言され、その我が子を食い殺したそうだ。私は、サトゥルヌスになるつもりはない」

マリア議員が、ガルスを睨む。

「くだらないわ、ケステイウス。一つの小屋に、二匹の犬は入らないわ。でも、その二匹の血筋が必要なのだとしたら、つがいにしてしまえば事は済む」

「どちらの血が残る」

「それは賭けよ。血を残せない獣はいずれ滅びるわ」

時間だ、と言って席を立つマリア議員。突然、彼女はその足を止めて言った。

「もう、私達だけでは彼らを抑えられない」

そう言って、去っていくマリアの背中を見送るガルス。

ガラスの向こうは、巨大な街。冷めた紅茶が残ったテーブルで、ガルスは、夕日の光に紛れるマリアを見送った。

数時間後この会議により、HMA-h3の量産が可決、決定された。

翌日、予定通りイズナの乗る機体が機動試験に出る。

機体は、片膝をついた体勢でパレットに乗せられたまま、格納庫からスポットディングドリーに牽引されて外に出ると、センサーアイを上下左右に動かして周囲を安全確認。メインシステムが起動されると、背面にある巨大なスラスタユニットが可動して肩部に固定され、機体が立ち上がる。

この機体、HMA-h2YF/XA00は、F型をベースにサンヘドリン高等技術開発部が設計した機体であり、その姿は、まるで見たことの無い形をしていた。

大型の可動式スラスタユニットを有し、増加装甲ジャケットを装備していた。背面メインスラスタは、レーザーウルフのそれと同系列の物を使用し、高い出力を持っている。

イズナは、XA00のコックピットに着き、コンソールのチエック項目と、外部からの擬似信号、及びカメラ映像を目視しながら点検を進めていく。

この機体にはまだ愛称が無い。機体肩部大型スラスタユニットには、白い文字でXA00とサンヘドリンマーク。その下には小さく識別用バーコードがマークされている。

イズナは、推進系統の点検を終えると、スラスタのノズルを絞り、軽く燃焼させてやる。背面のメインスラスタ二基が青い炎を鋭く吐き、爆発的な大音量を周囲にぶちまける。

一応の目視確認を終え、システムチェックの最終段階に入る。

90%の項目をクリア。

しかし、一つだけ警告の項目が消えない。

zero latency dynamic center of mass position control. 超高速動的重心制御の項目だ。

超高速動的重心制御は、機体セントラルコンピュータ側に組み込まれている推進機動制御システムだ。

機体コンピュータには二系統あり、片方がダウンしても予備のシステムで機動出来るようになっていて、基本的にイクサミコ側に組み込まれるシステムではない。

機体全身のアポジモーターとバーニアスラスタを制御するための超高速動的重心制御無しでは、不安定な人型兵器は、推進機動において一瞬たりとも安定を保てない。その点では全てのHMAに共通するが、イズナは試験機体用のイクサミコであるため、TMIO S側にも、重心制御システムが組み込まれている。

イズナは、自らの重心制御システムを機体とリンクさせ、項目をクリア。

アーミングはされていないので、マスターアームコントロールをシステムから切り離し。

イズナは機体の操縦桿を握り、スラスタノズルと、各駆動部を動かして最終チェック。

イクサミコなら本来、機体シンクロによって可能な動作だが、イズナは人間のパイロットと同じようにやる。今は、自分がパイロットだからだ。

管制室から、発進の許可が出る。

XAOOは、エプロンからタキシウエイ、そして滑走サーキットに向かう。まずは推力滑走試験だ。

「いい子ね。さあ、踊ってみせて」

イズナはそう言うと、強大な推力を地面に叩き付け、機体を猛然とダッシュ。地表ギリギリを滑走させながら、サーキットの彼方へ消えていった。

サンヘッドリン対ヴァリアンタス軍高等技術開発部所属のノーラ・ジャイブス大尉は、中央軍高等技術研究所　CDLでの研修から帰還してすぐ、自分達がCDLで開発を進めていた機体の本格的な試験を始めた。

サンヘッドリン対ヴァリアンタス軍高等技術開発部は、現在に至るまであらゆる対ヴァリアント戦闘用技術・戦術を研究・開発してきた。

装甲、機体制御システム、兵装システム。

ヴァリアントの装甲にはメタニウム弾で対抗し、攻撃にはメタニウム装甲で、機動力には大出力スラスタと重力制御で対抗した。

超高速機体制御技術、電子兵装、ビーム兵器、大口径大口径長火砲。

しかし、全ての技術はいずれ陳腐化し、いつかは無力化される。そうなる前に、新たな技術を、新たな戦術を、開発しなければならぬ。その技術と戦略が打破されるとは、兵の死を意味し、多くの兵の死とは、則ち敗北を意味する。

技術者達にする戦いは、銃を持った肉の戦いではない。だが、戦線を支え、兵の命を護る為の、彼らの銃後の戦いは決して蔑ろには出来ないのだ。

今、ノーラ・ジャイブス大尉は、その戦いの真つ只中であつた。

CDLで、中央軍技術者と共同で開発した機体、HMA-h2YF/XA00は、今、彼女の目の前で機動試験を行っている。

XA00は、当初、火力支援を主な任務とするように設計開発された、大型攻撃機体だった。しかし現在は、フレーム設計の見直しや新型プロセッサ、大出力スラスタを装備、装甲形状にも若干の変更がなされ、高い機動戦闘および格闘能力も与えられている。それらの設計や改良には、開発当時、同時に設計開発が行われていたh3型のノウハウも活かされている。

そのように生み出された機体なのだから、ノーラはX A 0 0に絶対の自身を持っていた。

今回は機動試験。次の兵装試験と、模擬戦をパスすれば、H M A - h 2 Y F / X A 0 0は、晴れて“ Y ”ナンバーの取れた制式採用機体となる。

その意味を噛み締めながら、ノーラは、管制室のモニターに映し出される、機動試験中のX A 0 0を強く、鋭い眼差しで見た。

滑走サーキットの周囲に張り巡らされた情報収集機器から発信される観測データと、X A 0 0から送信される機動データが、管制室のモニター群を埋める。

サーキットの全長は一周5 0 k mの楕円型。

コースの途中には、様々な不整地を再現した障害物が設置されていて、X A 0 0が実環境に近い機動を再現できるようにになっている。サーキットを滑走するX A 0 0。その様子を、ノーラは釘いるように見つめていた。

サンヘッドリン技術者、整備課整備士、中央軍技術者、数百の下請け業者が、心血を注いでX A 0 0を作り上げた数ヶ月間は、あつと言いつ間だった。

思い起こせば、たとえゼロからの開発ではないとしても、F型ベースの新型機を数ヶ月、最低でも一年以内で完了しろ、など、とてもではないが正気の沙汰ではなかった。ふと思えば、旧世紀の有る国では、旧大戦終戦間際にはコンバットプールのされていない兵

器を急造して投入したりしていたらしいし、まあ、戦争には付き物、伝統のようなものらしい。

しかし、自分達が作っているのは、急造品のインスタント兵器などでは、決してないのだ。

それにノーラは、ここ三日間ほど寝ていない。X A 0 0 のソフトウェアの調整が手間取ったのだ。

X A 0 0 は、新型プロセッサを機体側コンピューターに使用しているが、インストールされているOSは従来のまま、つまり、解りやすく言えば、豪華な皿に粗末なレトルト食品を乗せているようなモノで、とても見合うようなものではなかった。

それを知っていながら今回の機動試験を押しで行ったのは、それもやはり上層部からの指示で、彼女は猛反対したが、上層部は即座に却下した。このX A 0 0 が早急に必要なのは分かるが、技術者としては気に入らず、イラつき、開発スタッフに八つ当たりした。だが、それを止めたのは、イズナだった。

イズナは、ノーラを窘めながらも、優しく、『まかせろ』と言った。短い言葉だが、彼女が言うのと重みが違う。そしてノーラは、イズナを信じ、イズナは期待通りの成果を上げている。

刹那、イズナからの通信が管制室に入った。

「こちらX A 0 0、機体反応速度は上々、安定性もなかなかあってところかしら」

ノーラは、光学観測モニターに映るX A 0 0 を見ながら、インカムに向かって答える。

「OK、イズナ。こちらでも見てるわ。それよりも、機体側ソフトウェアの方は？」

「動的重心制御に若干の問題ありね。今は私の脳に繋いで同時処理しているけど、流石に超光速度シーケンスを同時処理しながらするのは堪えるわね」

そう言いながら、X A 0 0 はサーキットを高速で滑走する。X A 0 0 はスラスタによる推進機動性能が非常に高い。だからこそ、

高性能の動的重心制御が必要なのだが、イズナは機体を上手く操作している。

「そう、了解したわ。無理をしないで、イズナ」

「X A 0 0了解。それよりもノーラ、こちらの試験データの収集は済んだ？」

「ええ、でも何故？」

一瞬置いて、イズナは一言。

「ストリーク・アイアン」

イズナの言葉にノーラの右眉が若干持ち上がった。

旧世紀1975年、アメリカ空軍の実験機は、高度30000m上昇時間207.80秒を記録し、同じくアメリカ空軍の高高度偵察機は、高度25000mで時速3529.56Kmを記録した。

速さを求める事は、いつになっても変わらず、第四次大戦後、HMAの地表滑走最速記録を打ち立てたのは、時速1020Kmのストリーク・アイアンだった。イズナは、その記録を破ってみたいと思っていたのだ。

だが、ノーラは、当然許可出来なかった。

「ちょっとイズナ。ダメよ、危険過ぎるわ。データはとれたし、もう帰投して」

だがイズナは食い下がる。

「X A 0 0の高機動モード、試さなくても？」

「あれは……」

「やらせる」

突然、背後からグラムの声がして、ノーラは素早く振り向いた。

グラムは、この機動試験を視察しに来ていたが、ノーラは気にする様子も無く、試験を進めていた。だが、ここにきて口を出すとすれば話は別だ。

「X A 0 0は、まだ子供です。危険な目に遭わせる訳にはいかないんですよ、大佐殿」

ノーラは、“大佐殿”という言葉にアクセントを付けて皮肉った

が、グラムは無視して、手元のX A 0 0機体仕様書を見ながら言った。

「大出力可変スラスタユニット、これを見てみたい。それに、子供はいつか親離れするものだ」

「大佐、機動試験のデータはもう取れたんですよ？ それに、高機動モードは副次的に発生した機能です。X A 0 0は今現在でも従来機より高い機動性能を示していますし、それに……」 「責任は私が取る。この機の、有人機としての實力を見てみたい」

“ 實力を見たい ” と言われ、ノーラは一瞬迷いを感じた。自分達の作ったものだ、力は見せたいし、開発途中、X A 0 0の無人化案が有ったことも事実だ。だが

「ノーラ、私の事なら心配するな」

イズナからも、グラムを援護する言葉が飛び出した。こうなれば多勢に無勢、しかも直系の上官であるグラムの指示ともなればなおの事。

「危険と判断したら、こちらで止めるわよ。いい？」

ノーラは厳しい口調で言ったが、イズナは。

「大丈夫だ、問題ない」

軽い口調で言ってみせる。

溜息をつくノーラ。一方、イズナの乗るX A 0 0は、高機動モードへの変型シークエンスに入った。

機動推進制御をバイパスへ迂回。スラスター燃焼制御系クラスター、セーフティリミッタをT M I O Sへ。フレーム可動、推力軸制御を同時並列処理。推力解放。

次の瞬間、肩部スラスタユニットを可動させ、その推力軸を背面に向け終えたX A 0 0は、光学観測装置の追跡を一瞬振り切った。

X A 0 0の高機動モードとは、機体新型兵装ユニットである肩部スラスタユニットを大きく可動させて推進軸を下方から後方へと変更し、主推進機関を背面スラスタ二基双発からプラス肩部スラスタユニットの四発にすることによって莫大な推進力を得るモーター

ドを指す。

これは本来、大型推進機関である肩部スラスターの、機体格納時省スペース化が目的であった可動機能に目をつけた物で、設計段階で意図的に盛り込まれた物ではない。しかも、安全措施として、ユニット“収納時”には、スラスターのプラズマ燃烧室が稼動しないようにされている。設計としては当たり前で、つまり、高機動モードの使用には、イクサミコの、イズナの回路迂回操作が、現段階では必要になる。

「やはりすごいな、これは」

イズナは少し興奮しながら、機体コンディションを確認する。

機体温度上昇も想定内。シミュレーターでは何度か試したけど、やっぱり、生のデータは熱いわね。

高揚を押さえ付け、操作に専念する。

ストリーク・アイアンは、HMA、と言うのは名ばかりの、いわば推進器に手足が生えたような物で、装甲はおるか、塗装にフレームに至るまでが極限まで省略された機体だった。例えるなら“スプリンター”。

一方こちらは、数十トン単位の爆弾薬と装甲を背負う戦闘兵器、例えるなら重装甲胄を着込んだ騎士だ。

一見するならば、勝負は目に見えているように感じるが、イズナは違う。

そつだ、騎士には馬がある。

馬に乗った重装騎兵、止めるのはキツイわよ。

イズナはスラスターの推力を更に解放。四基の大出力推進器は彼女の意志に依って、蒼い、錐のような炎を吹く。

現在、時速750km。陸戦機体の戦闘時実用最大速度。

数秒で時速870kmを突破。亜音速。気流とも相俟って、機体制御の難易度が格段に跳ね上がり、空戦機体用の機動推進制御が必要になるレベル。だがイズナは、必要としない。

時速950km、ここまで来ると、HMA外装表面や手足等の突

起から衝撃波が生じ始める。

時速1000km、遷音速。今、機体周りの気流速度は亜音速と超音速とが入り混じっている。空気が圧縮性を有する気体であることと性質が現れ始め、衝撃波の発生により機体の安定性や操縦性に様々な障害が現れる、設計者やパイロットにとって最も難しい速度領域の一つだ。

ここに来て、機体の振動が激しくなってきた。

ただでさえも前方投影面積の大きいHMAが、こんなスピードで滑走しているのだから当然だ。

「イズナ！」

制止するノーラの声。

「あと20！」

しかしイズナは更にスラスタにエネルギーをぶち込む。だが機体の速度は上がらない。

駄目、衝撃波同士のぶつかり合いで……

一瞬、イズナの脳裏にエレナの言葉が浮かぶ。

『貴女は死に場所を探しているだけ』

瞬間、イズナの機体操作に歪みが生じる。

右脚部先端が路面に接触。機体バランスが崩れかける。

緊急制動、リバーズスラスト。

主推力機関へのエネルギー供給を80%カット。フルバランスオートスラスト、作動。

ドラグシュート放出、最減速。

機体停止。

システム、オールダウン。

路面を滑り、火花を上げながら停止したXA00の中で、イズナはヘルメットを脱ぎ捨てて溜息をついた。

機体を破損させ、記録の更新は失敗。

ともかく、機動試験はもう終わったのだ。

かくして機動試験は終わり、オーバーヒートしたXAOOが試験場から引き上げ作業をしているその頃、ビンセントは格納庫場脇の道を走る車の助手席で踏ん返り返っていた。運転席にはハリー。例の事故から24時間、初の出勤。

車内ではビンセントがハリーに事のいきさつを話していた。

「……それで、その後どうなったんすか？」

運転席のハリーが助手席のビンセントに問う。答えるビンセント。「どうにもこうにも一発免取、修理費加算、おまけに減俸よお、泣きてえよ俺は」

「でも相手が無事でよかったじゃなっすか。何かあったらユリア姐さんまた心配するし……」

「あー、あいつは、うん、まあ……」

言葉を濁すビンセントに、ハリーはため息一つ。

「しっかし、どうしようかね、稼ぎ口なんてありゃあしないし、今月カツカツ。俺一人寂しく泣き濡れてビンボー生活」

「ああ、あれっすね、泣きっ面に蜂」

「フムン……」

「あと自業自得？」

突然、ハリーの首を両手で絞めるビンセント。

「一言多いんだよ、お前は！」

「ぐえ、やめでえー！」

ビンセントは首を絞めたまま腕を前後させて、ハリーの頭をかく。

「このヤロ！ このヤロ！」

「ちょ、ちよつと運転中！ 運転中！」

ビンセントに首を降られ、左右に蛇行する車。その頃車の後ろからは、一台の大型トレーラーが猛スピードで迫っていた。クラクションを鳴らすトレーラー。それに気付いたハリーは、ブレーキをかけることなく、クラッチとアクセルワーク、シフトチェンジで即座に反応する。

「うわっ、ちょ、あつぶねえ！」

追い越して行くトレーラーの起こす、突風のような風圧に揺られて、道を逸れる車を間一髪、ハンドルを切って立て直すハリー。トレーラーはけたたましいクラクションを鳴らし続けながら、ビンセント達を追い抜いていく。

「オイ、なんだありゃー!？」

ビンセントは助手席の窓から身を乗り出し、風圧が巻き起こした砂埃に目を細めながら走り去っていく輸送車を眼で追う。輸送車にはサンヘドリンのエンブレム。トレーラーの正体はHMA輸送車だ。「あれ、聞いてないんすか？」

「何を？」

助手席に戻りシートに座り直すビンセントに、ハリーは答える。

「技術部さんとの新型機、今日試験で多分あれがそうつす」

「機動試験？」

ハリーの言葉に、ビンセントはグラムの言葉を思い出した。

グラムの言っていた新型機ってのはあの事か。ん？ でもなんで……

「なんでお前がそんなこと知ってたんだ？」

「ああ、サブさんに聞いたんすよ。旦那ならかじりついてくるだろ

うって」

再び首を絞めるビンセント。

「そういう事はもっと早く言えよ！」

「ぐえー！」

がくがくがくがく。車は蛇行。ガムテープで留めた左ヘッドライトがポロリと取れる。

だが今は、ハリーをシメるよりやるべき事がある。

「まあいいや、折角の機会なんだ。有り難く、拜ませてもらおうぜ」
首を絞めたまま、ビンセントは子供っぽく笑い、ウインク。

ハリーは「アイサーー！」と答え、トレーラーを追うべく、車のアクセルを踏み込んだ。

トレーラーを追いかけ、ビンセント達が駐機場に入った頃には、トレーラーは荷である機動装甲を降ろしている所だった。

トレーラーの荷台、巨大なブロック状コンテナの屋根が縦二つに割れ、左右の壁ごと大きく開くと、中の機体が仰向けに横たわっているのが見え、機体は、自身が横たわる床ごと持ち上げられ、やがて起立した。

その姿は、何度見ても壮観だった。機動装甲は身の丈1.5mを超す鉄の巨人だ。しかも、今日の前にいるのは新型機だ。肩の巨大な推進機関に、いかにも重装甲な胴体。手足は力強く太い。

巨人の側に寄り、腕を組み、見上げるビンセント。それと同じように、整備部や技術部のツナギ組達が、機体の周りに集まりはじめ、その中にサブの姿があった。

「よおー、ビンセント、事故ったんだってえー？」

嫌味ったらしくにやけながら寄ってくるサブ。

「なにお前、なにお前、嫌味？ 嫌味？」

「何で二回言うよ」

「大事な事だからだよ！」

ビンセントは口をひん曲げて抗議するが、今は機体の方が第一だ。「で、これは？」

親指で機体を指すビンセントに、サブは耳元で言う。

「HMA1h2YF/XA00、重攻撃戦闘型機体。こっ、ヒシヒシと来るモノがあるでしょ」

しばらく見合い、二人してにやけるビンセントとサブ。

「やべーよサブ！これが俺達のモノになるのか！！」

「ならないってば！これは量産型じゃないんだし、第一これにはもう乗員がいるの！」

「お前、こっこのうのは俺が乗った方が一番だつて！」

ビンセントがそう言った、その時だ。

「騎士に、間抜けな男は相応しく無いわ。特に、人を車で撥ねるような男はね？」

背後から投げ掛けられた挑発的な言葉に、サブは身震い。一方ビンセントは眉を歪めて振り向き、言葉を失った。

「誰が間抜け……だ……！？」

そこにいたのは、セミショートヘアの女だった。顔立ちは東洋人のようで、歳は20代後半といったところか。着ているスーツはパイロットスーツではなく、イクサミコ用のコネクツスーツ。だがビンセントは、そのボディーラインに見覚えがあった。

昨日撥ねた、バイクの……

「いやー、その節はどうも……」

恭しく、腰を低くするビンセント。いたずらっぽく微笑むイズナだが、眼は笑っていない。ビンセントは昔、これと同じ眼で見つめられた事がある。もっとも、そのあと刃物を持って追いかけ回されたが。

「始めまして、ではないわね。よろしく、キングストン大尉」

突然、ビンセントに“左手”を差し出すイズナ。左手で握手を求め、めるイズナを不信に思いながらも、ビンセントは彼女の左手を握り、握手。

「これで仲直り、とはいかねえか……？」

「さあ、どうかしらね？」

突然、イズナの左手がビンセントの手にぎりぎりとりめり込む。

「あ、あれ？　なんか痛いな、イタタタ、イ、イズナさん!？」

ビンセントの手をイズナの左手が締め上げると同時に、イズナは言う。

「私がどうなるうとどうでもいい。だが、あの子は、X A O Oは私がいなければ舞う事が出来ない。だと言うのにお前は……」

その時突然、二人の間にハリーが割って入った。

「この機体、出力デカそうな割には繊細っそうすね」

ハリーの言葉に、イズナの手が止まる。

「操作系統も複雑そうだし。ああ、でも重攻撃型ならユリア姐さんが好きそう。でも、この機体のパイロット、やっぱり壊したみたいっすね、新品なのに勿体ねえー」

顔を伏せ、歯をかみ締めるイズナ。

「勿体なくて悪かったわね」

彼女はそう言ってビンセントの手を離す。

「私が壊したのよ。私がパイロット。でも、修理すれば良いんだから大丈夫よね、ねえサブ？」

びしりとキョツケをするサブ。

「勿論ですとも!」

サムアップと輝く歯。完全に、尻に敷かれている。そんなサブを尻目に、イズナは去り際に言う。

「左手、冷やしておいた方がいいわよ」

イズナはそう言って、格納庫の方へ去っていった。

その様子を遠くから見ながらグラムは、あいつらは何をしているんだ、と訝しんだ。ビンセントはビンセントで左手を摩り、ハリーはハリーでビンセントの周りを心配そうにうるうるしている。サブは……

「はあ、サブの奴は相変わらずか……」

ノーラは額に手を当て、深くため息をついた。

ノーラは、技術部や整備部の皆からは“女将さん”と呼ばれている。始めノーラはそれが気に入らなかつたが、時が経つにつれ、皆が自分の息子や娘のように思えてきてからは、女将さんと呼ばれるのも悪くないと思うようになった。

家族のような面々。その中でも特別なのが、サブだ。

サブには腕がある。それにメカニックとしての勘も。

それなのに……。

「うちの若い連中は進歩無しね、全く……」

そう言うノーラに、グラムは言う。

「彼らはよくやっているよ。元から趣味と仕事を兼ねた様な連中だ、自然と良い仕事をしてくれる」

「私が言ってるのは、人間的な成長の事よ、大佐。認識と意識が必要だわ、軍人としての」

「君らしくないな、ジャイブス大尉」

「これが我々の戦いですもの。技術至上主義だけでは戦えない。最後まで人を支えるのは、誇りと、自意識よ」

「自意識……か」

そう話している間に、X A O O は格納庫の中へ、格納されていく。格納庫の中には修理設備があり、X A O O はそこで再び生氣を取り戻す事が出来る。

X A O O は格納庫内一番機の位置に付き、外部電源に接続。電装系から点検を、開始する。

ノーラは、X A O O を見つめながら言う。

「X A O O はいい機体よ。あなたに自慢できるくらいに」

ノーラは言う。

「武装、電子系、OS、そしてパイロット。X A O O は、これからもっと強くなる」

ノーラはそう言って、整備用タラップを登っていった。

兵装試験に模擬戦試験。そしてそれに伴う機体調整。やるべきことは山積みである。

夜、機体の点検作業とデータのバックアップを終えたイズナは、一人でバーに来ていた。

バーには、非番の兵士達であふれている。その中で一人、イズナはカウンター席で、バイソングラス入りのウオッカを傾けていた。

「隣、よろしいかね？」

突然、一人の男が話しかけてきた。男は、イズナの返事を待つこと無く、隣に座る。

「君は兵士ではないね」

イズナは無表情に答える。

「本部技術開発部第一試験部隊」

「なるほど、あのF型機体開発部隊か」

男は、自分は情報軍団のアンセル「ハルトであると自己紹介し、

イズナの物と同じウオッカを注文した。

「君ならわかるだろう」

ハルトは突然、イズナにそう言った。

「人の肉体は脆く、人の思考は遅い。“君なら解る”だろう。今では、機体は限界性能を極限まで発揮する事が出来ない。だが我々のCINAPSが制御する無人機なら、いかに最新鋭のF型機体であろうと勝つ事は出来ないだろう」

「騎士が幽霊（無人機）に負けるだど？」

「騎士に幽霊か、なるほど君らしい。では騎士なら護るべき姫君がいるはずだが、姫を連れていては、騎士は戦えない」

「あなたは言葉遊びがしたいのか？」

「現実の問題だよ。人は簡単に死ぬ。そして“遅い”。だが、君達イクサミコは光の速度で演算し、人よりも強靱だ。今の段階では、君達の機体は無人機となんら変わらない。だが一度人が乗れば、君はそのパイロットに合わせて制御を最適化する。それは人間の性能という型にはまる事に他ならない」

「何が言いたい」

「君は“こちら側”の存在だと言う事だ。君は人を憎んでいる。人が乗っていないければ、君は自由に機体を操作し、武装を解放し……」
「私は私の為に乗る。誰の為でもない。どちらの側かなど関係ない。ただ、自分の魂の命ずるがまま、私は生きるだけだ」

ハルトは不敵に微笑む。

「実に君らしい答えだ。イクサミコでありながら、人と同様であるうとする。酔えもしない酒を煽り、ユーザーを持たない。君はある意味では、人よりも人らしいだろう」

彼はそう言い、席を立った。

「君の飲み代はおごらせてもらうよ。楽しい話が出来た」

バーを出ていくハルト。それを見送りながら、イズナは思う。

事実、イクサミコの死は、人間の様な死としてではなく、備品の損失として扱われる。だが、ならばそれで何が悪い。人の死も一瞬で、後に残るのは宗教や思想の“言葉”だけだ。だが無人機は、言葉さえ残らない。

イズナは、中身の残ったグラスを置き、バーを出る。

サンヘドリンは不思議な街だ。人と機械が入り混じり、境は曖昧。人が人を人工的に作り出す技術を持ちながらも、人は未だに神に祈る。

翌日早朝、イズナはいつもと同じく、X A 0 0 に乗る。第一次兵装試験。

機体起動、コネクションチェック。機体コンディション良好。
マスターアームスイッチ、オン。両肩兵装ユニット内、ガンアーム起動。ストアコントロールパネルに武装を表示。

R D Y E M R G 2

武装は両肩兵装ユニット内に装備したレールガン。レールガンは独立したアームで操作される。

F C S、エンゲージ。レーダーに感、上空に無人標的機、多数。光学で確認。ロックオン。

イズナは静かに、トリガーを引く。

X A 0 0 の、各種兵装試験結果は上々で、どれも実用に堪える性

能を發揮した。

X A 0 0 の火器管制系統は複雑である。ガンアームと呼ばれる兵装懸架攻撃副腕に、二基のウエポンベイ、一門の大口径高エネルギービーム砲、さらに両腕部による火砲運用と、重攻撃戦闘機体の名に恥じない重火力を持つていれば、当然である。

しかしそれでも、何の滞りもなく試験を進めてこれたのは、新型プロセッサと、イズナの力だろう。

イズナは今日も、兵装試験のために X A 0 0 に乗る。その中で、中央軍が F 型系列機の初等作戦能力を獲得したことを、イズナはノーラから聞かされた。確かに、内蔵固定兵装を持つ分、X A 0 0 は開発・調整に時間が掛かる。それにしても、中央軍による h 2 F 型導入のスピードは、異例の早さだ。

生産量の違い……？

否、と、イズナは思う。X A 0 0 は、サンヘッドリンが導入する F 型の一派生機種に過ぎない。つまり、X A 0 0 よりも“早く完成していた” F 型原形機、及び F 型改修キットを、サンヘッドリンが量産・導入しない筈がないのだ。

ポーズね。中央軍への。

イズナは唾棄するように呟く。

新型機という目に見える力。上は確かに欲しがるだろう。だが、その割りを食うのは兵士達だ。

サンヘッドリンは当初から h 2 型を運用する軍であり、F 型への機種転換訓練もスムーズに進むだろう。だが中央軍は、支部を管理する主要軍閥以外では今回初めて h 2 型を運用する。もともと、支部軍閥への h 2 配備も限定的なものだ。つまり、中央軍は h 2 型を管理・運用する能力がまだ高くない。これによって発生するのは、昼夜を問わない機種転換訓練と、猛烈に過密なスケジュールの機体整備研修だ。哀れな中央軍兵士達。

イズナはいつも通り、機体を起動させ、各種点検作業に入る。

アーミングチェック、兵装はフル装備。総合火力試験。

広大な演習場の真ん中で佇むX A 0 0は、しかし大きく見える。

兵装試験が開始されてから三日。

技術部によるX A 0 0の兵装最終試験が開始されようとしているその頃。

ユリアと一刃は、例の命令無視の罰として大陸南、ローズバット陸軍レンジャー基地での5週間にも及ぶ訓練に参加。その最終試験を受けようとしていた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8862n/>

VARIANTAS

2011年8月24日19時27分発行